

岩 吉 遺 跡 Ⅲ

中小河川改修事業大井手川改良工事
に係る埋蔵文化財発掘調査

— 本 文 編 —

1991

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、鳥取市遺跡調査団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の指導を得ながら埋蔵文化財調査事業を進めているところです。

さて、今回報告する岩吉遺跡の発掘調査は、鳥取県の大井手川改修事業に伴って、昭和63年9月から本年3月まで2年半の歳月を費やして実施したものです。岩吉遺跡は、千代川左岸に広がる肥沃な沖積平野のほぼ中央に位置します。これまでに行われた発掘調査などから、縄文時代の終りから古墳時代にかけての大集落遺跡であることが確認されています。その範囲は広大で、およそ100ヘクタールと推定されています。鳥取平野にあって、政治・経済・文化の中心的な役割を担っていた拠点集落であったものと思われます。今回の発掘調査でもこれを裏付けるように、古代水田遺構や各地との交流を物語る土器、鉄器生産に係る遺物、豊富な木製品などが出土しました。これら多種多彩な遺構・遺物は、かつて岩吉で喜び悲しんだ人々のいきいきとした生活ぶりを彷彿とさせるものばかりです。また、これらの資料は、岩吉遺跡のみならず古代因幡地方の歴史を探るうえで大変貴重な歴史資料となるものと確信いたします。本報告書はこの重要な調査成果を十分に活かしたものとはいえませんが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明や文化財保護活動の一助として、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査事業の実施にあたって深いご理解とご協力を頂いた関係機関、関係者の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

平成3年3月

鳥取市遺跡調査団

団長 田中哲夫



例 言

1. 本書は、中小河川改修事業大井手川改良工事の事前調査として実施した^{いわよし いせき}岩吉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、鳥取市教育委員会の指導・監督のもと、鳥取県の委託を受けて鳥取市遺跡調査団が実施した。
3. 本発掘調査は、昭和63年、平成元年、平成2年の3年度にわたって実施した。
4. 本発掘調査地は、鳥取県鳥取市^{いわよし てらだ}岩吉字寺田および^{ねんぶつめん}字念仏免である。
5. 本発掘調査の概要報告書として、すでに昭和63年度に『岩吉遺跡発掘調査概報』平成元年度に『岩吉遺跡発掘調査概報Ⅱ』を刊行しているが、その際に報告した名称・内容を一部変更したものがあある。
6. 本発掘調査の実施にあたっては、プラント・オパール定量分析を宮崎大学藤原宏志先生、赤色顔料の微量化学分析を武庫川女子大学の安田博幸、森眞由美両先生、出土鉍滓状遺物の分析を鳥根県立工業技術センター酒井禮男先生、出土木製品の樹種鑑定を(財)大阪文化財センター山口誠治先生、出土石製品の石材同定を鳥取市文化財審議会委員山名巖先生にお願いし、御手を煩わせた。また、出土木製品の一部樹種鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社、出土鉍滓の分析は(株)日立金属安来工場和鋼記念館、出土木製品の応急保存処理については(財)元興寺文化財研究所にそれぞれ委託して実施した。なお、一部の出土木製品の応急保存処理は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。各先生、各機関に謝意を表します。


これらの自然科学分析のうち原稿をお願いしたものについては、本書の付章に掲載した。なお、プラント・オパール定量分析については、すでに昭和63年度に刊行した『岩吉遺跡発掘調査概報』に藤原宏志先生の玉稿を掲載させていただいた。ご参照いただきたい。
7. 本書に掲載した実測図・図版写真・遺物観察表は、調査に参加した全員の協力を得て調査員、調査補助員、浜野るみ子、渡部和子、岡垣清子、井上初恵、清水房子を中心に作成した。
8. 付章を除いた本書の執筆・編集は、谷口恭子、前田均が主としてあたり、調査員、調査補助員が補佐した。
9. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

凡 例

1. 本報告書における方位は、第1・3図を除いてすべて磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 本報告書における遺構略号は次の通りである。

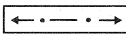
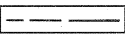
SE：井戸 SK：土坑 SD：溝状遺構 SB：掘立柱建物 P：柱穴

3. 遺構、遺物実測図中における表示は、次の通りである。

遺構実測図の炭化範囲、木製品実測図の炭化範囲：

木製品実測図の断面図の年輪は模式的な表示である。

石製品実測図の敲打痕範囲： 石製品実測図の磨滅範囲：

石製品実測図の加工痕範囲： 土器実測図のヨコナデ調整による稜：

4. 今回の調査によって出土した遺物には、旧遺構名もしくは調査区別の取上番号を注記し、遺物台帳には、調査区別の取上番号および旧遺構名で登録されている。なお、報告書遺構名と旧遺構名の対照は以下の通りである。

岩吉遺跡新旧遺構名対照表

新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称
SK-01	KSK-01	SK-37	KSK-18	SK-73	SD-107	SD-11	自然河川
SK-02	KSK-02	SK-38	KSK-28	SK-74	SK-114	SD-12	SD-01
SK-03	KSK-03	SK-39	SK-08	SK-75	SK-113	SD-13	SD-09
SK-04	KSK-04	SK-40	SK-09	SK-76	SK-108	SD-14	SD-10
SK-05	KSK-05	SK-41	SK-22	SK-77	SK-104	SD-15	SD-12
SK-06	KSK-06	SK-42	SK-35	SK-78	SK-112	SD-16	SD-11
SK-07	KSK-07	SK-43	SK-12	SK-79	SK-102	SD-17	SD-19
SK-08	KSK-08	SK-44	SK-13	SK-80	SD-105	SD-18	SD-15
SK-09	KSK-10	SK-45	SK-18	SK-81	SK-121	SD-19	SD-16
SK-10	KSK-11	SK-46	SK-33	SK-82	SK-103	SD-20	SD-17
SK-11	KSK-13	SK-47	SK-15	SK-83	SK-111	SD-21	SD-18
SK-12	KSK-14	SK-48	SK-06	SK-84	SK-110	SD-22
SK-13	KSK-16	SK-49	SK-07	SK-85	SK-105	SD-23	SD-13
SK-14	KSK-17	SK-50	SK-23	SK-86	SD-113	SD-24	SD-14
SK-15	KSK-20	SK-51	SK-24	SK-87	SK-106	SD-25	SD-21
SK-16	KSK-32	SK-52	SK-36	SK-88	SK-109	SD-26	SD-20
SK-17	KSK-33	SK-53	SK-34	SK-89	SD-111	SD-27	SD-101
SK-18	KSK-34	SK-54	SK-37	SK-90	SD-112	SD-28	SD-102
SK-19	KSK-35	SK-55	SK-20	SK-91	SD-110	SD-29	SD-103
SK-20	KSK-36	SK-56	SK-21	土器群1	KSK-12	SD-30	SD-109
SK-21	KSK-21	SK-57	SK-11	土器群2	土器群3	SD-31	SD-117
SK-22	KSK-29	SK-58	SK-25	土器群3	土器群4	SD-32	SD-116
SK-23	KSK-30	SK-59	SK-38	土器群4	土器群5	SD-33	SD-106
SK-24	KSK-24	SK-60	SK-28	SE-01	SE-01	SD-34	SD-108
SK-25	KSK-25	SK-61	SK-29	SE-02	SK-26	SD-35	SD-115
SK-26	KSK-26	SK-62	SK-30	SE-03	SK-19	SD-36	SD-104
SK-27	KSK-23	SK-63	SK-31	SD-01	SD-04	SD-37	SD-114
SK-28	SK-101	SK-64	SK-32	SD-02	水路I	SB-01	SB-01
SK-29	KSK-09	SK-65	SK-14	SD-03	水路II	SB-02	SB-104
SK-30	SK-02	SK-66	SK-117	SD-04	SD-05	SB-03	SB-103
SK-31	SK-03	SK-67	SK-107	SD-05	SD-02	SB-04	SB-102
SK-32	KSK-19	SK-68	SK-115	SD-06	SD-03	SB-05	SB-101
SK-33	SK-04	SK-69	SK-116	SD-07	SD-06	P-01	P-120
SK-34	SK-10	SK-70	SK-119	SD-08	SD-07		
SK-35	SK-05	SK-71	SK-118	SD-09	SD-08		
SK-36	SK-16	SK-72	SK-120	SD-10	水路		

本文目次

第1章 発掘調査の経過	
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の経過	1
1. 昭和63年度調査	1
2. 平成元年度調査	3
3. 平成2年度調査	4
第3節 発掘調査の組織・体制	5
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	7
第2節 岩吉遺跡の範囲と既往の調査	13
第3章 調査の結果	
第1節 調査地の層序	19
第2節 歴史時代の遺構と遺物	26
1. 溝状遺構	26
第3節 古墳時代の遺構と遺物	27
1. 水田遺構	30
2. 井戸	30
3. 土坑	43
4. 溝状遺構	71
5. 土器群	132
第4節 弥生時代の遺構と遺物	134
1. 水田遺構	138
2. 土坑	139
3. 溝状遺構	164
4. 掘立柱建物	178
5. 土器群	181
第5節 遺構外の遺物	185
第4章 まとめ	
第1節 遺構について	271
第2節 遺物について	280
おわりに	309

付章 自然科学分析

岩吉遺跡出土遺物に付着の赤色顔料の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部 安田博幸・森真由美 …………… 313

鳥取市岩吉遺跡出土の鉄滓遺物の調査

(株)日立金属安来工場 和鋼記念館 …………… 315

鳥取市岩吉遺跡出土鉍滓状遺物鑑定

鳥根県立工業技術センター資源科 酒井禮男 …………… 331

岩吉遺跡出土木製品の樹種鑑定報告

(財)大阪文化財センター 山口誠治 …………… 333

岩吉遺跡出土木製品材同定 (株)パリノ・サーヴェイ …………… 337

挿 図 目 次

第1図 岩吉遺跡周辺主要遺跡分布図 … 9	第32図 S K-10出土遺物実測図 …… 49
第2図 伊和神社の巨石 …………… 12	第33図 S K-11出土遺物実測図 …… 49
第3図 岩吉遺跡発掘調査区位置図 …… 14	第34図 S K-12出土遺物実測図 …… 49
第4図 A地点表採遺物実測図(1) …… 15	第35図 S K-13出土遺物実測図 …… 50
第5図 A地点表採遺物実測図(2) …… 16	第36図 S K-14出土遺物実測図 …… 51
第6図 A地点表採遺物実測図(3) …… 17	第37図 S K-22出土遺物実測図 …… 53
第7図 調査区設定図 …………… 21	第38図 S K-25出土遺物実測図 …… 54
第8図 調査区土層断面図(1) …… 22	第39図 S K-26出土遺物実測図 …… 54
第9図 調査区土層断面図(2) …… 23・24	第40図 S K-27出土遺物実測図(1) …… 56
第10図 調査区土層断面図(3) …… 23・24	第41図 S K-27出土遺物実測図(2) …… 57
第11図 調査区土層断面図(4) …… 25	第42図 S K-27出土遺物実測図(3) …… 58
第12図 歴史時代遺構配置図 …… 26	第43図 S K-27出土遺物実測図(4) …… 59
第13図 S D-01出土遺物実測図 …… 27	第44図 S K-27出土遺物実測図(5) …… 60
第14図 古墳時代遺構配置図(後・中期) … 28	第45図 S K-27出土遺物実測図(6) …… 61
第15図 古墳時代遺構配置図(前期) …… 29	第46図 S K-29出土遺物実測図 …… 61
第16図 S E-01出土遺物実測図 …… 31	第47図 S K-30出土遺物実測図 …… 62
第17図 S E-02出土遺物実測図(1) …… 34	第48図 S K-31出土遺物実測図 …… 62
第18図 S E-02出土遺物実測図(2) …… 35	第49図 S K-32出土遺物実測図 …… 63
第19図 S E-02出土遺物実測図(3) …… 36	第50図 S K-33出土遺物実測図(1) …… 65
第20図 S E-02出土遺物実測図(4) …… 37	第51図 S K-33出土遺物実測図(2) …… 66
第21図 S E-03出土遺物実測図(1) …… 38	第52図 S K-33出土遺物実測図(3) …… 66
第22図 S E-03出土遺物実測図(2) …… 39	第53図 S K-34出土遺物実測図 …… 67
第23図 S E-03出土遺物実測図(3) …… 40	第54図 S K-35出土遺物実測図 …… 67
第24図 S E-03出土遺物実測図(4) 41・42	第55図 S K-36出土遺物実測図 …… 67
第25図 S E-03出土遺物実測図(5) 41・42	第56図 S K-37出土遺物実測図 …… 69
第26図 S K-01出土遺物実測図(1) …… 44	第57図 S K-38出土遺物実測図 …… 69
第27図 S K-01出土遺物実測図(2) …… 45	第58図 S K-43出土遺物実測図 …… 69
第28図 S K-05出土遺物実測図(1) …… 46	第59図 S K-44出土遺物実測図 …… 69
第29図 S K-05出土遺物実測図(2) …… 47	第60図 S K-45出土遺物実測図 …… 70
第30図 S K-05出土遺物実測図(3) …… 48	第61図 S K-47出土遺物実測図 …… 70
第31図 S K-09出土遺物実測図 …… 48	第62図 S D-02出土遺物実測図(1) …… 72

第63図	S D-02出土遺物実測図(2)……	72	第96図	S D-10出土遺物実測図(8) …	110
第64図	S D-02出土遺物実測図(3)……	73	第97図	S D-10出土遺物実測図(9) …	111
第65図	S D-02出土遺物実測図(4)……	74	第98図	S D-10出土遺物実測図(10)…	113
第66図	S D-02出土遺物実測図(5)……	75	第99図	S D-10出土遺物実測図(11)…	115
第67図	S D-02出土遺物実測図(6)……	76	第100図	S D-10出土遺物実測図(12)…	116
第68図	S D-02出土遺物実測図(7)……	77	第101図	S D-10出土遺物実測図(15)…	117
第69図	S D-02出土遺物実測図(8)……	78	第102図	S D-10出土遺物実測図(16)…	118
第70図	S D-03出土遺物実測図(1)……	82	第103図	S D-10出土遺物実測図(18)…	119
第71図	S D-03出土遺物実測図(2)……	83	第104図	S D-10出土遺物実測図(19)…	120
第72図	S D-03出土遺物実測図(3)……	84	第105図	S D-10出土遺物実測図(20)…	121
第73図	S D-03出土遺物実測図(4)……	85	第106図	S D-10出土遺物実測図(21)…	122
第74図	S D-03出土遺物実測図(5)……	86	第107図	S D-10出土遺物実測図(22)…	123
第75図	S D-03出土遺物実測図(6)……	87	第108図	S D-10出土遺物実測図(23)…	124
第76図	S D-03出土遺物実測図(7)……	88	第109図	S D-10出土遺物実測図(24)…	125
第77図	S D-03出土遺物実測図(8)……	89	第110図	S D-10出土遺物実測図(25)…	126
第78図	S D-03出土遺物実測図(9)……	90	第111図	S D-10出土遺物実測図(17)…	127
第79図	S D-03出土遺物実測図(10) …	91	第112図	S D-10出土遺物実測図(14)…	127
第80図	S D-03出土遺物実測図(11) …	92	第113図	S D-10出土遺物実測図(13)…	128
第81図	S D-03出土遺物実測図(12) …	93	第114図	S D-11出土遺物実測図………	129
第82図	S D-03出土遺物実測図(13) …	94	第115図	S D-12出土遺物実測図………	130
第83図	S D-03出土遺物実測図(14) …	95	第116図	S D-17出土遺物実測図………	131
第84図	S D-03出土遺物実測図(15) …	96	第117図	S D-18出土遺物実測図………	132
第85図	S D-03出土遺物実測図(16) …	97	第118図	S D-21出土遺物実測図………	132
第86図	S D-03出土遺物実測図(17) …	98	第119図	土器群 1 出土遺物実測図(1)……	133
第87図	S D-04出土遺物実測図 ……	99	第120図	土器群 1 出土遺物実測図(2) …	133
第88図	S D-09出土遺物実測図………	100	第121図	土器群 2 出土遺物実測図………	134
第89図	S D-10出土遺物実測図(1) …	102	第122図	弥生時代遺構配置図(後期①)…	135
第90図	S D-10出土遺物実測図(2) …	103	第123図	弥生時代遺構配置図(後期②)…	136
第91図	S D-10出土遺物実測図(3) …	105	第124図	弥生時代遺構配置図(中期)……	137
第92図	S D-10出土遺物実測図(4) …	106	第125図	第 2 水田面関連遺物実測図……	138
第93図	S D-10出土遺物実測図(5) …	107	第126図	S K-48出土遺物実測図………	139
第94図	S D-10出土遺物実測図(6) …	108	第127図	S K-49出土遺物実測図………	139
第95図	S D-10出土遺物実測図(7) …	109	第128図	S K-52出土遺物実測図………	141

第129図	S K-53出土遺物実測図……………	142	第162図	S D-26出土遺物実測図(1) ……	168
第130図	S K-56出土遺物実測図……………	143	第163図	S D-26出土遺物実測図(2) ……	169
第131図	S K-57出土遺物実測図……………	143	第164図	S D-26出土遺物実測図(3) ……	170
第132図	S K-58出土遺物実測図……………	144	第165図	S D-26出土遺物実測図(4) ……	171
第133図	S K-59出土遺物実測図……………	145	第166図	S D-26出土遺物実測図(5) ……	172
第134図	S K-60出土遺物実測図……………	145	第167図	S D-26出土遺物実測図(6) ……	173
第135図	S K-61出土遺物実測図(1) ……	147	第168図	S D-29出土遺物実測図(1) ……	174
第136図	S K-61出土遺物実測図(2) ……	147	第169図	S D-29出土遺物実測図(2) ……	175
第137図	S K-65出土遺物実測図……………	147	第170図	S D-30出土遺物実測図……………	176
第138図	S K-66出土遺物実測図……………	148	第171図	S D-32出土遺物実測図……………	176
第139図	S K-67出土遺物実測図……………	148	第172図	S D-37出土遺物実測図(1) ……	177
第140図	S K-68出土遺物実測図……………	148	第173図	S D-37出土遺物実測図(2) ……	178
第141図	S K-69出土遺物実測図(1) ……	150	第174図	土器群3出土遺物実測図……………	181
第142図	S K-69出土遺物実測図(2) ……	151	第175図	土器群4出土遺物実測図(1) ……	183
第143図	S K-70出土遺物実測図……………	152	第176図	土器群4出土遺物実測図(2) ……	184
第144図	S K-72出土遺物実測図……………	153	第177図	遺構外遺物実測図(1) ……	187
第145図	S K-73出土遺物実測図……………	153	第178図	遺構外遺物実測図(2) ……	188
第146図	S K-74出土遺物実測図……………	154	第179図	遺構外遺物実測図(3) ……	189
第147図	S K-77出土遺物実測図……………	154	第180図	遺構外遺物実測図(4) ……	190
第148図	S K-81出土遺物実測図……………	156	第181図	遺構外遺物実測図(5) ……	191
第149図	S K-82出土遺物実測図……………	156	第182図	遺構外遺物実測図(6) ……	192
第150図	S K-83出土遺物実測図……………	157	第183図	遺構外遺物実測図(7) ……	193
第151図	S K-84出土遺物実測図……………	158	第184図	遺構外遺物実測図(8) ……	194
第152図	S K-86出土遺物実測図……………	158	第185図	遺構外遺物実測図(9) ……	195
第153図	S K-88出土遺物実測図(2) ……	159	第186図	遺構外遺物実測図(10)……………	196
第154図	S K-88出土遺物実測図(1) ……	160	第187図	遺構外遺物実測図(11)……………	197
第155図	S K-89出土遺物実測図……………	161	第188図	土器細部の名称……………	200
第156図	S K-90出土遺物実測図(1) ……	162	第189図	ふいご羽口・鉾滓状遺物実測図	284
第157図	S K-90出土遺物実測図(2) ……	163			
第158図	S K-91出土遺物実測図……………	164			
第159図	S D-23出土遺物実測図……………	164			
第160図	S D-24出土遺物実測図……………	166			
第161図	S D-25出土遺物実測図……………	167			

付 図 目 次

付図1	SD-02実測図	1・2	付図32	SD-10杭列実測図	23・24
付図2	SD-01実測図	3	付図33	SD-05実測図	25
付図3	SE-02実測図	4	付図34	SD-06実測図	25
付図4	SK-01実測図	5	付図35	SD-07・08実測図	25
付図5	SK-02実測図	6	付図36	SD-09実測図	25
付図6	SK-03実測図	6	付図37	土器群1実測図	26
付図7	SK-04実測図	6	付図38	土器群2実測図	26
付図8	SK-06・07実測図	6	付図39	第1水田面畦畔実測図	27・28
付図9	SK-05実測図	7・8	付図40	SE-03実測図	27・28
付図10	SK-08実測図	9	付図41	SE-01実測図	29
付図11	SK-09実測図	9	付図42	SK-29実測図	30
付図12	SK-10実測図	10	付図43	SK-31実測図	30
付図13	SK-11実測図	10	付図44	SK-32実測図	31
付図14	SK-12実測図	11	付図45	SK-30実測図	32
付図15	SK-13実測図	12	付図46	SK-34実測図	32
付図16	SK-14実測図	13	付図47	SK-33実測図	33・34
付図17	SK-15・16・17実測図	13	付図48	SK-35実測図	35
付図18	SK-18実測図	14	付図49	SK-36実測図	35
付図19	SK-19実測図	14	付図50	SK-37実測図	36
付図20	SK-20実測図	14	付図51	SK-39実測図	36
付図21	SK-21実測図	14	付図52	SK-38実測図	37
付図22	SK-23実測図	14	付図53	SK-40実測図	37
付図23	SK-22実測図	15	付図54	SK-41実測図	38
付図24	SK-24実測図	15	付図55	SK-42実測図	38
付図25	SK-25実測図	15	付図56	SK-43・44実測図	38
付図26	SK-26実測図	16	付図57	SK-45実測図	38
付図27	SK-28実測図	16	付図58	SK-46実測図	39
付図28	SD-04実測図	16	付図59	SK-47実測図	39
付図29	SK-27実測図	17・18	付図60	SD-11実測図	40
付図30	SD-03実測図	19・20	付図61	SD-12実測図	40
付図31	SD-10実測図	21・22	付図62	SD-14実測図	40

付図63	S D-13実測図	41	付図96	S D-29実測図	61・62
付図64	S D-15実測図	41	付図97	S B-01実測図	63
付図65	S D-16実測図	41	付図98	S K-66実測図	63
付図66	S D-17実測図	41	付図99	S K-67実測図	64
付図67	S D-18実測図	42	付図100	S K-68実測図	64
付図68	S D-19実測図	42	付図101	S K-70実測図	65・66
付図69	S D-20実測図	42	付図102	S K-69実測図	67
付図70	S D-21実測図	42	付図103	S K-71実測図	67
付図71	第2水田面実測図	43・44	付図104	S K-72実測図	68
付図72	S K-48実測図	45	付図105	S K-73実測図	69
付図73	S K-49実測図	45	付図106	S K-74実測図	69
付図74	S K-50実測図	46	付図107	S K-75実測図	69
付図75	S K-51実測図	46	付図108	S K-76実測図	70
付図76	S K-53実測図	46	付図109	S K-77実測図	70
付図77	S K-58実測図	46	付図110	S K-78実測図	70
付図78	S K-52・54実測図	47・48	付図111	S K-79実測図	70
付図79	S K-55・56実測図	49	付図112	S K-80実測図	70
付図80	S K-57実測図	50	付図113	S K-83実測図	71
付図81	S K-59実測図	50	付図114	S K-81実測図	72
付図82	S K-60実測図	50	付図115	S K-84実測図	72
付図83	S K-61実測図	51	付図116	S K-85実測図	72
付図84	S K-62実測図	51	付図117	S K-86実測図	72
付図85	S K-63実測図	52	付図118	S K-87実測図	72
付図86	S K-64実測図	52	付図119	S K-82実測図	73・74
付図87	S K-65実測図	53	付図120	S K-89実測図	73・74
付図88	土器群3実測図	53	付図121	S K-90実測図	75・76
付図89	土器群4実測図	54	付図122	S K-88実測図	77
付図90	S D-23実測図	55・56	付図123	S K-91実測図	78
付図91	S D-24実測図	55・56	付図124	S D-30実測図	78
付図92	S D-25実測図	57・58	付図125	S D-31実測図	78
付図93	S D-27実測図	57・58	付図126	S D-32実測図	79
付図94	S D-28実測図	57・58	付図127	S D-33実測図	79
付図95	S D-26実測図	59・60	付図128	S D-34実測図	79

付図129	S D-35実測図	79	付図133	S D-37実測図	81・82
付図130	S D-36実測図	79	付図134	S B-04実測図	81・82
付図131	S B-02実測図	80	付図135	S B-05実測図	81・82
付図132	S B-03実測図	80	付図136	P-01実測図	81・82

観 察 表 目 次

第2水田面関連	201	S K-43	213
S E-01	201	S K-44	213
S E-02	201	S K-45	214
S E-03	202	S K-47	214
S K-01	203	S K-48	214
S K-05	203	S K-49	214
S K-09	204	S K-52	214
S K-10	205	S K-53	215
S K-11	205	S K-56	215
S K-12	205	S K-57	216
S K-13	206	S K-58	216
S K-14	206	S K-59	216
S K-22	207	S K-60	216
S K-25	207	S K-61	217
S K-26	207	S K-65	217
S K-27	207	S K-66	217
S K-29	209	S K-67	218
S K-30	210	S K-68	218
S K-31	210	S K-69	218
S K-32	210	S K-70	219
S K-33	211	S K-72	220
S K-34	212	S K-73	220
S K-35	213	S K-74	220
S K-36	213	S K-77	221
S K-37	213	S K-81	221
S K-38	213	S K-82	221

SK-83	221	SD-18	252
SK-84	222	SD-21	252
SK-86	222	SD-23	252
SK-88	222	SD-24	252
SK-89	223	SD-25	253
SK-90	223	SD-26	253
SK-91	225	SD-29	257
SD-01	255	SD-30	257
SD-02	255	SD-32	257
SD-03	228	SD-37	257
SD-04	235	土器群 1	258
SD-09	235	土器群 2	259
SD-10	236	土器群 3	259
SD-11	251	土器群 4	260
SD-12	251	遺構外遺物	262
SD-17	252		



第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

鳥取市の西部にあたる千代水平野は、国道9号及び29号バイパス整備事業、鳥取空港整備、鳥取港整備事業などの交通網の整備を主とした大規模開発事業によって大きく変貌を遂げている。岩吉遺跡の所在する岩吉地区も、これら交通網の整備を背景とした千代水区画整理事業の進展によって、地の利を生かした流通・商工業の一大拠点として発展中である。近代的な建物群の間隙に営まれる田畑が、かつての穀倉地帯の面影を偲ばせている。

岩吉地区は、古くから野坂川の氾濫に度々さらされてきた地帯であったが、今日では治水工事の進歩により、穏やかな地目を保っている。こうした治水工事の一環として計画されたのが、中小河川改修事業大井手川改良工事である。大井手川は、岩吉遺跡の中央を南北に貫流して農業用水路として掘削され利用されてきた小河川である。起源は、17世紀初頭に鹿野城主亀井茲距によって掘削された大井手用水に遡る。その上流部は千代川左岸の河岸段丘上に立地する味野地区、菖蒲地区、徳吉地区などに農業用水を供給する役目を担っている。流下途中で、有富川や野坂川と交差し千代川及び湖山川に注いでおり、千代川下流左岸の広範囲な水田灌漑の根幹をなすべき農業用水である。

今回の発掘調査の契機となった改良工事は、屈曲しつつ流下する旧来の大井手川を直線状に流路を付け替え、併せて川幅を拓げる治水工事として計画されたものである。千代水平野内では、徳吉集落から岩吉集落の東側を通り賀露地区の湖山川に注ぐほぼ直線の流路が計画された。この流路は、岩吉遺跡の中央部を南北に縦断するもので、計画の当初から発掘調査は不可避の状況であった。

原因者である鳥取土木事務所と鳥取市教育委員会間で協議が持たれたのは、大井手川改良工事が賀露地内から上流側へと進んだ昭和62年であった。遺跡の重要性を鑑み協議を重ねた結果、工事計画の変更も困難であり、発掘調査を実施する運びとなった。工事計画は前述のとおり徳吉までであるが、用地買収も済み早急に発掘調査が必要な国道9号線北側部分から着手することとなった。しかし、この部分だけでも発掘対象面積が約4300㎡と広大であり、鳥取市教育委員会関係の調査体制では単年度での発掘調査は困難であったため、3年次計画で実施することとなった。また、国道9号線以南については諸条件が整い次第協議していくこととなった。

第2節 発掘調査の経過

1. 昭和63年度調査

調査は、当初見通しとして遺構面2面を予測し、計画された。これは、調査地に弥生土器、土師器の2時期に及ぶ土器の散布が認められること、また昭和57年度の調査において、この度の調査対象地を横ぎる市道区画道路4号線下に弥生時代中期の遺構が確認されていることなどによるものであった。よって、弥生時代と古墳時代の遺構面2面を予測したのである。ただし、昭和57年度の調

査地である市道部分は、今年度の調査対象地より標高が若干高位にあり、また遺跡地が沖積平野の氾濫源に位置しており度重なる洪水堆積を被っていることが予測されることから、遺構面検出の目安となる堆積土層の整合性の把握のため、予察を行うこととした。

調査予定地は、当初東西16m、南北100mの範囲であり、よって東西方向を10mと6mに、また南北方向を10mごとに区分し、10m×10m（A区）及び10m×6m（B区）の調査区を調査単位として設定した。北から南に向かって、A、B-1区～A、B-10区と呼称する。

調査は、昭和63年9月から開始した。現場事務所の設置、器材の搬入等の準備作業を経て、発掘調査に着手した。まず、上述したように調査区の設定のため、基準杭の設定、基準高の移動を行った後、予察に取りかかった。5m×5mの予察グリッドを、A-1区、A-4区、A-6区、A-9区の4ヶ所に設定した。予察の結果、土器溜め状の土坑や杭列などを多量の弥生土器や土師器と共に検出した。この時点で、遺物包含の状況等土層観察によって、遺跡は2時期に渡ることを確認した。予察終了後、プラント・オパール定量分析を宮崎大学農学部の藤原宏志教授に依頼し、低湿地遺跡では存在が予測されるところの水田遺構の有無の確認を図った。後に教示を受けた分析結果によれば、近世を含めて3時代以上の水田が存在することが明らかとなった。

予察終了後、12月から全面発掘に取りかかった。予察の結果をもとに、遺物をまったく含まない表土下30cmまでを重機により掘り下げ、以下は基本的に人力によって掘り進めた。調査地は地盤が軟弱で出水が多く、掘り下げ壁面の崩落など危険な状況が予測されたため、調査地の両側に鋼矢板を打設し安全を期した。排土搬出に際しては、調査地の両側に仮設道を付設し、重機等の往来に対処した。

発掘は、北側から順次行い、第1遺構面である古墳時代の面を追及した。この面で土器溜め状の土坑8基を検出した。各土坑について、検出状況、遺物出土状況、完掘状況の写真撮影、実測を行い、出土遺物を取り上げた。また調査地を斜めに横切る河川を確認し掘り下げたところ、多量の遺物が検出された。掘り下げの過程で、土器が完形もしくはそれに近い形で多量に出土するレベルがあり、ここで遺物出土状況の全景写真を撮影し、実測を行った。遺物取上げ後、完掘を行った。河床には加工木材による杭の列が検出され、この河川が水路として人工的に造られたものと判断した。完掘状況写真撮影後、検出状況実測及び杭列の実測を行った。

このように調査を進めていく過程で、先に実施したプラント・オパール定量分析の結果がもたらされた。これにより、当初遺構面と推定していた最下層の面は水田面であること、さらにその上層にも水田が存在すること、近世の水田が存在することなどが明らかとなった。近世の水田についてはすでに調査を終えた面であり、畦畔は遺存しないことが確認されていた。この結果を受けて当該層を精査したところ、畦畔を確認し、調査地内の遺構面は3面に及ぶこととなった。このため当初計画の調査面積1,600㎡を1,120㎡に縮小し、対応することとなった。

第1面の水田は、畦畔検出のため全面を徐々に掘り下げ、帯状に延びる土質の違いを追及した。

この結果、農道状の大畦を検出したが、小畦はつかめなかった。全景写真撮影後、検出状況の実測を行った。

第2面の水田は、かなり粘質の強い黒色粘質土層を耕土としていた。畦畔の高まりは極めて微妙なものであり、上層の土を忠実に剥ぎ取って検出した。調査時期が冬季で雨量が多く、耕土の強い粘性が水を含んでますます強くなり、検出には困難を極めた。検出後、全景写真を撮影し、検出状況の実測を行って、本年度の現場作業は終了した。

現場作業と並行して、出土遺物及び記録類についての整理作業を行った。出土遺物については、水洗、注記を施し、接合、復元を行った。特に木製品については、水槽につけるなど応急的に保存に努めた。こうして調査は、平成元年3月まで実施した。

2. 平成元年度調査

元年度の調査は、63年度に実施した調査区(A, B-1区~A, B-7区)の南側について行なった。調査区の設定は前年度調査区につづけて東西方向を10mと6mに、南北を10mごとに区画し、10m×10m(A区)、10m×6m(B区)とした。また、区画した各調査単位に北から南に向かって8~13の区番号をつけた。本年度の調査範囲はA, B-8区~A, B-13区にあたり、調査範囲面積は960m²である。

調査は、排土処理のための仮設道の設置および鋼矢板の打設作業を行なった後6月から開始した。まず調査区内の排水を円滑に行なうため調査地区の西側へ排水溝を掘り下げ、表土の除去作業を行なった。表土除去は、予察と前年度調査の結果をもとに、遺物をまったく含まない表土下約40cmまでを重機によって実施した。以下については基本的に人力によって少しずつ掘り下げていったが、A, B-11~12区で確認された厚さ約30cmあまりの無遺物層については重機による掘削を行なった。

調査は北側から順次行なった。まず表土除去後の全面精査を実施し、遺構の検出作業を行なったが、夏季で検出面が非常に乾燥したため散水と精査を繰り返す結果となり作業は難行をきわめた。検出作業の結果、A, B-10区から近世のものとみられる溝1基(SD-01)と、A, B-13区から古墳時代後期の溝1基(SD-02)、A, B-8~13区から古墳時代中期の井戸1基(SE-02)、土坑19基(SK-09~SK-27)、溝7基(SD-03~SD-09)、土器群2基(土器群1, 2)が検出された。特にSD-03からは田下駄、火鑽板などの木製品とともに船形木製品、刀形木製品などの祭祀色の濃い遺物が良好な遺存状態で出土し、風俗や習慣を知るうえで貴重な資料として注目された。この溝の調査では著しい湧き水による壁面の崩落や、検出した木製品の出土状態の維持に苦慮した。検出した各遺構について、検出状況、遺物出土状況、完掘状況などの実測、写真撮影を行ない、最後に遺構面の全景写真を撮って古墳時代中期以降の遺構調査を終えた。

第1遺構面の調査後、B区東側に排水溝をかねた幅40cm程度の溝を掘り込み土層断面の観察を行なった。観察の結果、少なくとも弥生時代後期~古墳時代前期の遺構面があることが確認され、この結果をもとに調査区全域について掘り下げを実施した。まず、古墳時代前期遺構面の追及を行な

い、A、B-8~11区から井戸1基(SE-02)、土坑19基(SK-29~SK-47)、溝10基(SD-12~SD-21)を検出した。古墳時代前期遺構面の調査後さらに少しずつ掘り下げ、弥生時代後期中葉に比定される掘立柱建物1棟(SB-01)、土坑18基(SK-48~SK-65)、溝3基(SD-23~SD-25)、土器群2基(土器群3、4)を、土器群4の下層から弥生時代後期前葉とみられる溝1基(SD-26)を検出した。このSD-26からは甕、高杯、器台などの土器とともに木庖丁、竪杵などの木製品が良好な状態で出土した。検出された遺構、遺物は検出状況、出土状況、完掘状況などの写真撮影、実測を行ない、最後にB区東側およびA区西側についてトレンチによって遺構が存在しないことを確認して本調査を終えた。

また、本年度調査区の本調査を終えたのち、平成2年度の調査予定地に2m×5m、3m×3mの試掘グリッドを設定して遺構面の確認調査を実施し、平成2年1月末に本年度の現地調査を終了した。

出土遺物および記録類の整理作業は現地の調査と並行して行ない、土器については水洗の後バインダー処理、注記、復元作業を、また木製品は応急的な保存処理を行なった。これらの作業を平成2年3月末まで行なった。

3. 平成2年度調査

前年度調査区の南側を引き続き調査した。本年度の調査区域内には区画道路4号線が調査区を横断するかたちで東西に延びている。この区画道路部分の調査は、昭和63年度に実施した予察の結果をもとに、本年度の調査対象から除くこととした。本年度の調査は、区画道路北側の南北35m、東西16mと、南側の南北80m、東西16mを対象とし、面積約1840㎡について実施した。調査単位の設定は、前年度調査区に引き続き東西方向を10mと6m(西側をA区、東側をB区)に、また南北方向を10mに区分し、北から南側に向かって順に14区~27区とした。本年度の調査地区は調査単位でみるとA、B-14区~A、B-27区にあたる。ただし18区、19区は区画道路部分となる。

発掘調査は、仮設道の敷設および鋼矢板の打設が完了したのち6月から実施し、まず表土の除去と排水溝の掘削を行なった。表土の除去は、A、B-14~17区については前年度の調査結果をもとに遺物を含まない表土下約50cmまでを、またA、B-20~27区では予察の結果をもとに表土下約50~60cmまでの無遺物層を重機によって取り除いた。A区西側に排水溝を掘削し、排水溝の壁面を土層観察面とした。

調査はA、B14~17区から開始し、まず表土除去後の全面精査を行なった。しかし、遺構、遺物は認められず、前年度調査で確認した古墳時代中期の遺構面まで掘り下げた。この面で土坑1基(SK-28)と、前年度調査で調査区域外となるため未調査となっていた溝(SD-03)の南西側を検出した。SD-03からは田下駄、鋤などの農具とともに、準構造船を模した船形木製品がほぼ完存状態で出土し注目された。

古墳時代中期遺構面の調査を終えたのち、14区から順に25cm前後の掘り下げを行なった。掘り

下げの過程で、A、B-14～15区で完形に近い土器が出土する面が確認され、この面の精査を行なったが、これらに伴う遺構は認められず、実測と写真撮影のちこれらの土器を取り上げた。この段階でA区西側に幅50cmのトレンチを掘り、土層断面の観察を行なった。観察の結果、A-16区から北側は基本的に砂の堆積層で、土層断面で見るとかぎり遺構、遺物は確認されなかった。砂層の調査は最終段階で行なうこととし、まずA、B-17区の調査を行なった。掘り下げ、精査を繰り返した結果、溝1基（SD-27）を検出した。

砂層の調査は、まず約50cmの掘り下げを行なった。この過程で遺構、遺物は認められず、次にA-15～16区の西側について標高0m近くまで掘削した。その結果、遺物はまったく検出されず、砂層の調査を打ち切った。最後に調査区における土層の堆積状況を記録し、区画道路北側の調査を終了した。

引き続きA、B-20～27区の調査を開始した。まず、表土除去後の全面の精査と、並行してA区西側に掘削した排水溝の壁面の精査を行ない、遺構面の確認を行なった。全面精査の結果、遺構、遺物はまったく認められず、また土層の観察によっても厚さ20～30cmあまりの無遺物層が存在することがわかり、この層の除去を重機によって実施した。無遺物層の除去後、20区から順次遺構検出作業を行なった。この作業はちょうど夏期にあたり、乾燥による地割れや、土色の変化などによって難行を極めたが、精査を繰返し行なった結果、A、B-20～21区から弥生時代後期の溝（SD-28、29）を検出した。また、その下層からは弥生時代中期に比定される掘立柱建物4棟（SB-02～SB-05）、土坑26基（SK-66～SK-91）、溝状遺構8基（SD-30～SD-37）を検出した。検出した各遺構について写真撮影、実測などで記録をとったのち、全体の遺構検出状況の写真撮影を行なった。最後に、基盤となる粘土層までの掘り下げと、トレンチによって弥生時代中期遺構面が最終遺構面であることを確認し、11月末で現地調査を完了した。

出土した遺物の整理作業と記録類の整理は現地調査と並行して行なった。出土土器の整理作業は、前年度と同様に、土器については水洗の後バインダー処理を行ない、注記、復元作業を、また木製品は応急的な保存処理を行なった。この他本年度には、木製品の樹種、赤色顔料、鉍滓など出土遺物の自然科学的手法を用いた分析及び鑑定を行なった。また、本年度は、昭和63年度から実施してきた調査のまとめとして、年度当初から報告書作成作業にとりかかり、これらの作業を平成3年3月末まで行なった。

第3節 発掘調査の組織・体制

発掘調査は、昭和63年度から平成2年度までの3年度にわたって鳥取市遺跡調査団が実施した。関係者は次のとおりである。

発掘調査指導監督 鳥取市教育委員会教育長 田中 哲夫

鳥取市遺跡調査団

団長 田中 哲夫 (鳥取市教育委員会教育長)

理事 吉田 幹男 (学識経験者)

治部田史郎 (鳥取市文化財審議会委員)

平勢 隆郎 (鳥取大学教育学部助教授、昭和63年度)

谷村 俊郎 (鳥取市教育委員会次長、昭和63年度)

縄田 捷彦 (鳥取市教育委員会次長、平成元・2年度)

監事 近藤 忠成 (鳥取市こども科学館館長)

中嶋 昇 (鳥取市教育委員会庶務課課長補佐、昭和63・平成元年度)

村上 喜隆 (鳥取市教育委員会庶務課課長補佐、平成2年度)

事務局長 谷本 勝実 (鳥取市教育委員会社会教育課課長、昭和63年度)

縄田 捷彦 (鳥取市教育委員会次長兼社会教育課課長、平成元・2年度)

事務局 門脇 隆雄 小杉 宗雄 平川 誠 西村 朋之 伊田 健司 中島伸一郎 前田 均

北浦 弘人 (鳥取市教育委員会社会教育課)

調査員 平川 誠 前田 均 北浦 弘人 山田 真宏 谷口 恭子

調査補助員 杉谷美恵子 原田 育夫 坪田 晴子

事務補助員 安木とし子

調査作業協力 青木慶子 秋本末子 池田志行 伊藤恵美子 井上初恵 太田良一 太田信子 太田垣芳子 岡垣清子 岡野悦子 奥田秀雄 小野真理 影井静江 影井千代子 影井つる子 影井なみ子 影井治実 川上和男 河口亜由美 小坂美佐子 小林弘行 清水房子 田中千恵子 中島寿次 西上恵子 西原徳善 西本美佐子 西村昇 橋本貴志江 浜野るみ子 浜本益雄 平辻暢子 本庄好子 松岡朋子 村上喜美江 村上喜代治 村上松江 村上富士子 山崎佳子 山根健治 山根猛 渡部和子

上記の組織・体制で調査にあたったが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。記して深謝いたします。

鳥取県土木部河川課 鳥取土木事務所 鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター 鳥根県立工業技術センター (財)元興寺文化財研究所 (株)パリノ・サーヴェイ (株)日立金属安来工場和鋼記念館 (株)美津吉商事 藤原宏志 安田博幸 森真由美 酒井禮男 佐藤豊 山名巖 井上貴央 中村友博 穴沢義功 清水真一 山内紀嗣 丸山雄二 丸山文子 岩崎直也 島田栄治 村上勇 山口誠治 赤木克視 中野知照 久保穰二郎 中原育 松井潔 長岡充展 小原貴樹 杉谷愛象 下高瑞哉 (敬称略、順不同)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市岩吉遺跡は、市街地から北西に約4kmの鳥取市岩吉地内に所在する大集落遺跡である。

鳥取市は、鳥取県東部を貫流する千代川の沖積平野を市域の中心とし、面積約237平方キロメートル、人口約14万人の地方都市である。北に広大な砂丘と日本海、西に湖山池、東と南を中国山地から派生する丘陵に囲まれている。現在、鳥取県の県庁所在地として、また、県東部地域の政治・経済の中核的な地域として存在している。

岩吉遺跡は、市域を二分する千代川の下流左岸に開けた沖積地に立地する遺跡である。この千代川左岸の高草平野あるいは千代水平野と呼ばれる西部地域は、千代川水系の豊富な堆積物によって形成された沖積平野である。平野内には、かつて潟湖であった頃、湖内に浮かんでいたであろう足山、天神山などの小独立丘陵が点在している。平野の西端に位置する湖山池は、往時の景観を今にたづねている。現在の各集落は、これらの小独立丘陵の縁辺に立地し、平和な農村のたたずまいをみせている。しかし、平野内を東西に横断する国道9号、国道9号バイパス沿いには、自動車販売会社、遊戯施設などの郊外型商工業の進出が著しく進んでいる。また、岩吉、安長の北側地域は、近年の区画整理事業、国道29号バイパスの部分開通によって企業進出が盛んである。

鳥取平野も他の多くの沖積平野がそうであるように、人々の苛酷な自然との闘いや、自然の恵みを利用した生産活動と文化の形成を豊かに育む舞台となってきた。原始・古代のこの平野は、改修前の千代川がそうであったように洪水の氾濫原として自然の猛威にさらされてきた。縄文時代以降、人々は自然堤防などの微高地を生活の場として、平野内での苦闘を開始したのである。

この鳥取平野西部に人々の足跡がしるされたのは縄文時代である。鳥取平野内の縄文遺跡は、従来から千代川右岸、左岸の遺跡立地の特徴的な差異が注目されてきた。右岸の砂丘地に立地する遺跡に対して左岸の青島遺跡、桂見遺跡、布勢グラウンド遺跡などの平野縁辺部の遺跡については「低湿地遺跡群」として捉えられている。これらの遺跡は、前・中期及び晩期土器なども少量出土しているようであるが、いずれも後期を主体とする遺跡である。1976年(昭和51)に圃場整備事業に伴って発見され発掘調査が行なわれた桂見遺跡は、後期初頭(中津式並行)を主体とする遺跡であるが、大歳山式土器なども少量出土している。この調査では、土器のほかに木製の櫂、おびたしい量の椎・栃の実などの植物遺体が出土し、鳥取県における縄文時代研究の画期となった。青島遺跡は、後期中葉を主体とするが、一部晩期に及んでいるようである。布勢グラウンド遺跡は、1969年(昭和44)鳥取総合グラウンド建設工事中に多量の縄文式土器が出土したことによって、その存在を知られるようになった。発見時は、民間研究者の努力によって遺物の採集が行なわれただけであったが、1980年(昭和55)には国民体育大会開催に伴うグラウンド改築工事の事前調査が実施された。この調査によって漆で彩られた木器、もじり編みのカゴなど豊富な木製品が出土し、桂見遺跡と並んで西

日本の代表的縄文遺跡として脚光を浴びることとなった。布勢グラウンド遺跡出土の縄文式土器は、福田KⅡ式、津雲A式に並行すると考えられる土器が主体を占め、後期中葉の時期が与えられている。この遺跡は、高度の技術を要求されるすぐれた漆製品の出土に見られるように、この地域の縄文文化の豊かさを示している。従来、東日本のそれと比べて相対的に貧弱であると見られる傾向にあった西日本の縄文文化が再検討される契機となるものであった。

縄文時代晩期後半になると始めて平野中心部にその足跡を残すようになる。この時期の遺跡として古海遺跡、本報告にかかる岩吉遺跡をあげることができる。古海遺跡は、千代水平野の南端、千代川左岸の自然堤防上に営まれた代表的な晩期後半の遺跡である。

ほかにこの地域にあって縄文土器を出土した遺跡として、大柄遺跡、天神山遺跡、湖山第2遺跡、里仁遺跡(仮称)などをあげることができる。しかし、いずれの遺跡も少量の土器片の出土にとどまっておき、詳細は不明である。

弥生時代前期の遺物が出土した遺跡として、本遺跡のほか青島遺跡、湖山第2遺跡、布勢グラウンド遺跡が知られている。これらの遺跡は、いずれも断絶はあるものの縄文時代の遺跡分布と重なっている。各遺跡とも断片的な土器の出土といった域を越えず、この地域の弥生時代前期の実態はなお検討を要するものと考えられる。しかしながら1981年(昭和56)に鳥取大学附属小中学校の移転に伴って調査された湖山第2遺跡からは遺構(掘立柱建物)が検出されているようなので今後に期待したい。

中・後期に比定される遺跡として前述の遺跡が引き続き営まれるほか、布勢グラウンド第2遺跡、天神山遺跡、古海遺跡、大柄遺跡、山ヶ鼻遺跡、桂見遺跡、湖山池湖底遺跡などが営まれるようになる。これらの遺跡は、それぞれ断続しつつも古墳時代へと引き続き営まれている。近年まで弥生時代集落については具体的には何もわからない状態であったが、最近の湖山池周辺の開発事業に伴う事前調査の増大によって、竪穴住居跡などの遺構が続々と検出されている。布勢グラウンド第2遺跡で古墳時代を含めて8棟、湖山第2遺跡で25棟、帆城遺跡で1棟の竪穴住居跡が検出され、掘立柱建物なども調査されている。布勢グラウンド第2遺跡は、標高15mほどの丘陵緩斜面に立地した遺跡であるが、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡を検出している。そのうちS I 02呼称する住居跡からは、管玉未製品、玉砥石が出土し玉作工房跡とされている。帆城遺跡は、後期中葉の所産と考えられる竪穴住居跡である。帆城遺跡からも玉作り関係の遺物が出土している。また、岩吉遺跡からも碧玉原石、管玉未製品、擦り切り工具などが出土しており、これら玉作関係遺物の出土はこの地域の弥生集落の特徴となっている。これら弥生集落の中で興味深い遺跡として湖山池湖底遺跡がある。高住集落の沖合約500mの湖山池湖底(水深2m前後)から弥生土器、土師器が採集されている。潟湖である湖山池の消長などの地形変化や集落立地などの変遷を考える上で非常に貴重な遺跡である。

これらの集落跡と密接な関係を持つ弥生時代の遺跡として、湖山池東南岸の高住銅鐸出土地、塞



- | | | |
|--------------|-------------|------------|
| 1. 岩吉遺跡 | 11. 湖山遺跡 | 21. 栢間1号墳 |
| 2. 秋里遺跡 | 12. 青島遺跡 | 22. 古海36号墳 |
| 3. 古海遺跡 | 13. 塞ノ谷遺跡 | |
| 4. 山ヶ鼻遺跡 | 14. 松原谷田遺跡 | |
| 5. 北村遺跡 | 15. つづらお遺跡 | |
| 6. 大栢遺跡 | 16. 高住銅鐸出土地 | |
| 7. 布勢グラウンド遺跡 | 17. 桂見墳墓群 | |
| 8. 桂見遺跡 | 18. 三浦1号墳 | |
| 9. 帆城遺跡 | 19. 大熊段1号墳 | |
| 10. 天神山遺跡 | 20. 布勢1号墳 | |

— 凡例 —

	集落跡、他		古墳密集地域
	古墳		城跡
	横穴		

第1図 岩吉遺跡周辺主要遺跡分布図

ノ谷遺跡、西桂見遺跡、桂見墳墓群をあげることができる。高住銅鐸は、梨園造成中に村社南側山腹から出土したと伝えられている全高32cmを測る偏平鈕式の流水文銅鐸である。塞ノ谷遺跡は、湖山池最大の島である青島の対岸に位置し、湧泉を中心に展開されたと考えられる祭祀遺跡で古墳時代まで継続して営まれる。1973年(昭和48)の調査では舟、刀などの木製模造品や土器類が出土している。1981年(昭和56)に調査された西桂見遺跡の四隅突出型方形墓は、地山の削り出しと盛土によって一辺64m、高さ5mの規模を作り出し、貼石と列石を巡らした弥生時代後期終末の墳墓である。墳丘上に樹立されていたと考えられる仮器化した大型特殊土器類とともに、弥生墓制から古墳の出現という時代の画期の解明に新たな問題を投げかけている。いずれにせよこの四隅突出型方形墓の被葬者は、弥生時代後期のこの地域社会にあって、大きな力を持っていたことは間違いないであろう。また、この西桂見遺跡からは土壙墓群も検出され、20基の土壙墓が調査されている。西桂見遺跡の東方約500mに位置する桂見墳墓群は1983年(昭和58)に調査され、石列とわずかな削り出しによって一辺12mの方形に区画された弥生時代後期の墳墓が検出された。中心主体と考えられる土壙墓からは、水銀朱とともにガラス製勾玉、碧玉製管玉が出土している。これら、湖山池南東岸の丘陵上にはほぼ同時期に営まれた三者三様の墳墓の有様は、弥生時代後期の社会構造を具体的に示すものとして注目してよいであろう。

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上には大小様々な古墳が造られるようになる。全長92mの^{かくま}柄間1号墳をはじめとして里仁29号墳(81m)、布勢1号墳(59m)、古海36号墳(67m)、^{おおくまだん}大熊段1号墳(51m)、^{みうら}三浦1号墳(36m)などの前方後円(方)墳が含まれており、方形墳、円墳を主体とする小型墳は、湖山池南西～南東岸、野坂川流域の丘陵地帯に数多く造られている。

千代川左岸の古墳は、右岸の古墳に比較して発掘調査例が少なく内部構造など不明の点が多いが、近年桂見古墳群、^{くらみ}倉見古墳群、里仁古墳群、^{よしおか}吉岡古墳群、^{とくのお}徳尾古墳群など古墳時代前・中期の中小規模古墳の調査事例が増加している。桂見古墳群は、湖山池東南岸の丘陵上に立地する古墳群で、1983年(昭和58)に古墳時代前期の方形墳3基が調査された。長辺28mを測る2号墳からは、長軸7.5mの長大な墓壙に納められた箱形の木棺が検出され、棺内から舶載の内行花文鏡、斜縁獣帯鏡が出土した。一辺22mの1号墳からはガラス管玉などが出土している。倉見古墳群では、前期から中期にかけて築造された6基の円墳が調査されている。市内では最も古い時期にはいる円墳群である。埋葬施設は木棺直葬で、土師器転用枕の使用が注意を引いた。里仁古墳群では、国民体育大会関連施設の建設にともなって1984年に4基が調査された。いずれも弥生時代からの伝統を受け継ぐ一辺15m前後の方形墳で、このうち2基の古墳の埋葬施設には箱形石棺が採用されている。調査によって33号墳から豊富な鉄製武器、工具が、32号墳からは鱗付壺円筒埴輪と名付けられた類例のない埴輪が出土している。

前方後円墳では、鳥取大学校内に所在する三浦1号墳(琵琶塚古墳)、桂見6号墳の調査事例がある。前者は、保存修復を目的とした調査であったが、前方部に幅3mの周濠が確認され円筒埴輪・

形象埴輪片が採取されている。しかし、埋葬施設などの詳細はなお不明である。桂見6号墳は墳丘測量とトレンチ調査がなされ、6世紀代に築造された全長25.5mの小型前方後円墳であることが判明している。前方部長が短く端部の開きが大きい特徴的な墳形をしており、鳥取市内の他の小型前方後円墳との斉一性が指摘されている。柵間1号墳および里仁29号墳は、葦石、段築、埴輪とも認められる中期古墳である。国史跡となっている布勢1号墳は、墳丘から円筒埴輪片が発見されているほか須恵器片も発見されており、6世紀前半代の築造ではないかと考えられている。

千代川下流左岸では後期の横穴式石室を内部主体とする古墳は少なく、北村古墳群、高住古墳群、吉岡古墳群などでわずかに知られているだけで、鳥取平野での古墳分布の一つの特徴として理解されている。石室の構造から見ても、千代川左岸の石室に特徴的な中高天井の石室は確認されておらず、千代川右岸との際立った差異となっている。このような後期古墳の分布状況の中で、巨石を切り抜いた石棺型石室を持つ山ヶ鼻古墳(古海13号墳)が野坂川左岸丘陵の東側斜面に築造されている。その特徴ある石室構造とともに、数少ない千代川左岸の後期～終末期古墳として貴重な存在といえる。

古墳時代の集落跡の多くは、弥生時代の集落に重なって形成されているようである。今回の報告する岩吉遺跡や先述の湖山第2遺跡、布勢グラウンド第2遺跡、大柵遺跡などはこの好例であると考えられる。大柵遺跡は、1977年(昭和52)、1982年(昭和57)の2回の調査で微高地上から竪穴住居跡、土壙墓などが検出され「ムラ」跡の一端が明らかとなった。ほかに古墳時代の遺跡として、旧千代川下流左岸の自然堤防上に営まれた秋里遺跡が知られている。最近の調査で弥生時代後期まで遡ることが判明したが、古墳時代を中心として奈良・平安時代まで続く祭祀遺跡と考えられている。土器溜め状の土坑、土器群、土器列などの遺構から大量の土器とともに、鳥舟形土製品、船形土製品、石製模造鏡などの祭祀遺物が出土している。

律令体制下のこの地域は、東大寺領高庭荘として開発が進められたことが『東大寺東南院文書』などの史料に見え、条里制との関連からの研究もなされている。記録にも見られるとおり、この地域に条里制が施行されていたことは確かであろうが、条里遺構復元の手がかりは必ずしも多いとはいえない。文献によれば湖山池東岸から南東岸の田名として船負田、倉見田、葦原田、草尾田などの地名が見られ、それぞれ現在の布勢、桂見、里仁などの地域に比定されている。この時期(8世紀半ば～11世紀初頭)の遺物は桂見、大柵、古海などの遺跡から出土しているが、発掘調査が十分に行われていないため集落の実態は不明である。いずれにしても、条里地域の開発に際してこの地域の豪族の積極的な働きがあったはずで、前記文献史料にも壞田長として国造勝磐の名も見られる。その後高庭庄は、東大寺の政治的地位の低下や、自然条件の変化による開発の困難性によって高庭庄の経営も悪化し、10世紀の後半には完全に没落していったと考えられている。律令体制下に消長していったこの地域の豪族の系譜を示唆するものとして、土師百井式軒丸瓦を出土し白鳳時代後期の創建になる菖蒲麩寺、土師氏につながる大野見宿禰命神社などがある。東大寺領高庭荘の開発に

深く関与していた古代因幡氏もこの地域を背景とした地方豪族であったと思われる、具体的に証する文献などは明らかではないが、土師氏との結びつきも深かったと考えられる。

最後に、岩吉遺跡の中心に位置する伊和神社の巨石について触れておきたい。伊和神社は、一名岩室大明神とも呼ばれ『延喜式』所載の神社である。この神社の近くに高さ5～6m余りの巨石があり、現在小祠が祀られている。巨石に神が降臨する神の座があると考え、これを磐座として祀る古代祭祀を彷彿とさせる。



第2図 伊和神社の巨石

主要参考文献

- 『鳥取県史1－原始古代－』 鳥取県 1972年
『鳥取県史2－中世－』 鳥取県 1972年
『改訂・鳥取県遺跡地図－第1分冊－』 鳥取県教育委員会 1973年
『千代川史』 建設省中国地方建設局鳥取工事事務所 1977年
若林久雄他『鳥取市西桂見出土の特殊土器について－古代学研究会例会発表資料－』 1981年
『天神山遺跡発掘調査概報』 鳥取県教育委員会 1973年
『秋里遺跡・I』 鳥取市教育委員会 1976年
『岩吉遺跡』 岩吉遺跡発掘調査団 1976年
『桂見遺跡発掘調査報告書』 鳥取市教育委員会 1978年
『大柄遺跡・I』 鳥取市教育委員会 1978年
『鳥取県文化財調査報告書第11集』 鳥取県教育委員会 1979年
『土師百井廃寺発掘調査報告書I』 郡家町教育委員会 1979年
『古海遺跡発掘調査概報』 鳥取市教育委員会 1981年
『西桂見遺跡』 鳥取市教育委員会 1981年
『布勢遺跡発掘調査報告書』 (財)鳥取県教育文化財団 1981年
『鳥取県装飾古墳分布調査概報』 鳥取県教育委員会 1981年
『湖山第2遺跡発掘調査報告書』 (財)鳥取県教育文化財団 1982年
『三浦遺跡』 鳥取大学・(財)鳥取県教育文化財団 1982年
『帆城遺跡・天神山遺跡発掘調査報告書』 鳥取市教育委員会 1982年

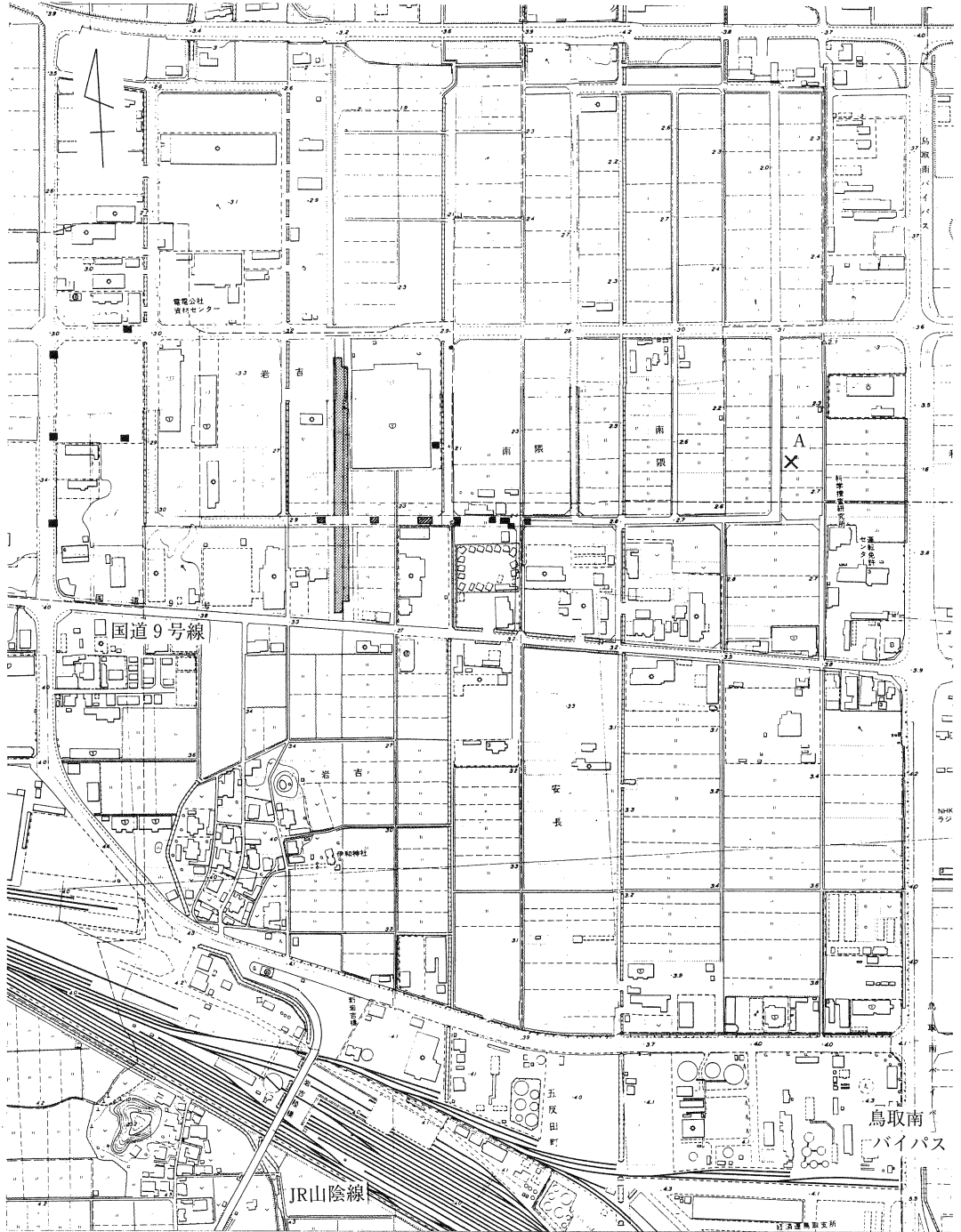
- 『大桒遺跡・Ⅱ』『鳥取市文化財報告書13』 鳥取市教育委員会 1983年
『岩吉遺跡Ⅱ』『鳥取市文化財報告書13』 鳥取市教育委員会 1983年
『葦岡長者古墳発掘調査報告書』 明日の湖南を考える会 1984年
『桂見墳墓群』 鳥取市教育委員会 1984年
『里仁古墳群』 鳥取県教育文化財団 1985年
『桂見古墳群・桂見遺跡発掘調査概要報告書』 鳥取市教育委員会 1988年
『湖山第1遺跡』 鳥取県教育委員会・鳥取県教育文化財団 1989年
『秋里遺跡(西皆竹)』 鳥取県教育文化財団 1990年

第2節 岩吉遺跡の範囲と既往の調査

岩吉遺跡は、千代川に形成された肥沃な沖積平野である鳥取平野のほぼ中央に位置している。以前から土器散布が広範囲にわたって認められていたが、昭和47年に鳥取県教育委員会が実施した分布調査によって、周知の遺跡として一般に知られるようになった。遺物出土地をそれぞれ岩吉第1～4遺跡と呼称し、『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』（昭和48年発行）にその位置を記載している。第1遺跡は岩吉の南側集落（吉山）の南側、第2遺跡はJ R山陰線と岩吉北側の集落（岩室）とに挟まれた地域、第3遺跡は北側集落（岩室）の北側、第4遺跡は国道9号線北側の現在日本海信販自動車学校となっている地域である。かなり広い範囲にわたって遺物の散布が認められるわけである。遺物は、土地改良事業や旧国鉄湖山操車場の建設などによって発見されたものである。旧国鉄湖山操車場の建設では、多量の弥生時代中・後期の土器、土師器、石器類が出土したといわれるが、詳細は不明である。この時期は現在のように行政的対応がとられてはいなかったようである。

その後、国道9号線の北側一帯を流通・工業団地とする区画整理事業計画が持ち上がり、昭和51年には初めての発掘調査が行われた。開発計画との調整を測ることを目的とした範囲確認調査であったが、岩吉遺跡の性格、分布範囲を知る上で貴重な成果が得られている。調査は、岩吉第4遺跡の東辺部及びその東側を中心とした地域を対象としており、5m×5mのグリッド12カ所が発掘されている。この調査によって、弥生時代中期の柱穴などを検出すると共に、弥生時代前期から後期に至る弥生土器、土師器、石器類など多量の遺物が出土している。調査の所見として、現地表の標高2.3m前後の等高線を境にして南側に遺跡が広がること、弥生時代に数次の海面変化があり、居住地の移動が観察されることなど、岩吉遺跡の性格を把握する上で重要な指摘がなされている。（小谷仲男 他『岩吉遺跡－鳥取都市計画事業千代水土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査1976－』岩吉遺跡調査団 1976年）

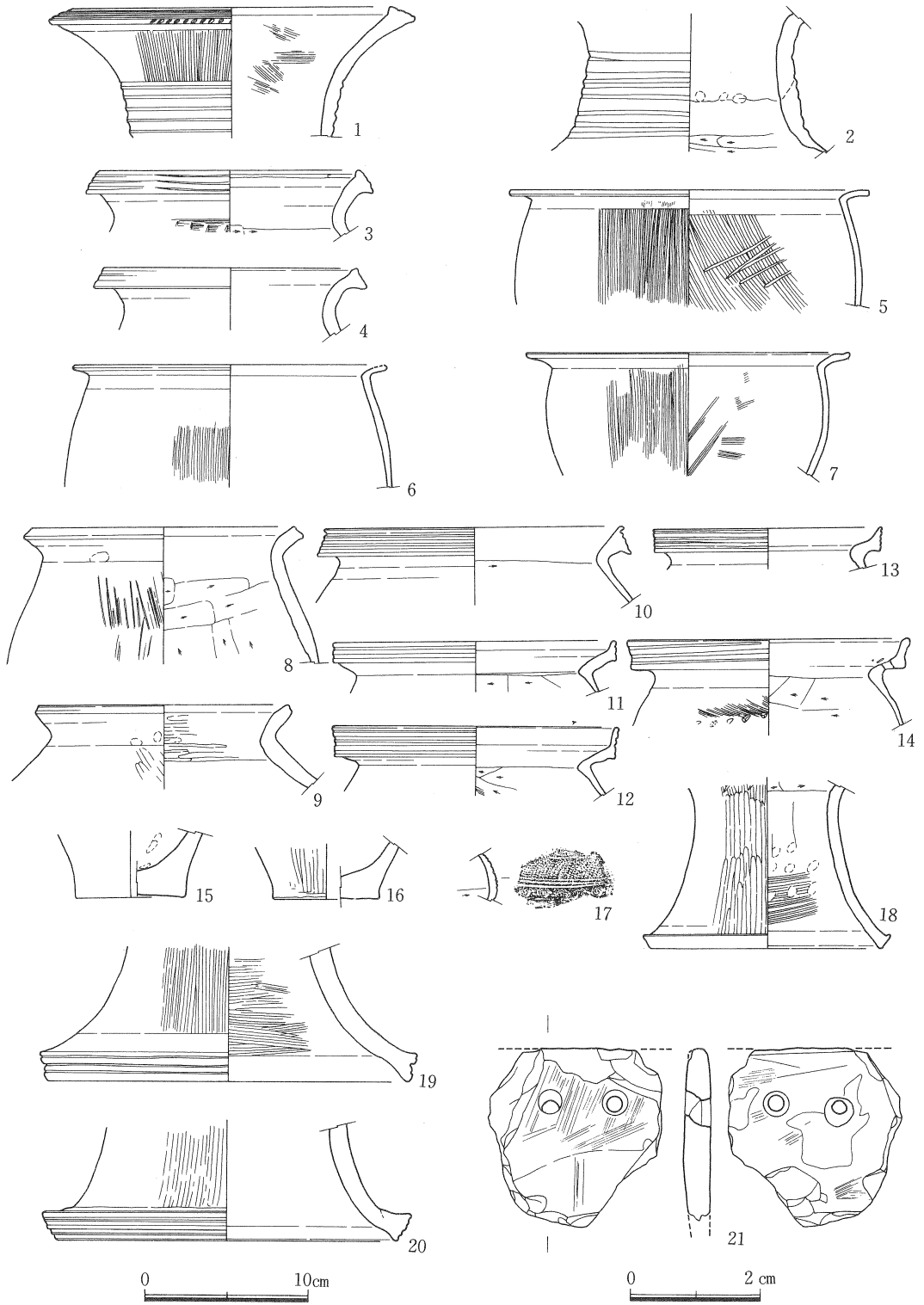
昭和56年、千代水地区区画整理事業計画の一環である区画道路4号線の建設が具体化した。路線予定地が、昭和51年に発掘調査が実施された際、最も多くの遺物を出土した地区にあたり、原因者である鳥取市開発課は鳥取市教育委員会と協議し、翌昭和57年に発掘調査を実施する運びとなった。



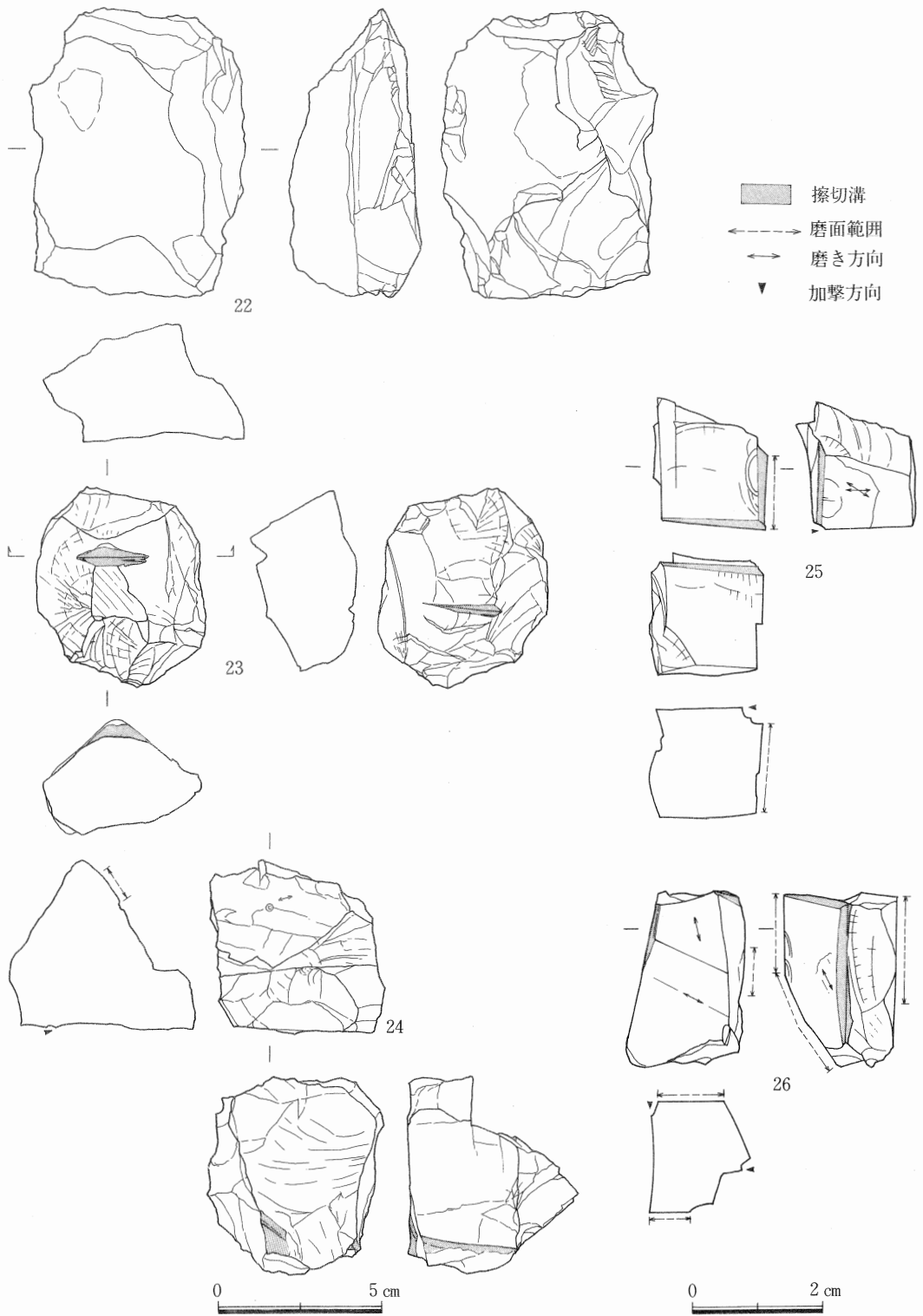
- 昭和63年～平成2年調査区
- 昭和57年調査グリッド
- 昭和51年調査グリッド
- × 平成元年～2年遺物採集A地点



第3図 岩吉遺跡発掘調査区位置図



第4图 A地点表探遺物实测图(1)



第5図 A地点表採遺物実測図(2)



第6图 A地点表探遺物実測図(3)

発掘調査では、弥生時代中期の土坑、柱穴などの遺構が検出され、縄文時代晩期から古墳時代前期に渡る土器、石器など多くの遺物が出土している。この調査の結果、調査範囲内での出土土器相が、東から西へ向けて時代が新しくなることが把握された。つまり時代が移るに連れて標高の高い方へ遺跡が移動しているわけで、これは昭和49年の調査によって指摘された海面変化に伴う居住地の移動を追認する結果となった。

このように、居住地の移動という現象が発掘調査によって具体的に把握され、昭和57年の発掘調査を契機にして、それまで点で押さえられていた岩吉遺跡は、点と点が結ばれて第1～4遺跡を包括する広範囲な遺跡として認識されるに至った。現在では、岩吉集落を中心として、周辺の秋里、安長、南隈などを含む南北約1,300m、東西約800mの範囲を岩吉遺跡として遺跡分布図に記載している。

このような発掘調査の一方で、区画整理事業の進行や小規模な開発工事によって、いくつかの地点で遺物が出土している。いずれも排土ないし攪乱土中からの採集であり、出土状態、出土遺構などは不明な点が多い。しかし、出土地点がはっきりしていること、時代的にまとまった遺物が出土していることなどから、岩吉遺跡の範囲、集落の性格などを知るうえで貴重である。昭和57年調査の報告書(『鳥取市文化財報告書13』鳥取市遺跡調査団・鳥取市教育委員会 1983年)にも簡単な紹介をしたが、その後採集された遺物を簡単に紹介しておきたい。第4～6図に紹介する遺物は、個人の畑地の改良工事によって出土した遺物の一部である。出土位置は、岩吉遺跡のほぼ北東端にあたる秋里字大縄で、平成元年秋から翌年春にかけて採集された。

採集された遺物は、弥生中期から後期にかけての土器、石庖丁、そして玉作関係の遺物がある。玉作関係遺物には、擦り切り溝のある石材、管玉未製品、剝片、擦り切りに使用した刀状の石器などが見られる。玉の石材はすべて碧玉で、一部の原石には母石である火山灰礫凝灰岩が残っている。未製品には、荒割・形割・研磨・穿孔の各工程を示すものが採集されていて、前二者の工程では擦り切り技法が多用される。刀状の石器は、結晶片岩製である。岩吉遺跡からは、昭和51年の調査などでも玉作関係遺物が出土しており、遺跡の性格の一端を示す興味深い資料である。なお、本資料については後日詳細を紹介したい。

第3章 調査の結果

第1節 調査地の層序

調査地は東西16m、南北275mの細長い範囲である。調査にあたっては、東西方向を10mと6mに、南北方向を10mごとに区分し、西側に設定した10m×10mの調査単位をA区、東側の10m×6mの調査単位をB区とした。さらに各調査単位に北から南に向かって1～27の区番をつけ、A、B-1区～A、B-27区と呼称した。なお、調査区を横断する区画道路4号線部分(18区、19区)については調査範囲から除外した。

調査地の土層観察は、A、B区を区分する南北の基準ラインにほぼ平行する土手をA区西側に残し、その土手の断面をもって行なった。土層断面の記録は、区画道路部を除いたA-2区からA-27区まで行ない、A-2区～A-17区では土手の東壁面(第7図A～C)を、A-20区～A-27区では土手の西壁面(第7図D～F)について行なった。以下その層序の概略について記す。

調査地一帯は、昭和34年から昭和37年にかけて区画整理(千代水区画整理事業)が実施されており、現在では標高2.3m～2.6mの面で水田耕作が営まれている。水田の耕作土は厚さ20～25cmにわたってみられ、その下層には灰色、灰褐色ないし暗灰褐色の粘質土およびシルト系の土が厚さ15～20cmあまりにわたって整然と堆積している。耕作土を含めこれらの層には遺物は含まれておらず、これらの層の除去は重機を用いて行なった。

表土除去後の第21、24層(4区～5区)の上面と、第8、22層(2区～4区)から古墳時代中期の土器を伴う土坑SK-01、SK-05の他6基の土坑を検出した。また、第53層(7区～13区)、その下層の第54層(7区～8区)、および第162、177、195層(14区～17区)には古墳時代中期に比定される土師器が含まれており、この層から井戸1、土坑20、溝状遺構7、土器群1が検出された。これらの状況からみて、第8、21、22、24、53、54、162、177、195層などが古墳時代中期の包含層と考えられる。調査区の南側にあたる20～27区ではこの時期の遺構、遺物は認められなかった。

古墳時代中期包含層の下層にみられる第10、11、44層(2区～6区)、第57、58層(8区)、第86層(8区～11区)、86層の下層にあたる第100、106、111、113層、および第141、158、166層(A-12区)、第182層(15区～16区)が古式土師器を含む層である。このうち第44層の上面からSD-10を検出した。SD-10のすぐ北側における第44層の断面をみると、わずかに凸状を呈したのちその後下っていく状況がみられ、この部分がSD-10の岸辺にあたり、土手をなしていた可能性が窺われる。また、第10層の下層にあたる第33層の上面からSD-11を、さらに下層の第12層上面からは第1水田面の畦畔を検出した。12層上面からは古式土師器の甕が出土しており、この面が古墳時代前期に比定される水田面であったことがわかる。さらに第57、58、86、100、106、111、113層からは井戸1、土坑25、溝状遺構15が検出された。また、第141、158、166、182層からは完形に近い古式土師器の壺、甕、高杯などが散在する状態で含まれていた。

第141、158、166、182層をはじめ、12区～16区でみられる層序はかなり複雑で、暗灰褐色、灰色、淡灰色の砂質土、細砂、荒砂層が、南側、あるいは北側に傾斜しながら互層となって堆積しており、氾濫堆積の様相を呈している。これらの層からは遺構は検出されなかった。調査区南側の17区～27区でもこの時期の遺物、遺構はなく、古墳時代前期に比定される包含層は確認できなかった。

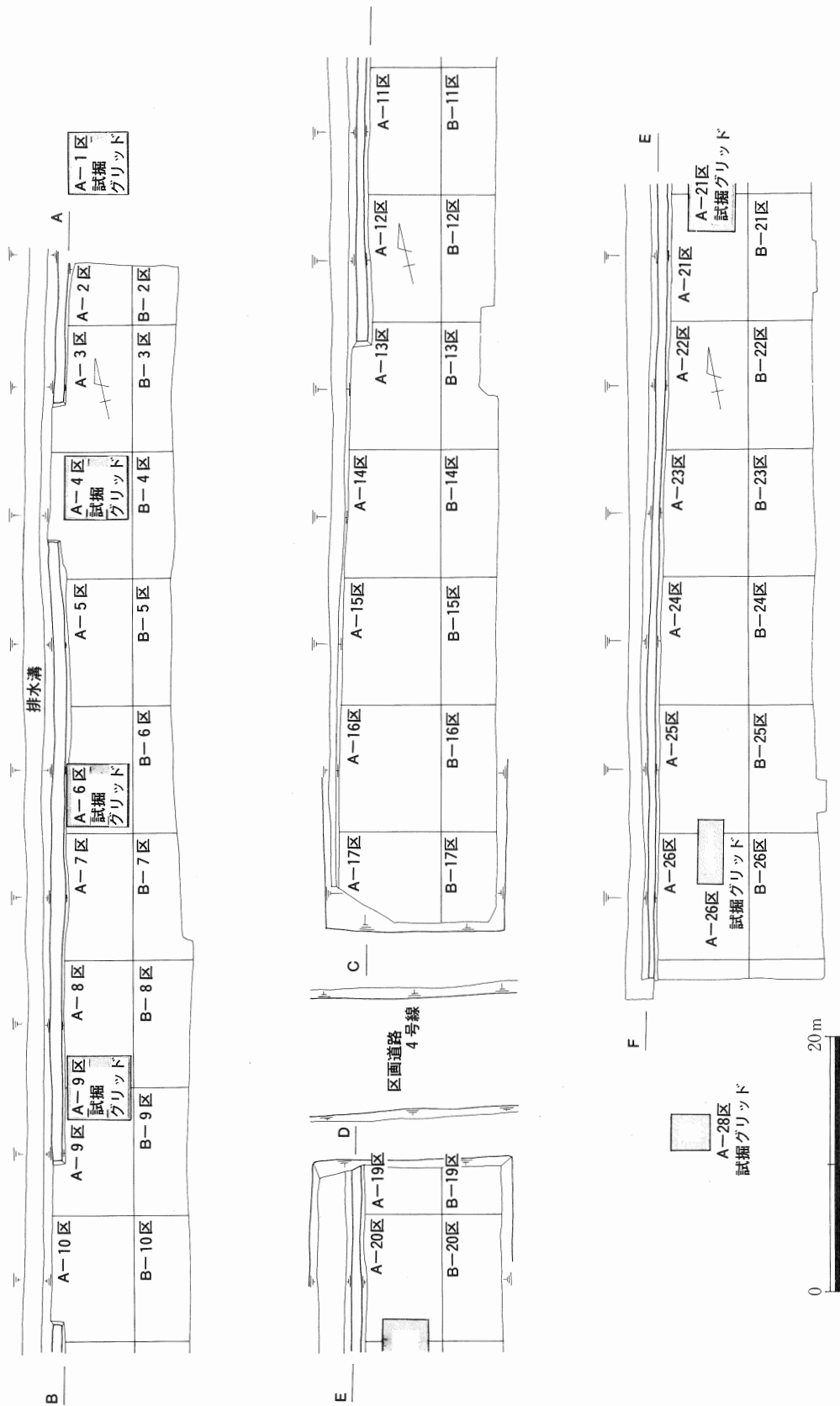
2区～10区における古墳時代前期包含層についてみると、用水路と考えられるSD-10を境にして、その北側と南側では遺構のありかたに差があるようである。SD-10の北側における古墳時代前期の基盤面は、南側に比べて全体に25～30cmあまり低くなっており、水田やそれに関わるとみられる溝が位置している。これに比べ、基盤面が高くなるSD-10の南側では、井戸や土器溜め状土坑をはじめ多数の土坑などが立地する特徴がみられる。

黒色粘土の第15層（2区～6区）上面から水田（第2水田面）の畦畔を検出した。この面からは弥生時代後期のものとみられる土器が出土している。また、第73層（8区）から土器群3、第87、78層（8区～9区）からSD-24、SD-25、第108層からSD-26、第116層（10区）から土器群4、第223層（21区～27区）からSD-29を検出した。これらの遺構からは、弥生時代後期に比定される壺、甕などの土器が出土した。この他にも第78、87層を中心に掘立柱建物や、土坑、溝状遺構などの遺構が数多く検出された。第77、101、102、107層にも同時期とみられる土器が含まれており、第73、77、78、87、101、102、107、108、116、223層が弥生時代後期包含層にあたるものと考えられる。

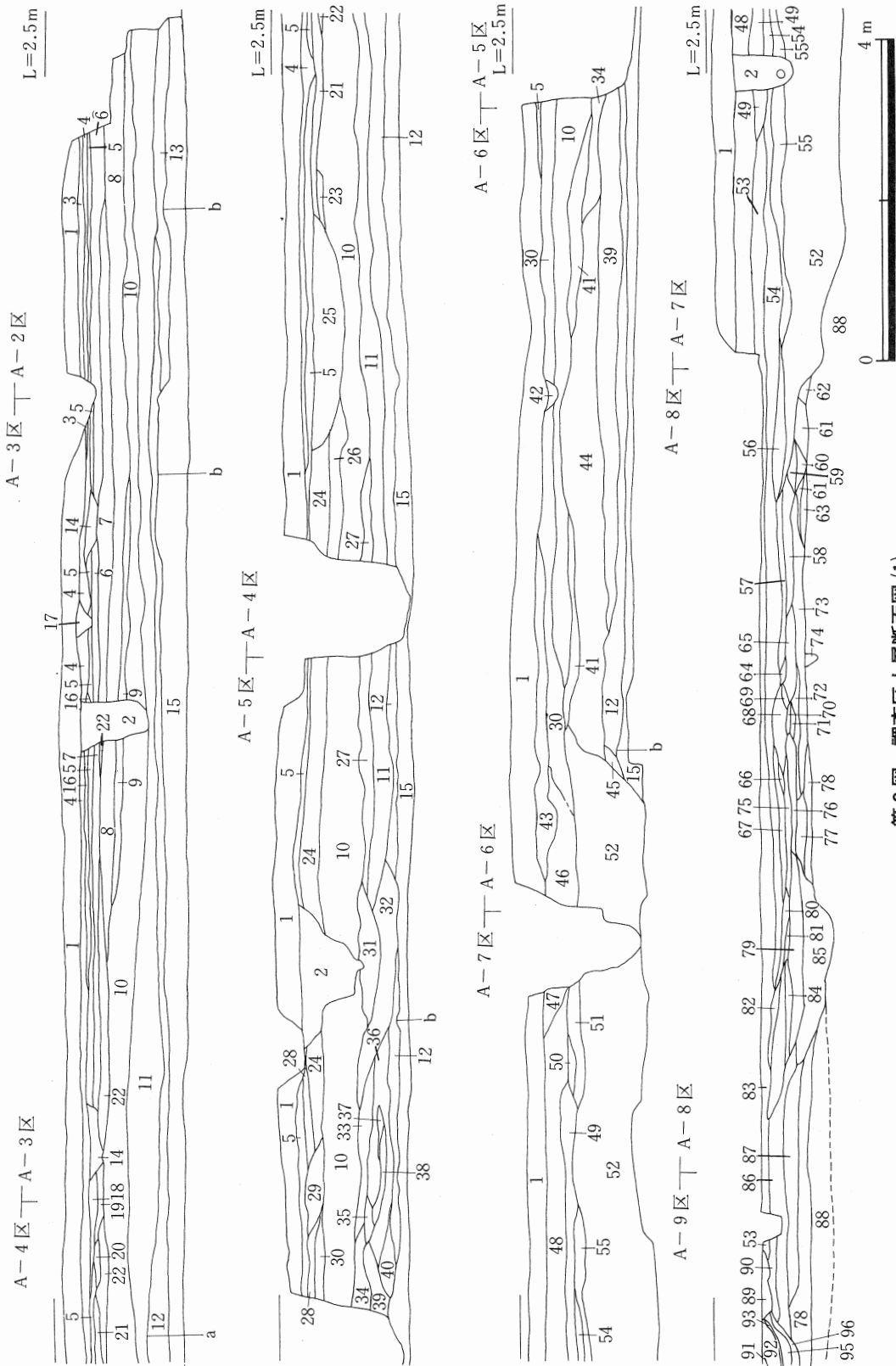
この時期の遺構の立地のしかたについてみると、古墳時代前期遺構のありかたと同様に、用水路と考えられるSD-10の北側に水田部が広がり、SD-10のすぐ南側の微高地に掘立柱建物や土坑などの遺構が集中するという特徴がみられる。

22区～27区でみられる第224、233、244、245、246、247、248層が弥生時代中期の遺物を含む層である。各層の堆積の仕方は整然としており、おおむね安定した地盤をなしていたことが窺われる。これらの層からは掘立柱建物4、土坑26、溝状遺構8が検出された。調査区の2区～21区ではこの時期の遺構、遺物はなく、弥生時代中期包含層は確認されなかった。

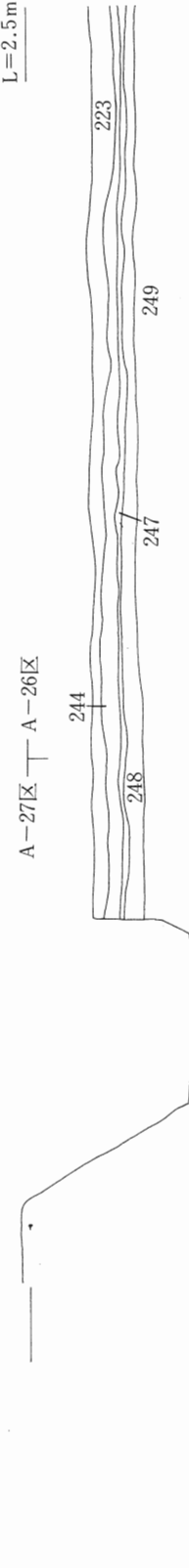
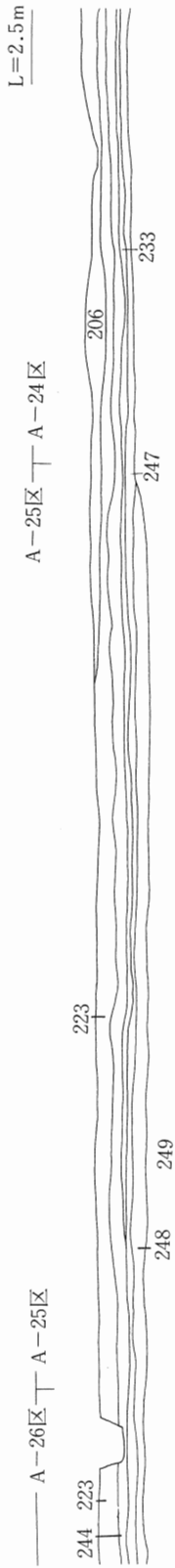
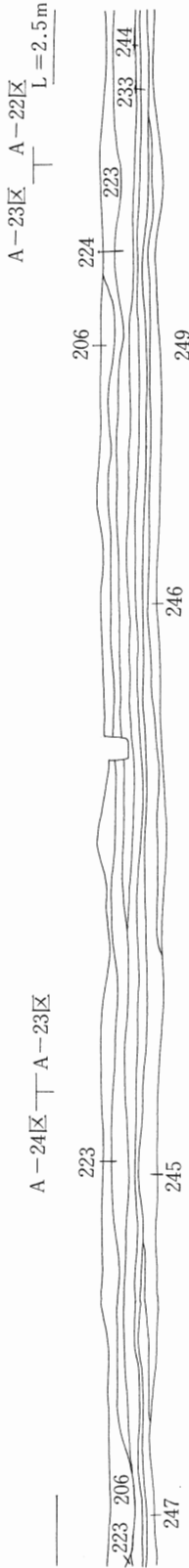
基盤層となるのは第15層（黒灰色粘土）、第88層（暗灰色粘土）、第249層（灰色粘土）である。その標高は、調査地北端で1m、南端では1.3mを測り、北側から南側へ向かって徐々に高さを増している。しかし、これらの粘土層が認められるのは、10区から北側と、22区から南側についてであり、この間の10区～22区では暗灰褐色、灰色、淡灰色の砂質土や細砂、荒砂が互層となって堆積している。この砂層については、A-15～16区とA-11～12区の西側を標高0m前後まで掘削して土層観察をした。標高1m前後から下層はおおむね細砂と荒砂が堆積しており、これらの砂層はさらに下方につづいている。砂層内には植物遺体が見られるが土器などの遺物は認められなかった。



第7図 調査区設定図



第8图 調査区土層断面図(1)



- | | | | |
|-------------------------|------------------|------------|-------------------|
| 195 暗褐色粘質土 | 200 暗灰色シルト(やや砂質) | 237 暗褐色粘質土 | 244 暗褐色粘質土(炭片を含む) |
| 196 暗褐色粘質土 | 201 暗褐色粘質土 | 238 暗褐色粘質土 | 245 暗褐色粘質土(炭片を含む) |
| 197 暗褐色粘質土 | 202 暗褐色粘質土 | 239 暗褐色粘質土 | 246 暗褐色粘質土 |
| 198 暗褐色粘質土 | 203 暗褐色粘質土 | 240 暗褐色粘質土 | 247 暗褐色粘質土 |
| 199 暗褐色粘質土 | 204 暗褐色粘質土 | 241 暗褐色粘質土 | 248 暗褐色粘質土 |
| 200 暗褐色粘質土(暗灰色シルトを多く含む) | 205 暗褐色粘質土 | 242 暗褐色粘質土 | 249 暗褐色粘質土 |
| 201 暗褐色粘質土 | 206 暗褐色粘質土 | 243 暗褐色粘質土 | 250 暗褐色粘質土 |
| 202 暗褐色粘質土 | 207 暗褐色粘質土 | 244 暗褐色粘質土 | |
| 203 暗褐色粘質土 | 208 暗褐色粘質土 | 245 暗褐色粘質土 | |
| 204 暗褐色粘質土 | 209 暗褐色粘質土 | 246 暗褐色粘質土 | |
| 205 暗褐色粘質土 | 210 暗褐色粘質土 | 247 暗褐色粘質土 | |
| 206 暗褐色粘質土 | 211 暗褐色粘質土 | 248 暗褐色粘質土 | |
| 207 暗褐色粘質土 | 212 暗褐色粘質土 | 249 暗褐色粘質土 | |
| 208 暗褐色粘質土 | 213 暗褐色粘質土 | | |
| | 214 暗褐色粘質土 | | |
| | 215 暗褐色粘質土 | | |
| | 216 暗褐色粘質土 | | |
| | 217 暗褐色粘質土 | | |
| | 218 暗褐色粘質土 | | |
| | 219 暗褐色粘質土 | | |
| | 220 暗褐色粘質土 | | |
| | 221 S D 2 9 | | |
| | 222 暗褐色粘質土 | | |
| | 223 暗褐色粘質土 | | |
| | 224 暗褐色粘質土 | | |
| | 225 暗褐色粘質土 | | |
| | 226 暗褐色粘質土 | | |
| | 227 暗褐色粘質土 | | |
| | 228 暗褐色粘質土 | | |
| | 229 暗褐色粘質土 | | |
| | 230 暗褐色粘質土 | | |
| | 231 暗褐色粘質土 | | |
| | 232 暗褐色粘質土 | | |
| | 233 暗褐色粘質土 | | |
| | 234 暗褐色粘質土 | | |
| | 235 暗褐色粘質土 | | |
| | 236 暗褐色粘質土 | | |
| | 237 暗褐色粘質土 | | |
| | 238 暗褐色粘質土 | | |
| | 239 暗褐色粘質土 | | |
| | 240 暗褐色粘質土 | | |
| | 241 暗褐色粘質土 | | |
| | 242 暗褐色粘質土 | | |
| | 243 暗褐色粘質土 | | |
| | 244 暗褐色粘質土 | | |
| | 245 暗褐色粘質土 | | |
| | 246 暗褐色粘質土 | | |
| | 247 暗褐色粘質土 | | |
| | 248 暗褐色粘質土 | | |
| | 249 暗褐色粘質土 | | |
| | 250 暗褐色粘質土 | | |



第11図 調査区土層断面図(4)

第2節 歴史時代の遺構と遺物

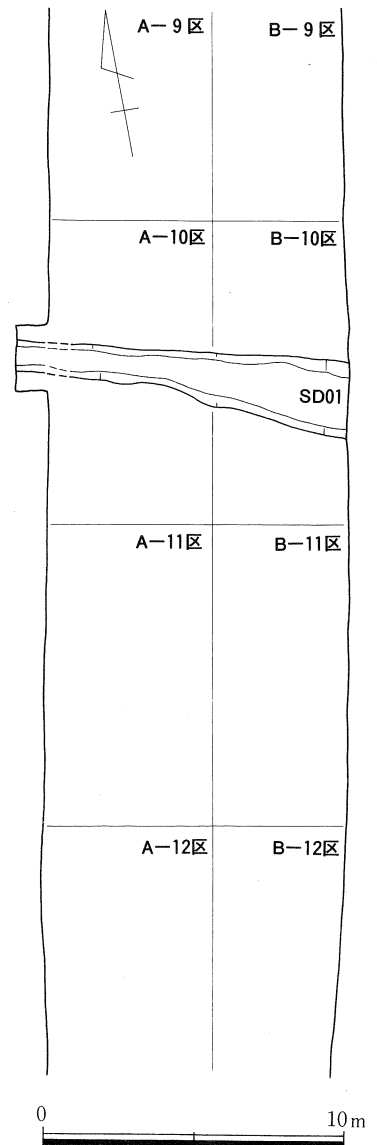
歴史時代の遺構として、A・B-10区から調査区を東西に横切るSD-01が検出された。溝内には杭列が確認され、陶磁器片、角礫などが出土している。

1. 溝状遺構

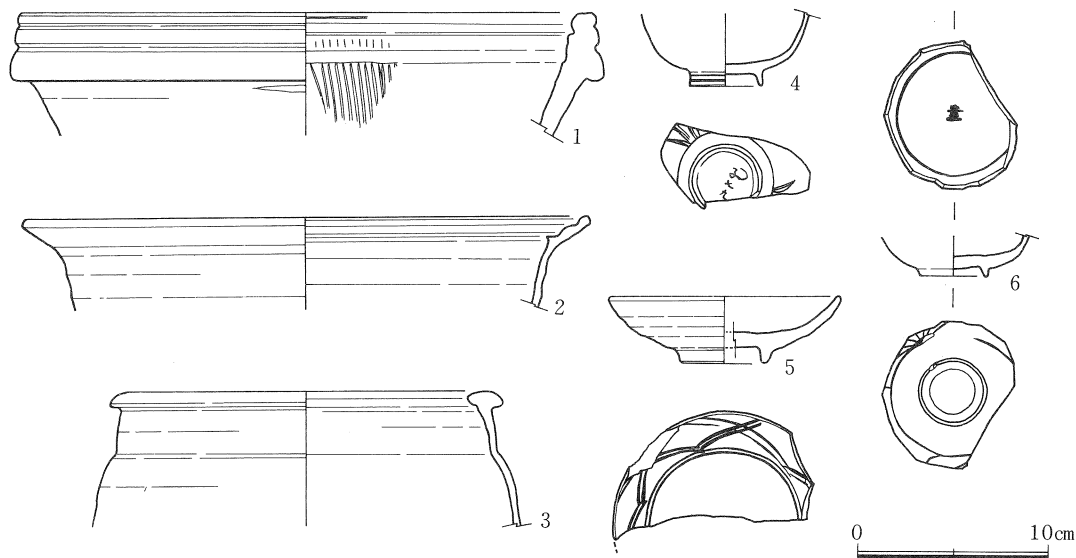
SD-01 (付図2)

A-10区とB-10区にまたがり、調査区を東西に横切る。後世の水田用暗渠によって2ヶ所をほぼ直交して切られるが、西側でSD-04の一部を切る。西側から東側にかけて徐々に幅が広がりながらもほぼまっすぐに伸び、残存長11.08m、最大幅2.44m、深さ0.22mを測る。主軸は、N-71°-Wを向く。断面形は浅い碗状であり、埋土は5層に分かれるが粘土混じりの砂質土または砂が基調となり、上層の第1・2層には鉄分を含む。底面の標高は東端で1.91m、西端で1.87mで4cmの標高差があるものの底面は若干の凹凸がみられ流水方向は不明である。標高が最も低くなるのは、東側でみられる木組の取水升付近と西側の堰近くで、それぞれ1.8m、1.82mである。取水升は、若干崩れているものの、本来は木を四角に組んだものであったと想定される。東側に柄を切った杭(付図a)を打ち、それに端を突起状に加工した(付図b)をかませている。また、杭列に横木をかませたり、板を直接床に打ち込んだりして溝の中央部分に取水施設を設けている。西側の堰は、(付図a)と同様な柄を切った杭が溝の両端に打ち込まれており、横木はみられなかった。溝にはこれらの施設の他に杭列が壁に沿って並び、さらに杭に横木がみられる部分がある。しかし、溝の東側では杭列が壁とは離れた状態で検出されており、ある一時期の溝の幅を示すものと推測される。

溝からは、多くの土師器片、須恵器片、陶磁器片、松の実、多くの角礫・円礫が出土している。遺物は小片が多く、主なものを図化した。(1)は素焼きの摺鉢で、木組の取水升近くの底面からかなり浮いた位置で出土している。内面に9条単位の櫛描きによるおろし目がみられ、小片ではあるがおろし目は密に施されたものと想定される。(2)は茶褐色、(3)は濃い暗茶褐色の釉をそれぞれ施し、断面はどちらも淡灰色である。(4~6)はいずれも白地に藍色で染め付け



第12図 歴史時代遺構配置図



第13図 SD-01出土遺物実測図

された磁器である。(4)は焼成後底面に朱色で“子七九”と記され、(6)は内面に“寿”の吉祥文字が染め付けされる。様々な時期の遺物が出土しているが、多くは新しい要素をもつ陶磁器であり、耕作土を除去した段階で検出され、昭和34～37年に実施された千代水土地改良工事に伴う水田用暗渠によって溝の一部を切られていることから、近世もしくは近代の時期を与えておきたい。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

A・B-2～17区にかけて古墳時代の遺構を検出し、おおまかに後期・中期・前期の3面が確認された。各時期の遺構数は次のとおりである。

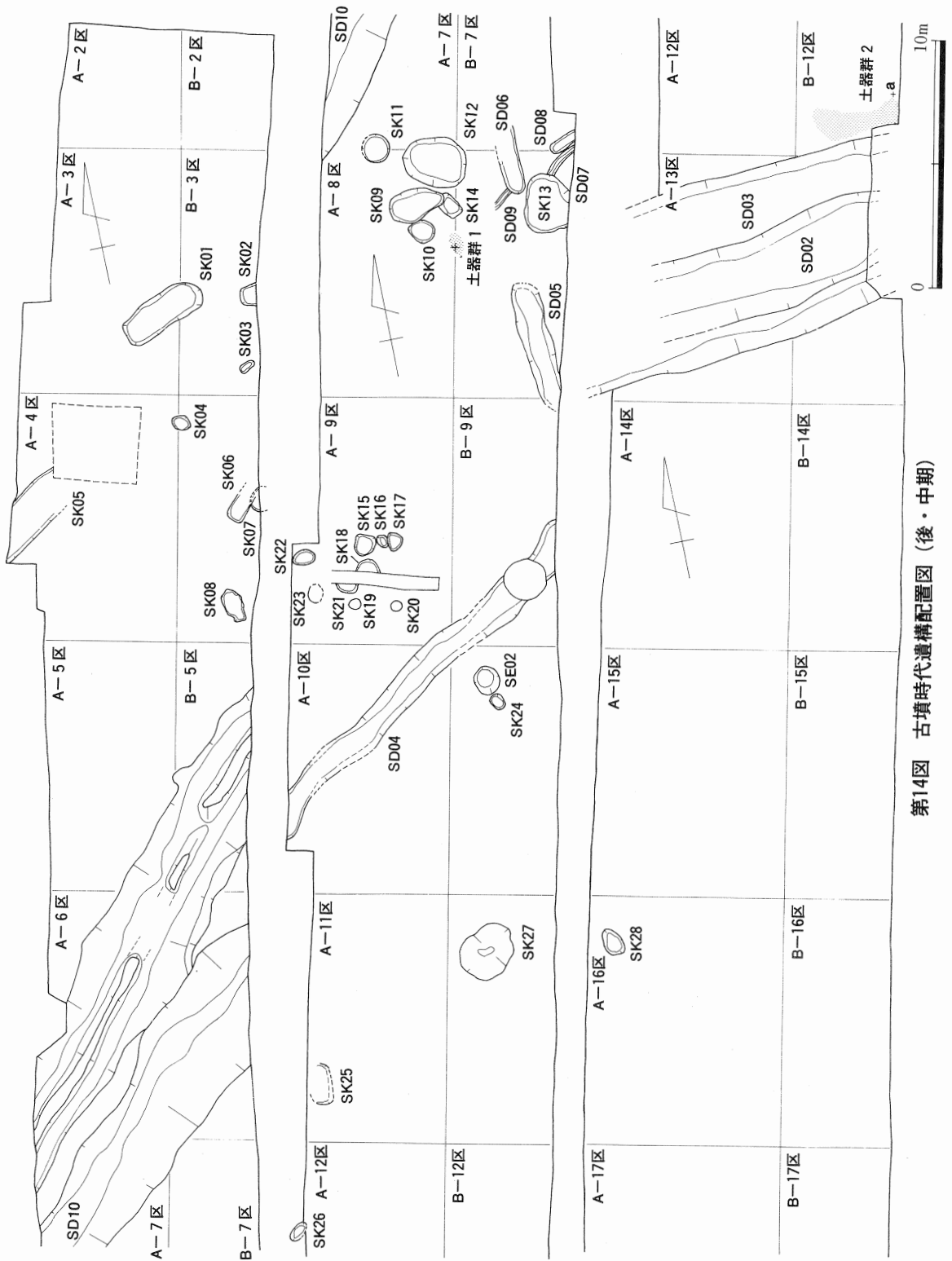
後期：溝状遺構1 中期：井戸1、土坑28、溝状遺構8、土器群2

前期：水田遺構1、井戸2、土坑19、溝状遺構11

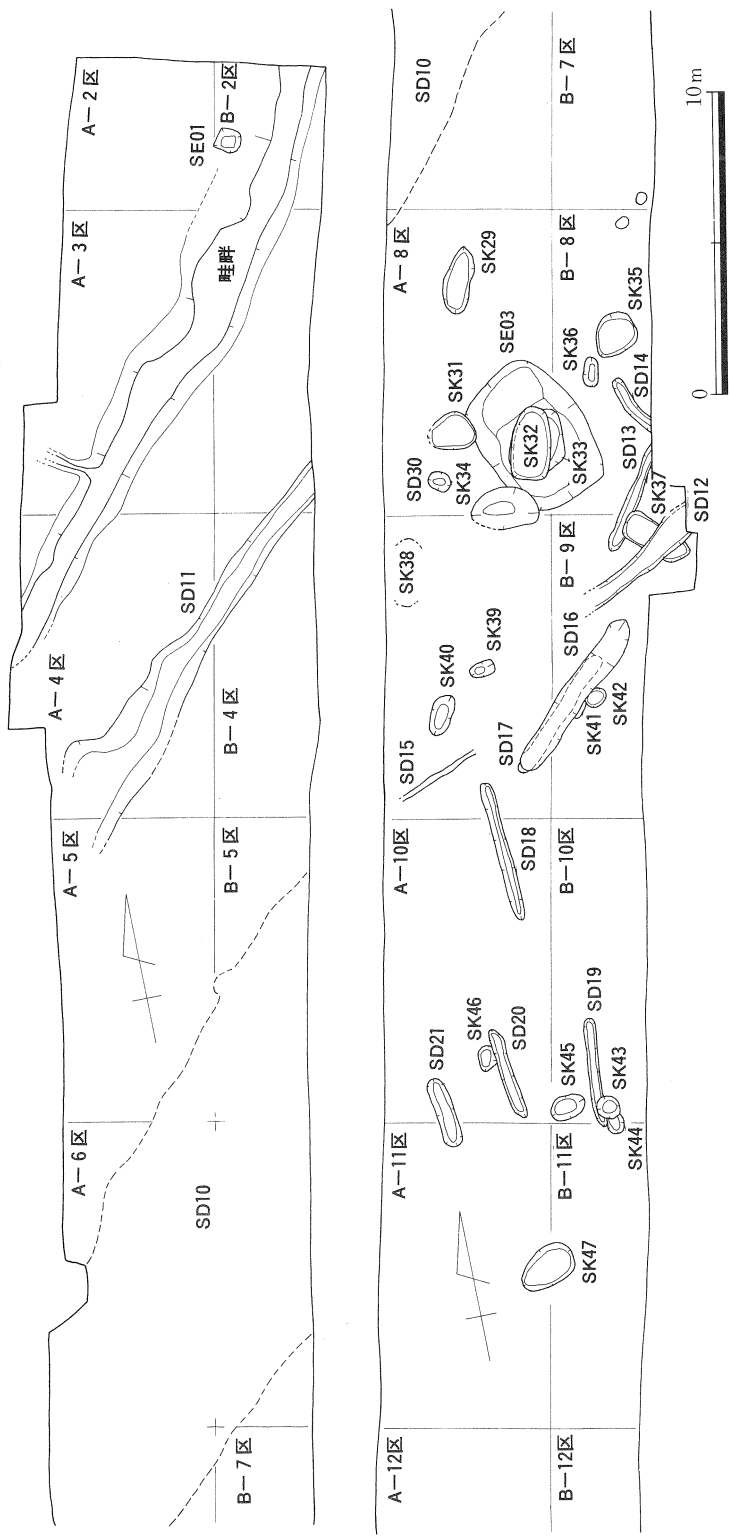
A・B-5～7区にかけて大規模な溝SD-10が、また、A・B-13区には同じく規模の大きな溝SD-02・03が調査区を斜めに横切る。SD-10以北には水田面がひろがり、土坑や小規模な溝は、SD-10を挟んだ一帯、A・B-2～4区とA・B-8～11区に集中する。

井戸、土坑、溝状遺構、土器群から多くの土器、石製品が検出されたが、SD-10から畿内系・東海系の土器が出土している。また、SK-27、SE-02・03、SD-02・03・10を中心として多くの木製品が出土しており、特に、SE-02出土の机やSD-03出土の刀・船を模造した木製品などが注目される。その他に、SD-10から銅鍬や鋳滓状遺物が出土している。

なお、SD-10は中期の面で検出されたが、本来は複数の溝であったものと考えられ、その初源は弥生時代後期に遡る。



第14図 古墳時代遺構配置図 (後・中期)



第15図 古墳時代遺構配置図 (前期)

1. 水田遺構

第1水田面 (付図39)

A・B-2～4区一帯に広がる。A-4区の北側に設定した試掘坑の土層試料をもとに、プラント・オパール定量分析を依頼した結果、近世を含めて3時代以上の水田が存在することが示唆されていた。最下層の遺構面が水田面であること、その上の層にも別の水田面が存在することが明らかとなっていたため、第1面目の第1水田面に該当する層を精査した結果、南西-北東方向に軸をもつ農道状の大畦を検出した。検出長21.16m、上端幅1.36m、下端幅2.40mを測り、主軸はN-42°-Eを向く。大畦は幅の狭い部分や広い部分が若干みられ、B-2区から北部は全体的に幅広となり北寄りに屈曲する傾向がみられる。水田面からの高さは25cm前後で、断面は台形を呈する。A-3区の南西部では、下端幅40cm程の畦が西方向へ伸びる。水田を直接区画するような小畦はつかめなかったが、第1水田面にあたるやや粘質の黒灰色シルトの土壌は、南はA-5区の間中部あたりまで広がる。また、プラント・オパール定量分析の結果から、A-1区で第1水田と同時期であろうと考えられる水田の存在が明らかとなっており、北はA-1区まで広がる可能性が大きい。上層に堆積した層から古墳時代前期の壺が、さらに下層に広がる第2水田面上層から内外面ヨコナデ調整の複合口縁の甕が出土していることから、古墳時代前期の年代が与えられる。なお、大畦の南側4.5mにはほぼ軸を同じくして伸びるSD-11は、第1水田面より上層から掘り込まれた溝である。

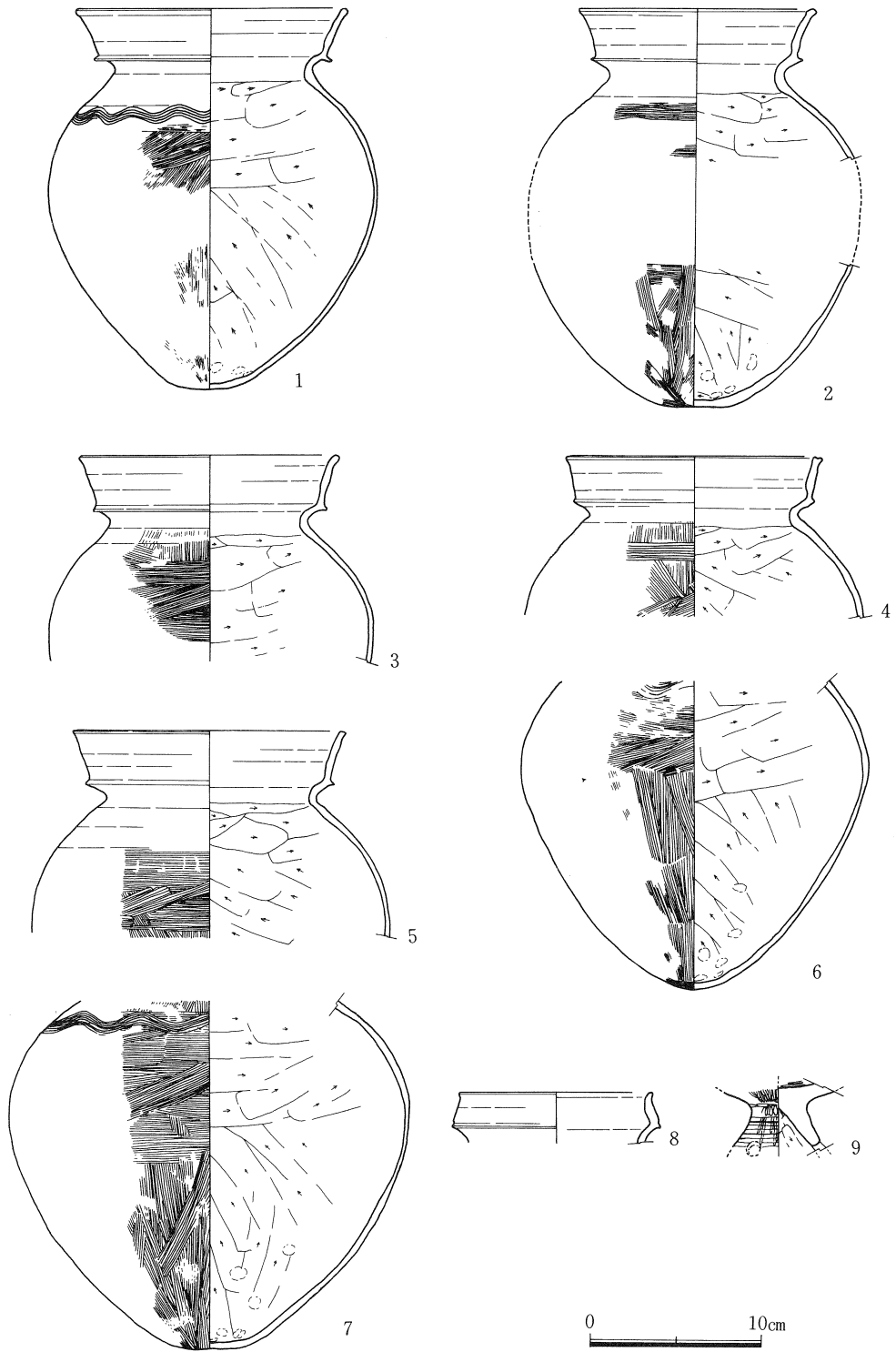
2. 井戸

SE-01 (付図41)

B-2区の西端に位置する。第2水田面が広がる層で検出したが、出土土器から、本来はさらに上層から掘り込まれた井戸であることが判明した。第1水田面の南西-北東方向に伸びる大畦の北側ふもと部分にあたり、標高0.98mの検出面で77.5cm×88.0cmの不整形な隅丸方形を呈する。検出面から不整形ではあるが断面逆台形に25cm程下がったところで面をもち、さらにその面の中央部に径20cmの円形で深さ5cm弱、断面逆台形の掘り込みがみられた。この掘り込みは湧水層まで達せず、底面は標高0.65mである。

井戸の中心部やや東寄りで、土器が何重にも重なって出土する部分がみられた。SE-01を検出した段階で上部を若干掘削し、その際に土器も一緒に掘り上げていることから、土器の重なりの上限はさらに上であったものと思われる。土器は外面を上に向けているものも多少みられたがほとんど内面が上に向けた状態であった。また、上層では比較的大きめの破片で、下層になるにつれて破片は小さくなっていき、2～3cm角程度の小片にそろえたような状況で出土している。下層では、この土器小片と、長さ2～3cm・幅1～2cm程度の比較的大きさのそろった円礫が混じり合う部分もみられ、その下は円礫ばかりが敷きつめられたような状態であった。その下に径20cm・深さ5cmばかりの円形の掘り込みがあたる。

出土した土器は、壺もしくは甕の内傾する口縁部片(8)と高杯の杯底部(9)以外はすべて甕



第16图 SE-01出土遺物実測図

である。甕は、全体が復元できなかったものもあり、正確な個体数は不明瞭であるが、底部から推定すると15個体が確認された。口縁部は11個体が確認できたが、小片だけのものもあり、ほぼ完形となる甕は4～5個体であろうと推測される。細かな破片となっていたため精密な出土状況は確認できなかったが、上部で出土する甕や下部で出土する甕などある程度の層序的なまとまりが認められた。図化したのは一部であるが、その中では、(3～5)は比較的上層で、上～中間層にかけて(1)が、(6・7)は中間層、(2)は下層で集中して出土している。出土状態から、土器は一括して人工的に積み重ねられたものと思われ、土器の形式差もさほど認め難い。基本的には(1)のような形態を示す。口縁部は外反し、下端部の稜をつまみ出す。体部倒卵形で底部はわずかな平底である。肩部に平行沈線もしくは波状文を施す。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面は頸部縦ハケ目後ヨコナデ、体部下半縦ハケ目後最大胴部周辺は横ハケ目である。内面は、底部から上方向に、肩部あたりから横方向の頸部以下ヘラ削りである。底部周辺に指頭圧痕が認められる。底面を除いてその周辺部に多量の煤が付着するものが多い。形態的には、(7)のように体部が張るものや、肩部に平行沈線や波状文のみられないもの(3・5)があり、口縁部にもそれぞれ若干の形態差が認められる。すなわち、口縁上端部は角張り気味ではあるが丸いもの(1・3)、わずかながら面をなすもの(5)、内傾する面をもつもの(2)、端部の外側をつまんでヨコナデすることで端部がM字状をなすもの(4)がみられる。また、(5)の体部には回転を利用した横ハケ目が施される。高杯(9)は杯部内面ヘラ磨き、外面ヘラ磨き後、脚部に回転を利用した櫛状工具による沈線がカキ目状にめぐる。なお、脚部には3方向の円形の透かし孔があったものと思われる。土器、円礫の他に薄い板状の小木片が1点出土している。なお、これらの土器・円礫は人為的に積み重ねられたものと思われ、本来は土器と円礫の周りを井戸枠が囲み、井戸に伴う下層のろ過装置であったか、井戸廃棄後の祭祀行為に伴うものであるのかの2通りが考えられる。また、第1水田の検出面から掘り込まれたものであれば、井戸は現況より約20cm深くなるに過ぎず、さらに上層から掘り込まれた可能性も考えられる。井戸の規模や南に25m離れた地点にSD-10が位置することから、農業用の井戸とは考え難く、何らかの性格づけをもった施設であったものと思われる。

SE-02 (付図3)

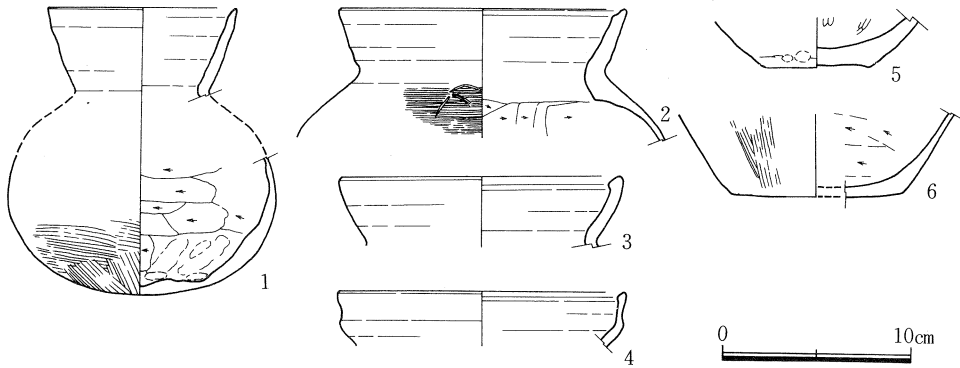
B-10区の北西部に位置する。北側に北東-南西方向に軸をとるSD-04が、南側にSK-24が隣接する。出土土器から考えて掘り込まれた面はさらに上層であったと考えられるが、検出面での掘り方は、長さ109cm、幅98cmの不整円形を呈する。検出面から徐々にすぼまり底面から上部70cmあたりでから直線的に底部へ続く。底面は長軸72cm、短軸64cmの不整円形で、検出面からの深さは121cmである。底面の高さは標高0.54m前後で、湧水層である灰色細砂層に達しており、豊富な水量の湧き水が調査時にもみられた。井戸中央部やや南寄りに木組施設が残存し、縦板(12・13)と机の転用板(7)、両側面に抉りのみられる板材(10)が組み合わさって、底面三角形の井筒を形成している。また、底面から60cm上層で机の脚部(8)と脚部と推定される板(9)が出

土しており、出土状態から、机の天板と同様に井戸枠か、もしくは井戸の上部構造的なものに使用されものと考えられる。井筒内からは、外面赤彩された壺の底部（1）が底から14cm上層で出土しており、井戸枠の外側埋土からも（1）とほぼ同時期のものと思われる土器等が出土している。すなわち、甕（2～4）は井戸枠外側というよりむしろ側壁の下層付近で、底部（5）は井戸枠外側埋土の10層上部で、また、窯壁の一部と思われる長さ4cm弱・幅3cmの小片が井戸枠外側埋土中に含まれていた。その他の遺物としては、検出面近くの上層で、土器小片、板材（11）や角材、自然石がみられ、埋土中間層から甕等の土器片や軽石、また、弥生時代の層を掘り込んで作られているため、埋土中に弥生土器片が多くみられた。なお、壺（1）の口縁部と、内面に水銀朱が付着していた底部（6）は埋土中の出土である。

壺（1）は底部と口縁部は別々の出土であり、接合はしないものの、井戸から出土した土器に小型の壺の破片がこの2点しかみられなかったことや、胎土、色調、焼成から考えて同一個体と思われる。口縁部は内外面ハケ目後ヨコナデ調整、体底部は外面粗いハケ目、内面は粗いヘラ削りで器厚は均一でなく、底部はヘラ削りが及ばず指ナデ調整である。内面はヘラ削り時の粘土塊が所々に付着している。口縁部内外面および体部外面は赤彩され、底面を除いて外面に煤が付着する。甕の口縁部（2～4）はそれぞれ異なった形態ではあるが、（2・3）はくの字状口縁で（3・4）は口縁端部内面が肥厚する。（2～4）は口縁部内外面ヨコナデ調整であるが、ヨコナデ前の横ハケ目が内面に認められる。（2）は頸～肩部に回転を利用した横ハケ目が施される。また、（2）には肩部外面にヘラ描き文の一部が認められる。底部（5・6）は平底であるが、（5）は内面にヘラ磨きが認められ、通常みられる壺・甕の底部とは考え難い。（6）は内面に水銀朱と推測される顔料が付着しており、外面には認められなかったことから赤色顔料の貯蔵用として用いられていた壺もしくは甕の底部と考えられる。なお、（6）の外面には煤が付着している。

机の天板（7）はほぼ中央部で表裏面から鑿状の工具を打ち込んで（a）と（b）に切断し、井戸枠に転用されていた。（7）は長さ50.8cm、幅95.4cm、厚さは中央部で1.4cm、柄穴周辺で3.0cmを測る。表面は井筒側を向いていたため若干の変色がみられるが、平坦に加工する。裏面は、長軸方向で9.6cm、短軸方向で6.8cmの幅に縁に向かって反りを入れ、中央部が台形の高まりをもつよう加工するが、柄穴から中央部にかけてはなだらかな凹状を呈する。幅2cm前後で断面皿状で溝状の加工痕が木目に沿って裏面全体に認められる。両端には、短軸に沿って脚部を接合するための柄穴が全体をはつた後袋状に削り抜かれ、互い方向から横向きにすべらせて挿入した脚部の一部が柄穴内に残る。脚部には固定するための楔が打ち込まれ、柄穴内の隙間にも木片が挿入されている。また、（b）と接合する脚部の一部（8）が井戸の中間層で出土しており、重なって出土した板（9）も接合はしないもののその形状から脚部の一部と思われる。（8・9）は下向きにわずかに広がる傾向がみられる。（8）は下部の中央に幅2.4cmの加工面が認められ、その両端は割れた面であることから本来脚部には長方形の透かし孔があったものと推測される。

(10) は丸太の外周部を加工した転用材で、両側面に抉りを、下端部に柄穴をもち、湾曲する面を内に向けて柄穴のある方を下にして出土した。(11) は井戸上層で出土した破材で、明瞭な加工痕は認められなかった。(12・13) は井戸枠に使用されていた縦板で、いずれも底面を向いていた方を下にして図化している。(12) の下部は鋸状の工具で側面から、(12) の上部と (13) の下部は鑿状の工具で表裏両面から切断される。表裏全面に手斧で縦方向に削った痕がみられ、側面の一方は割れ面であるが一方は加工面であり、同一の板材であった可能性が大きい。いずれも割れのみられない面を井筒の内側にしている。

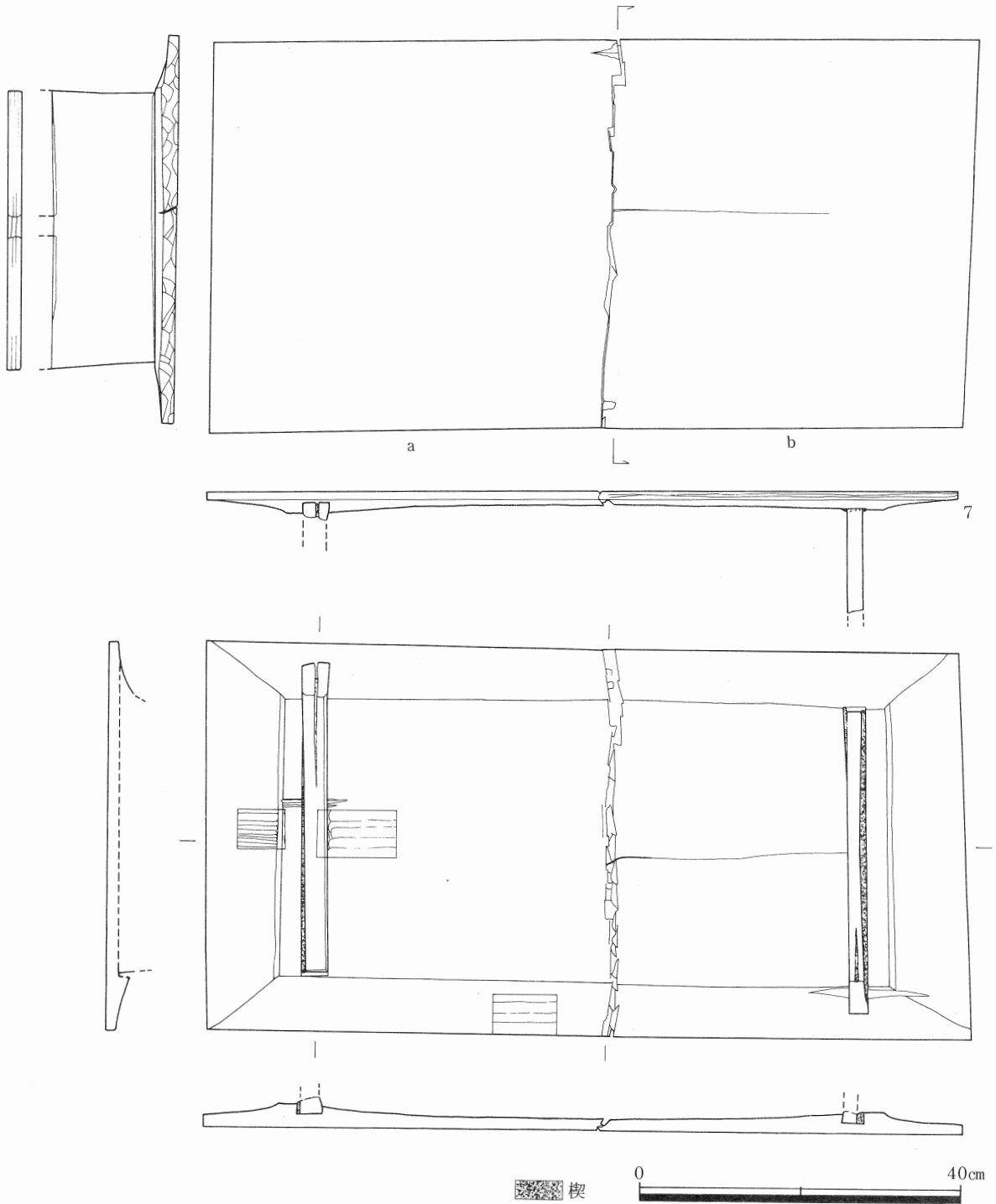


第17図 SE-02出土遺物実測図(1)

SE-03 (付図40)

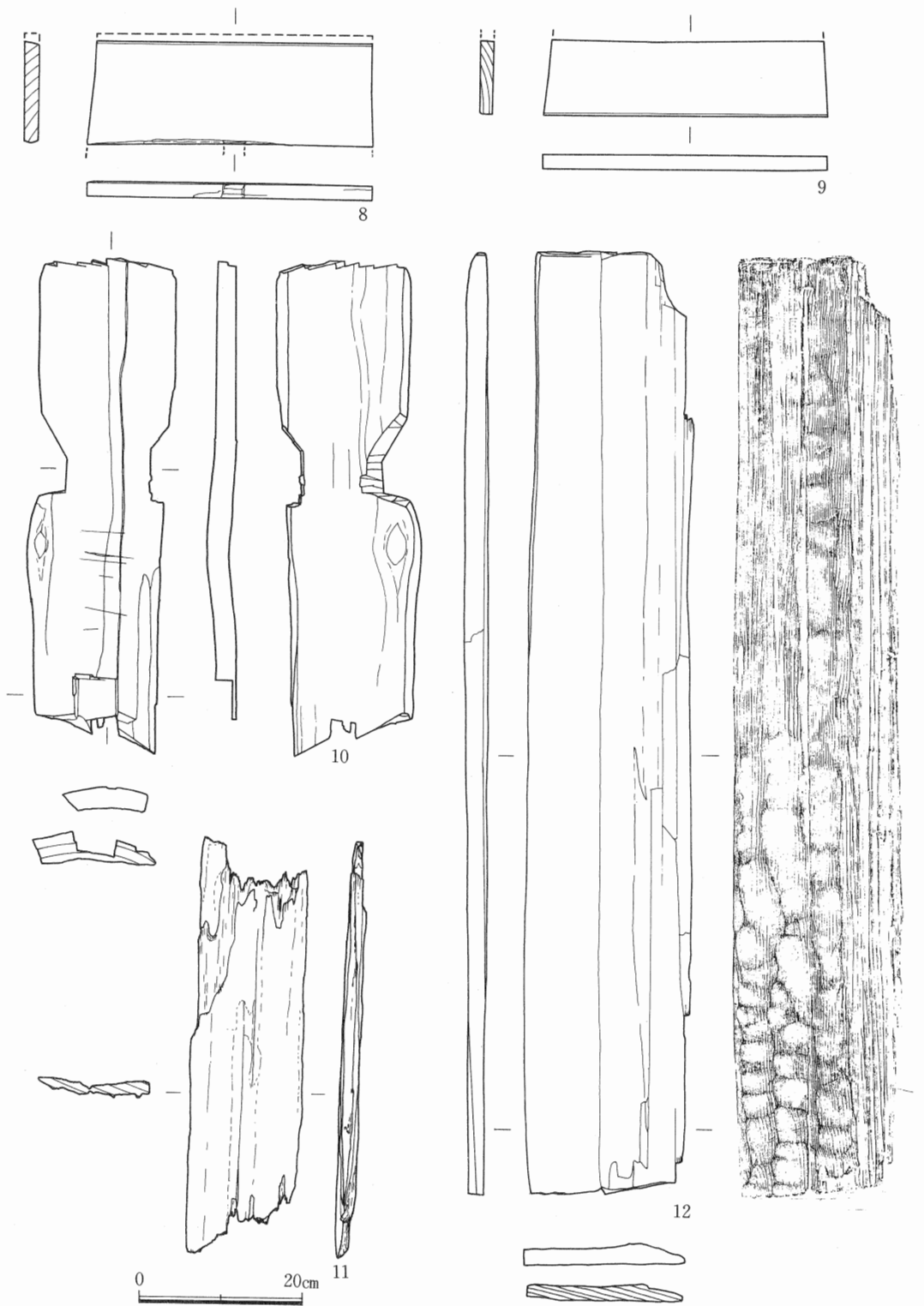
A-8区とB-8区の境界部に位置する。上層にSK-33とさらにその上層にはSK-32が井戸のほぼ中心部に重なる。検出面での規模は長さ4.76m、幅3.46mを測り、隅丸長方形を呈する。80cm程掘り下がった面からさらに径2.2mの円形の井筒が掘り込まれ、約1.5mの深さがある。底面は1.48m×1.44mの不整形な隅丸方形で、検出面からの深さは2.26mを測り、標高-0.62mと湧水層に達する。井筒の上面には、木材と大小の自然石を組んだ施設が確認された。70cm大程の円礫2個を木材の台にした部分もみられたが、肩部の周囲に長さ1.2~1.5mの板材や角材10本を横向きにして円形に組み、その上に大小の角礫や円礫を積み上げている。南西部は崩れがみられ、(7)は井筒の中央部あたりまで張り出しているが、おそらく崩れによるものと思われる。井筒の底面やや北寄りから、ほぼ形を留めた状態の甕2個(1・4)と、甕の底部(3)、木片が出土しており、2個の完形の甕は井戸の祭祀行為に伴って廃棄されたものと考えられる。また、検出面から一段掘り込まれた平坦面の北端部に、大小の角礫が4個出土している。

(1) はかすかな平底をもつ体部倒卵形の甕で、(4) は平底の甕である。(1・4) はともに口縁端部を外方につまんでヨコナデすることで端部は面をもつ。肩部外面に回転を利用したハケ目が認められるが口縁部を中心としたヨコナデが顕著なため(1)では残らず、(4)は肩部全体に認められる。後に肩部に(1)は8条の平行沈線、(4)はハケ目工具による平行沈線と連続刺突文

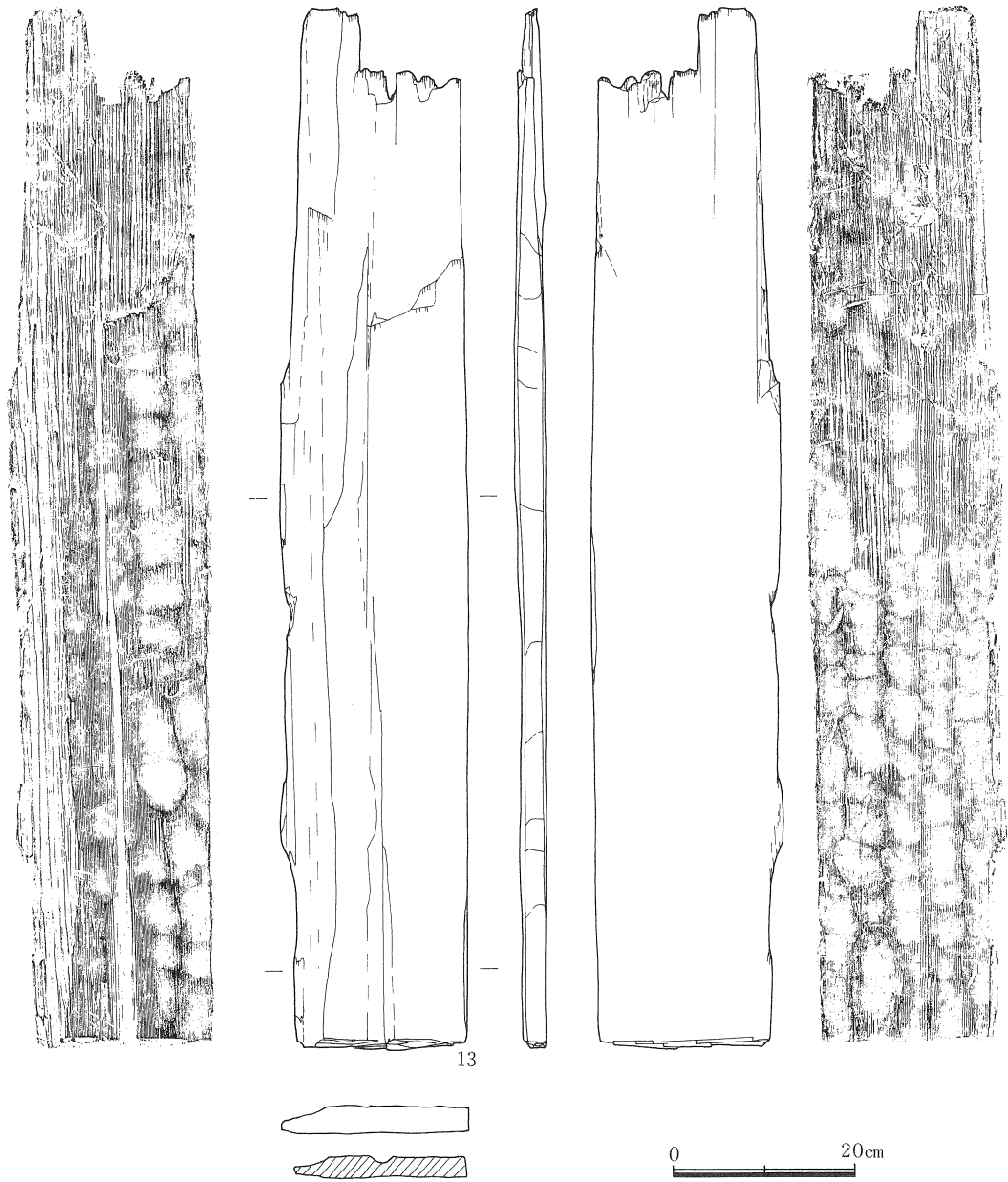


第18図 SE-02出土遺物実測図(2)

を施す。(3)は(1)の下に重なって出土した底部で、胎土・色調から同一個体と思われる口縁部(2)は井筒の埋土下層の出土である。(1・4)と同様に口縁端部に面をもち、肩部外面に回



第19图 SE-02出土遺物実測図(3)



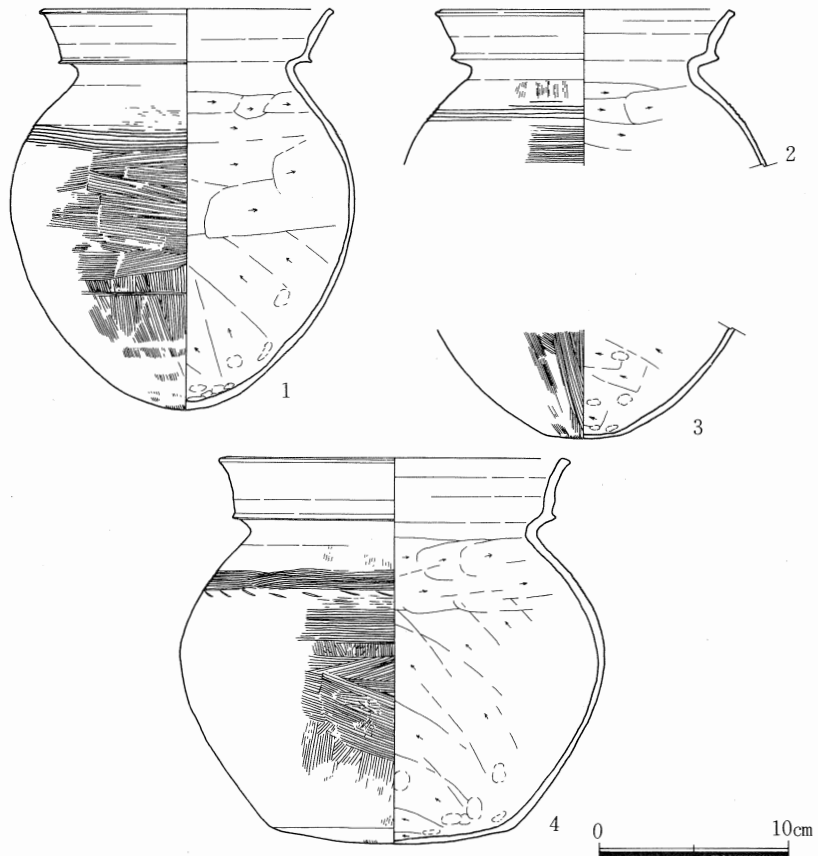
第20図 SE-02出土遺物実測図(4)

転を利用したと思われるハケ目がみられ、後に肩部に平行沈線を施し、口縁部を中心としてヨコナデが顕著である。底体部(3)はわずかな平底で、(1・4)と同様に内面底部周辺に指頭圧痕が残る。土器はこの他に、井戸が弥生時代の層を掘り込んで作られているため、埋土中から多くの弥生土器片が出土している。

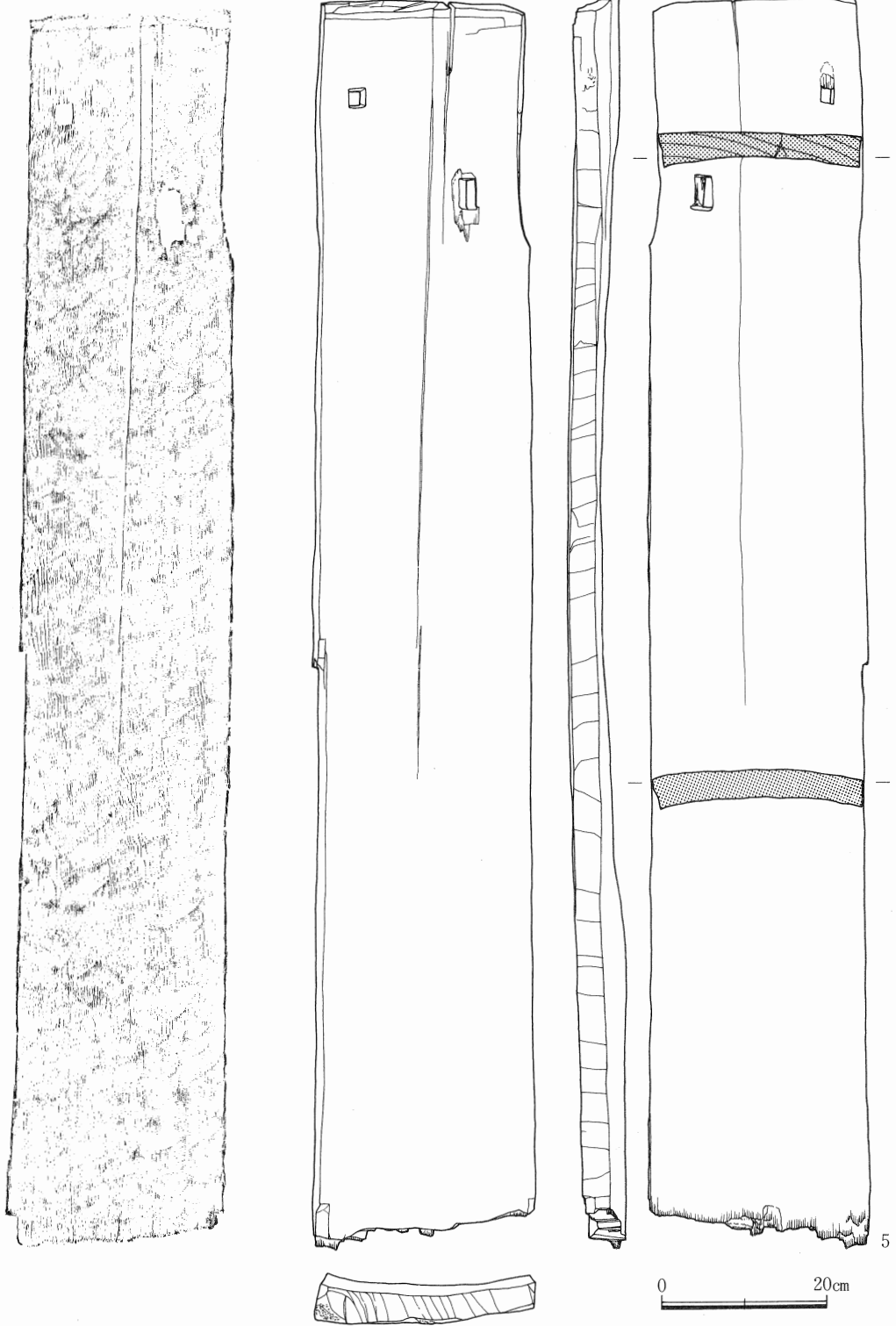
井戸枠に使用されていた10本の木材のうち、特徴的なものについて図化した。(5)は、10本の木材の中で1本だけ長く異質な材である。外面は腐食気味で不明であるが、湾曲する内面には手斧

状の工具を用いた鱗状の工具痕が全面に認められる。これらの調整後、上部に方形と長方形の柄穴が穿たれる。一方の側面は割れ面で、もう一方の側面は内面とおそらく同一の工具で加工された面で、柄穴のみられる付近で端部に向かって反りが入る。柄がみられる側の端部は内外面から切断されており、もう片端は側面側から切断され、切断時に剥ぎ取ったためかさかすかしている。(5) 以外の残り9本は(6~9)のような丸太の外周部にあたる部分で、両側面は割れ面で、下部は鋸状の工具で切断されており、上部はかさかすか腐朽がすすむ。湾曲する内側の面と外側の面には、それぞれ工具で削った痕が確認される。長さ1.25m前後と揃っており、形状等から、おそらく同一の木材から分割された材であろうと推測される。なお、(6・7・8)は側面で接合し、調整痕から内外面を加工した後に分割されたものであることが判明した。内面には断面皿形で溝状の加工痕が、外面には幅広の直線的な加工痕が木材に対し斜方向に認められる。(9)には方形の柄穴の一部がみられ、内面は(6~8)と異なって手斧状の工具痕が認められる。

なお、本来(6・7・8)は、湾曲する内面を内側に向けて縦に使用する井戸枠の一部と思われ、外周の弧から復元すると直径が88cm前後になる。SE-03の底面の径が1.3m前後であることからSE-03にはほぼ適した大きさであることを示唆しておく。



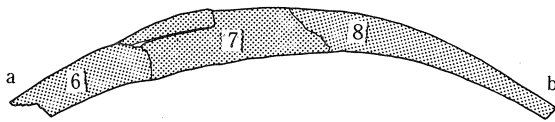
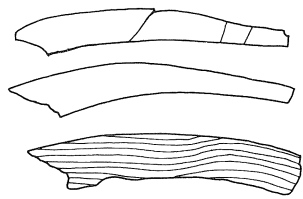
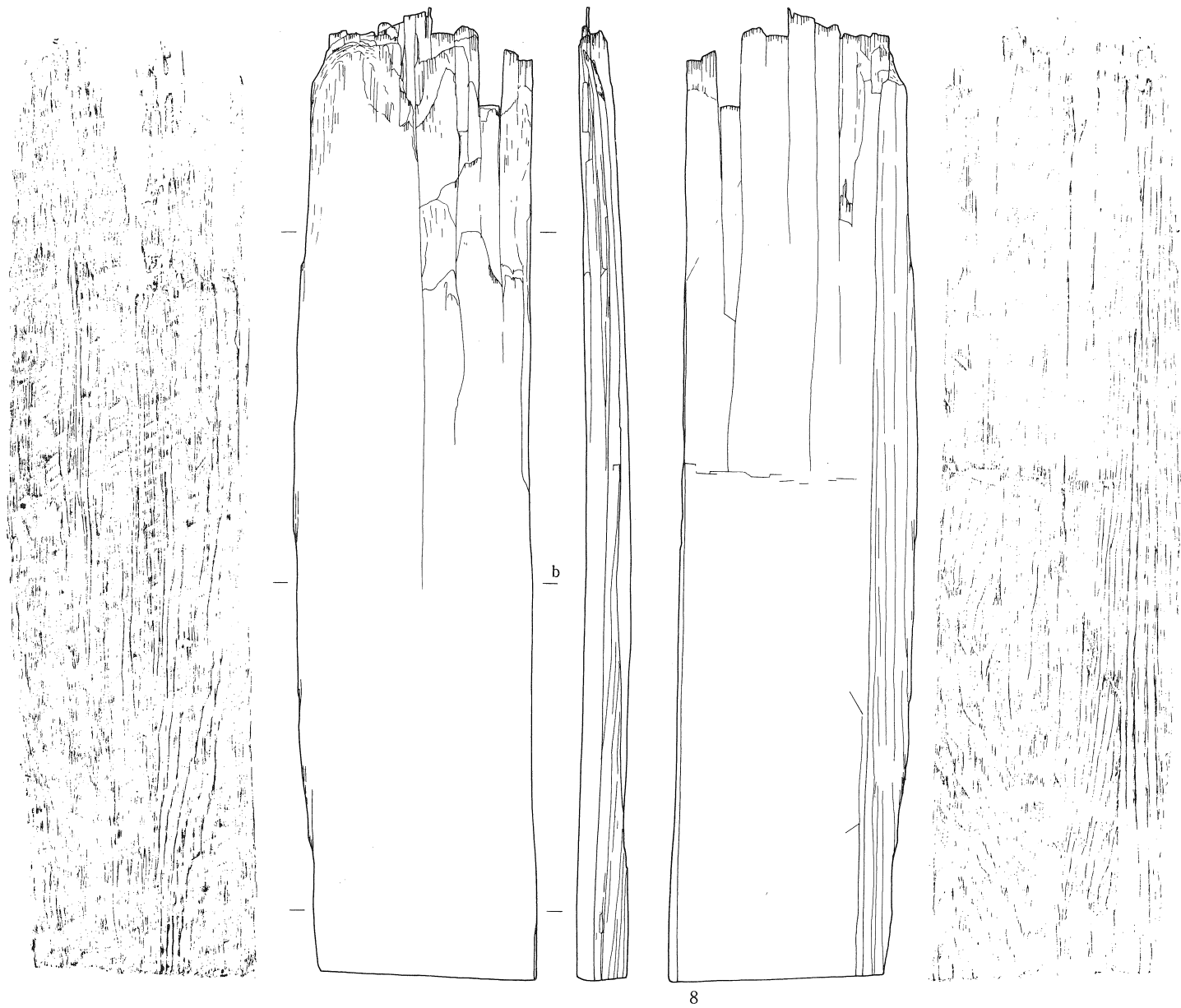
第21図 SE-03出土遺物実測図(1)



第22図 SE-03出土遺物実測図(2)

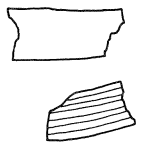


第23図 SE-03出土遺物実測図(3)



接合状況断面図

第24図 SE-03出土遺物実測図 (4)



第25図 SE-03出土遺物実測図 (5)

3. 土坑

SK-01 (付図4)

A-3区とB-3区の境界部に位置する。東側に1.5m離れてSK-02が隣接する。長さ342cm、幅136cm、深さ14cmを測り、若干角張る不整形な長楕円形を呈する。主軸はN-67°-Eを向く。断面形は逆台形であるが、底面で東側半分がさらに4~5cm深くなる。埋土は、1. 暗紫褐色粘質土(細砂まじり)を基調とするが、中央部分で2. 暗紫褐色粘質土(炭化物を多く含む)に分かれた。

遺物は東半側に集中し、壺(2)、甕(7~9)と敲石(10)が炭化物と一緒に出土した。炭化物の中には厚さ1cm程度の炭化した木材片が含まれ、その下は2cm弱の有機物が堆積する。また、おおむね内面を上に向けて2~3重に重なる土器片の下部にも若干の炭化物が検出された。壺(1・3)、甕(4・6)は出土状況が図化できなかったが、(1・3)は(5)の北側、(4・6)は(8)の上層で出土している。それぞれ大きさの異なる単純口縁の壺(1~3)は赤彩される。甕(4~9)は、様々な形態の口縁部がみられ、おおまかに分類して、複合口縁部のもの(4)、退化した複合口縁部をもつもの(5・7・8)、くの字口縁部をもつもの(6・9)とがある。(7)を除いて口縁端部は内面に折り込みもしくはつまみ出しがみられる。(7~9)は体部がいずれも球体化する。(9)は、肩部に叩き目が観察される。

SK-02 (付図5)

B-3区の東端に位置する。東側の大半は調査区外へ伸び、西側の壁が半円状に残るのみで全容は不明である。平面形として長楕円形が想定されるが、いずれも残存値で、長さ55cm、幅87cm、深さ11cmを測る。断面形は逆台形で、底面は中央部がU字状に凹む。底面から、甕の口縁部片、その他の土器小片が出土しているが図化できなかった。

SK-03 (付図6)

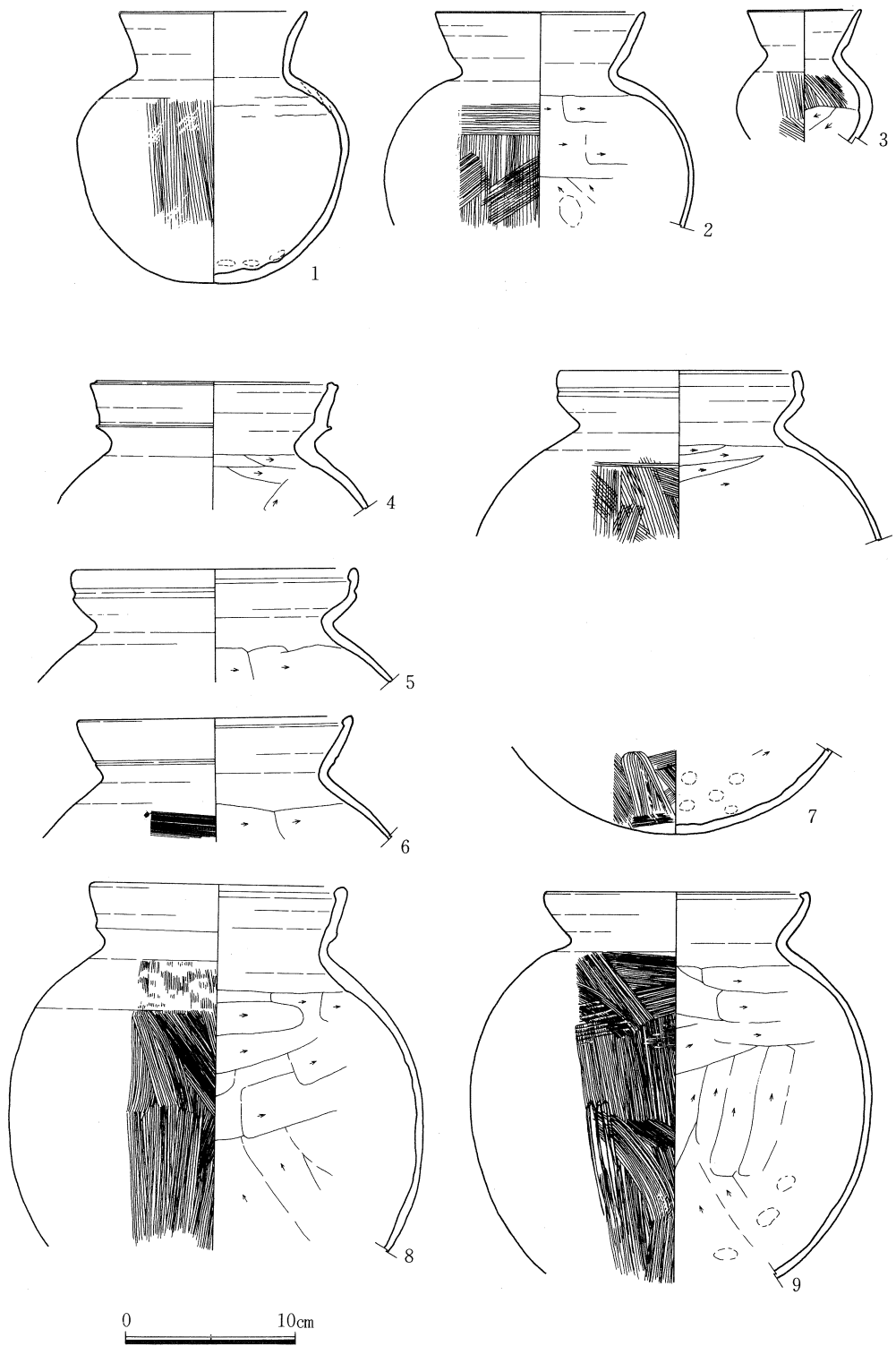
B-3区の南東端に位置する。長さ62cm、幅29cm、深さ11cmを測り、西側が角張る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-66°-Eを向く。断面形は逆台形であるが、西側が一段深くなる。遺物は出土しなかった。

SK-04 (付図7)

A-4区とB-4区の境界部に位置する。長さ70cm、幅59cm、深さ11cmを測り、楕円形を呈する。主軸はN-83°-Wを向く。断面形は逆台形状で、底面は中央部が若干の凹面状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK-05 (付図9)

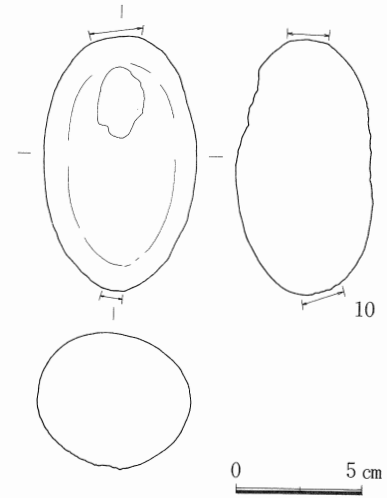
A-4区の西端部に位置し、西および東側を排水用の溝によって掘削される。長さ残存250cm、幅155cm、深さ25cmを測り、長楕円形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸は現況でN-50°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面は若干の凹凸が見られ南西側が若干落ち込む。埋土は10層に分かれるが、その堆積状況から、SK-05が掘り込まれた後に埋土堆積後北側に再び掘り



第26図 SE-01出土遺物実測図(1)

込んだような様相を示し、遺物の出土も一段低くなる南西側に集中する。第1・8・9層を除いて炭片を含み、特に第7層は非常に多くの炭片を含む。また、10層は炭化層であり、土坑北東部側に広がり、その西端にはカヤもしくはアシ類の炭化物が島状にまとまって検出された。

遺物の出土は炭化層と離れた南西部寄りの傾向があり、それぞれの土器がまとまった状態で出土している。石製品は土器の下や間に土器に絡むように出土しているもの(14・15・16)や、(17)等のように単独で出土したものもある。甕(3)、高杯(9)はいずれも炭化層に接地して出土しており、甕(5・6)の下からも炭片が見られた。甕(1～6)は口縁部の形態から凹線を施すことで複合口縁とし、退化した複合口縁部



第27図 SE-01出土遺物実測図(2)

で端部を内面に折り込むもの(1・2)、くの字口縁で端部が内面に折り込みもしくはつまみだしがあるもの(3・4)、くの字口縁のもの(5・6)がある。高杯および高杯の脚部はいずれも赤彩され、(8～10)は口縁部と杯底部の境に段をもち、(8・9)は内面に暗文を施す。脚部(11)は裾部にヘラ描き文が認められる。石製品は、台石、敲石、砥石がある。敲石(15)は中央部に紐掛け状の加工があり、一方に磨り面がみられる。なお(4・10・11・13)は埋土中の出土である。

SK-06 (付図8)

B-4区の東端部に位置する。SK-07の北側を切り、北東側は大幅に排水用の溝に掘削される。長さは西側上面で残存87cm、幅64cm、深さ6cmを測り、隅丸長方形を呈するものと推定される。主軸はN-43°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

SK-07 (付図8)

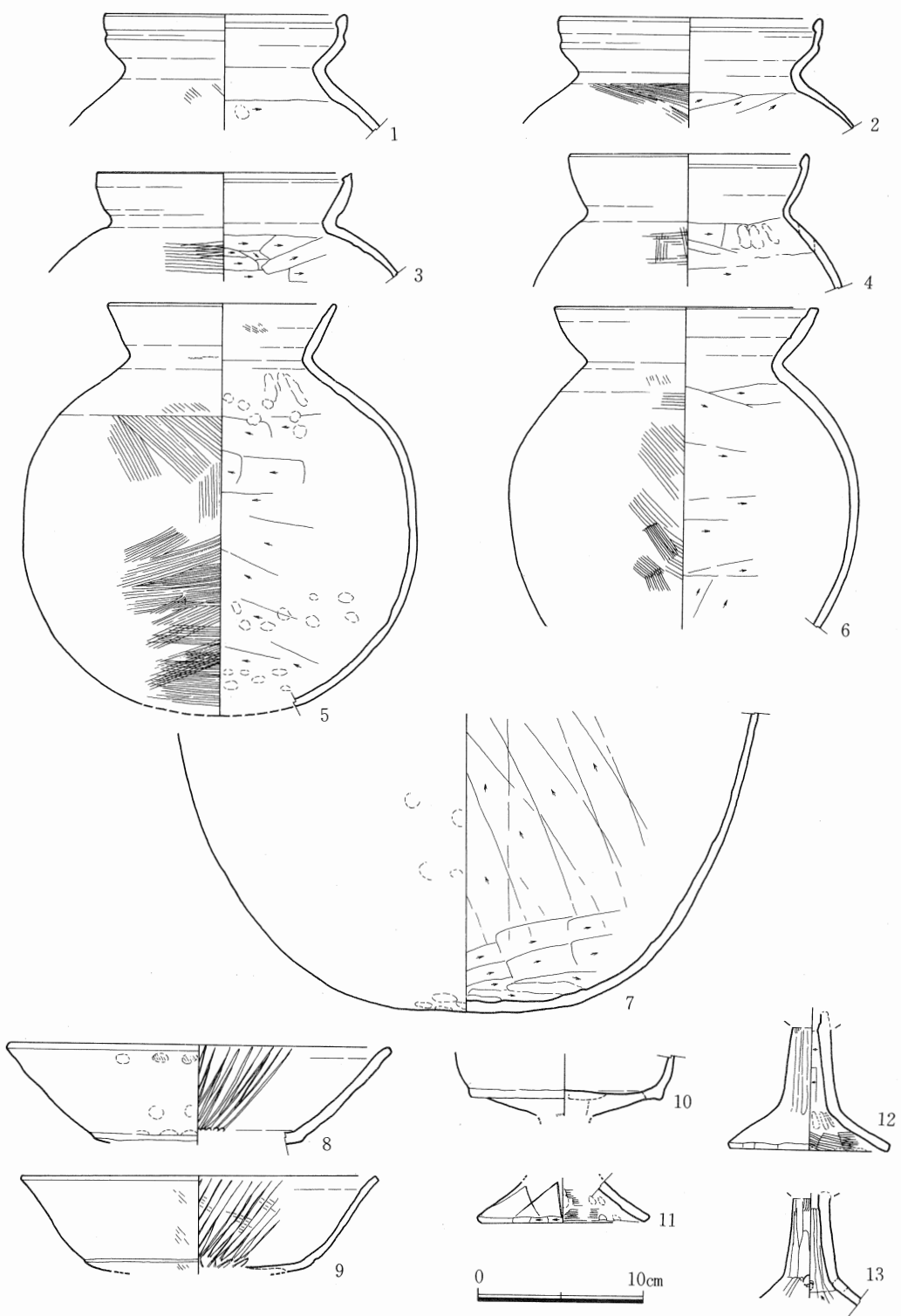
B-4区の東端部に位置し、西側をSK-06に切られる。また、中央部を排水用の溝に掘削され、東側は調査区外へ伸びる。断面形は浅い逆台形で、平面形・主軸は不明である。遺物は出土しなかった。

SK-08 (付図10)

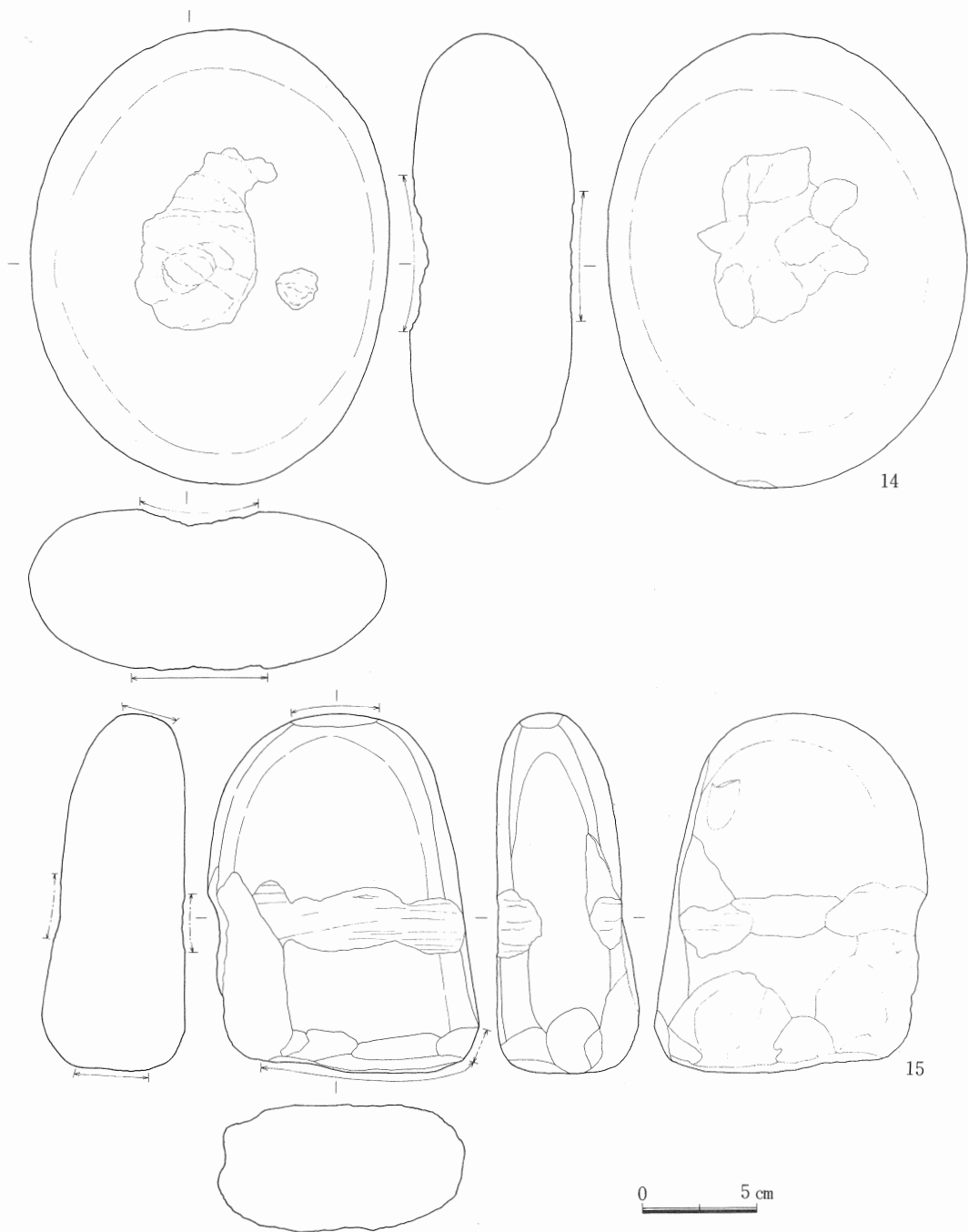
B-4区の南東部に位置する。長さ141cm、幅83cm、深さ残存6cmを測り、北側が角張る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-10°-Wを向く。断面形は逆台形で、底面で数ヶ所にわたって若干の凹みがみられる。遺物は出土しなかった。

SK-09 (付図11)

A-8区に位置し、SK-10に近接しSK-14の西端を切る。長さ226cm、幅131cm、深さ10cmを測り、西側が広がる不整形な長楕円形を呈する。主軸はN-85°-Eを向く。断面形は東西方向が逆台形で南北方向では皿状となる。底面は若干の凹凸がみられる。埋土の大部分は、1. 暗灰褐色砂質土(炭片を含む)が占め、底部の中央の一部で2. 淡黄褐色砂質土に分かれる。

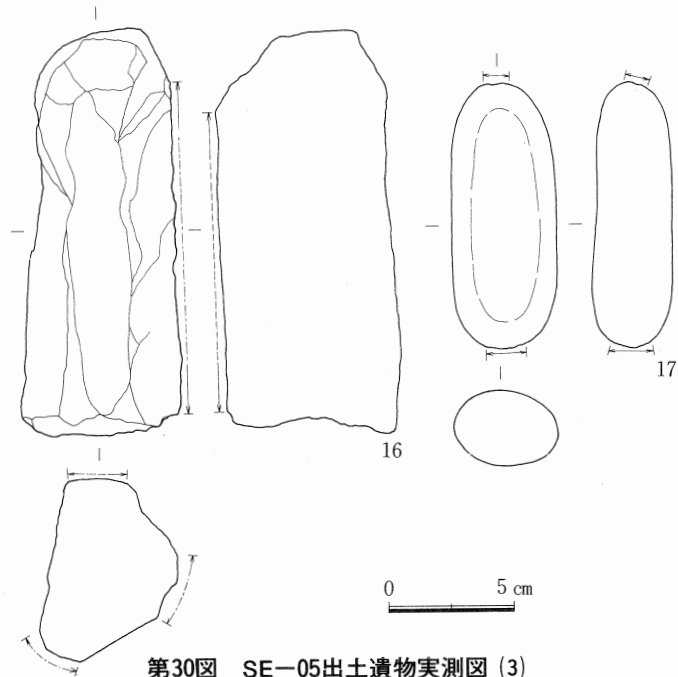


第28图 SE-05出土遺物実測図(1)

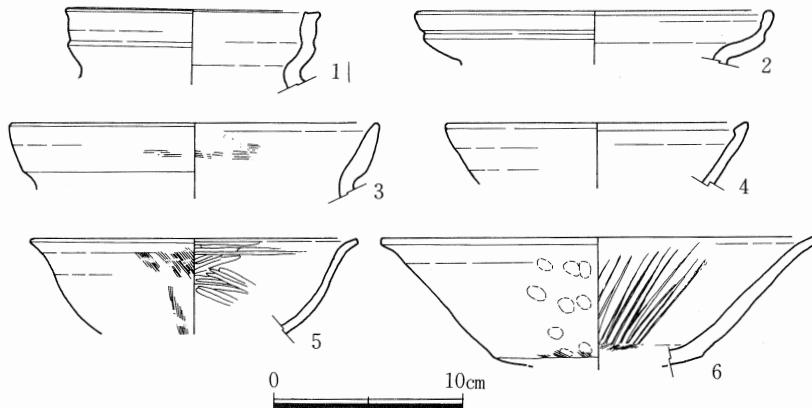


第29図 SE-05出土遺物実測図(2)

遺物は南壁端に集中してみられ、甕の口縁部(4)およびその胴部小片、赤彩され暗文のある高杯(6)が出土している。また、埋土中から甕(1~3)と高杯(5)が出土している。甕の口縁部(1~4)と高杯(5・6)はそれぞれ異なる形態を示す。



第30図 SE-05出土遺物実測図 (3)

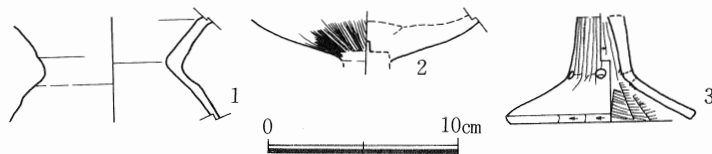


第31図 SK-09出土遺物実測図

SK-10 (付図12)

A-8区に位置し、SK-09の南側に近接する。長さ108cm、幅86cm、深さ残存9cmを測り、西側が若干尖る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-72°-Wを向く。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦となる。埋土は、1. 暗灰褐色砂質土（炭片を多量に含む）を基調とするが、南側で2. 黒灰色砂質土（炭片を多量に含む）と3. 灰色砂質土（炭片を含む）とに分かれる。全体的に炭片を含むが第2層で特に多くみられる。遺物は、第1層の上部で甕片が、更に同層で別個体の甕頸部（1）と高杯杯底部（2）が出土し、第2層で（2）とは別個体の高杯脚部（3）が出土している。高杯（2・3）は赤彩され、（3）は脚柱部と脚裾部との屈曲部に、径5mmの円孔3ヶを半方向だけに

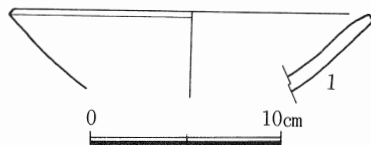
外面から穿孔する。なお、まとまった甕片が第1層より上部から出土していること等から、土坑の壁は本来はさらに立ち上がるものと推測される。



第32図 SE-10出土遺物実測図

SK-11 (付図13)

A-7区とA-8区との境に位置し、SK-12が東側に隣接する。西側が一部崩壊しているが、長さ112cm、幅104cm、深さ11cmを測り、不整形円形を呈するものと推定される。断面形は逆台形で、底面は若干の凹凸がみられ、また、東側に向かって底面が徐々に上昇する。埋土は6層に分かれ灰色～褐色系の砂質土が堆積するが、3. 灰色砂質土層には炭片が含まれる。埋土中から、高杯の口縁部(1)、その他の土器小片が出土している。(1)は赤彩され、暗文は認められない。

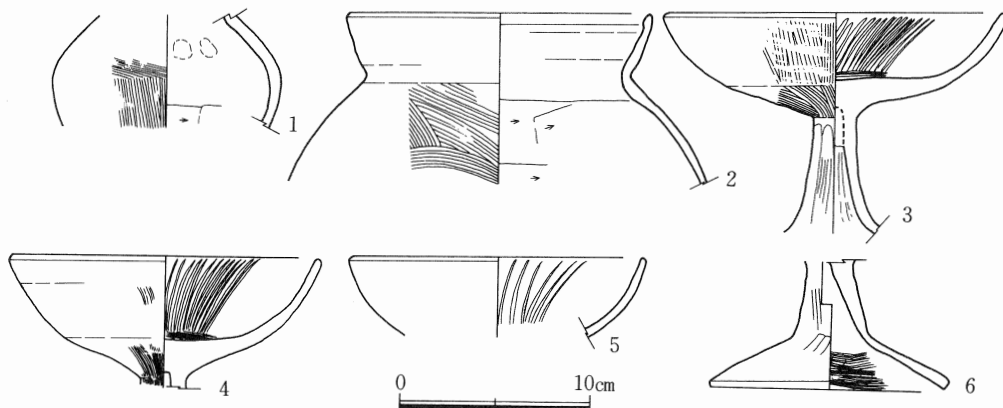


第33図 SK-11出土遺物実測図

SK-12 (付図14)

A-8区の北東最端部に位置し、北側と東側がA-7区・B-8区にそれぞれまたがる。西側にSK-11、南側にSK-09・14が隣接する。長さ254cm、幅202cm、深さ23cmを測り、若干不整形な楕円形を呈する。主軸はN-68°-Eを向く。断面形は東西方向でなだらかな逆台形で、南北方向では北壁が若干角度をとって立ち上がるが南壁はなだらかに立ち上がる。埋土は、基本的には上層が1. 淡褐色粘質土、下層が2. 褐色粘質土に分かれ、第1層の南側の一部で3. 淡茶褐色粘質土(炭を密に含む)がみられる。また、北壁に沿って4. 淡褐色細砂混じり粘質土が堆積している。これらの埋土の堆積状況と北壁以外の壁はなだらかに立ち上がることから、本来北壁は、第4層の上面で立ち上がる可能性も考えられる。

遺物は、甕、高杯、小壺が出土した。底面から高杯(4・6)が、南壁に沿って高杯杯底部が、



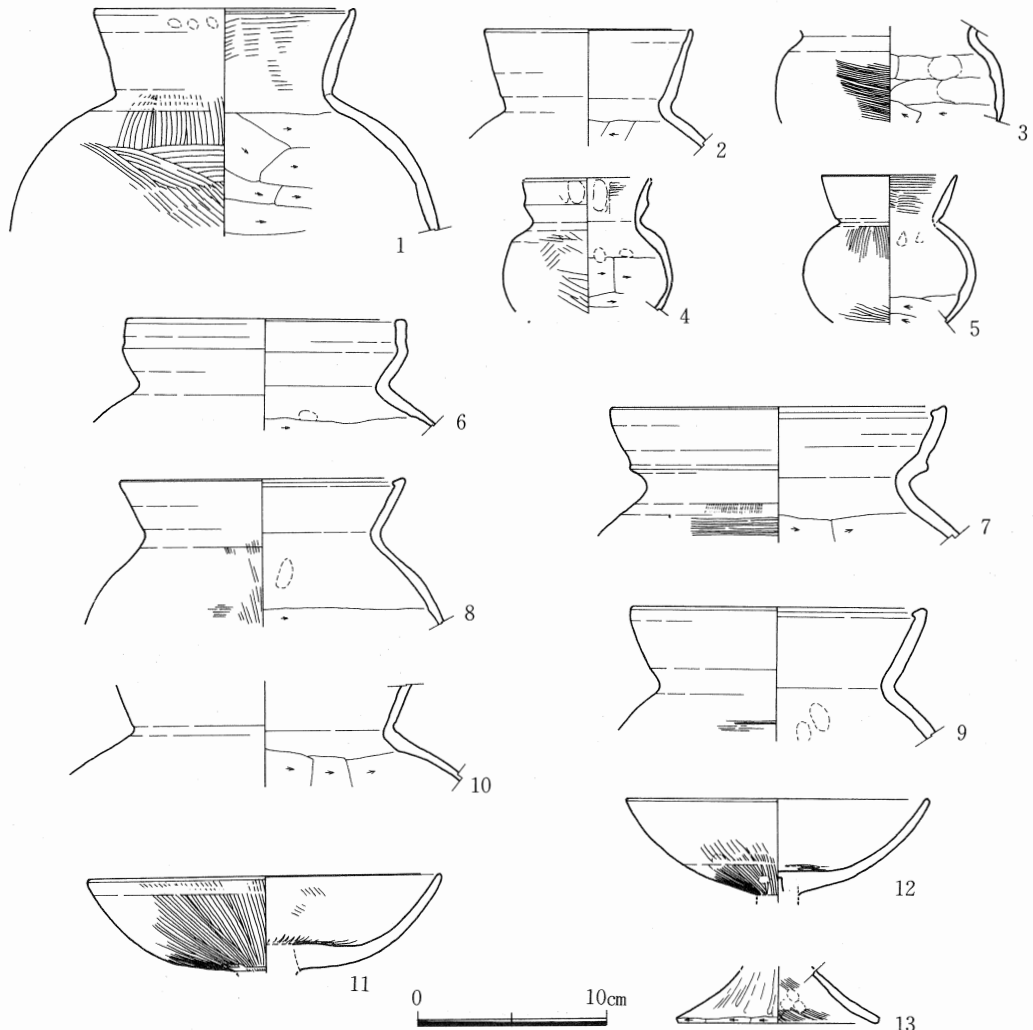
第34図 SK-12出土遺物実測図

また、底面から浮いた状態で高杯（3・5）の他、北東部で甕（2）と小壺（1）がまとまって出土している。小壺（1）および高杯（3～6）は赤彩され、杯部内面に暗文を施す。甕（2）は口縁端部内面が肥厚する。

SK-13（付図15）

B-8区の北東部に位置し、東端は調査区外へ伸びる。北側にSD-06・07・08・09が隣接し、SD-07の南を切る。長さ231cm、幅残存166cm、深さ19cmを測る。不整形な楕円形を呈し、主軸はN-11°-Eを向くものと推定される。南北方向の断面形は逆台形で、底面中央部が若干凹む。埋土は3層に分かれ、上層から1. 淡褐色粘質土（炭化片を含む）、2. 淡灰褐色粘質土（細砂を含む）、3. 淡褐色砂質土である。

遺物は2層を中心として出土しており、壺、小壺、甕、高杯、軽石、自然石がある。土坑中央部やや東寄り、壺（1・3）と高杯（11～13）を中心として土器が重なった状態で出土し、その周

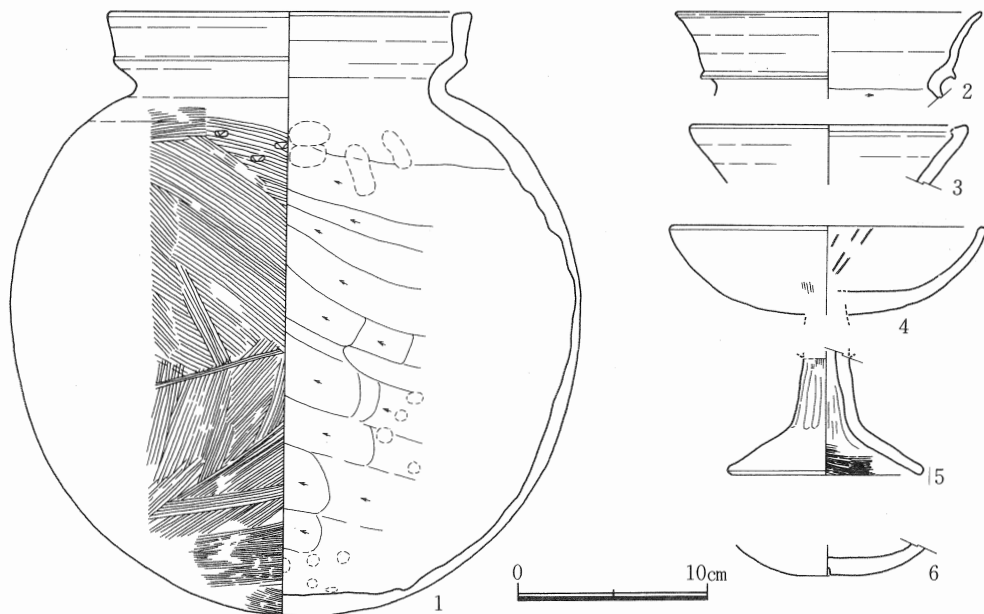


第35図 SE-13出土遺物実測図

辺で甕その他の土器片が散在して出土している。また、土坑北西側の壁で軽石が検出されたが、壁の肩部に貼り付くように出土しており、土坑に伴う遺物か否か不明瞭である。壺（1・2・5）と高杯（11・13）は赤彩される。（1）は口縁部内面はハケ目後ヨコナデ調整で、口縁端部で内面に若干のつまみだしがみられる。甕（6～9）は口縁部の形態から、退化した複合口縁部をもつもの（6・7）とくの字口縁のもの（8・9）に分かれ、さらに口縁端部内面に折り込みのみられるもの（7・8・9）がある。高杯（11）は暗文が（12）はヘラ磨きがそれぞれ杯底部内面に認められる。小壺（2）は埋土中の出土である。

SK-14（付図16）

A-8区とB-8区の境界部に位置し、SK-09に北西壁を切られる。長さは残存112cm、幅70cm、深さ22cmを測り、南側が若干角張るものの不整形な楕円形を呈するものと思われる。主軸はN-40°-Wを向く。断面形はゆるやかな椀状である。底面のやや北部寄りで、甕（1）が一部を欠損するもののほぼ形を留めたまま出土している。埋土は5層に分かれるが、その堆積状況から、土坑の底に甕の口縁部を向けて安置した後、まず第3層が、さらに第2層が北側より流入し、甕が若干移動したものと想定される。第2～4層で炭片を含み、特に第3層は多量に炭片を含む。また、壁に沿って赤彩された高杯（4・5）、椀（6）が出土している。（6）は底部に小孔のある椀の底部、（4）と（5）は同一個体であるか否かは不明であるが高杯である。埋土中から、（1）とは形態の異なる甕の口縁部（2・3）が出土しているが、（2）は混入と思われる。



第36図 SK-14出土遺物実測図

SK-15 (付図17)

A-9区の中央部に位置する。東西方向に土坑が3基近接するが、そのうちの一番西側にあたり、SK-16に隣接する。長さ92cm、幅88cm、深さ現況4cmを測り、不整形円形を呈する。断面形は浅い逆台形で、若干凹凸する底面となる。埋土は2. 暗灰色砂質土と3. 灰色砂質土(炭片を含む)に分かれる。底面で甕の口縁部片と胴部片、埋土中からその他の土器小片が出土している。なお、土坑の壁は本来はさらに立ち上がるものと思われる。

SK-16 (付図17)

A-9区中央部に位置する。東西方向に土坑が3基近接するが、その真ん中に位置し、東側にSK-17西側にSK-15が隣接する。長さ50cm、幅36cm、深さ現況6cmを測り、不整形な楕円形を呈する。主軸はN-15°-Wを向く。断面形は椀状である。埋土は暗灰色砂質土一層である。土坑南東端で土器小片が出土している。SK-15同様、土坑の壁は本来はさらに立ち上がるものと思われる。

SK-17 (付図17)

A-9区中央部に位置する。東西方向に土坑が3基近接するが、一番東側にあたり、西側にSK-16が隣接する。長さ73cm、幅60cm、深さ現況3cmを測り、不整形円形を呈する。断面形は浅い逆台形で、底面はほぼ平坦である。暗灰色砂質土(炭片を含む)の埋土から、土器小片が出土している。なお、土坑の壁は本来はさらに立ち上がるものと思われる。

SK-18 (付図18)

A-9区の南側に位置する。周囲に小規模な土坑が隣接する中で北側にSK-15、西側にSK-21が近接する。後世の水田用暗渠によって南側を大幅に掘削される。いずれも残存値で、長さ98cm、幅63cm、深さ8cmを測る。断面形は不整形な椀状で、底部はやや西寄りが凹み東側に向かって徐々に立ち上がる。炭片を含む埋土から、土器胴部小片が出土している。

SK-19 (付図19)

A-9区の南に位置する。北側に小規模な土坑が群在し、その中でSK-21が北側に隣接する。いずれも現況値で、長さ49cm、幅46cm、深さ3cmを測り、不整形円形を呈する。断面形は皿状で、埋土は暗灰色砂質土(炭片を含む)一層である。東壁近くの底面で、土器胴部小片が出土している。なお、土坑の上面は削平されている可能性がある。

SK-20 (付図20)

A-9区の南に位置する。北西側に小規模な土坑が群在するが、ほぼ同規模の土坑SK-19が西側に隣接する。いずれも現況値で、長さ44cm、幅41cm、深さ3cmを測り、若干不整形な円形を呈する。断面形は逆台形で、底面は平坦である。暗灰褐色砂質土(炭片を含む)の埋土から、土器胴部小片が出土している。なお、土坑の上面は削平されている可能性がある。

SK-21 (付図21)

A-9区の南に位置する。ほぼ同様な規模の土坑であるSK-18・19・23が隣接する。後世の水田用暗渠によって北側が大幅に掘削される。長さ81cm、幅残存38cm、深さ5cmを測る。断面形は逆台形で、平坦な底面である。暗灰色砂質土（炭片を含む）の埋土から、若干の土器胴部小片が出土した。

SK-22 (付図23)

A-9区の西端に位置する。一帯には小規模な土坑が群在するが、それらの一番西側にあたり、南側にSK-23が隣接する。長さ99cm、幅73cmを測り、不整形な楕円形を呈する。主軸はN-89°-Wを向く。断面形は逆台形で、若干の凹凸があるものの底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰色砂質土一層である。

底面で、甕(1)が口縁部を西に向け、つぶれた状態で出土した。おそらく、完形の甕を土坑内に安置したものと推定される。なお、深さは残存で5cmを測るが、甕の出土状況から、本来壁はさらに立ち上がったものと考えられる。甕(1)は、わず

かに複合口縁のなごりのみられるくの字状口縁部をもつ。体部外面は全体的に多面体状でハケ目調整前の右下がりの叩き目が認められる。口縁部と底部周辺を除き外面に薄く煤が付着する。

SK-23 (付図22)

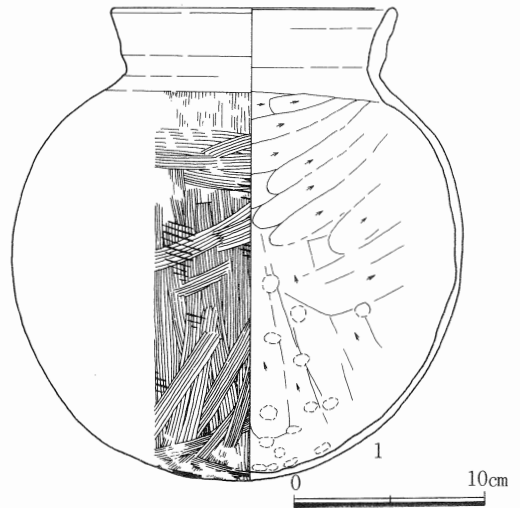
A-9区の南西部に位置する。北東側一帯に同様な規模の土坑が群在し、北側にSK-22、東側にSK-21が隣接する。東側を排水用の溝によって大幅に掘削される。長さ85cm、幅残存38cm、深さ7cmを測る。西側の壁が残るのみであるが、断面形は屈曲のゆるやかな逆台形を呈するものと思われる。埋土は暗灰褐色砂質土（炭片を含む）一層であり、土器胴部小片が出土している。

SK-24 (付図24)

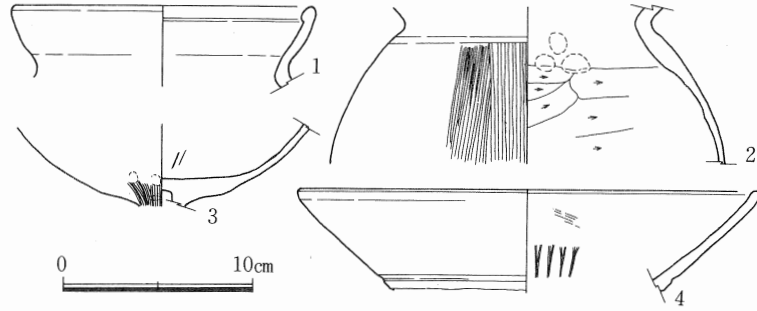
B-10区に位置し、SE-02が北側に隣接する。長さ66cm、幅48cm、深さ5cmを測り、若干不整形な楕円形を呈する。主軸はN-27°-Wを向く。断面形は逆台形で、中央部で若干凹むもののほぼ平坦な底面である。埋土は暗灰色砂質土（炭片を多量に含む）一層である。北壁近くの底面で土器胴部小片が出土している。

SK-25 (付図25)

A-11区の南西部に位置する。西側および北側を暗渠に、東側を排水用の溝に掘削され、幅50cm程度が残るのみである。長さは残存で南北143cm、深さ10cmを測る。埋土は暗灰色砂質土（炭



第37図 SK-22出土遺物実測図



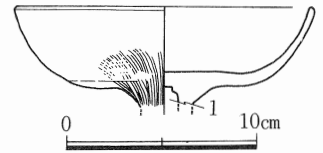
第38図 SK-25出土遺物実測図

片を多量に含む) 一層である。

遺物の多くは底面から若干浮いた状態で出土しており、甕、高杯、軽石、自然石がある。高杯は、碗状の杯部(3)と、口縁と杯底部の境で段をもつ杯部(4)とがあり、どちらも赤彩され内面に暗文が施される。甕(1)は内面端部が肥厚するくの字状の口縁部である。高杯(3)は埋土中の出土であり、その他にも図化していないものの赤彩された高杯の杯底部が出土している。

SK-26 (付図26)

A-12区の西端に位置する。南側を排水用の溝で大幅に掘削される。長さ78cm、幅残存36cmを測り、楕円形を呈するものと推測される。主軸は現況ではN-51°-Eを向く。埋土は黒灰色砂質土(炭片を多量に含む)一層である。土坑西寄りの底面から若干浮いた状態で、内面を上に向けた高杯杯底部(1)が出土している。土坑の深さは現況で3cmであるが、高杯の出土状況からすれば、壁は本来はさらに立ち上がるものと考えられる。高杯(1)は赤彩されるが暗文は認められない。



第39図 SK-26出土遺物実測図

SK-27 (付図29)

B-11区の北西部に位置する。風雨で土坑の肩を若干流失したため、正確な規模は土層断面から推定せざるえないが、長さ200cm、幅175cm、深さ76cmを測るものと推測される。平面形は楕円形を呈し、主軸はN-61°-Eを向く。断面形は碗状である。埋土は13層に分かれ全体的に炭片を含むが、8. 暗褐色粘質土層をはさんだ第6・7・10層は炭を多量に含む黒色系の粘質土である。

土坑内では中央部に大型の壺(1)を中心として、その周囲や下層から多量の土器、木の実、自然石と、底面付近で木製品が出土している。その形状や規模、出土遺物の量などから他の土坑とは若干性質を異とする土坑である。

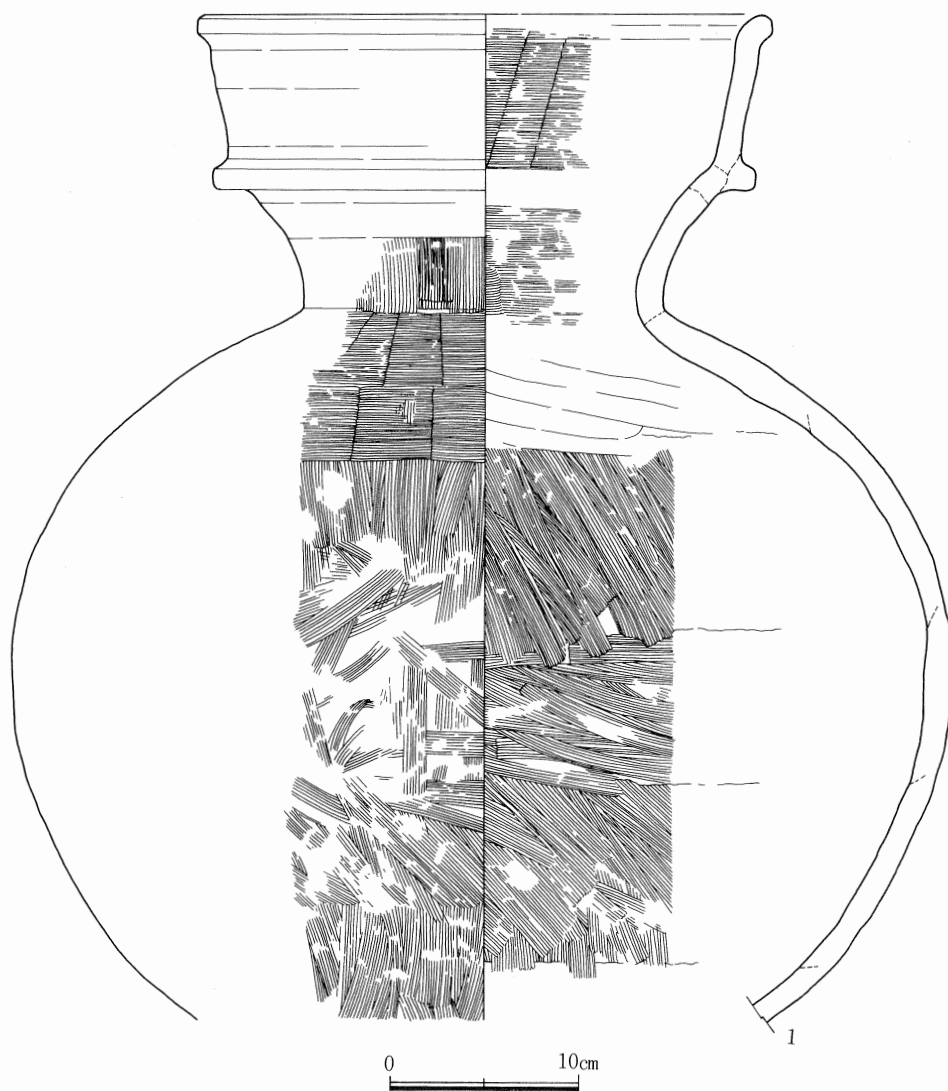
壺(1)は口縁部を南西方向に向け横倒しの状態で出土している。内面に転落した破片がみられたが、底部周辺と検出面から上位の胴部は欠失し、土坑内からも出土しなかった。(1)の下には高杯(16・21・23)が杯部、脚部とも細かな破片で散在し、あたかも破碎されたような様相を呈していた。その下層には炭を多量に含む黒色系を中心とした埋土が堆積し、その他の土器は壺(1)の下というより土坑の壁面に沿った状態で出土している。また、土器の中には甕(5)のように土

坑内の上下部にわたり破片が分散して出土しているものもあり、土坑内の遺物は時間の経過をみないで放棄されたものと考えられる。また、底面から15cm程上面にかけ串状の木製品や自然木、加工された痕をもつ木製品が土器とともに入り組んだ状態で検出されている。この面で甕(10)が内面を上に向け、敷き詰められたような状態で出土した。また、埋土というよりも腐葉土状の有機物が串状木製品の間に詰まっており、その中から桃と思われる同一種の木の实11個が出土している。底面では底に貼り付いたような状態で底板(26)が検出された。底板(26)は4枚に分離し、(B)面を上に向けるが、一部を欠損する左側4分の1部は(A)面を上にして他の下になって出土した。紐とじによる合わせ部がそのままの状態出土していることから、先に欠損した4分の1部分を、次にその他の部分を廃棄したものと考えられる。

壺(1)は口縁下端部に貼り付けの凸帯をめぐらすことで複合口縁を強調し、また、口縁部上端部は凸帯を意識したように外方に屈曲する。底部を欠損するものの体部は球形で、体部2分の1や上半部に最大胴径をとるものと思われる。外面は、口縁部ヨコナデ、頸部縦ハケ目後上半はヨコナデ、体部縦位のハケ目および最大胴部付近は任意方向のハケ目、後に肩部は断続的な横ハケ目を2段に施す。内面は、口縁部に断続的な横ハケ目、頸部横ハケ目、後口縁端部ヨコナデ屈曲部ナデ、体部は粘土の接合痕が数ヶ所認められ、その単位ごとにハケ目の方向が変わる。肩部は斜位の強い指ナデである。胎土、焼成、色調ともに埴輪に酷似し、ハケ目や強い指ナデなど全般的に埴輪の制作技法を用いた大型の壺であり、黒斑を有する。その他の壺としては、複合口縁部をもつ(2)と赤彩され底部内面に指頭圧痕が顕著な(3)と図化できなかったが赤彩された小型の壺の口縁部が出土している。甕(4~14)はすべて口縁部がくの字状で、端部が内面に折り込みもしくは肥厚するもの(4~8)としないもの(9~14)とに分かれる。外面のハケ目も整然と施すものがあまりみられない。口縁部内面にハケ目痕が認められるもの(8~10・12・13)があり、ハケ目のちヨコナデ調整するがヨコナデが弱いためにハケ目が残ったものである。その他の甕の中にも、ハケ目調整するがきれいにヨコナデするため、もしくは横ハケでヨコナデと重複するためハケ目が確認し難いものもあるものと思われる。また、(5)は肩部外面に右下がりの叩き目が認められ、全体的に多面体をなす肩部の張らない甕である。内面はヘラ削りの幅が大きめで荒く、器壁が不均等で、口縁端部は内面に折り込んでそのまま軽くヨコナデ調整する。赤彩された高杯(16~24)は、口縁部と杯底部との境に段をもつもの(20)があるがこれ以外は杯部が椀状の高杯である。また、杯部内面に暗文がみられるもの(16~20)とみられないもの(21・22)とがある。杯部と脚部の接合方法も円盤充填式のもの(18・19・21)のものがみられる。なお、(23)は(20)の脚部と思われる。赤彩された椀(25)は内外面ヨコナデ調整で、口縁部は外方につまみ出し、深さがあるものの高杯(22)と比較的近い形状である。

底板(26)は、合わせ部に方形の柄穴を対の位置に3組穿ち、紐を通して結ぶことで別々の板2枚を接合したものと思われる。形や厚さ等厳密には左右対称とはならず、周囲に穿孔された方形の

柄穴もほぼ同一の位置のようではあるが、数やその大きさ等に差異が認められる。また、(A)面では周囲が縁取りされ、両面にわたってみられる加工痕も(A)面は(B)面に比べて磨滅して不明瞭である。(B)面には焦げた痕がみられる。出土した木製品のほとんどは串状木製品で占められ全部で28本余りあるが、それらの長さは全て56cm前後である。3分の1上半付近が最も太く、先端は尖るが一方は若干くびれて端部は節を作り出す。形状の差が多少みられ、中には全体的に太いものや細いもの、棒状のもの(30)等がみられる。概して、(27)が多くみられる形状である。底板(26)同様、埋土や土器等の重圧で曲がったり折れたりしたものが多く、特徴的なものを図化した。これらの串状木製品は底板(26)と組み合わせさせて1個の製品になる可能性も考えられるが現時点では不明である。その他の木製品として、杭状木製品(33)、両端部を切断され片面に加工

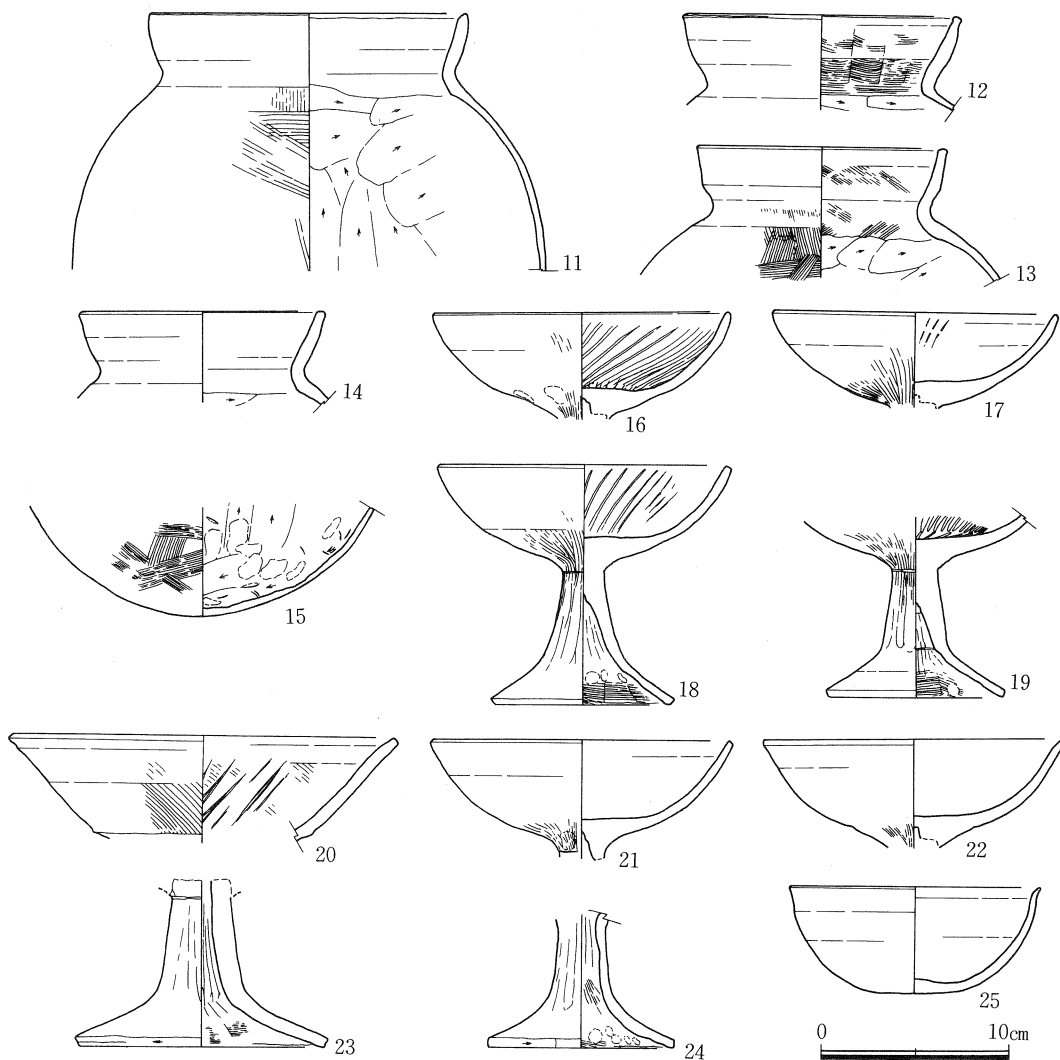


第40図 SK-27出土遺物実測図(1)

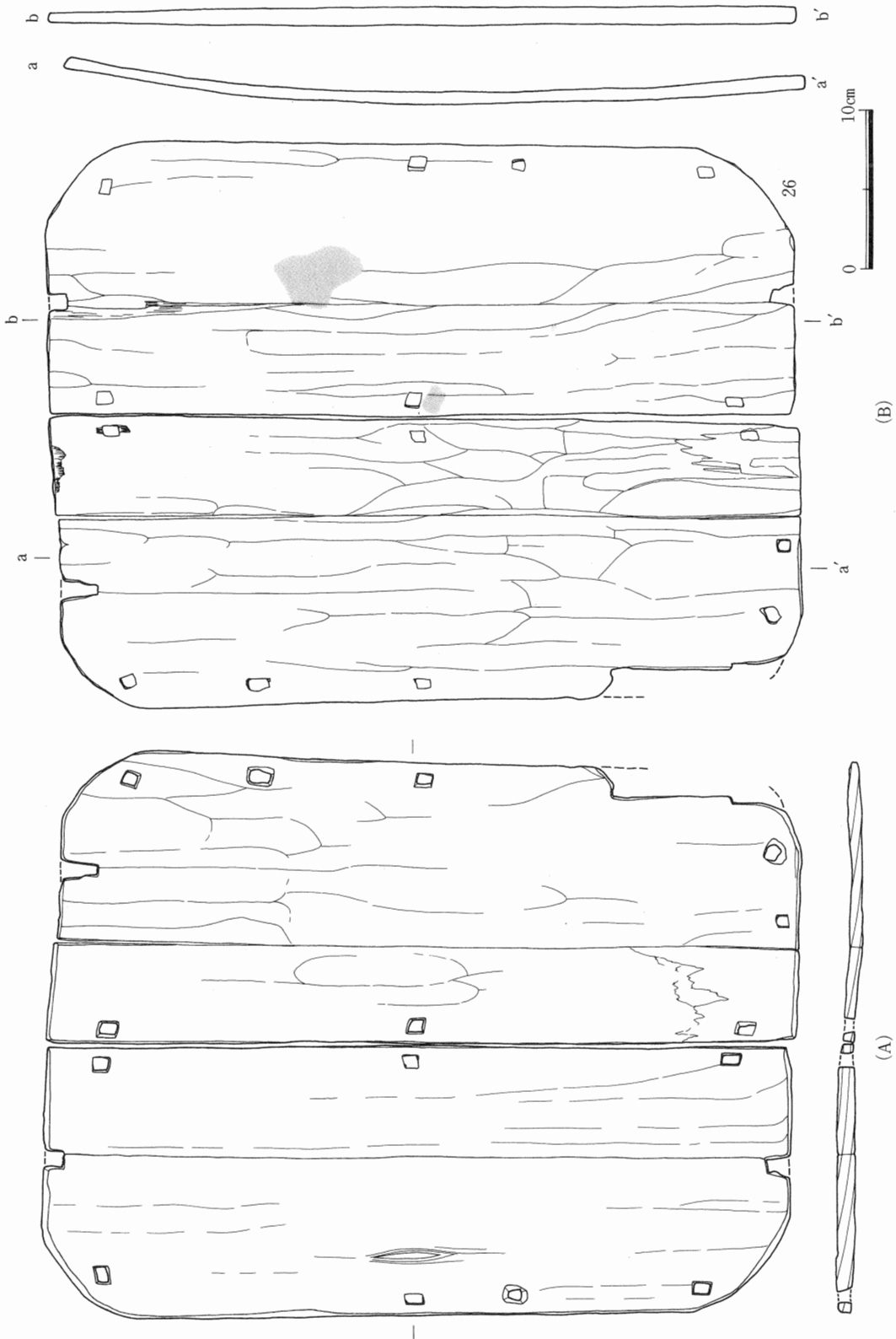


第41图 SK-27出土遺物実測图 (2)

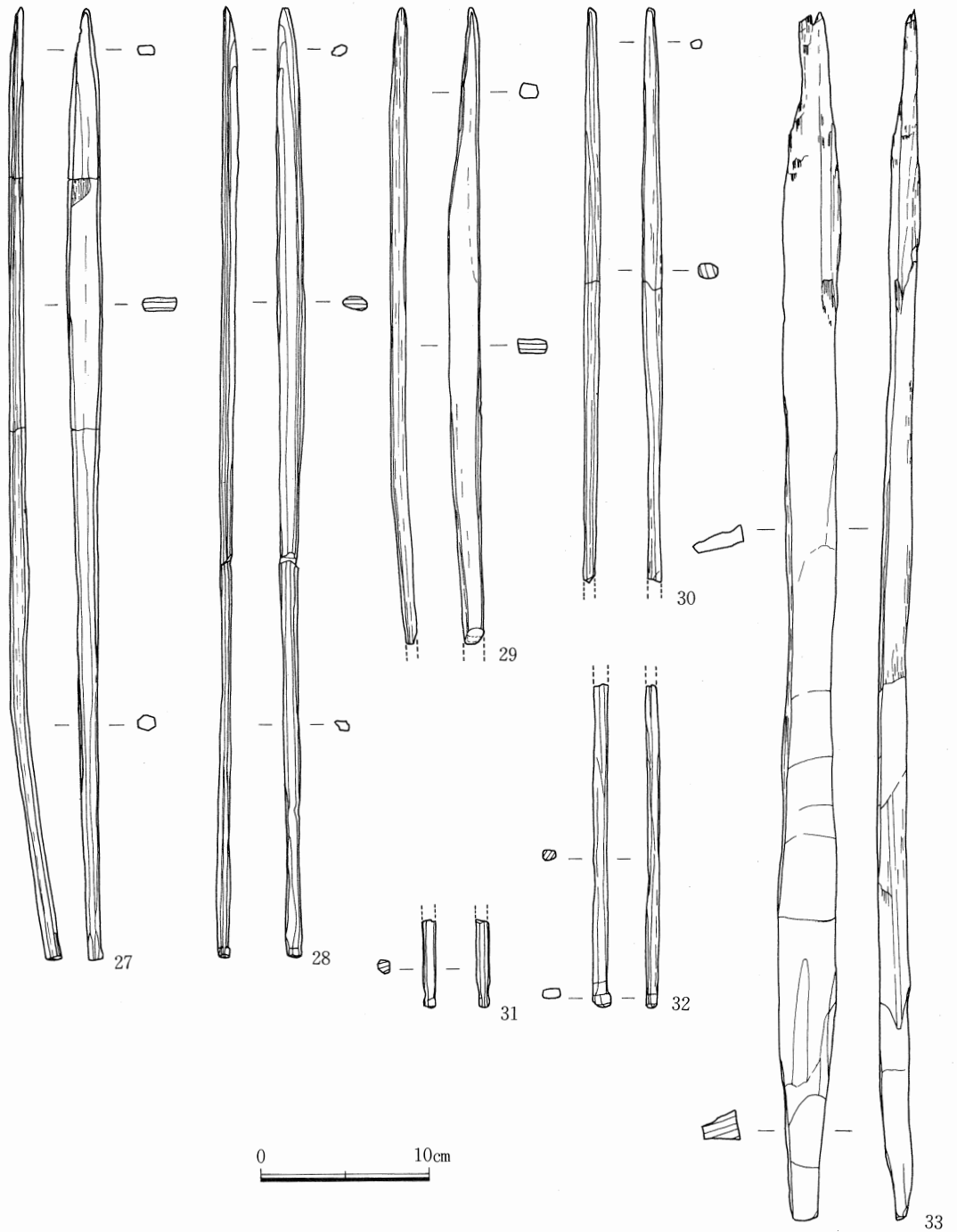
痕のみられる板 (34)、片端は切断しもう一方は多面状に加工した断面蒲鋒形の木製品 (35) がある。また、その他に図化していないものの、薄板小片や燃え残りと思われる木片が、自然木とともに出土した。



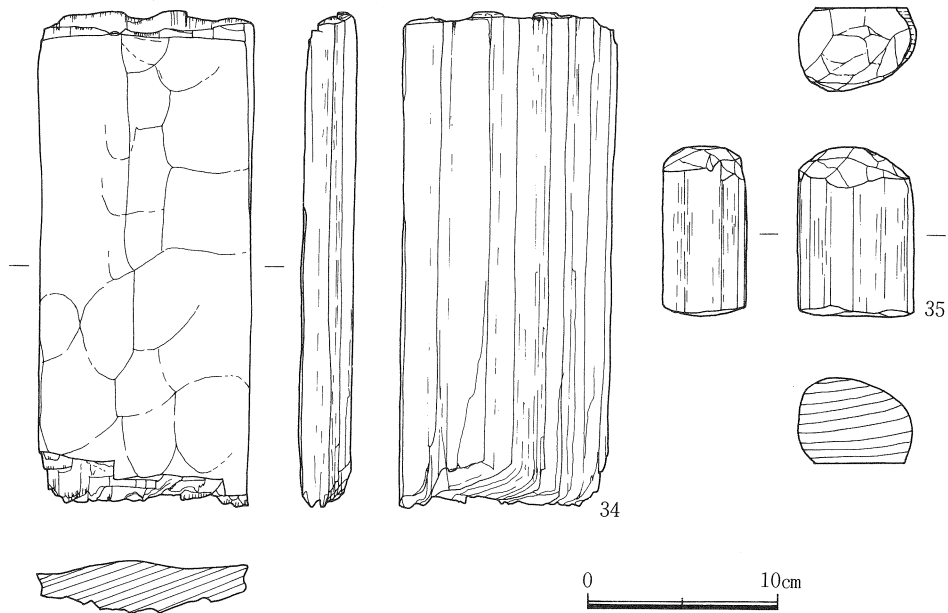
第42図 SK-27出土遺物実測図 (3)



第43图 SK-27出土遺物実測図(4)



第44図 SK-27出土遺物実測図(5)



第45図 SK-27出土遺物実測図 (6)

SK-28 (付図27)

A-16区の北西端に位置する。南側は削平されるが、検出面で長さ111cm、幅72cm、深さ16cmを測り、北側が若干尖る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-19°-Wを向く。断面形は底面が平坦で内湾しながら立ち上がる逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土(炭片を含む)一層である。南寄りのほぼ底面で甕と思われる丸底の底部が内面を上に向けて出土している。図化できなかったものの、外面はハケ目が重複し底部の周辺に煤が付着する。内面は底部から上方向へのヘラ削りがみられ指頭圧痕が顕著である。

SK-29 (付図42)

A-8区の北に位置する。長さ215cm、幅86cm、深さ6cmを測り、北側が尖る不整形な長楕円形を呈する。主軸はN-22°-Eを向く。断面形は皿状で、南壁で段をとって立ち上がる。底面は若干の凹凸がみられる。埋土は、北側が1. 暗灰褐色砂質土で、南側で2. 暗灰色砂質土(砂礫を多く含む)に分かれる。

埋土中から甕の口縁部(1・2)と高杯の杯底部(3)が出土した。(1)は床面近くの下層で、(3)は第1層から出土した。甕(1・2)は複合口縁で、口縁端部を外側につまむ。高杯(3)は口縁部と杯底部の境に段をもち、内外面赤彩され内面に暗文が認められる。

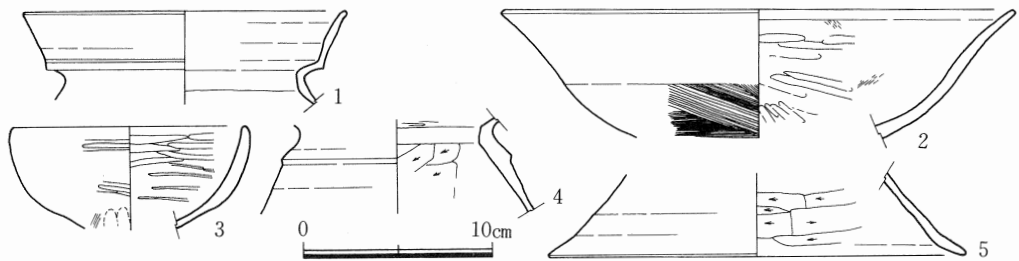


第46図 SK-29出土遺物実測図

SK-30 (付図45)

A-8区の南に位置し、北側にSK-31が隣接する。排水用の溝によって、西壁の一部が掘削される。また、試掘の際に上層で炭片を含む層を確認しており、土坑の壁はさらに10cm程度は立ち上がるものと思われる。いずれも残存値で、長さ62cm、幅57cm、深さ7cmを測る。平面形は円形を、断面形は椀状になるものと推定される。埋土は3層に分かれ、上層から、1. 黒灰色砂質土(炭片を多量に含む)、2. 暗灰色砂質土、3. 灰色砂質土である。

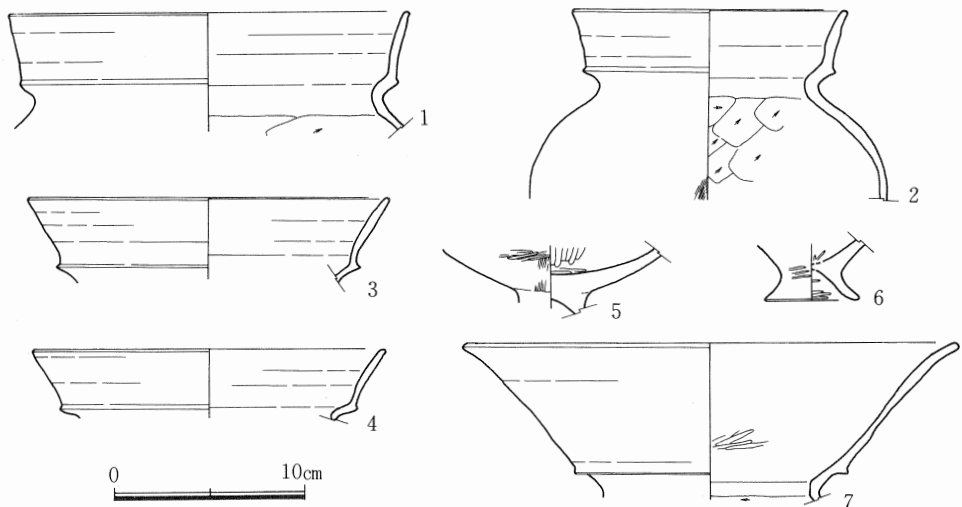
第2層で土器小片が出土したほか、試掘時に、甕(1)、高杯(2・3)、鼓形器台(4・5)、軽石、自然石が出土している。複合口縁の甕(1)は口縁端部のつまみ出しが顕著である。(3)の高杯は内外面赤彩される。



第47図 SK-30出土遺物実測図

SK-31 (付図43)

A-8区に位置し、南側にSK-30が隣接する。排水用の溝によって、西側の一部が掘削される。試掘の際に、上層から、甕(1・2)、低脚杯(5・6)、鼓形器台(7)や多くの自然石が出土しており、出土した高さから考えて土坑の壁はさらに10cm程度は立ち上がるものと思われる。いずれも残存値で、長さ138cm、幅123cm、深さ14cmを測る。平面形は不整形な楕円形になるものと推



第48図 SK-31出土遺物実測図

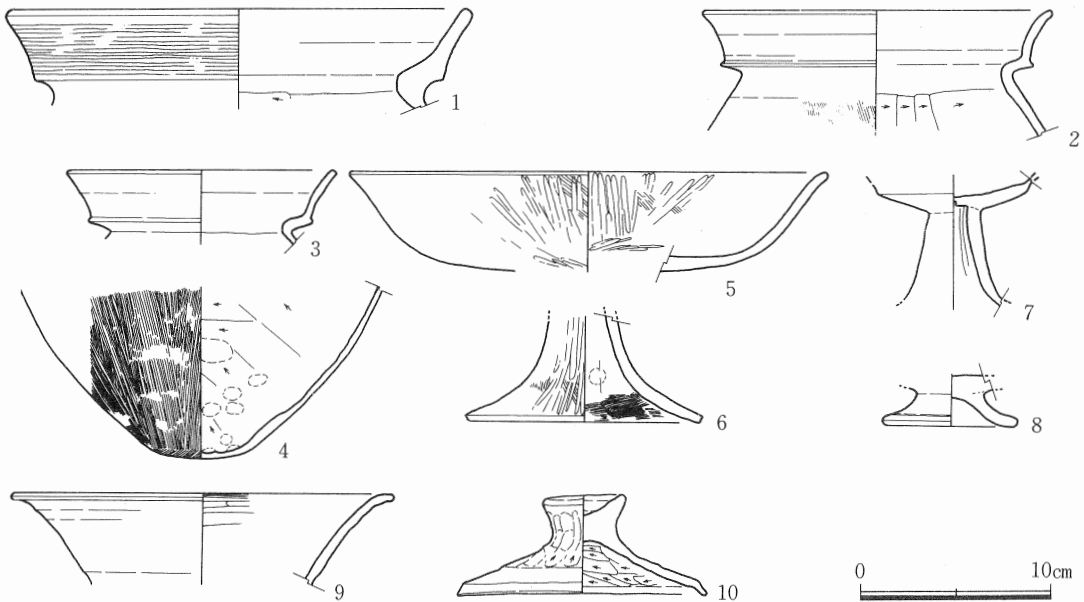
定される。断面形は逆台形であるが、底面は凹凸がみられ、北東部分で若干深くなる。埋土は6層に分かれ、第1・2・6層で炭片を含み、特に第2層は多量に炭片を含む。

第1・2層を中心として遺物が出土し、甕（3・4）が出土している。甕（1～4）は口縁端部をつまんでヨコナデするがつまみ出すまでには到らず、外面の形状も弓なり状に外反せずに膨らみをもって外傾する形態である。

SK-32（付図44）

A-8区とB-8区の境界部に位置する。西壁が後世の水田用暗渠によって掘削されており、底面から6cm下層の面でSK-33がほぼ重なって検出された。長さ239cm、幅残存131cm、深さ13cmを測り、南側が広がる不整形な長楕円形を呈するものと思われる。主軸は現況でN-13°-Eを向く。断面形は逆台形で、南壁に比べて北壁はゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸がみられ南西側が若干深くなる。埋土は、1. 暗灰褐色砂質土（炭片を含む）と2. 黒灰色砂質土とに分かれる。

土坑内から、甕、高杯、低脚杯、鼓形器台、蓋、自然石がそれぞれに分散した状態で出土した。甕（1・2）、低脚杯（8）は北東壁に貼り付くように出土しており、（1）は肉厚で口縁部外面に多条の平行沈線を施した古式の要素をもつ甕である。高杯（5・6）は同一個体の可能性が大きい。蓋（10）はヘラ削りと指ナデを多用して作られている。（3・4・9）は埋土中の出土である。わずかな平底をもつ底部（4）は、外面は丁寧なハケ目調整で底面までべっとり煤が付着し、内面はヘラ削りで指頭圧痕が顕著である。



第49図 SK-32出土遺物実測図

SK-33 (付図47)

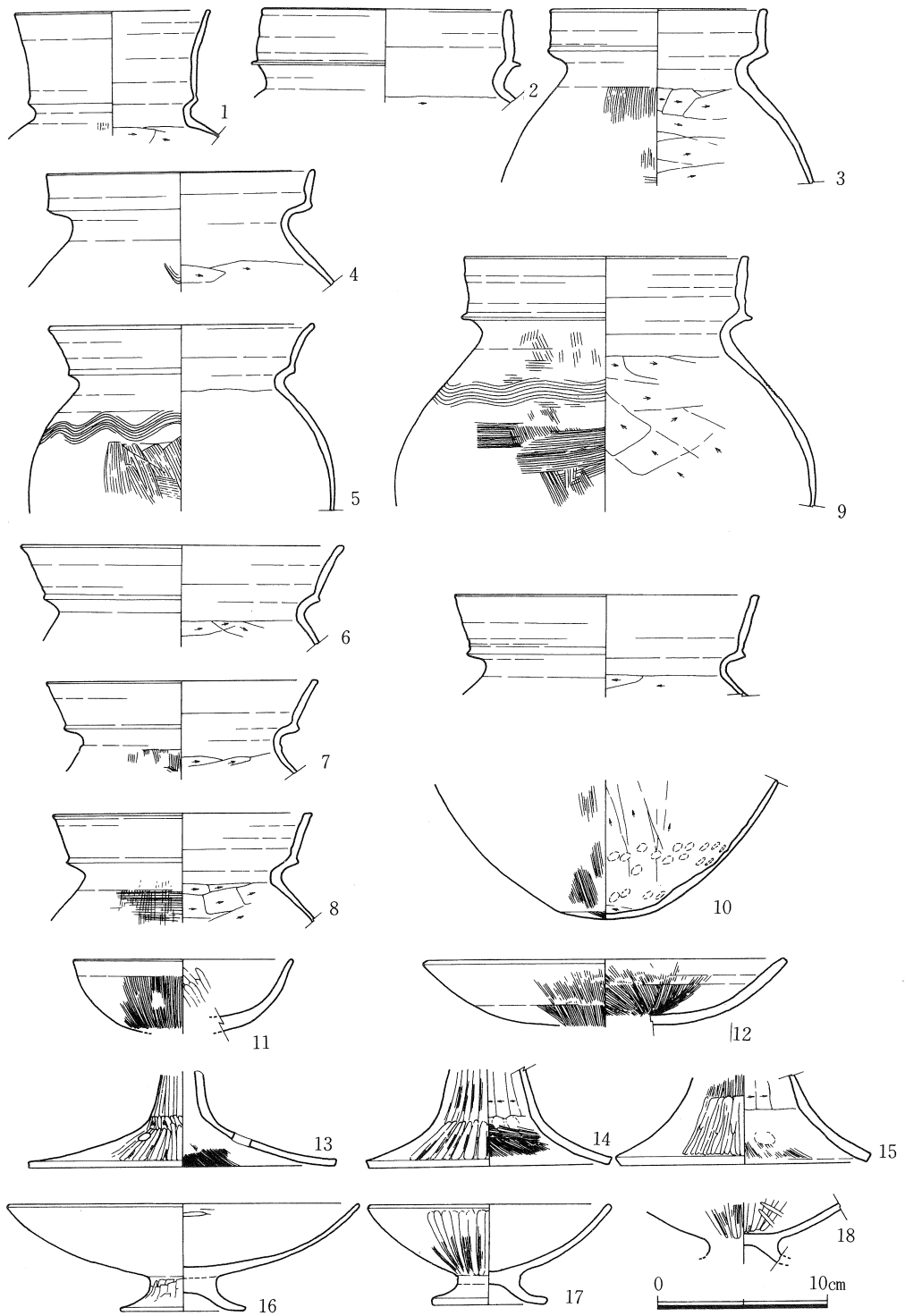
A-8区とB-8区の境界部に位置する。検出面から6cm上層にSK-32が、下層にはSE-03がほぼ重なる。周囲には様々な形態や規模の土坑がみられ、南西側にSK-34、西側にSK-30・31、北東側にはSK-36が、また、東側にはSD-13・14が隣接する。西壁の一部が後世の水田用暗渠によって掘削される。長さ222cm、幅残存169cm、深さ34cmを測り楕円形を呈するものと思われる。主軸は現況ではN-30°-Eを向く。断面形は全体的には椀状であるが、西壁では角をとって立ち上がる。また、東側は上面が若干削平されており、東壁は本来はもう少し立ち上がるものと思われる、埋土は8層に分かれ、第1~7層に炭片を含み、特に5.暗黒灰褐色砂質土に多く含まれる。

遺物は、足の踏み場もない程土坑内全域から出土しており、底面に貼り付いているものもみられるが、多くは第3・4層を中心として出土している。遺物には、壺、甕、高杯、低脚杯、鼓形器台、蓋の他に、砥石や5点ばかりの自然石が土坑内に散在し、燃え残りのような木片が第5層の上層で出土している。土坑の中央よりやや南西寄りに特に遺物が集中し、鼓形器台や甕が比較的まとまった状態で、また、口縁部を下に向けて出土している。なお、(4・15・23)は埋土中の出土である。

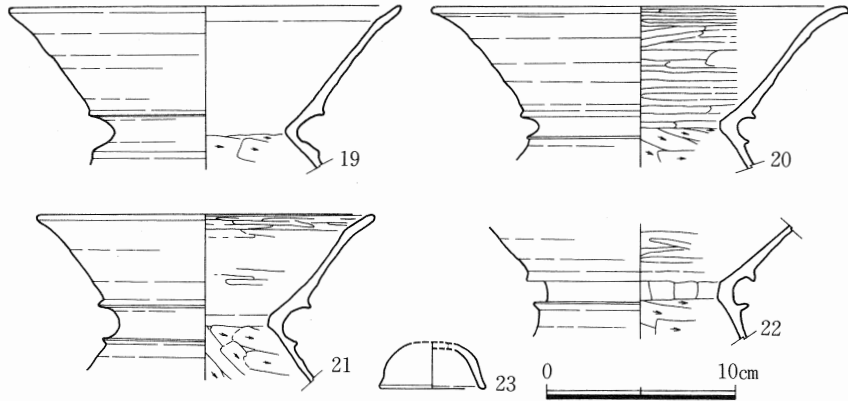
甕(2~10)は口縁部の形態から、わずかに内傾もしくは外傾するものもみられるが概してほぼ直立するもの(2~4・9)と、外傾もしくは外反するもの(5~8・10)とに分かれる。また、(2・3・6~10)は、口縁部の先端を外面からつまむことで端部は角張り気味であるが、顕著な平坦面をなすものは(8)程度である。これに対し(5)は口縁部先端を内面からつまみわずかながら肥厚させる。なお、(4・5)は口縁下端部の稜をつままない。高杯の杯部と思われる(11・12)は厚手でハケ目調整が顕著である。脚部(13・14・15)は外面縦ハケ目後ヘラ磨き、内面ハケ目後一部ナデ、脚柱部ヘラ削り調整である。(13)は脚柱部に比べ裾部が大きく広がり、3方向に外面から穿孔された円孔を裾部にもつ。低脚杯は杯部が大きく広がる皿状のもの(16)と椀状のもの(17・18)とがある。(16)は杯部と脚部とがきれいに剝離して出土しており、ある程度杯部が乾燥してから脚部を接合したものと思われる。杯部側には脚部が密着しやすいようにヘラ工具による刻み目を放射状に施す。鼓形器台(19~22)は外方に大きく開き、口縁部でさらに屈曲する受部と短い接合部をもつ。外面はヨコナデが内面はヘラ磨きが顕著である。(22)は(19~21)に比べて稜が鋭く接合部が長めである。蓋(23)は小片であるが内外面ナデ仕上げされ、天井部に小孔の一部が残る。砥石(24)は鼓形器台(21)の下から出土しており、両面に研ぎ筋がみられ凹状となる部分がある。

SK-34 (付図46)

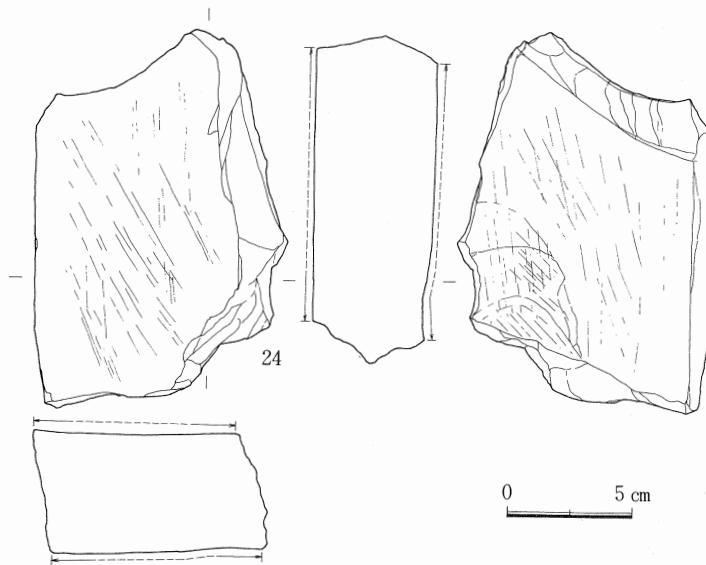
A-8区とA-9区の境界に位置する。試掘の際に、北西側を大幅に掘削される。いずれも残存値で、長さ219cm、幅138cm、深さ26cmを測り、長楕円形を呈するものと思われる。主軸は現況でN-3°-Eを向く。断面形は不整形な椀状である。底部は中央が楕円状に深く、東側に向かってわずかな凸面をもって立ち上がり、東壁は急角度をもってさらに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、



第50图 SK-33出土遗物实测图(1)



第51図 SK-33出土遺物実測図 (2)



第52図 SK-33出土遺物実測図 (3)

上層は1. 灰褐色砂質土、下層は2. 暗褐色シルト（炭片を多く含む）である。

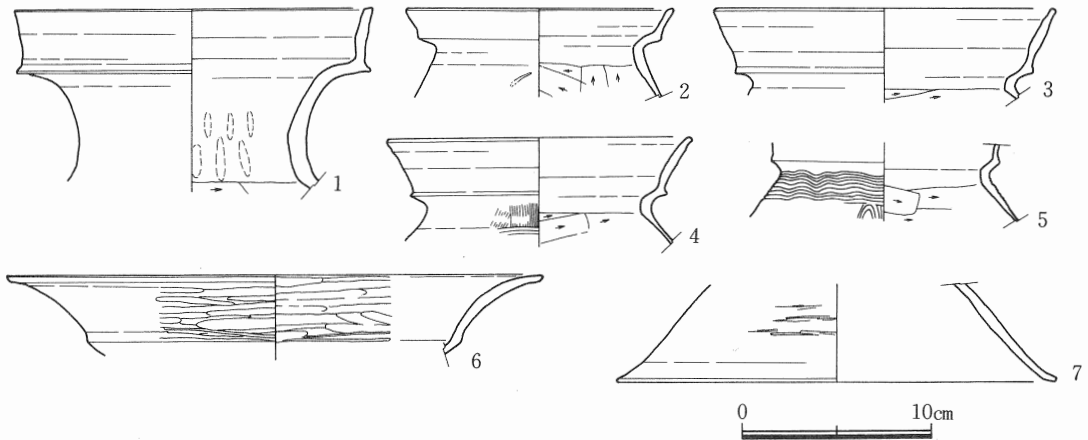
遺物は、第2層を中心として壁面に沿った状態で分散して出土し、壺（1）、甕（2～5）、高杯（6）、低脚杯、鼓形器台（7）、自然石がある。図化していないものの（付図a）は低脚杯、（付図b）は右下がりの叩き目が認められる肩部および胴～底部片である。（付図b）はかすかな平底をもち、外面は肩部から底部付近にかけて多量の煤が、内面は底部に多くの炭化物が付着する。壺（1）は口縁上端部が平坦な面をもち、口縁下端部の稜は鋭くつまみ出される。甕（3・4）は口縁端部をつまんでヨコナデする。甕（5）は肩部に10条の波状文が2段に施される。

SK-35（付図48）

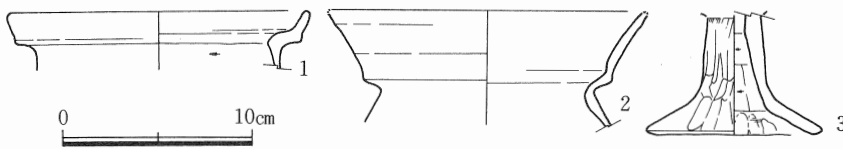
B-8区に位置し、南側にSK-36、SD-14が隣接する。長さ157cm、幅126cm、深さ11cmを測り、西側が尖る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-45°-Eを向く。断面形は緩やかな角度の逆

台形で、底面は若干の凹凸がみられる。埋土は6層に分かれ、第1・2・4・6層で炭片を含み、とりわけ1・2・6層で多量である。

遺物は南東側に片寄る傾向が見受けられ、甕(1・2)や脚部(3)、その他の胴部小片が出土している。甕(1・2)は口縁下端部の稜はつままず、特に(1)は1~2mmの砂粒を多く含み胎土が弥生的である。高杯の脚部(3)は、形態が比較的新しい様相であることや埋土の上部で出土していることから混入の可能性があると思われる。埋土中から炉壁と思われる小片が出土している。



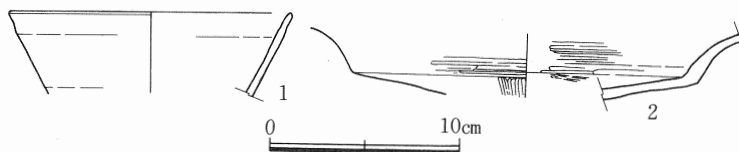
第53図 SK-34出土遺物実測図



第54図 SK-35出土遺物実測図

SK-36 (付図49)

B-8区の中央部に位置する。長さ92cm、幅54cm、深さ4cmを測り、南側が若干広がる不整形な楕円形を呈する。主軸はN-10°-Eを向く。断面形は皿状である。埋土は、1. 暗灰褐色砂質土と2. 淡灰褐色砂質土に分かれる。底面に貼り付いた状態で、赤彩された壺の口縁部(1)、高杯の杯部(2)、その他の土器小片が出土している。



第55図 SK-36出土遺物実測図

SK-37 (付図50)

B-9区の北東部に位置する。SD-12に中央部をほぼ直行して切られ、SD-13の東壁の一部を切る。長さ236cm、幅95cm、深さ13cmを測り、不整形な長楕円形を呈する。主軸はN-53°-Wを向く。断面形は逆台形で、壁は比較的急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。埋土は4層に分かれ、上層から、1. 灰色砂質土(炭片を含む)、2. 灰褐色砂質土、3. 暗灰色砂質土、4. 褐色砂質土である。底面近くで円形透かし孔のある赤彩された高杯脚部(1)と、図化していないものの甕の頸部小片が検出された。その他に埋土中から土器小片が出土している。

SK-38 (付図52)

A-9区の西端に位置する。東側と西側および北壁を排水用の溝に掘削され、幅34cm程度が残るのみである。南北225cm、深さ13cmを測る。断面形は現況では皿状であるが、土坑上面が削平されている可能性があることから、南側の壁はさらに立ち上がるものと思われる。埋土は2層に分かれ、南側の一部で1. 灰褐色砂質土が堆積するが、基調は2. 暗灰色砂質土(炭片を含む)である。

遺物は、土坑の北寄りで底面から若干浮いた状態で出土しており、甕、高杯、自然石がある。図化していないものの、(1)とは別個体の甕と思われる肩~胴部5分の1片が、外面を上に向けて形をとどめたまま、角礫に囲まれるように出土している。外面は細かな縦ハケ目調整で煤が付着する。内面はヘラ削りで、底部近くに炭化物が多く付着する。甕(1)は、口縁部の外面上端部をつまむことによって端部がM字状の面をなす。高杯の杯底部(2)は、上外方へ大きく開き口縁部でさらに外反するものと思われ、外面はハケ目、内面はヘラ磨き調整である。

SK-39 (付図51)

A-9区の中央部に位置し、南西側にSK-40が隣接する。長さ87cm、幅50cm、深さ6cmを測り、楕円形を呈する。主軸はN-82°-Wを向く。断面形は皿状であり、特に西側はなだらかに立ち上がる。埋土は褐色シルト一層である。遺物はみられなかった。

SK-40 (付図53)

A-9区に位置し、北東側にSK-39が、南側にSD-15が隣接する。長さ133cm、幅63cm、深さ10cmを測り、長楕円形を呈する。主軸はN-34°-Eを向く。断面形は皿状だが、東側では段をもって急角度で立ち上がる。埋土は暗灰色砂質土(炭片を多量に含む)一層である。底面からやや浮いた状態で、土器小片が出土している。

SK-41 (付図54)

B-9区に位置する。SD-17の南壁の一部およびSK-52の西側を、SK-54の北側の一部をそれぞれ切る。上層にはSD-16が重り、東側にはSK-42が隣接する。長さ65cm、幅55cm、深さ9cmを測り、不整形な楕円形を呈する。主軸はN-33°-Eを向く。断面は逆台形で、底面は平坦である。埋土は淡黄褐色砂質土一層である。埋土中から底部小片が出土している。

SK-42 (付図55)

A-9区に位置する。SK-52およびSK-53の北側を一部切る。北側にSD-16が、東側にSK-41が隣接する。長さ73cm、幅56cm、深さ19cmを測り、東側がやや角張る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-65°-Eを向く。断面形は椀状である。埋土は淡黄褐色砂質土一層である。遺物はみられなかった。

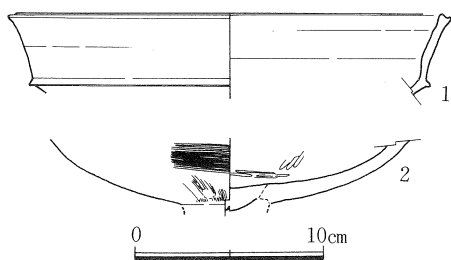
SK-43 (付図56)

B-10区の南に位置し、同様な規模の土坑SK-44の北側を切る。土層断面では、SK-44内に砂質土が堆積した後にSK-43が掘り込まれるといった様相を示す。また、下層にはSD-19の南端が重なる。長さ87cm、幅75cm、深さ17cmを測り、不整形な楕円形を呈する。断面形は整った椀形である。埋土は5層に分かれ、第2・5層で多量の炭片を含む。南西側の壁に貼り付くように、高杯もしくは器台の口縁部(1)が出土している。褐色で、外面はヨコナデ、内面は縦ヘラ磨き後口縁部横ヘラ磨き調整である。その他に、埋土中から土器小片が出土している。

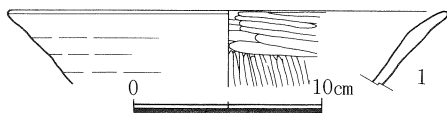
SK-44 (付図56)

B-10区とB-11区との境界部に位置する。若干規模の大きいSK-43に北側を切られる。いずれも残存値で、長さ63cm、幅55cm、深さ9cmを測る。平面形は不整形な楕円形、断面形は中央部に盛り上がりのある不整形な浅い椀状を呈するものと思われる。埋土は2層に分かれ、上層から6. 灰褐色砂質土、7. 暗灰色砂質土(炭片を多量に含む)である。

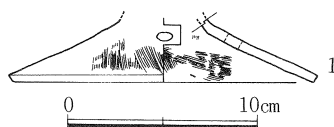
遺物は第7層を中心として底面から若干浮いた状態で出土しており、低脚杯もしくは高杯の口縁部(1)や、甕の口縁・胴部小片がある。(1)は褐色で、外面は縦ハケ目後口縁部ヨコナデ、内面は剥落のため調整不明である。



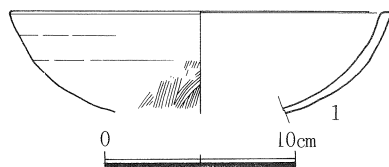
第57図 SK-38出土遺物実測図



第58図 SK-43出土遺物実測図



第56図 SK-37出土遺物実測図



第59図 SK-44出土遺物実測図

SK-45 (付図57)

B-10区の南西端に位置する。東側にSK-43・44、SD-19が、西側にSD-20が隣接する。長さ116cm、幅71cm、深さ28cmを測り、若干不整形な楕円形を呈する。主軸はN-88°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面は中央部が凹む。埋土は6層に分かれ、第2・4~6層に炭片を含み、特に第4層に多くみられる。

遺物は底面から若干浮いた状態で主に第4層から出土している。甕の口縁部(1)、図化していないものの低脚杯小片、その他土器小片がある。(1)は外方へ開き、上端部でつままれてさらに外反する。また、稜は鋭く下方へつまみだされる。内外面ヨコナデ調整である。

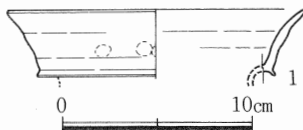
SK-46 (付図58)

A-10区の南に位置する。東壁をSD-20に切られる。西側にはSD-21が隣接する。長さ83cm、幅残存57cm、深さ5cmを測り、南西側が張り出す不整形な楕円形を呈する。主軸はN-2°-Wを向く。断面形は皿状で、埋土は淡灰褐色砂質土一層である。遺物はみられなかった。土坑の上面は削平を受けている可能性がある。

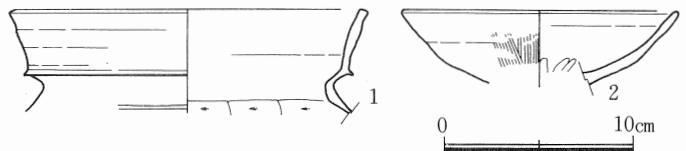
SK-47 (付図59)

A-11区とB-11区の境界部に位置する。西端部を排水用の水抜き穴によって掘削される。長さ残存186cm、幅120cm、深さ20cmを測り、やや不整形な楕円形を呈する。主軸はN-87°-Wを向く。断面形は全体的に不整形ではあるが碗状である。南西部が楕円状に深く、北東側に向かってゆるやかに立ち上がる。埋土は北側から流れ込んだ様相を示し、6層に分かれる。4. 暗灰色シルト(炭片を多量に含む)の上に、炭片を含まない2. 暗灰色砂質土と3. 淡黄灰色砂質土を挟んで1. 黒灰色砂質土(炭片を多量に含む)が堆積する。

遺物は、土坑北東部の底面から若干浮いた状態で出土しており、甕の小片や低脚杯(2)がある。埋土中から、甕の口縁部(1)や胴部片が出土している。(1)は口縁端部が角張って面をなし、稜は鋭くつまみ出される。また、肩部に平行沈線を施す。(2)は内面に赤彩が認められ、外面を上に向けて出土している。



第60図 SK-33出土遺物実測図



第61図 SK-47出土遺物実測図

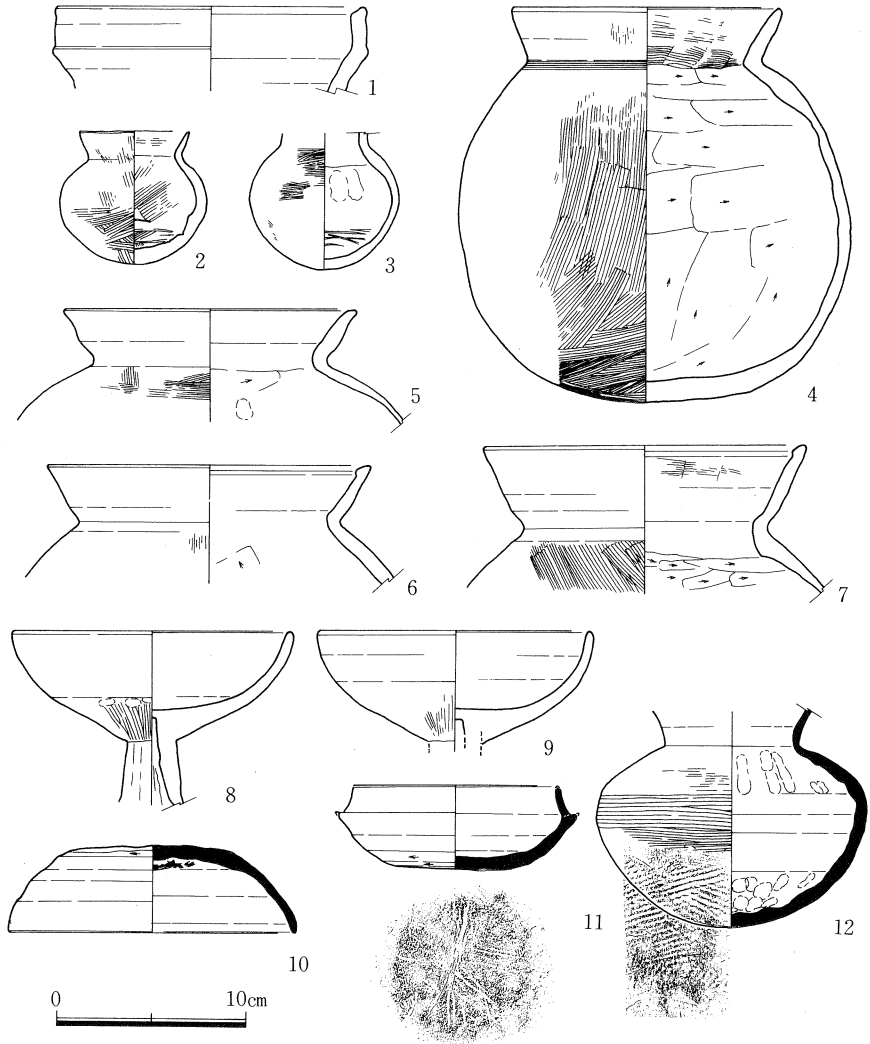
3. 溝状遺構

SD-02 (付図2)

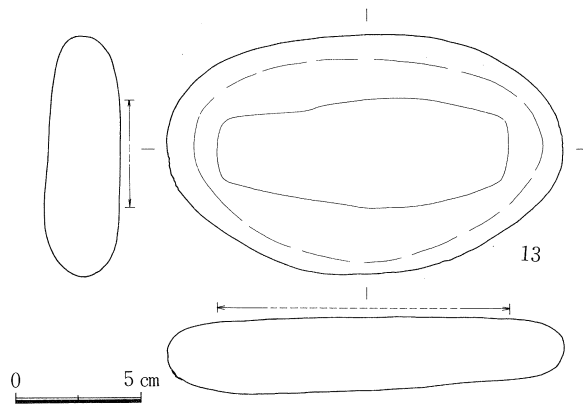
A・B-13区の中央部やや北寄りに位置し、調査区を東西方向に横切る。下層にひとまわり幅の広いSD-03が重なり、SD-03内に土砂が堆積した後、SD-03を検出した面より上層からSD-02が掘り込まれている。SD-03が埋没した後中央部やや南寄りを掘り込んで溝として再び活用したものと思われ、主軸を同じくする。検出長9.72m、最大幅3.32mを測り、主軸はN-79°-Eを向く。溝の幅はほぼ一定で直線的な溝ではあるが、東端部で若干狭ばる傾向がみられる。深さは西側の土層断面で0.71mを測り、断面形は椀状である。底面の両端部の比高差はほとんどなく、わずかに中央部で凹凸があり、4cmばかりの高まりがみられる程度である。溝からは、多くの木製品や自然木、土器、石製品が出土しており、全体的に分散したような出土状況であった。

土器は、出土遺物の点数からみて数が少なく、また完形の土器もみられなかった。壺、甕、高杯、須恵器杯蓋、杯身、壺がある。(1)はわずかに内傾する厚手の口縁部をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。(2・3)は小型の壺で、(2)はSD-02の肩の北東側の肩で出土したものである。(2)は内外面ハケ目調整、(3)は外面ハケ目、内面はナデで、底部にヘラ工具の痕が確認される。ともに赤彩は施されない。甕(4~7)は、いずれもくの字口縁で、(6・7)は内面に折り込みがみられる。(4・7)は口縁部内面に横ハケ目後ヨコナデである。(4)は頸部に回転を利用したハケ目を施す。なお、(4)はSD-03の埋土中から出土した破片と接合している。高杯(8・9)は、ともに赤彩された椀状の杯部をもつが、内面に暗文は認められない。脚部とは差し込み式による接合方法をとる。蓋杯(10)は天井部外面はヘラ削り後ナデ、天井部内面は同心円文工具痕が残る。杯身(11)は全体的に磨滅がすすみ端部の形状が不明瞭である。外面底部3分の1下半をヘラ削りし底部にはヘラ記号というよりむしろ焼成後のキズ痕が認められる。磨滅著しく煤が付着する。壺(12)は肩が張り、底部は尖り気味の丸底である。頸~最大胴部にカキ目を施し、後にナデる。底部外面に叩き目が残る。砥石(13)は偏平な円礫の片面だけを使用している。

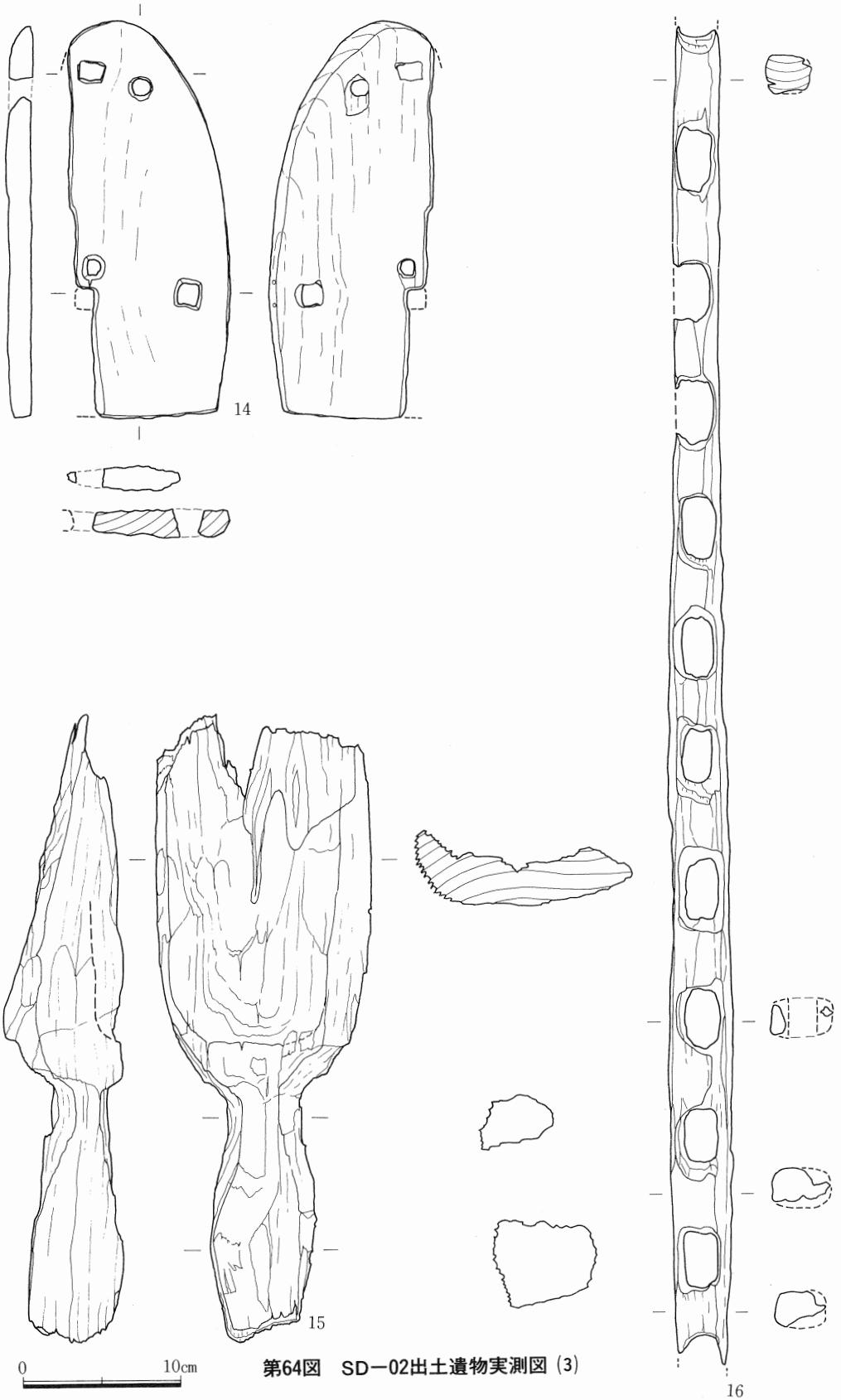
自然木の他に、田下駄、匙形木製品、方形孔が等間隔にみられる木製品、木錘、手網杵、火鑽板、その他の木製品が出土している。田下駄(14)は足先部分が丸く加工されており、足先部分に2孔、かかと部分に3孔が穿けられる。匙形木製品(15)は全体的に腐朽がすすむが、柄に対して底部は先端へ向けて斜めに立ち上がり、削り抜き部分は浅く柄に対して平行であり、縦長の塵取り状を呈する。糞掬いの可能性も考えられる。(16)は全体的に腐朽がすすみ、縦長の方形孔がほぼ等間隔にみられる。大足の杵板、代掻等の可能性が考えられる。木錘(17・18)はともに腐朽がすすむものの、(17)は(18)と比較して中央部分を削り出しただけの単純な作りである。これに対し(18)は片方部分の残存であるが、端面は丸みをもたせ、中央部へ向けて円錐状に丁寧加工する。左右対称となるものと想定される。手網杵(19)は、芯を残して内側を削った枝に刻みを入れて曲げたもので、合わせ部分は内外から細く削り出す。全体的に焼け焦げがみられる。火鑽板(20)



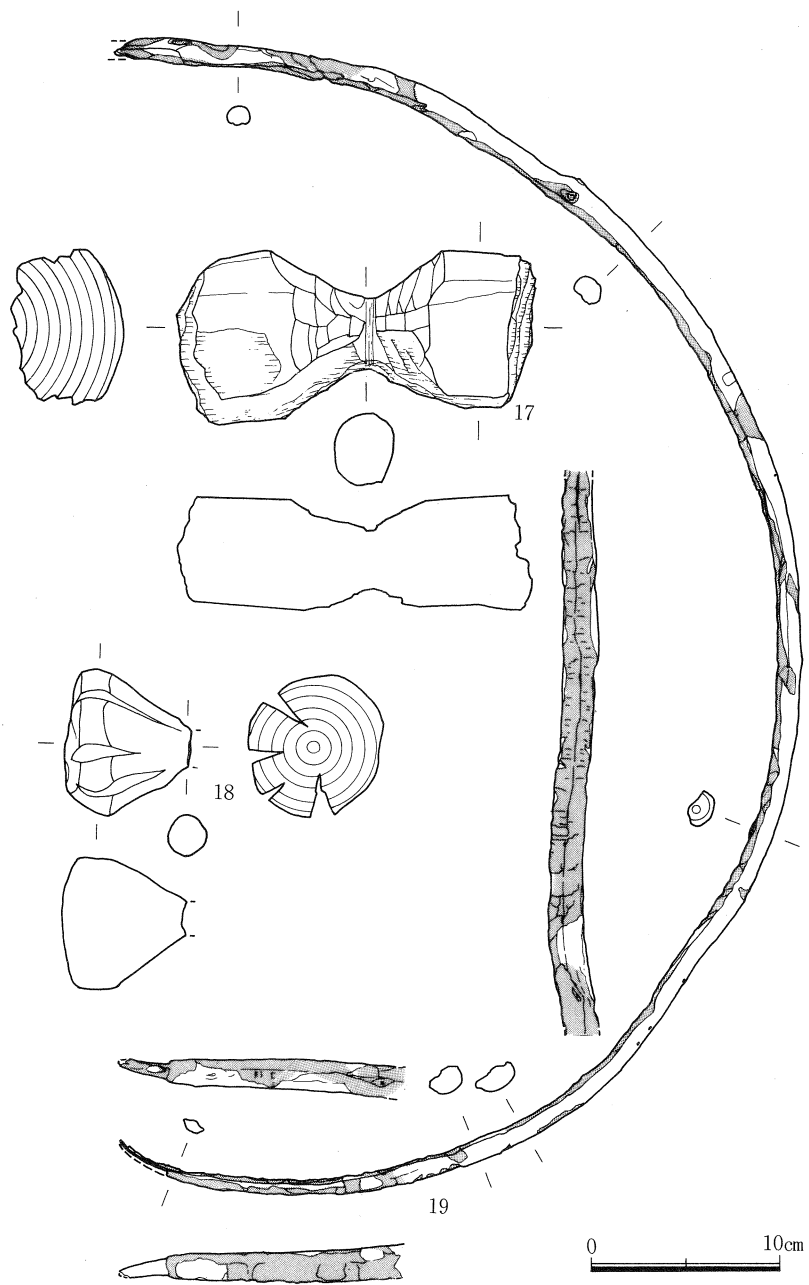
第62図 SD-02出土遺物実測図(1)



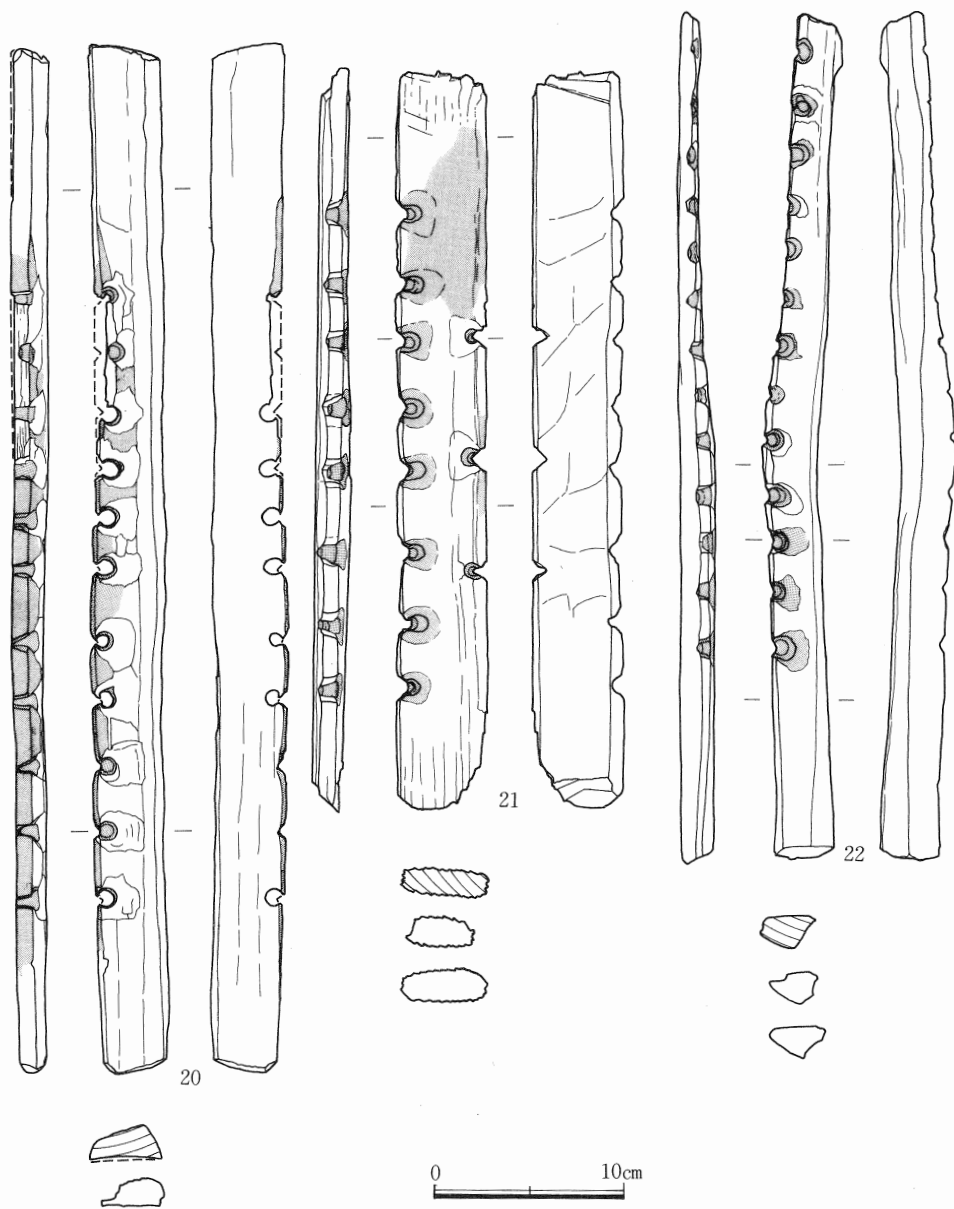
第63図 SD-02出土遺物実測図(2)



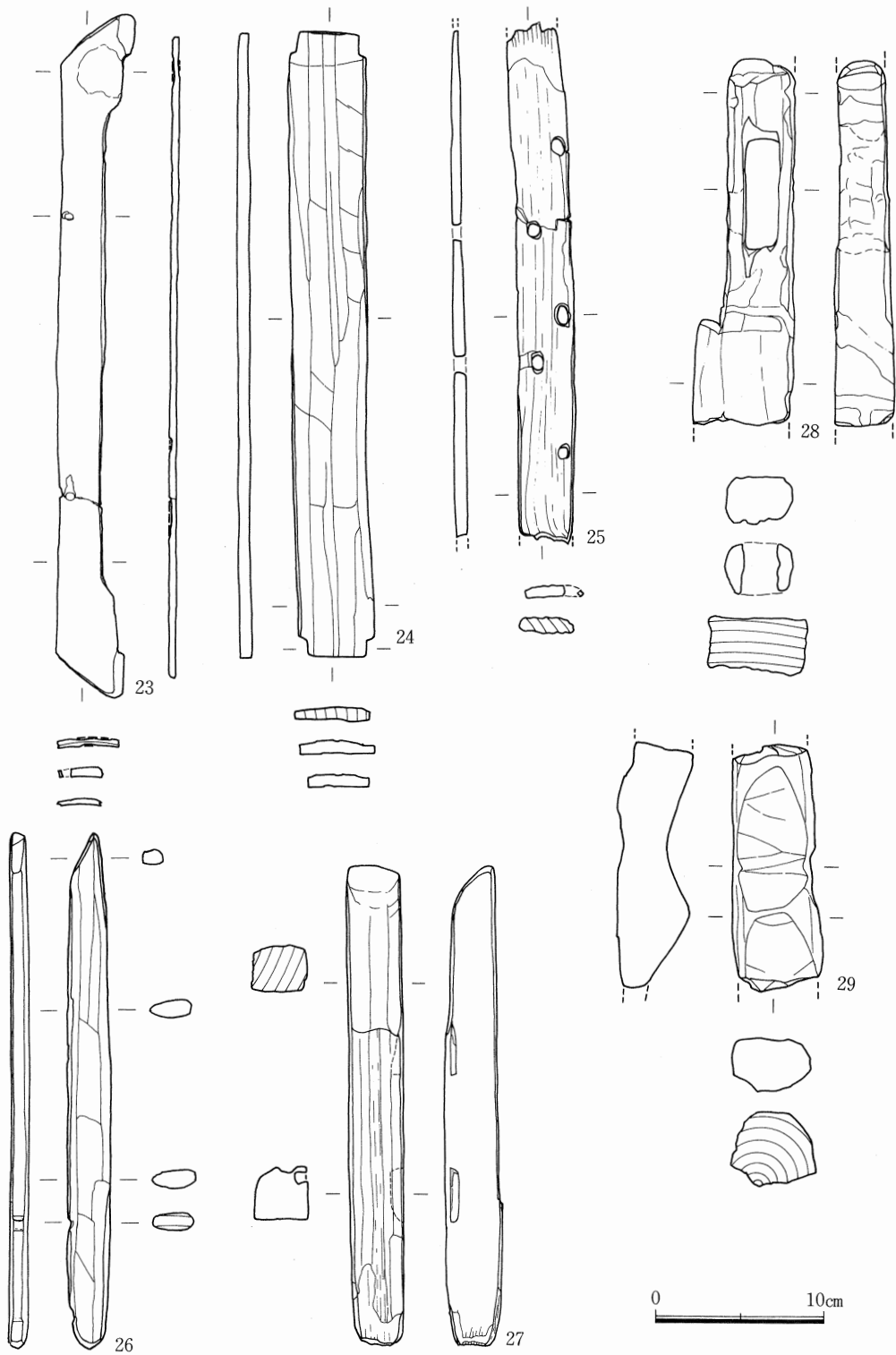
第64图 SD-02出土遺物実測図(3)



第65图 SD-02出土遺物実測図(4)



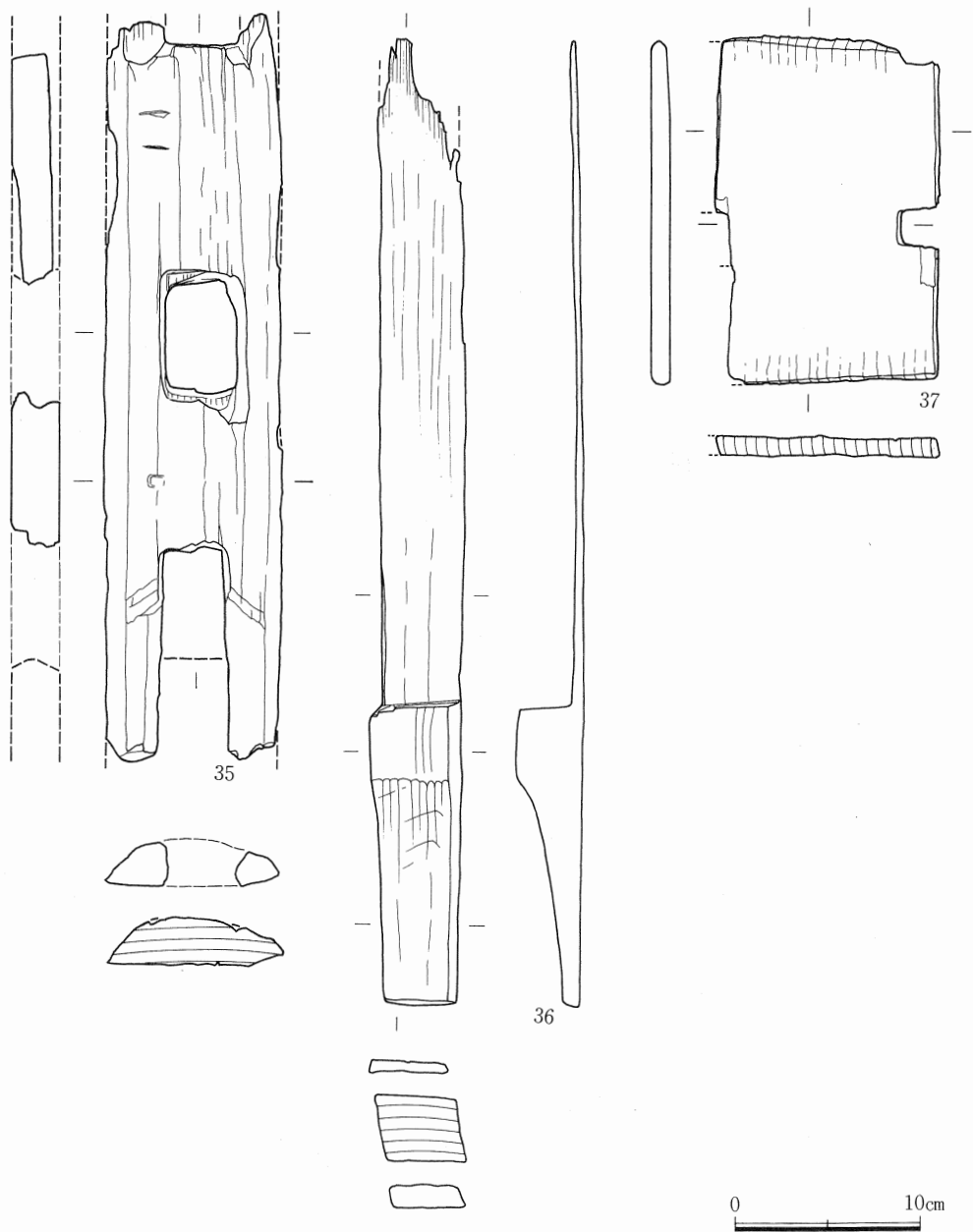
第66図 SD-02出土遺物実測図 (5)



第67图 SD-02出土遺物実測図(6)



第68图 SD-02出土遗物实测图(7)



第69図 SD-02出土遺物実測図 (8)

~22) は、いずれも両端を切断した角材を用いたもので、側面からV字形の切り欠きを入れ火鑽孔とし、3点ともによく使用されている。(21) は両側を使用し、(22) は断面三角形の破材のような角材を利用している。(23~37) は部材および用途不明木製品である。(23) はハンガー形をした薄板で短辺側に2孔を穿ける。(24) は四隅に切り欠きを入れて柄を作る。表裏面に削痕が認められる。

(26・27) はともに先端を斜めに削り、もう一端は(26)は尖り気味ではあるが丸く加工し、(27)は切断面である。(26)はわずかな切り込みが2ヶ所あり、(27)は長軸に沿って縦長柄穴が2ヶ所に削り抜かれる。(30～34)は端部を削り出し尖状もしくは突起状を呈する木製品で、(33・34)は薄板で、(31～33)は表裏面に削痕が認められる。部材(35～37)は断片ではあるが、(35)は方形の柄穴が3ヶ、(37)は対する両側にコ字形の切り欠きが認められる。(36)は端部を残してL字形に加工し、端部は先端へ向けて斜めに削る。

SD-03 (付図30)

A・B-13区に位置し、調査区を東西方向に横切る。検出長12.94m、上端幅最大7.06m、下端幅5.8m前後、深さは西側の土層断面で1.01mを測る。主軸はN-79°-Eを向く。断面形は逆台形で、南壁に比べて北壁は急角度をもって立ち上がるが、底面は平坦で、南北の横断底面および溝の東西両端部の比高差はほとんど見られない。溝の幅はほぼ一定で、比較的整った直線的な溝である。また、溝の両壁に沿って一部杭列が認められ、有頭状木製品(91)が有頭部を下に向けて出土している。遺物の多くは溝の北側に片寄って出土しており、南側にも壁際にはみられるものの溝の中央部から南壁近くにかけては遺物のみられない部分がある。溝内に土器や木製品等が土砂とともに堆積していく過程で水の流れは南側に片寄っていたものと考えられる一方、SD-02が掘り込まれた際に一緒にさらえられた可能性も否めない。いずれにしても、出土遺物には、生活に密着したような木製品や祭祀の色合いの強い遺物が多々出土している。人工的に掘り込まれた水路であるとともに、ある程度生活に係わった形で機能していたものと思われる。

出土遺物には、土器、木製品、石製品がある。

土器は、上層のSD-02では破片で分散して出土しているのに比べ、甕(4～6)のようにまとまった状態で出土しているものもあり、また、赤彩された高杯が多いことも注目される。壺は赤彩された(1)のみで、器壁厚く底部を中心として煤が多く付着する。甕はいずれも体部が球形で、口縁部は退化した複合口縁とくの字状口縁とに分かれる。くの字状口縁部の(8)は口縁端部が内側に肥厚するが、端部を外側からつまんでヨコナデするに留まり内面の折り込みが未処理である。体部外面は斜位のハケ目を数段に分けて施しており、回転を利用したような横ハケ目はみられない。内面は口縁部ヨコナデであるが横ハケ目を残すもの(2・3・6・8)がみられ、体部にもヘラ削り後に疎なハケ目を施すもの(5・6)がある。また、くの字状口縁部をもつ(9・10)は器壁薄く異種な土器であり、混入の可能性がある。(11)は丸底で、体部は縦長の球形を呈するものと想定される。体部外面に縦位の鋭利な工具痕が認められ、内面は炭化物が厚く付着する。高杯はいずれも赤彩され、杯部に段をもつ(12～15)と杯部が椀状のもの(16～18)とに分かれる。また杯部内面に暗文を施すもの(13～16)と暗文は認められないものがある。脚部も径が大きく調整も全体的に丁寧なもの(19)と径が9cm前後で、高さも比較的低く、裾部からハの字状に大きく広がり、指頭圧痕が顕著なもの(20～22)とに分かれる。椀(23・24)は椀状の高杯に比べて若干深く、(23)

は赤彩される。(25)は器種不明の灰褐色の土器で、内面屈曲部に小孔を刺突した面をもつ突起がみられる。外面は稜以下ヘラ削りである。

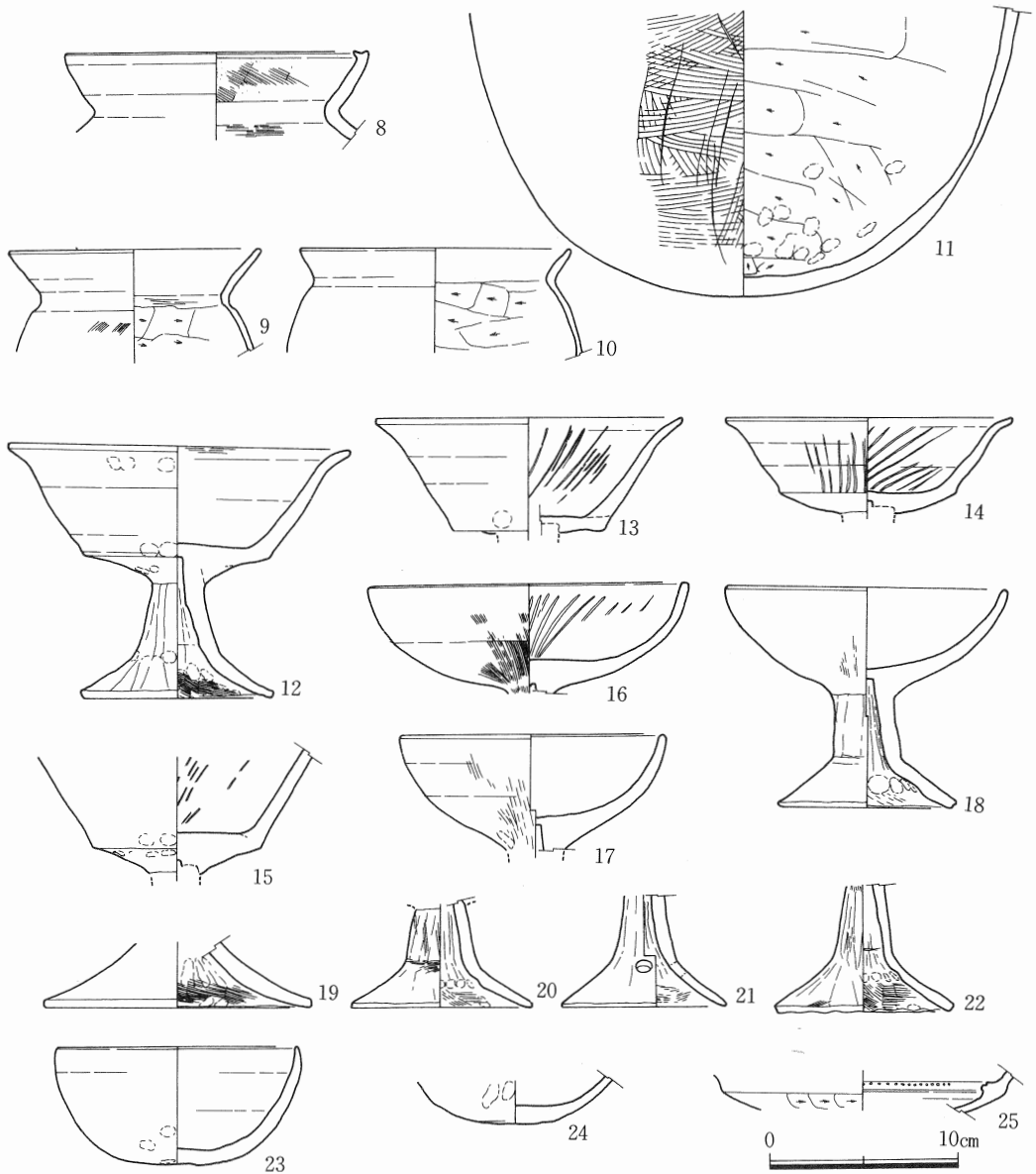
木製品は多種多様に及び、農具、工具、生活用具、祭祀用木製品、建築材、杭、その他用途不明木製品がある。ナスビ形着柄鋤(26)は、全体的に腐朽著しく細部は不明瞭であるが、刃先は欠損するものの一ツ刃である。又鋤(27)は、現状では四ツ刃が確認される。柄穴は横長の方形で、着柄の角度は60°である。横槌(28)は、柄に対し体部が若干長く、柄尻の端部は太く加工される。木錘(29・30)は若干形態が異なり、(29)は削る部分とそうでない部分とが明瞭でなく雑な加工で両端部が丸く削り出されるのに対し、(30)は左右対称の形態で両端部は平坦に加工される。(31~36)は田下駄もしくは田下駄と考えられる木製品であり、便宜上足板のみから成るものを狭義の意味での田下駄、足板のまわりに四角く組んだ枠がつくものを大足と呼ぶこととした。大足の枠の一部と思われる(31・32)は、等間隔に方形孔を穿けるが、(31)は方形孔の長さの方が方形孔のみられない間隔部分より長い。これに対し、(32)は方形孔が小さい。(31)はSD-02で同様な形態の木製品が出土しており、これは大足の枠にしては長過ぎることから代播の可能性があり、(31)もそうした木製品の一部とも考えられる。大足の足板(33)は両端部に枠取り付け孔が各1孔と鼻緒孔が3孔ある。足をのせる面がレンズ状のふくらみをもつ。田下駄と思われる(34)と田下駄(35)は形状や質感が似ているが、(34)は切断された端部寄りに平行する4孔を穿つ。(35)はかかと側は切断されたままであるが足先側は隅を丸く加工する。鼻緒孔3ヶ以外にかかと側中央に1孔と磨滅する側面に浅いV字形の切り込みがみられる。両面に削痕が認められるが、図化した面の裏側は全体的に磨滅する。(36)は腐朽がすすむが、足先側が斜めに加工され、鼻緒孔3ヶを穿つ。(37~39)は削り抜き木製容器で、(37・39)は把手が認められる。(37)は大形で舟形を呈し、短辺の上端部に把手が削り出される。約半分の残存であるが、片側もほぼ同様な形態となるものと想定される。(38)は腐朽がすすみ、削り抜き部分は直線的に底部へ続く。(39)は短辺の片側のみに把手が削り出され、削り抜き部分は断面逆台形を呈する。(40~42)は桶の一部で、(40・41)は側板、(42)は径6cm前後の底板である。(40・41)は端部に凸帯を削り出し、(40)は細かく丁寧な削り調整痕が残る。匙形木製品(43)は把手部分を中心とした残存であるが、削り抜き部分は楕円形になるものと想定される。(44~52)は工具と思われる木製品である。(44・45)は把手と考えられ、ほぼ中央部に方形の柄穴が穿けられる。(44)は柄穴内に柄の一部が残る。いずれも両端部に明瞭な敲打痕はなく、未使用の木槌と考えることもできるが不明である。(46・47)は斧柄であり、着装部を欠損する。(47)は斧台部寄りの互い違いの位置に小孔を2ヶ穿孔する。針状木製品(48)は、頭部を丸く削り出し、片方は針状に尖らせる。楔形木製品(49)は、一端は切断され両面から先端へむかって楔状に削り出すが、使用痕は認められない。(50)は篋状を呈するが中央部に稜がみられ、櫛の水かき部分の先端と考えられる。篋(51・52)は、柄の断面が(51)は円形で、(52)は板状であり篋先の先端は焼け焦げている。火鑽板(53~58)は、いずれも端部が切断され、側面からV

字形の切り欠きを入れ火鑿孔とする。(53)は(54~58)と比べて厚みのあるしっかりした角材を利用して、中央部のみに火鑿孔がみられそのうち1孔は未使用である。(59~65)は祭祀に用いられたと考えられる木製品であり、(59~62)は刀を、(63・64)は船を、(65)は鳥を模したものである。(59)は切っ先部分を欠損し、刀身は背と刃の区別が不明瞭であるが、把間は背側に湾曲し把頭は半円状となる。(60・61)は形状が類似し、(59)に比べると作りが丁寧である。把頭は頂部が平坦で方形を呈し、把間は背側に湾曲する。刀身は背と刃、関の表現がみられる。また、(60)は先端が鯉切っ先で、刀身断面ははレンズ状を呈する。(62)は刀が鞘に入った状態を表現したもので、把頭、鞘口金具、鞘尻金具を方形に削り、断面楕円形のその他の部分と区別をつけている。(63・64)は波切り板をもち、準構造船を模したもので、形態が類似し同様な質感をもつ。しかし、(63)は縦断は底部が波切り板先端部にいたるまで平坦であるのに対し、(64)は波切り板に沿って立ち上がりがみられる。さらに断面は削り抜き部分はともにV字形であるが、底面と側面との区別が(63)はみられないが(64)は明瞭で、浅いV字形を呈する。また、(64)には、意図的にあけたものか削り抜く段階で削り過ぎてしまったのかは不明であるが、底部に薄くなって穴があいている部分がみられる。(65)は退化した鳥形木製品で、上下の切り欠きによって頭と体部を分ける。全体的に湾曲する。(66~68)は丸太材で、(66・67)はそれぞれ2、3方向から柄を削り出す。(68)は交差した紐状の圧痕が残る。(69~72)は杭および杭状の木製品である。(69)はSD-02の北岸で出土した立杭で、一端は切断され、中央部に断面方形の溝と角部に側面にかけてL字形に穿孔された柄穴2ケがある。また、(71)は方形の柄穴が認められ、(70)同様、転用材と思われる。(72)は一端を切断し、全面に丁寧な縦位の削りがみられる杭状木製品である。(73~84)は何らかの部材と考えられ、残存が断片のものもあるが、基本的に左右対称の形態を呈すると思われるものが多い。(73~78・80・84)は、棒あるいは板材状の端部を削り、柄あるいは柄穴状の加工が両端部に作り出されるものと想定される。(76)は端部の柄に2ケの目釘穴があり、^{かせ}棒と考えられる。(79)は山形を呈し、短辺側中央部に方形孔ほかその両側に大小の孔が穿孔される。長辺側は焼け焦げる。(81・82)は表裏面に削痕が残り、(81)は側面寄りに方形小孔が、(82)は中央に縦長の方形孔が穿孔され、端部の一角にL字形の切り欠きがみられる。(83)は腐朽著しいが一端は三角形に加工され、両面から削り込まれた方形孔の片側側面部分が残る。(84)は側面が湾曲して両端部に方形孔を穿ち、交差した紐状の圧痕がみられる。(84~112)は用途不明木製品である。(87~91)は有頭状に削り出した端部をもち、(91)は北岸の立杭として有頭部を下に向け出土している。(91)を除いて有頭部は粗雑な作りである。(92)は先端へ向けて削り込みがみられ、先端部は丸く加工される。(93)は側面寄りに小孔5ケが穿孔される。(94~104)は先端部に削り込みがみられる等加工の痕がみられる棒状もしくは断面楕円形の木製品である。(94・95)は先端部を両側面から丁寧に削り、(101~103)は断面多角形の棒状に加工する。(104)は先端部が有頭状に削り出され、SK-27出土の串状木製品と形態が類似する。(105)は断面円形の棒状木製品で、両端部にくびれを

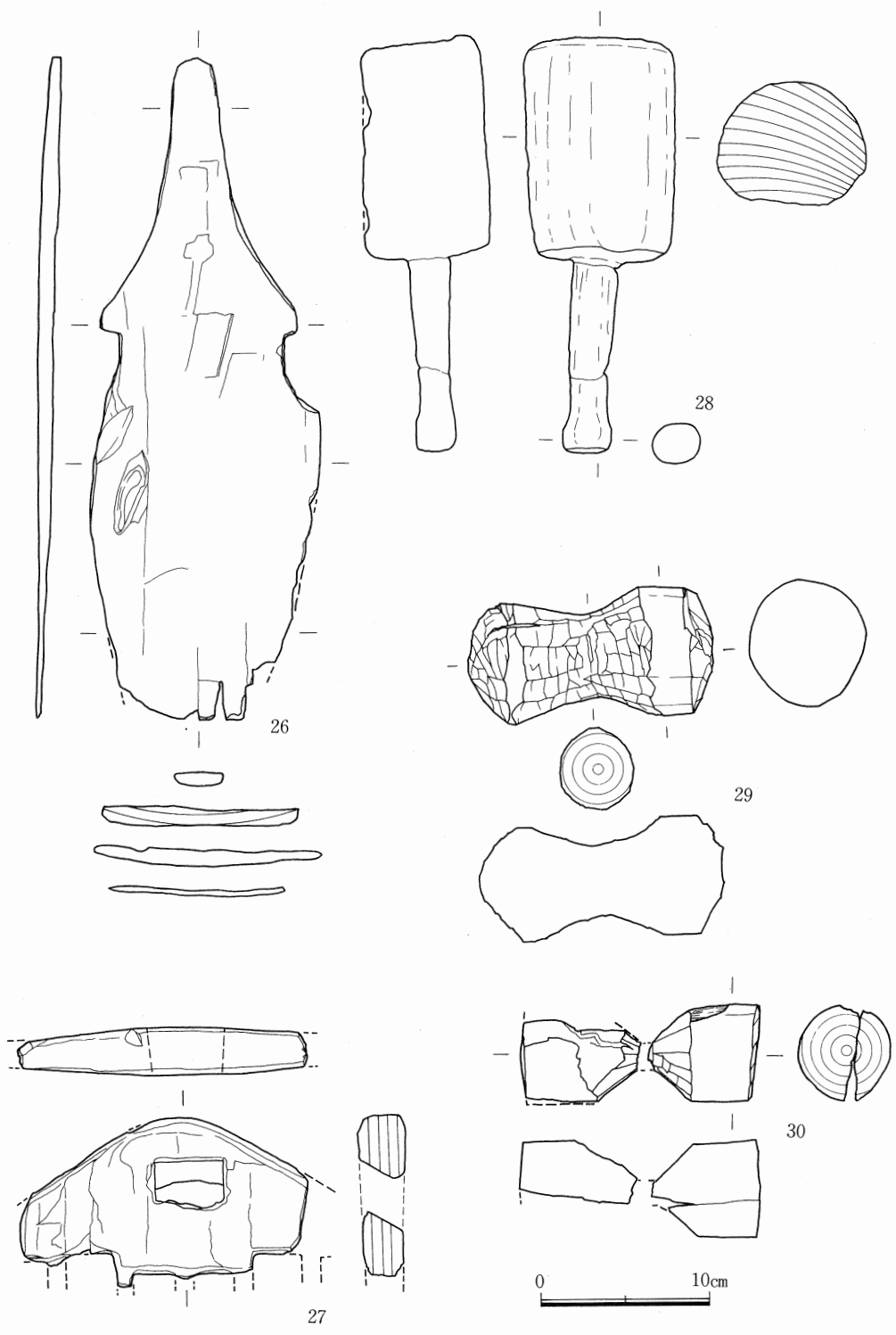


第70图 SD-03出土遺物実測図(1)

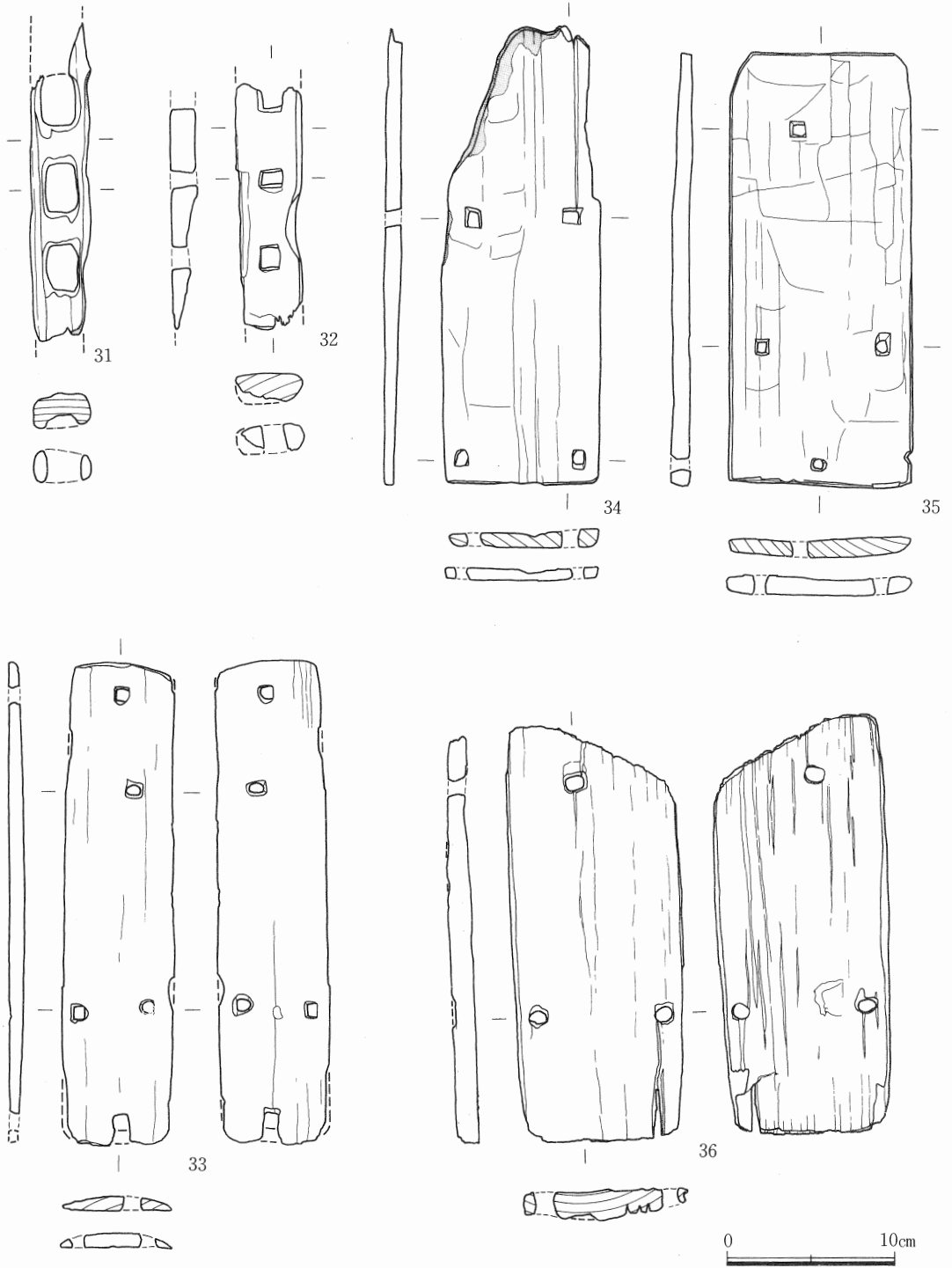
入れて有頭状に加工し、幅広の端面は線刻による綾杉文で装飾される。(106・107・110)は側面に抉りがみられる。(108)は、体部に対し柄穴が大きく小型であるが、把手状の形態をとる。(109)は両端部を丸く加工する。(111)は腐朽著しいが山形を呈し、木目の詰まった材を用いている。(112)は丸太材の一端を切断し、もう一端は先端へ向けて片面から削り出す。



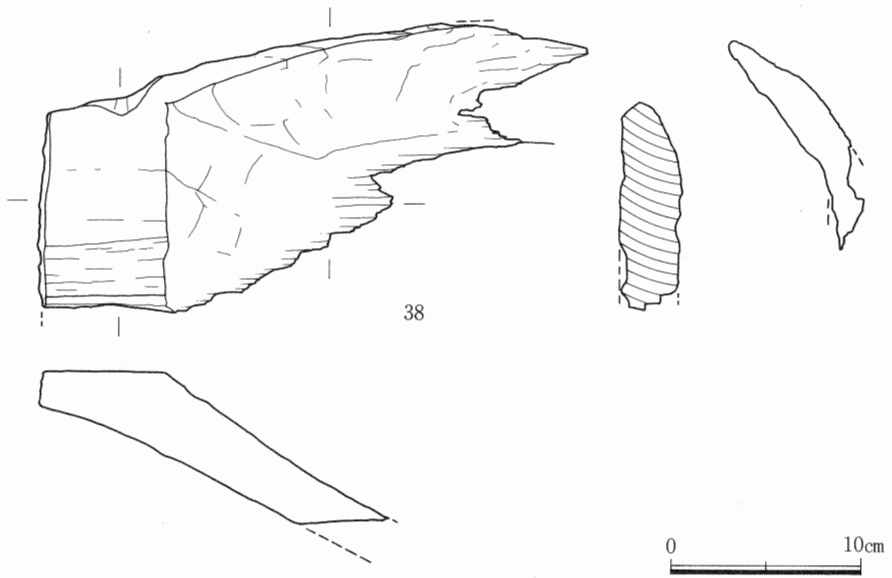
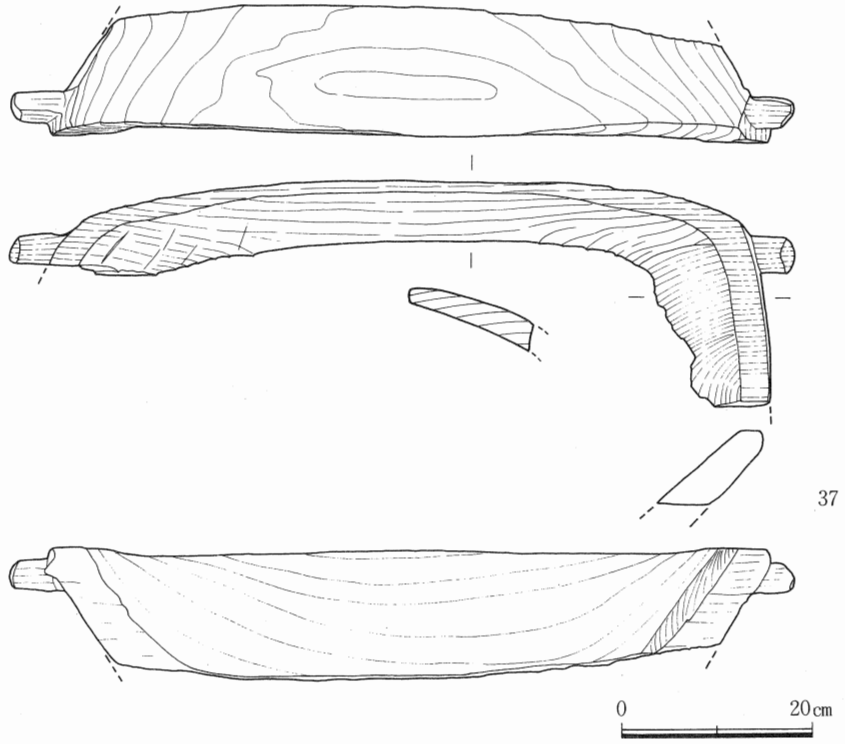
第71図 SD-03出土遺物実測図(2)



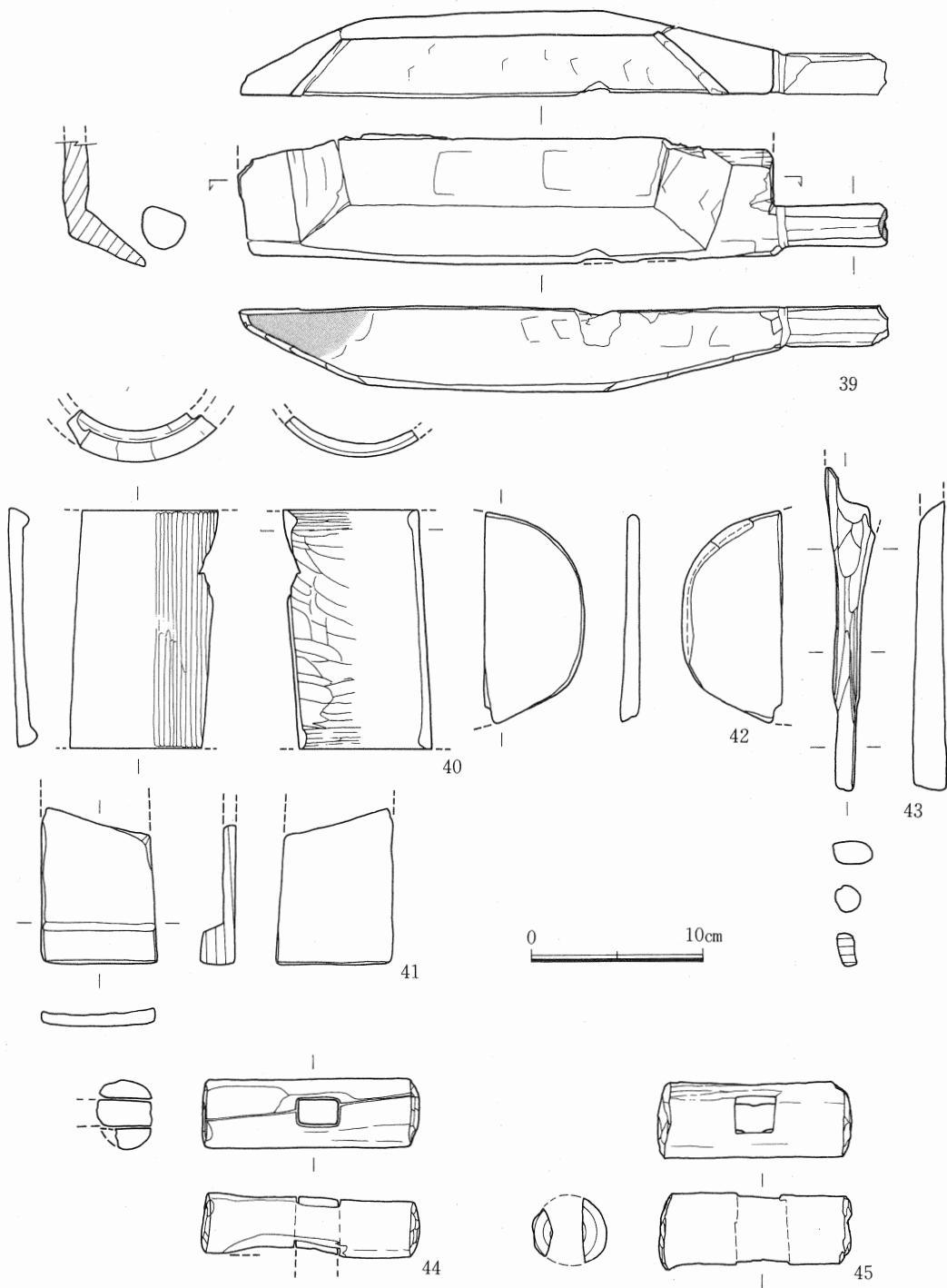
第72図 SD-03出土遺物実測図 (3)



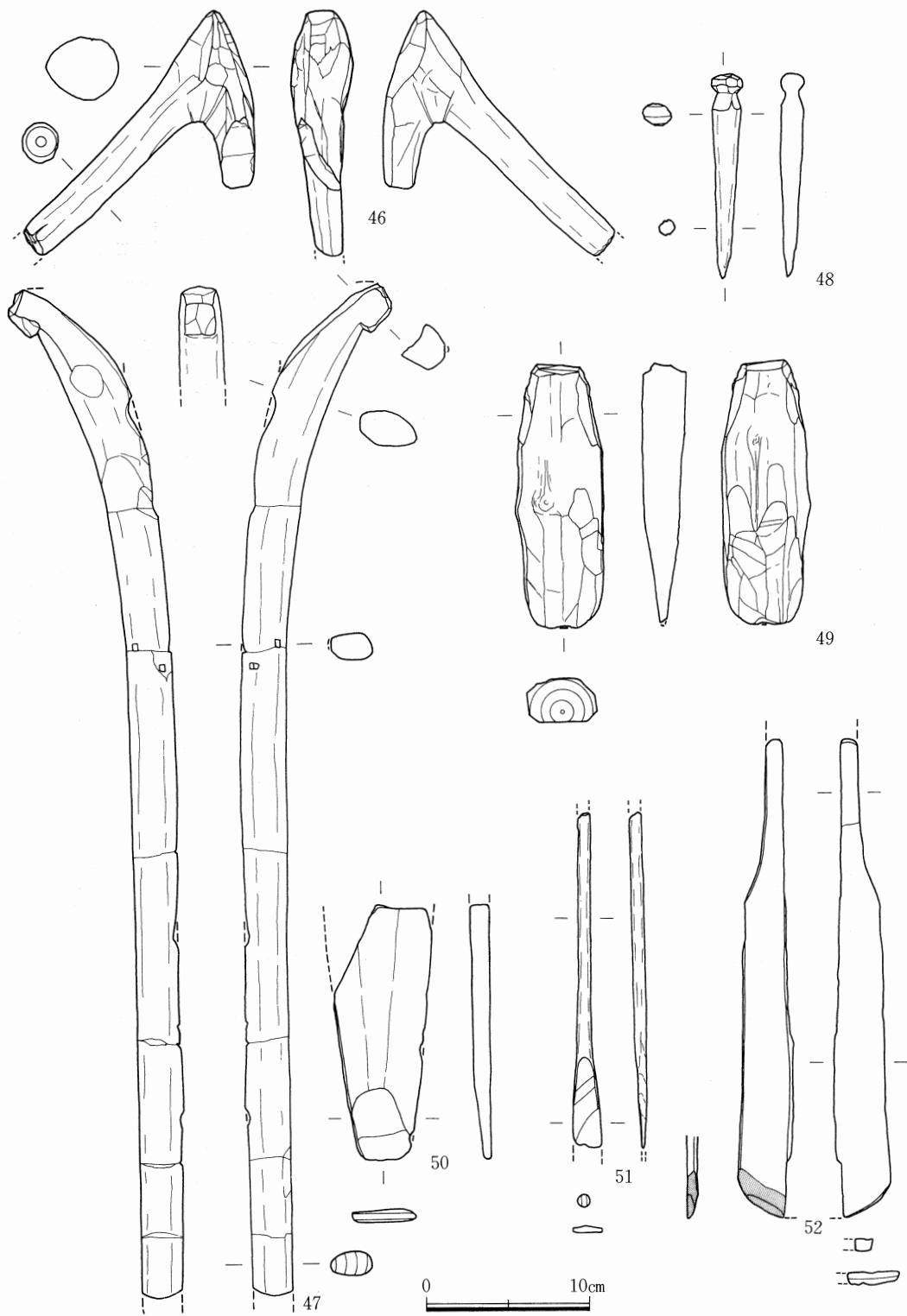
第73図 SD-03出土遺物実測図(4)



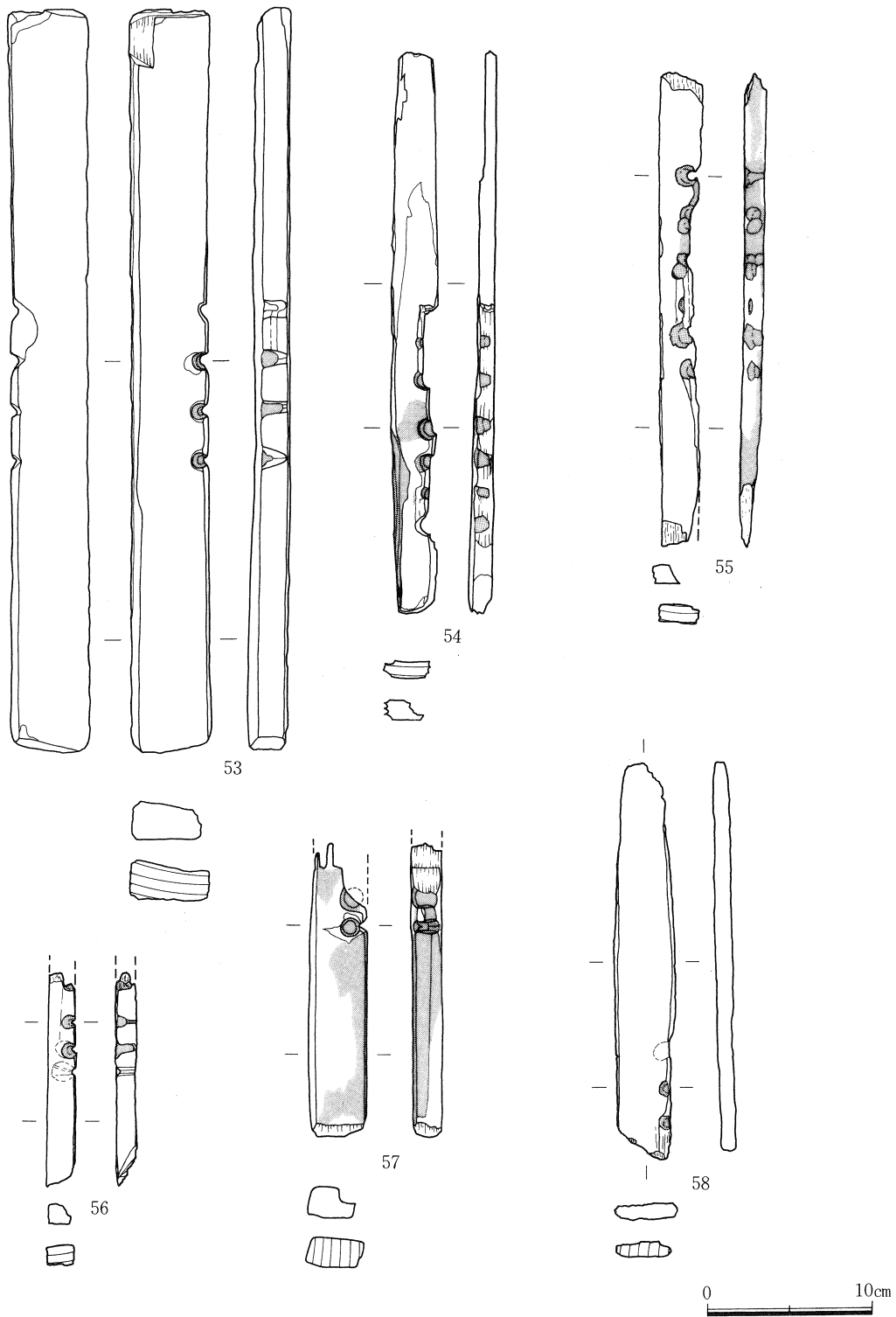
第74図 SD-03出土遺物実測図(5)



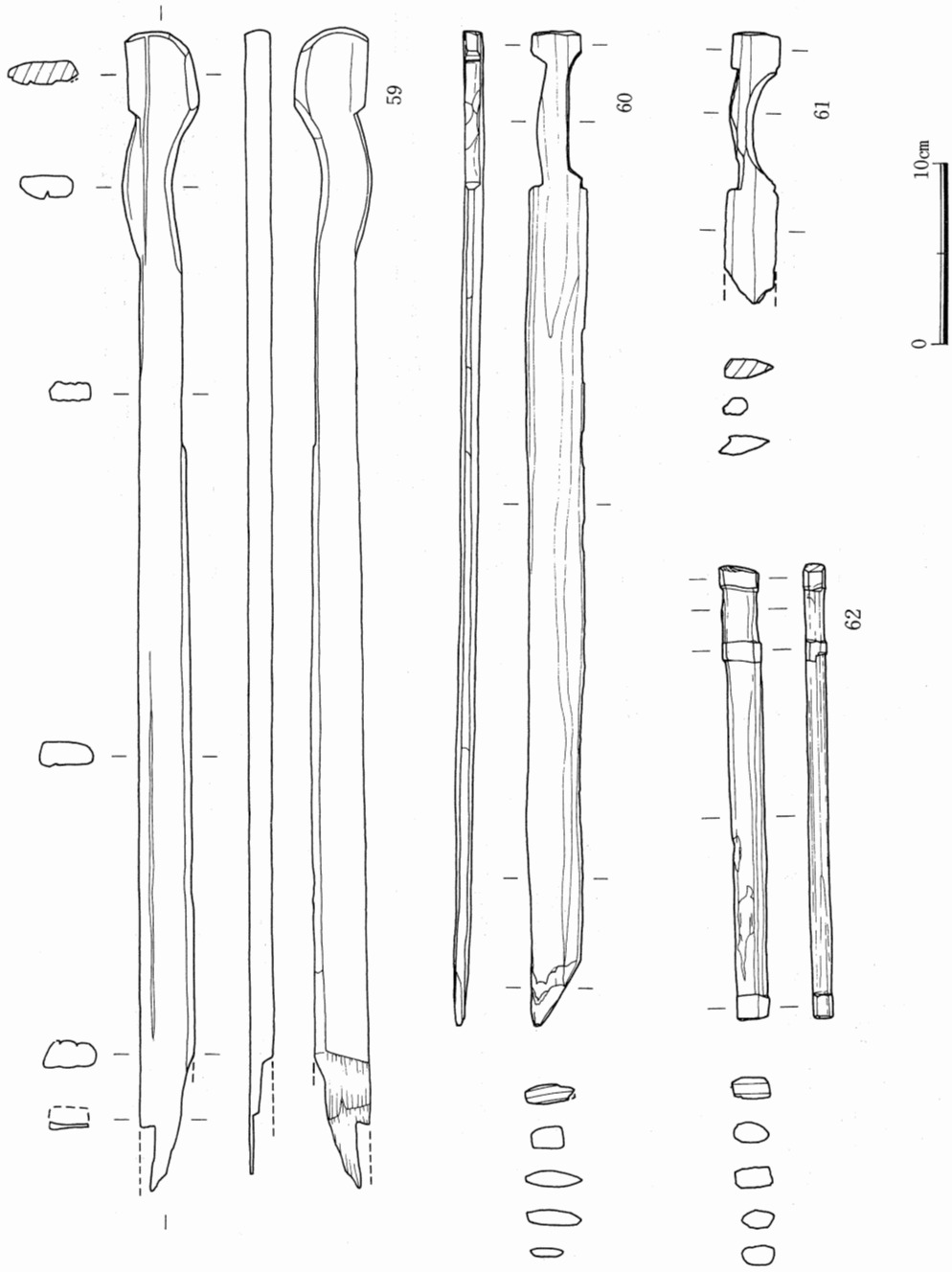
第75图 SD-03出土遺物実測図(6)



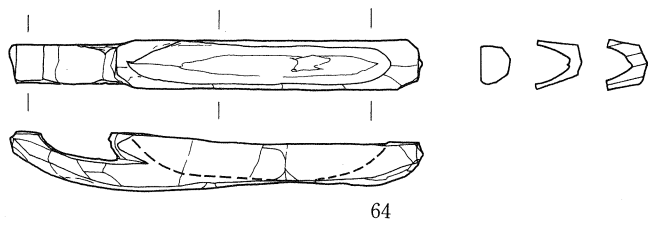
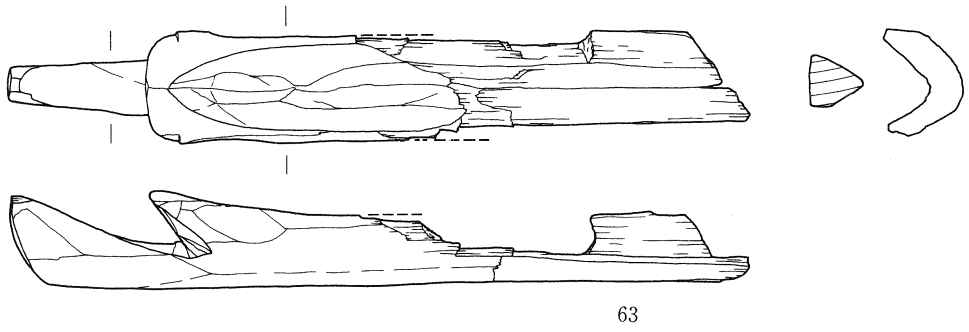
第76图 SD-03出土遺物実測図(7)



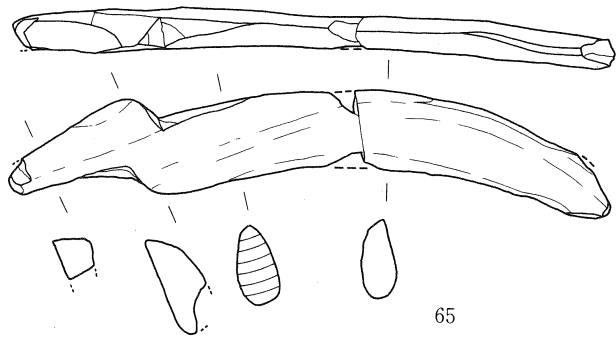
第77图 SD-03出土遺物実測図(8)



第78图 SD-03出土遺物実測図(9)

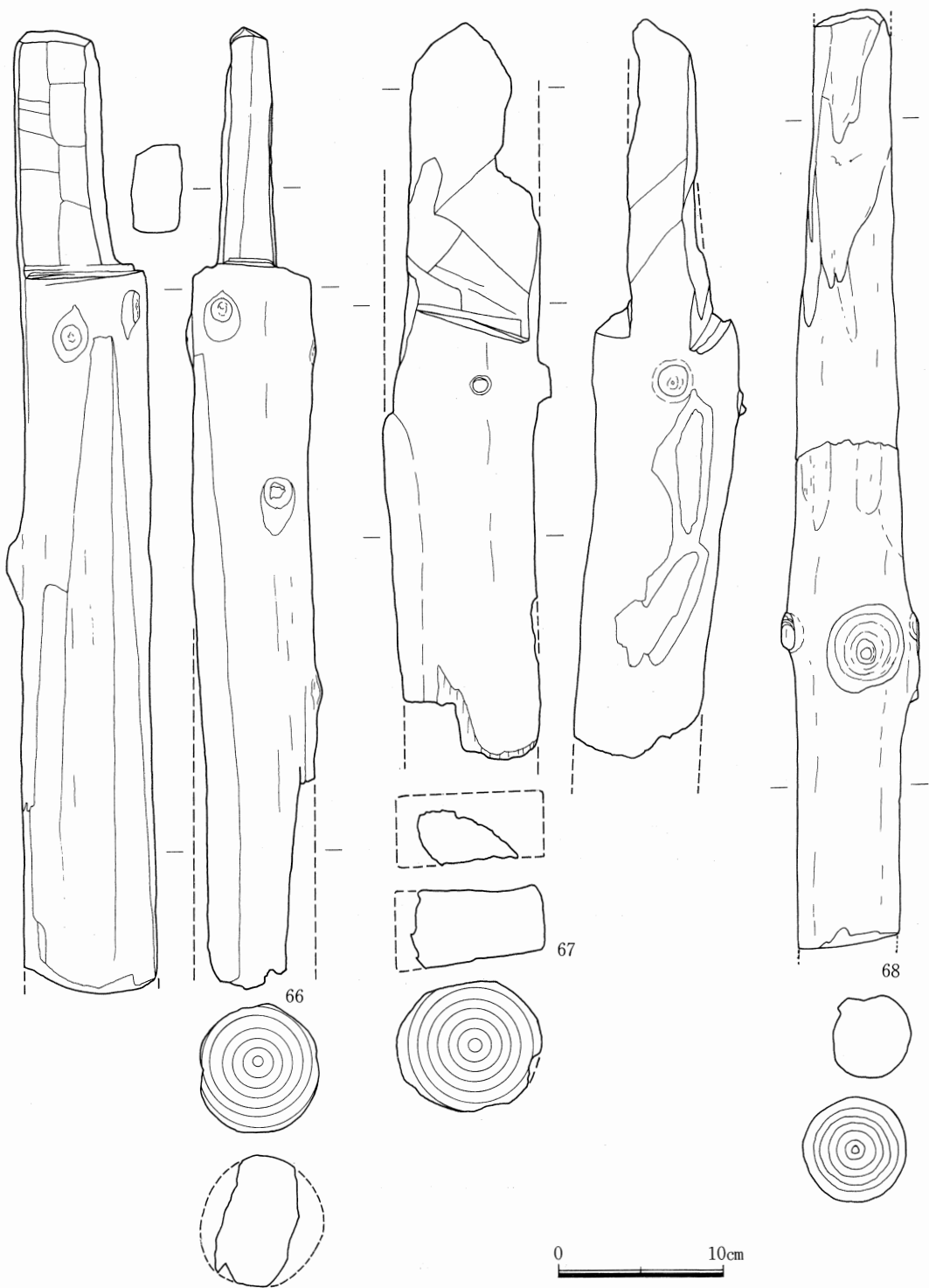


0 5 cm

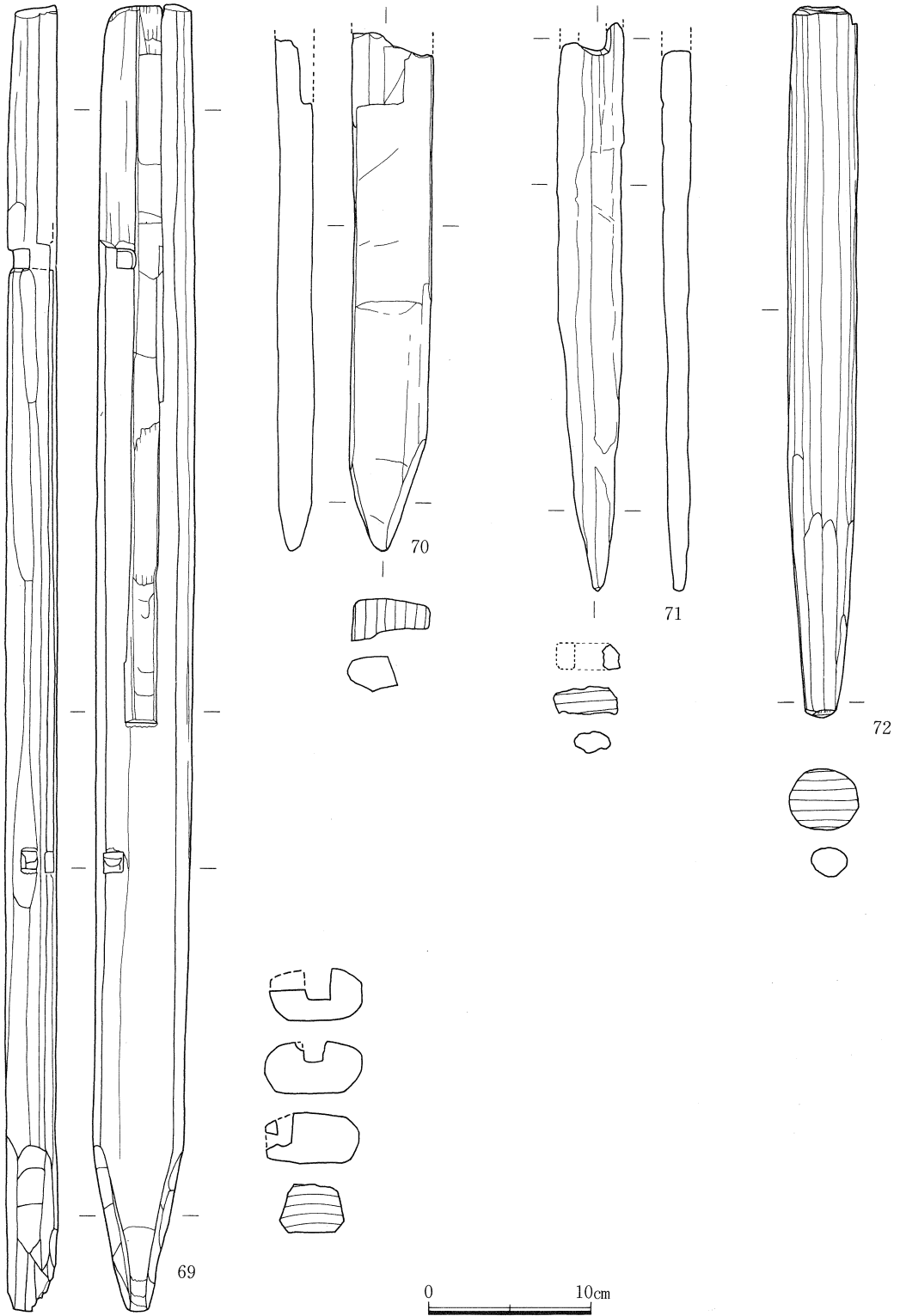


0 10cm

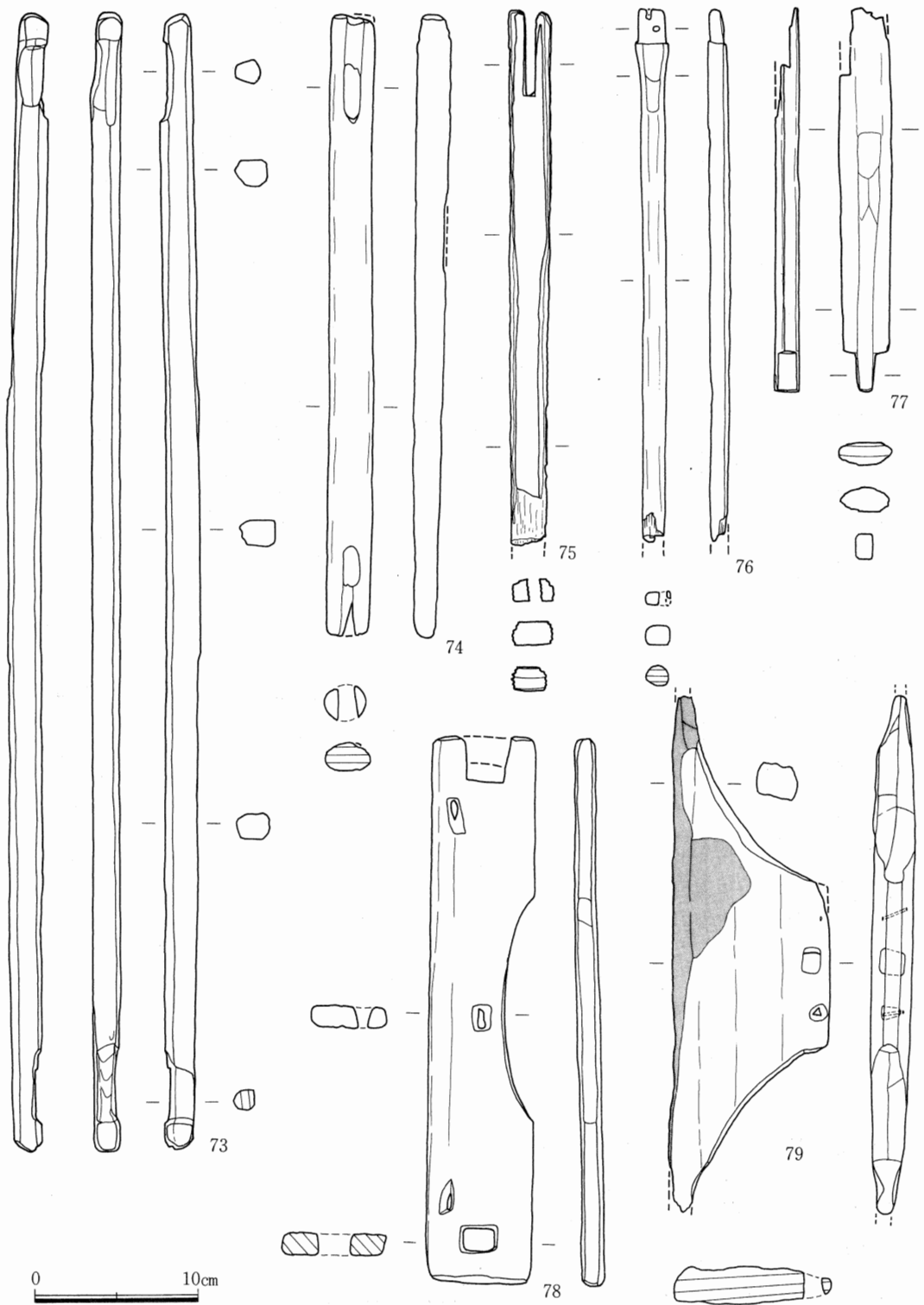
第79图 SD-03出土遺物実測図 (10)



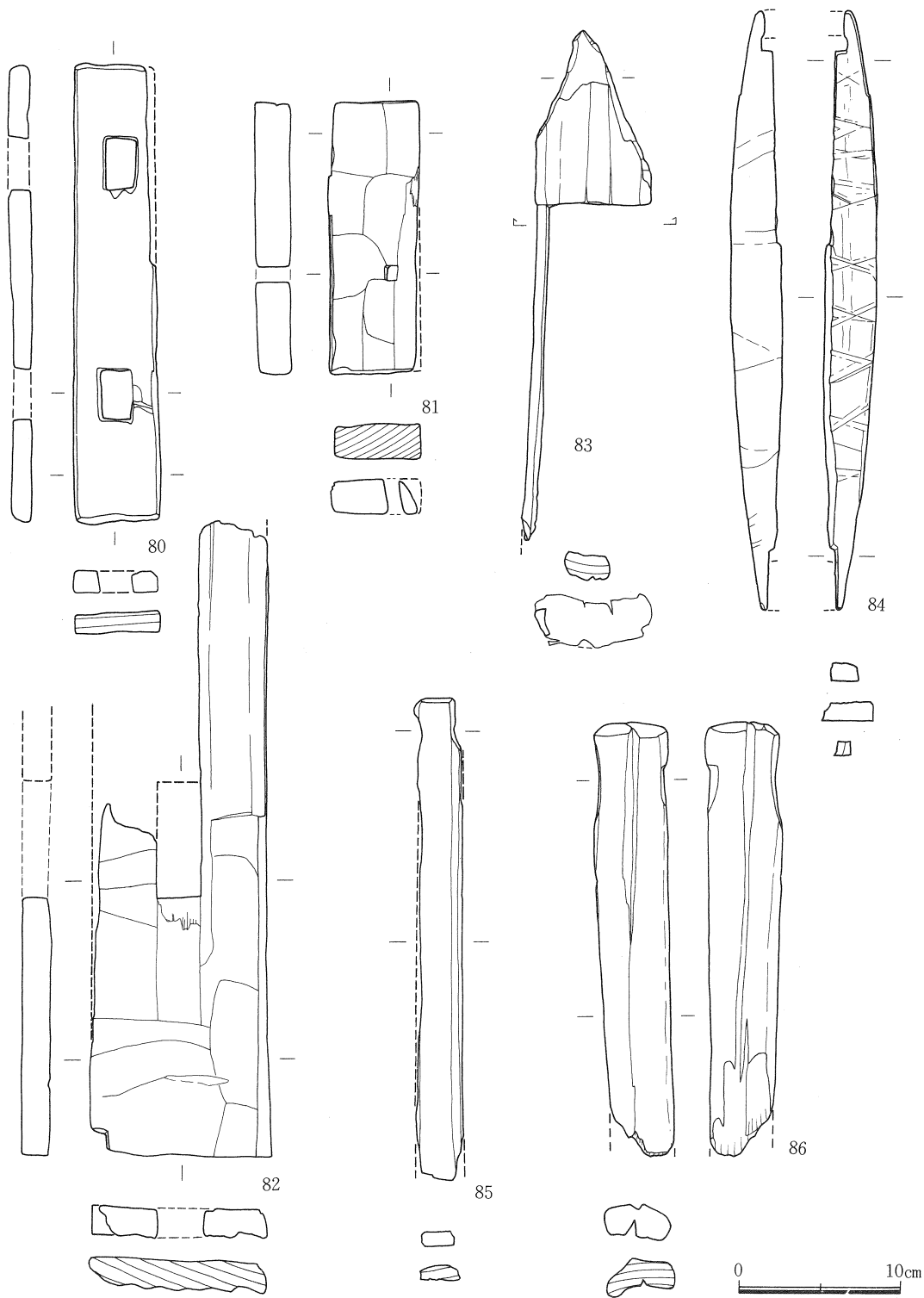
第80图 SD-03出土遺物実測図 (11)



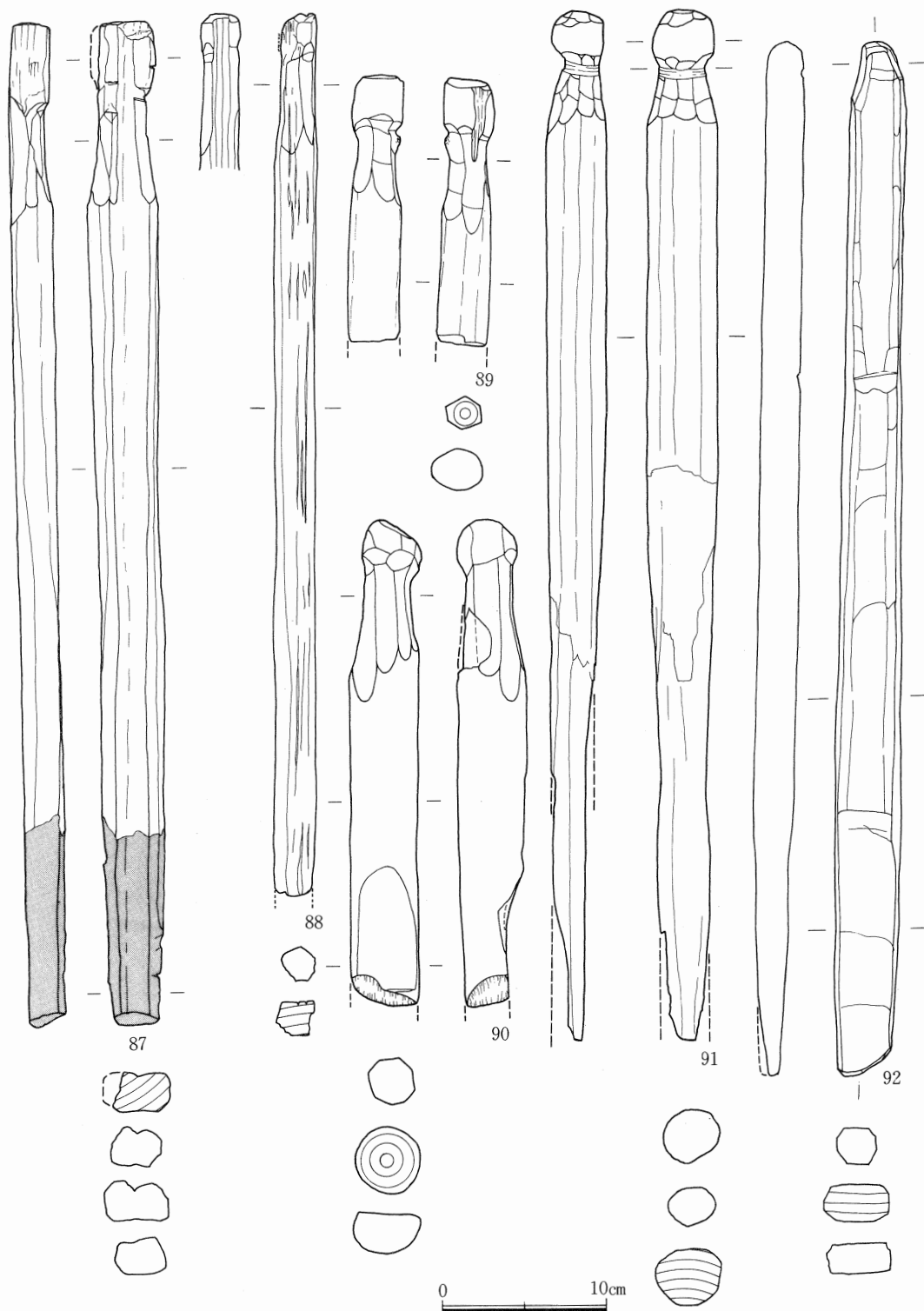
第81图 SD-03出土遺物実測図 (12)



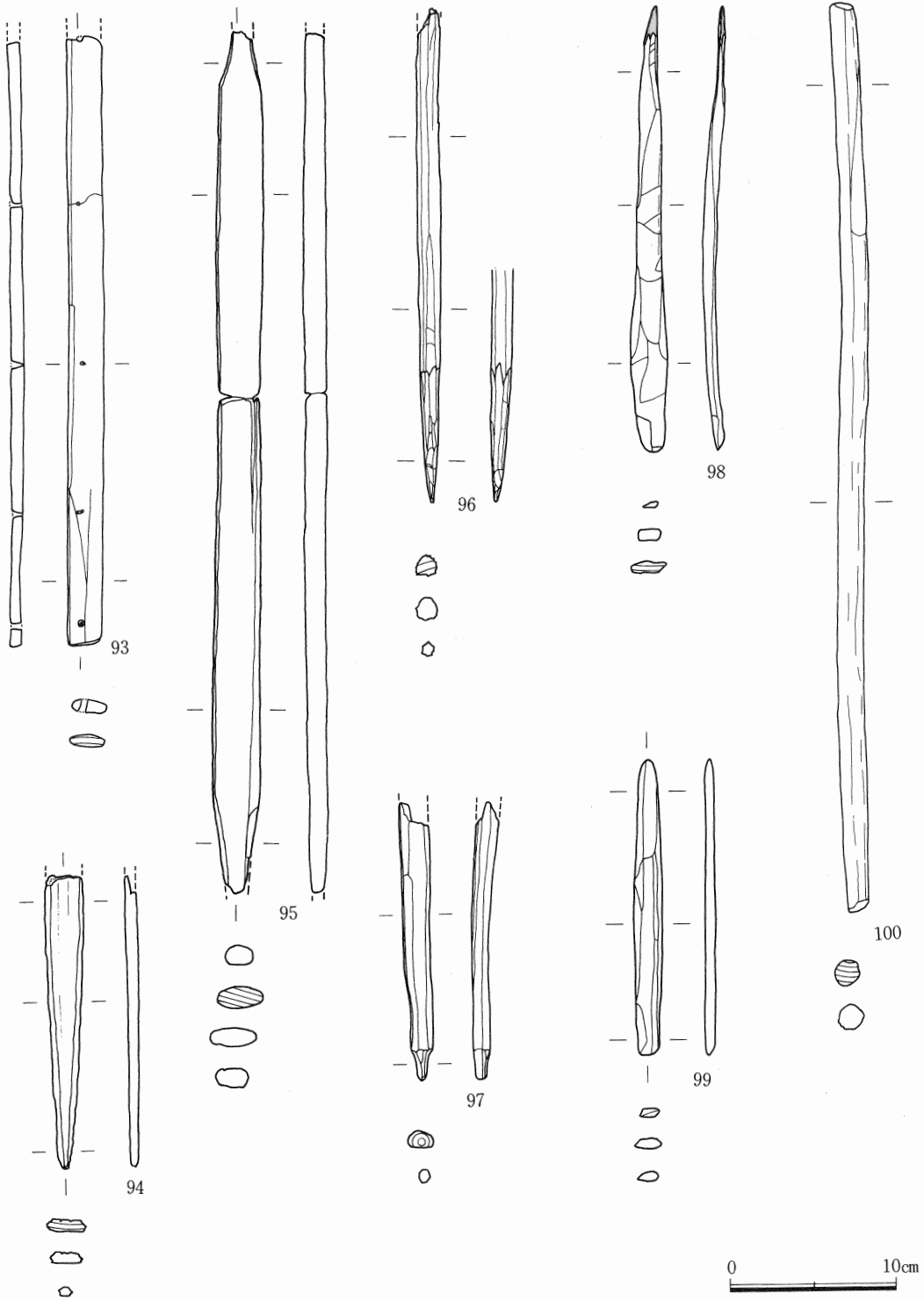
第82図 SD-03出土遺物実測図 (13)



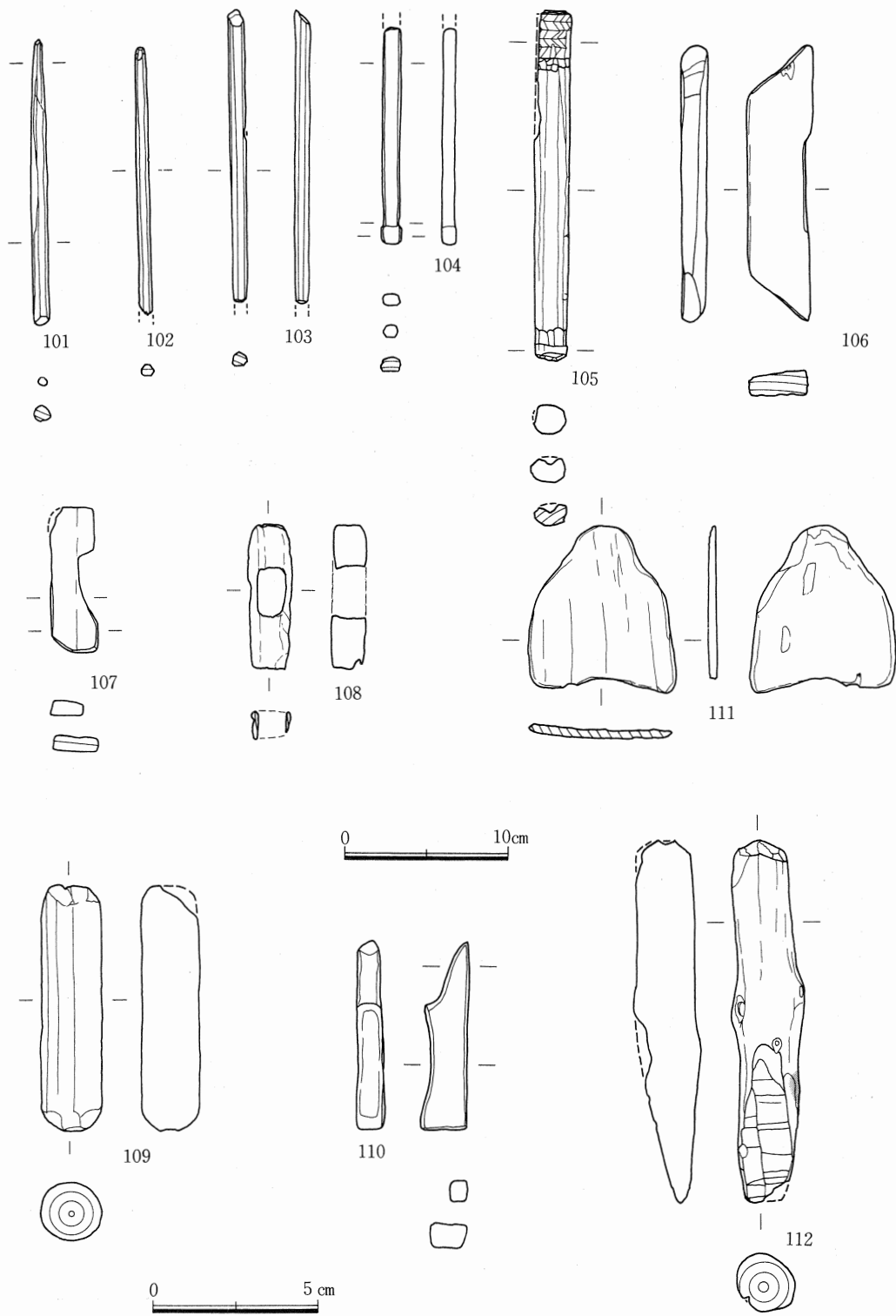
第83图 SD-03出土遺物実測図 (14)



第84图 SD-03出土遺物実測図 (15)



第85图 SD-03出土遺物実測図 (16)

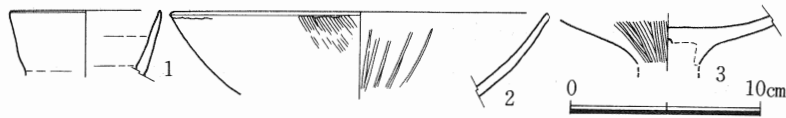


第36图 SD-03出土遺物実測図 (17)

SD-04 (付図28)

一部がA-9区とB-10区にかかるもののB-9区とA-10区にその中心を置き、調査区を南西-北東方向に横切る。南西部でSD-01に切られ、また、後世の水田用暗渠や円形の肥料溜めの穴によって一部を掘削される。検出長153.6m、幅1.24m、深さ0.17mを測る。主軸はN-58°-Eを向く。断面形は椀状で、埋土は灰色~灰褐色の砂質土であり、2. 灰色砂層には鉄分が混じる。南西部で若干北寄りに蛇行し、北東部と南西部の端で溝幅が膨らむ傾向にある。

遺物は、埋土中から小型の壺(1)、高杯(2・3)、若干の土器小片が出土している。(1~3)はいずれも赤彩され、(2)は内面に暗文が施される。(3)は円盤充填式で脚部がきれいに剝離する。



第87図 SD-04出土遺物実測図

SD-05 (付図33)

B-8区の南西部に中心を置き、B-9区の北東端から調査区外へ伸びる。SD-12が南端部を切る。北側にほぼ軸を同じくしてSD-06が検出されSD-05と続く溝かと思われたが、SK-13の西側にトレンチを掘り断面で確認したところ別の遺構であることが確認された。なお、溝の北側は流失して詳細は不明であるがB-8区の中央部で終結するものと思われ、溝の南端では東に湾曲する傾向がみられる。検出長5.32m、幅1.18m、深さ0.10mを測る。主軸はN-5°-Wを向く。断面形は不整形な逆台形で、底面は凹凸がみられ、北側へ向けてわずかながらも深さを増す。埋土は暗灰色砂質土(炭片を含む)一層である。埋土中から土器小片が出土している。

SD-06 (付図34)

B-8区北部からB-7区へ伸びる。北側は排水用の溝で掘削され、西側は風雨のため壁の大部分を流失する。南西部で小規模な溝SD-09を切る。長さ残存2.86m、幅残存0.78m、深さ0.06mを測る。主軸はN-2°-Wを向く。断面形は逆台形で、底面は東向きに高くなり若干の凹凸がみられる。埋土は暗灰色砂質土(炭片を含む)一層である。埋土中から、甕および鼓形器台の小片が出土している。

SD-07 (付図35)

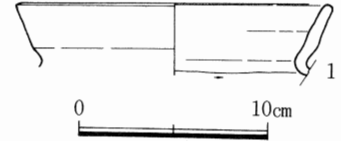
B-8区の北東端に中心を置き、B-7区の南東端から調査区外へ伸びる。SK-13に南端部を切られ北側にほぼ並行して若干幅広のSD-08が近接する。主軸は北東部ではN-65°-Eをとり、南西部で南方向に屈曲してN-32°-Eを向く。長さ残存1.53m、幅0.30m、深さ0.05mを測る。断面形は浅い椀状で、埋土は暗灰褐色砂質土(炭片を含む)一層である。埋土中から土器小片が出土している。

SD-08 (付図35)

B-7区とB-8区の境界の北東端に位置し、北東部は調査区外へ伸びる。南側にSD-07がほぼ並行して近接する。長さ残存1.21m、幅0.45m、深さ0.06mを測る。主軸はN-67°-Eを向く。断面形は逆台形で、埋土は暗灰褐色砂質土（炭片を含む）一層である。埋土中から、土器胴部小片が出土している。

SD-09 (付図36)

B-8区の北部に位置する。北東部をSD-06に切られ、南西部は後世の水田用暗渠によって掘削される。長さ残存1.21m、幅0.25m、深さ0.05mを測る。主軸はN-54°-Eを向く。断面形は逆台形で、埋土は暗灰褐色砂質土（炭片を含む）一層である。南西部底面から、甕（1）が出土している。複合口縁のなごりのある厚手のくの字状口縁で、口縁部内外面ヨコナデ調整、灰褐色の色調である。



第88図 SD-09出土遺物実測図

SD-10 (付図31・32)

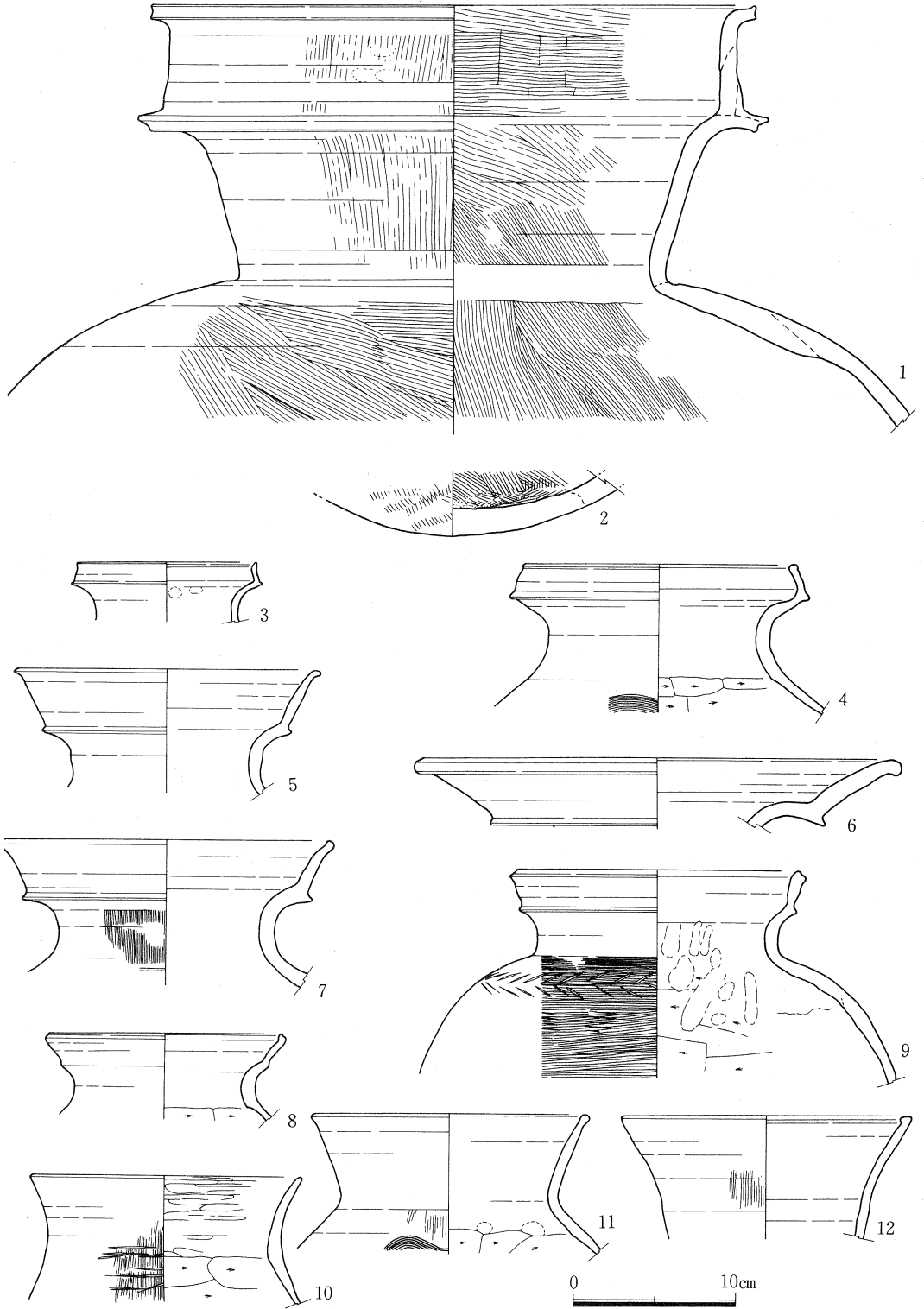
A・B-5～7区に位置し、調査区を南西-北東方向に横切る。残存長15.96m、上端幅約8m、下端幅約4.3m、中央部で深さ1.1mを測る。主軸はN-44°-Eを向く。掘り下げていく段階で、遺物が大量に集中して出土する面があり、赤彩された高杯や小壺等を中心とした土器、石製品、木製品等が出土している。底面まで完掘した状態で、中央部に28cm～32cm程の高まりを隔てて流れが大きく二つに分かれ、さらに北側の流路は小規模な二つの流れに分かれた。計三つの流路が確認されたがこれらの三つの流路はほぼ同じ軸を向く。西側の土層断面における底面の標高は、北から順に0.93m、0.87m、0.74mを測り、南側程低くなる。また、流路の幅は上幅は不明瞭ながら、底部の規模から南側程規模が大きくなるものと思われる。北側の二つの流路を中心として、整然と並ぶ杭列が検出された。北側から2本目の流路南側にも杭列とともに矢板状の施設が西寄りに検出された。最北側の流路は、第2水田面の水口の正面に杭が集中することから水口に伴う施設と考えられ、最北側の流路は第2水田面が営まれていた時期と同時期のものであると考えられる。なお、最北側の流路の中央部河床から銅鏃（184）が、北から2本目の流路の河床から木製高杯（203）が出土している。北側流路の高まりにみられる杭列は、杭の傾きや下端のレベルや杭に用いられた材などの状況から（210～216）は他と様相を異とする。（210～216）以西および水口付近はほぼ直立しているものの若干北側に傾いているものが多いのに比べ、（210～216）は4本の丸太材を含め大幅に南側に傾く。（210～216）以西は軟弱な板材もしくは丸太材が使用されており、（208）は柄穴のある転用杭である。また、東寄りの水口付近の杭列はしっかりした角材や板材を加工したものである。また、杭の打ち込まれた先端部は、（210～216）は標高0.3～0.5m前後、それ以外は標高0.7m前後に集中する。（210～216）は、新たに打ち直されたかもしくは北側から2本目の流路に伴う杭列の可能性が大きい。

以上のことから、最北の流路は第2水田面に伴い、水口の正面に位置する集中して打ち込まれた杭は水を堰止めるための施設であり、その南側に位置する同様な規模の流路は北側の流路と同時というよりむしろ後世に掘られた水路と考える。また、最南の流路は北側の2本の水路が埋没した段階で新たに掘られた水路で、河床付近に貼り付くように出土している高杯(70)がその時期を示すものと考えられる。その後、水路内に土砂が堆積していく過程の中で、幾度かの掘り返しによって水路は様々な変遷を経て、最終的には一つの溝となり機能したものと考えられる。なお、北側は古墳時代前期にあたる層から掘り込まれ、南側は古墳時代中期の層の削平を受けているものの、さらに南壁は立ち上がったものと考えられる。そして、ある程度流れが緩慢となった状態で、土器や木製品等が多量に放棄され、その後一気に土砂が流れ込んで埋没したのと考えられる。

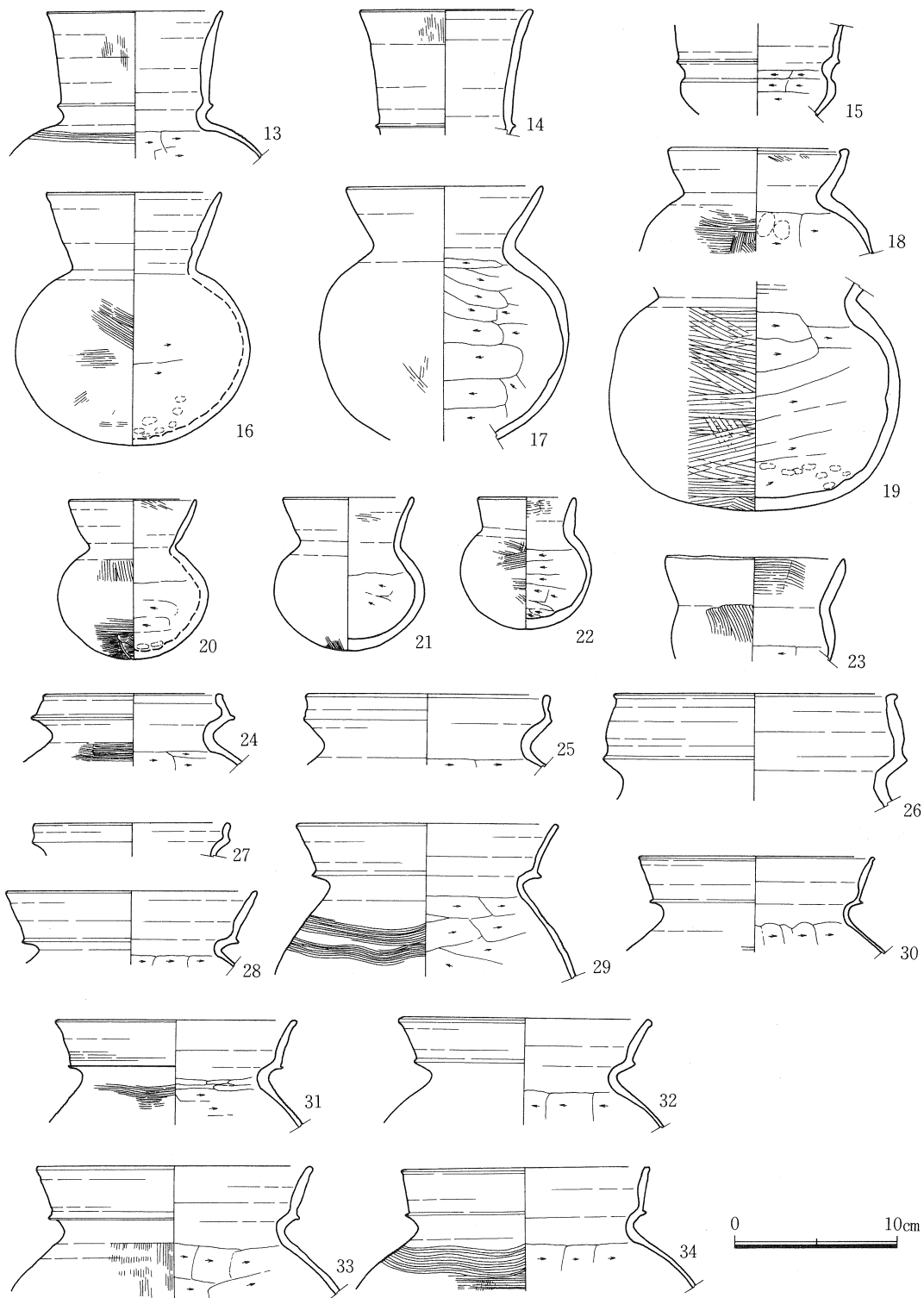
出土遺物としては、土器、石製品、木製品、土製品、銅鏃、ふいごの羽口、鉾滓状遺物、木ノ実などの自然遺物がある。遺物の多くは土器および木製品で、土器だけでも、55×35×22cmの容量をもつコンテナ約51箱分が出土している。土器は、須恵器、土師器、弥生土器があり、点数はわずかながら弥生時代中期の土器も出土している。多くは古墳時代中期を中心とする土器で、特に赤彩された高杯と小型の壺が占める割合が大きい。なお、同じ層から弥生土器や須恵器も同時に出土している。このように、溝内の堆積状況も一様でないこと等から層序による取り上げを断念し、特に土器は埋土中の出土とするものが多い。土器は、おおまかな時期、器種および形態別に羅列するとどめた。なお、壺、甕、高杯を中心としてほぼ同様な形態・調整手法を呈するものは省略した。

古墳時代の土器 (1~132)

壺(1~23) 大型の壺(1)は、複合口縁部をもち、肩部は大きく張る。頸部と口縁部との境の凸帯は貼り付けによるものではなく、頸上部を外方に屈曲させ、その屈曲面にヘラ工具による刻み目を施し直立する口縁部を接合、口縁端部は凸帯と同様外方に屈曲させて終える。内外面ハケ目による調整で、後に口縁部はヨコナデし外面は肩上部までおよぶ。(2)は(1)の底部と思われる。(3~9)は内傾もしくは外反する複合口縁をもつ。口縁上端部を(5・6・9)は外方につまみ(7・8)は内面側に肥厚する。(9)は体部外面に回転を利用した横ハケ目後、ハケ目工具による刺突で綾杉文を施す。横ハケ目前の右下がりの叩き目が認められる。(10~12)は単純口縁の壺で、(10)は外面肩部および口縁部内面にヘラ磨きが施される。(12)は逆ハの字形に外方に開く口縁部で内面端部は折り込みがみられる。(13~23)は中型および小型の壺で、長頸壺(13・14)はヨコナデが顕著で(13)は肩部に5条の平行沈線を施す。(15)は体部に対し口縁部が大きく広がる形態を示す。中型の壺(16~18)はともに外面および内面口縁部は赤彩される。小型の壺(20・21)は形態的には中型の壺(16・17)を小型にしたもので、ともに赤彩される。(22)は(20・21)に比べて口縁部が直立し、赤彩も認められない。口縁部を欠損する(19)は球形というよりむしろ隅丸形状のどっしりした体部で、外面は重複する横位のハケ目による調整である。体部内面は全体的に染み付いたような炭化物が認められ、底部外面はハケ目が磨滅し薄くなる。



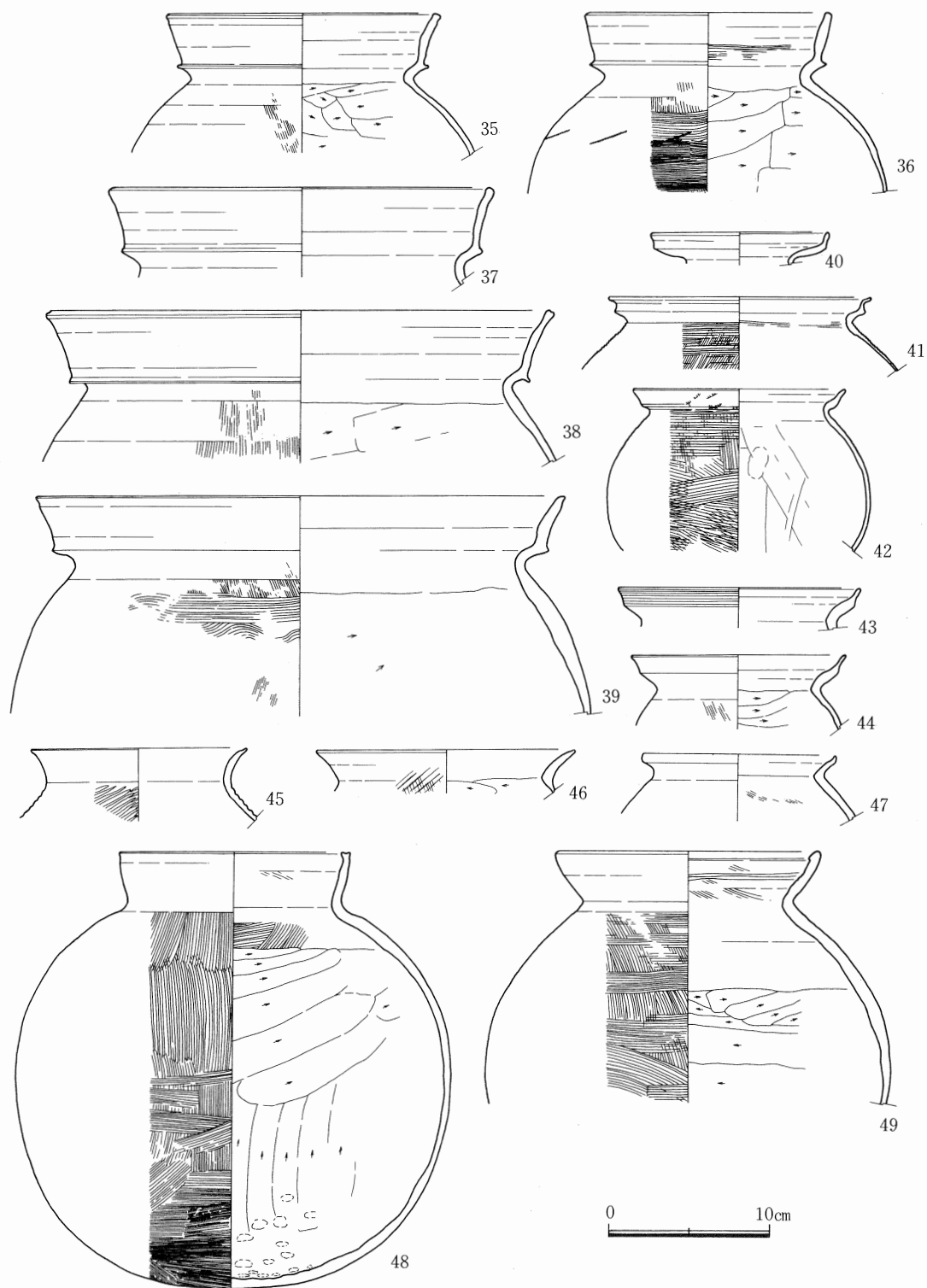
第89图 SD-10出土遺物実測図(1)



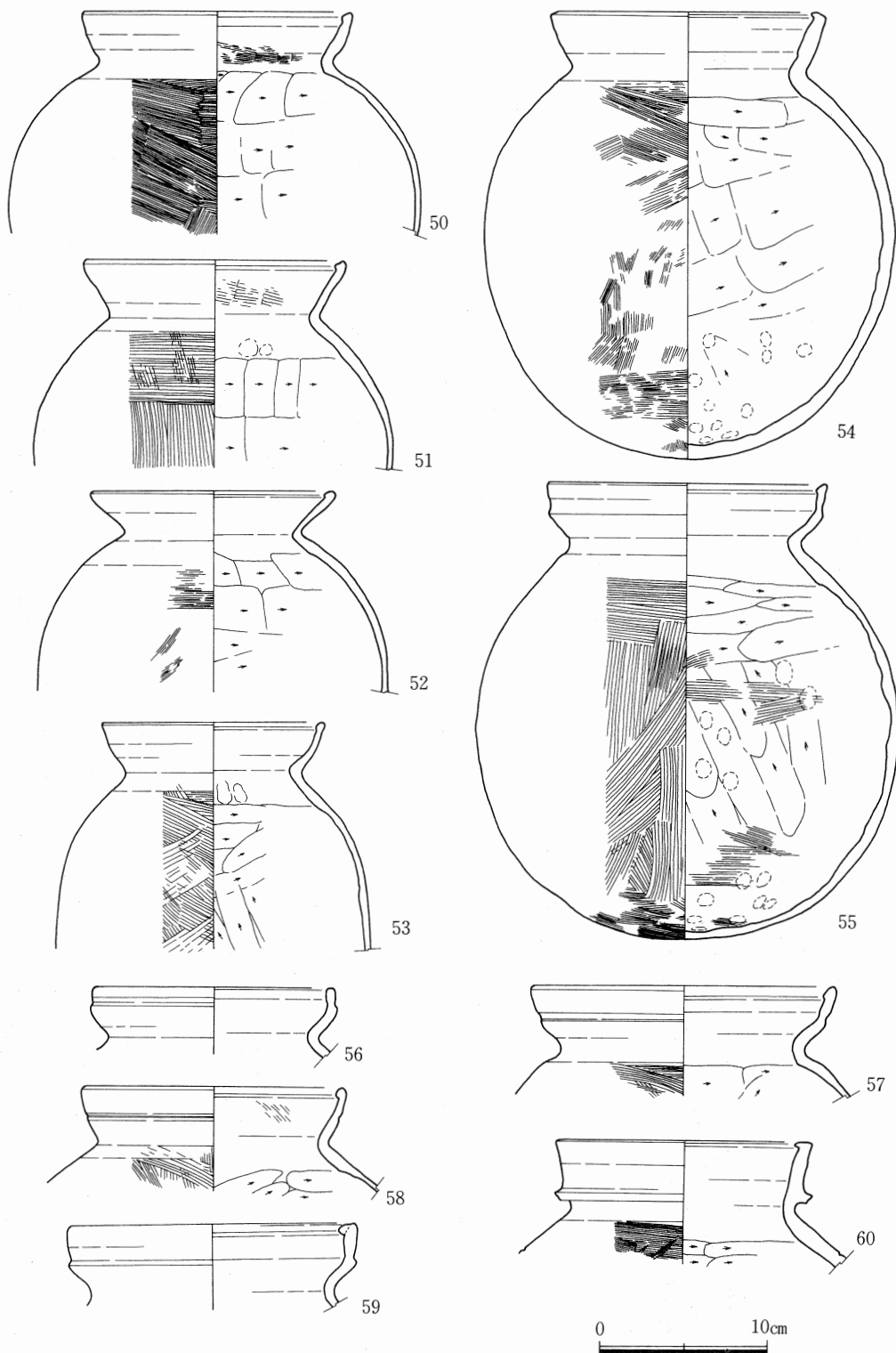
第90图 SD-10出土遺物実測図(2)

甕 (24~67) (24~27) は内傾もしくは直立する複合口縁部である。(28~39) は外反する複合口縁部で、(28) は口縁部外面が内湾気味に外方に開き、比較的古い形態をとる。(29) は器壁が薄く均一で、肩部外面に9条の平行沈線を2段に施す。(36・37) は口縁端部が内側に肥厚する。(40~47) は形態的には複合口縁とくの字口縁とがあるが、いずれも搬入もしくは他地方の土器の特徴を備えもつと考えられる土器である。(40) はくびれた頸部から膨らみをもって直立する口縁部へ続く。(41) はS字口縁で、体部外面は粗い斜位後横ハケ目、内面は肩部ナデで、頸部に横ハケ目が認められる。1mm前後の砂粒を多く含む灰褐色で硬質の土器である。(42) はわずかに屈曲し外方に広がる口縁部から球形を呈する体部へ続く。口縁部外面にはハケ目工具による刺突があり、体部外面は縦後横ハケ目、体部下半は重複する斜めハケ目。体部内面はナデで斜方向の筋が認められる。(43・44) は同様な形態の口縁部で、頸部から屈曲しさらにゆるやかな段をとって外方へ立ち上がり端部は薄くなる。(45) は肩部に左下がりの叩き目を施し、口縁部はゆるやかなカーブを描いて外反する。1~3mm前後の砂粒を多く含む橙褐色で軟質の土器である。(47) はわずかに口縁端部が立ち上がり、肩部内面はハケ目後ナデ、暗灰褐色で硬質の土器である。(48~67) は単純口縁および下端部につまみ出しによる稜をもたない退化した複合口縁の形態をとるもので、後者は口縁部の下端部に沈線や貼り付け凸帯等をめぐらせて複合口縁としたものがみられる。

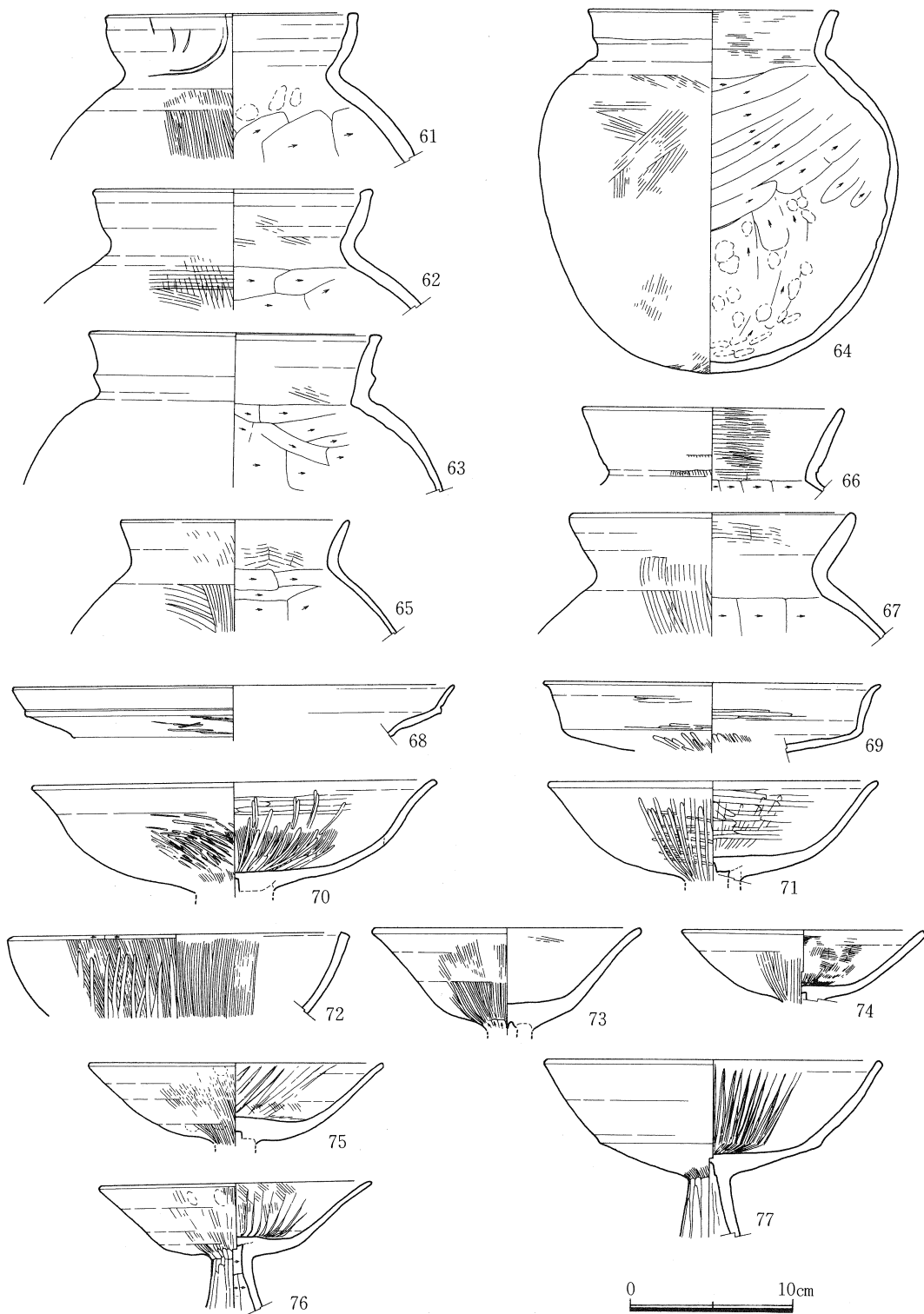
高杯 (68~101) (68・69) は器壁薄で、杯底部と口縁部との境に稜をもち、(69) の口縁部は直立気味で端部は外方へつまみ出す。(68) は外面にヘラ磨き、(69) は内外面にヘラ磨きが認められる。(70・71) は湾曲しながら大きく外方へ開く杯部をもち、(70) は内外面ハケ目後ヘラ磨き調整、(71) は外面横後縦ヘラ磨き、内面縦後横ヘラ磨きする。(72) は杯底部欠損のため不明であるが、外面にヘラ磨きが認められる。(73~76) は杯底部と口縁部の境に稜はもたないものの、平坦な杯底部から口縁部へ向けて外反する形態をとる。いずれもハケ目後上部をヨコナデ調整する。(73・75) は赤彩され、(75・76) は内面に暗文を施す。(77~80) は口縁部と杯底部の境に稜をもち、いずれも赤彩される。(79) をのぞいて内面に暗文を施す。(81~85) は杯部が碗状で赤彩され内面に暗文を施す。(81・82) の脚部は、裾部がハの字状に開き、外面はヘラ磨き後ナデ、内面は指成形後ハケ目調整する。(86~88) は小型で、平坦な杯底部に外反する短い口縁部がつく。脚部を欠損するものの円盤充填による接合である。(89) は(81~85) を小型化したような形態をとるが、赤彩、暗文は認められない。脚部(90~101) は、(90・91) は器壁厚くぼつりした感じを受けるが、これに対し(92~95) は裾部ハケ目後ヘラ削りにより器壁が全体的に薄く均衡化する。(93) は赤彩され、裾部が大きく開き、円形の透かし孔が3方向の位置に2ヶ確認される。(96・97) と(98~101) とは形態が類似し、脚柱部が厚く裾部でハの字形に開き、いずれも赤彩される。外面は面取り成形およびヘラ磨きし、杯部接合時のハケ目が上部にみられる。内面は脚柱部は絞り目がみられ、裾部はハケ目調整する。(98~101) は、脚端部は指成形による指頭圧痕でガタガタとなり、脚端面はヘラ削りするが後に施すナデは軽い。全体的に(96・97) に比べて小型で、ナデによる調整が省略さ



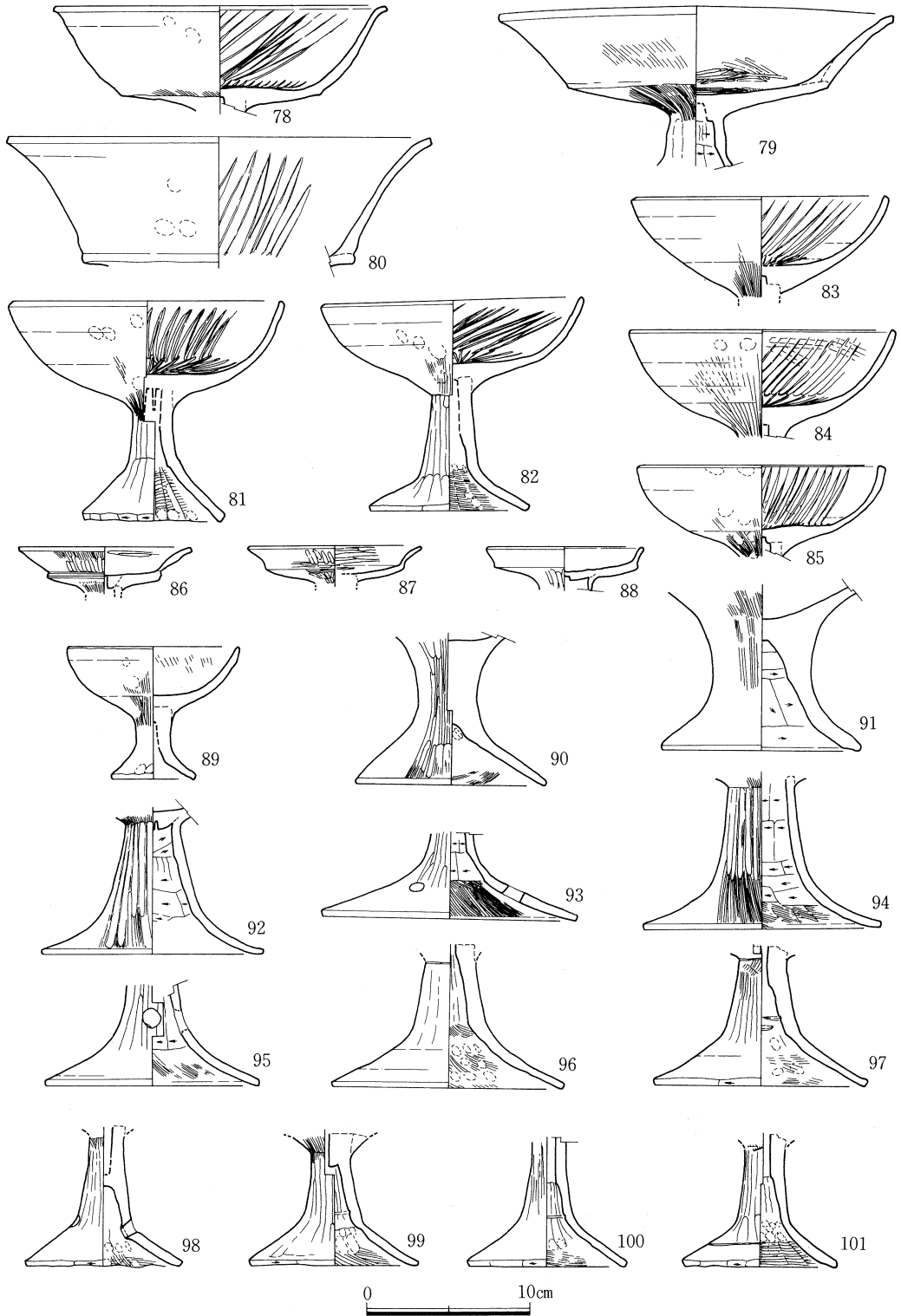
第91图 SD-10出土遺物実測図(3)



第92図 SD-10出土遺物実測図 (4)



第93图 SD-10出土遺物実測图 (5)



第94图 SD-10出土遺物実測図(6)

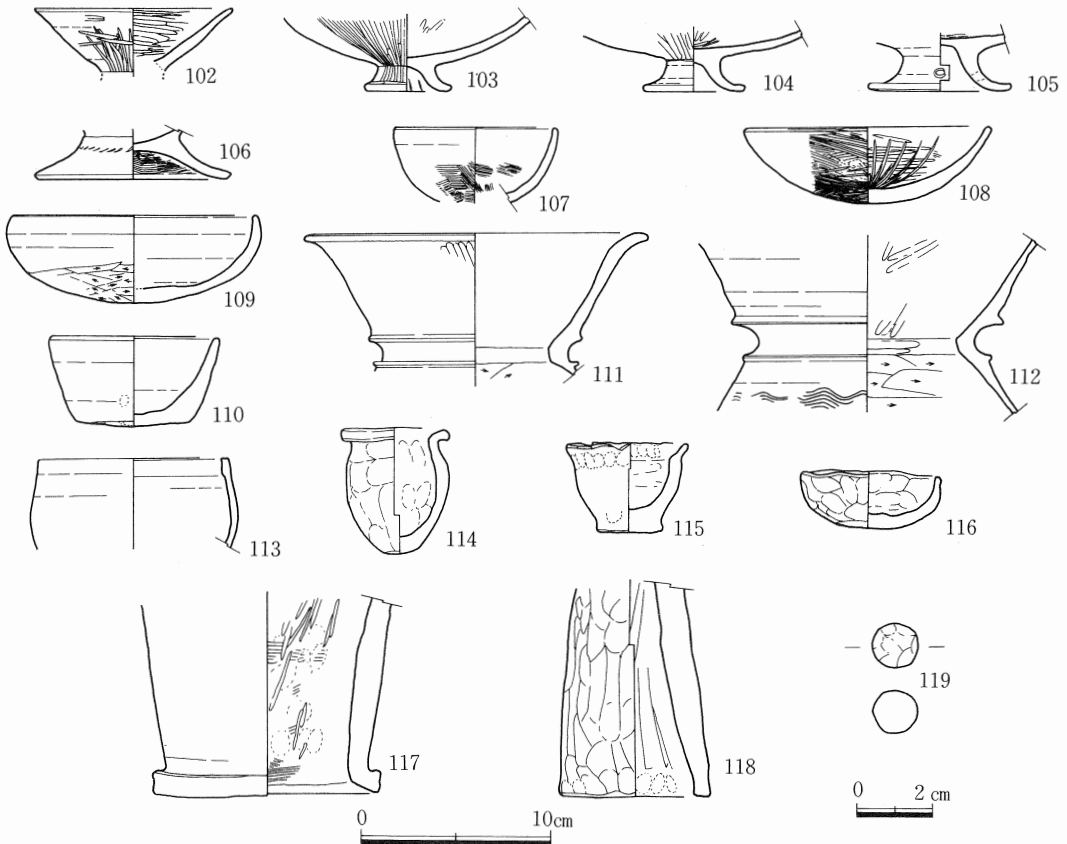
れ、粗雑な感じを受ける。

低脚杯 (102~106) (102) は脚部を欠損するものの、杯部は底部から口縁部先端までまっすぐハの字形に開くが、(103・104) はゆるやかに湾曲しながら立ち上がり皿状を呈する。(105) は(103・104) に比べて大型で、円孔が認められる。(106) は大きくハの字形に開く脚部で、外面は体部の調整による工具痕が残る。内面はハケ目調整である。

椀 (107~110・113) (107) は小型で半円形、(108) はやや浅めで口縁部まで湾曲しながらゆるやかに立ち上がり、(109) は(108) より口縁部へ向けての湾曲が大きく、口縁端部はわずかに内湾する。(110) は平坦な底部から屈曲してやや外方へ開く口縁部へ続く。(113) は口縁部のみの残存であるが、赤彩され、器壁は薄く、口縁端部は内側が凸帯状に肥厚する。杯部中央部がふくらみ深くなるものと想定される。脚部がつき高杯となる可能性がある。

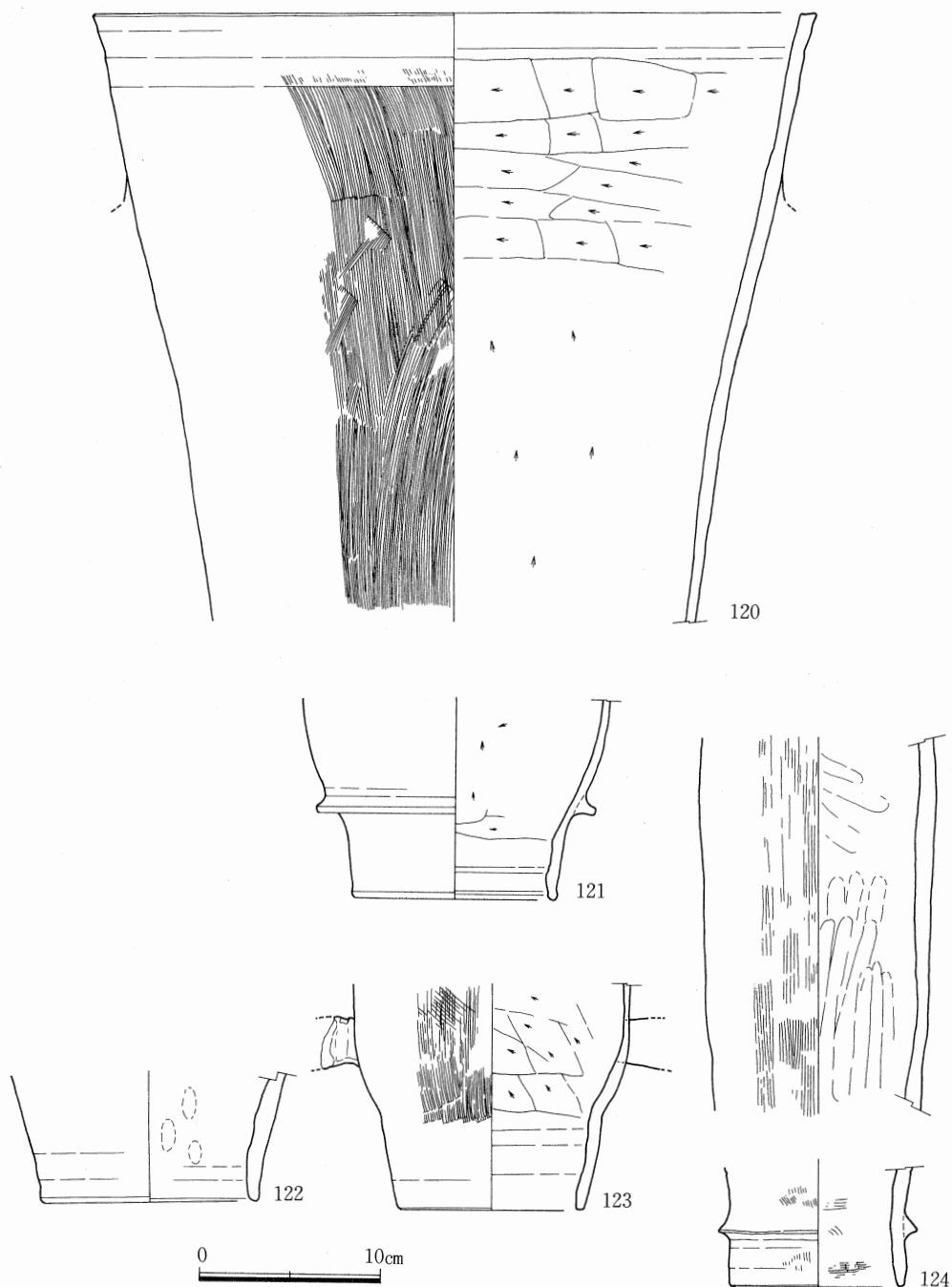
鼓形器台 (111・112) (111) は器壁厚く稜も鈍い。外面にヘラ磨きが認められる。(112) は脚台部に6条の波状文が施される。ともに接合部は短い。

手捏ね土器 (114~116) いずれも手捏ね成形による指頭圧痕が顕著である。(114) は口縁部を外側に折り曲げ複合口縁状の壺形にし、(115) は鉢形、(116) は碗形を呈する。



第95図 SD-10出土遺物実測図(7)

筒形土製品 (118) (118) は手捏ね成形で、わずかにハの字状に開く筒形を呈し、端部に向かって器壁が薄くなる。内面は工具による縦位のナデを施す。

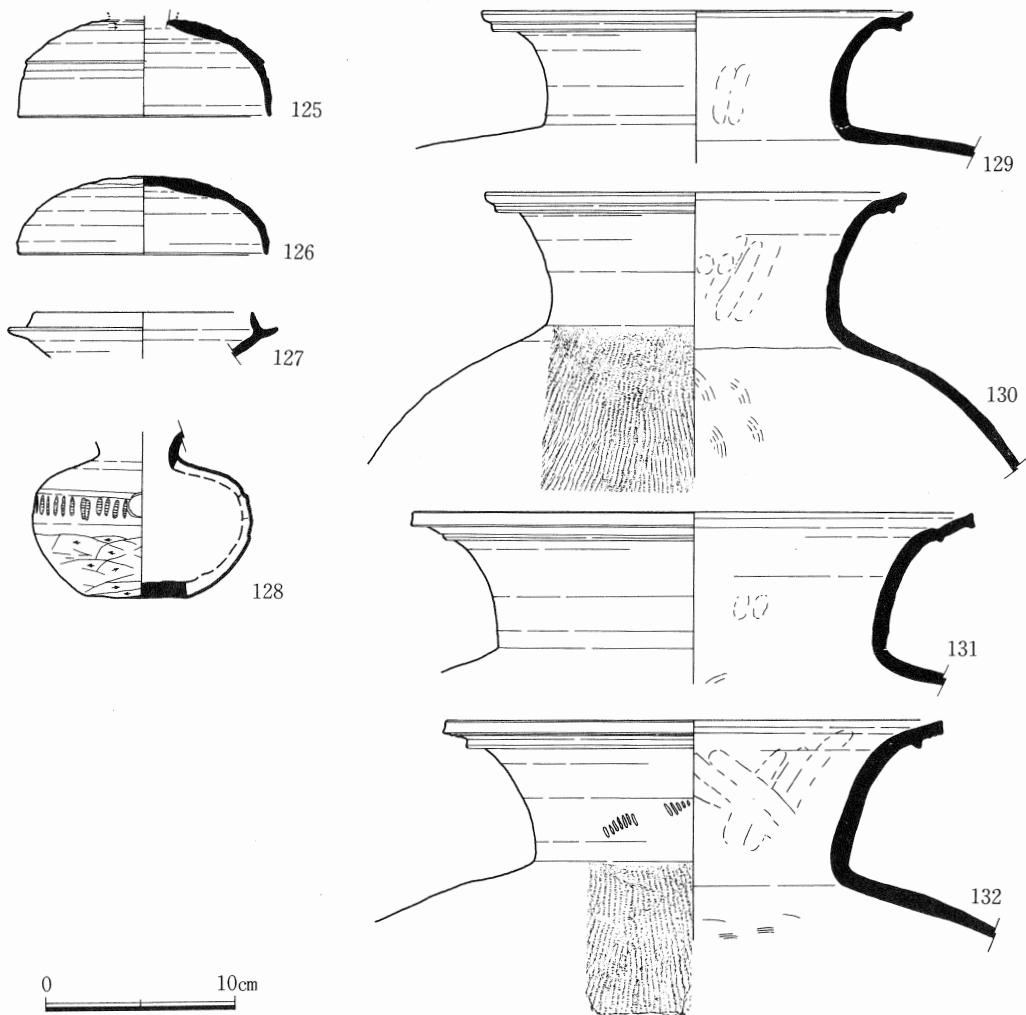


第96図 SD-10出土遺物実測図 (8)

土玉 (119) 径1.2cm前後と小さく、手捏ね成形後焼成される。

甑 (120~124) (120) は口縁部へ向かって直線的に開き、口縁部はヨコナデによって若干の凹凸がみられ端部で平坦な面をもつ。口縁部寄りに縦位の把手の剝離痕が認められる。外面縦ハケ目後口縁部ヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ後のヘラ削り調整で器壁は均等化する。(121) は(120)の底部と思われ、凸帯付近から底端部へ向けて急にすぼまる。内面は底端部ヨコナデ後のヘラ削りである。(122) は逆ハの字形の底部である。(123) は(121)と同様な形態をとるが、底部に凸帯がみられず、器壁に挿入して接合した把手が残る。底端部へ向けて湾曲気味にすぼまる底部である。外面は縦ハケ目、内面は底端部ヨコナデ後のヘラ削りである。(124) は(120~123)とは異質で、器壁が全体的に厚く暗褐色で硬質である。筒形の体部からわずかに細まる底部へ続き、底部近くに断面三角形の凸帯を貼り付けする。外面は縦ハケ目、内面口縁部ハケ目、体部は強い指ナデである。

須恵器 (125~132) (125) は、天井部につまみ剝離痕があり有蓋高杯の蓋と考えられる。天井



第97図 SD-10出土遺物実測図(9)

部は丸味をもち3分の1上半をヘラ削りする。天井部と口縁部の境界には稜をもち、口縁部は端部でわずかに外反する。杯蓋(126)は口縁部と天井部の境界は不明瞭で、全体的に丸味をもつ。天井部ヘラ切り後ナデ。杯身(127)は底部は欠損するものの、受部は薄く突出し口縁部は短く内傾くする。甕(128)は口縁部を欠損するが頸部は体部に対しくびれ、肩部が張り体部3分の1上半に最大胴径をとる。底部は平坦で、体部下半は不定方向のヘラ削りである。胴中央部にハケ状工具による連続刺突文を施した後に円孔1を外面から穿孔する。甕(129~132)は口縁部先端にかけて逆ハの字形に外反し、体部外面は平行叩き目を内面は当て工具痕をナデ消す。頸部内面は指ナデである。(129・130)は端部で屈曲して鋭い稜をもってさらに立ち上がり、端部は丸くおさめる。

(131・132)は口縁部で稜をもち、端部は角張って平坦面をもつ。

弥生時代の土器 (117・133~182)

中期の土器 (133・139・140)

壺 (133) (133)は、縦ハケ目後頸部の屈曲部に凸帯を指でおさえながら貼り付けする。

甕 (139・140) (139)の口縁部は屈曲し肩部は張らない。(140)は口縁端面をもち外面に刻み目を施す。

後期の土器 (117・134~138・141~182)

壺 (117・134~138・143) 口縁部(134・135・138・143)は内傾し(136・137)は外反する。端面に(134・135)はヘラ描き沈線を、(136~138)は平行沈線、(143)は凹線を施す。(136)には平行沈線後波状文を施す。(135)は頸屈曲部に凹線とハケ状工具による刺突文を施す。(134・135)は内外面ハケ目後一部ナデ調整で、(143)は体部外面は斜位のハケ目を逆時計回りに施す。

(136・137)はヘラ磨きが認められる。(138)は頸部に円孔1を穿孔する。

甕 (141・142・144~154) (141・142)は口縁端部が上下に肥厚して面をなし、端面に(141・142)は沈線を施す。(144~147)は直立もしくはやや外方に開く口縁部をもち、外面に平行沈線を施す。

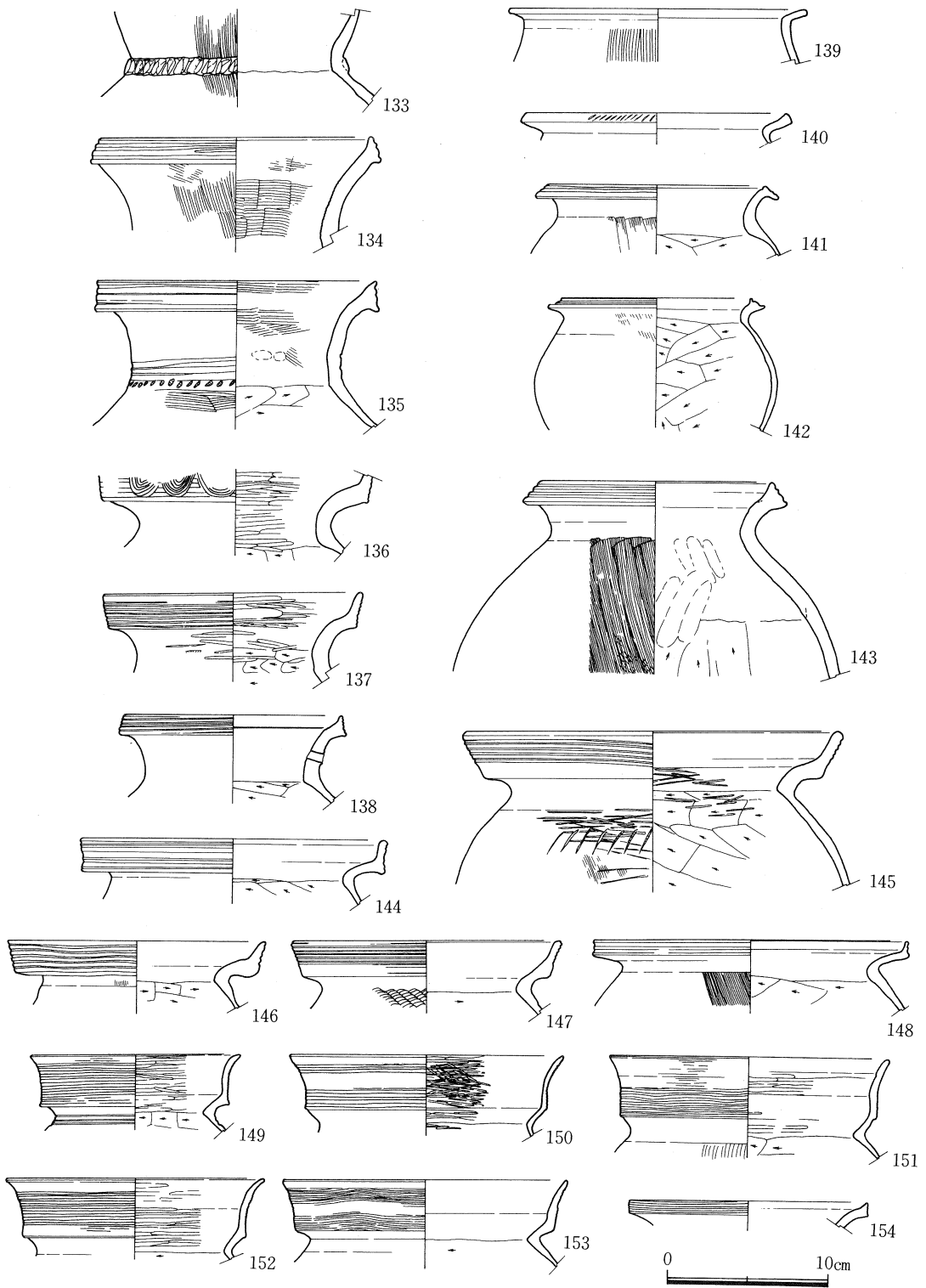
(145)は内外面にヘラ磨きが認められ、肩部外面に(145)は刺突文が、(147)は波状文がめぐる。

(148)は頸部から大きく屈曲してわずかに立ち上がり口縁部は短く直立する。(147・148)は口縁部外面平行沈線後軽くヨコナデする。(149~153)は口縁部は弓なりに外反し、口縁部外面に多条の平行沈線後一部をヨコナデする。(149~152)は内面ヘラ磨きするが(149・151・152)は後に一部をヨコナデする。(154)は逆ハの字形に開き、端部は上向きに肥厚して端面をなす。端面にはハケ状工具による平行沈線を施す。

底部 (155~158) いずれも広い底面で、(155~157)は平坦、(158)はわずかにふくらむ面となる。

(155)は内外面ハケ目調整、(156~158)は外面ヘラ磨きで、(156)は底面を、(158)は内面ヘラ削り後にヘラ磨きする。

高杯 (159・160) (159)は暗灰褐色の硬質の脚部で、上部には円盤充填部分の剝離痕が認められる。脚柱部は5条単位の橢状工具による6段の沈線が周回し、裾部は同一工具による鋸歯文、後



第98图 SD-10出土遗物实测图 (10)

に逆三角形に配置した円孔3ヶを4方向に穿孔する。(160)は、赤彩され、杯部との接合部から底部にかけてハの字状に外反し、脚端部はわずかに肥厚する。

鼓形器台・器台 (161~167・172・173) (161~167)はいずれも外方に大きく開く鼓形器台の受部、脚台部で、それらの稜部には数条の平行沈線もしくは独立した沈線2段と間に2重あるいは3重圏スタンプ文がめぐる。受部内面はヘラ磨きである。この他に図化していないものの、スタンプ文を施さないほぼ同形態の鼓形器台がある。(172・173)は、受部に脚部が接合する形態をとる。

(172)は受部が浅く、口縁部で段をもって短く外方に立ち上がり、脚部は裾部で大きく開く。

(173)は受部はハの字状に開き口縁部で稜をもって短く直立する。脚部は裾部で広がる傾向がみられる。外面はハケ目後ヘラ磨き、内面受部は縦ヘラ磨き、脚部は裾部ハケ目後ヘラ削りである。

スタンプ文土器 (168~171) いずれも小片であるが壺の胴部片と思われる。数条の平行沈線2段の間に2重圏スタンプ文、(170)は渦スタンプ文を施す。内面はヘラ削りで、後に(168・169・171)はヘラ磨きが確認される。

脚台部 (175・178) 脚端部は面をなし、端面には平行沈線を2段に施す。(178)は内湾しながらハの字状に開き、端部で若干傾斜を変える。内面にヘラ削り後の粗なハケ目を施す。

蓋 (176・177) (176)は、口縁部は屈曲して端面をもつ。つまみの天井部は粘土を貼り付けて閉じ、逆台形に成形したもので、これに対し、(177)はつまみは外面が凹状を呈する。

壺 (179) わずかな平底をもち肩部が張る小型の壺で、体部外面は縦ヘラ磨き後肩部は斜位のヘラ磨きである。

口縁部 (174) 口縁下端が下垂し、端面に平行沈線を施す。内面端部にヘラ磨きが認められる。

注口部 (180・181) 注口部先端へ向けて幅を細め器壁も薄くなる。外面ハケ目調整である。

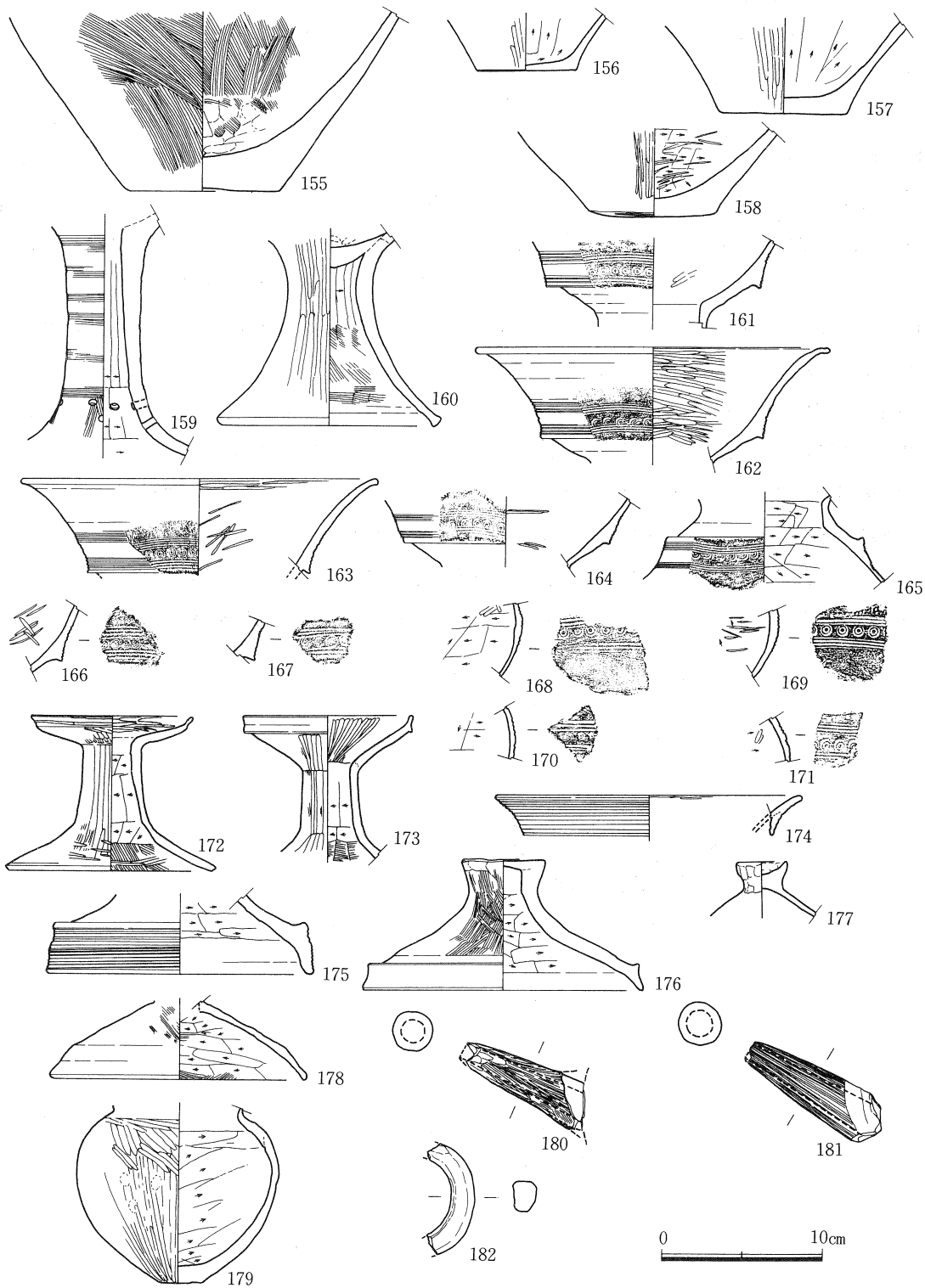
(180)は体部に差し込んで接合したもので、端部に器壁との剝離痕が残る。

把手部 (182) 断面方形のU字形の把手である。手捏ね成形によるものである。

その他の遺物としては、有孔円盤(183)、銅鏃(184)、石製品(185~194)、木製品(195~231)がある。有孔円盤(183)は外周を面取りして円形に成形する。表裏側面には成形時の磨き筋がみられる。片面から小円孔2ヶを穿孔し、円孔の周囲は溝状に一段深くなる。銅鏃(184)は柳葉状を呈し有茎。全体的に鑄造時の型ずれがみられ、特に鏃身逆刺部や茎部において顕著である。刃は斜め方向の研ぎ筋が残る。

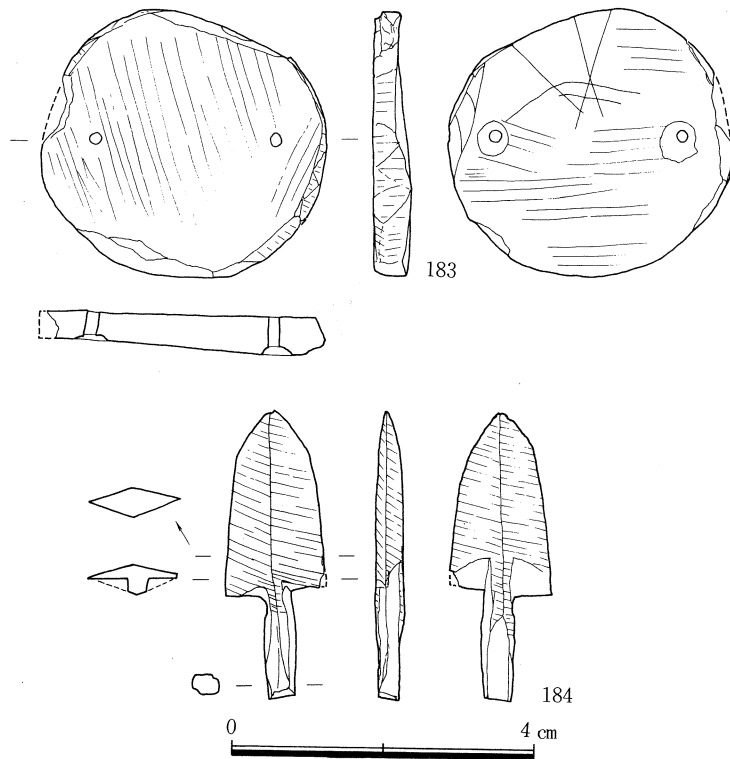
石製品は、砥石、磨石、台石、敲石がある。砥石(185~187)は両端部が割れているものの、他面は磨滅して凹面となる面がみられる。(186)は研ぎ筋が残る。(188)は一端は割れ面以外の面は、磨り面である。磨製の可能性も考えられる。(189)は台石の一部と考えられ、割れ面以外の面は、磨り面である。(190)は両面と片側面に磨り痕があり、側面が使用頻度が高い。(191~194)は長軸面を中心として敲打痕が認められ、(193)は火を受けている。片手で握れる程の円礫を使用している。

木製品は、生活に関与した木製品は数少ないものの、竪杵、木錘、火鑽板、杓子形木製品、高杯、

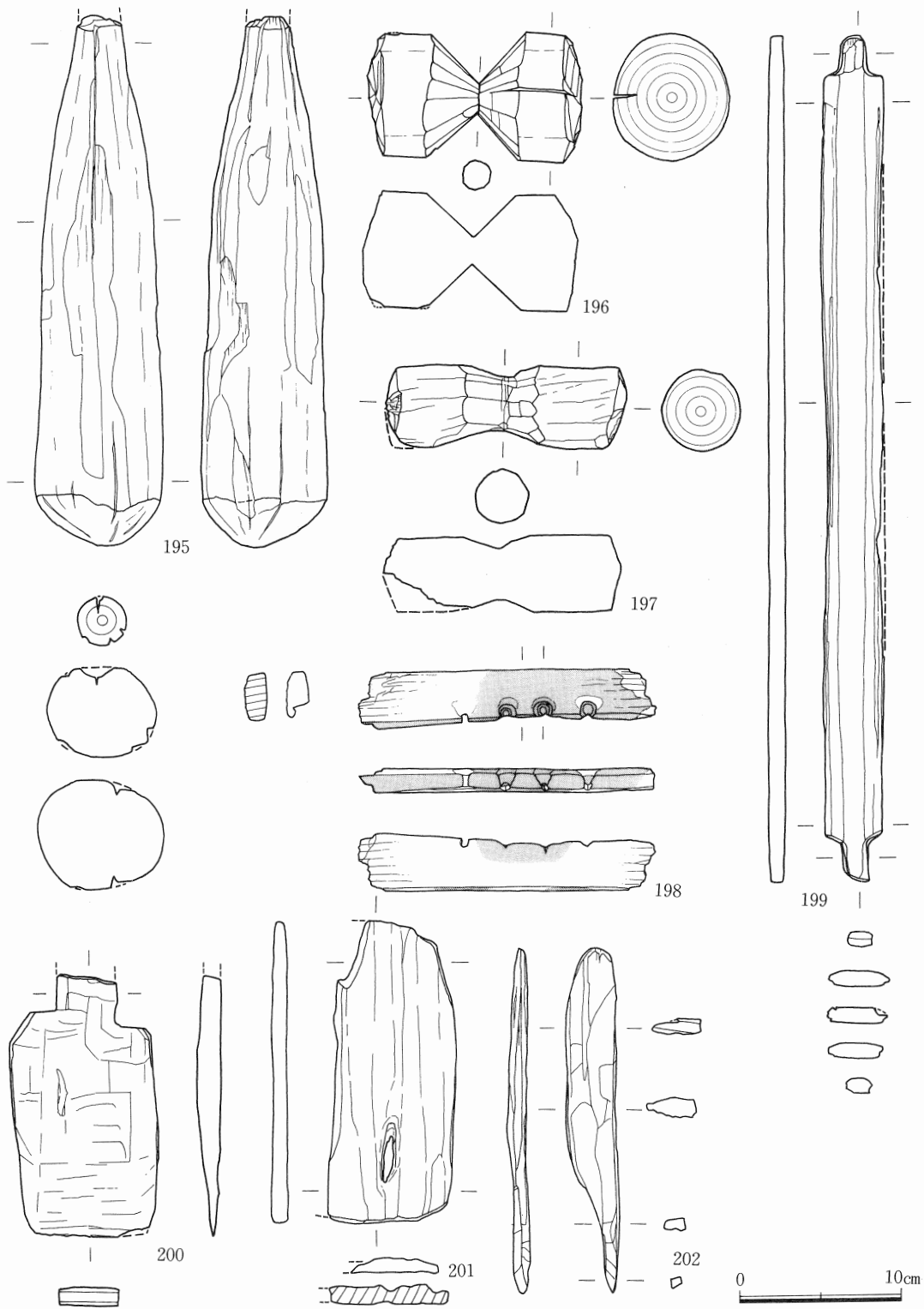


第99图 SD-10出土遗物实测图(11)

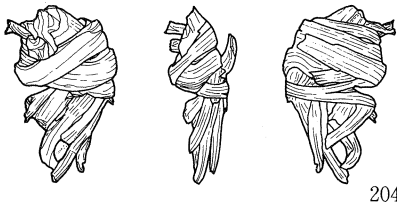
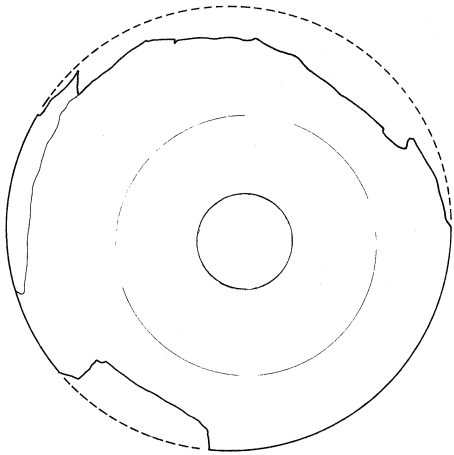
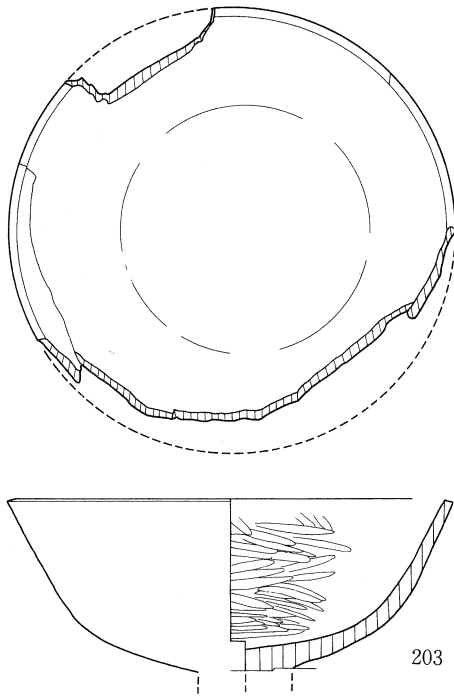
紐、建築材、杭が出土している。豎杵（195）は腐朽著しいものの、握り部へ向けて幅を狭める。木錘（196・197）はほぼ左右対称の形態で、それぞれ両端を切断し中心へ向けて円錐状に削る。（196）は（197）に比べてくびれが大きく、丁寧な作りである。火鑽板（198）は両端部を欠損するが、側面からV字形の切り欠きを4ヶ入れ、火鑽孔とする。1ヶは未使用であり、火鑽孔以外にも焼け焦げる。（199）は、断面レンズ状に加工した材の四隅を切り欠きして突起を作り出し先端は丸く加工する。杓子形木製品（200）は、長方形の体部に方形の柄が削り出される。先端部は両面から削り断面V字形となる。（201）は腐朽著しく、三隅に加工の残る板材である。（202）は刀子形を呈し、断面は三角形で、先端部は丸く加工される。柄にあたる部分は端部が尖る。木目の詰まった材を用いている。高杯（203）は、杯部が椀状で口縁端部は平坦面をもつ。内面には溝状の削痕が残り器壁が均一で全体的に丁寧な作りである。底部外面に円形の割れ面が認められる。紐（204）は幅7mmの植物の細紐状のものを束ねたものである。建築材（205）はほぼ完存で、全長3.57mを測る。枝打ちした丸太材を使用し、先端部は削り尖らせ、根元側の端部は斜めに加工し、長方形の柄穴を穿つ。杭（206～231）はいずれも立杭として使用されていたもので、中には（208）のように柄穴があり、他で使用されていた材を杭として転用したのもみられる。また、杭は角材、丸太材、板材に分けられる。角材を用いた杭は、先端部近くで両側面から削り出し、端部でさらに両面から削り尖らせるものが多い。また、角材、板材の中には、側面に削痕が認められるものがある。



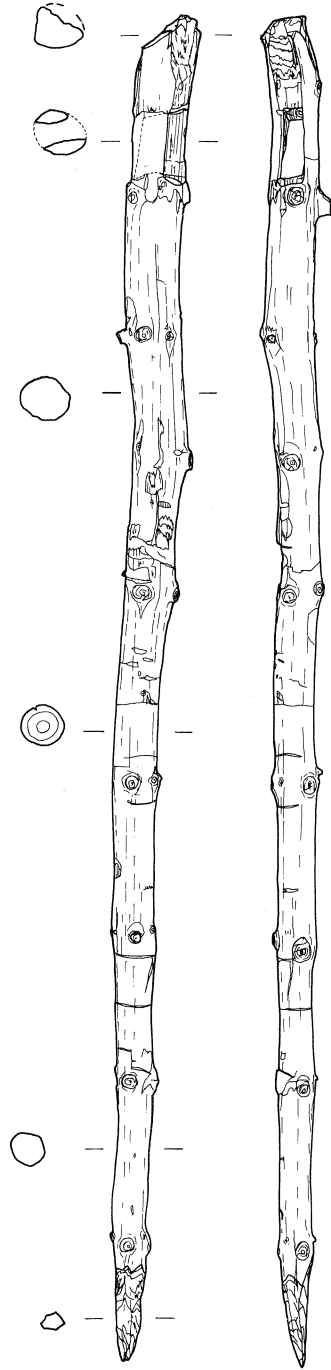
第100図 SD-10出土遺物実測図 (12)



第101图 SD-10出土遺物実測图 (15)

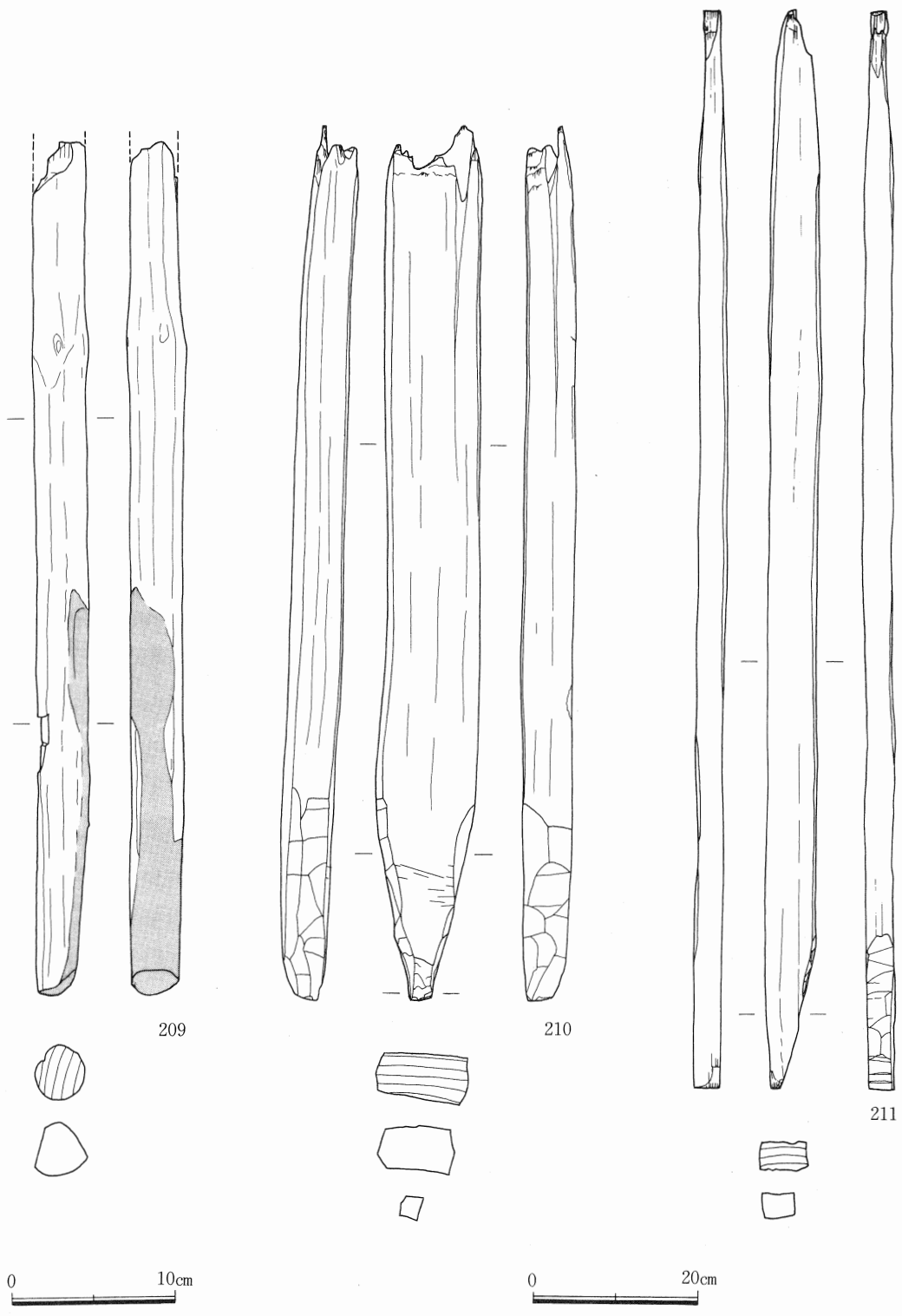


0 5 cm

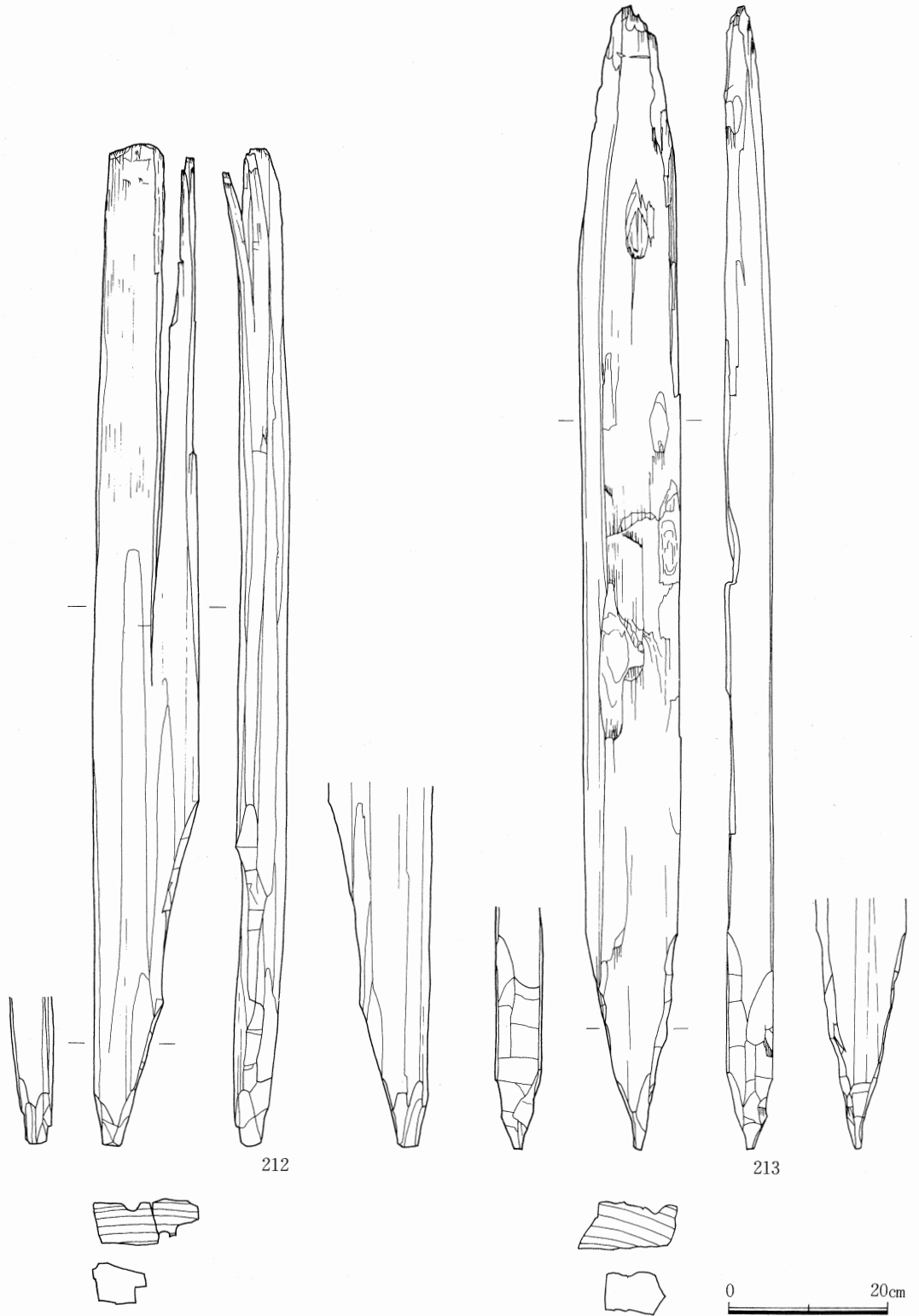


0 1 m

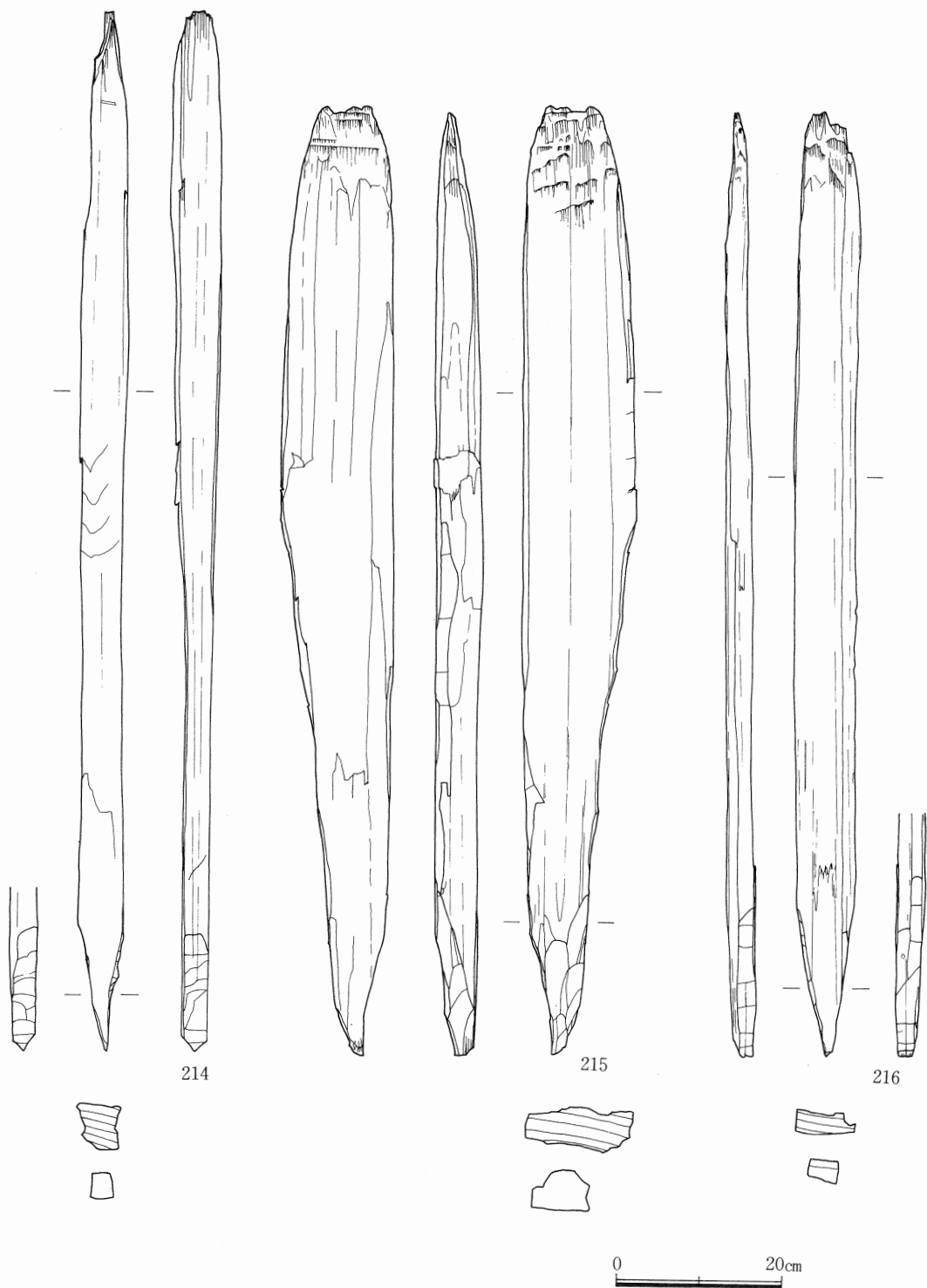
第102図 SD-10出土遺物実測図 (16)



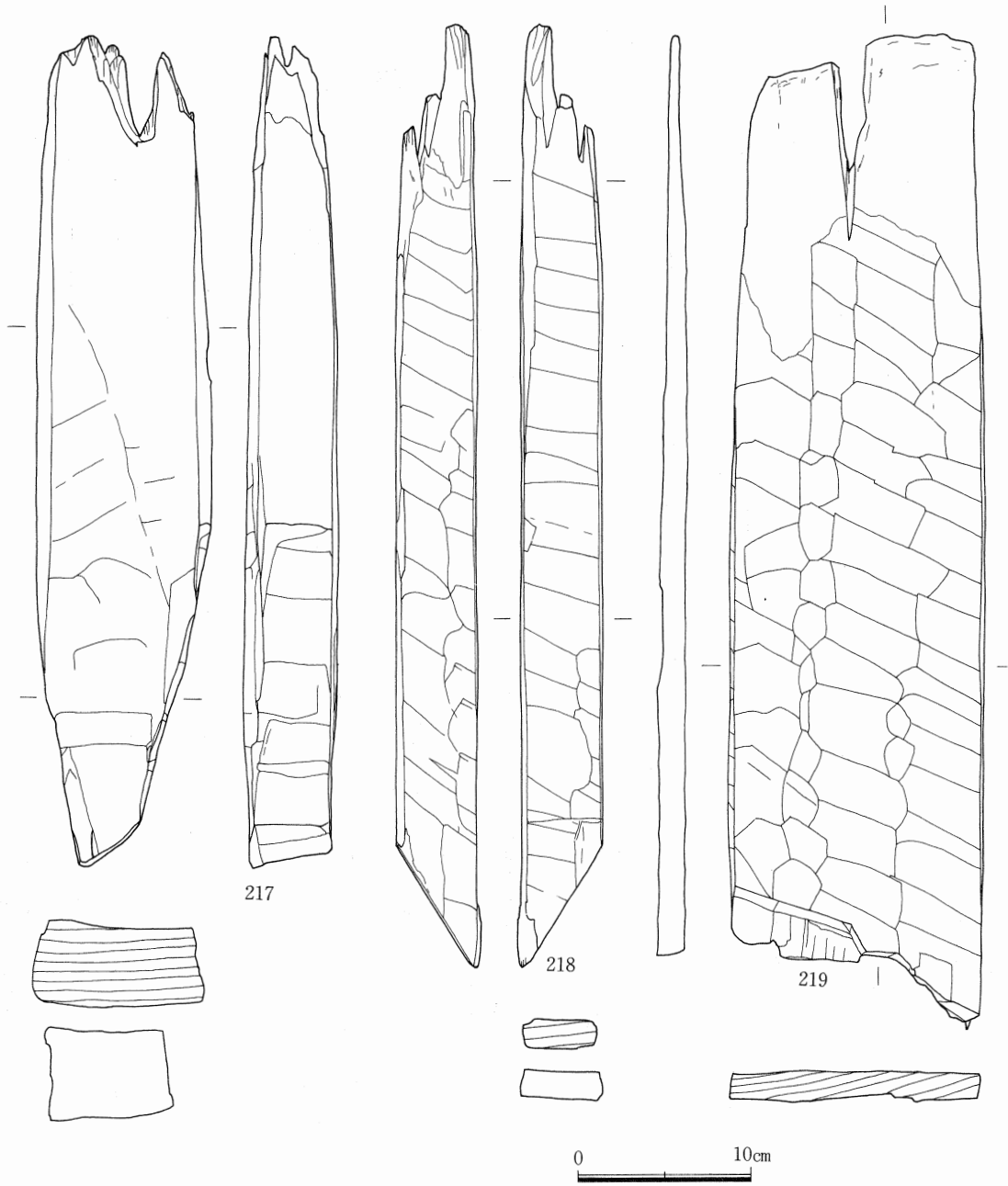
第103図 SD-10出土遺物実測図 (18)



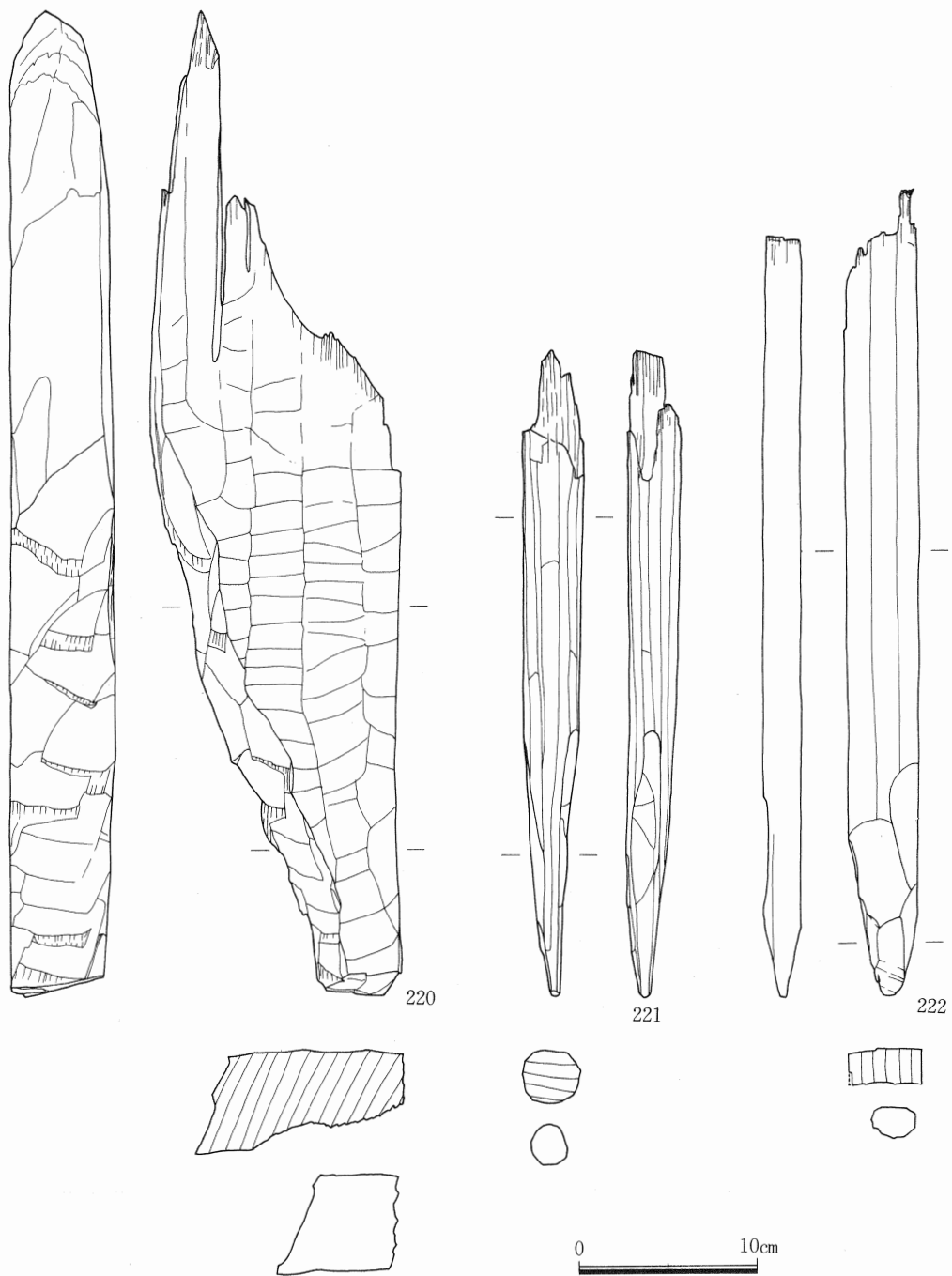
第104図 SD-10出土遺物実測図 (19)



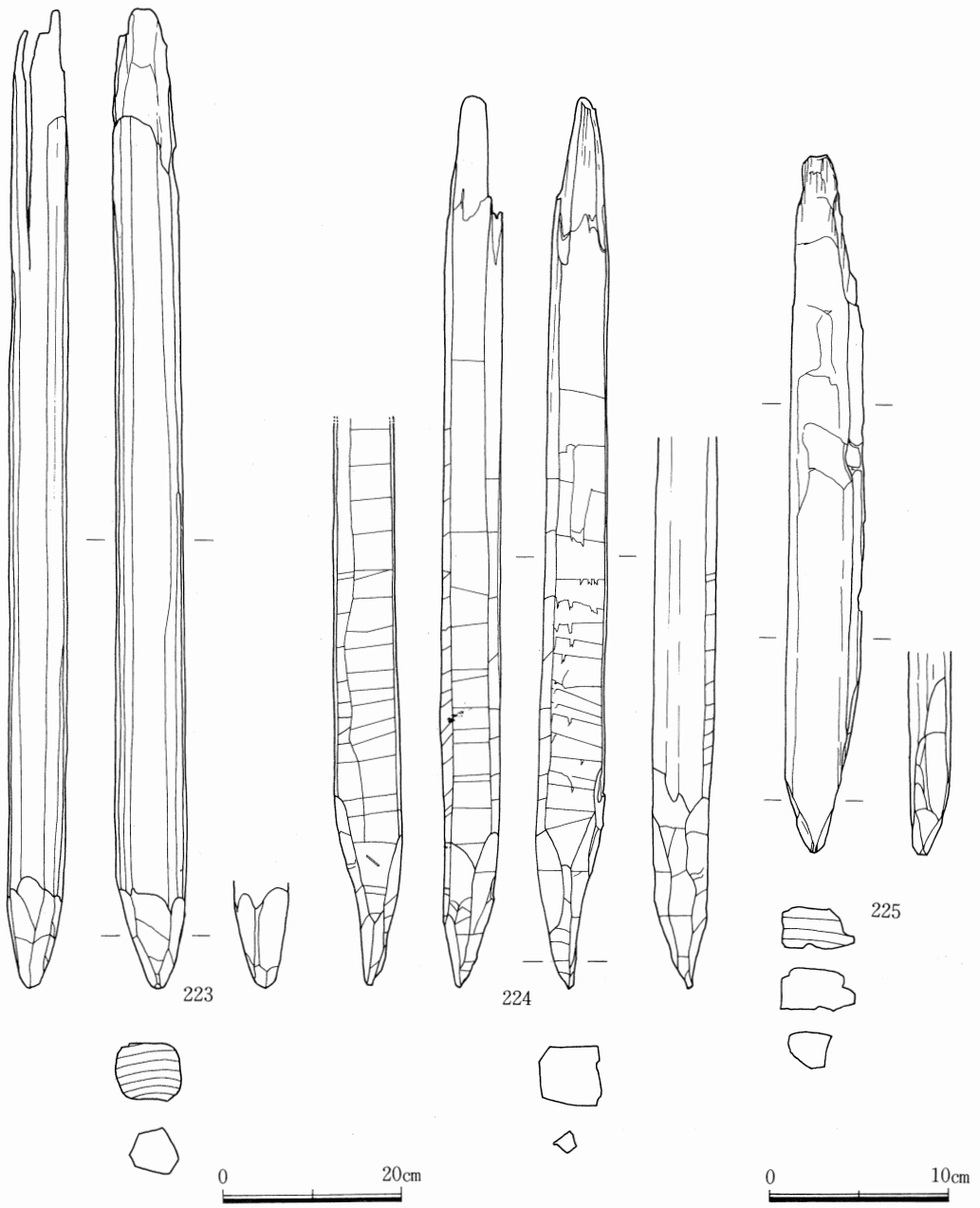
第105图 SD-10出土遺物実測図 (20)



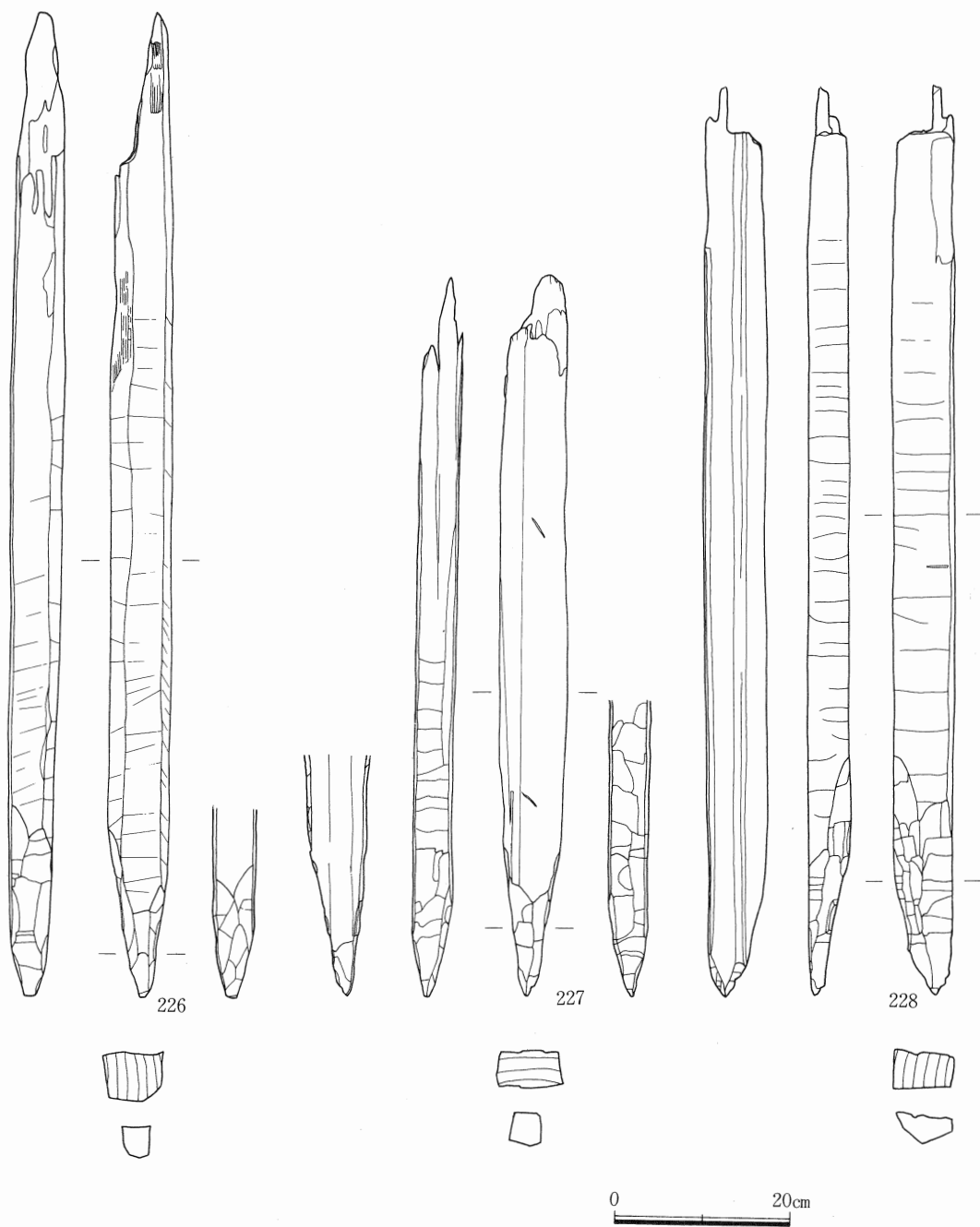
第106图 SD-10出土遺物実測図 (21)



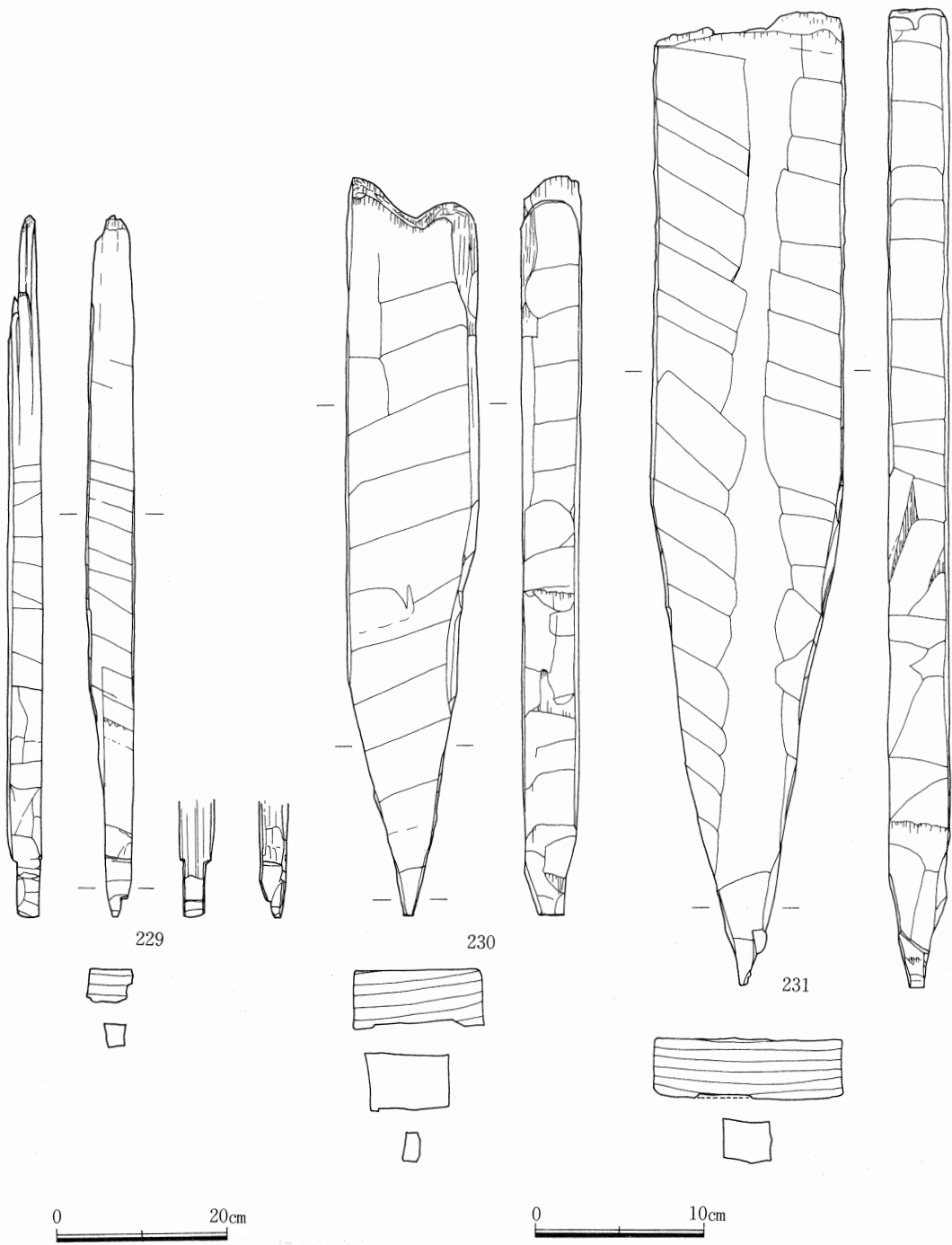
第107図 SD-10出土遺物実測図 (22)



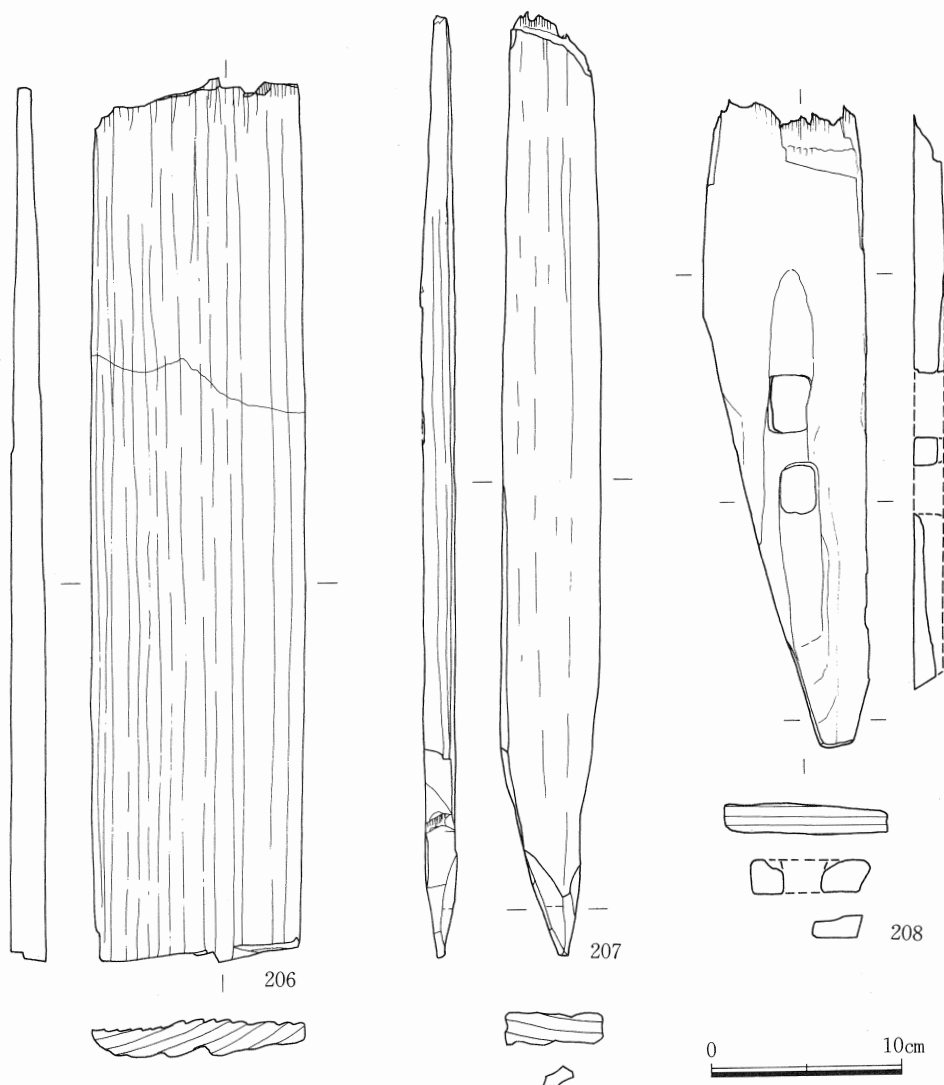
第108图 SD-10出土遺物実測図 (23)



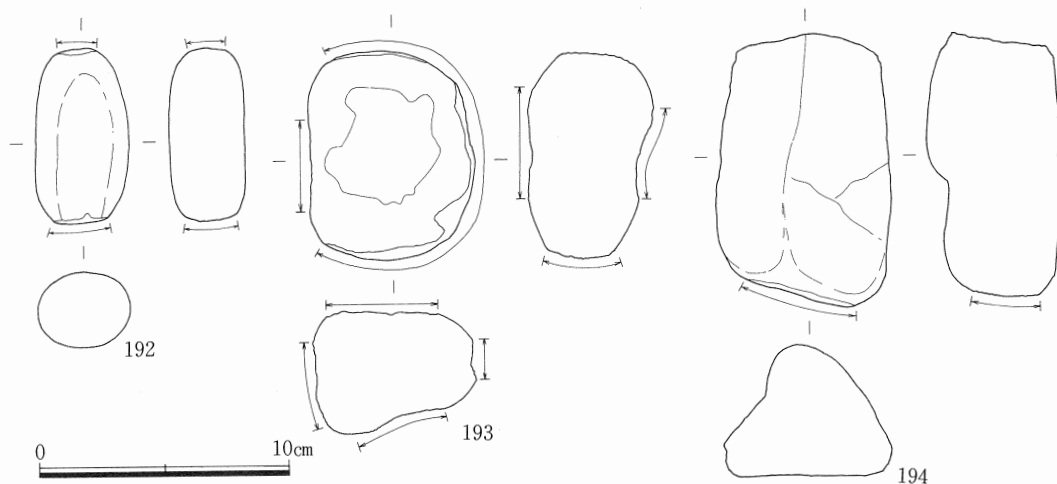
第109图 SD-10出土遺物実測図 (24)



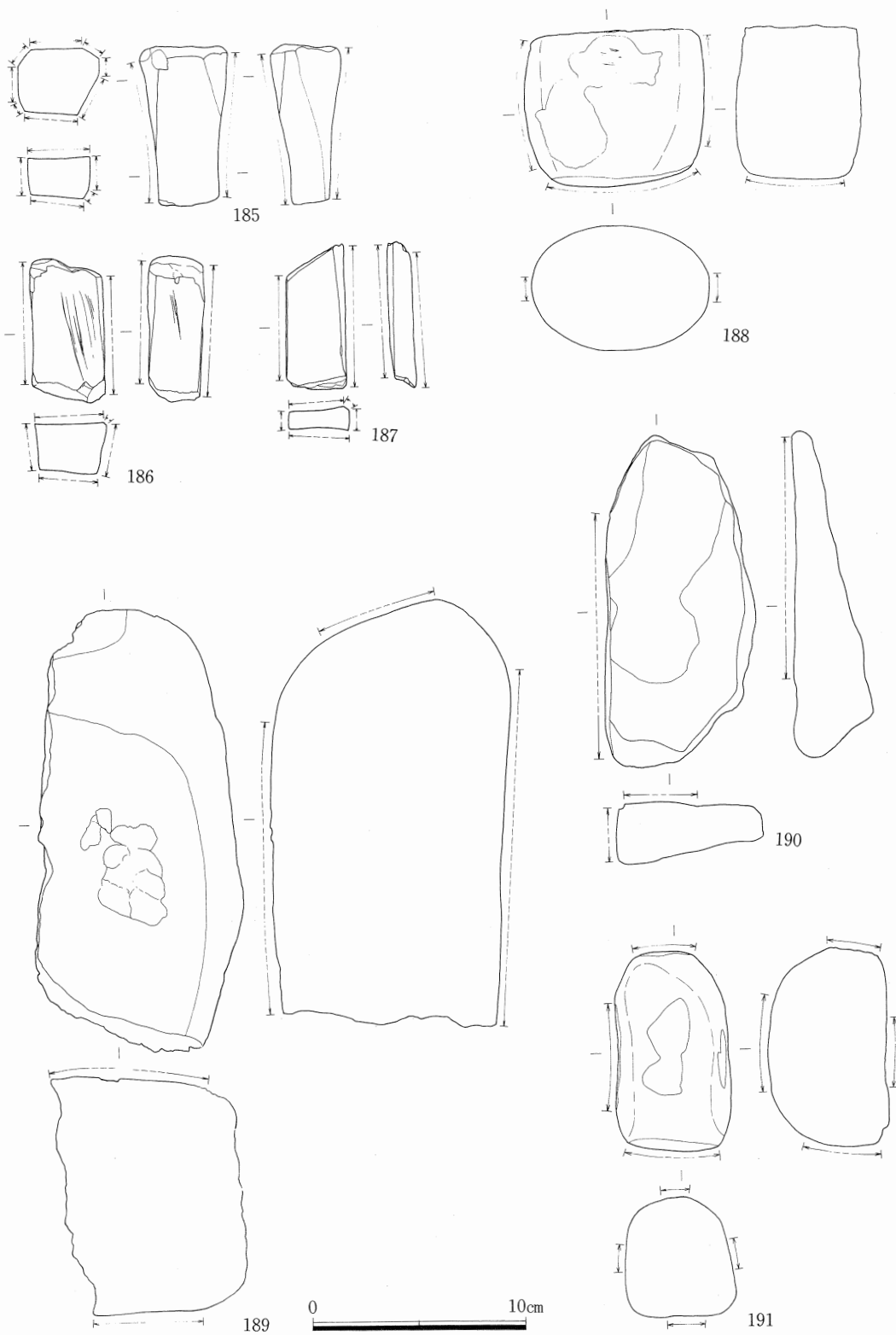
第110图 SD-10出土遺物実測図 (25)



第111图 SD-10出土遺物実測図 (17)



第112图 SD-10出土遺物実測図 (14)

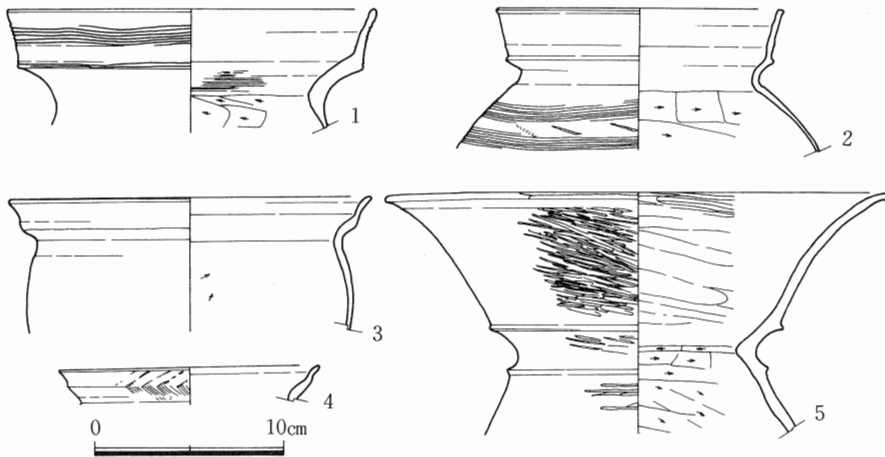


第113图 SD-10出土遺物実測図(13)

SD-11 (付図60)

一部がB-3区とA-5区にかかるものの、A-4区とB-4区にその中心を置く。東端側は調査区外へ伸び、西端は排水用の溝によって掘削される。検出面で、長さ残存13.92m、幅最大2.60mを測る。主軸はN-46°-Eを向く。東側は幅75cm前後と直線的で断面も逆台形と整っているが、中央部から西側半分は幅が徐々に広がる。また、西端部で北側の壁が広がる傾向がみられる。調査区西壁の土層断面から、SD-11は古墳前期の層を掘り込んで作られた深さ30cm程度の溝であるが、北側の壁は削平されており土砂が堆積後中央部上層を再び掘り返して溝として活用されたことが判明した。

遺物は西端部に集中してみられ、壺、甕、鼓形器台、自然石、自然木が出土している。出土した土器の中で壺(1)は、口縁部外面に平行沈線を施した後上下部をヨコナデするという古い様相をもつ。その他の土器は甕についていえば、口縁部はすべて(2)と同様に内外面ヨコナデ調整である。甕(3・4)は口縁部の形態が他にみられる甕と異なり、口縁部は短く外反し口縁下部に明確な稜をもたず屈曲する。(3)は、体部内面は砂の動きが認められるがナデによる調整で、2~3mmの砂粒を多量に含むろく粗い胎土である。(4)は口縁部外面にハケ目がみられるとともにその際の工具痕が刺突状に残る。(3・4)は橙色系の色調で、(4)は(3)に比べ、胎土が細かく精良である。鼓形器台(5)は比較的大型で、接合部はあまりくびれず稜もあまい。ヘラ磨きによる調整が顕著である。



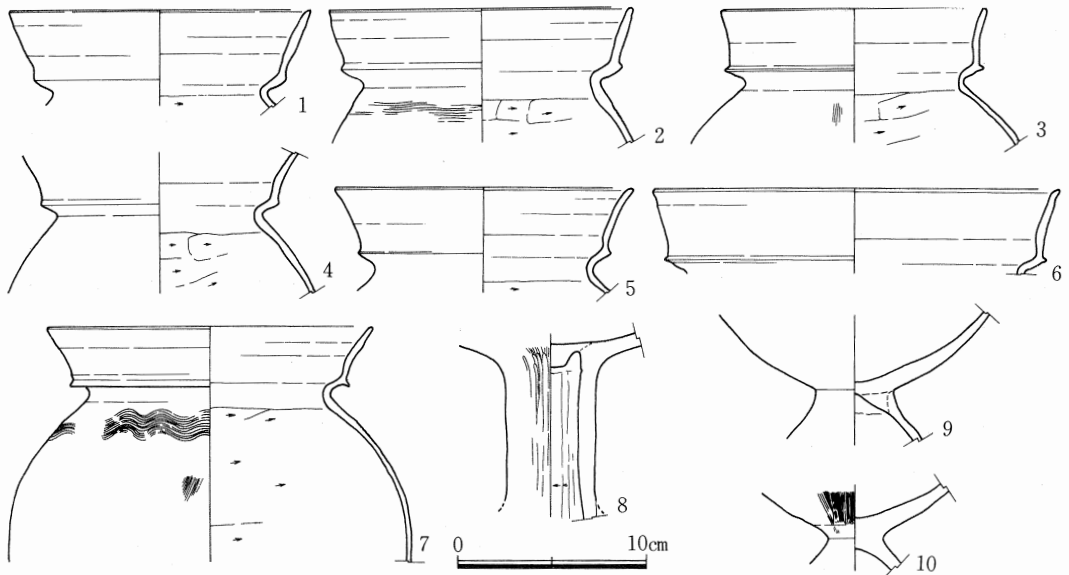
第114図 SD-11出土遺物実測図

SD-12 (付図61)

北東端部がB-8区から調査区外へのびるもののB-9区にその中心を置く。東向きに幅が広がる傾向をみせ、東側でSK-37をほぼ直交に切る。西側は後世の水田用暗渠によって掘削される。長さ残存3.82m、幅0.98m、深さ0.05mを測る。主軸はN-62°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面は平坦で比高差は認められない。埋土は暗灰色砂質土一層である。

埋土中から、甕（1～7）、高杯（8）、低脚杯（9・10）と、図化できなかったが、壺頸部小片、鼓形器台小片が出土した。甕（1～7）はすべて口縁部内外面ヨコナデするが、（1）だけ口縁下端部をつままず、（1・2）は（3～7）と比べて若干肉厚で、口縁外面の反り返りが見られない。

（8）は高杯の脚柱部で、杯底部は薄く、円盤充填式の接合方法をとる。低脚杯（9）は脚台部で裾部が剥離していることから、まず、短く芯となる粘土を杯底部に接着し、それを外からぐるりと囲むように脚裾部となる粘土を接合し、脚台部としている。（10）は、杯部の内面がきれいにナデ仕上げされていることから低脚杯としたが、色調や厚さ、脚台部となる部分の形状や調整方法から、蓋である可能性もあるものと思われる。



第115図 SD-12出土遺物実測図

SD-13（付図63）

B-8区とB-9区にまたがり、北東部は調査区外へ伸びる。SK-48・49の東端部を切る。北東側に軸をほぼ直行するSD-14が隣接する。長さ残存2.76m、幅0.40m、深さ0.13mを測る。主軸はN-33°-Eを向く。断面形は椀状である。底面は南端部でわずかに高さを増す。埋土は2層に分かれ、上層から、1. 暗灰色砂質土、2. 暗褐色砂質土（炭片を含む）である。埋土中から甕小片と脚端部小片が出土している。

SD-14（付図62）

B-8区の東部に位置する。東端は調査区外へ伸びる。南側にSD-13が軸をほぼ直行するかたちで近接する。長さ残存1.94m、幅0.37m、深さ0.09mを測る。中央部で若干屈曲し、主軸は北部でN-21°-W、南部でN-41°-Wを向く。断面形は逆台形で、底面は若干の凹凸がみられ北端へ向けて深さを増す。埋土は淡灰色砂質土（炭片を含む）一層である。埋土中から土器小片が出土している。

SD-15 (付図64)

A-9区の南西部に位置し、北東-南西方向に軸をとる小規模な溝である。北東端と南西端を後世の水田用暗渠によって掘削される。長さ残存2.72m、幅0.21m、深さ0.02mを測る。主軸はN-67°-Eを向く。断面形は皿状で、両端の底部の比高差はみられない。埋土は淡黄褐色砂質土である。埋土中から、土器小片が出土している。

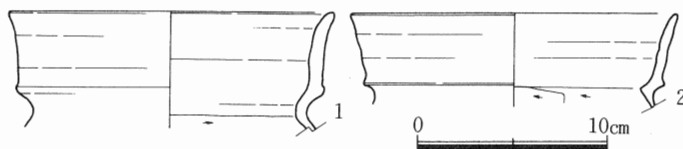
SD-16 (付図65)

A-9区とB-9区にまたがる。SK-41を切り、底面から約20cm下層にSD-17が主軸を同じくしてほぼ重なる。南東側には、重なり合う土坑群が近接する。長さ5.93m、幅0.93m、深さ0.10mを測る。主軸はN-44°-Eを向く。北東部が若干広がる傾向がみられる。断面形は皿状で、溝の両端底部の比高差はほとんどなく中央あたりが若干深くなる。埋土は淡灰色砂質土一層である。底面から若干浮いた状態で、土器小片が出土している。

SD-17 (付図66)

A-9区とB-9区にまたがる。北側の一部をSK-41に切られ、SK-54の西側を切る。また、SD-16の底面から20cm下層にあたり、軸も同じでほぼ重なる。長さ4.55m、幅0.64m、深さ0.29mを測る。主軸はN-43°-Eを向く。断面形はゆるやかな逆台形で、北側がわずかに深くなる傾向があり、北端部で10cmばかり急激に落ち込む部分がみられる。埋土は6層に分かれる。

北西側の壁近くの底面から若干浮いた位置で、長さ24cmで3cm程の角材1本が検出された。また、埋土中から甕の口縁部(1・2)や、図化していないものの鼓形器台片が出土している。(1)は(2)に比べて全体的にぼつりしており、口縁部下端部の稜も(1)はつままない。(2)は灰褐色の色調で胎土が弥生的であり、ヘラ削りは左方向である。

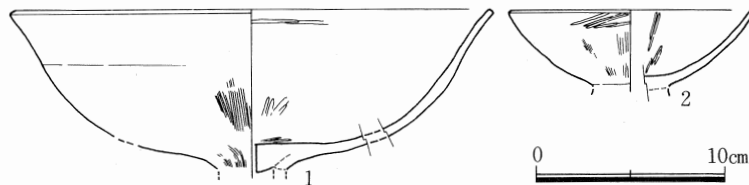


第116図 SD-17出土遺物実測図

SD-18 (付図67)

B-9区およびB-10区にまたがる。下層には土器群4が広がる。長さ4.68m、幅0.40m、深さ0.10mを測る。主軸はN-4°-Wを向く。断面形は椀状で、両端の底部の比高差はほとんどなく、中央部分が若干深くなる。埋土は黄褐灰色砂質土一層である。

溝中央部北寄り、若干浮くものの壁に沿った状態で低脚杯(2)、土器小片が出土した。また、埋土中から高杯(1)、複合口縁の甕小片、その他の土器小片が出土している。(1)は杯底部中央に径4mmの小孔を脚部側から穿孔するが、杯部内面側の縁に粘土が付着しており完全には貫通していない。本来、貫通する意図はなかったものと思われる。



第117図 SD-18出土遺物実測図

SD-19 (付図68)

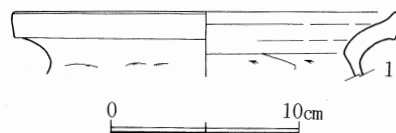
B-10区の南側に位置し、一部はB-11区にかかる。西側に同様な規模のSD-20およびSD-21が南北方向に軸を向けて並ぶ。北端部でSK-63の西壁の一部を切る。長さ3.59m、幅0.34m、深さ0.10mを測る。主軸はN-6°-Wを向く。断面形は椀状で、底面は南側が深くなり、両端部の比高差は約7cmである。埋土は黄灰色砂質土一層である。遺物は出土しなかった。

SD-20 (付図69)

A-10区の南部に位置する。東にSD-19が、西にSD-21が軸を南北方向に向けて隣接する。また、北西側の一部でSK-46の東壁を切る。長さ3.04m、幅0.46m、深さ0.10mを測る。主軸はN-5°-Wを向く。断面形はなだらかな逆台形で、底部は南側が深くなり、両端部の比高差は約6cmである。埋土は淡黄灰色砂質土一層である。遺物は出土しなかった。

SD-21 (付図70)

B-10区とB-11区の境界部に位置する。西側に同様な規模のSD-20およびSD-19が南北方向に軸を向けて並ぶ。長さ2.36m、幅0.62m、深さ0.07mを測る。南側がやや広がり、西向きに若干湾曲する。主軸はN-5°-Wを向く。断面形は皿状で、南端が若干深くなり、両端部の比



第118図 SD-21出土遺物実測図

高差は2cmである。埋土は淡黄褐色砂質土一層である。南端部で甕の口縁部(1)が出土しているが、形態や胎土からみて弥生土器であり、出土状況などからみても、溝の下層に広がる土器群4の遺物と思われる。

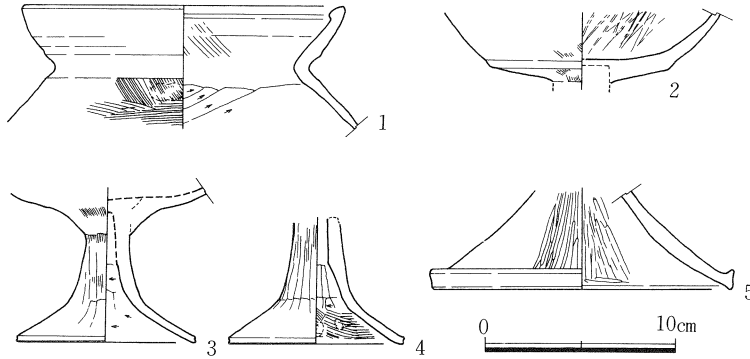
5. 土器群

土器群1 (付図37)

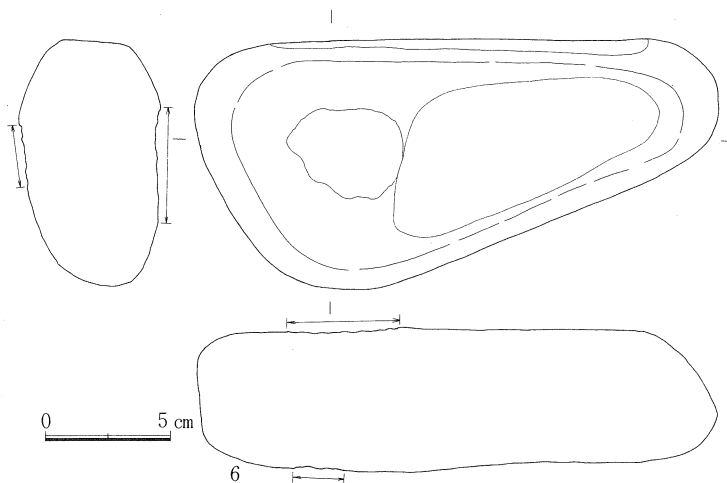
A-8区とB-8区の境界部に位置する。北側一帯に土坑が群在し、SK-14・10が北側に隣接する。土器や石製品等が集中する部分には、地面に南北方向の軸をとる楕円状の凹みがわずかにみられた。2個体分の甕がつぶれて細かな破片となったものと赤彩された壺や高杯とが一部重なり合って出土している。本来は土坑であったが肩部を流失し、底面部分とそこで出土した土器や石製品等だけが残ったものと思われる。

出土した遺物には、壺、甕、高杯、脚台部、敲石、自然石がある。また、埋土中から鈹滓状遺物

が出土している。甕（1）は、口縁部内面は端部に折り込みがみられハケ目後ヨコナデ調整する。体部は復元できなかったものの、底部は内面に指頭圧痕が顕著な丸底である。高杯（2～4）はいずれも赤彩され、（2）は口縁部と杯底部の境に段をもち杯部内面に暗文を施す。（5）はハの字に開く乳褐色の脚部で、ヘラ磨きによる調整が顕著であり、（1～5）に比べて硬質である。敲石（6）は平面が水滴形の円礫を用い、両面に敲打痕が認められる。



第119図 土器群1 出土遺物実測図 (1)

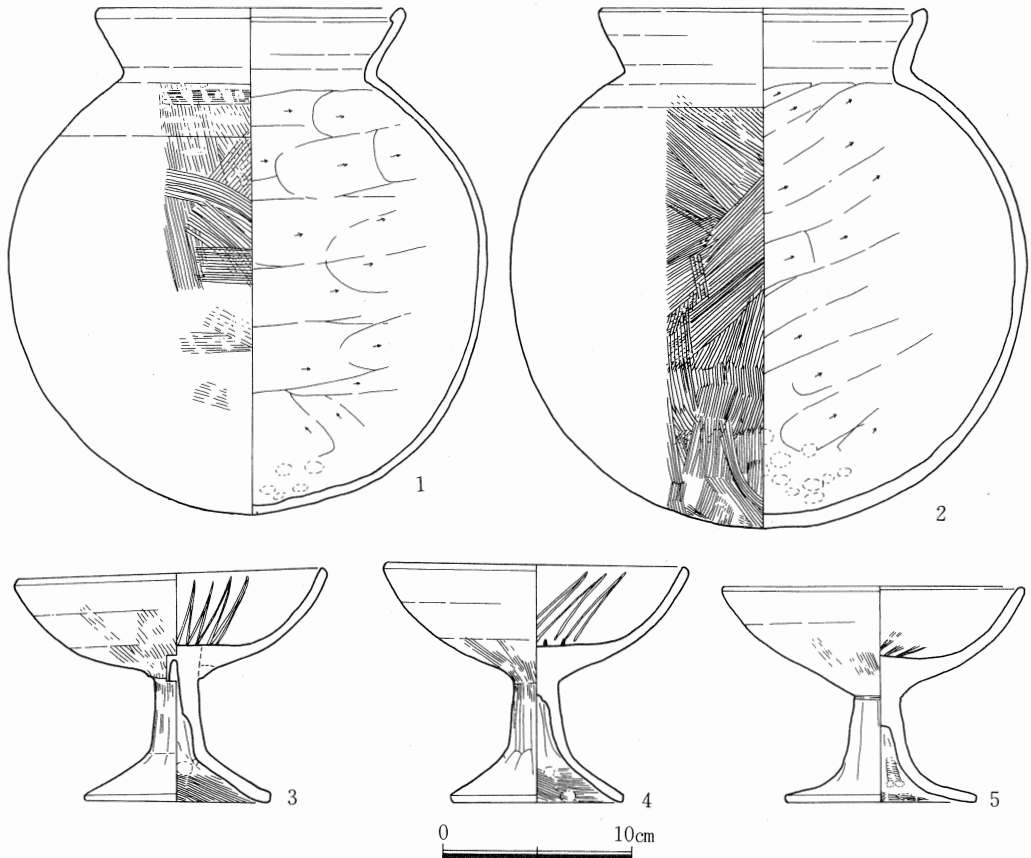


第120図 土器群1 出土遺物実測図 (2)

土器群 2 (付図38)

B-12区の南東部に位置し、SD-03の北東沿岸部の下層にあたる。甕（1・2）と高杯（3・5）がほぼ形を留めたまま出土し、これらの西側一帯にも、甕片や高杯片等が点々と検出された。また、調査区東側の壁面から碗等の土器片が出土しており、出土範囲はさらに東側へも広がるものと思われる。土器（1～5）は直線的に並んだような状態で出土しているが、甕の内部には灰色系の砂質土が流入しており、それぞれの土器の接地面の標高は（1）は1.62m、（2）は1.51m、（5）の脚部で1.63m、（3）の口縁で1.84mで、北から南向きに傾斜して低くなる。

甕（1・2）は、ほぼ同様な形態で、くの字状の口縁部と球形化した体部をもつ。ただ、（1）は（2）に比べて器壁が薄く、（2）は全体的に重厚な感じの土器である。（1・2）とも調整はほぼ共通し、外面は全体的に煤が、内面は底部周辺に炭化物がそれぞれ付着する。高杯（3～5）もほぼ同様な形態・調整で、いずれも杯部と脚部とは差し込み式の接合方法をとる。赤彩され、杯部内面に暗文を放射状に2段にわたって施す。（5）は他の2点に比べて器高が低く、脚部の裾の開き具合も若干大きいようである。



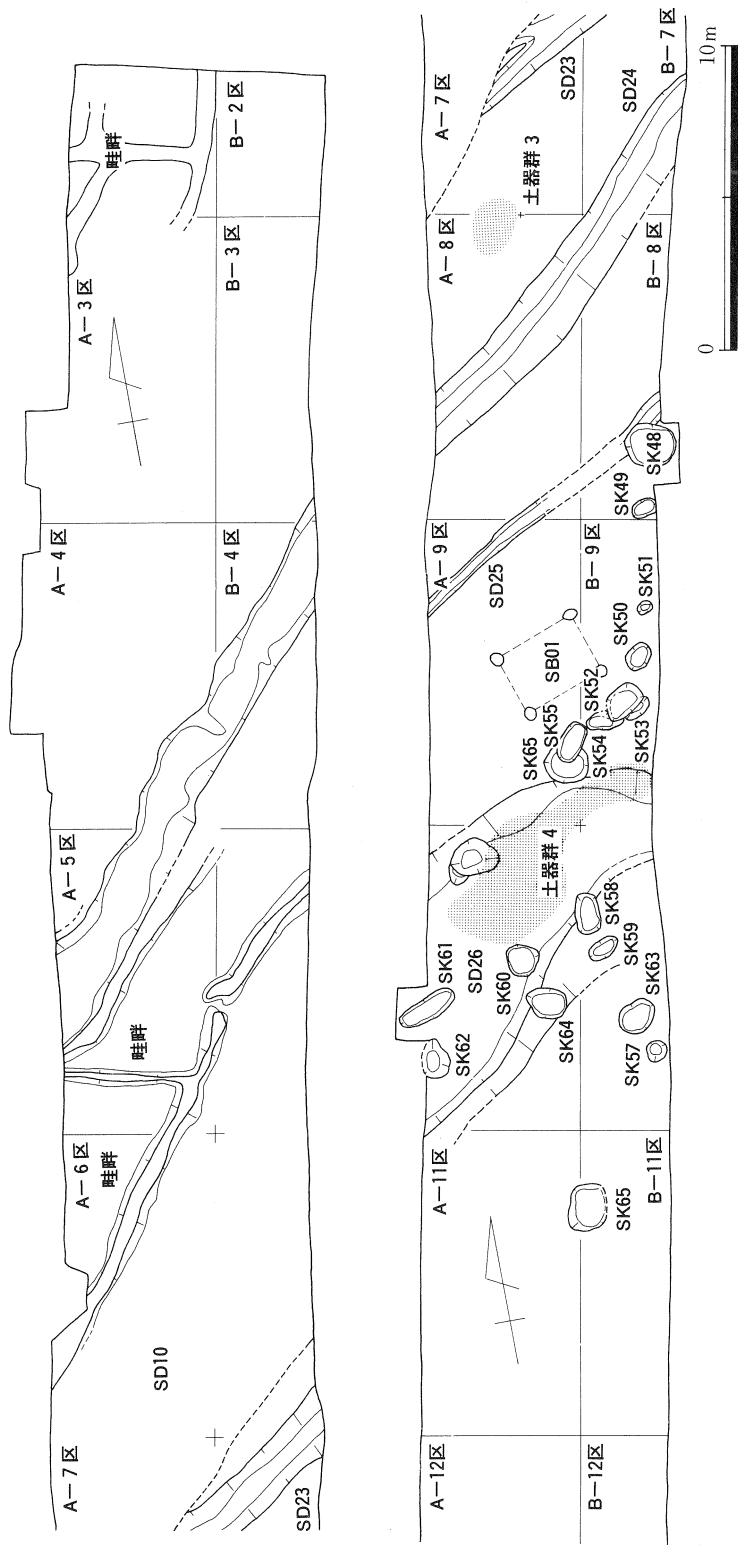
第121図 土器群2出土遺物実測図

第4節 弥生時代の遺構と遺物

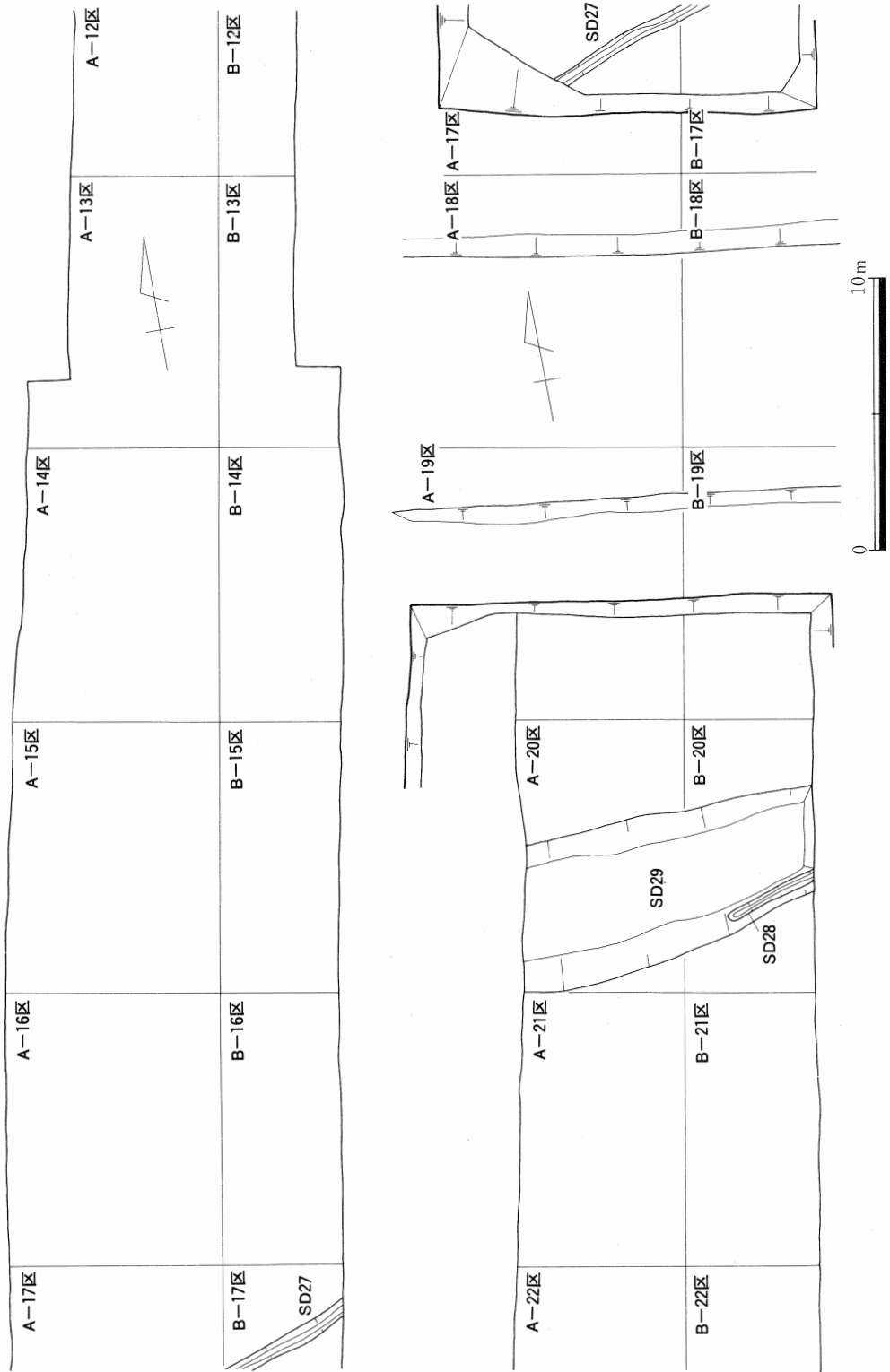
調査区であるA・B-2～27区のほぼ全域で弥生時代の遺構を検出した。そのうち弥生時代後期の遺構は調査区北側のA・B-2～20区にかけて、弥生時代中期の遺構は南側のA・B-20～27区にかけて確認されている。また、土坑や小規模な溝状遺構が、後期はA・B-9～10区、中期はA・B-21～22区に集中する。各時期の遺構数は次のとおりである。

後期：水田遺構1、土坑18、溝状遺構7、掘立柱建物1、土器群2

中期：土坑29、溝状遺構8、掘立柱建物4、柱穴1



第122図 弥生時代遺構配置図（後期①）



第123図 弥生時代遺構配置図（後期②）

土坑、溝状遺構、土器群から、多くの土器や、石斧・石鎌を含め石製品を検出した。土器の中では、SK-52出土の瀬戸内系土器、SK-71・73・SD-37出土の近江系土器などが注目される。また、大規模な溝SD-26では木製品も出土しており、木庖丁・堅杵・横槌などがある。

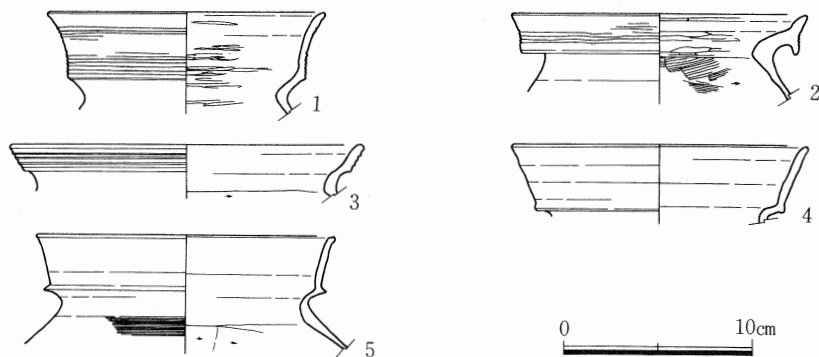
なお、長楕円形などの平面溝状の土坑や短く完結する溝状遺構が多くみられ、土坑と溝の区別は必ずしも明瞭でない。目安として長軸に対し短軸の比率が大きいものを土坑とした。

1. 水田遺構

第2水田面 (付図71)

調査区の北限部であるA・B-2区の間部からSD-10の北岸までの一帯に広がり、第1水田面の下層にあたり、粘性の強い黒色粘土層を基盤としている。調査区北西端部で、水田を区画すると思われる畦畔が検出された。上端のみられない高さ1cm程度のわずかな高まりで、北側の区画は一辺3m程の方形になるものと想定されるが、その南側は軸が西寄りに向き不整形な形状の区画になるものと思われる。また、南側で調査地を南西-北東方向に横切るSD-10の北岸沿いに、畦畔が並行してはしり、北側にも軸をほぼ同じくする2つの畦畔が検出された。北側に並行してはしる2本の畦畔のうち北に位置する畦畔は、南側は明瞭な段がみられるが北側はなだらかに水田面へ続く。南に位置する畦畔は、北側が調査区を通して明瞭な段を有し、南側の東半分は低く島状の高まりとなり不明瞭である。南側の水田面からの高さは3~5cmを測る。SD-10の北岸沿いの畦畔は、水田面からの高さが5~8cmで、西向きへ分岐する畦畔と、水口が検出された。西向きに伸びる畦畔は、水田面からの高さは分岐地点では6cm程度であるが、西向きに伸びるに従って徐々に低くなっていき調査区西端付近では3cm弱となる。水口部分は、畦畔が若干屈曲して入り組み、水が直接入らないような形状となる。また、SD-10の北側の川筋には杭列がみられるとともに、水口の正面にあたる部分には杭が集中して打ち込まれ、井堰の一部と考えられる。

なお、B-3区の耕土から土器小片2点が出土している。図化できなかつたものの、1点は頸~肩部片で内外面ハケ目、もう1点は胴部片で内外面ヘラ磨きであり胎土や色調等の特徴から弥生後期の時期が与えられる。その他に水田に關与した土器として土器片40点余りがみられるが小片が多



第125図 第2水田面関連遺物実測図

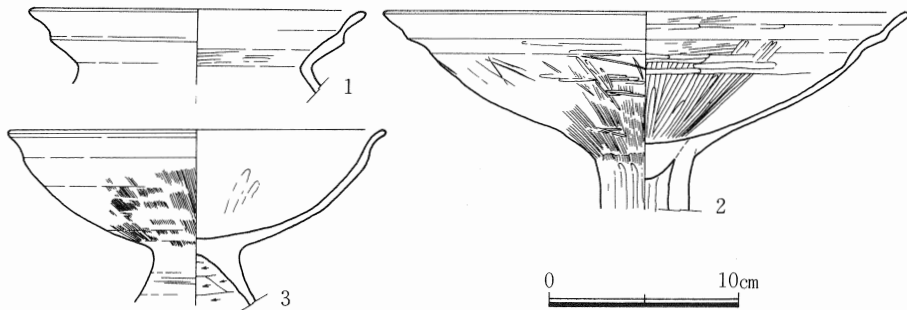
く、そのうち甕（1～5）を図化した。（1）は水口近くの砂層から、（2・3）は第1水田面大畦北側の位置にあたる第2水田面上層の砂層から、（5）はA-3区の第2水田面上層の砂層から出土したものである。口縁部外面に平行沈線を施すものと内外面ヨコナデ調整のものがあるが上層にこうした土器が含まれることから、第2水田面は弥生時代後期の時期に営まれていたものと考えられる。

2. 土坑

SK-48（付図72）

B-8区に位置する。南西側にSK-49が近接する。また、下層にはSD-25の東端部が重なる。長さ165cm、幅145cm、深さ15cmを測り、北端が若干張り出す不整形な楕円形を呈する。主軸はN-87°-Wを向く。断面形は南西-北東方向では逆台形であるが、北西側の壁は段をとらずになだらかに立ち上がる。底面は凹凸があり中央部付近が凹む。埋土は4層に分かれ、第2・3層で炭片を含む。

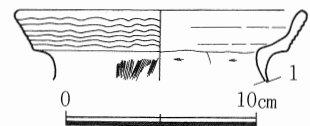
遺物は底面から若干浮いた状態で出土しており、西側に高杯（2）が、東側に低脚杯（3）が分散して出土している。その他に、図化できなかったものの鼓形器台片やその他の土器小片がある。甕（1）は埋土中の出土である。杯部が大きく上外方に開き二段に屈曲して口縁部へ続く高杯（2）は、体部外面は鋭利な縦ハケ目後疎な横ヘラ磨き、屈曲部の下に雑なヘラ描き文がみられる。内面ハケ目後縦ヘラ磨きおよび横ヘラ磨き。口縁部は内外面ヘラ磨き後ヨコナデする。低脚杯（3）は外面ハケ目後ヨコナデ、内面は剝落がすすむがヘラ磨きが認められる。（1～3）は口縁部に共通な要素が認められ、強く湾曲しながら開く形状をとる。



第126図 SK-48出土遺物実測図

SK-49（付図73）

B-8区南東端に位置する。東端部をSD-13によって切られ、北側には、同様にSD-13で東端部を切られたSK-48が隣接する。長さ85cm、幅53cm、深さ9cmを測り、若干不整形な楕円形を呈する。主軸はN-79°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。埋土は、暗灰色シルト（炭片を含む）一層である。



第127図
SK-49出土遺物実測図

遺物は、底面からやや浮いた状態で出土しており、甕の口縁部（1）とその他土器小片が出土している。（1）は口縁部外面に6条の波状文を施し、内面は弱いヨコナデ調整である。肉厚で、3mm以下の砂粒を含む胎土等から、一緒に出土したその他の土器小片より古い様相を示す。

SK-50（付図74）

B-9区の中央部に位置する。北東側にひとまわり小規模な土坑SK-51が、西側にはSB-01をはじめSK-52・53・54の重複した土坑群が、北東-南西方向に軸を向けて隣接する。長さ97cm、幅76cm、深さ15cmを測り、楕円形を呈する。主軸はN-50°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面は平坦である。埋土は3層に分かれ、上層から、1. 淡黄灰色砂質土、2. 黄灰色砂質土、3. 暗灰色砂質土である。遺物はみられなかった。

SK-51（付図75）

B-9区に位置する。西側にSB-01・SK-50が隣接し、SK-50と同様に軸を北東-南西方向に向ける。長さ56cm、幅41cm、深さ17cmを測り、楕円形を呈する。主軸はN-70°-Eを向く。断面形は碗状である。埋土は2層に分かれ、上層から、1. 淡黄灰色砂質土、2. 灰色砂質土である。埋土中から、土器小片が出土している。

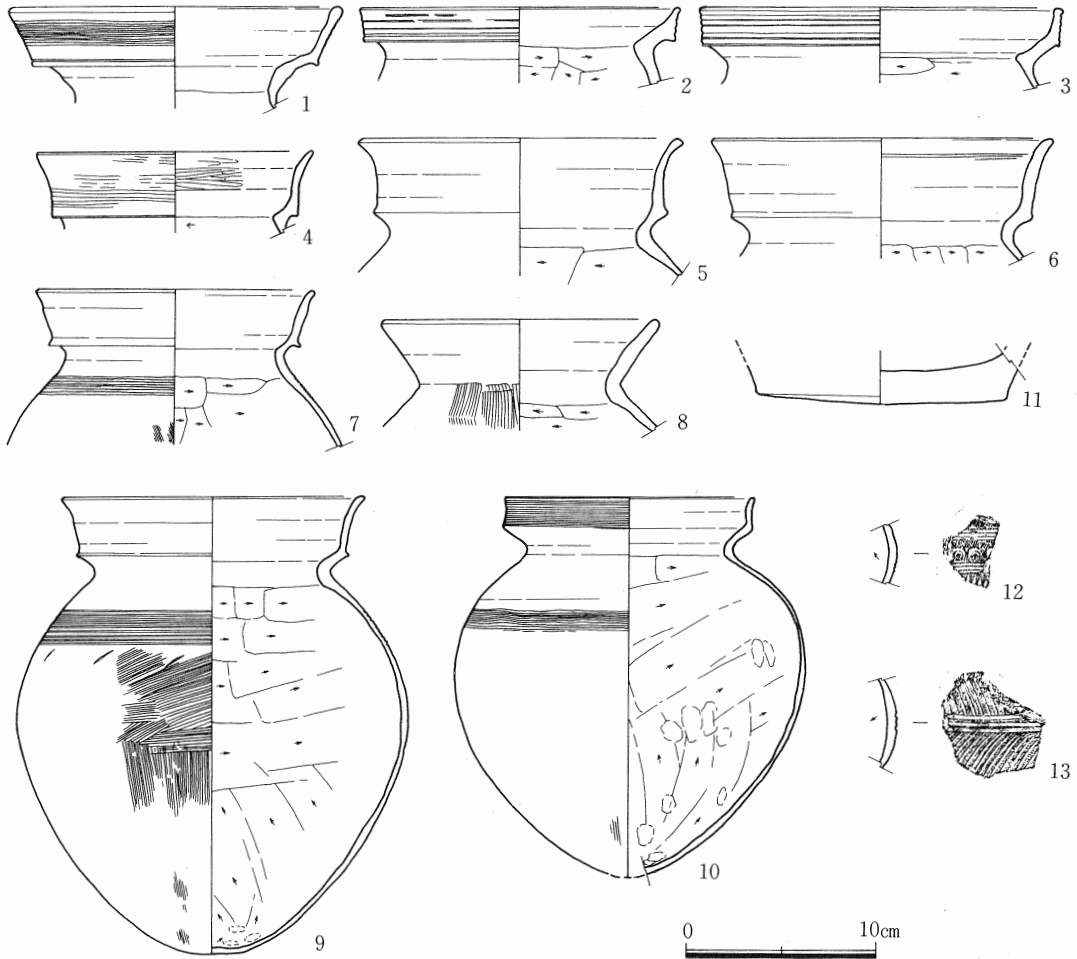
SK-52（付図78）

B-9区の中央部に位置する。SK-54の北側およびSK-53の北側を切り、SK-42に中央部を、SK-41に西側の一部を、さらにSD-17に北西壁の一部を切られる。長さ138cm、幅89cm、深さ43cmを測り、南側が尖る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-60°-Eを向く。断面形は、まず検出面から28cm程度掘り込みさらにその面の中央部東寄りを20cm程掘り込むといった2段の不整形な逆台形となる。埋土は5層に分かれ、1. 暗灰色砂質土で少量の炭片を含む。

遺物は、深く掘り込んだ二段目の落ち込み部分の上部を中心として、重なり合うように出土している。つぶれた状態の甕（9）の上に一部重なるように甕（10）が口縁部を下に内面を上に向けて出土している。（10）の下には甕の口縁部（7）がみられた。それらの下の第4層の上面には腐葉土化した木質状の有機物が薄い層状にみられ、さらにその下には完存する平底の底部が底面を上に向けて出土している。その他の遺物としては、壺（1）、甕（2-6・8）、2重圏スタンプ文を施した胴部片（12）、ヘラ描き文で装飾された胴部片（13）、その他の土器小片がある。これらの土器は埋土中の出土であるが、風雨で若干崩れたため出土状況が図化できなかったものもあり、大部分は胴部小片（付図a）の付近または甕（9）より上面で出土したものと思われる。

壺（1）は口縁部外面に細かな幅の多条の平行沈線と下端部近くに1条の沈線を施す。頸部外面には回転を利用したハケ目状の圧痕が認められる。甕は大きく分けて、複合口縁とくの字状口縁、外面に平行沈線を施すものと施さないものがあり、複合口縁の形状にも様々なものがみられる。甕（2・3）は肉厚で、SK-52で出土の遺物の中では古い様相をもち、口縁部外面にそれぞれ4、6条の平行沈線がみられるが（2）は鈍く、また（3）は中央部の沈線がつぶれており、後にヨコ

ナデされた可能性がある。(4)は1mm前後の砂粒を含む胎土で、口縁部外面多条の平行沈線内面ヘラ磨き後、上・下部をヨコナデする。また(10)は口縁部は短く立ち上がり、底部は尖るものの球体化する体部をもつ。口縁部外面と肩部に同一工具による平行沈線を施すが、肩部の平行沈線は口縁部のように精美でなく、わずかに波状となる部分もみられる。体部外面に多量の煤が付着するため調整は不明瞭ながら、最大胴部横ハケ目、以下縦ハケ目が認められる。頸~肩上半部はヨコナデ調整である。体部内面は勢いのある重複したヘラ削りで器壁は薄く均等化する。また、指頭圧痕がみられ、底部付近に炭化物が薄く付着する。甕(7・9)は、口縁部上端をつまんでヨコナデすることでわずかに外反し、下端部の稜もつまみだしがみられ、器壁も薄く、他の甕と比べて(10)同様全体的に洗練された感じが見受けられる(9)は体部倒卵形で、わずかな平底をもつ。肩部に貝工具による平行沈線、連続刺突文を施す。(10)と同様、外面に多量の煤が付着する。(5)は口縁上端部をつまみ強くヨコナデすることで外反させる。(6)は口縁部内面上端部に2~3条の平



第128図 SK-52出土遺物実測図

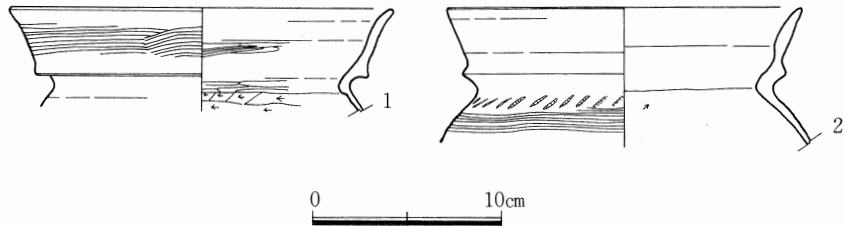
行沈線がみられる。くの字状口縁（8）は頸部以下縦ハケ目調整で、肩部はヨコナデがみられない。

（11）は大型の壺または甕の底部で、厚さ2cm程の底部が円盤状にまるく残る。剝離痕以外に底部の周囲が細かく割れており、打ち欠きされた可能性が考えられる。（12）は4条・3条の平行沈線間に2重圈スタンプ文、内面はヘラ削り。（13）は上下互い方向に羽状のヘラ描き後、同じくヘラ描きの3条の沈線を施す。内面はヘラ削りである。

SK-53（付図76）

B-9区に位置する。北側をSK-52に切られ、さらにSK-42に切られる。西側に同様にSK-52に東側を切られたSK-54が近接する。長さ102cm、幅残存49cm、深さ17cmを測り、楕円形を呈する。主軸はN-65°-Eを向く。断面形は若干不整形な椀状となるものと思われる。埋土は上層から、1. 灰色砂質土（炭片を若干含む）、2. 暗灰色シルト（やや粘質）の2層に分かれ、北側の3. 淡灰色砂質土はSK-52の埋土である。

遺物は西側の壁から若干浮いた状態で、炭化した板と一緒に甕（1）、（2）の胴部小片が出土している。（1）は口縁部外面に多条の平行沈線、内面にヘラ磨きを施した後に、内外面の上端と下端部をヨコナデする。（2）の口縁部は埋土中から出土しており、口縁部ヨコナデ調整、肩部に連続刺突文と平行沈線を施す。（1・2）とも口縁部外面の稜をつまむ。



第129図 SK-53出土遺物実測図

SK-54（付図78）

B-9区に位置する。東側をSK-52に切られ、さらに北西側をSK-41とSD-17に切られる。長さ127cm、幅62cm、深さ24cmを測り、南東側が若干広がる不整形な楕円形を呈するものと思われる。主軸は現況でN-75°-Wを向く。断面形は、南壁が若干角張って立ち上がるものの椀状である。埋土は5層に分かれ、7. 灰色砂質土には多量の炭片を含む。遺物はみられなかった。

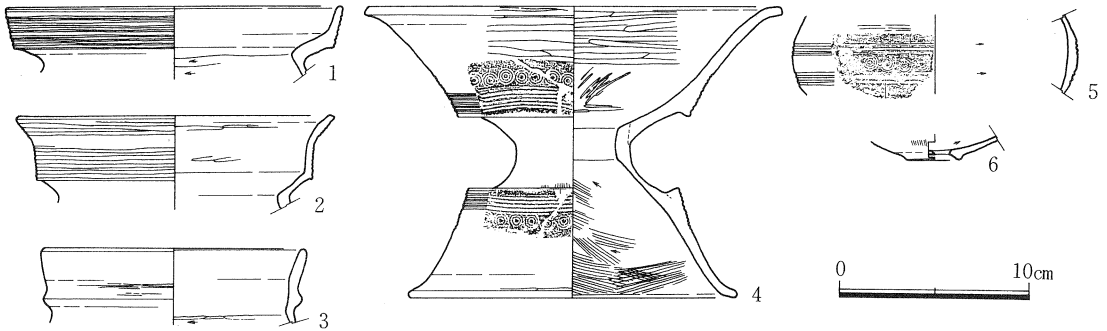
SK-55（付図79）

A-9区とB-9区の南側境界部に位置する。SK-56を検出した際に同様に検出され、土層断面からSK-56を切ることが明らかとなった。北側にSB-01、北東側に重複する土坑群SK-52・53・54が広がる。長さ137cm、幅73cm、深さ9cmを測り、北側が角張る不整形な長楕円形を呈する。主軸はN-37°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面は平坦で南壁はなだらかに立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1. 淡黄褐色砂質土、2. 淡灰色砂質土、3. 暗灰色粘質土である。遺物はみられなかった。

SK-56 (付図79)

A-9区とB-9区の南側境界部に位置する。北側をSK-55に切られる。長さ145cm、幅残存122cm、深さ17cmを測り、不整形円形を呈するものと思われる。断面形は逆台形で、周壁は東西方向では底部からなだらかに立ち上がり、底面は中央部で若干の盛り上がりが見られる。埋土は4層に分かれ、上層から4. 乳灰色砂質土、5. 灰色粘質土(炭片を含む)、6. 暗灰色粘質土、7. 灰褐色粘質土である。

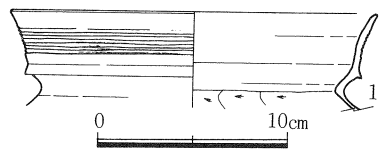
SK-55の削平を受けたためか、遺物は南西側に片寄り、また、上~下層に分散して出土する傾向が見られる。遺物には、甕(1~3)、鼓形器台(4)、胴部(5)、底部(6)の他に図化していないものの、平底の底部、高杯杯底部片(付図a)、自然石がある。甕の口縁部(2)は、外面に櫛描平行沈線を重複して施し内面はヘラ磨き調整、後に口縁部の中程をヨコナデすることで口縁上部を外方へ屈曲させている。口縁下端部をつまむ甕(3)は、甕(2)と良く似た胎土で、1mm程度の均一な砂粒を多く含む。口縁部外面に平行沈線が薄く認められ、平行沈線を施した後にヨコナデ調整したものと思われる。また、内面にヘラ磨きを認める。鼓形器台(4)は、各部が細かな破片で散在して出土しており、意図的に破碎されたものと思われる。受部と脚台部にそれぞれ5、6条の平行沈線を施した後、径約9mmの3重圈スタンプ文をめぐらす。(5)と(6)は胎土・色調から同一個体の壺と思われる。(5)には上下各3条の沈線間に径約9mmの3重圈スタンプ文が施され、(6)は高台状の短い脚台が付く底部で、焼成後に外面から穿孔された7mm大の円孔が見られる。



第130図 SK-56出土遺物実測図

SK-57 (付図80)

B-10区の東端に位置する。北側にSK-63が隣接する。長さ76cm、幅68cm、深さ14cmを測り、不整形円形を呈する。断面形は不整形な椀状で、底部は中央よりやや北寄りの方が一段深くなる。埋土は1. 暗灰色砂質土(炭片を多量に含む)一層である。埋土中から甕の口縁部(1)が出土している。甕(1)



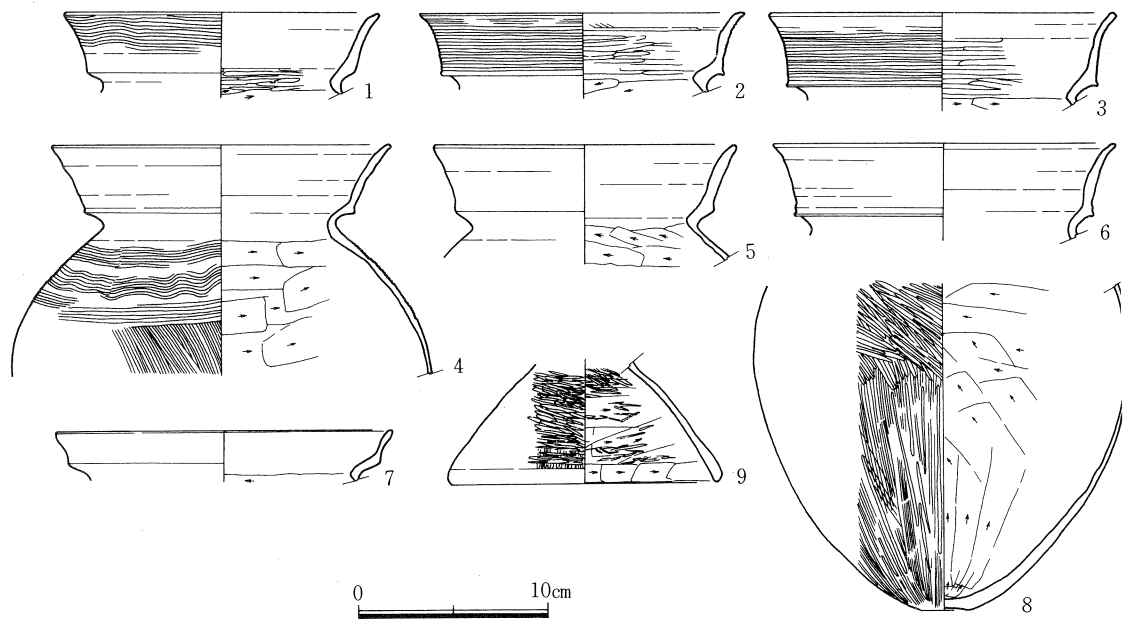
第131図 SK-57出土遺物実測図

は、口縁部外面に8条以上の平行沈線を施した後、上部と下端部をそれぞれつまんでヨコナデ調整する。

SK-58 (付図77)

西側の壁が一部A-10区にかかるものの、B-10区にその中心を置く。南側にSK-59が隣接する。長さ134cm、幅79cm、深さ22cmを測り、南西端部が張り出す不整形な楕円形を呈する。主軸はN-6°-Eを向く。断面形は逆台形で、底面は若干の凹凸がみられる。埋土は5層に分かれすべて炭片を含むが、下層ほど多く見受けられる。

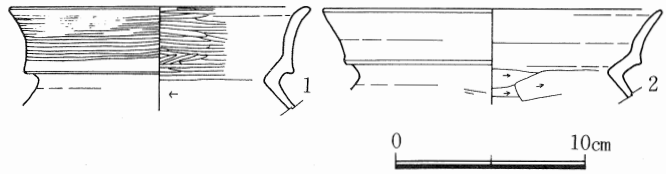
遺物は上層から出土するものも若干あるが、多くは底面およびその付近にかけて検出され、土坑南西端で甕(4)がまとまって出土している。遺物には、甕の口縁部(1~7)と体部(8)、脚部(9)がある。甕の口縁部は調整からみて大きく2タイプに分けられる。外面は多条の平行沈線、内面はヘラ磨き、後に一部をヨコナデする甕(1~3)と、もうひとつは内外面ヨコナデ調整の甕(4~7)である。後者はさらに形態から(4~6)と(7)とに分かれる。(4~6)のうち、(5)は肉厚で(1)と形態が類似し、(1~3)と同様に口縁部の下端部をつままない。甕の体部(8)は、わずかな平底をもち外面は縦ハケ後ヘラ磨きする。脚部(9)は、体部(8)とよく似た胎土・色調で、外面丁寧なヘラ磨き、内面ヘラ削り後ヘラ磨きで、甕(5)の下から出土した。なお、甕(2)・(7)は埋土中の出土であり、その他の小片も若干出土している。



第132図 SK-58出土遺物実測図

SK-59 (付図81)

B-10区の中央部西寄りに位置する。北側にSK-58が隣接する。長さ95cm、幅60cm、深さ22cmを測り、東側が尖る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-76°-Eを



第133図 SK-59出土遺物実測図

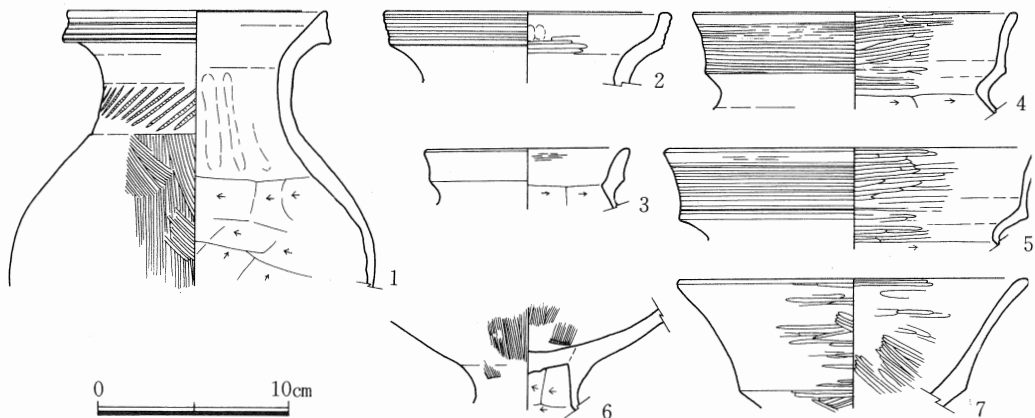
向く。断面形は緩やかな角をとって立ち上がる逆台形であり、底面は平坦である。埋土は暗灰色砂質土一層であった。

埋土中から、甕の口縁部(1・2)が出土した。外面に煤が多く付着し口縁下端部をつまむ(1)・(2)は、それぞれ調整が異なる。(1)は外面多条の平行沈線で内面へラ磨き、後に一部をヨコナデする。(2)は内外面ヨコナデ調整である。

SK-60 (付図82)

A-10区中央部東寄りに位置する。南側にSK-64が隣接する。上層のSD-01によって南側半分を掘削される。長さ105cm、幅残存107cm、深さ48cmを測り、不整形な形を呈する。断面形は、底面が平坦で壁の立ち上がりが比較的急角度な逆台形である。埋土は7層に分かれ、中間の層である第2層及び第3層で多量の炭片を含む傾向がみられる。

遺物は、底面に貼り付いていた壺(1)や高杯(6・7)と、底面から浮いた状態で出土した壺(2)、甕(3~5)、角礫がある。壺は、口縁下端部が肥厚して端面をもつ(1)と、口縁部が直立気味ではあるが外傾し下端部はつままない(2)とがみられる。小型の甕の口縁部(3)は、内外面ともヨコナデ調整であるが内面にヨコナデ調整以前の横ハケ目が認められる。甕(4・5)は、他の土器と異なって1mm前後の均一な砂粒を多く含む胎土であり、外面多条の平行沈線内面へラ磨き後、外面の口縁上端部と内面屈曲部を軽くヨコナデする。高杯(6)は内外面ハケ目調整、高杯(7)は燈褐色~褐色で内外面へラ磨きが顕著で焼成堅緻な土器である。その他に埋土中から土器小片が出土している。



第134図 SK-60出土遺物実測図

SK-61 (付図83)

A-10区の西端に位置する。北東側に土器群4が広がり、南側にSK-62が隣接する。中央部を排水用の溝によって大幅に掘削される。長さ201cm、幅残存65cm、深さ27cmを測り、長楕円形を呈する。主軸はN-71°-Eを向く。断面形は東壁が若干崩壊するものの不整形な逆台形で、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分かれ、上層から1. 灰色砂質土、2. 暗灰色砂質土(炭片を含む)である。

遺物は、底面から甕(1)、高杯(2)、脚柱部(3)、敲石(4)が検出された。また、底面から若干浮いた状態で、内外面ハケ目調整の胴部片が出土している。胴部が張る甕(1)は、口縁部外面6条の平行沈線、体部外面ヘラ磨き後肩部に連続刺突文を施す。高杯(2)は椀状にふくらむ体部に屈曲して短く立ち上がる口縁部をもつ。内外面とも丁寧なヘラ磨き調整で外面に煤が付着する。甕(1)の下から、(2)とは別個体の脚柱部(3)が出土している。またSK-61と北東に約4m離れた地点で出土している土器群4出土の甕の口縁部(付図89-a)が甕(1)と接合している。

SK-62 (付図84)

A-10区の西端に位置する。北側にSK-61が隣接する。排水用の溝によって西側の大部分を掘削されたため、規模や形態は不明である。いずれも残存値で、長さ127cm、幅50cm、深さ14cmを測る。埋土は灰褐色砂質土一層である。遺物は出土しなかった。

SK-63 (付図85)

B-10区の東側に位置する。SD-19によって西側の壁を一部切られ、排水用の溝によって北側を大きく掘削される。長さ残存96cm、幅103cm、深さ13cmを測り、不整形な楕円形を呈するものと推定される。断面形は皿状である。埋土は2層に分かれ、上層から、1. 暗灰色砂質土、2. 黒灰色砂質土(炭片を多量に含む)である。埋土中から、土器の頸部と胴部の小片が出土している。

SK-64 (付図86)

A-10区東側に位置する。北側にSK-60が隣接する。長さ135cm、幅104cm、深さ13cmを測り、北西側が尖る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-62°-Wを向く。断面形は皿状で、底面は若干の凹凸がみられる。埋土は3層に分かれ、上層から1. 暗灰色砂質土(淡黄褐色ブロックを含む)、2. 灰色砂質土(炭片を含む)、3. 淡黄褐色砂である。

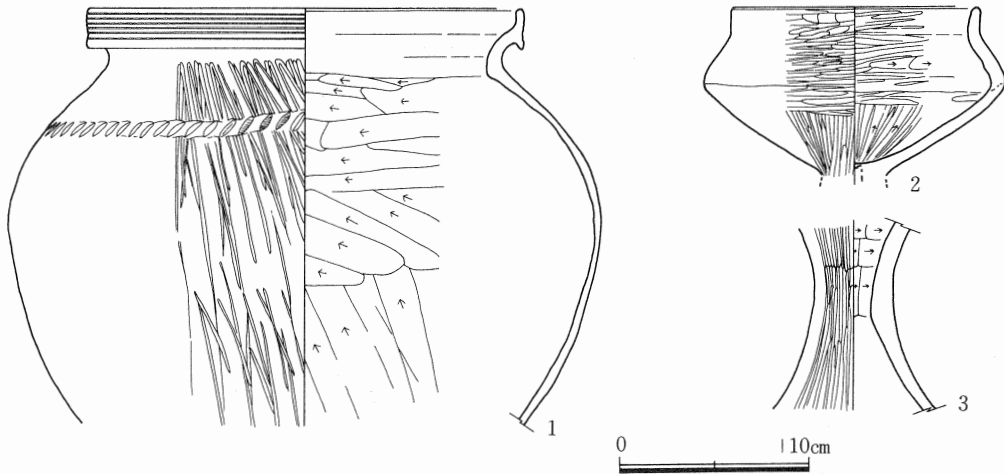
遺物は、土坑北寄りの底面および上層にかけて出土しており、内面を上に向けた底部(付図a)と土器小片が検出された。(付図a)は図化できなかったものの、外面ヘラ磨きで内面ヘラ削り調整した平底の底部片である。

SK-65 (付図87)

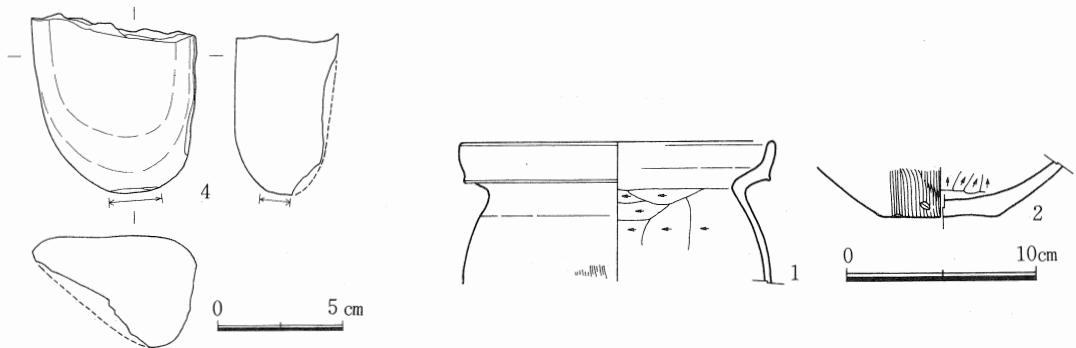
西側が一部A-11区にかかるもののその中心をB-11区に置く。東側の一部をSK-27に切られる。長さ153cm、幅残存120cm、深さ11cmを測り、四隅がやや角張った不整楕円形を呈するものと思

われる。主軸はN-25°-Eを向く。断面形は全体的には皿状であるが、底部は中央から東側にかけて深くなる部分がみられる。埋土は3層に分かれ、上層から1. 淡灰色砂質土、2. 暗灰色砂質土（炭片を多量に含む）、3. 暗灰色シルト（炭片を含む）である。

遺物は、底面から若干浮いた状態でいずれも第2層中から出土しており、甕の口縁部（1）、底部（2）、その他の土器小片がある。平底の底部（2）は4分の1ほどの残存であるが、屈曲部近くに、6mm大の靫の圧痕が2ヶ所にわたり明瞭に残る。甕（1）は口縁部内外面ヨコナデ調整で、口縁部外面に平行沈線はみられないものの底部（2）同様、形態や胎土が古式の様相をもつ。



第135図 SK-61出土遺物実測図(1)



第136図 SK-61出土遺物実測図(2)

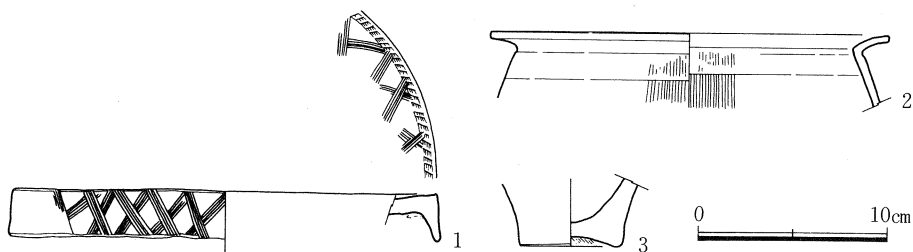
第137図 SK-65出土遺物実測図

SK-66 (付図98)

B-20区の南部に位置し、SD-32の西壁の一部を切る。長さ67cm、幅58cmを測り、東側が張り出す不整形な円形を呈する。断面形は逆台形で、周壁は急傾斜で立ち上がる。底面は中央部がわずかに凹状を呈し、中心部での深さは49cmを測る。埋土は黒灰色粘質土一層である。

遺物は、埋土中から壺の口縁部（1）、甕の口縁部（2）、底部（3）、その他20点余りの土器小

片が出土した。(1)は口縁端部が下垂して面をなし上面とともに斜格子文、上面にはさらに縁に沿った押し引きの刺突文を施す。

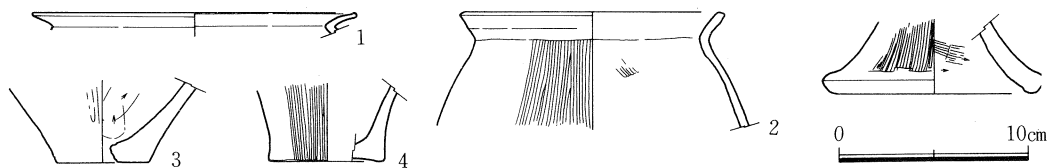


第138図 SK-66出土遺物実測図

SK-67 (付図99)

一部がB-21区北端にかかるもののその中心をB-20区南部に置く。下層にSD-30・31・32の一部が重なる。平面形は南東側が張り出す不整形な楕円形を呈し、主軸はN-38°-Eを向く。規模は長さ308cm、幅257cm、深さ7cm前後を測る。断面形は浅いながらも逆台形を呈し、底面にはわずかに凹凸がみられる。埋土は灰褐色砂質土一層である。

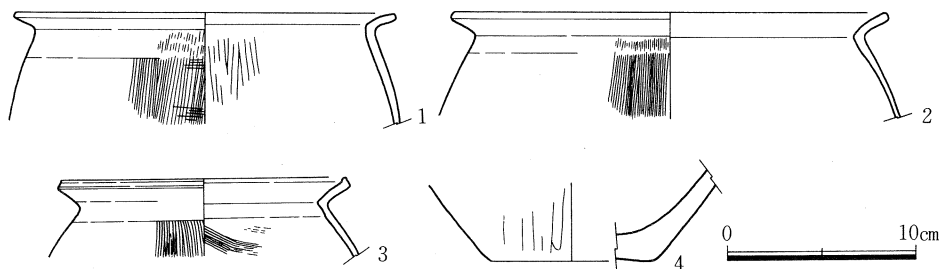
遺物は、甕の口縁部(1・2)、底部(3・4)、脚部(5)、その他土器小片多数があり、埋土中から散在する状態で出土した。(3)は焼成後の穿孔が底部に認められる。



第139図 SK-67出土遺物実測図

SK-68 (付図100)

A-21区とB-21区の境界北部に位置するもののその中心はA-21区北東部に置く。北東側がSK-69の南西端を切る。規模は長さ291cm、幅95cm、深さ52cmを測る。平面形は南西側がわずかに膨らむ長楕円形、断面形は椀状を呈する。主軸はN-50°-Wを向く。長軸方向に沿った土坑壁は急傾



第140図 SK-68出土遺物実測図

斜であるのに対し、両端壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、最下層に3.黒灰色粘質土(灰色粘土ブロックを含む)が、その上層に4.灰色粘土、2.暗灰色粘質土、1.暗灰色シルトが順次堆積していた。

遺物は第2～4層から検出され、甕(1～3)、底部(4)、その他土器小片が出土している。(1～3)はくの字状に屈曲する口縁部をもち、(3)は端部をつまみ上げる。(4)は幅広の底面をもち、比較的緩やかに上部へつづく。

SK-69 (付図102)

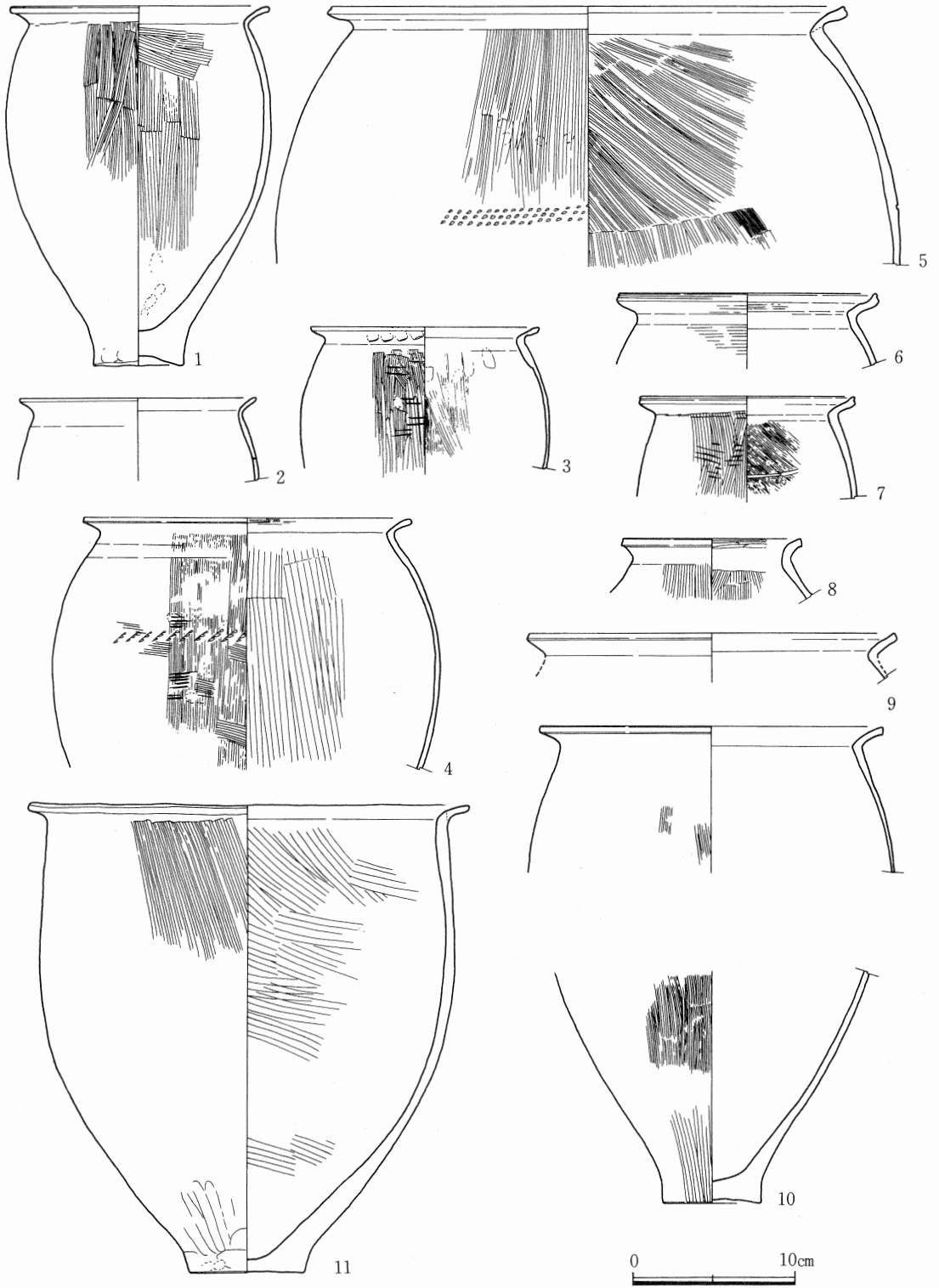
一部がA-21区にかかるもののその中心はB-21区の北西端に置く。SK-68によって南西端を切られ、また東側ではSD-32を切る。長さ168cm、幅111cmを測り、平面形は西側が角張る不整形な楕円形を呈する。主軸はN-82°-Wを向く。断面形は逆台形に近く、底面は西寄りが凹状を呈し長さ85cm、幅58cm程度の楕円状に深くなる。その中央部における検出面からの深さは16cmを測る。埋土は上層に1.暗灰色シルト(灰色粘質土ブロック・炭片を含む)、下層は2.黒灰色粘質土(炭片を含む)である。

遺物は甕(1～11)、底部(12・13)、その他多数の土器片が出土した。これらの土器は土坑全体に散在しており、底面に密着するものはみられないものの(10)は南西端に、(11)は東側に比較的まとまった状態で出土している。甕は残存が口縁部のみのものもあるが、(1・4・10・12)等から、大部分は頸部でくびれてなだらかな肩部をもつ倒卵形の体部からすぼまって底部へつづく形態を呈するものと思われるが、(11)は広口で肩はほとんど張らず底部がすぼまる形態をとる。口縁部はいずれもくの字状であり、端部に(5～7)はにつまみ上げがみられ(8)は角張ってわずかな端面をなす。また、(3・4・7)は体部外面に叩き目が認められる。底部は(13)は底径が大きめで(1・10～12)のようにくびれがみられず直線的に上部へつづく。底部内面はいずれもナデ調整で、(12)は外面に右下がりの叩き目後縦ハケ目後底部を中心として左下がりのハケ状工具によるナデが施される。

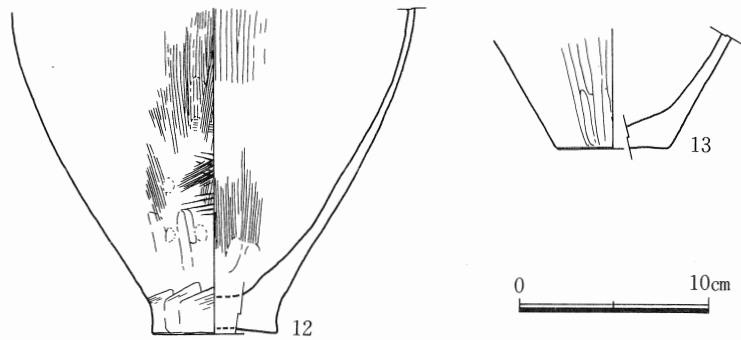
SK-70 (付図101)

B-21区の北西部に位置する。西側でSK-71を切るがSK-69との前後関係は特定し得なかった。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ414cm、幅280cmを測る。主軸はN-20°-Eを向く。断面形は逆台形で、周壁は比較的急な傾斜をもち、南西側の一部に幅26cm、長さ115cmばかりの不整形なテラス状の平坦面がみられる。この平坦面から底面までの傾斜は緩やかである。底面は全体的に凹凸があり、とりわけ東側半分は西側に比べ凸状の高まりをもつ。深さは最も深い中央部で19cmを測る。埋土は黒灰色シルト(灰色粘土のブロックを含む)一層であるが、西側および北東側の一部から厚さ1cm前後の炭の層が検出された。この炭層からは焼土などは認められなかった。

遺物は西側炭層の周辺に集中し、壺(1～3)、甕(4～6)、底部(7)、脚部(8)、多数の土器片、人頭大の角礫2点、拳大の角礫3点が出土した。いずれの遺物も土坑の底面から若干浮いた状態で、炭層より上部から検出された。(1)は口縁部端部が肥厚して端面をもち3条の凹線を施す。頸部には指おさえを二段に施して貼り付けした凸帯がめぐる。(4・5)はくの字状口縁の端部を



第141図 SK-69出土遺物実測図(1)



第142図 SK-69出土遺物実測図(2)

つまみ上げ、とりわけ(5)は顕著である。(4)は体部外面全体に右下がりのハケ目、肩部に縦ハケ目が認められるがその前後関係は不明瞭である。底部にはハケ目工具が止まった痕がみられる。(3)は口縁部は明瞭な屈曲部をもたずに外反し内外面ヘラ磨き、(6)は頸部で屈曲して直立気味に外傾する口縁部である。

SK-71 (付図103)

西端がA-21区にかかるもののその中心をB-21区西側に置く。東側大半をSK-70によって切られているため全容は明らかではないが残存部から推定して楕円形に近い平面形を呈するものと推察される。いずれも残存で幅88cm、深さ11cmを測る。底部まで緩やかに掘り込まれており、断面形は碗状を呈する。埋土は上層から1. 暗褐色粘質土、2. 暗灰色粘質土(炭片を多く含む)、3. 暗灰色粘質土で、第2層中には細かい炭片が多く混入していた。

遺物は、土器片9点が埋土中から出土した。いずれも遺存状態が悪く小片のため図化することができなかったが、SD-37およびSK-73から出土した甕(第172図7)と同一個体とみられる破片が含まれている。

SK-72 (付図104)

B-21区東端に位置する。南西部でSK-73の東端を切り、東側の大半は調査区外へ伸びる。土坑の全容は明らかではないが検出部から推定して平面形は長楕円形を呈するものと思われる。検出規模は長さ320cm、幅123cm、南西部で最深40cmを測る。主軸はN-23°-Eを向く。土坑壁は比較的急な傾斜で掘り込まれ、底面は平坦である。断面形は逆台形に近い。埋土は、まず周壁に沿って4. 黒灰色粘質土(灰色粘土ブロックを含む)が流入後、3. 黒灰色粘質土(炭片を含む)、2. 暗灰色粘質土、1. 暗灰色シルトが順に堆積していた。第3層中には多くの炭片の混入が認められた。

遺物は、甕(1・2)、底部(3・4)、蓋(5)、他多数の土器片がある。土器は土坑全体に点在し、第2~4層から検出されたが多くは第3層中での出土である。なお、甕(2)は第4層で出土している。(1)は広口で鉢状の体部に短い脚台が付く。(4)は底部に焼成後の円形の穿孔がみられる。(5)は天井部が円形に突起し裾部には円孔が認められる。



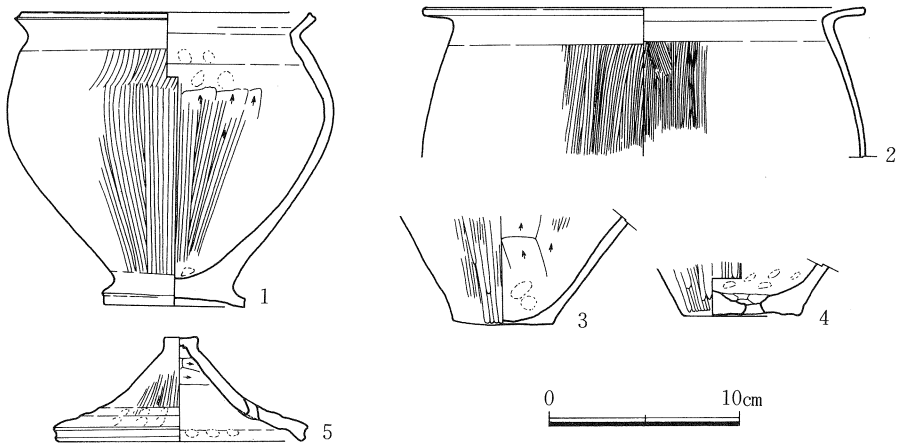
第143図 SK-70出土遺物実測図

SK-73 (付図105)

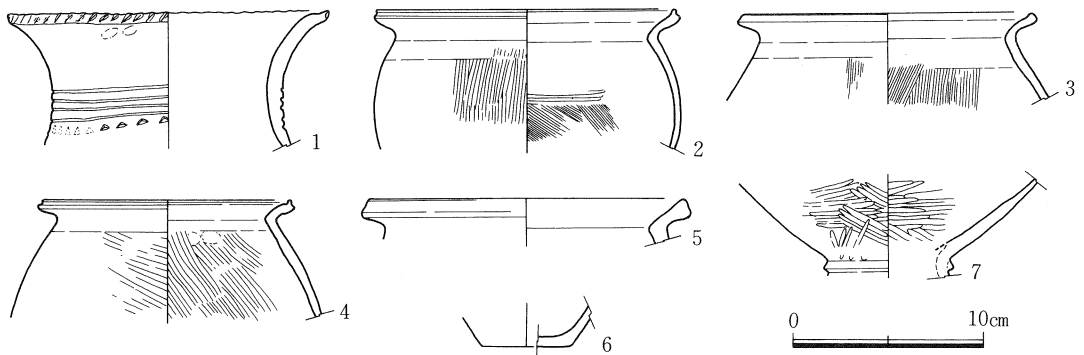
B-21区の中央部に位置し、東端をSK-72に切られる。平面形は東側がやや幅広となる長楕円形を呈し、主軸はN-63°-Wを向く。規模は検出部で長さ293cm、幅100cm、中央部で最深24cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。西端には底面から10cm程度上位に三日月状の平坦面をもつ。埋土は下層から2. 暗灰色粘質土(炭片を含む)、1. 暗灰色砂質土(炭片を含む)

である。

遺物は、壺（1）、甕（2～5）、底部（6）、高杯もしくは器台と思われる土器（7）、他多数の土器小片があり、3ヶ所に分散したような出土状況であった。これらのうち（1・2・5）は土坑底にはほぼ接する状態で検出され、（6・7）は西側の第1層から出土した。また土器（付図a）はSD-37から出土した甕（第172図7）の胴部の一部と思われ、内面を上に向け底面から出土している。（1）は外反する口縁端部に刻み目を施し、頸部にヘラ描沈線と工具角による刺突文を施す。（2～4）はくの字状口縁部の端部をつまみ上げ、（5）は端部全体が肥厚して端面をなす。（7）は内外面のヘラ磨きが顕著で、くびれ部に貼り付け凸帯がみられ内面は剝離痕が観察される。



第144図 SK-72出土遺物実測図



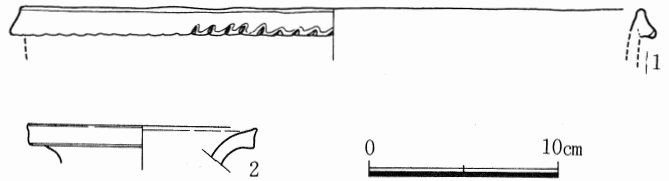
第145図 SK-73出土遺物実測図

SK-74（付図106）

A-21区東側に位置し、南西端がSK-75の北端を切る。平面形は長楕円形を呈し、長さ203cm、幅68cmを測る。主軸はN-46°-Eを向く。断面形は逆台形で、土坑底はおおむね平坦である。南西側の周壁は傾斜が他に比べて緩やかで、底面は南西から北東へかけて徐々に深くなる。深さは北東側で最も深く12cmを測る。埋土は暗褐色粘質土（炭片を含む）一層である。

埋土中から甕（1）、壺（2）が出土した。いずれも遺存状態が悪く摩耗の著しい小片である。

（1）は口縁端部近くに刻み目を施した凸帯がめぐる。（2）は口縁部は端部近くで大きく外反しわずかな端面をもつ。



第146図 SK-74出土遺物実測図

SK-75（付図107）

A-21区の中央部に位置し、北端をSK-74に切られる。平面形は不整な長楕円形を呈し、主軸はN-17°-Eを向く。残存長87cm、幅39cm、深さ5cmを測る。断面形は縦断面、横断面とも浅い皿状を呈し、底面はおおむね平坦である。埋土は暗灰色シルト（やや粘質）一層である。遺物は出土しなかった。

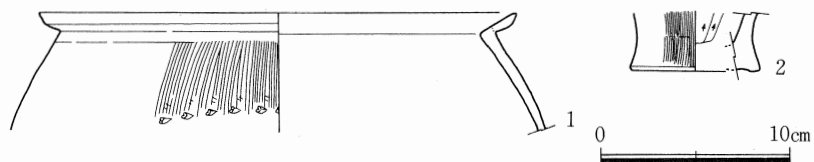
SK-76（付図108）

A-21区の中央部東側に位置し、東側の一部をSD-33に切られる。平面形は楕円形を呈し、主軸をN-11°-Eを向く。規模は長さ103cm、幅残存57cmを測る。周壁の立ち上がりは比較的緩やかで断面形は逆台形を呈する。底面は南側が凹状となり、深さは最深部で19cmを測る。埋土は最下層に4. 暗灰色粘質土、その上層に3. 暗灰色粘質土（炭片・淡灰色粘土ブロックを含む）、2. 灰色シルト（やや粘質）、1. 暗灰色砂質土（炭片を多く含む）が順次堆積していた。埋土中から土器片が3点出土したがいずれも摩耗の著しい小片であり、図化することができなかった。

SK-77（付図109）

A-21区のはほぼ中央部に位置する。平面形は西側が角張った不整形な楕円形を呈し、主軸はN-65°-Wを向く。規模は長さ148cm、幅87cm、深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面の傾斜は比較的緩やかである。底面はほぼ平坦であるが北西側へ向けて徐々に深さを増す。埋土は暗灰色砂質土一層である。

遺物は、甕（1）、底部（2）、他に遺存状態の悪い10点余りの土器小片が埋土から出土した。（1）は端部外面がわずかに膨らむくの字状口縁部をもち、（2）は一旦すぼまり底端部で広がる形態をとり内面はヘラ削りである。



第147図 SK-77出土遺物実測図

SK-78 (付図110)

A-21区とB-21区の境界南部に位置する。平面形は整った楕円形を呈し、規模は長さ82cm、幅36cm、深さ13cmを測る。主軸はN-42°-Wを向く。断面形は逆台形を呈する。周壁は急角度で立ち上がり、土坑底は平坦である。埋土は暗褐色粘質土（炭片をわずかに含む）一層である。遺物は検出されなかった。

SK-79 (付図111)

A-21区の南東部に位置する。平面形は北部が西向きに屈曲気味の不整形な楕円形を呈する。主軸はほぼ南北方向を向き、N-2°-Wである。規模は長さ102cm、幅57cm、深さ12cmを測る。底面は西側から東側へ深さを増し、断面形は逆台形を呈する。遺物は、埋土中から甕の口縁部とみられる小片2点と土器片10点が出土したが、小片のため図化することができなかった。

SK-80 (付図112)

南端がA-22区にかかるもののその中心をA-21区南部に置く。平面形は長楕円形を呈し、主軸はN-9°-Eを向く。規模は長さ350cm、幅78cm、中央部で最深18cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面は中央部から北側および南側へ向かってわずかに高さを増し、両端には一段高いテラス状の平坦面をもつ。埋土は上層に1. 暗灰褐色砂質土、下層に2. 暗灰色粘質土が堆積していた。

遺物は、埋土中から20点余りの土器片が出土した。いずれも磨耗の著しい小片であったが、内面にハケ目調整が認められる甕の胴部とみられる破片が含まれていた。

SK-81 (付図114)

A-21区北西端に位置する。北側がさらに調査区外へ伸びるため遺構の詳細は明らかではないが、残存部から推定して平面形は楕円形ないし長楕円形を呈するものと思われる。主軸はN-28°-Wを向く。遺存部の最大幅は126cm、西側で最深60cmを測る。断面形は逆台形に近い。南東端は土坑底から20~26cm上位にテラス状の平坦面がみられる。底面には南から北側へ緩やかな傾斜が認められる。埋土は、下層から3. 黒灰色シルト（炭片を少量含む）、2. 暗灰色シルト、1. 灰色砂質土が順次堆積していた。

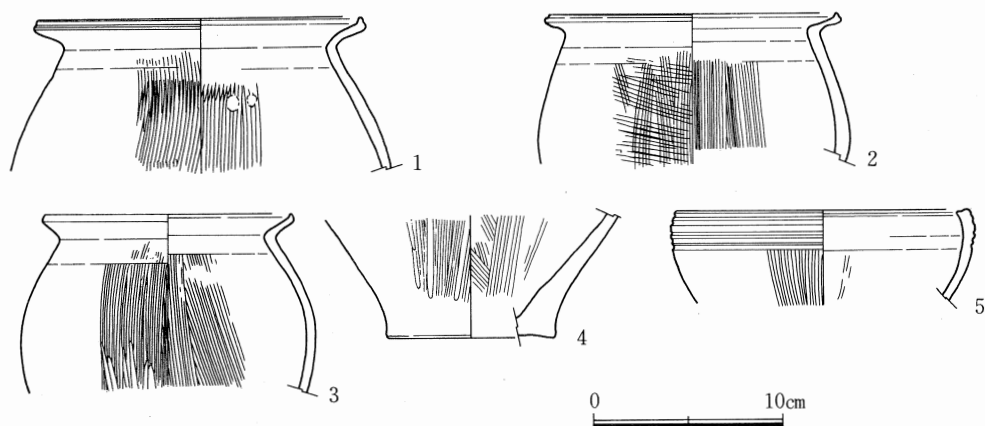
遺物は、第2・3層から甕（1~3）、底部（4）、高杯もしくは鉢（5）、他多数の土器小片が出土した。くの字状口縁部（1~3）は端部につまみ上げがみられ、（2）は縦ハケ目以前の斜めハケ目が観察される。（5）は湾曲しておえる口縁部に5条の凹線を施す。

SK-82 (付図119)

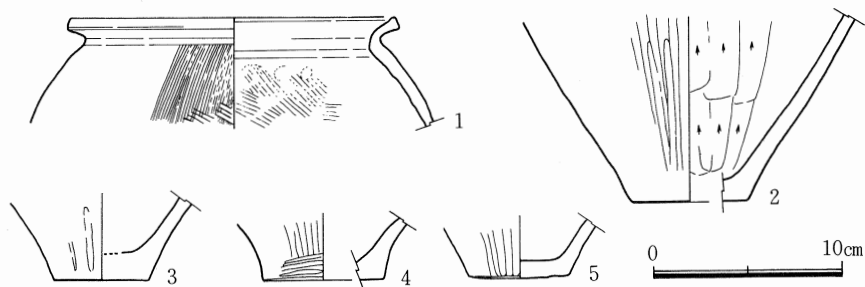
A-22区西端に位置する。東側はSD-36に切られ、西側は調査区外となり、幅108cm程が残存するのみでその全容は不明である。しかし、弧状に湾曲する南北壁の形状から平面形は長楕円形を呈するものと想定される。主軸は現況でN-15°-Eを向く。規模は長さ460cm、北東側で最深19cmを測る。土坑の東側は全体に底面より7cm前後高くなっており、テラス状を呈している。底面はおおむね平坦である。埋土は1. 暗灰色粘質土、2. 灰色砂質土（灰色粘土ブロックを含む）、

3. 灰色粘質土（炭片を含む）である。

遺物は、甕（1）、底部（2～5）、多数の土器片、焼木7点が出土した。土坑全体に点在するが一段深い西側に集中する。その遺存状態は悪く磨耗の著しいものが大部分である。焼木は土坑の南西側で底面からわずかに浮いた状態で比較的まとまって出土した。焼木は大きなもので長さ25cm、幅7cm、厚さ2cm前後を測る。焼木の周辺に焼土などはみられなかった。（1）は口縁端部が肥厚してわずかな端面をなし、体部外面には叩き目が認められる。（2～5）は底径が大きめで（4）は底端部上部にくびれがみられる。



第148図 SK-81出土遺物実測図



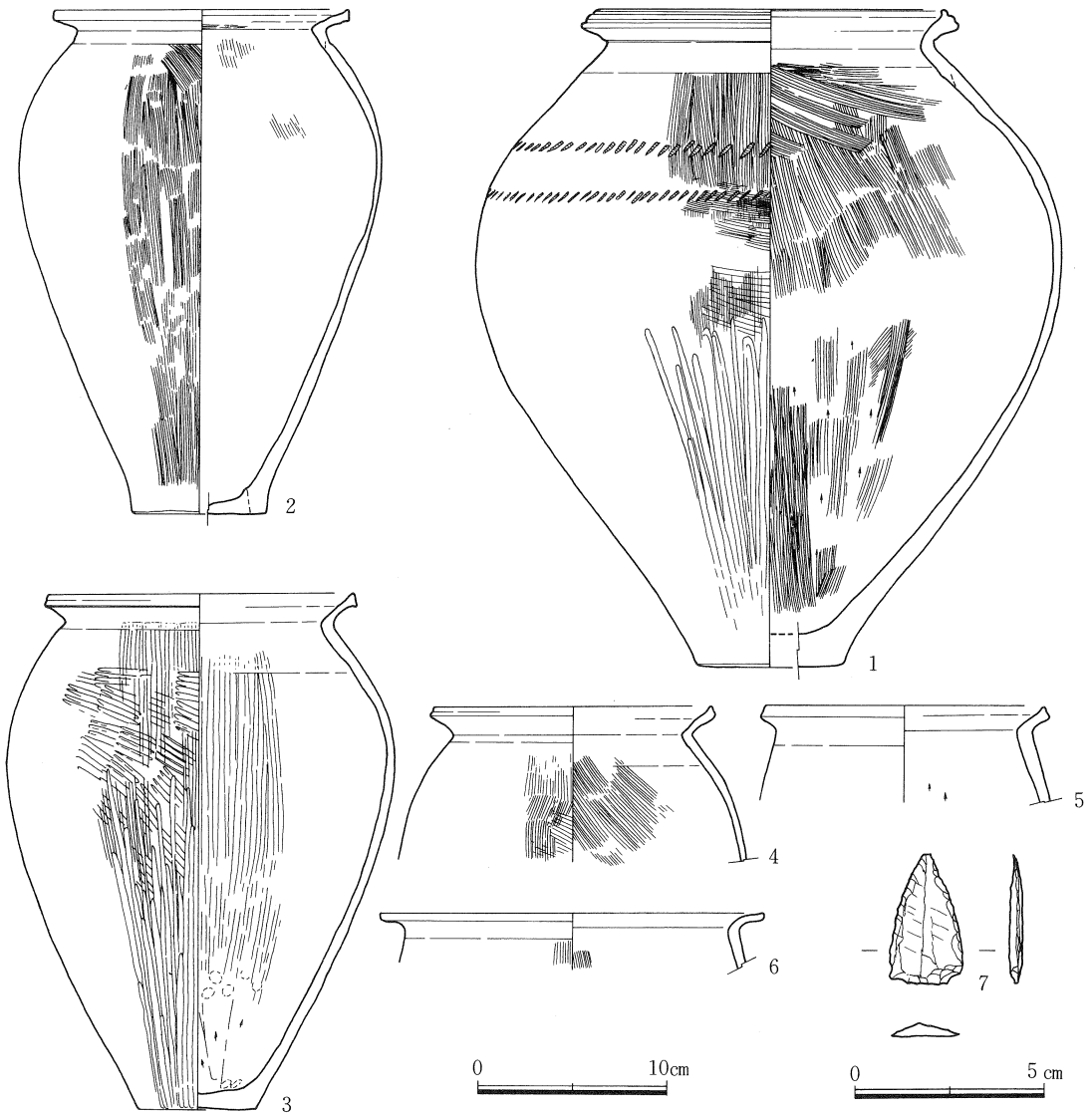
第149図 SK-82出土遺物実測図

SK-83（付図113）

A-22区とA-23区の境界西側に位置し、南東側に類似した平面形をもつSK-86が近接する。土坑の東側ではSD-37とわずかに重複するがその前後関係は特定し得なかった。平面形は北側がやや幅広となる長楕円形を呈し、主軸はN-15°-Eを向く。規模は長さ267cm、幅113cmを測るが、南側の周壁は土器の出土状況からみてさらに立ち上がるものと考えられる。断面形は逆台形を呈し、周壁の傾斜は比較的緩く底面は北から南側へかけて徐々に深くなる。最深部の深さは21cmを測る。埋土は下層に2. 黒灰色粘質土（灰色粘土ブロックを含む）、上層に2. 暗灰色粘質土（炭片を含む）

が堆積していた。

遺物は、甕（1～6）、多数の土器片、石鏃（7）がある。土坑全体に分散したような状況でいずれも底面からかなり浮いて出土している。（1）は北側下層から口縁部と底部が3ヶ所に分かれ、（2・3）は南西端から重複した状態で出土している。いずれも出土層は第2層である。（4）は第1層、石鏃（7）は中央部の埋土第2層の下方から検出された。（1）は（2・3）に比べて体部が大きく張り、口縁部は肥厚して端面をもち外面に2条の凹線を施す。（2～5）の口縁部は、（2・4・5）は端部をつまみ上げ（3）は下端部が下垂することでそれぞれがわずかな端面をもつ。（6）は（2～5）に比べて口縁部の屈曲が強く端部もそのままおえる。（3）は体部外面に右下がりの



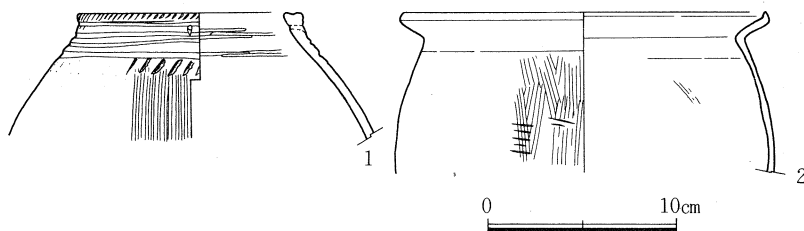
第150図 SK-83出土遺物実測図

叩き目が顕著で、特に肩部は重複して認められる。体部下位は後の縦ハケ目とヘラ磨きによりきれいに調整される。石鏃（7）は平面・断面形とも三角形で、無茎である。片面に鏝をもち両面の周縁を細かく加工する。

SK-84（付図115）

A-22区の中央に位置し、南端をSD-37に切られる。平面形は残存部から想定して不整な円形になるものと思われる。長さ残存62cm、幅63cm、深さ10cmを測る。断面形は椀状を呈し、底面は平坦である。埋土は下層に2.暗灰色粘質土、上層に黒灰色粘質土（炭片を多く含む）が堆積していた。

遺物は、壺（1）、甕（2）、10点余りの土器片が出土した。いずれも底面から浮いて周壁寄りで見出された。（1）は無頸の壺で、口縁部に雑な4条の凹線と刺突文、端部に刻み目を施し、小円孔を外側から穿孔する。（2）は口縁端部をつまみ上げ、体部に叩き目が確認される。



第151図 SK-84出土遺物実測図

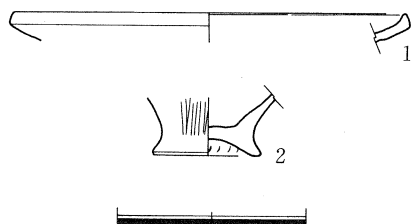
SK-85（付図116）

A-22区の中央南寄りに位置し、SD-37に近接する。平面形は南側がやや張り出す不整形な楕円形を呈し、主軸はN-32°-Wを向く。規模は長さ68cm、幅51cm、中央部で最深7cmを測る。断面形は皿状で、底面は平坦である。埋土は暗灰色粘質土一層である。遺物は検出されなかった。

SK-86（付図117）

A-23区の北部に位置する。土坑中央上半部は試掘坑によって掘削される。平面形は長楕円形を呈し、主軸はほぼ南北のN-4°-Eを向く。規模は長さ336cm、幅残存117cm、深さ33cmを測る。断面形は椀状を呈し、底面は中央部が若干凹み両端に移行するにつれて少しずつ高さを増す。埋土は上層に1.暗灰色粘質土、下層に3.暗褐色粘質土が堆積しており、両層の間にレンズ状の炭層が検出された。炭層は中央と北側にみられ幅50~80cmの範囲にまとまっている。厚さは2cm前後を測る。炭層中には非常に細かな粒状の炭化物が含まれ、焼土など他の遺物はみられなかった。

遺物は、埋土中から甕の口縁部（1）、底部（2）、土器片5点が出土した。（2）は底端部が舌状に張り出し、底面には爪痕と考えられる刺突がめぐる。内面はナデ調整である。



第152図 SK-86出土遺物実測図

SK-87 (付図118)

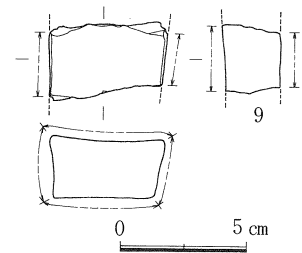
B-23区の中央北寄りに位置する。平面形は南側がやや張り出した楕円形を呈し、主軸はN-71°-Eを向く。規模は長さ97cm、幅63cm、深さ4cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。埋土は暗灰色砂質土一層である。遺物は検出されなかった。

SK-88 (付図122)

B-25区の東端に位置し、その南側にSB-05が近接する。東側は調査区外へ伸びるため全容は明らかではないが、残存部から推定して平面形は隅丸長方形になるものと思われる。規模は長さ残存198cm、幅180cm、深さ41cmを測る。主軸はN-79°-Wを向く。横断面は椀状であるが、西壁は角度をとって立ち上がる。底面は中央部がわずかに凸状を呈する。埋土は下層から4. 黒灰色砂質土、3. 暗灰色シルト(やや粘質)、2. 暗灰色砂質土(灰色粘土のブロックを含む)、1. 暗灰色砂質土の順に堆積していた。

遺物は、壺(1-3)、甕(4・5)、底部(6・7)、器台(8)、砥石(9)、多数の土器片、角礫2点が出土した。各遺物とも、底面から3~17cm浮いた状態で検出された。(2)はその大半が中央部で検出されたが一部は北東側に散乱していた。(3)は周辺に破片はみられず口縁部および外面を上へ向けてまとまって出土している。(8)は2分の1が残存する器台であるが脚部の一部が約8cm西側のA-25区から検出された。角礫は25×11×11cm、13×9×2cmの計2点が南東側から出土した。いずれも使用痕はみられないが焼けた痕跡が認められた。(1・3)は口縁端部が上下に肥厚して拡張した端面をもち、外面に3条の凹線を施す。これに対し(4・5)はくの字状の口縁で、端部のつまみ上げによりわずかな端面をもつ。底部はいずれも底径が大きく底端部上のくびれもほとんどみられない。

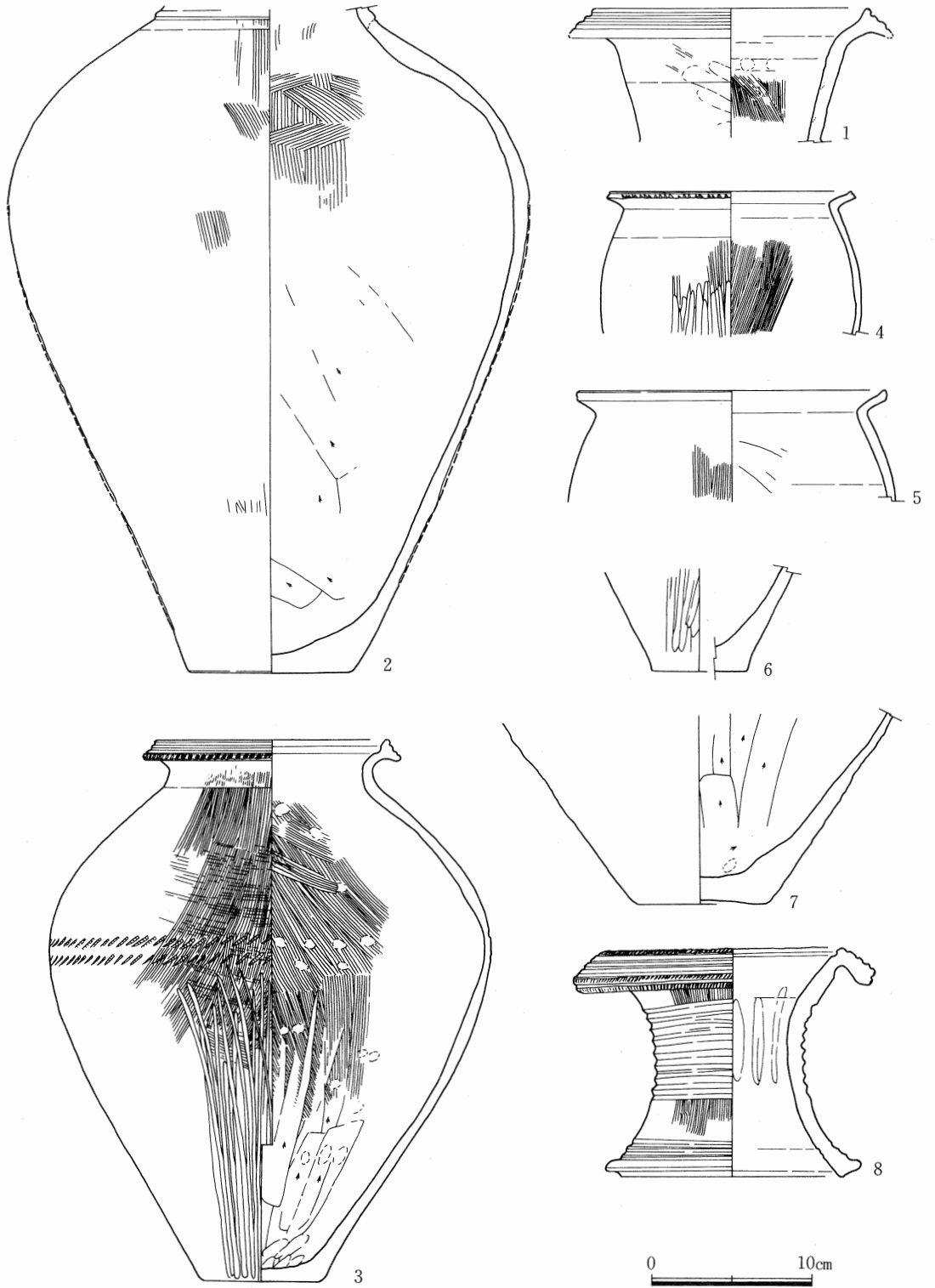
(8)は赤彩され、口縁部は屈曲して面をなし、筒部や脚裾部も合わせて凹線による装飾がされ、さらに口縁部には両端部に刻み目を施す。(2)の内面は肩部近くまでヘラ削りされ、(3)は体部外面に縦ハケ目以前の斜めハケ目が観察される。砥石(9)は両端部は割れ面であるがその他の4面を使用し、いずれも凹面をなす。



第153図
SK-88出土遺物実測図(2)

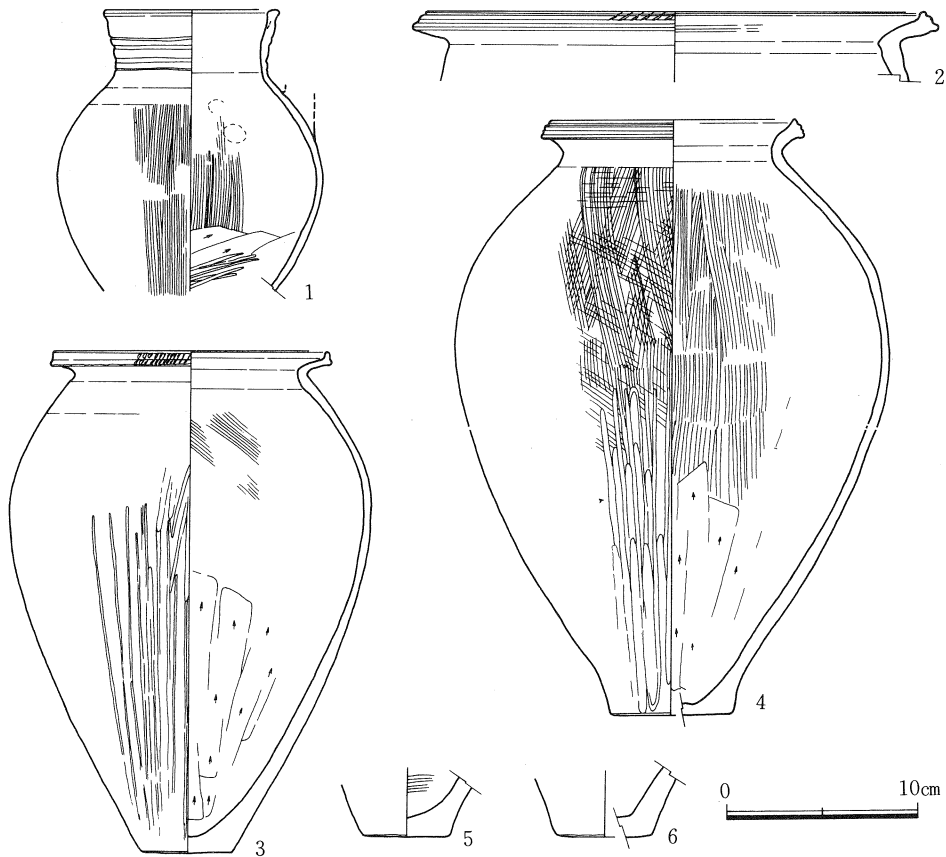
SK-89 (付図120)

一部がB-25区にかかるもののB-26区の北側にその中心を置く。西側へ約6mの地点には主軸をほぼ同方向にとり類似した平面形をもつSK-91があり、1m東側にはSB-05が並行する。主軸は南北に近く、N-7°-Eを向く。規模は長さ440cm、幅は中央部が最も狭く97cm、南側で最大幅111cm、深さ39cmを測る。周壁は湾曲しながらも比較的急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は北側から南側へわずかに深さを増し、南端には底面から15cm程度上位にL字形の平坦面をもつ。埋土はまず西壁へ沿って4. 暗灰色砂質土が流入した後、3. 黒灰色砂質土(灰色粘土ブロックを含む)、2. 暗黄褐色砂質土、1. 暗黄褐色砂の順に堆積していた。



第154图 SK-88出土遺物実測図(1)

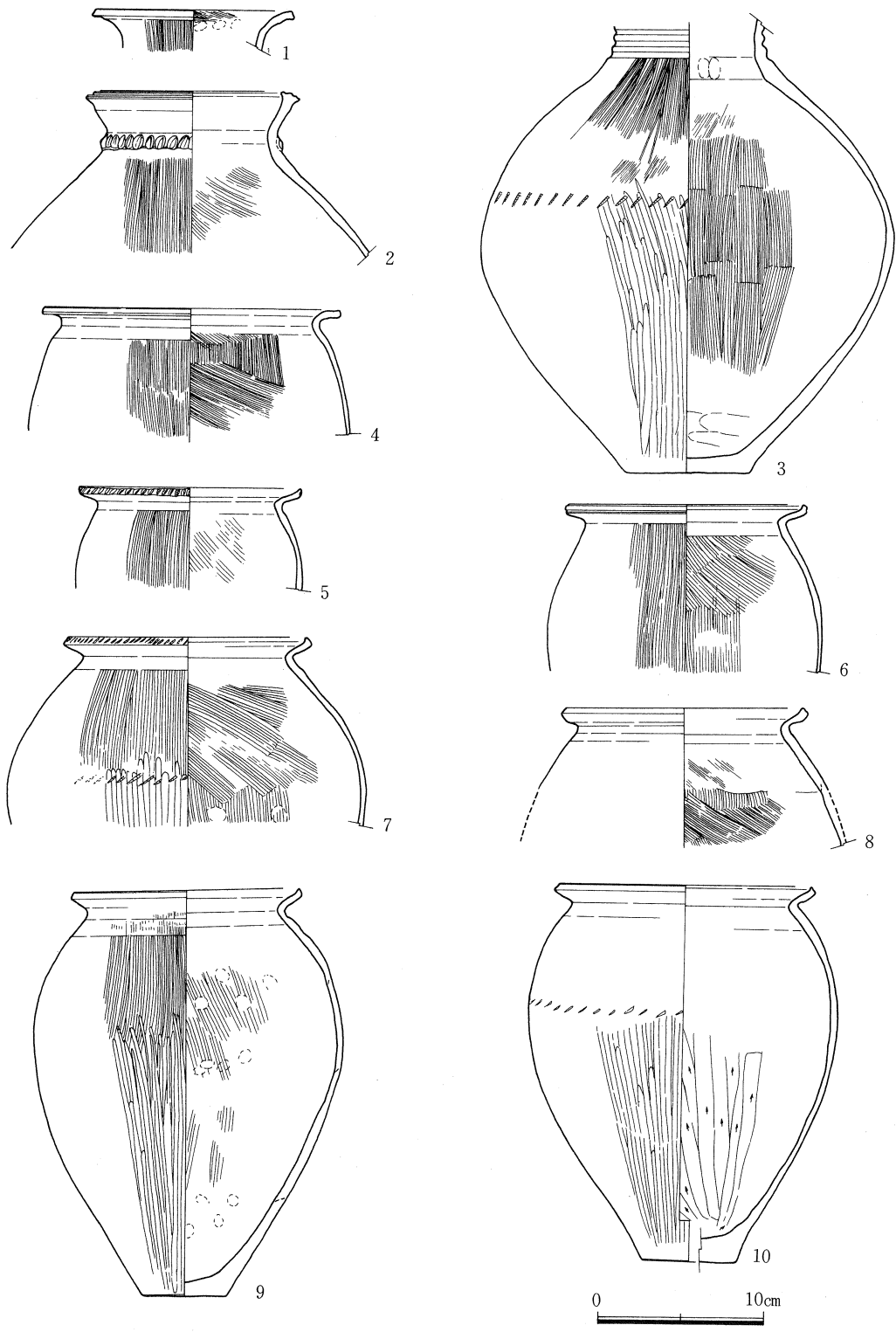
遺物は、壺（1）、甕（2～4）、底部（5・6）、土器片多数が出土した。いずれも底面から浮いており、大半が土坑内側へ傾斜をみせる。（1・3）は西壁側へそれぞれがまとまり、（4）は中央から東壁よりの小範囲に散在していた。なお、（4）の口縁部の一部がSK-88（付図122-a）で出土している。（1）は肩部外面に把手の剝離痕があり、ほぼ直立する口縁部には4条の凹線を施す。（2・4）は口縁端部は肥厚して端面をなし外面にそれぞれ2・3条の凹線をめぐらせ、後に（2）は刻み目を施す。（3）は口縁端部のつまみ上げが顕著で端面には刻み目がみられる。（4）は体部外面に縦ハケ目以前の斜位の鈍いハケ目が観察される。



第155図 SK-89出土遺物実測図

SK-90（付図121）

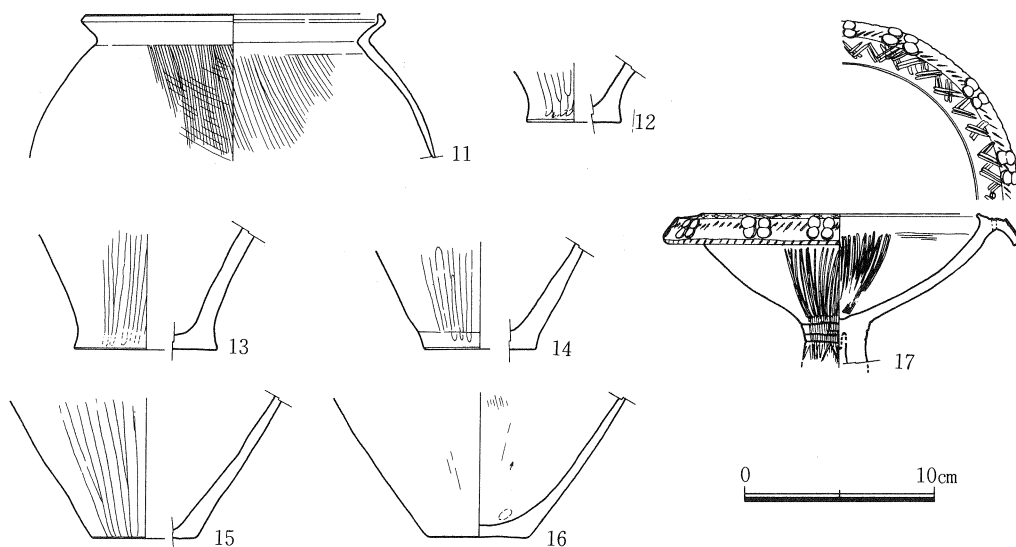
A・B-26区の南部からA・B-27区の北部にかけて境界部上に位置し、南側は調査区外へ伸びる。平面形は残存部から長楕円形を呈するものと思われる。主軸はN-16°-Eを向く。規模は長さ残存485cm、幅173~205cm、南側で最深51cm、北側で33cmを測る。断面形は横断では逆台形を呈するが、北側は長軸方向沿った壁に比べてなだらかに立ち上がり、北端には底面から約10cm上位にテラス状の緩斜面をもつ。底面は凹凸がみられ、北から南側へ向けて深さを増す。埋土は、7. 暗灰色粘質土（黒灰色土ブロックを含む）および6. 黒灰色砂質土（炭片を多くに含む）が堆積後



第156図 SK-90出土遺物実測図(1)

5. 黒灰色砂質土（灰色粘土ブロックを含む）、4. 黒灰色砂質土、3. 暗灰色砂質土（灰色粘土ブロックを含む）、2. 暗灰色砂質土、1. 暗黄褐色砂の順に堆積していた。

遺物は、壺（1～3）、甕（4～11）、底部（12～16）、高杯（17）、他多数の土器片、拳大の角礫2点が出土した。遺物は南側に集中してみられそのほとんどは下層の第4～6層から検出された。土器は各個体ごとにまとまって出土しており、北側から出土した（11・15）は土坑底に接していた。出土した2点の角礫には使用痕等は認められなかった。（1）は口縁部で大きく外反し端部はわずかな面をもつ。（2）はわずかに外傾して立ち上がり端部は肥厚して面をなすがやや上向きの端面には3条の凹線を施す。頸部には指頭圧痕が連続する貼り付け凸帯がめぐるが上部は丁寧なヨコナデによって壁面に密着する。（3）は頸部に3条の凹線が観察され、中央部が大きく張り最大胴径に比べて器高が低めの体部となり、底部は底径が大きめである。また、図化していないものの、（3）のように大きく張る壺の肩部と思われる土器片が出土しており、外面に上位から8条単位の櫛描による波状文・平行沈線・波状文、連続刺突文、凹線が観察される。（4）は口縁部は強く屈曲し端部はそのままおえるが、その他の甕は口縁部の屈曲は弱く端部はつまみ上げによってわずかな端面をなし、（5・7）のように端面に刻み目がみられるものもある。また、（8・10）は口縁部外面の頸部上位に稜をもつ。高杯（17）は杯部は鉢状に開き、口縁部は内外に肥厚・下垂して面をなし、外面は4ヶ単位の円形浮文、櫛状工具による斜格子文、ハケ状工具による刺突文で装飾され、小孔が6方向に穿孔される。内外面幅の狭いヘラ磨き調整が顕著で、脚上部にはヘラ工具による雑な沈線・鋸歯文が観察される。

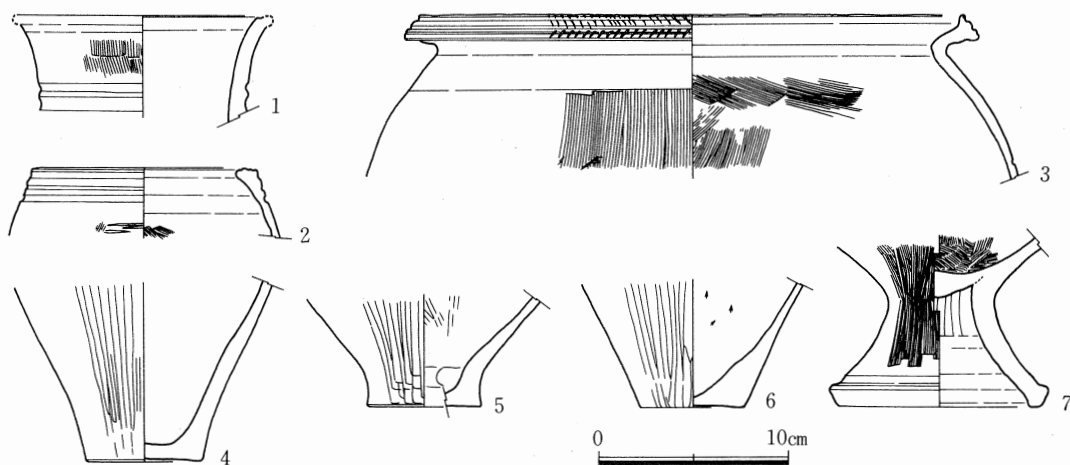


第157図 SK-90出土遺物実測図(2)

SK-91 (付図123)

A-26区の西側に位置する。東側約6mには類似した平面形をもち、ほぼ同方向に主軸を振るSK-89がある。平面形は長楕円形を呈し、主軸はN-2°-Wを向く。規模は長さ656cm、幅158cm、中心部で最深54cm、両端で44cm前後を測る。断面形は横断では逆台形を呈するが、両端壁は角をとらず湾曲しながら立ち上がる。底面は凹凸がみられ中央部へ向けてわずかに深さを増す。埋土は、5. 暗灰色砂質土が流入後、4. 灰色砂質土、3. 暗灰色砂質土(炭片を含む)、2. 黒灰色砂質土(灰色粘土ブロックを含む)、1. 灰色粘質土の順に堆積していた。

遺物は、埋土中から壺(1・2)、甕(3)、底部(4~6)、脚部(7)、多数の土器小片が出土した。(1)は口縁先端部を欠失するもののわずかに外反する程度であり、頸部に2条の凹線が観察される。(2)は無頸壺で、口縁部へ向けてすぼまり端部は肥厚して上面と外面に3・2条の凹線を施す。(3)は大型の甕で口縁部は上下に肥厚して拡張した端面をなし、3条の凹線後刻み目を2段に施して綾杉文とする。(7)は脚部全体がハの字状を呈し脚端部で内傾する端面をもつ。体部内面と脚部外面はハケ目調整が顕著である。

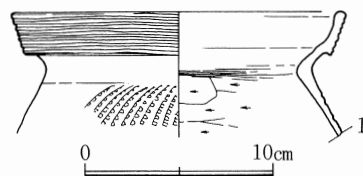


第158図 SK-91出土遺物実測図

4. 溝状遺構

SD-23 (付図90)

A-7区とB-7区にまたがり、B-6区とB-7区の境界東端から調査区外へ伸びる、西側はSD-10に切られる。南側にはほぼ軸を同じくするSD-24が隣接する。長さ残存9.25m、幅1.70m、深さ0.36mを測る。主軸はN-80°-Eを向く。断面形は椀状である。埋土は5層に分かれ底部で粘質土と砂質土が交互に堆積する。13cm程度の高まりによっ



第159図 SD-23出土遺物実測図

て西部で流路が二つに分かれる。底面は8cm程度の比高差がみられ、合流地点と東端部付近が標高1.11~1.12mと最も低くなる。

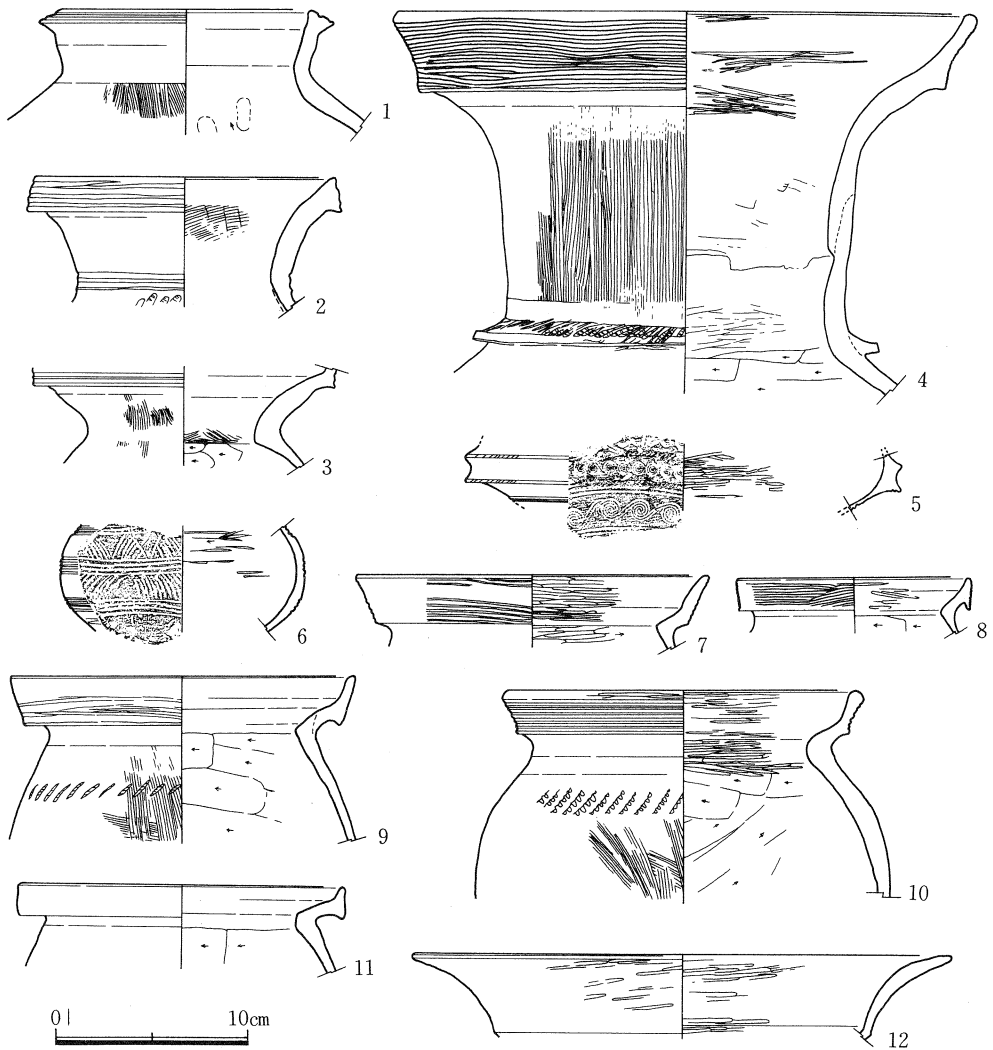
埋土中から、壺頸部小片、甕（1）、高杯脚柱部小片が出土している。（1）は、貝工具によって口縁部外面に多条の平行沈線、肩部に連続刺突文を施す。頸部内面にヘラ削りの後のハケ目が認められるが、口縁部ヨコナデ調整によって一部が残るのみである。

SD-24（付図91）

B-7区からA・B-8区にかけて位置する。北側にSD-23、南側にSD-25がほぼ軸を同じくして隣接する。検出長13.00m、幅2.02m、深さ0.49mを測る。全体が若干南寄りに湾曲するが主軸はほぼN-50°-Eを向く。断面形は椀状で、底部は北寄りが高く、南側では北側に比べてわずかな平坦面をもちながらなだらかに立ち上がる。底面は、北東部向きへ徐々に低くなっていく傾向がみられるが、両端部の比高差は7.4cmである。埋土は4層に分かれ、砂質土が大部分を占めるが下層には粘質土が堆積する。

遺物は溝全体に分散し、いずれも底面からかなり浮いた状態で出土している。とりわけ壺（4）の破片が東側半分点々と出土している。遺物には、壺、甕、高杯、木片、角礫があり、その他に図化していないものの脚台部片や甕小片が埋土中から出土している。

壺（1~6）は、その大きさと形態から、一般的にみられる大きさの壺（1~3）、大型の壺（4）、体部外面が沈線や刺突文あるいはスタンプ文などによって装飾される小型の壺（5・6）に大きく分けられる。（1~3）はそれぞれ異なった形態であるが、概して、口縁部が肥厚して端面をもつものやわずかに立ち上がるなど比較的古式の特徴をもつ。（2）は口縁部外面に3条の沈線を1本ずつ施し、（2・3）は頸部内面にハケ目が認められる。（4）は口縁部は大きく外反し外面に多条の平行沈線を重複して施す。頸部と肩部との屈曲部に凸帯を貼り付け、上面に貝工具による連続刺突文を施すが、凸帯部分は全体的に雑な作りで、特に凸帯の下部はヨコナデがみられない。内面は、口縁部ヘラ磨き、頸部は表面を上滑りしたような横方向の浅いハケ目が認められる。（5）は体部がそろばん玉形の壺で、体部中央部に断面三角形の凸帯が2条作り出される。凸帯の端部には細かな刻み目を入れ、凸帯の間とその上部に径約7mmの3重圏スタンプ文を施す。また、体部下半には、上下2条の沈線間に2個1対から成る渦スタンプ文を施す。渦スタンプ文の渦の径は最大1.1cmを測る。なお、各自スタンプ文は時計回りに施文され、内面はヘラ磨きによる調整が顕著である。（6）は内外面ヘラ磨き調整で、後に外面はヘラ描きの沈線と貝工具による刺突文により装飾される。甕（7~11）は、（7・9・10）が比較的似通った形態を示すが、（8）と（11）は口縁部の立ち上がりが短く直立的で、特に（11）は外面に平行沈線がみられない。（8）は薄く赤彩が認められ、小型の壺の口縁部と思われる。（7・10）は口縁部外面に貝工具による平行沈線内面ヘラ磨き。（9）は肩部の刺突文と同一工具によって口縁部外面を軽くナデる。高杯（12）は内外面ヘラ磨き調整である。



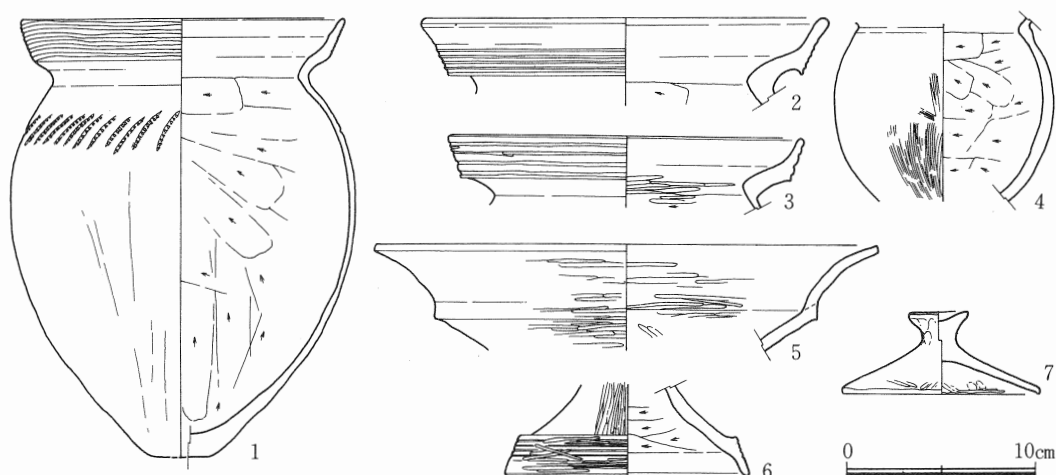
第160図 SD-24出土遺物実測図

SD-25 (付図92)

A・B-8区・A-9区にまたがって位置し、調査区を斜めに横切る。中央部やや東寄りをSE-03に切られる。検出長9.76m、幅0.67m、深さ0.34mを測る。主軸はN-60°-Eを向く。断面形は整った逆台形で、東端部でわずかに南側に湾曲するもののほぼ直線的な溝である。底面は西部から東部へかけて徐々に低くなり、両端の底面の比高差は15.6cmと北側に隣接するSD-23・24に比べると顕著である。埋土は5層に分かれ、第1・3層で炭片を含む。

遺物は東端部で集中して検出し、甕(1)と蓋(7)は底面からはかなり浮くものの北側の壁に貼り付いたような状態で検出された。(2~6)は埋土中の出土であるが、(4)は埋土下層の出土である。(1)は貝工具による平行沈線および連続刺突文を口縁部外面と肩部外面にそれぞれ施す。体部外面には縦方向のハケ目が表面を上滑りしたような状態で認められ、ハケ目は浅く薄い。甕

(2・3)は、(1)と外方への開き具合など口縁部はほぼ同様な形態であるが、(2)は口縁部外面に5条以上の平行沈線を施した後に上半部をヨコナデする。また、(3)は口縁部外面にヘラ描きによる4条の沈線をほぼ平行に施し、内面はヘラ磨き後上半部ヨコナデ調整する。甕(4)は口縁部を欠損し、肩部が張らない。体部外面は上半ナデ、下半ハケ目調整である。高杯(5)は、口縁部内面から外面上端部にかけて煤がべっとり付着する。脚台部(6)は、外面の調整にヘラ磨きを多用し、平行沈線がヘラ磨きによって消される部分が認められる。(7)は内外面ヘラ磨きとナデによって丁寧に調整された蓋である。



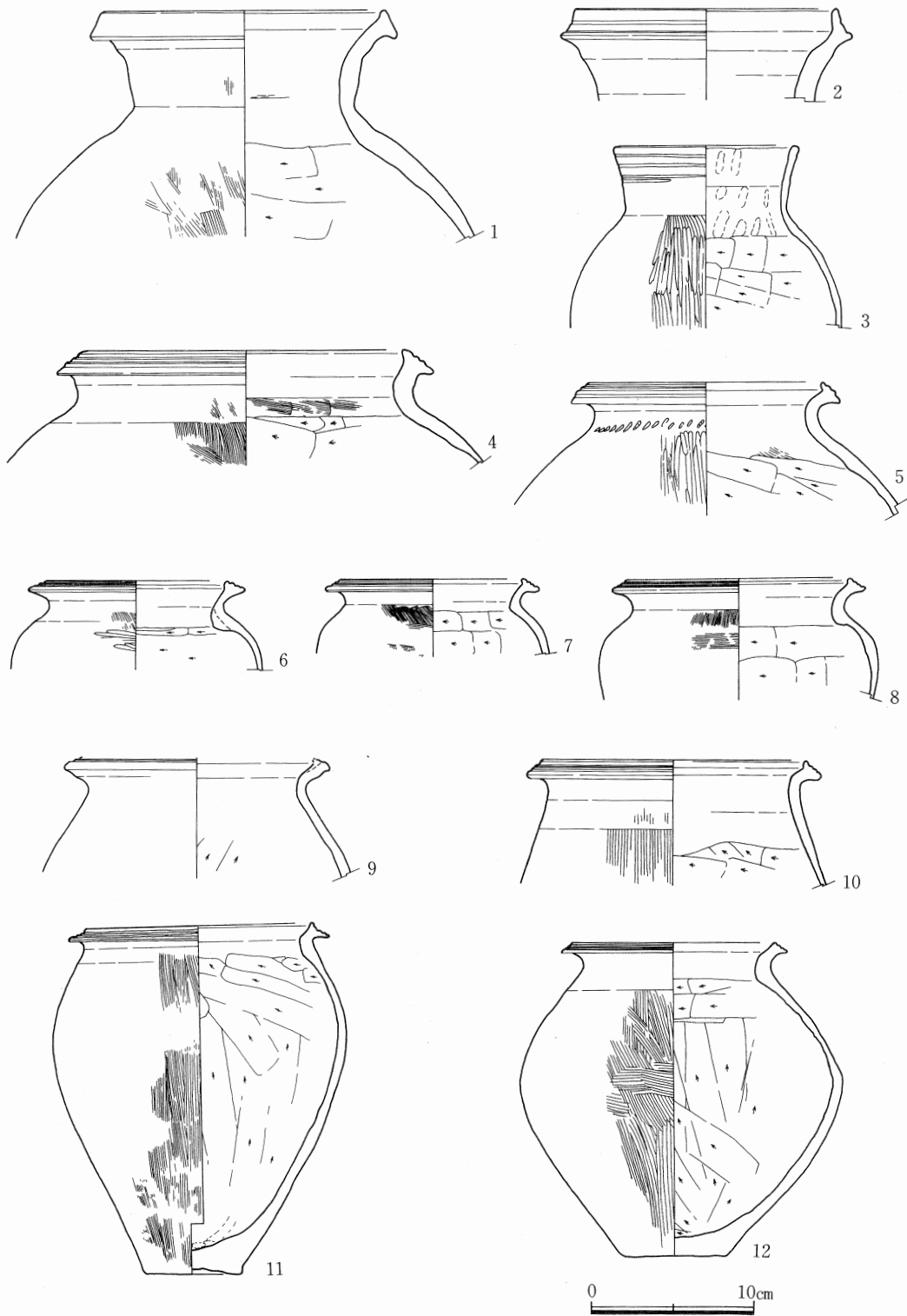
第161図 SD-25出土遺物実測図

SD-26 (付図95)

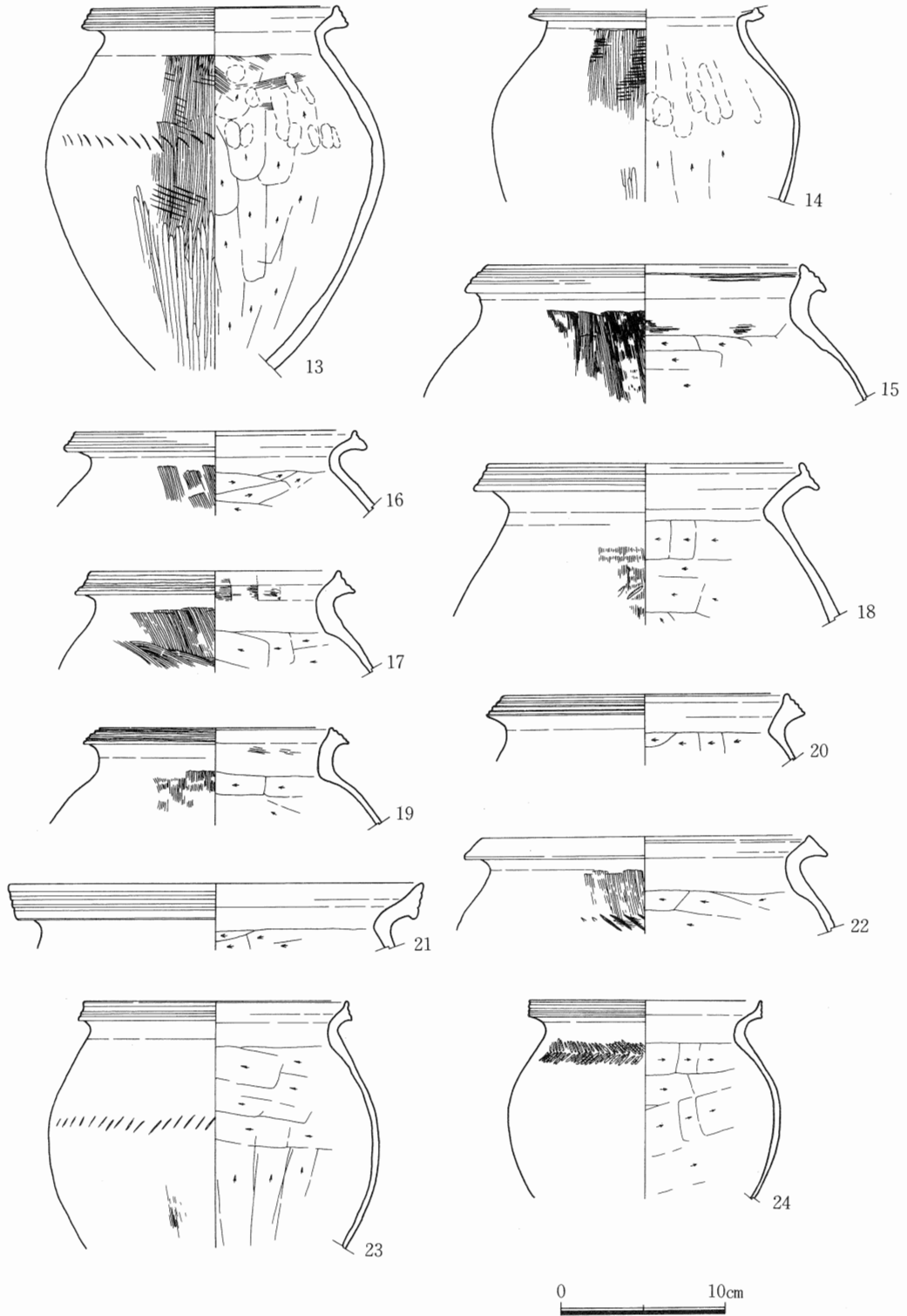
A・B-9区の南端部およびA・B-10区にまたがって位置する。検出長7.90m、上端幅6.94m、下端幅2.7m~4.0m、深さは西側の土層断面で80cmを測る。西側は北寄り、東側では東寄りに主軸をとるが、上端部からはほぼN-70°-Eを向くものと推察される。北寄りに湾曲し、下端幅が東端で狭まる。北壁は段をもちながらも角度をもって立ち上がるが、南壁はなだらかな立ち上がりで、明瞭な段差は認められなかった。底面はわずかに凹凸が見られるもののほぼ平坦であるが、溝の両端部の比高差を比べると東側へ向けてわずか数cm程度であるが全体的に低くなる傾向がみられる。また、溝の西端部北壁寄りに溝底から25cm程度掘り込まれた楕円形の落ち込みが認められる。

溝内からは多量の木製品が土器や石製品等と出土しているが、これらの遺物は溝の北側に片寄る傾向がある。木庖丁(39・41)をはじめ、土器や石製品のほとんどが、溝内にある程度土砂が堆積した段階のもので、3、暗灰褐色粘質土層からの出土であり、標高1.1m前後の地点である。この他には、北側の遺物ほど下の層から出土しており、木庖丁(40)、竪杵(42)、横槌(43)は標高0.9m~1.0mの地点で砂混じりの粘質土層で出土している。

土器は、壺、甕、高杯、器台、蓋、土玉があるがほとんどが甕であり、(1・11・23・33)が比



第162图 SD-26出土遺物実測図(1)

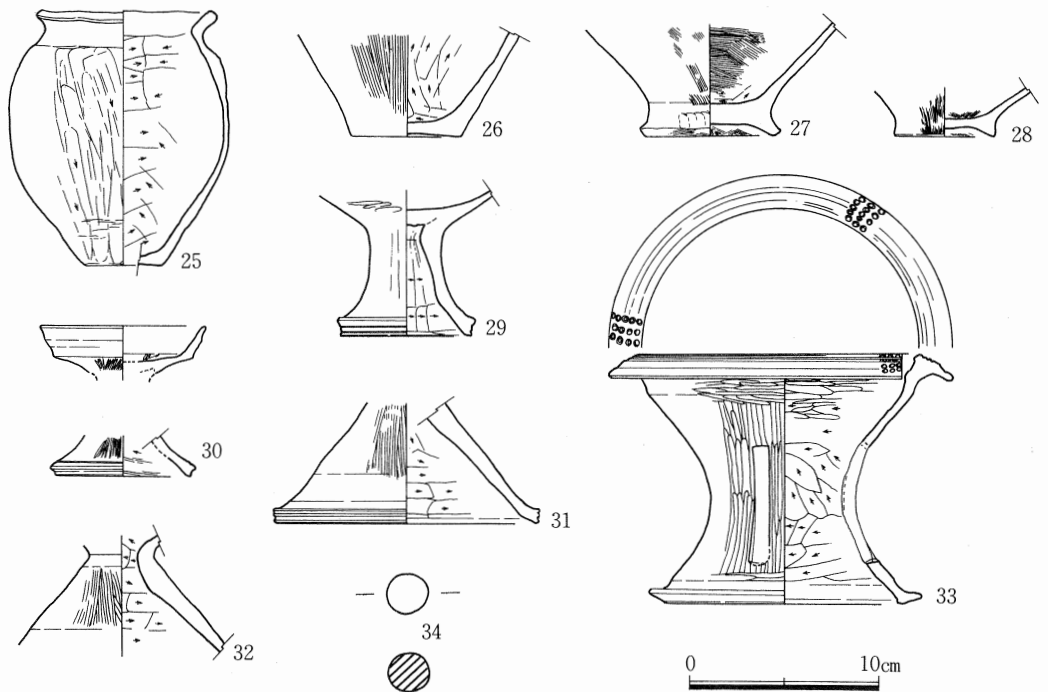


第163図 SD-26出土遺物実測図(2)

較的まとまった状態でそれぞれ出土している。壺（1・2）は器壁が厚く、口縁部は肥厚して端面をなし外面に数条の凹線を施す。（3）は把手付きの壺と思われる、まっすぐ伸びる口縁部にヘラ工具による沈線を施し、赤彩される。甕は口縁部が上下に肥厚して端面をなすくりあげ口縁をもち、外面に数条の凹線もしくは沈線を施す。残存が口縁部から肩部にかけてのものが多いが、体部3分の1上半からやや上部にかけて最大胴径をもつものと思われる。また、最大胴径部や肩部上部に連続刺突文をほどこすものがみられる。体部外面はハケ目調整のものと上半ハケ目の下半へラ磨き調整するもの、ハケ目後肩部からへラ磨き調整するものとがみられる。体部内面は肩部以下へラ削りし、口縁部はヨコナデであるがハケ目を残すものが若干認められる。また、（13・14）は体部上部に縦ハケ目前の叩き目が観察される。なお、（21・23・24）は口縁端面が比較的直立気味であるが、（21・24）は埋土中の出土である。高杯（29・30）は脚部端面に沈線を施し、（30）は赤彩される。器台（33）は筒部に長方形透かし孔を3方向に穿け、小円孔をそれぞれ12・13・14個が1組となるよう3列に刺突した文様を口縁端面に施す。その他に体部外面を工具でナデ状に調整した小壺（25）、脚部（31）、蓋（32）、土玉（34）がある。

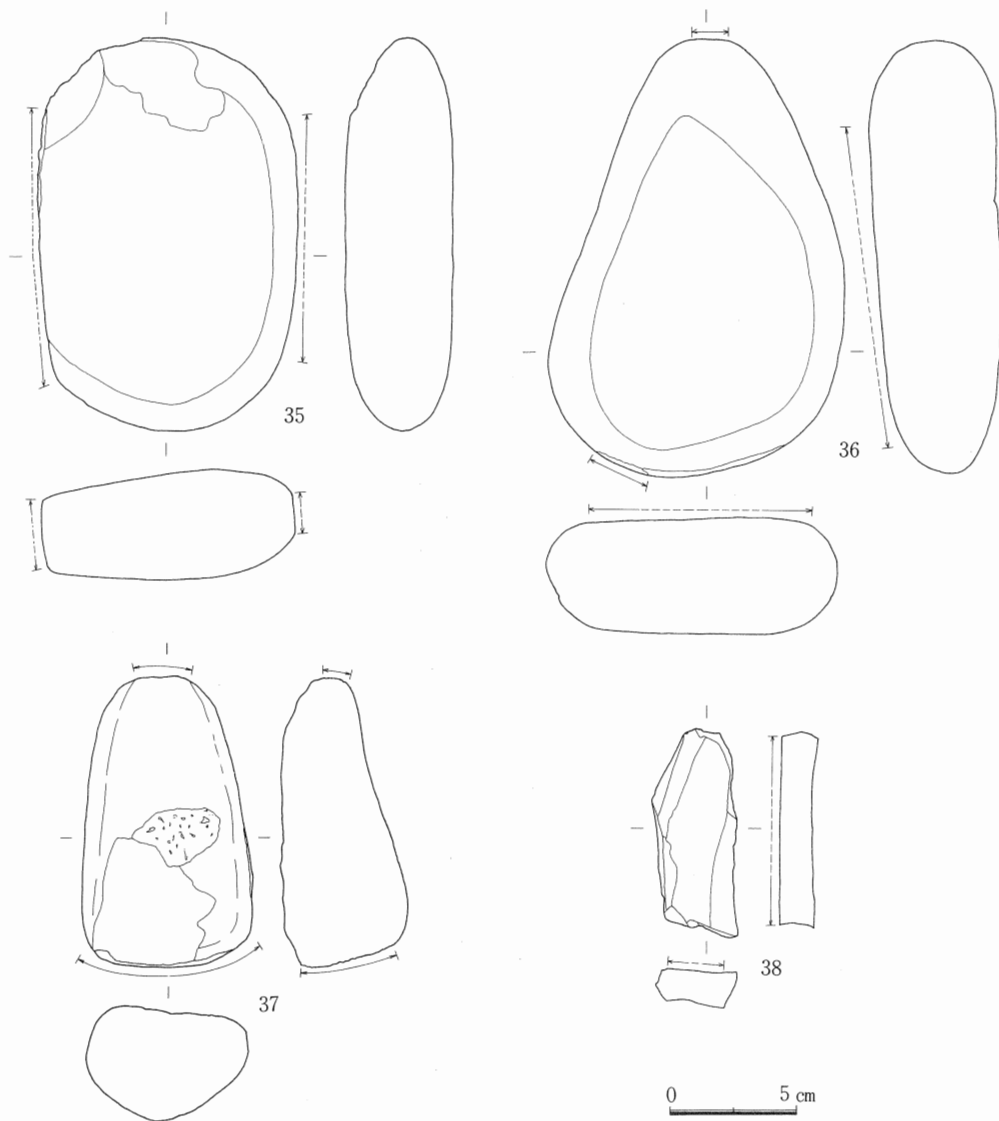
石製品は、磨石（35）、砥石（36・38）、敲石（37）があり、その他にも角礫・円礫が出土している。（38）は片面を使用し、凹面をなす。

木製品は、木庖丁（39～41）、竪杵（42）、横槌（43）、用途不明木製品（44・45）、その他板材等がある。（39～41）はいずれも厚さ5.6～5.8cm、紐通しの孔が2孔一対穿けられ、紐孔を結ぶ楕円

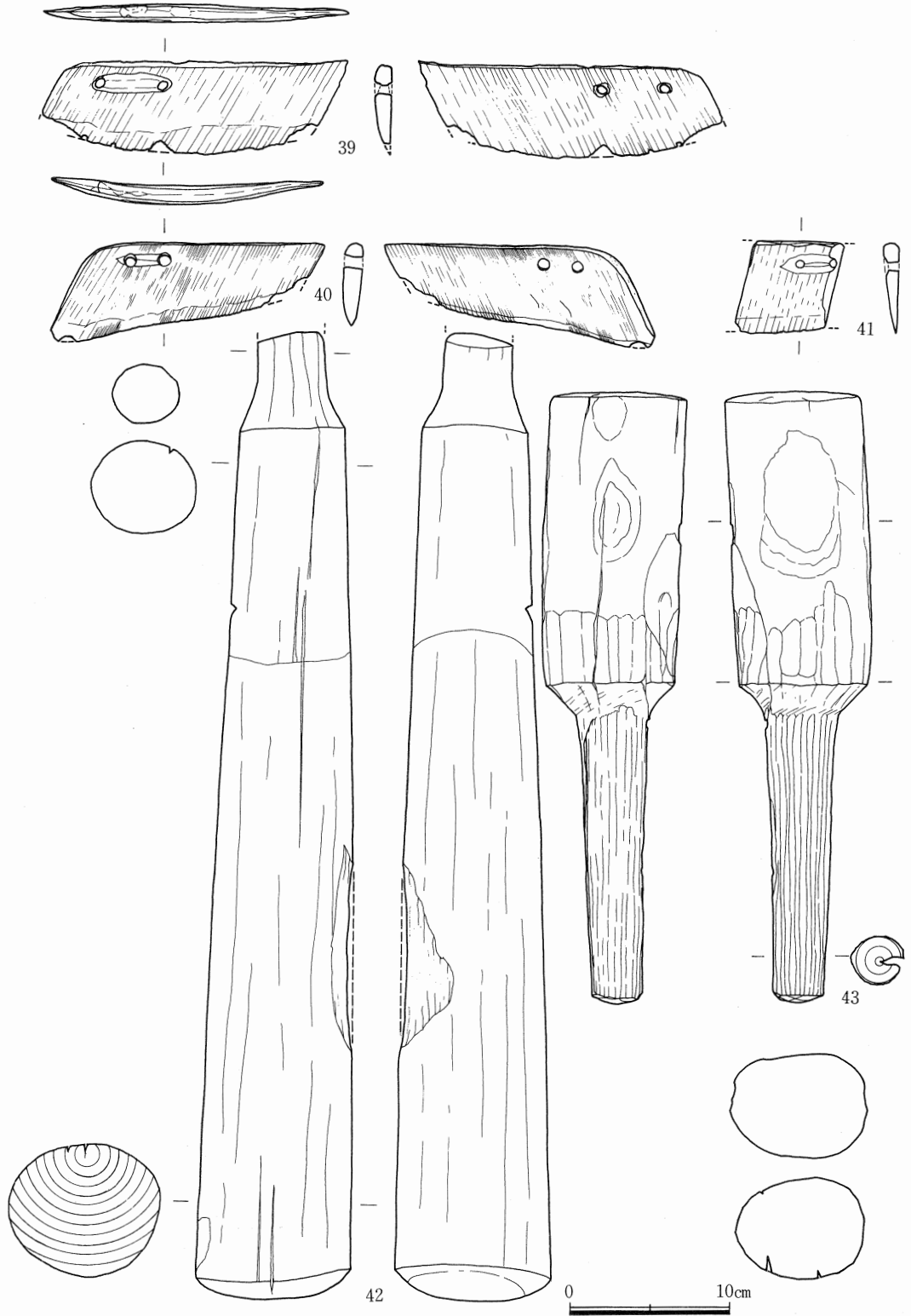


第164図 SD-26出土遺物実測図（3）

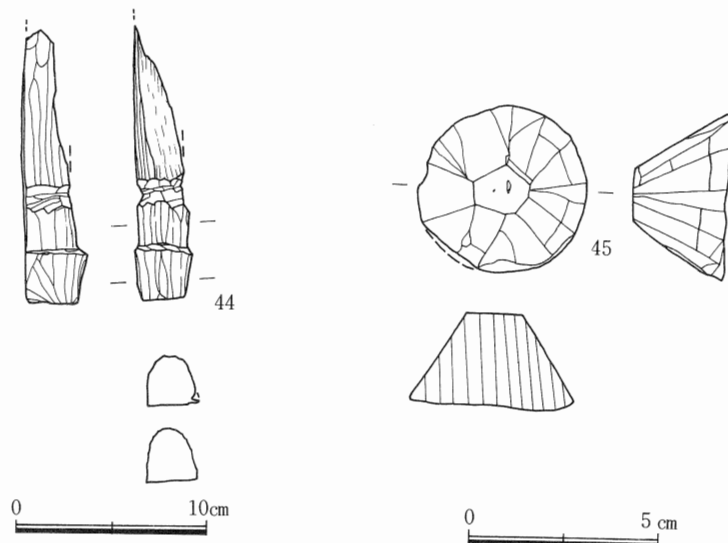
形の溝が片面のみにみられる。刃は木目に対して60~70°の傾斜をもち、(40)には使用によって鋸歯状に木目が浮き出ている部分が認められる。(42)は約2分の1の残存で、先端部分は使用によってよく磨滅する。(43)は浅溝状の加工痕が持ち手部分を中心として認められ、体部に使用痕が残る。(42・43)はともに装飾がみられず実用的な感じを受ける木製品である。(44)は先端部が弭状を呈し、全体を帯状に丁寧に削る。(45)は多角台錘形を呈し、上下部は割れ面である。



第165図 SD-26出土遺物実測図(4)



第166图 SD-26出土遺物実測図(5)



第167図 SD-26出土遺物実測図(6)

SD-27 (付図93)

A・B-17区にまたがって位置し、東西の両端ともに調査区外へ伸びる。検出長10.46m、幅43～66cm、深さ11～15cmを測る。主軸はN-71°-Eを向き、わずかに蛇行しながら伸びる。断面形は椀状を呈する。底面は若干の凹凸がみられるが、両端底に比高差は認められない。埋土は灰褐色砂質土(炭片を含む)一層である。遺物は検出されなかった。

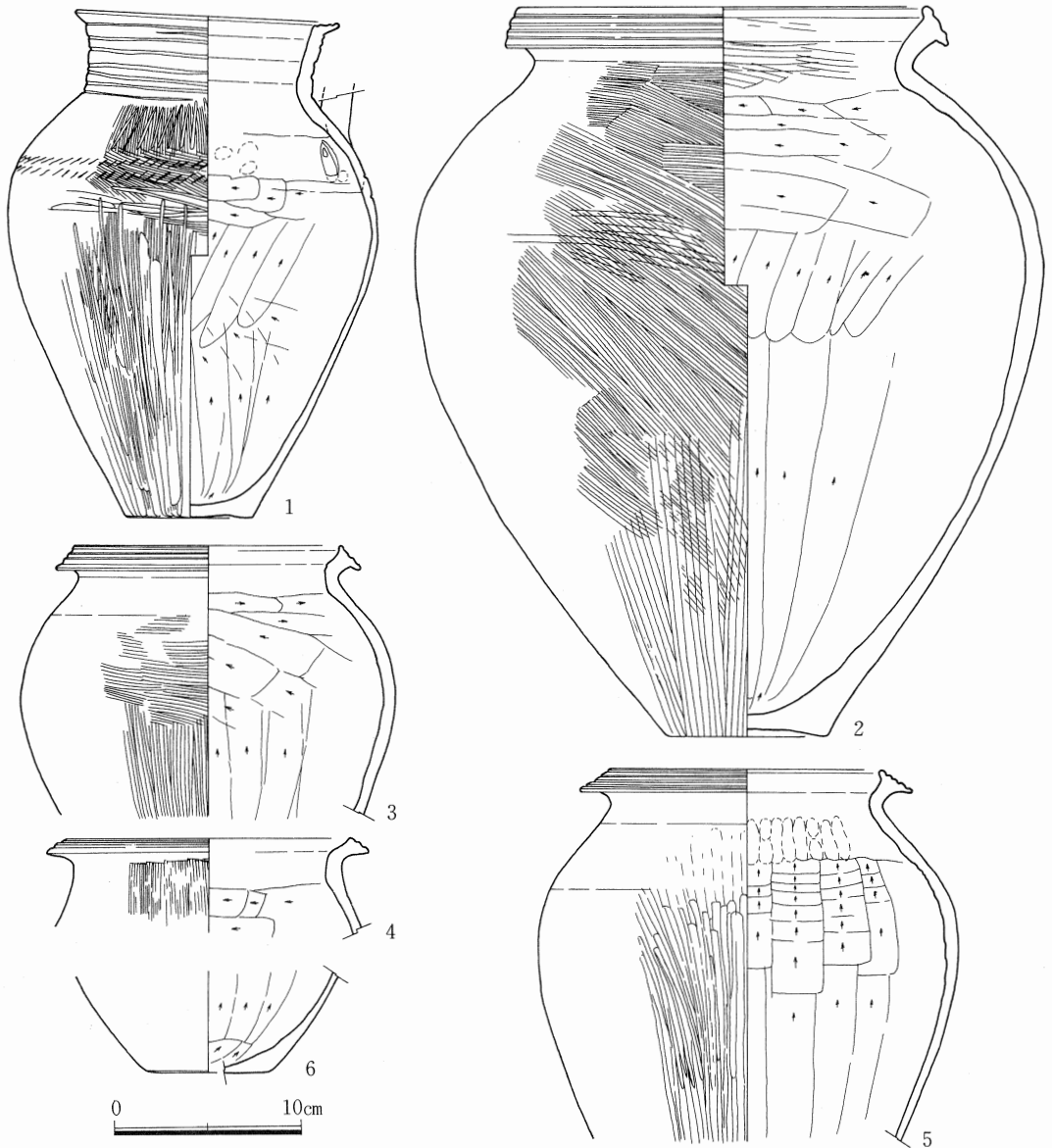
SD-28 (付図94)

B-20区の南部に位置し、東側は調査区外へ伸びる。大型の溝SD-29の東南端の上層で検出した。検出長352cm、幅32～46cm、深さ8cm前後を測る。主軸はN-70°-Eを向く。底面は西から東へ傾斜し、西端に比べて東側が5cm余り低い。断面形は浅い湾状を呈し、埋土は淡褐色砂質土一層である。遺物は出土しなかった。

SD-29 (付図96)

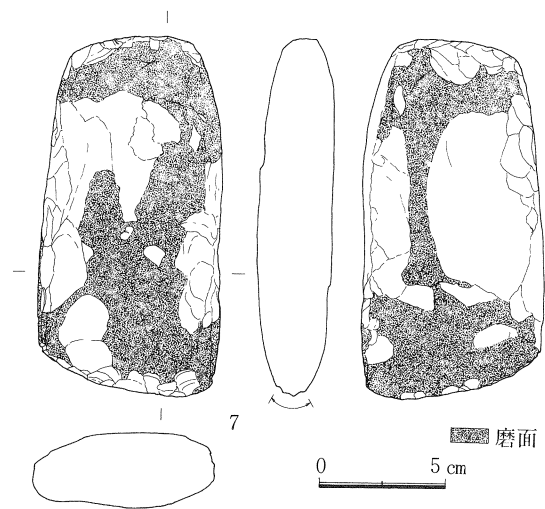
A・B-20区にまたがり、東西両端ともに調査区外へ伸びる。主軸はほぼ東西を向きN-85°-Eである。検出長10.54m、幅414～540cm、深さ49～62cmを測る。規模の大きな直線的な溝であり西へ向けて徐々に溝幅を増す。溝の傾斜は比較的緩やかで断面形は椀状を呈する。底面の状態については著しい湧き水のため詳細を把握し得なかったが、断面からみると底面に東西両端の比高差はなく、中央部から両端へ向かってわずかに高さを増している。埋土は最下層に11. 灰色粘質土(植物遺体を多く含む)が堆積しており、その上に第10層、第9層さらに8. 黒灰色粘質土(炭片を含む)が多量に流入している。第8層の上層には6. 暗褐色粘質土(炭片を含む)をはじめ、5. 灰色粘土、4. 淡灰色粘土、および7. 灰褐色粘質土が堆積していた。また、第4層から上層には砂あるいはシルト系の土が埋まっていた。

遺物は、壺（1）、甕（2～5）、底部（6）、磨製石斧（7）、他土器小片、腐朽の著しい木片、拳大の円礫がある。遺物は溝の両端側に片寄ってそれぞれがまとまった状態で点在しており、（2）を除いて第8層から出土している。（2）はそのままつぶれたような状態で溝の南東端から溝内へ傾斜して出土しており、出土層は第6層にあたる。（1）はやや外傾する口頸部に端部は外方に屈曲して上端面をもち、頸部も合わせて凹線を施す。肩部には器壁内に挿入して接合された逆U字形になるものと思われる把手の一部が残る。（2～5）はいずれも口縁端部が上下に肥厚して拡張し



第168図 SD-29出土遺物実測図（1）

た端面をもち、外面に数条の凹線を施す。また、(2～4)は体部内面は肩部でヘラ削りの方向が変わり頸部までヘラ削りが及ぶが、(5)は頸部近くまでヘラ削りが及ぶものの一貫して上方向のヘラ削りである。底部も(1・2・6)は底径が大きく上部へ直線的につづく。磨製石斧(7)は全体的に剥離がすすみ、扁平で先端部へ向かってわずかながら幅が広がるが両側面の長さが異なり、両刃で刃部は弧状である。



第169図 SD-29出土遺物実測図(2)

SD-30 (付図124)

B-20区の南部に位置し、SK-67に切られる。主軸はN-12°-Eを向き、長さ261cm、幅40～56cm、深さ15cm前後を測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で、両端での比高差は認められない。埋土は暗灰色砂質土(炭片を含む)一層である。

埋土中から高杯もしくは鉢(1)、底部(2)、他30点余りの土器小片と、拳大よりやや小ぶりの角礫が10点出土した。角礫は南側を中心に散乱していた。(1)は口縁部まで湾曲しながら立ち上がり、口縁部外面の稜は波うち、端面には貝工具による刻み目を施す。(2)は底端部上部ですぼまる。

SD-31 (付図125)

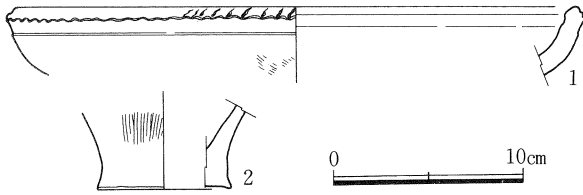
B-20区とB-21区の境界部東側に位置し、SK-67の下層で検出した。すぐ北側にはSD-30があり一部重複するが前後関係は特定し得なかった。主軸はN-30°-Eで、北西側約1.8mにあるSD-32と同一である。規模は長さ378cm、幅40～58cm、深さ6～9cmを測る。断面形は逆台形を呈する。周壁の南端にはわずかにテラス状の高まりをもつ。埋土は暗灰色粘質土一層である。遺物は検出されなかった。

SD-32 (付図126)

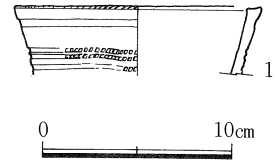
B-20区とB-21区の境界部に位置し、SK-67の下層で検出した。西壁の南西側をSK-69に切られ、北側はSK-66に切られる。また南西端でSK-70と重複していたがその前後関係は把握し得なかった。溝の北東側はわずかに東へ角度を振るものの主軸はN-30°-Eをとる。規模は検出長368cm、幅40～58cm、深さ13cmを測る。底面は北東端で若干高くなるが他ではおおむね平坦である。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰色粘質土一層である。

埋土中から、壺の口縁部(1)と15点の土器片が出土した。(1)は口縁部にかけて直線的に外

傾し、端部は拡張して平坦面をなし外縁に刻み目を施す。また、頸部には押し引きの刺突による3条の沈線が観察される。



第170図 SD-30出土遺物実測図



第171図 SD-32出土遺物実測図

SD-33 (付図127)

A-21区とB-21区の境界部に位置し、SK-76の東側を切る。規模は長さ330cm、幅は北西側で広く44~57cm、深さ12cm前後を測る。主軸はN-45°-Wを向く。溝底は北西端から南東側へわずかに深くなり、南東端にはテラス状の高まりをもつ。断面形は椀状を呈する。埋土は暗灰色砂質土一層である。埋土中から5点余りの土器小片が出土したが図化できなかった。

SD-34 (付図128)

A-21区の北寄り西端に位置し、西側はさらに調査区外へ伸びる。SK-81の上層で検出した。主軸はN-67°-Eを向く。規模は検出長266cm、幅31~41cm、深さ5cm前後を測る。断面形は逆台形を呈し、溝底は北東端から南西端へ若干深さを増す。埋土は黄褐色砂質土一層である。遺物は出土しなかった。

SD-35 (付図129)

A-21区の南西端に位置し、西端は調査区外へ伸びる。溝は直線的に伸び、主軸はN-82°-Eを向く。規模は検出長206cm、幅10~18cm、深さ10cm前後を測り、幅の狭い溝である。断面形は逆台形を呈し、溝底は平坦である。埋土は暗褐色粘質土一層である。遺物は出土しなかった。

SD-36 (付図130)

A-22区の西寄りに位置し、SK-82の東側を切る。主軸はN-17°-Eを向き、やや蛇行気味に伸びる。規模は長さ621cm、幅59~84cm、深さ17~23cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面は北側が6cm程度高く南端側へわずかに傾斜している。また北端部には底面から7cm余り上位にテラス状の平坦面がみられる。埋土は下層に2. 暗灰色粘質土(炭片をわずかに含む)、上層には1. 暗灰色粘質土(炭片を多く含む)が堆積していた。

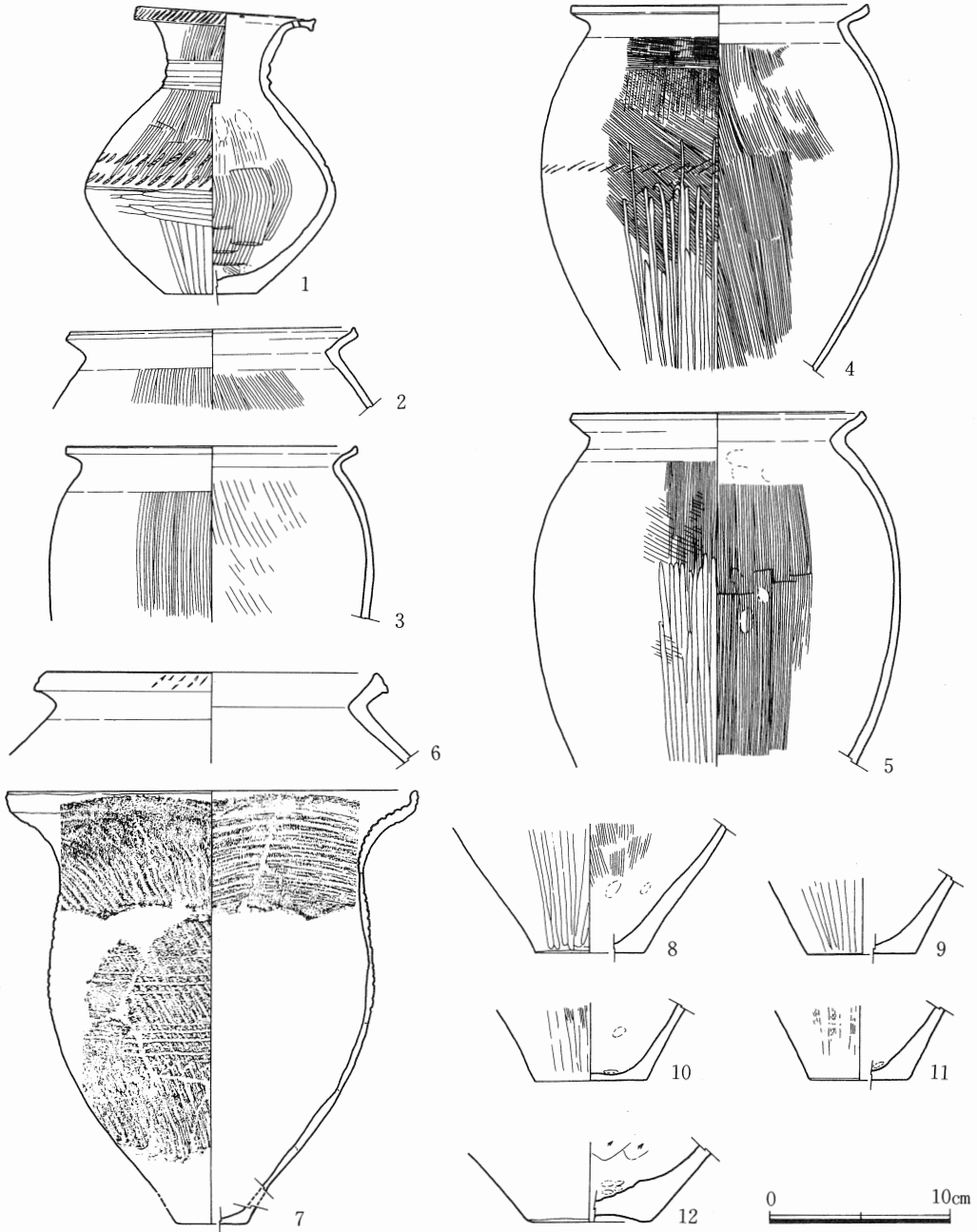
埋土中から土器片7点が出土した。いずれも小片であり図化できなかったが、内面ハケ目調整した甕か壺の胴部片を含む。

SD-37 (付図133)

南端がA-23区にかかるもののA-22区南部にその中心を置く。北東端はSK-84を切り、南西端ではSK-83とわずかに重複していたがその前後関係は特定できなかった。溝の主軸はN-34°

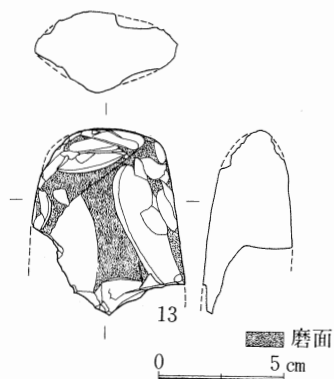
—Eを向き、直線的に伸びる。規模は長さ490cm、幅60～68cm、深さ25～28cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面は両端側でやや高さを増す。埋土は4. 暗灰色粘質土（灰色粘土ブロックを含む）および3. 暗灰色粘質土が壁面に沿って流入後、2. 黒灰色粘質土と1. 暗灰色粘質土（炭片を少し含む）が順次埋まっていた。

遺物は、壺（1）、甕（2～7）、底部（8～12）、磨製石斧（13）、他土器片多数が出土した。い



第172図 SD-37出土遺物実測図(1)

ずれも埋土から検出されたが、甕（7）は底面の直上から出土した。（1）は口縁部は強く屈曲し、体部中央部に最大胴径をもち、頸部に凹線を施す。（2～5）はくの字状の口縁部で端部はわずかにつまみ上げがみられる。（6）は端部の上下が肥厚し、端面には刺突文が認められる。（7）は口縁部4分の1強・体部10分の1と残存わずかのため全容は不明瞭であるが、復元すると体部中央部に膨らみをもち口縁部へかけて外反、わずかに直立し、平底をもつ甕となる。胎土中に1mm前後の砂粒を非常に多く含み、褐色で焼成甘く、外面全体と口縁部内面には幅広で断面V字状の7条単位の櫛状工具による調整が顕著であり、ヨコナデによる調整がみられない。形態・調整とも当地方においては異質な土器であり、他地方からの搬入土器と考えられる。また、同様の破片がSK-73（付図105-a）とSK-71の埋土から検出されており、本溝とこれらの土坑がほぼ同じ時期に機能していたものと推察される。



第173図 SD-37出土遺物実測図(2)

4. 掘立柱建物

SB-01（付図97）

A-9区の東からB-9区の西に位置する。桁行、梁行ともに1間の東西棟建物である。柱の配置はほぼ長方形で、主軸はN-73°-Eを向く。この建物の北約3mには並行してSD-25がある。柱間は、P1～P2が297cm、P2～P3が210cm、P3～P4が286cm、P4～P5が204cmを測る。柱穴は、いずれも平面楕円形を呈し、底部には柱が据えられたと思われる丸い凹みが認められる。規模はP1が(51cm×43cm-29cm)、P2が(48cm×34cm-28cm)、P3が(40cm×39cm-36cm)、P4が(43cm×40cm-36cm)であった。埋土はP1では柱があったと思われる部分には炭片を含む暗灰色砂質土が、そして柱の埋め戻し部分には暗灰色シルト（やや粘質、炭片を含む）と灰色砂質土の2層がみられた。他のP2～P4では炭片を含む暗灰色砂質土一層であった。

SB-02（付図131）

A-22区の北東からB-22区の北西に位置する。桁行1間、梁行2間の東西棟の建物である。建物の南西部分でわずかにSB-03と重複するが、新旧関係は不明である。柱の配置は、両梁行が南北に少しずれて、整った長方形とならない。主軸はN-75°-Wを向く。柱間は、P1～P2が252cm、P2～P3が113cm、P3～P4が114cm、P4～P5が248cm、P5～P6が118cm、P6～P1が108cmを測る。

柱穴は比較的小型のもので、平面形は円形、その規模は、P1が(17cm×16cm-15cm)、P2が(15cm×14cm-16cm)、P3が(14cm×13cm-13cm)、P4が(12cm×11cm-11cm)、P5が(15cm×14cm-16cm)、P6が(16cm×13cm-13cm)であった。埋土はいずれも暗灰褐色粘質土で、柱痕跡は認められなかった。また遺物は何も出土しなかった。

SB-03 (付図132)

A-22区の中央、東寄りに位置する。桁行4間、梁行2間の南北棟建物である。今回検出した5棟の掘立柱建物のうち、全容の不明なSB-05を除いて、最大の建物規模をもつ。北東部分でSB-02と一部重複するが、新旧関係は不明である。柱の配置は、南北両梁行と東側柱列が直線上に並ぶのに対し、西側柱列では直線上に配置されず、また東側柱列と柱間も揃っていない。主軸はN-9°-Eを向く。柱間は、P1~P2が153cm、P2~P3が145cm、P3~P4が142cm、P4~P5が143cm、P5~P6が147cm、P6~P7が132cm、P7~P8が136cm、P8~P9が144cm、P9~P10が130cm、P10~P11が150cm、P11~P12が173cm、P12~P1が112cmを測る。

柱穴は比較的小型のもので、平面形はほぼ円形、その規模はP1が(18cm×17cm-16cm)、P2が(15cm×14cm-16cm)、P3が(16cm×16cm-20cm)、P4が(16cm×15cm-14cm)、P5が(18cm×16cm-20cm)、P6が(19cm×17cm-31cm)、P7が(19cm×17cm-23cm)、P8が(18cm×14cm-23cm)、P9が(18cm×18cm-17cm)、P10が(―)×(―)-16cm、P11が(14cm×14cm-20cm)、P12が(19cm×18cm-18cm)であった。P10は部分的検出である。埋土はいずれも暗灰褐色粘質土で、柱痕跡は認められなかった。また遺物は何も出土しなかった。

SB-04 (付図134)

A・B-24区の南からA・B-25区の北に位置する。検出当初、桁柱列に柱間が非常に狭い部分があり、さらに内部にP19のような柱穴が存在することから、建物の建て替えが想定された。しかし、これを確定するだけの資料は得られなかった。ここでは、P6とP7のような柱間の狭い4ヶ所については2本で互いに補強しあったものと解釈し、桁行5間、梁行2間の南北棟建物とする。主軸はN-11°-Eを向く。柱間は、P1~P2が125cm、P2~P3が135cm、P3~P4が132cm、P4~P5が116cm、P5~P6が112cm、P6~P7が30cm、P7~P8が100cm、P8~P9が46cm、P9~P10が147cm、P10~P11が130cm、P11~P12が126cm、P12~P13が141cm、P13~P14が17cm、P14~P15が116cm、P15~P16が42cm、P16~P17が112cm、P17~P18が136cm、P18~P1が106cm、P2~P19が103cmを測る。

柱穴は比較的に小型のもので、平面形は円形もしくは楕円形で、その規模はP1が(22cm×20cm-25cm)、P2が(24cm×23cm-17cm)、P3が(20cm×17cm-16cm)、P4が(18cm×16cm-12cm)、P5が(20cm×18cm-22cm)、P6が(18cm×16cm-14cm)、P7が(21cm×15cm-13cm)、P8が(21cm×18cm-14cm)、P9が(17cm×14cm-15cm)、P10が(20cm×15cm-22cm)、P11が(19cm×18cm-22cm)、P12が(20cm×16cm-24cm)、P13が(13cm×12cm-24cm)、P14が(18cm×14cm-28cm)、P15が(15cm×13cm-20cm)、P16が(17cm×13cm-24cm)、P17が(16cm×16cm-20cm)、P18が(22cm×22cm-16cm)、P19が(26cm×22cm-23cm)を測る。埋土はすべて黒灰色砂質土(灰色粘土ブロックを含む)で柱痕跡は確認できなかった。また、遺物は何も出土しなかった。

SB-05 (付図135)

B-25区の南からB-26区の北にかけて検出した。東側は調査区域外となるため全体の規模は不明であるが、桁行4間、梁行2間の南北棟建物が想定できる。西側1mにはSK-89が並行する。主軸はN-4°-Eではほぼ南北を向く。柱間は、P1~P2が144cm、P2~P3が127cm、P3~P4が118cm、P4~P5が125cm、P5~P6が175cm、P6~P7が144cmを測る。柱穴は、平面形が楕円形を呈し、その規模は、P1が(30cm×24cm-27cm)、P2が(28cm×27cm-33cm)、P3が(26cm×24cm-27cm)、P4が(32cm×24cm-24cm)、P5が(25cm×21cm-23cm)、P6が(29cm×22cm-27cm)、P7が(24cm×18cm-27cm)であった。埋土はすべて暗灰色砂質土(灰色粘土ブロックを含む)で柱痕跡は確認できなかった。遺物は何も出土しなかった。

P-01 (付図136)

A-21区の中央部西寄りに位置する。底部に礎板の残る柱穴である。平面円形を呈し、規模は最大径で24cm、中央での深さは25cmを測る。礎板は2枚で、いずれも西側が高く傾いていて、一部重複している。大きさは東側のものが長さ16.7cm、幅8.5cm、厚さ2.5cm、西側のものが長さ11.9cm、幅6.7cm、厚さ1.4cmを測る。表面は粗く加工される。埋土は暗灰褐色粘質土一層で、柱痕跡は確認できなかった。遺物は礎板以外には何も出土しなかった。

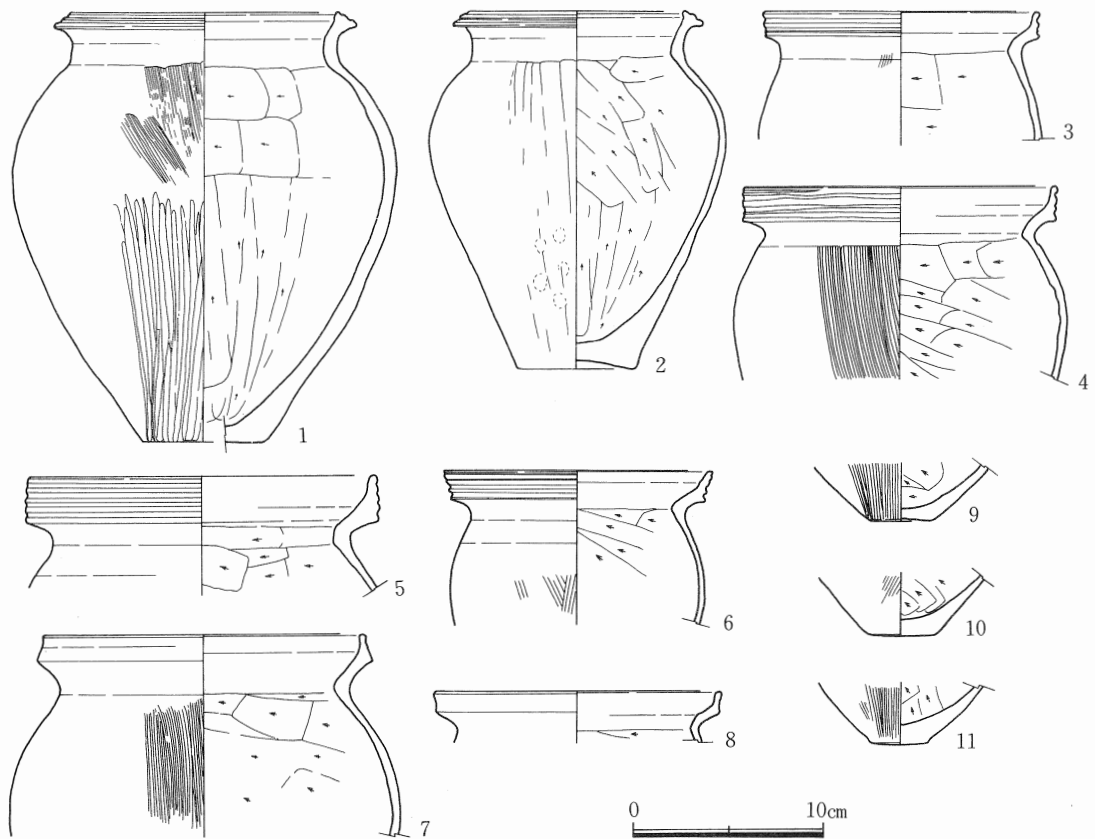
5. 土器群

土器群3 (付図88)

A-7区とA-8区の境界部に位置する。位置的にはSD-23とSD-24の中間部西寄りにあたるが、出土した土器はSD-23やSD-24より古式の要素をもつものが多い。土器の出土状況から、北側にまとまり東西方向に軸をもつ北支群とそれより南へ約1m離れた南支群とに分けられる。北支群では4個体の甕(1・2・6・7)が出土している。(1)は横倒し、(2)は口縁部が西側に傾いた状態で、それらの東側やや上層では口縁部(6・7)が重なった状態で出土している。(1・2)とも上面にあたる部分は欠損しているが、出土状態から、本来は形を留めたまま放置されたものと考えられる。接地面の標高が一番低い所で1.46m、土器の最上部は1.66mである。凹み状の落ち込み部分は検出できなかったものの、土器の出土状況などから深さ20cm以上の土坑である可能性が大きい。南支群は、土器(3~5・8~10)が重なり合った状態で出土している。(5・8~11)は出土状況を図化する以前に転落してしまった土器である。土器の接地面の標高は1.60m、土器の最上部は1.71mである。北支群と同様に南支群も土坑の可能性が考えられるが、距離が離れていることや土器接地面の標高は北支群の方が14cm程低いこと、北支群出土の土器は南支群出土の土器に比べて若干古い要素をもつことなどから、北支群と南支群とは別の遺構であると思われる。

(1・2)は、底部の形態がわずかに異なるものの全体的にはほぼ同様な形態である。ただ(2)は(1)に比べ小型で器壁が薄く、調整方法も若干異なる。体部外面は、(1)はハケ目後下半をヘラ磨きするが、(2)は表面を上滑りしたようなナデ状のハケ目調整である。体部内面にみられ

るヘラ削りも、(1)は底部から上方向に削り上げた後肩部で横方向に向きを変える。それに対して(2)は体部中程で若干向きが変わるものの底部から削り上げる方法である。(6)は口縁部が短く外反し、外面に4条の沈線がめぐるが上部の2条は薄く、後のヨコナデによってつぶれた可能性が大きい。(7)は短く内傾する口縁部をもち、外面には沈線を施さない。(6・7)は(1・2)に比べて肩部が張らない。南支群出土の(3・4)は北支群の(6)に比較的類似し、(4)の口縁部外面の3条の沈線は1本ずつ周回させたものである。(8)は(7)同様外面に沈線はみられないが、(8)の口縁部は直立する。(5)の口縁部はしっかり立ち上がり、外面には4条の平行沈線を施す。平底の底部(9~11)は北支群の(1・2)の底部に比べると底面は小さい。(5)は、全体的にどっしりした印象をもち、土器群3出土の土器の中で、新しい様相を示す土器である。



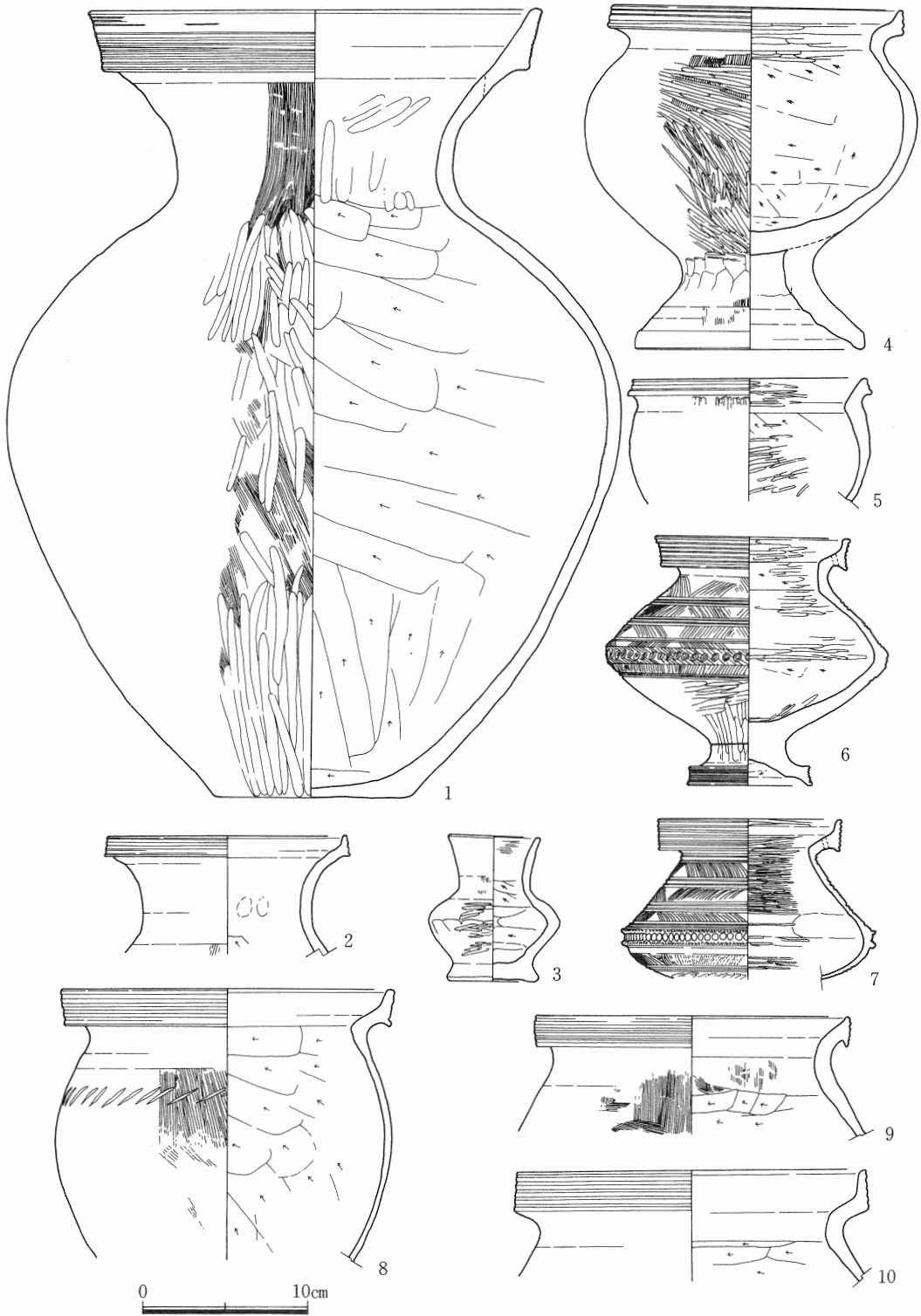
第174図 土器群3出土遺物実測図

土器群4 (付図89)

A・B-9区の南端部からA・B-10区の中央部一帯に広がる。土器の周辺には掘り込みなどは一切認められず、土器群の範囲は現況で東西6m・南北7mである。調査地東壁面のSD-26の上層にあたる部分で、土器群の土器と接合する甕の口縁部が出土しており、土器群の範囲はさらに東

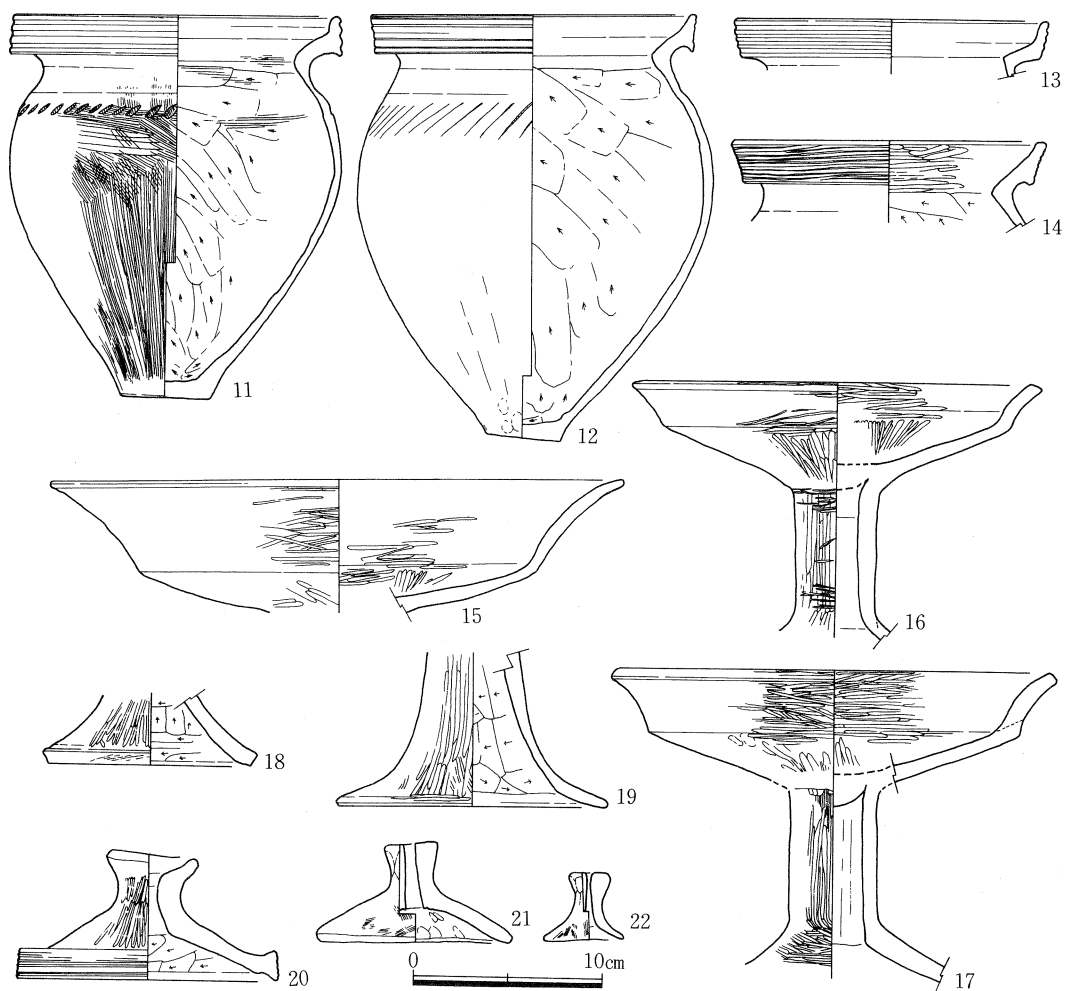
方向にも広がるものと思われる。土器はA-10区の北寄りに集中して検出され、SD-26のほぼ真ん中上面にあたる。土器の接地面は、最も高い甕(11)で標高1.64m、最も低い壺(4)で1.52mであり、概して1.57m前後に集中する。SD-26内に土砂が流入して完全に埋没し、次に堆積した暗灰色粘質土層に土器群4の土器が含まれる。SD-26が埋没した後もその上面の中央部周辺は若干の凹みがみられ、そこに土器が自然流入もしくは人為的に放置されたものと考えられる。なお、高杯(17)は脚柱部に水銀朱が付着残存し、甕の口縁部(付図a)はA-10区西端に位置するSK-61床面出土の甕(第135図1)に接合している。

出土した土器には、壺、甕、高杯、蓋、脚台部がある。壺(1~7)には、大型の壺(1)、通常みられる大きさの壺(2)、赤彩された小型の壺(3)、台付きの壺(4~7)がある。(1)は東方向に口縁部を向け横倒しの状態で出土し、土器を縦に割ったような残存状況であった。大型で、頸部から口縁部にかけて逆ハの字状に開き、薄くて面の広い平底をもつ。口縁部外面は計12~13条の平行沈線を2段に施した後上部をヨコナデする。体部外面はハケ目後ヘラ磨き調整である。(2)はやや内傾する口縁部をもち(1)と異なって内面で屈曲し頸部へ続く。(3)は算盤玉状の体部に短い脚台部が付く小型の長頸壺で、体部外面はヘラ磨きされる。底部内面に長さ18mm・幅3mm弱の工具痕が残る。(4~7)はすべて台付壺と思われ、(5・7)は底部を欠損するものの、おそらく(5)は(4)と、(7)は(6)と同様な形態になるものと推察される。(4・5)は広口の壺で、(4)はしっかりしたハの字状の脚台をもつ。体部外面と口縁部内面をヘラ磨き調整し、(5)はヘラ磨きが体部内面までおよぶ。(6・7)は、装飾された算盤玉状の体部に直立する口縁部が続き、口縁部の屈曲部には隣り合う2ケの小孔が穿孔される。(6)は口縁部と同様な形態の脚台部をもつ。体部3分の2上半部に楕状工具による弧状の施文を互い方向に施し、後にヘラ工具による独立した2~3条の沈線により文様を数段に区画する。中央部には竹管状の刺突文をめぐらす。(6)は楕円形を呈する。(6)は体部上半と下半とが同様なふくらみをもって傾斜するのに比べ、(7)は上半は反り気味で下半は逆に内湾しながら底部へ続く。また、(7)は体部中央の面の上下の稜を突起状に作り出す。文様も(7)の方が丁寧で、ヘラ磨きも(7)は顕著である。(7)は(6)に比べて全体的にシャープな印象を受ける。甕(8~14)は、わずかに内傾もしくは外反するものもあるがほぼ直立する口縁部と、あまり肩の張らない体部をもつ。口縁部外面には平行沈線を施し、(8・11・12)は肩部に体部外面の調整と同一工具の連続刺突文をめぐらす。体部外面はハケ目調整で、ヘラ磨きするものはみられない。内面は口縁部はヨコナデで、(9・11)はヨコナデ前のハケ目が残し、(14)はヘラ磨きする。(14)は口縁部外面にみられる平行沈線は波をうち、整然としたものではない。高杯(15~17)は、杯底部から屈曲して外反する口縁部をもつが、(15)は全体的に薄手で、口縁部が発達し、大きく外反する。(16・17)はほぼ同様の形態・調整で、杯部・脚部ともにヘラ磨きが顕著である。(16)は(17)に比べ若干小型である。脚部(18)は厚手で底端部が面をもち、脚部(19)は底部にかけて徐々に開き、裾部でハの字状にさらに大きく開く。蓋



第175図 土器群4 出土遺物実測図(1)

(20~22)は形態も様々であるが、いずれもつまみ中央部が穿孔される。(20)は(21・22)に比べて重厚な作りでつまみが外反し、面をもつ口縁部は外面に平行沈線を施した後、上端部をつまんでヨコナデする。調整も(21・22)はナデを主体とするが、(20)は外面へラ磨き調整である。なお、(10・13・14・22)は土器群の出土であるが出土状況が図化できなかったもので、(10・13・14)はB-10区の北東部周辺、(22)はB-9区のSD-26の肩部上面にあたる部分で出土したものである。



第176図 土器群4 出土遺物実測図(2)

第5節 遺構外の遺物

調査区全域から多くの遺構外遺物を検出している。出土地や出土層によっては若干のまとまりがみられるものがあり、また、土器や石製品の他に土錘や鉾滓状遺物が出土している。

(1～28) は、A・B-11～12区から南側へ落ち込む暗灰色砂質土もしくは、A・B-15～16区から北側への落ち込み部分の上層で出土した土器である。煤が付着した壺・甕、高杯などほぼ完形の土器が多く、時期的にも古墳時代前期後半に位置付けられる土器の一群である。なお、(3・9・13・15・18～21) はA・B-11～12区の南側への落ち込み、第156層およびその上層の灰色系砂質土から出土しているが、その大部分は第156層の暗灰色砂質土層中から、内に砂質土が流入し完形の状態で出土している。また、その他のA・B-15～16区から北側への落ち込み部分の上層から出土した土器は、ある程度平面的に分布しており出土層位が、第162・179・182層の3層にわたる。A-15区の北東半側に集中し、土圧でつぶれたような状態で各土器ごとにまとまって出土している。土器の周辺に掘り込みなどは認められなかった。

壺(1～8)のうち、小型の壺(4～6)は、複合口縁のもの(4)と単純口縁のもの(5・6)とがみられ、いずれも複合口縁部の(1～3・7・8)は外反するもの(1～3)、直立するもの(7・8)、体部は底部が尖り気味のものや丸底のものがある。調整は口頸部を中心としてヨコナデ調整が顕著で、器面にはヨコナデの単位が稜となって残る。体部外面は縦ハケ目後肩部回転を利用した横ハケ目でその下位には一部雑な横ハケ目が施される。(1)は頸部に突帯を貼り付け肩部に平行沈線および連続刺突文、(2)は3ヶの刺突綾杉文を施す。(3)は口縁端部を内側につまみ、(8)は体部外面に叩き目が観察される。

甕(9～25)は平底甕(24・25)、体部球形化したくの字状口縁部をもつ甕(22・23)、頸部でくびれ直立する口縁部をもつ甕(9)の他に、口縁部に若干の差異は認められるものの同様な形状の甕(10～21)がある。体部の形状の不明な甕(13)を除いて、(10～12)は体部が球形化するが、(14～21)は体部が縦長となる。(20・21)は体部は(14～18)と同様な形態であるが、口縁部がくの字状となる。また、(20)は内面に折り込みが認められる。なお、(12・15・19・21)は体部外面に叩き目が認められる。高杯(26～28)のうち(28)は有段の高杯で、(26・27)は杯部内外面に暗文を施す。

(29～40) はA・B-9～10区に広がるSD-26の上層に堆積した暗灰色粘質土層から出土した土器である。

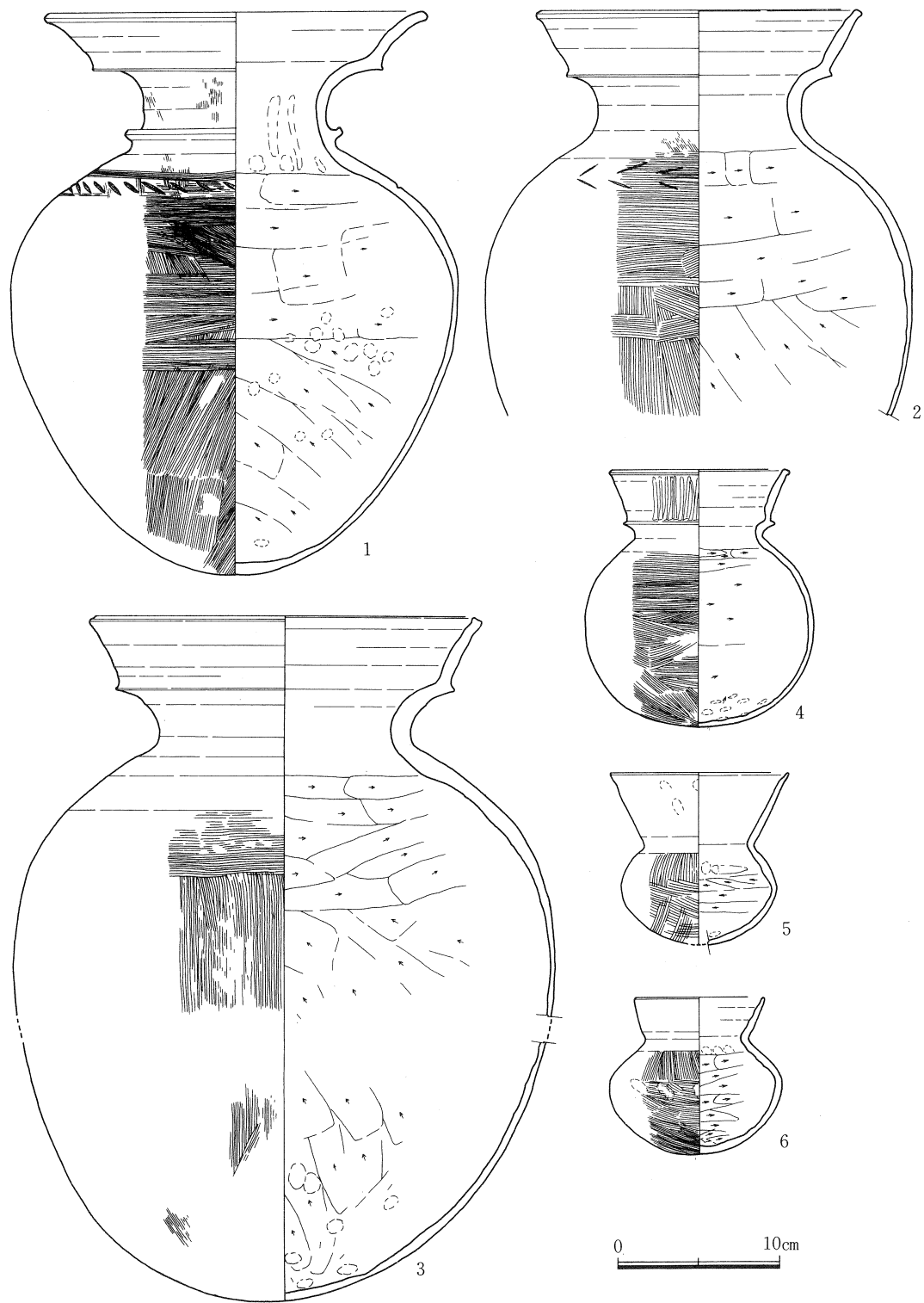
壺(30)は片側に逆U字形の把手を器壁に挿入して接合している。口縁部は凹線を施し、体部外面はヘラ磨き調整される。甕(35)は体部外面ハケ目後下位に上方向へのヘラ削りが認められ、内面はヘラ削り後工具によるナデを施す。口縁部(40)は全体の形状が不明瞭であるが内外面は短い単位のヘラ磨き調整が顕著で、赤彩が施される。

(41~52) および (118・119) は区画道路4号線から北側のA・B-19~27区出土の遺物である。A・B-19~27区では弥生時代後期の遺構面から上層は無遺物層であり、土器にはある程度の時期のまとまりがみられる。なお、出土した層は第233層の暗灰褐粘質土である。

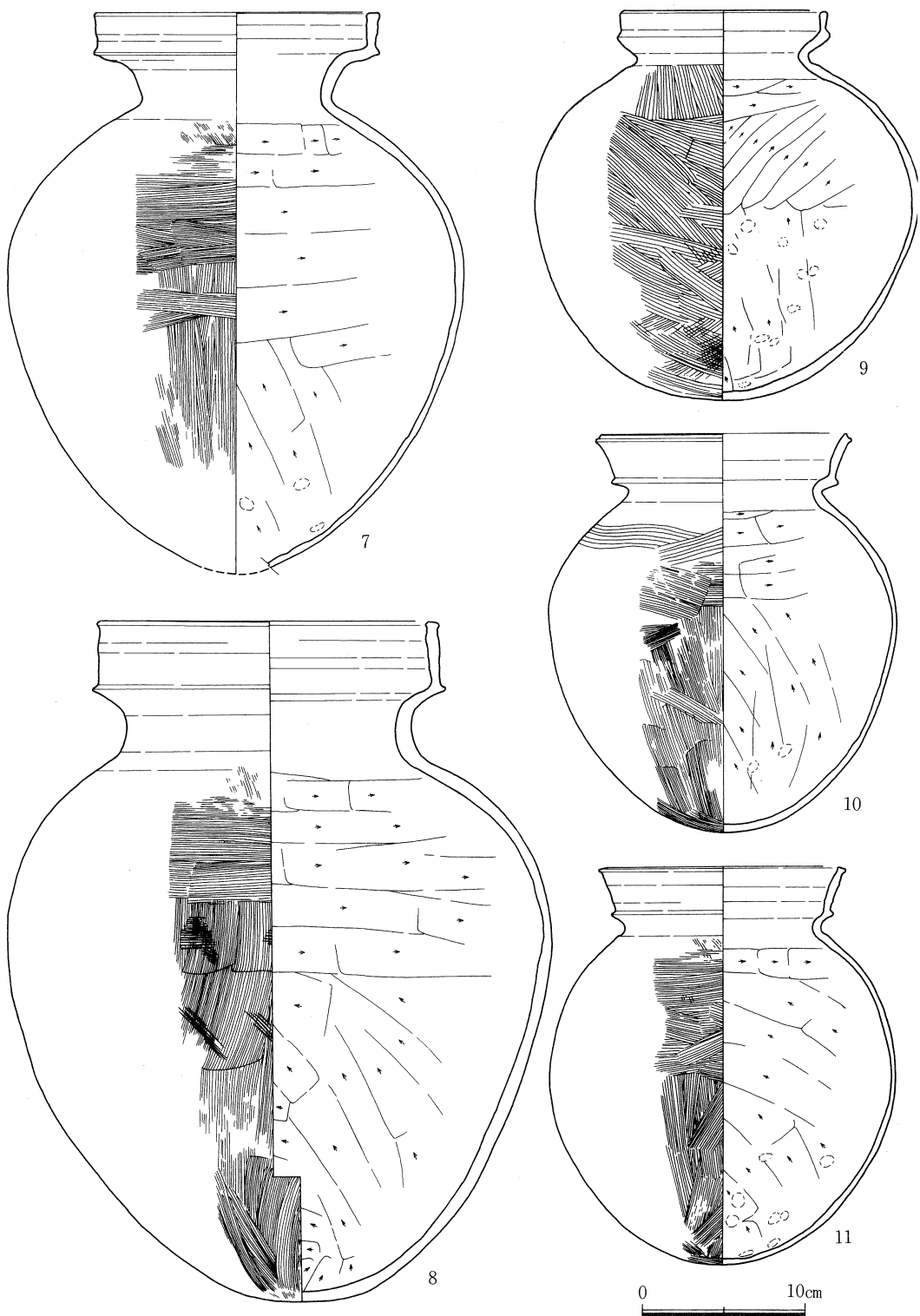
壺 (42・44) および甕 (45) は外面に刻み目の入った断面三角形の貼り付け突帯がめぐる。甕 (48) は上下に肥厚して端面をなす口縁部に、なだらかな肩から径が大きい平底へつづく縦長の体部である。体部外面は右下がりの叩き目後縦ハケ目後下位はヘラ磨き調整である。内面は体部縦ハケ目後体部5分の2以下ヘラ削りである。

(53~117) は区画道路4号線から北側のA・B-3~17区出土の遺物である。その多くはA・B-4~12区にかけて出土したものである。なお、壺 (55) はSD-10の北東側で第44層の淡紫灰色シルト層の上で、甕 (99) はA-11区南側への落ち込み部分の上層から出土したものである。

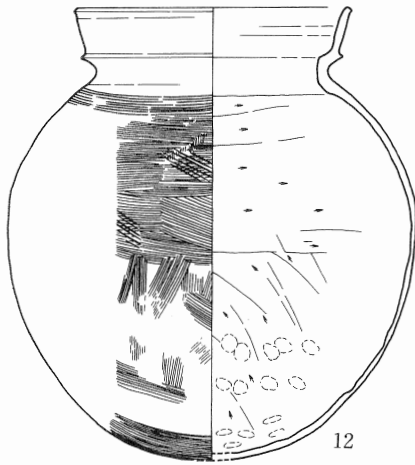
壺 (55) はかすかな平底で倒卵形の体部をもち、肩部外面に平行沈線と波状文を施す。壺の口縁部 (60) は頸部から逆ハの字状に外反し、内面端部は折り込みがあり、外面は縦ハケ目が薄く認められるものの内外面ヨコナデ調整が顕著である。甕 (73) は、稜はもたないもののわずかに複合口縁の面影のあるくの字状口縁部をもち、肩が張り球形化した体部をなす。体部外面縦ハケ目後回転を利用した横ハケ目、下位は別種のハケ目である。体部 (75) は外面に叩き目が認められる。台付壺 (79) は底部に粘土を積み上げて体部を成形し、短く直立する口縁部がつく。全体的に調整不十分な雑な印象を受ける土器である。須恵器椀 (84) は明確な出土地点が不明であるが、SD-02もしくはSD-03の遺物と想定される。鋭くつまみ出された稜の間に波状文を施し、底部側面は右方向へのヘラ削りを施す。土錘 (85・86) は球形のものの中太で縦長の形状のものがある。逆U字形の把手付壺 (87) は外反する口頸部にはヘラ描きの沈線を施し、肩部には細かな刺突綾杉文をめぐらす。注口付壺 (88) は、外面はヘラ磨きによる調整が顕著である。甕 (99) は口縁端部に2条の凹線、肩部に連続刺突文を施す。内面は肩部にヘラ削り以前ハケ目が認められる。(104) は台付壺の脚台部と思われ、脚上部外面は面取り成形後ハケ目調整である。鼓形器台 (110~114) のうち (111~114) は稜の上位に数条単位の沈線2段の間に2重圏スタンプ文を施す。



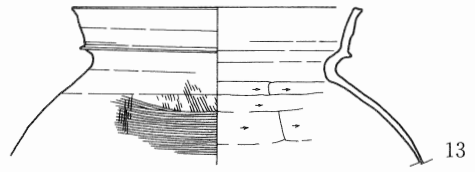
第177図 遺構外遺物実測図 (1)



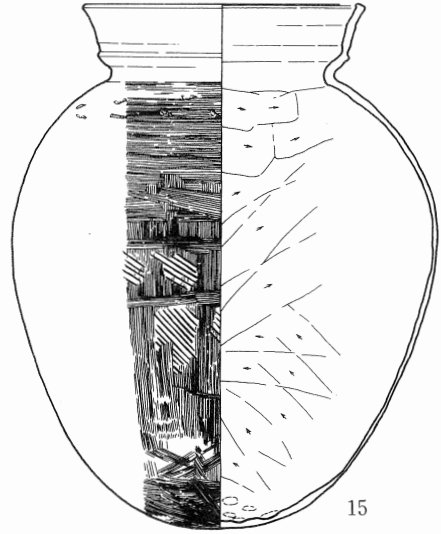
第178図 遺構外遺物実測図 (2)



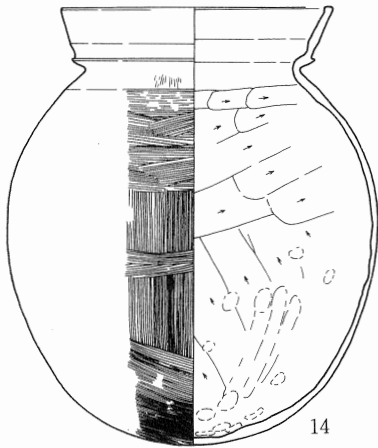
12



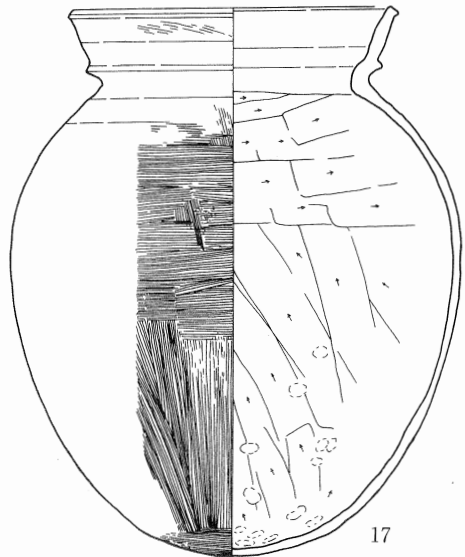
13



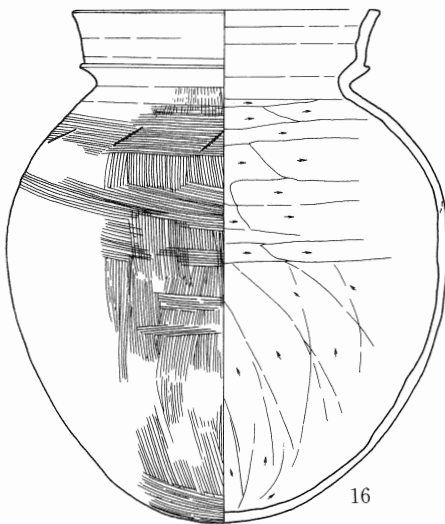
15



14



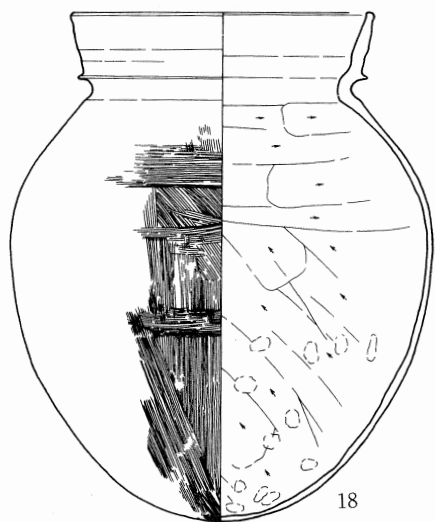
17



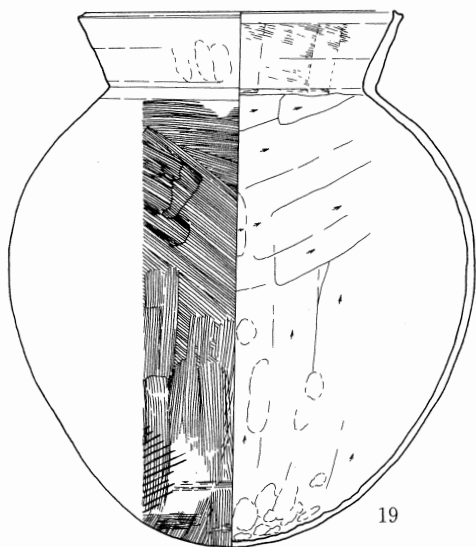
16



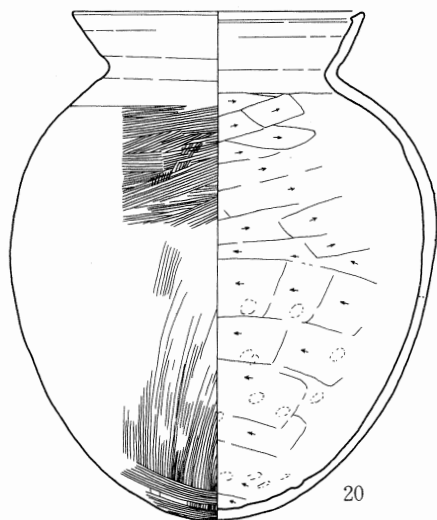
第179図 遺構外遺物実測図 (3)



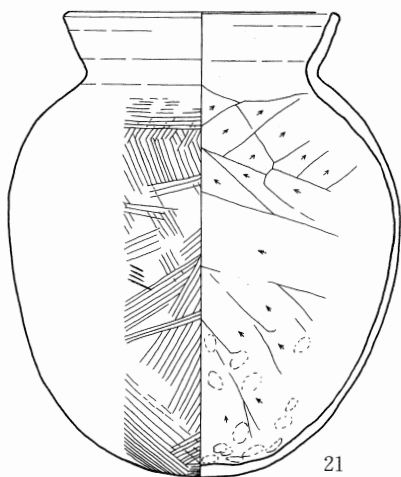
18



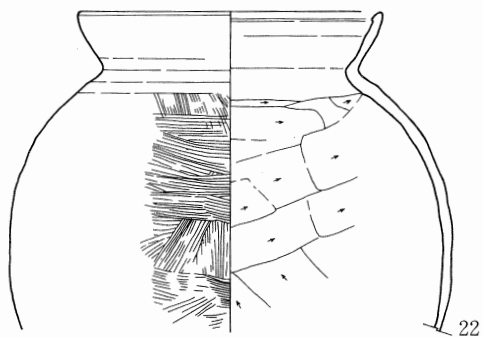
19



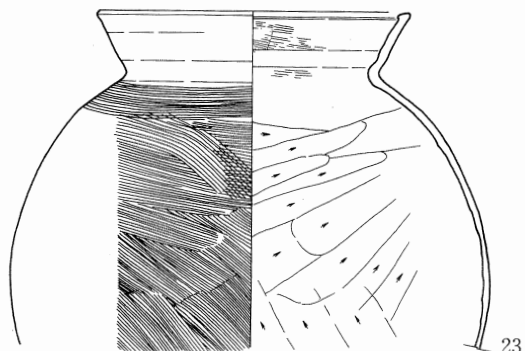
20



21



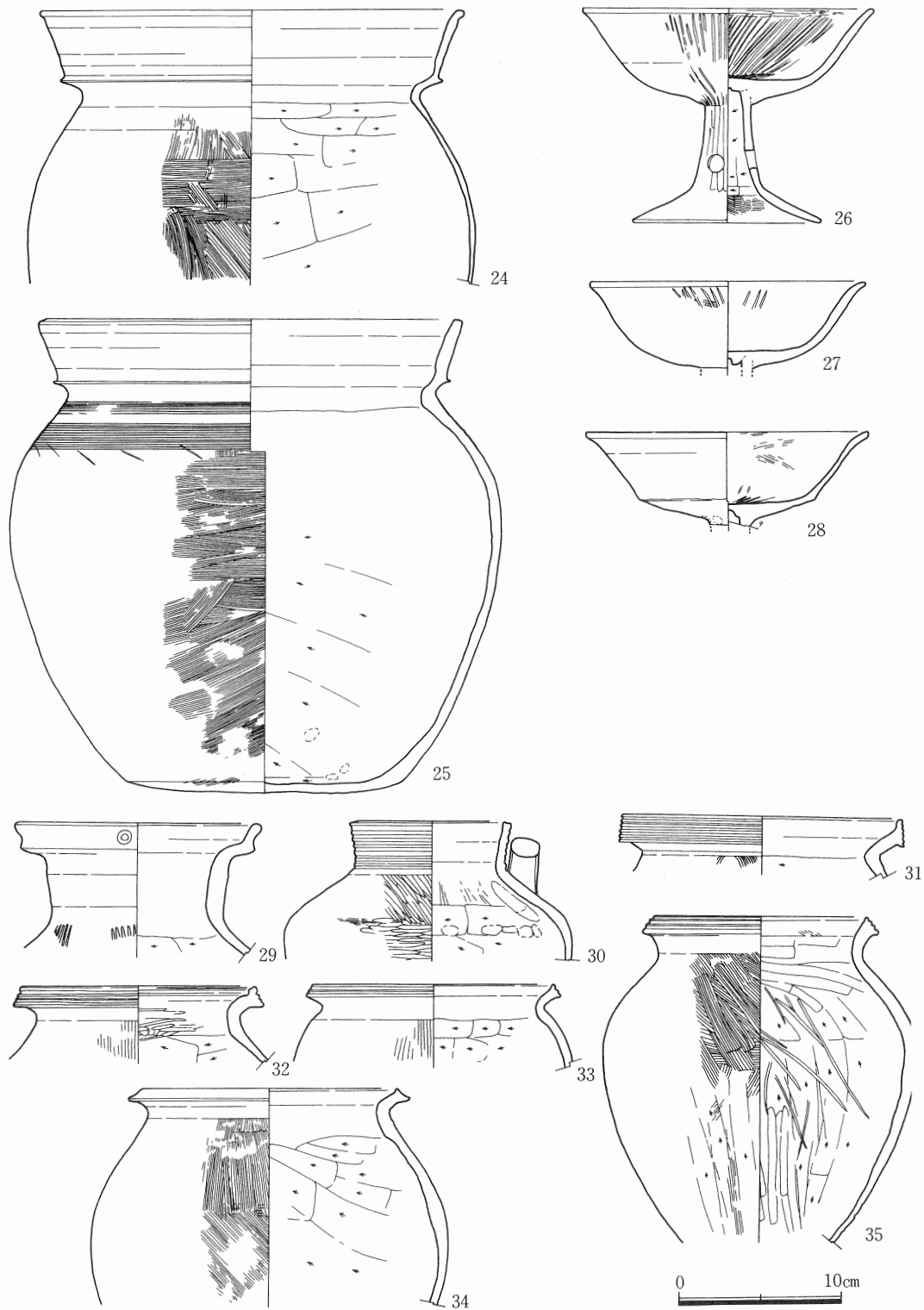
22



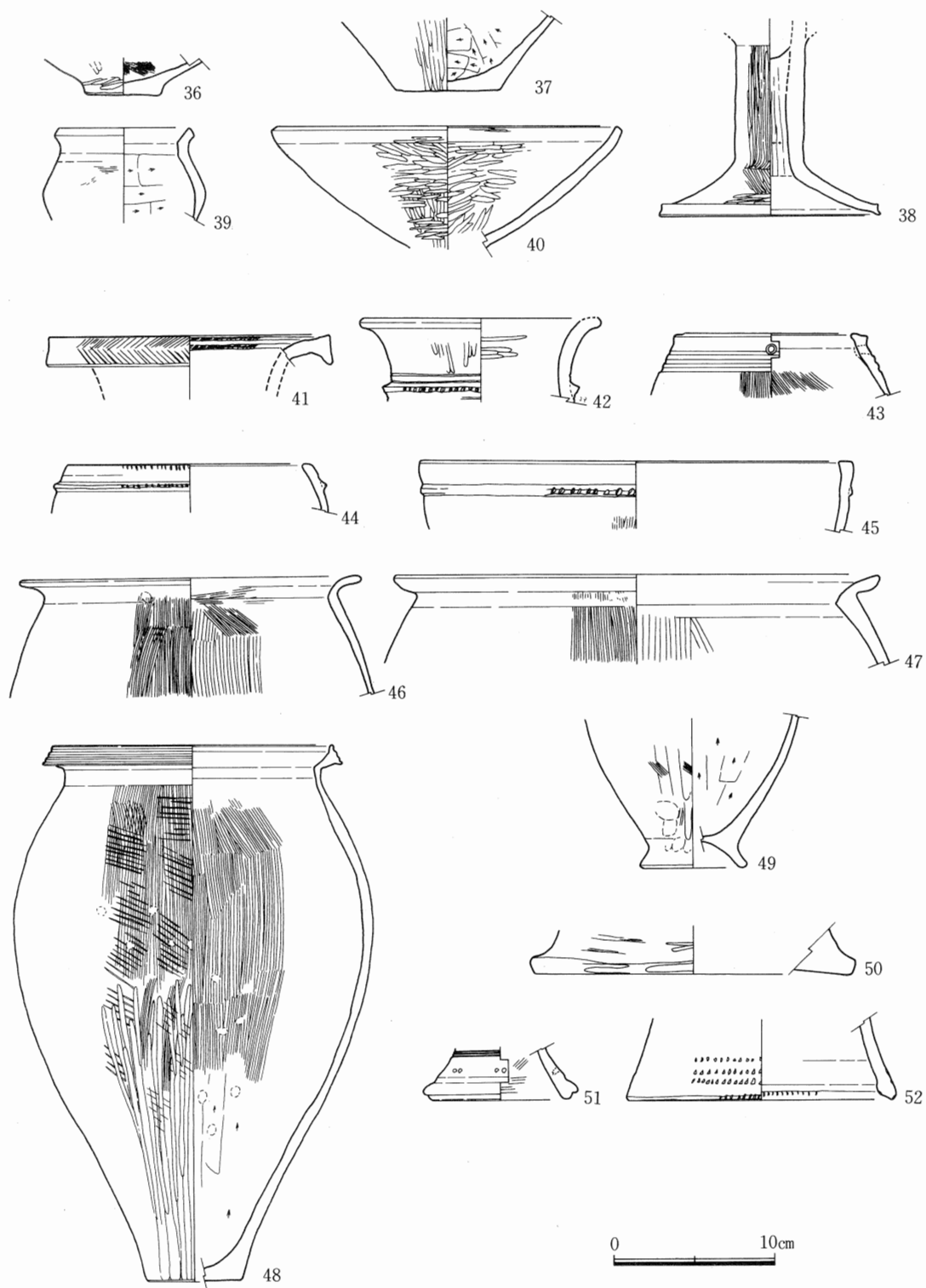
23

0 10cm

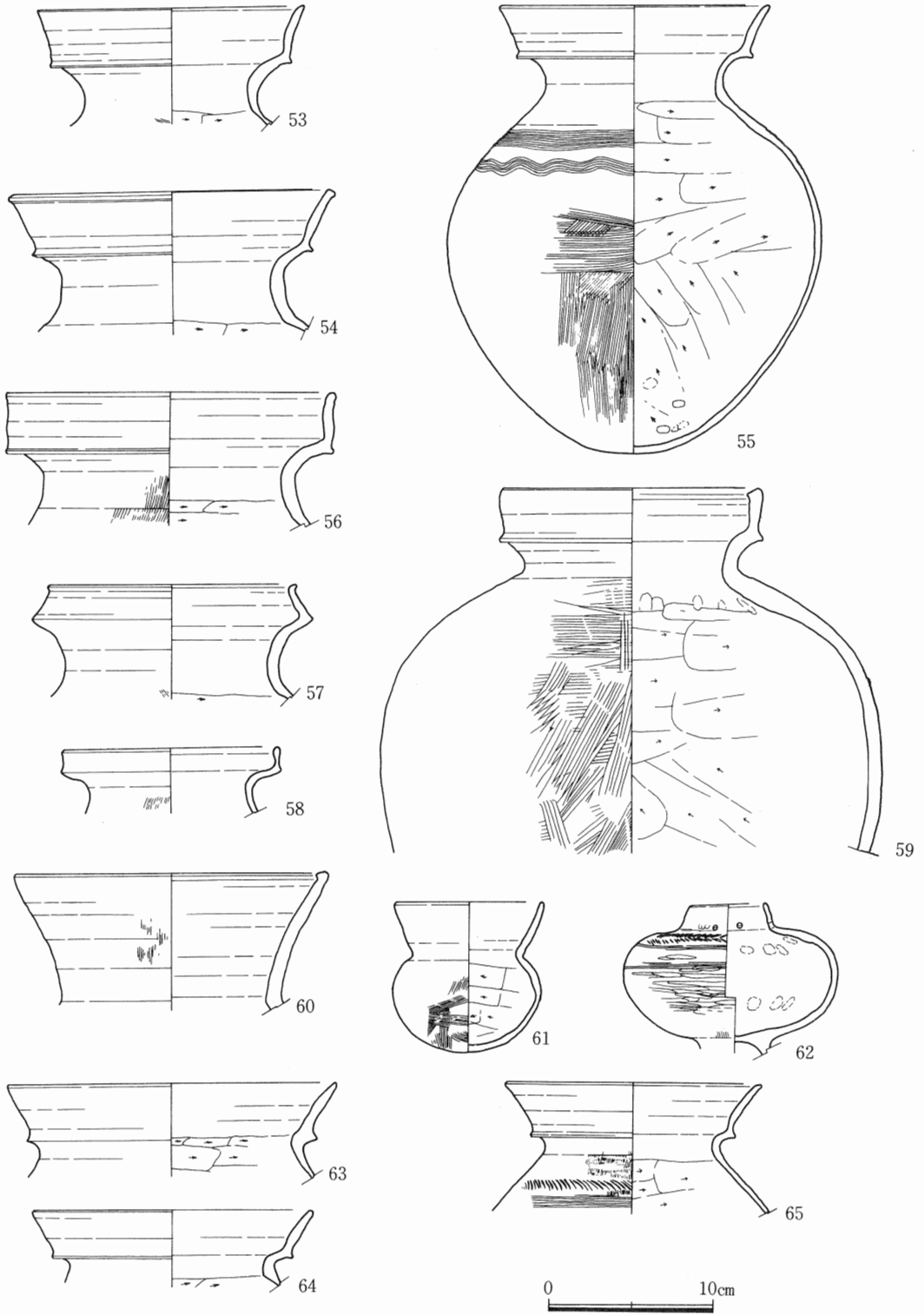
第180図 遺構外遺物実測図(4)



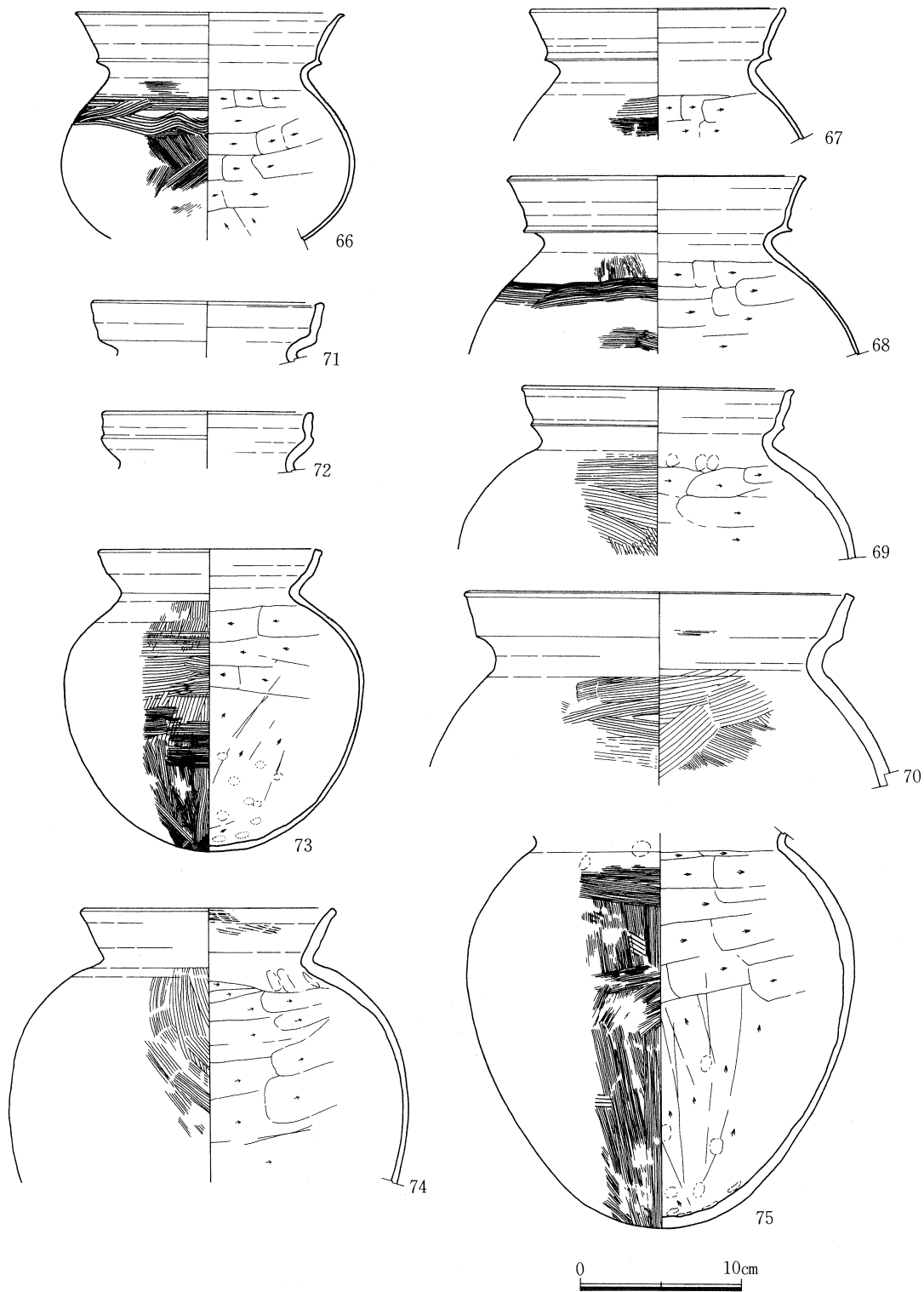
第181図 遺構外遺物実測図 (5)



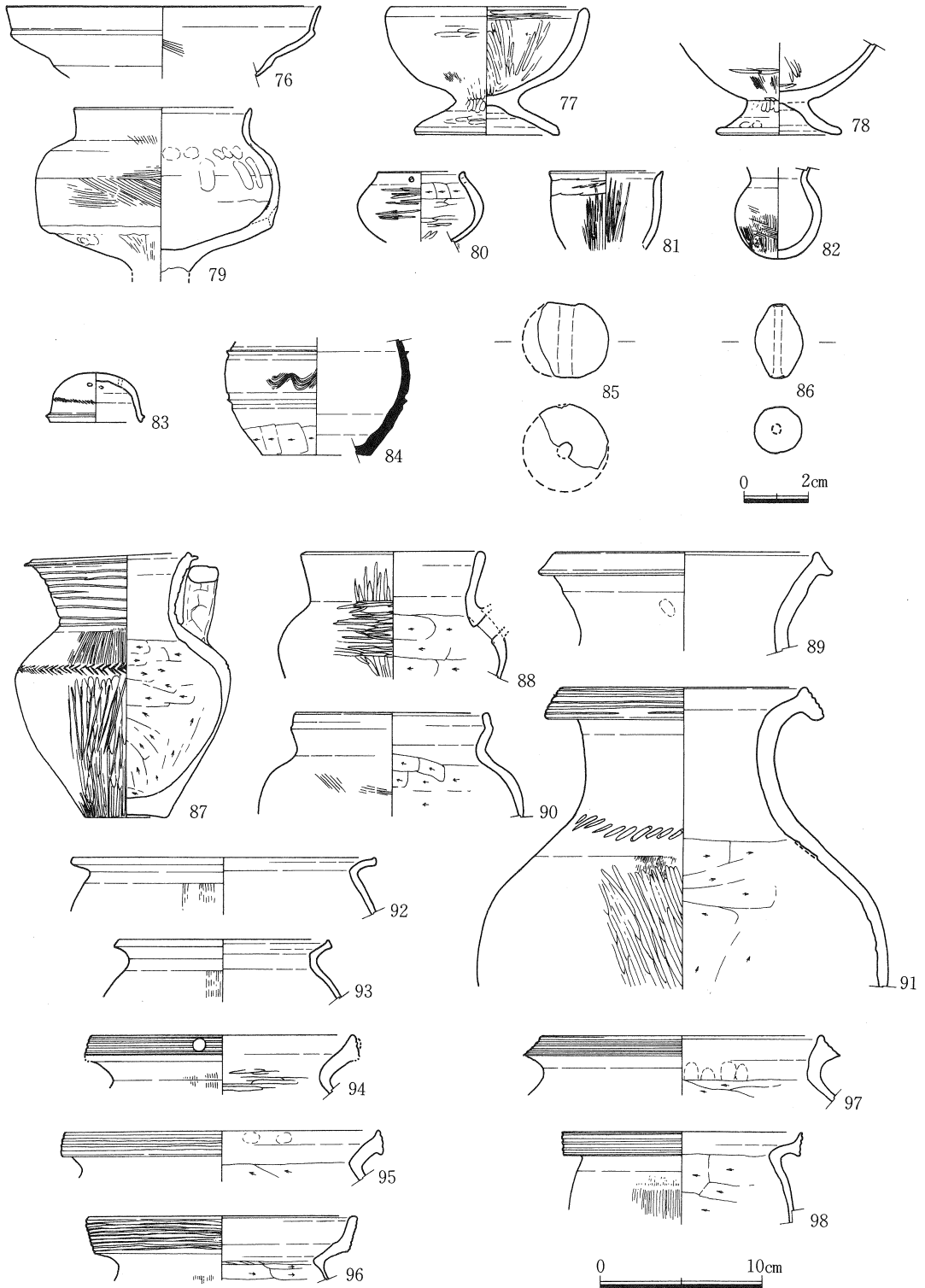
第182図 遺構外遺物実測図(6)



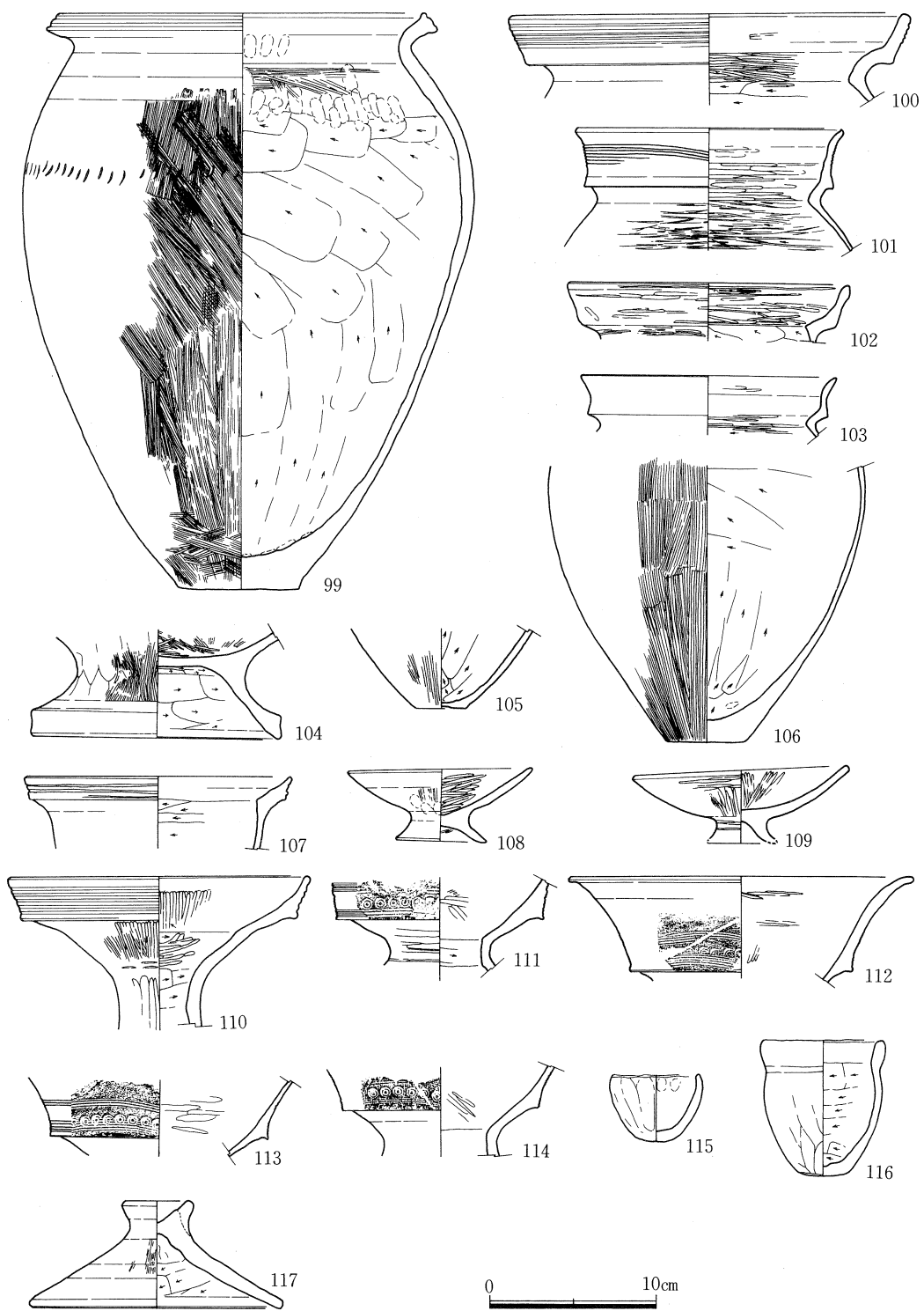
第183図 遺構外遺物実測図(7)



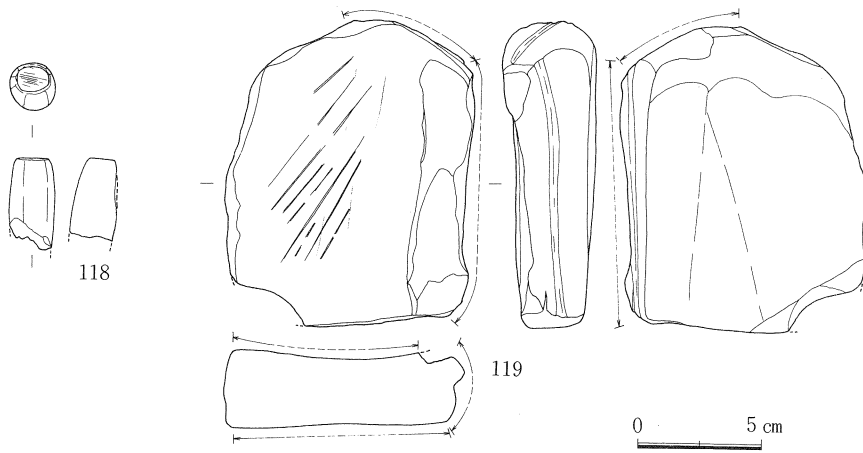
第184図 遺構外遺物実測図(8)



第185图 遺構外遺物実測図(9)



第186図 遺構外遺物実測図 (10)



第187図 遺構外遺物実測図 (11)



出土遺物觀察表

出土遺物観察表について

— 記載事項について —

挿図番号 遺構ごとの実測図番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器種 土器は、形態的特徴から、壺・甕・高杯・低脚杯・器台・椀等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は（ ）で表示。石製品は使用痕等の観察から、砥石・磨石・敲石等の名称を用いた。

法量 土器……口径：◎ 底径：○ 最大胴径：△ 器高：☆ をcmで示す。なお、（ ）は復元値。〈 〉は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。

その他……長さ：L 幅：W 厚さ：Tをcmで示す。（ ）は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。特に、土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

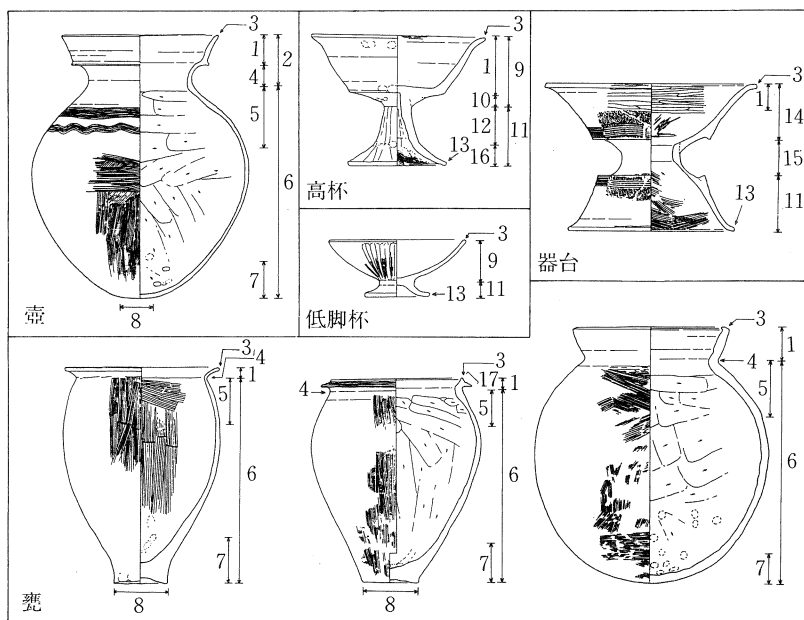
- ①胎土 砂粒の大きさとその量を示す。
- ②焼成 良好（堅緻）・良（普通）・やや不良（やや軟）・不良（軟）の4段階に分けた。
- ③色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合（外）・（内）で表示。

備考 赤彩、黒斑、煤・炭化物付着の有無等を記載。石製品は材質と重量、木製品は樹種が判明しているもののみ記載。（ ）は現存値。

取上番号 出土地を調査区別の通し番号で表示。遺物登録番号。

— 土器の部分名称について —

- 1：口縁部
- 2：口頸部
- 3：口縁端部
- 4：頸部
- 5：肩部
- 6：体部
- 7：底部
- 8：底面
- 9：杯部
- 10：杯底部
- 11：脚(台)部
- 12：脚柱部
- 13：脚端部
- 14：受部
- 15：接合部
- 16：裾部
- 17：口縁端面



第188図 土器細部の名称

第2 水田面関連

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
1	甕	◎ 〈14.4〉	(外) 口縁部に12条以上の平行沈線後中央をヨコナデ。(内) 口頸部ヘラ磨き後上端部ヨコナデ。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤多く付着	A5-38
2	甕	◎ 〈15.4〉	(外) 口縁部8条の平行沈線後上端部ヨコナデ。(内) 口頸部ヘラ磨き後上部ヨコナデ。肩部ハケ目。	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色～淡橙褐色		A5-32
3	甕	◎ 〈18.4〉	(外) 口縁部に4～5条の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③褐色	煤付着	A5-32
4	甕	◎ 〈15.4〉		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着	A5-32
5	甕	◎ (15.6)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③乳褐色	煤付着	A3-33

SE-01

1	甕	◎ 15.1 △ 19.0 ☆ 22.0	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ後6条の波状文。(内) 体部ヘラ削り。底部に指頭圧痕	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤多く付着 炭化物付着	B2-5
2	甕	◎ 13.6	(外) 体部ハケ目後肩部10条以上の平行沈線。底部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り、底部指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③乳褐色～乳灰褐色		B2-5
3	甕	◎ 15.0 △ 18.7	(外) 体部縦後横のハケ目後頸部弱いヨコナデ。(内) 体部丁寧なヘラ削り。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③乳褐色	煤付着 黒斑あり 口縁部楕円	B2-5
4	甕	◎ 〈14.1〉	(外) 体部縦後斜位のハケ目後肩部に8条以上の平行沈線。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③乳褐色	煤付着	B2-6
5	甕	◎ 15.1 △ 20.6	(外) 肩部ヨコナデ、以下ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③乳褐色	煤付着	B2-5
6	甕	△ (20.0)	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ後7条以上の波状文。(内) 体部ヘラ削り。底部に指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着 炭化物多く付着 靨痕あり	B2-5
7	甕	△ (23.0)	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ後9条の波状文。(内) 体部ヘラ削り。底部指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤、炭化物付着	B2-8
8	甕	◎ 〈10.8〉		①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		B2-5
9	高杯		杯部(内外)ヘラ磨き。脚部(外)ヘラ磨き後接合部ヘラ押え。7条以上のカキ目状の平行沈線。(内)ヘラ削り。残存部に円孔痕2を観察、3方向の透し孔か。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		B2-7

SE-02

1	壺	◎ 〈9.8〉	(外) 胴部ナデ、底部ハケ目。(内) 胴部ヘラ削り。底部指ナデ、指頭圧痕。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	B10-87
2	甕	◎ (14.9)	(外) 肩部ハケ目後ヘラ描文か。(内) 肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③橙色	煤付着	B10-91

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
3	甕	◎ (14.6)		①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)暗灰褐色 (内)灰褐色		B10-91
4	甕	◎ (15.0)		①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗灰色		B10-91
5	(底部)	○ 5.5	(外)ナデ、指頭圧痕。(内)ナデ後ヘラ磨き。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)橙褐色 (内)褐色		B10-88
6	(底部)	○ (9.0)	(外)ハケ目。底面ナデ。(内)胴部丁寧なヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)暗褐色(内) 淡褐色	煤付着 (内)水銀朱付着	B10-64
7	机 (天板)	L 95.2 W 48.8 T 1.2~3.0	一枚板。のみ状工具によって切断される。互い違いに溝状の柄に差し込まれ、楔によって固定された脚の一部が残存。		8と接合 スギ	B10-82
8	机 (脚部)	L 35.0 W (13.0) T 1.9	上半部残存。中央部に幅狭の柄ないし窓の一部が認められる。		7と接合 スギ	B10-85
9	机 (脚部)	L 35.0	一部残存。上方に向けてわずかに幅を狭める。			B10-86
10		L 61.2 W 16.8 T 3.6	両側面の中央部に挟り。一端の中央に柄穴。両端は切断面。			B10-80
11		L (50.9) W 8.8 T 2.1	板材。腐朽著しい。			B10-65
12		L 116.1 W 10.4 T 2.6	板材。2面に丁寧な削痕が見られる。			B10-81
13		L 115.0 W 20.6 T 3.3	板材。2面に丁寧な削痕が見られる。			B10-83

SE-03

1	甕	◎ 15.1 △ 18.1 ☆ 21.2	(外)体部下半縦ハケ目後上半横ハケ目後肩部ヨコナデ、底部ナデ。肩部に6~8条の平行沈線。(内)体部ヘラ削り、底部に指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	完形	A8-365
2	甕	◎ <15.1>	(外)体部ハケ目後肩部ナデ後具工具による8条の平行沈線。(内)体部ヘラ削り後一部ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	煤付着	A8-357
3	(底部)		(外)ハケ目。(内)ヘラ削り、指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A8-366
4	甕	◎ 17.6 ○ 13.0 △ 22.4 ☆ 20.3	(外)体部ハケ目後底部ナデ。肩部ナデ後上段に12条の平行沈線、下段に連続刺突文。(内)体部丁寧なヘラ削り後ナデ。底部に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡橙褐色 (内)橙褐色	ほぼ完形	A8-364

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
5		L 150.4 W 26.6 T 4.2	一端は片側面を削り出す。方形孔2ヶあり。一面に丁寧な削痕がみられる。やや湾曲する板材。			A8-369
6		L (124.8) W 16.0 T 5.1	一端は平端な切断面。2面に削痕がみられる。やや湾曲する板材。		7と接合	A8-375
7		L (123.5) W 22.8 T 6.6	一端は平端な切断面。2面に削痕がみられる。やや湾曲する板材。		6と8に接合	A8-377
8		L (124.7) W 30.0 T 5.1	一端は平端な切断面。2面に削痕がみられる。やや湾曲する板材。		7と接合	A8-376
9		L (128.3) W 13.8 T 5.6	長側辺の端部に柄穴痕。2面に異なる削痕あり。			A8-372

SK-01

1	壺	◎ (10.9) △ 16.0 ☆ 16.0	(外) 体部ハケ目後底部ナデ。(内) 体部ナデ。肩部に接合痕、底部指頭圧痕。	①4～5mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 煤、炭化物 付着	A3-6
2	壺	◎ (12.2) △ (18.2)	(外) 体部縦、斜位のハケ目後肩部横ハケ目。(内) 体部ヘラ削り後下半ナデ、指頭圧痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A3-17
3	壺	◎ (6.6) △ (8.0)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部上半ハケ目、下半ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A3-5
4	甕	◎ (13.8)	(外) 肩部ナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色		A3-8
5	甕	◎ (16.3)	(外) 肩部ナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	①2～3mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	A3-16
6	甕	◎ (16.0)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	煤付着 靱痕あり	A3-8
7	甕	◎ 14.6	(外) 肩部底部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。底部ナデ、指頭圧痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 淡橙褐色	煤付着 口縁部楕 円	A3-19
8	甕	◎ 14.5	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。	①5mm大の砂粒を含む ②良好 ③(外) 褐色(内) 黒 褐色	煤付着	A3-18
9	甕	◎ 15.4 △ 23.7	(外) 肩部叩き目後体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り、底部に指頭圧痕。	①2～3mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	A3-23
10	敲石	L 10.2 W 6.2 T 5.5	長軸両端にわずかな敲打痕。		完存380g 安山岩	A3-26

SK-05

1	甕	◎ 14.3	(外) 肩部ハケ目後ナデ。(内) 肩部ヘラ削り、指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②不良 ③乳黄褐色	煤付着 黒斑あり	A4-36
2	甕	◎ 15.6	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	黒斑あり	A4-35

挿図 番号	器 種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
3	甕	◎ (15.2)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ割り。	① 1～2mmの砂粒を含む ②不良 ③淡橙褐色～暗褐色		A 4-25
4	甕	◎ (14.2)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ割り後 ナデ、指頭圧痕、接合痕。	① 1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③橙色		A 4-18
5	甕	◎ 13.4 △ 23.7 ☆ (24.8)	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ割り後丁寧なナデ。肩部、底部に 指頭圧痕。口縁部ハケ目痕。	① 4mm大の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	炭化物付着	A 4-32
6	甕	◎ (15.2) △ (21.2)	(外) 体部2種のハケ目。(内) ヘラ割り 後ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色		A 4-29
7	(底部)	○ (10.0)	底部に平坦面をもつ。(外)体部丁寧なナデ、 指頭圧痕。(内) ヘラ割り後底部指ナデ。	① 3mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	炭化物付着 黒斑 あり	A 4-34
8	高杯	◎ (22.7)	(外) ナデ一部ハケ目痕、指頭圧痕。(内) ナデ。 赤彩後の放射状暗文2段。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	赤彩	A 4-16
9	高杯	◎ (21.2)	(内外) ハケ目後ナデ。 赤彩後の放射状暗文2段。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A 4-24
10	高杯		(外) ナデ。(内) 剥落不明。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 煤付着	A 4-4
11	高杯	○ (9.8)	(外) ナデ後ヘラ描文。脚端面ヘラ割り。 (内) ハケ目後ナデ、指頭圧痕。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A 4-3
12	高杯	○ 9.6	(外) 上半ヘラ磨き。下半ナデ、脚端面ヘ ラ割り後ナデ。(内) 上半ヘラ割り後ナデ、 下半ハケ目、指頭圧痕。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 黒斑あり	A 4-37
13	高杯		(外) ヘラ磨き後接合部ハケ目。(内) 脚 柱部絞り目、脚裾部ヘラ割り。屈曲部に外 径約8mmの円孔2を外から穿つ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A 4-40
14	台石	L 20.0 W 15.7 T 7.1	両面中央部に敲きによる凹み。最深部でそ れぞれ8mm、3mmを測る。		完存3.6kg 流紋岩	A 4-30
15	敲石	L 15.7 W 11.3 T 6.3	長軸の両端に敲打痕。使用頻度の高い幅広 端部の周側部に磨き痕。短軸中央部に溝状 の加工痕。		(1.6) kg 流紋岩	A 4-38
16	砥石	L 16.2 W 6.4 T 7.0	長軸の3方向に研ぎ面1、加工面2。加工 面には幅1.5cm強の工具痕が階段状に残り、 研ぎ面にもかすかに残る。		完存1.2kg 流紋岩	A 4-33
17	敲石	L 10.7 W 4.2 T 3.2	長軸の両端にわずかな敲打痕。		完存225g 流紋岩	A 4-22

SK-09

1	甕	◎ (11.8)		① 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡乳灰色		A 8-42
2	甕	◎ (18.2)		① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡灰褐色 (内)淡橙褐色	小片	A 8-49

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
3	甕	◎ (19.2)	(内外) ハケ目痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外)褐色(内)暗褐色	小片	A8-49
4	甕	◎ (15.8)		①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	小片 煤付着	A8-77
5	高杯	◎ (16.8)	(外) ハケ目後ヨコナデ及びナデ。(内)ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色		A8-49
6	高杯	◎ (22.6)	(外) ナデ、一部ハケ目痕、指頭圧痕。(内)ナデ。 赤彩後の放射状暗文2段。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡乳褐色	赤彩 煤付着	A8-75

SK-10

1	壺		内外面風化著しく不明。	①1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③淡橙色		A8-81
2	高杯		(外) ハケ目。(内) 剥落。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色	赤彩	A8-80
3	高杯	○ 9.6	(外) 上半ヘラ磨き、下半ナデ、脚端面ヘラ削り。(内) 上半ヘラ削り、絞り目。下半ハケ目。 脚部半円側に円孔3を等間隔に外から穿つ。外径約5mm。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 黒斑あり	A8-79

SK-11

1	高杯	◎ (18.5)	(内外) ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙色	赤彩	A8-45
---	----	----------	----------	--------------------------	----	-------

SK-12

1	壺	△ (12.0)	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。(内) ナデ、指頭圧痕。底部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A8-67
2	甕	◎ (15.8)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤付着	A8-71
3	高杯	◎ (17.5)	(外) 杯部ハケ目後上半ヨコナデ。脚柱部ヘラ磨き、ハケ目痕。(内) 杯部ナデ、脚柱部上半不明、下半ナデ、絞り目。 赤彩後の放射状暗文2段。	①5mm大の砂粒を含む ②良好 ③(外)褐色(内)淡褐色	赤彩	A8-64
4	高杯	◎ (16.0)	(外) 上半ヨコナデ、ハケ目痕。下半ハケ目。(内) ナデ。 赤彩後の放射状暗文2段。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A8-73
5	高杯	◎ 15.1	(外) ヨコナデ。(内) ナデ。 赤彩後の放射状暗文。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	赤彩	A8-62
6	高杯	○ 12.2	(外) 脚柱部ハケ目後ナデ。脚裾部上半ヘラ磨き後下半ヨコナデ。(内) 上半ナデ、下半ハケ目、指頭圧痕。	①2～3mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A8-61

SK-13

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	壺	◎ (13.6)	(外) 体部縦ハケ目後横～斜位のハケ目後頸部ヨコナデ。(内) 口頸部ハケ目後ナデ。体部ヘラ削り。	① 4～5mmの砂粒を含む 7mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	赤彩 煤付着	B8-35
2	壺	◎ (10.8)	(外) 肩部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	① 0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 煤付着	B8-35
3	壺	△ (12.0)	(外) ハケ目。(内) 上半指ナデ、下半ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③暗灰褐色	炭化物付着	B8-49
4	壺	◎ (6.4)	(外) 体部ハケ目。口縁部に指頭圧痕。 (内) 口頸部ハケ目痕。肩部ナデ。以下ヘラ削り。指頭圧痕。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内)灰褐色	黒斑あり	B8-50
5	壺	◎ (7.0) △ (9.0)	(外) 体部ハケ目、胴部剥落不明。(内) 口頸部ハケ目、体部%上半ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	B8-42
6	甕	◎ (13.8)	(外) 肩部不明。(内) 肩部ヘラ削り、指頭圧痕。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	B8-50
7	甕	◎ 17.4	(外) 肩部縦ハケ目後横ハケ目後上部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1～2mmの砂粒を含む ②不良 ③淡褐色	煤付着	B8-43
8	甕	◎ (14.8)	(外) 肩部以下剥落不明、ハケ目痕。(内) 肩部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③(外)淡黄褐色 (内)淡褐色	黒斑あり	B8-40
9	甕	◎ (15.3)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡乳褐色	煤付着	B8-42
10	甕		(外) 剥落不明。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1～2mmの砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③(外)橙色(内)乳橙褐色	赤彩?	B8-43
11	高杯	◎ (18.4)	(外) ハケ目後口縁部ヨコナデ。(内) ハケ目後ナデ。 赤彩後の放射状暗文痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	赤彩、黒斑あり	B8-49
12	高杯	◎ (15.8)	(外) 下半に細かいハケ目後幅広のハケ目後上半をヨコナデ。(内) ナデ後底部ヘラ磨き。	① 2～3mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色		B8-49
13	高杯	○ (10.5)	(外) ヘラ磨き後下半ナデ。脚端面ヘラ削り。(内) ナデ後ハケ目、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	赤彩	B8-49

SK-14

1	甕	◎ (18.8) △ 30.0 ☆ 31.8	球形の体部。 (外) 体部ハケ目、肩部に工具による刺突3。(内) 肩部ナデ、指ナデ。胴部強いヘラ削り。底部ナデ、指頭圧痕。	① 1～2mmの砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤、炭化物付着	A8-90
2	甕	◎ (15.8)	(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A8-87
3	甕	◎ (14.3)		① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B8-86
4	高杯	◎ (16.1)	(内外) ナデ。外面にハケ目痕。 赤彩後の暗文痕。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A8-89

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
5	高杯	○ (9.8)	(外) 上半ヘラ磨き、下半ナデ。接合部ハケ目痕。(内) 上半絞り目、ナデ。下半ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A8-89
6	椀	○ (3.1)	(内外) ナデ。底部に貫通しない径3mmの円孔1。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A8-88

SK-22

1	甕	◎ 14.5 △ 23.6 ☆ 24.9	球形の体部。 (外) 胴部に叩き目後体部ハケ目後肩部と底部ナデ。(内) 体部ヘラ削り後下半ナデ。底部ナデ。指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む 6mm大の砂粒有 ②不良 ③淡褐色、淡橙褐色	煤付着 黒斑あり	A9-30
---	---	----------------------------	---	---	----------	-------

SK-25

1	甕	◎ (15.4)		①1~2mmの砂粒を含む ②不良 ③(外) 淡橙褐色 (内) 乳褐色		A11-40
2	甕		(外) 体部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。頸部指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色、褐色	煤付着	A11-51
3	高杯		(外) 上半ヨコナデ、底部ハケ目、指頭圧痕。(内) 風化不明。暗文痕。	①1~2mm前後の砂粒を多く含む 3mm大の砂粒有 ②不良 ③淡褐色	赤彩 煤付着 黒斑あり	A11-40
4	高杯	◎ (23.9)	(外) ヨコナデ。(内) 剥落、ハケ目痕。赤彩後の暗文痕。	①3~4mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A11-40

SK-26

1	高杯	◎ (15.4)	(外) 下半ハケ目後上半ヨコナデ。(内) ヨコナデ。底部ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	赤彩	A12-6
---	----	----------	---------------------------------	--	----	-------

SK-27

1	壺	◎ 29.5 △ 49.4	(外) 頸肩部縦ハケ目後肩部に工具幅8cm強の断続的な横ハケ目を2段に施す。胴部は不定方向のハケ目、底部縦ハケ目。(内) 口縁部は肩部外面と同様なハケ目。頸部ハケ目。肩部強い指ナデ。以下ハケ目。	①3mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外) 橙色(内) 淡褐色	煤付着 黒斑あり	B11-17
2	壺	◎ 10.2 △ 16.7	(外) 体部ハケ目後下半弱いナデ。(内) 頸部ナデ、ハケ目痕、指頭圧痕。体部ヘラ削り後上半ナデ。底部に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外) 褐色(内) 暗褐色	煤付着 黒斑あり	B11-50
3	壺	◎ 10.0 △ 14.7 ☆ 15.9	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。(内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り、指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	完形 赤彩 煤付着 靱痕あり	B11-61
4	甕	◎ (12.7)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 黄褐色	煤付着	B11-14
5	甕	◎ 14.8 △ (20.8)	(外) 肩部に叩き目後体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り、肩部に指頭圧痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②不良 ③乳黄褐色	煤、炭化物付着	B11-23

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
6	甕	◎ (14.4)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③明褐色	煤付着	B11-33
7	甕	◎ 16.0	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤付着	B11-11
8	甕	◎ 14.3 △ (23.8)	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③(外)淡褐色(内)灰褐色	煤付着	B11-24
9	甕	◎ (15.8)	(外) 体部ハケ目後頸部ヨコナデ。(内) 口縁部ハケ目痕、肩部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③黒褐色		B11-55
10	甕	◎ 15.0 △ 24.4 ☆ 27.0	(外) 体部ハケ目後頸部ヨコナデ。底部ナデ。(内) 頸部ハケ目後ナデ、体部強いヘラ削り、底部ナデ。体部下半に指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	完形 煤多く付着	B11-24
11	甕	◎ (16.4)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡灰褐色		B11-21
12	甕	◎ 14.0	(内) 口頸部ハケ目上半ヨコナデ、下半部分的なナデ。肩部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)橙褐色(内)褐色	煤付着	B11-149
13	甕	◎ 12.8	(外) 肩部ハケ目後頸部ヨコナデ。(内) 口頸部にハケ目痕、肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)淡褐色(内)灰褐色	黒斑あり	B11-12
14	甕	◎ 12.2	(外) 肩部ナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B11-11
15	底部		(外) ハケ目。(内) ヘラ削り。底部ナデ。指頭圧痕、工具痕。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③灰褐色	煤多く付着	B11-47
16	高杯	◎ 15.5	(内外) ナデ後上半ヨコナデ。外面ハケ目痕、指頭圧痕。赤彩後の放射状暗文2段。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	赤彩	B11-39
17	高杯	◎ (14.9)	(外) ハケ目後上半ヨコナデ。(内) 不明。赤彩後の暗文痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡黄褐色	赤彩 煤付着	B11-29
18	高杯	◎ (15.0) ○ 9.2 ☆ (12.6)	(外) 杯部ハケ目後上半ヨコナデ。脚部上半ヘラ磨き、下半ナデ。脚端面ナデ。接合部ハケ目後1条の沈線。(内) 杯部ナデ。底部剝落。脚部上半ナデ、指頭圧痕。下半ハケ目。赤彩後の放射状暗文。	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	赤彩 煤付着	B11-12
19	高杯	○ 9.0	(外) 杯部ナデ。脚部上半ヘラ磨き。下半ナデ後裾部ヨコナデ。接合部ハケ目後工具による1条の沈線。(内) 杯部不明。脚部上半ナデ、絞り目。下半ハケ目、指頭圧痕。赤彩後の放射状暗文2段。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	赤彩	B11-128
20	高杯	◎ (20.0)	(外) ハケ目後上半ヨコナデ。(内) ハケ目痕。赤彩後の放射状暗文。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰褐色	赤彩 煤付着	B11-49
21	高杯	◎ 15.5	(内外) ナデ。 (外) 接合部ハケ目後工具による1条の沈線。指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	B11-39

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
22	高杯	◎ (15.8)	(内外) ナデ。 (外) 接合部にハケ目。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	B11-80
23	高杯	○ (12.8)	(外) 上半ヘラ磨き後ナデ。下半ナデ。脚 端面ヘラ削り。接合部に1条の工具による 沈線。(内) 上半絞り目、下半ハケ目後ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③橙褐色	赤彩	B11-39
24	高杯	○ 9.8	(外) 上半ヘラ磨き後脚裾部ナデ。脚端面 ヘラ削り後ナデ。(内) ナデ、ハケ目痕。 絞り目。	①2mm以下の砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	赤彩	B11-62
25	椀	◎ 13.2 ☆ 5.7	(内外) 体部ナデ後上半ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③ 淡橙褐色	赤彩?	B11-27
26	底板	L 47.0 W 35.5 T 1.1	ほぼ完存。中心に3対の方形孔。外周に12ヶ の柄穴。4隅を丸く加工。周縁部端面を面 取り。		片面に焼け焦げ痕	B11-129
27	串状木 製品	L 56.5 W 2.1 T 1.0	完存。全体を串状に加工する。一端はわず かに有頭状を呈し、もう一端は両側面から 削り尖らせる。			B11-119
28	串状木 製品	L 56.4 W 1.6 T 0.9	完存。一端はわずかに有頭状を呈し、一端 は両側面から削り尖らせる。全体を串状に 加工する。			B11-118
29	串状木 製品	L (32.7) W 1.9 T 1.0	先端を片側面から削り尖らせる。			B11-115
30	串状木 製品	L (34.0) W 1.2 T 0.9	先端を削り尖らせる。			B11-117
31	串状木 製品	L (4.9) W 0.8 T 0.8	有頭状を呈す。			B11-117
32	串状木 製品	L (19.1) W 1.1 T 0.7	有頭状を呈す。			B11-117
33		L (71.7) W 3.4 T 1.7	先端を4面から削り尖らす。			B11-140
34		L 26.3 W 11.0 T 2.8	一面に削痕が顕著にみられる板材。			B11-77
35		L 9.0 W 6.0 T 4.4	一端を丸く加工。			B11-134

SK-29

1	甕	◎ (19.5)	(内) 剥落不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)褐色(内)淡 褐色		A8-54
---	---	----------	-----------	--------------------------------------	--	-------

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
2	甕	◎ 〈13.8〉	(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内) 淡乳褐色	小片 黒斑あり	A8-41
3	高杯		(外) 稜以上ヨコナデ、以下一部ハケ目後ナデ。(内) ハケ目後ナデ。 赤彩後の放射状暗文。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③橙褐色	赤彩 黒斑あり	A8-56

SK-30

1	甕	◎ 〈16.8〉	(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③乳褐色		A8-25
2	高杯	◎ 〈26.6〉	(外) ハケ目後上半ヨコナデ。(内) ヘラ磨き、ハケ目痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	炭化物付着 黒斑あり	A8-25
3	高杯	◎ 〈12.0〉	(外) ヘラ磨き。接合部ハケ目痕、指頭圧痕。(内) ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③乳黄褐色	赤彩 黒斑あり	A8-25
4	器台		(外) ヨコナデ。(内) 受部ヘラ磨き、接合部ナデ、脚台部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②不良 ③淡黄褐色		A8-21
5	器台	○ 〈21.7〉	(外) ヨコナデ。(内) ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③(外)淡褐色 (内)橙褐色		A8-25

SK-31

1	甕	◎ 〈20.8〉	(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③(外)淡乳褐色 (内)淡橙褐色	黒斑あり	A8-12
2	甕	◎ 〈14.2〉	(外) 体部剝落不明、ハケ目痕。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)乳褐色 (内)暗灰色		A8-14
3	甕	◎ 〈18.8〉		①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)褐色(内) 淡褐色	煤付着	A8-152
4	甕	◎ 〈18.2〉		①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	黒斑あり	A8-151
5	低脚杯		(外) ハケ目後上半ヘラ磨き、下半ナデ。 (内) 杯部ヘラ磨き、脚部ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色		A8-11
6	低脚杯	○ 4.8	(内外) ナデ後ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色～淡橙褐色	黒斑あり	A8-13
7	器台	◎ 〈25.5〉	(外) ヨコナデ。(内) 剝落。受部にヘラ磨き痕。脚台部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む 6mm大の砂粒有 ②やや不良 ③淡橙褐色	煤付着	A8-16

SK-32

1	甕	◎ 〈23.6〉	(外) 口縁部に14条の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③(外)淡橙褐色(内)淡橙褐色		A9-44
---	---	----------	------------------------------	---	--	-------

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
2	甕	◎ (18.1)	(外) 体部ハケ目ナデ。(内) 体部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A9-42
3	甕	◎ (13.6)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む 2mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色		A9-49
4	(底部)		(外) ハケ目。(内) ヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	A9-49
5	高杯	◎ (24.7)	(内外) ハケ目後ヘラ磨き。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③(外)乳褐色(内)淡 褐色		A9-41
6	高杯	○ 11.9	(外) ハケ目後ヘラ磨き。(内) 上半ナデ、指頭圧痕。下半ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡乳褐色	黒斑あり	A9-41
7	高杯		(内外) 風化著しい。脚部内面ナデ、絞り目。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③橙色～赤褐色		A9-43
8	低脚杯	○ 6.6	杯部不明。脚部(内外) ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A9-42
9	器台	◎ (19.8)	(外) ヨコナデ。(内) ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	黒斑あり	A9-49
10	蓋	つまみ径4.3 ◎ (12.8) ☆ (5.3)	(外) つまみ部指成形後ナデ。天井部にヘラ削り痕。(内) 天井部ヘラ削り。口縁部(内外) ヨコナデ。	①1～2mmの砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	つまみ歪 黒斑あり	A9-46

SK-33

1	壺	◎ (11.5)	(外) 肩部ハケ目痕。(内) 肩部ヘラ削り。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色		A8-130
2	甕	◎ (14.4)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A8-115
3	甕	◎ (12.4)	(外) 体部ハケ目。一部剥落。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内) 褐色	炭化物付着	A8-130
4	甕	◎ (15.6)	(外) 剥落。肩部に波状文痕。(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A8-147
5	甕	◎ (15.6)	(外) 体部薄いハケ目後肩部に8条の波状文。(内) 体部丁寧なナデ。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②不良 ③(外)淡褐色(内) 暗灰色		A8-112
6	甕	◎ (18.8)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A8-114
7	甕	◎ (15.8)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外)乳褐色(内) 淡灰褐色		A8-145
8	甕	◎ (14.4)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A8-119
9	甕	◎ 15.8 △ 24.6	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。肩部に7条の波状文。(内) 体部丁寧なヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A8-114

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
10	甕	◎ (17.5)	(外) 体部ハケ目後一部ナデ。(内) 体部ヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③乳褐色～淡褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A 8-128
11	高杯	◎ (12.8)	(外) ハケ目後口縁部ヨコナデ。(内) ヘラ磨き。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 褐色(内) 乳褐色	煤付着	A 8-129
12	高杯	◎ <20.8>	(内外) ハケ目後上半ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色、暗灰色		A 8-130
13	高杯	○ (17.8)	(外) ヘラ磨き。ハケ目痕。脚端面剥落。(内) 上半剥落。下半ハケ目。中位に径約1cmの円孔を3方向に外から穿つ。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	黒斑あり	A 8-140
14	高杯	○ 14.2	(外) ハケ目後ヘラ磨き。(内) 上半ヘラ削り、下半ナデ後ハケ目。脚端面ヨコナデ。指頭圧痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳橙褐色		A 8-136
15	高杯	○ <14.4>	(外) ハケ目後脚裾部ヘラ磨き。脚端面ナデ。(内) 上半ヘラ削り。下半ハケ目後ナデ、指頭圧痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡橙褐色(内) 乳褐色	黒斑あり	A 8-148
16	低脚杯	◎ (20.5) ○ 7.2 ☆ (6.4)	(内外) 剥落。(外) 接合部ヘラ磨き痕。(内) 杯部ヘラ磨き痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳橙褐色		A 8-110
17	低脚杯	◎ 14.0	杯部(外)ハケ目後ヘラ磨き。(内)剥落不明。脚部(内外)ヨコナデ。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A 8-137
18	低脚杯		(外) 杯部ハケ目後ヘラ磨き。以下剥落不明。(内) 杯部ヘラ磨き、ハケ目痕。脚部ヨコナデ。	①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外) 乳褐色(内) 淡褐色		A 8-145
19	器台	◎ <20.6>	(外) ヨコナデ。(内) 受部剥落不明。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③(外) 橙褐色(内) 淡褐色		A 8-120
20	器台	◎ 21.2	(外) 強いヨコナデ。(内) 受部、接合部ヘラ磨き。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色、淡橙褐色	煤付着	A 8-117
21	器台	◎ 17.5	(外) ヨコナデ。(内) 受部、接合部ヘラ磨き。以下ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③黄褐色		A 8-121
22	器台		(外) ヨコナデ。(内) 受部、接合部ヘラ磨き。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		A 8-130
23	蓋	◎ (5.4) ☆ (2.5)	(内外) ナデ。天井部欠失するが円孔の痕跡1を観察。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A 8-148
24	砥石	L 15.2 W 10.2 T 5.0	使用痕2面。両面に多方向の研ぎ筋が入り磨耗して極端に凹むところがある。使用頻度が高い。		(1.3) kg 安山岩	A 8-146

SK-34

1	壺	◎ <18.8>	(内) 頸部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 灰褐色		A 8-159
2	甕	◎ <13.8>	(外) 肩部に刺突文か。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色		A 8-157

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
3	甕	◎ (17.5)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A 8-157
4	甕	◎ 15.6	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	A 8-158
5	甕		(外) 肩部に10条の波状文。その下に単位不明の波状文。 (内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A 8-165
6	高杯	◎ (27.8)	(内外) ヘラ磨き。	①2mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色		A 8-163
7	器台	○ (22.8)	(外) ヘラ磨き。(内) 不明。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡橙色		A 8-167

SK-35

1	甕	◎ (15.7)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	煤付着	B 8-62
2	甕	◎ (16.5)	風化により不明。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	煤付着	B 8-61
3	高杯	○ 8.1	(外) ヘラ磨き後接合部ハケ目。 (内) 脚柱部ヘラ削り。脚裾部指ナデ、ハケ目痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③(外) 淡褐色 (内) 暗褐色	黒斑あり	B 8-60

SK-36

1	壺	◎ (14.6)		①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	B 8-92
2	高杯		(内外) ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③淡乳橙色		B 8-72

SK-37

1	高杯	○ (15.6)	(内外) ハケ目後ナデ。脚端面ヨコナデ。 %残存部に径約8mmの円孔1を観察。外から穿つ。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡橙色	赤彩	B 9-4
---	----	----------	--	--------------------------	----	-------

SK-38

1	甕	◎ (22.3)		①1mm前後の均一な砂粒を多く含む ②不良 ③乳褐色	小片	A 9-39
2	高杯		(外) ハケ目後下半ナデ、指頭圧痕。 (内) ヘラ磨き。	①2~3mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色		A 9-36

SK-43

1	高杯?	◎ (22.7)	(外) ヨコナデ。(内) 縦後横ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色	煤付着	B10-12
---	-----	----------	-----------------------	-------------------------------------	-----	--------

SK-44

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	低脚杯 ?	◎ (19.5)	(外) ハケ目後上半ヨコナデ。(内) 不明。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	煤付着	B11-157

SK-45

1	甕	◎ (15.5)	(外) 指頭圧痕。	① 5mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)褐色(内)淡褐色	煤付着	B11-58
---	---	----------	-----------	-------------------------------	-----	--------

SK-47

1	甕	◎ (18.2)	(外) 肩部に2条以上の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)淡褐色(内)灰色	煤付着	B11-165
2	低脚杯	◎ (14.4)	(外) ハケ目後上下部ヨコナデ。(内) 剥落すすむ。ヘラ磨き痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩?	B11-164

SK-48

1	甕	◎ (17.0)	(内) 頸部にハケ目痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色		B8-68
2	高杯	◎ (27.0)	(外) 杯部ハケ目後ヘラ磨き。上半にヘラ状工具による雑な刺突文。脚柱部ヘラ磨き後接合部強いハケ目。(内) 杯部縦後上半部横ヘラ磨き。口縁部にハケ目痕。脚柱部絞り目。	① 1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	B8-66
3	低脚杯	◎ (19.5)	(外) 杯部ハケ目後ヨコナデ。脚部ヨコナデ。(内) 杯部剥落、ヘラ磨き痕。脚部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色		B8-64

SK-49

1	甕	◎ (14.8)	(外) 口縁部に6条の波状文。頸部ハケ目。(内) 頸部ヘラ削り後一部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤付着	B8-71
---	---	----------	---------------------------------------	-----------------------------------	-----	-------

SK-52

1	壺	◎ (17.1)	(外) 口縁部12条の平行沈線、下部部に1条の深い沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		B9-27
2	甕	◎ (16.5)	(外) 口縁部に4条の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1~2mmの砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤付着	B9-29
3	甕	◎ (18.2)	(外) 口縁部に6条の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	小片 煤、炭化物付着	B9-26
4	甕	◎ (13.2)	(外) 口縁部に11条以上の平行沈線後上下端部ヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ磨き後上下部ヨコナデ。肩部ヘラ削り。	① 1.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	B9-33
5	甕	◎ (16.4)	(外) 肩部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)淡褐色(内)淡灰褐色	煤付着	B9-33
6	甕	◎ (17.7)	(内) 口縁部にヨコナデ時の3条の平行沈線。肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③炭褐色	煤付着	B9-34

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
7	甕	◎ (14.3)	(外) 肩部ヨコナデ後8条の平行沈線。以下ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	B 9-29
8	甕	◎ (14.3)	直線的に開く、くの字口縁をもつ。 (外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1~2mmの砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③淡橙褐色		B 9-33
9	甕	◎ 15.7	尖り気味の底部にわずかな面をもつ。 (外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ。後9条の平行沈線、下段に原体不明の連続刺突文。 (内) 体部ヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	① 1~2mmの砂粒を多く含む ②不良 ③橙色	煤、炭化物付着	B 9-41
10	甕	◎ 13.0 △ 18.2 ☆ (20.1)	直立する口縁部をもち器厚が均等化した異種の甕。(外) 口縁部13~14条の浅く細かい平行沈線。肩部ヨコナデ後10~11条の平行沈線。以下ナデ、底部にハケ目痕。(内) 体部ヘラ削りを施すが上半は丁寧な調整。胴部以下に指頭圧痕。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡乳褐色	煤多く付着	B 9-26
11	(底部)	○ 12.9	(外) 丁寧なナデ。(内) ヘラ削り後ナデ。	① 3~5mmの砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	B 9-31
12	(胴部)		(外) 上段に4条、下段に3条の平行沈線の後中央に径6mmの2重圏スタンプ文。以下ヘラ描文? (内) ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)褐色(内)淡褐色	小片 煤付着	B 9-33
13	(胴部)		(外) ヘラ描連続文を2段に施した後、中央に3条の沈線を1段ずつ施す。(内) ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	小片 煤付着	B 9-33

SK-53

1	甕	◎ <20.0>	(外) 口縁部10条の平行沈線後上下部ヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ磨き後上、中部ヨコナデ。肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③乳褐色	黒斑あり	B 9-24
2	甕	◎ <18.4>	(外) 肩部に9条の平行沈線を施した後、上段にハケ目工具による連続刺突文。(内) 剥落、ヘラ削り痕。	① 1~2mmの砂粒を含む ②良 ③(外)淡灰色(内)乳灰色		B 9-24

SK-56

1	甕	◎ <17.5>	(外) 口縁部貝工具による8~9条の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)褐色(内)淡褐色	煤付着	A 9-72
2	甕	◎ <16.4>	(外) 口縁部平行沈線後一部ヨコナデ、13条が残る。(内) 口縁部ヘラ磨き痕。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)淡灰褐色(内)褐色	煤付着	A 9-69
3	甕	◎ 13.6	(外) 口縁部平行沈線後ヨコナデか。(内) 頸部ヘラ磨き。肩部ヘラ削り。	① 1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	煤付着	A 9-69
4	器台	◎ (21.5) ○ <17.0> ☆ <15.3>	(外) 受部上半ヘラ磨き。下半は稜上位に6条の平行沈線を施した後径約9mmの3重圏のスタンプ文。接合部ナデ後上下端部稜に沿ったヨコナデ、一部にハケ目痕。脚台部上半は5条の平行沈線、同スタンプ文を施す。下半不明。(内) 受部ヘラ磨き、接合部不明、以下ヘラ削り後ハケ目。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A 9-69

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
5	(胴部)	△ 〈15.0〉	(外) 3条の平行沈線を2段に施した後中央に径約9mmの3重圏のスタンプ文。ハケ目痕。(内) ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)暗褐色 (内)淡灰色	小片 煤付着	A9-72
6	(底部)	○ 2.6	(外) 上半ハケ目、下半ヨコナデ。底面ナデ。(内) ヘラ削り。 焼成後外径7mmの円孔を外から穿つ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	5と同一個体? 炭化物付着	A9-69

SK-57

1	甕	◎ 〈19.0〉	(外) 口縁部に8条以上の櫛描平行沈線後上下部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)暗褐色(内)褐色	煤、炭化物付着	B10-11
---	---	----------	---	----------------------------------	---------	--------

SK-58

1	甕	◎ (16.4)	(外) 口縁部平行沈線を2段に施した後下半ヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ磨き後上部ヨコナデ肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B10-78
2	甕	◎ 〈17.0〉	(外) 口縁部18条の平行沈線後上端部ヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ磨き後上端部ヨコナデ、ハケ目痕。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色		B10-78
3	甕	◎ 〈18.0〉	(外) 口縁部18条の平行沈線後上端部ヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ磨き後上端部ヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	B10-76
4	甕	◎ 17.4	(外) 体部縦ハケ目後肩部に9条単位の平行沈線3段。中央は波状となる。(内) 体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着	B10-74
5	甕	◎ 15.8	(外) 肩部不明。(内) 肩部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤付着	B10-75
6	甕	◎ 〈18.0〉		①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡橙赤色		B10-76
7	甕	◎ 〈17.6〉	(内) 肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		B10-61
8	(体部)	○ (2.4)	(外) 体部下半ハケ目後胴部斜位ヘラ磨き、下半は縦ヘラ磨きを疎に施す。底面ナデ。(内) ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色、淡褐色	煤付着 底部不整 円	B10-61
9	(脚部)	○ 〈14.0〉	(外) 脚裾部を縦ヘラ磨き後全体を斜位の細かいヘラ磨き。(内) ヘラ削り後細かいヘラ磨きを上位は密に以下疎に施す。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③暗灰褐色		B10-78

SK-59

1	甕	◎ 〈15.6〉	(外) 口縁部16条の平行沈線後上半ヨコナデ。肩部剥落不明。(内) 口縁部ヘラ磨き後上端部ヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B11-187
2	甕	◎ 〈17.6〉	(外) 肩部2条以上の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	小片 煤付着	B11-187

SK-60

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	壺	◎ 13.4	(外) 口縁部4条の沈線。頸部ハケ目工具による連続刺突文が周回する。以下ハケ目。 (内) 頸部ナデ、指ナデ。以下ヘラ削り。	①4mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A10-23
2	壺	◎ <14.2>	(外) 口縁部5条の平行沈線。(内) 口縁部ヘラ磨き、指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A10-31
3	甕	◎ (10.5)	(内) 口縁部ハケ目後弱いヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①2.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③褐色	煤、炭化物付着	A10-30
4	甕	◎ (16.8)	(外) 口縁部16~17条の平行沈線後上半弱いヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ磨き後屈曲部弱いヨコナデ。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	A10-25
5	甕	◎ 19.5	(外) 口縁部18条の平行沈線後上端部ヨコナデ。(内) 口頸部ヘラ磨き後屈曲部弱いヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A10-23
6	高杯		杯部(内外)ハケ目後ナデ。 脚部(外)ナデ。(内)ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)暗褐色(内)暗灰褐色		A10-27
7	器台	◎ (18.2)	(外)ヨコナデ後ヘラ磨き。(内)ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着 黒斑あり	A10-23

SK-61

1	甕	◎ 22.6	(外) 口縁部6条の浅い平行沈線。体部ヘラ磨き後肩部に原体不明の工具を横に移動させた連続刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡褐色~橙色		A10-73
2	高杯	◎ (12.6)	(内外)下半縦ヘラ磨き後上半横ヘラ磨き。内面にヘラ削り痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③橙色~褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A10-74
3	(脚柱部)		(外)ヘラ磨き。(内)上半ヘラ削り。下半ナデ。	①5mm以下の砂粒を含む ②良 ③乳橙色	赤彩? 黒斑あり	A10-73
4	敲石	L 7.2 W 6.6 T 4.4	一端に敲打痕。		(260)g 輝石安山岩	A10-76

SK-65

1	甕	◎ (16.2)	(外) 胴部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)橙褐色(内)淡灰褐色	煤付着	B11-159
2	(底部)	○ (5.8)	(外) 底部ハケ目。(内) ヘラ削り後底部中央ナデ。	①2mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③(外)暗褐色(内)橙褐色	靨痕あり	B11-160

SK-66

1	壺	◎ <22.0>	(内外) ナデ。後口縁部内面に端部に沿った連続刺突文後斜格子文、下垂する口縁端面に斜格子文をそれぞれ5条単位の櫛状工具により施文する。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤多く付着	B20-26
2	甕	◎ <20.8>	(内外) 体部ハケ目後肩部弱いヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③橙色	小片 煤付着	B20-25

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
3	(底部)	○ (5.3)	(外) 剥落不明。底面ハケ目後外側ナデ。 (内) 剥落、ヘラ削り痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③赤褐色		B20-25

S K - 6 7

1	甕	◎ (16.8)		① 3mm大の砂粒を含む ②やや不良 ③淡乳褐色	煤付着	B21-17
2	甕	◎ (13.3)	(外) 体部ハケ目。(内) ナデ、ハケ目痕。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)褐色 (内)暗灰褐色	煤付着	B21-6
3	(底部)	○ (4.8)	(外) ヘラ磨き後底部ナデ。(内) ヘラ削り。 焼成後外面から穿孔。径約1.5cmの不整円。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)褐色 (内)淡褐色	煤付着	B21-5
4	(底部)	○ (6.0)	(外) ハケ目。底面ナデ。(内) 剥落不明。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③(外)淡褐色(内)暗灰色		B21-4
5	(脚部)	○ (10.0)	(外) ハケ目。(内) ハケ目、ヘラ削り痕。 脚端部 (内外) ナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②や や不良 ③淡褐色	黒斑あり	B21-16

S K - 6 8

1	甕	◎ (19.7)	(外)体部横後縦ハケ目後肩上部ヨコナデ。 (内) 体部弱いハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙色		A21-17
2	甕	◎ (22.5)	(外) 体部ハケ目後肩上部ヨコナデ。(内) 体部不明。	① 1～2mmの砂粒を含む ②やや不良 ③(外)淡橙褐色 (内)乳褐色	煤付着	A21-17
3	甕	◎ (14.8)	(内外) 体部ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A21-13
4	(底部)	○ (8.4)	(外) ヘラ磨き、底面不明。(内) ナデ。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良 ③乳褐色		A21-17

S K - 6 9

1	甕	◎ (15.8) ○ 5.6 △ (16.4) ☆ (22.2)	(外) 体部上半ハケ目。下半剥落不明。底 面ハケ目後ナデ。(内) 体部縦ハケ目後肩 部横ハケ目。底部ナデ、指頭圧痕。	① 2～3mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤、炭化物付着	B21-16
2	甕	◎ (14.4)	(内外) 剥落不明。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②不良 ③淡褐色、橙色	黒斑あり	B21-29
3	甕	◎ 14.2	(外) 頸部に指頭圧痕及び爪痕が連続する。 体部上半叩き目後ハケ目後ヘラ磨き。(内) ナデ後弱いハケ目。肩部に指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B21-27
4	甕	◎ (20.0)	(外) 体部叩き目後ハケ目後肩上部ヨコナ デ。胴部櫛工具による連続刺突文。(内) 口縁部ハケ目痕。体部幅広のハケ目。	① 1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	煤付着	B21-27
5	甕	◎ (31.4)	(外) 体部重複するハケ目。胴部剥落するが 櫛工具による連続刺突文。(内)体部ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙色		B21-26

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
6	甕	◎ (15.7)	(外) 口縁部端面に1条の沈線。頸部、体部ハケ目。(内) 頸部ハケ目痕。体部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色		B21-22
7	甕	◎ (13.1)	(外) 体部叩き目後ハケ目。(内) 体部弱いハケ目後一部横位の工具痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	煤付着	B21-22
8	甕	◎ (10.8)	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ヘラ磨き。体部ハケ目。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	B21-29
9	甕	◎ (22.4)	(外) 剥落不明。(内) 肩部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③褐色	小片 黒斑あり	B21-33
10	甕	◎ (21.0) ○ 6.0	(外) 剥落部多いが体部2種のハケ目。底面ナデ。(内) 体部不明、底部ナデ。	① 2～3mmの砂粒を含む ②不良 ③淡褐色～褐色	煤付着 黒斑あり	B21-28
11	甕	◎ 26.8 ○ 6.8 △ 25.5 ☆ 28.9	(外) 体部上半ハケ目、下半剥落不明。底部ナデ、指ナデ。(内) 体部幅広のハケ目、下半は剥落部分多い。底部ナデ。	① 2～3mmの砂粒を多く含む ②良 ③褐色	煤、炭化物付着	B21-32
12	(底部)	○ 6.4	(外) 体部叩き目後縦ハケ目後底部下位は工具によるナデ。底面ナデ。体部に指頭圧痕。(内) 体部剥落するが外面と同一な2種のハケ目。底部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	B21-22
13	(底部)	○ (5.8)	(外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②不良 ③乳褐色	黒斑あり 底部不 整円	B21-26

SK-70

1	壺	◎ 11.7	全体が風化。(外) 口縁部3条の凹線。頸部指頭圧痕を2段に施した凸帯。(内)不明。	① 1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)淡褐色 (内)橙色		B21-41
2	壺	○ 6.8 △ (24.4)	(外) 体部上半にハケ目条下半ヘラ磨き後底部は右下がりのナデ。胴部ハケ目工具による連続刺突文2段。底面ナデ。(内) 体部上半幅広の縦ハケ目後斜位ハケ目後下半、ヘラ削り。後肩、底部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②不良 ③橙色	黒斑あり	B21-41
3	壺	◎ (15.7)	(内外) ヘラ磨き。	① 2～3mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	赤彩	B21-42
4	甕	◎ (16.5) ○ (4.7) ☆ (28.3)	(外) 体部ハケ目後下半にヘラ磨き。底部に工具幅が残る。底面ヘラ削り痕。(内) 肩部ナデ、指頭圧痕。胴部上半ハケ目後丁寧なナデ、以下ヘラ削り後弱いナデ。底部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤、炭化物付着	B21-45
5	甕	◎ (18.2) ○ 5.4 △ 22.0 ☆ (27.8)	(外) 体部ハケ目後胴部ヘラ磨き。底端部弱いナデ。底面ハケ目後ナデ。(内) 体部ハケ目、上半は丁寧に施す。下半ヘラ削り。底部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③橙色	黒斑あり	B21-23
6	甕	◎ (14.6)	(外) 体部ハケ目。(内) 肩部剥落不明、指頭圧痕。以下弱いハケ目。	① 1mm以下の砂粒を含む 8mm大の砂粒有 ②良 ③褐色	煤付着	B21-42
7	(底部)	○ (6.8)	(外) 底部、底面ハケ目。(内) 上半不明下半ナデ。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)灰 褐色	煤付着 黒斑あり	B21-23

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
8	(脚部)	○ 〈13.6〉	(外) ハケ目後残存部 ¹ / ₁₀ に径約6.5mmの竹管文3が残る。(内) ナデ。脚端部 (内外) ヨコナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③淡乳褐色		B21-44

SK-72

1	甕	◎ 15.1 ○ 7.2 ☆ 15.5	(外) 体部ハケ目。底面ナデ後底端部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り後肩部ナデ後体部 ² / ₅ 下半ハケ目。底部ナデ、指頭圧痕。	① 1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤多く付着 炭化物付着	B21-52
2	甕	◎ (22.6)	(内外) 体部ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③褐色	煤、炭化物付着	B21-56
3	(底部)	○ 5.2	(外) ハケ目後ヘラ磨き。底面ナデ。(内) 上半ヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。上位にハケ目。	① 1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	B21-55
4	(底部)	○ 6.0	(外) ハケ目後ヘラ磨き。底面ハケ目。(内) ナデ、指頭圧痕。底部に焼成後外径1cmの円孔を外から穿つ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)褐色(内)淡褐色	煤付着 黒斑あり	B21-25
5	蓋	○ (12.8) ☆ (5.5)	(外) ハケ目後つまみ部ナデ。(内) 天井部ヘラ削り。下半ナデ。口縁部 (内外) ヨコナデ、指頭圧痕。体部 ¹ / ₄ 残存部に約5mmの円孔 ¹ 。外から穿つ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	炭化物付着 黒斑あり	B21-54

SK-73

1	壺	◎ (16.7)	(外) 口縁部刻み目、指頭圧痕。頸部に4条のヘラ描沈線、下段に工具角による連続刺突文。	① 1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)橙色(内)褐色		B21-7
2	甕	◎ (15.5) △ (16.0)	(外) 体部ハケ目後肩上部弱いヨコナデ。(内) 肩部ナデ。以下ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色~褐色	煤多く付着	B21-15
3	甕	◎ (15.0)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ハケ目。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤、炭化物付着	B21-19
4	甕	◎ (12.9)	(外) 口縁部面に1条の沈線。体部ハケ目後ナデ。(内) 体部ハケ目、指頭圧痕。	① 1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B21-11
5	甕	◎ 〈16.4〉	不明。	①0.5mmの砂粒を含む ②不良 ③淡乳褐色		B21-10
6	(底部)	○ (4.6)	(内外) ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤、炭化物付着	B21-20
7	高杯?		(外) ヘラ磨き。接合部に断面三角形の突帯を貼付後ヨコナデ。(内) ヘラ磨き。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色		B21-20

SK-74

1	甕	◎ 〈32.1〉	(内外) ナデ。下垂する口縁下端部に刻み目。	① 1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	小片 煤付着	A21-12
2	壺	◎ 〈11.8〉		① 1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		A21-12

SK-77

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	甕	◎〈24.8〉	(外) 体部ハケ目後肩部に原体不明の工具による連続刺突文。(内) 体部剥落不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)淡橙色(内)淡褐色		A21-10
2	(底部)	○〈6.5〉	(外) ハケ目。底面ナデ。(内) ヘラ削り。	①1mmの砂粒を含む ②良 ③(外)淡橙褐色(内)暗灰色		A21-7

SK-81

1	甕	◎ (16.9)	(外) 体部鋭利なハケ目。(内) 体部ハケ目、指頭圧痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着	A21-19
2	甕	◎ (15.0)	(外) 体部斜位ハケ目後縦ハケ目。(内) 体部ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤多く付着	A21-19
3	甕	◎ (13.0)	(外) 体部ハケ目後胴部ヘラ磨き。(内) 体部ハケ目後一部ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤多く付着	A21-19
4	(底部)	○ (8.7)	(外) ハケ目後一部ヘラ磨き。底部ナデ。(内) 強いハケ目。底部中央ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	赤彩	A21-19
5	高杯?	◎〈15.4〉	(外) 体部ハケ目後5条の凹線。(内) 体部ナデ、ハケ目痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	小片	A21-19

SK-82

1	甕	◎〈16.9〉	(外) 体部叩き目後ハケ目。(内) 体部弱いハケ目。指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	煤、炭化物付着	A22-30
2	(底部)	○ (6.0)	(外) ヘラ磨き後底部ナデ。(内) ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡橙褐色 (内)淡褐色	煤付着	A22-21
3	(底部)	○ (4.9)	(外) ナデ後ヘラ磨き?底面ハケ目後ナデ。(内) 不明。	①1mmの砂粒を多く含む ②良 ③(外)暗褐色(内)淡橙褐色	煤、炭化物付着	A22-8
4	(底部)	○ (6.2)	(外) 縦後横ヘラ磨き。底面不明。(内) 不明。	①1～2mmの砂粒を含む ②やや不良 ③灰褐色	黒斑あり	A22-23
5	(底部)	○ (5.2)	(外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内)褐色	煤、炭化物付着	A22-8

SK-83

1	甕	◎ (17.8) ○ (7.8) △ (30.6) ☆ (34.8)	(外) 口縁端面に2条の凹線。体部上半ハケ目後下半ヘラ磨き後底部ナデ。胴部中位は剥落するが幅広いハケ目?も観察。肩部にハケ目工具による連続刺突文2段。(内) 体部ハケ目後下半ヘラ削り。底部中央ナデ。	①mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③褐色	煤多く付着 黒斑あり	A22-35
2	甕	◎ (15.4) △ 19.0 ☆ (26.5)	(外) 体部ハケ目後底部ナデ。(内) 体部丁寧なナデ。一部ハケ目痕。	①1mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良 ③ 橙褐色, 褐色	煤付着 炭化物多く付着 黒斑あり	A22-42
3	甕	◎ 16.1 △ 20.4 ☆ 27.1	(外) 体部上半叩き目後ハケ目後下半ヘラ磨き。底面ナデ。(内) 体部弱いハケ目後底部ヘラ削り後一部ナデ。指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	ほぼ完形 煤, 炭化物付着 黒斑あり	A22-42

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △ 最大胴径 ☆ 器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
4	甕	◎ 〈14.6〉	(外) 体部斜位ハケ目?後縦ハケ目。(内) 体部ハケ目。	①1mmの砂粒を多く含む ②良 ③褐色	煤付着	A22-36
5	甕	◎ 〈14.6〉	(外) 体部ナデ。(内) 肩部ナデ。以下不明ヘラ削り?	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	煤付着	A22-45
6	甕	◎ 〈20.0〉	(内外) ハケ目。	①1mmの砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	小片 煤付着	A22-34
7	石鏃	L 3.45 W 1.9 T 0.35	平面三角形で基部が直線的な無茎鏃。一面は剝片、もう一面は鑄をもつ。周縁部は両面加工。断面は三角形形状。尖端部でわずかに反る。		完存 2.5g 珪質頁岩?	A22-44

SK-84

1	壺	◎ (10.0)	(外)口縁端部にハケ状工具による刻み目。体部ハケ目後肩部に口縁部と同一工具による連続刺突文。上段に4条の凹線を施す。(内) 体部ナデ後肩部ヘラ磨き。残存部 $\frac{1}{2}$ に径2mmの通し穴。外から穿つ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)乳褐色(内)淡灰褐色		A22-55
2	甕	◎ 〈19.0〉	(外) 体部叩き目後ハケ目。(内) 体部丁寧なナデ、ハケ目痕。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着 炭化物付着 黒斑あり	A22-56

SK-86

1	甕	◎ 〈20.5〉		①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	小片 煤付着	A23-4
2	(底部)	○ 4.5	(外) ハケ目後ナデ。底面爪痕? (内) ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)褐色(内)乳褐色	黒斑あり	A23-4

SK-88

1	壺	◎ (16.8)	(外) 口縁端面に3条の凹線。頸部強い指ナデ後上半ヨコナデ、ハケ目痕。(内) 頸部上半指ナデ、指頭圧痕。下半ハケ目。	①1~2mmの砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色、灰褐色		B25-5
2	壺	○ 9.8 △ 32.0 ☆ 41.2	(外) 全体が剝落部多く器表が凸凹する。体部下半で帯状に器表が残る。頸部2条以上の凹線。体部上半ハケ目。下半ヘラ磨き、ハケ目痕。底面不明。(内) 体部上半ハケ目後肩上部ナデ。以下剝落部多いがヘラ削り。底部中央ナデ。	①4~6mmの砂粒を多く含む ②不良 ③赤橙褐色	炭化物付着 黒斑あり	B25-6
3	壺	◎ 13.9 ○ 7.6 △ 27.1 ☆ 33.5	(外) 口縁端面に3条の凹線後下端部にハケ状工具による刻み目。体部上半斜位ハケ目後縦ハケ目、下半ヘラ磨き。胴部にハケ目工具による連続刺突文2段。底面丁寧なナデ。(内) 口縁部1条の凹線。体部 $\frac{3}{4}$ 上半ハケ目後 $\frac{1}{4}$ 下半ヘラ削り。底部中央指ナデ。全体に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色	赤彩? 煤多く付着 炭化物付着	B25-9
4	甕	◎ (14.9)	(外) 口縁端面に1条の沈線後下部刻み目。体部上半ハケ目後ヘラ磨き。(内) 肩部ナデ。以下ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③橙色、淡橙褐色	煤多く付着 炭化物付着	B25-5
5	甕	◎ 〈18.8〉	(外) 体部ハケ目。(内) 肩部ヨコナデ、工具痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	小片 煤多く付着 炭化物付着	B26-14

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
6	(底部)	○ (5.8)	(外) ハケ目後ヘラ磨き後底部ナデ。底面ヘラ磨き。(内) ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	煤, 炭化物付着	B26-9
7	(底部)	○ 7.6	(外) 不明。剥落し器表が凸凹する。(内)ヘラ削り。底部ナデ、指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む 6mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤, 炭化物付着	B25-10
8	器台	◎ 14.5 ○ 13.7 ☆ 14.1	(外) 下垂する口縁端面に4条、下端面に1条の凹線後上端部1段、下端部に2段の刻み目。筒部はハケ目後8条の凹線、屈曲部強いヨコナデ。脚裾部3条の凹線。(内)口縁部に1条の凹線。筒部ナデ、指ナデ後口縁部・脚裾部ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③褐色	赤彩 黒斑あり 口縁部精円	B25-1
9	砥石	L (3.2) W 4.7 T 2.5	使用痕4面。使用頻度が高いいずれも凹面となる。		(55)g 砂岩	B25-10

SK-89

1	壺	◎ (8.8) △ (14.0)	逆U字形の把手付と思われる。 (外) 頸部に4条の凹線。体部ハケ目後把手接合。(内) 体部 $\frac{2}{3}$ 上半ハケ目。以下ヘラ削り後ヘラ磨き。肩部指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②やや不良 ③(外)褐色(内)淡灰褐色	黒斑あり	B26-11
2	甕	◎ (25.7)	(外) 口縁端面に2条の凹線後ヘラ工具による刻み目。(内) 口縁部ハケ目痕?	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	小片	B26-6
3	甕	◎ (14.3) ○ 4.6 △ (19.0) ☆ (26.2)	(外) 口縁端面にヘラ工具による刻み目1段。肩部不明。体部細い幅の丁寧なヘラ磨き。下半部は磨減部分が多くみられる。底面ナデ。(内) 体部上半丁寧なナデ、ハケ目痕。後下半丁寧なヘラ削り。底部中央炭化物により不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着 炭化物付着	B26-8
4	甕	◎ 12.6 ○ 6.2 △ 22.6 ☆ (31.2)	(外) 口縁端面に3条の凹線。体部上半横~斜位のハケ目後縦ハケ目後下半ヘラ磨き。底面ナデ。(内) 体部 $\frac{2}{3}$ 上半ハケ目後弱いナデ、後 $\frac{1}{3}$ 下半丁寧なヘラ削り。底部中央ナデ。	①4mm以下の砂粒を含む ②良 ③橙色	煤, 炭化物付着	B26-9 B25-8
5	(底部)	○ 4.6	(外) ナデ。(内) 上半ハケ目、下半ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)橙色(内)灰褐色		B26-12
6	(底部)	○ (5.0)	(内外) 風化不明。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)橙褐色 (内)褐色	黒斑あり	B26-13

SK-90

1	壺	◎ (11.7)	(外) 頸部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目。頸部ナデ。指頭圧痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		A26-9
2	壺	◎ 10.6	(外) 口縁端面3条の凹線。頸部に指頭圧痕による凸帯貼付後上下部をヨコナデ。体部ハケ目。(内) 体部ハケ目後ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色~淡灰褐色	炭化物付着 黒斑あり	A26-7
3	壺	○ 7.3 △ 24.8	(外) 頸部3条以上の凹線。体部上半ハケ目後下半ヘラ磨き後底部ナデ。胴部にハケ目工具による連続刺突文。(内) 体部ハケ目後頸肩部ナデ、指頭圧痕。底部ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②不良 ③褐色	煤多く付着 炭化物付着 黒斑あり	A26-8

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
4	甕	◎ (17.6)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部縦ハケ目後斜位ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③ 灰褐色	黒斑あり	A26-12
5	甕	◎ (13.2)	(外) 口縁端面ハケ状工具による刻み目。体部ハケ目。(内) 体部ハケ目後ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③ 灰褐色	煤多く付着	A26-16
6	甕	◎ (14.0)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部縦ハケ目後斜位ハケ目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③ 褐色	煤多く付着 炭化物付着	A26-3
7	甕	◎ 14.3 △ (21.6)	(外)口縁端面ハケ目状工具による刻み目。体部ハケ目後ヘラ磨き後ハケ目工具による連続刺突文。 (内) 体部縦ハケ目後斜位ハケ目。成形時の指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②不良 ③ 淡褐色～褐色	煤多く付着 炭化物付着 黒斑あり	A26-8
8	甕	◎ (14.3)	(外) 肩部丁寧なナデ。以下剥離。 (内)体部縦ハケ目肩部ナデ後斜位ハケ目。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③ (外) 淡橙褐色 (内) 褐色	煤多く付着	A26-14
9	甕	◎ 13.4 △ 18.6 ☆ 24.3	(外) 体部上半ハケ目後下半ヘラ磨き。底部ナデ。 (内) 体部ハケ目後ナデ、下半は丁寧なナデ。成形時の指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③ (外) 褐色 (内) 淡褐色	ほぼ完形 煤多く付着 炭化物付着	A26-19
10	甕	◎ (15.1) ○ (5.6) △ (18.7) ☆ (22.5)	(外) 体部 $\frac{1}{2}$ 上半に0.3mm厚の煤付着し不明瞭であるが連続刺突文が残る。以下ヘラ磨き後底部ナデ。 (内) 体部上半丁寧なナデ。下半ヘラ削り後底部中央ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③ 褐色	煤多く付着 炭化物付着	A26-19
11	甕	◎ (15.3)	(外) 体部斜位ハケ目後縦ハケ目。 (内) 外面の斜位ハケ目と同一工具によるハケ目後ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③ (外) 淡橙色 (内) 淡灰褐色	煤付着 黒斑あり	A26-10
12	(底部)	○ (4.9)	(外) ヘラ磨き。底部ナデ。(内) ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③ 灰褐色	黒斑あり	A26-8
13	(底部)	○ (7.4)	(外) ヘラ磨き後底部ナデ。(内) ナデ。	① 1mmの砂粒を含む 2mm大の砂粒有 ③ 淡灰褐色	煤付着 黒斑あり	A26-9
14	(底部)	○ (5.8)	(外) ヘラ磨き。底部ナデ。(内) ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③ 褐色	煤, 炭化物付着	A26-20
15	(底部)	○ (5.4)	(外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③ 褐色	煤, 炭化物付着 黒斑あり	A26-10
16	(底部)	○ 5.2	(外) 剥落不明。底面ヘラ磨き。 (内) ヘラ削り後丁寧なナデ。指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③ 褐色	煤, 炭化物付着	A26-8
17	高杯	◎ 14.5	(外) 下垂する口縁端面上半に2条単位の櫛状工具による斜格子文。下半ハケ状工具による連続刺突文後、4浮文を1組として貼付。口縁部は $\frac{1}{2}$ 弱残存し9組がほぼ等間隔に残る復元13組か。浮文径6～8mm。下端面刻み目。杯部ヘラ磨き。接合部縦ハケ目後鋭利な3条の沈線を1段ずつ施し下位には同一工具による鋸歯文。 (内) 杯部強いヘラ磨き後底部ナデ、上位ハケ目痕。脚部不明。口縁部に約2mmの円孔5が等間隔に残る。復元は6孔か。円孔は外から穿つ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③ 褐色	炭化物多く付着 黒斑あり	A26-16

SK-91

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	壺	○〈13.3〉	(外) 頸部ハケ目、下位2条以上の凹線。	①1mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤、炭化物付着	A26-4
2	壺	◎〈10.1〉	(外) 口縁部平端面に3条、側面に2条の凹線。下位にハケ目後ヘラ磨き。(内) 体部ハケ目。	①0.5mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	A26-5
3	甕	◎ (28.3)	(外) 肥厚する口縁端面に3条の凹線後2段に刻み目を施し綾杉文とする。上段はヘラ、下段ハケ目状工具使用。体部ハケ目後ハケ目工具による刺突文を小片部に観察。(内) 体部ハケ目後一部ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③褐色	煤、炭化物付着	A26-4
4	(底部)	◎ (5.8)	(外) ハケ目後ヘラ磨き、後底部ナデ。(内) ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③乳褐色	黒斑あり	A26-5
5	(底部)	○ (5.7)	(外) 強いヘラ磨き、底面ヘラ削り後ナデ。(内) ハケ目後底部ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	炭化物付着 黒斑あり	A26-7
6	(底部)	○ 5.6	(外) 丁寧なヘラ磨き後下位弱いナデ。底面ハケ目。(内) ヘラ削り後ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	A26-7
7	高杯	○〈10.6〉	(外) 強いハケ目。脚裾部強いヨコナデ。(内) 杯部強いハケ目。脚部充填部ナデ、脚部ヨコナデ。絞り目。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色、橙色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A26-7

SD-01

1	樽鉢	◎〈28.4〉	(外) 口縁部に2条の沈線。(内) 口縁部に1条の沈線。体部に9条単位の櫛描目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③赤褐色	小片	B10-14
2	甕	◎〈29.4〉	(内外) 施釉。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③素地-灰色、釉-茶褐色		A10-10
3	甕	◎ (18.6)	(内外) 施釉。	①精緻な胎土 ②良好 ③素地-灰色、釉-暗茶褐色		A10-10
4	磁器碗		外面に淡藍染付後に全面施釉。焼成後高台内側に鉄紅色で子七九と書く。	①精緻な胎土 ②良好 ③素地-白色、釉-透明		A10-6
5	磁器台付皿	◎ (12.0)	内面に淡藍染付後に全面施釉。杯部内面中央部雑な施釉。	①精緻な胎土 ②良好 ③素地-白色、釉-淡乳色		A10-6
6	磁器碗		内外面に淡藍染付後全面施釉。杯部内面には壽の字か。	①精緻な胎土 ②良好 ③素地-白色、釉-乳色		B10-7

SD-02

1	壺	◎〈16.2〉		①2mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	小片	B13-33
2	壺	◎ 5.8 △ 7.8 ☆ 7.0	(内外) 全体をハケ目後口縁部ヨコナデ、肩部ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	完形 黒斑あり	B13-39
3	壺	△ (7.8)	(外) 体部上半ハケ目後下半ナデ。(内) 体部ナデ、指頭圧痕。底部は工具によるヘラ磨き状のナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		B13-36

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
4	甕	◎ (13.9) △ (20.5) ☆ (20.8)	(外) 口縁部ハケ目痕。体部ハケ目後肩部一部ナデ。頸部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目後上半弱いヨコナデ。肩部以下ヘラ削り後底部ナデ。	① 1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	煤、炭化物付着 靨痕あり	B13-42
5	甕	◎ 15.2	(外) 体部ハケ目後ナデ。(内) 体部ヘラ削り後ナデ。指頭圧痕。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)褐色(内)淡褐色	煤付着	B13-33
6	甕	◎ (17.0)	(外) 体部ハケ目後ナデ。(内) 体部ヘラ削り後ナデ。	①1.5mm以下の砂粒を含む 6.5mm以下の砂粒有 ②良好 ③褐色		A13-27
7	甕	◎ (16.8)	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色～淡灰褐色		A13-30
8	高杯	◎ 14.5	杯部(外) 上半ヨコナデ、下半ハケ目、指頭圧痕。(内) 上半ヨコナデ、下半ナデ。脚柱部(外) ヘラ磨き後ナデ。(内) 上半不明、下半絞り目。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A13-37
9	高杯	◎ 14.2	(外) 風化。上半ヨコナデ、下半ハケ目後ナデ。(内) 上半ヨコナデ、下半ナデ。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A13-38
10	須恵器 杯蓋	◎ 15.0 ☆ 4.6	(内外) ヨコナデ。天井部(外) ヘラ切り後粗いナデ。外周にヘラ切り痕。(内) 同心円当て工具痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②不良 ③淡灰色		B13-9
11	須恵器 杯身	◎ (10.6)	(内外) ヨコナデ。(外) 体部 $\frac{1}{2}$ をヘラ削り。底部に工具痕。	① 3mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③暗灰色	ほぼ完形 全体的に磨滅	A13-25
12	須恵器 壺	△ 14.2	(外) 肩部風化。底部叩き目後中央部ナデ後体部カキ目後肩部ナデ。体部下半に指頭圧痕。(内) 体部ヨコナデ後肩、底部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡青灰色		B13-8
13	砥石	L 15.9 W 9.5 T 3.0	使用痕1面。		完存690g 花崗岩質砂岩	A13-47
14	田下駄	L 25.4 W (9.8) T 1.8	先端に向けて徐々に幅を狭め丸くおさまる。方形孔3、円形孔2。		スギ	A13-167
15	匙形 木製品	L (40.1) W 13.7 T 7.3	削り抜いた身の側面形は楔形。把手は胴膨らみとなる。腐朽著しい。			A13-343
16		L (85.4) W 4.0 T 2.5	方形孔がほぼ等間隔に12ヶ所残存。腐朽著しい。			A13-20
17	木 錘	L 19.1 W 9.0 T 5.9	中央部を削り込み両端を円錐形とする。細くなった中央部に使用痕。腐朽著しい。		中央部、うっすらと焦げる	A13-52
18	木 錘	L (6.7) W 7.8 T 6.9	$\frac{1}{2}$ 残存。中央部を削り込み。腐朽著しく亀裂あり。芯持材。			A13-109

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △ 最大胴径 ☆ 器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
19	手網杵	L 約110.0 W 2.1	芯を残して内側を削り断面蒲鋒型とする。内側には焼け焦げ痕が残る。端部は内外から削り薄くなる。		内側がよく焼けているが、全体的に焼け焦げ痕イチイ類似種	A13-64
20	火鑽板	L 54.4 W 3.8 T 1.9	長側辺に11ヶの切欠きを入れ火鑽孔とする。すべて使用されて焼け焦げる。		スギ	B13-52
21	火鑽板	L 39.1 W 4.8 T 1.9	長側辺の双方に8ヶと3ヶのV字状の切欠きを入れ火鑽孔とする。すべて使用されて焼け焦げる。腐朽している。		スギ	A13-93
22	火鑽板	L 45.0 W 3.2 T 1.9	不整形な断面三角の材の一長辺に13ヶのV字の切欠きを入れ、火鑽孔とする。すべて使用。		ヒノキ属の一種	B13-53
23		L 40.5 W 4.5 T 0.5	台形の板材の長辺に2段の刳形を入れる。短辺の上端に楕円状の通し孔2個。			A13-55
24		L 37.1 W 4.5 T 0.7	両端の4隅にL字状の切り欠きを入れ柄とする板材。			A13-1
25		L (30.9) W 3.4 T 1.0	板材。長側辺に沿って交互に5ヶの円孔。腐朽著しい。			A13-85
26		L 30.5 W 2.6 T 1.1	片端は丸く削りもう一端は一辺から削り三角形となる。丸く削った一端寄りに浅い切込みがある。			B13-50
27		L 28.5 W 3.3 T 3.4	一端は脹らみを持って斜めに削る。2ヶ所に溝状の穴?腐朽著しい。			B13-106
28		L (21.7) W 5.8 T 3.6	長方形の柄穴1。腐朽著しい。			B13-54
29		L (14.7) W 5.3 T 4.3	V字状の切削痕。腐朽著しい。			A13-53
30		L 62.0 W 3.2 T 1.4	片端は一方向から斜めに削る。もう一端は両側面からわずかに削る。断面は長方形。			B13-89
31		L (67.8) W 4.4 T 1.2	両端とも、両側面より削り込む。断面はレンズ状を呈す。		両端が焼ける	B13-72
32		L 39.7 W 2.0 T 0.8	両端を両側面から削り尖らせる。		焼け焦げ痕	B13-111
33		L 25.6 W 1.5 T 0.4	薄い板材。一端に両側面から入れた鈍角の抉り。			A13-97

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
34		L 26.0 W 1.7 T 5.0	両端とも、両側面より削り込む。腐朽著しい。			B13-109
35		L (40.2) W 9.5 T 2.6	断面蒲鉾形の板材。方形の柄穴あり。			B13-91
36		L (52.1) W 4.9 T 3.6	一端を楔形に削り出した板材。			A13-69
37		L 18.7 W (12.1) T 1.1	長辺に相対してコの字状の切欠きを入れる。			A13-70

SD-03

1	壺	△ 13.8	(外) 体部ハケ目。下半は煤が厚い。(内) 体部上半ナデ、指頭圧痕、絞り目。下半ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 煤多く付着	B13-173
2	甕	◎ 16.2	(外) 体部ハケ目後肩上部ヨコナデ。(内) 口頸部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 褐色	黒斑あり	A13-293
3	甕	◎ 15.2 △ 25.5 ☆ 27.2	(外) 体部丁寧なハケ目後肩部ヨコナデ。(内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。頸部ナデ、指頭圧痕。体部丁寧なヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	煤、炭化物付着	A13-283
4	甕	◎ 18.3 △ (28.6)	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。(内) 体部ヘラ削り。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡橙褐色	煤、炭化物付着	B13-179
5	甕	◎ 18.2 △ 27.4 ☆ 29.5	(外) 体部に2種のハケ目後底部ナデ後肩上部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り後底部ナデ後体部に疎なハケ目。底部に指頭圧痕。	① 2mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③灰褐色	煤、炭化物付着 靨痕あり	A13-283
6	甕	◎ 15.5 △ 23.5 ☆ 23.6	(外) 体部2種のハケ目後肩、底部ナデ。(内) 頸部ハケ目痕。体部ヘラ削り後ナデ後体部下半弱いハケ目。底部に指頭圧痕。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 3~4mm大の砂粒有 ②やや不良 ③赤褐色~褐色	煤、炭化物付着	A13-288
7	甕	◎ 14.9 △ 22.2	(外) 体部ハケ目後完存する肩部に原体不明の刺突文3。(内) 肩部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	① 1.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	煤多く付着 炭化物付着	A13-299
8	甕	◎ (16.0)	(内) 口縁部ハケ目後弱いヨコナデ。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A13-295
9	甕	◎ (13.3)	(外) 体部ハケ目後ナデ。(内) 頸部ハケ目後痕。体部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 淡橙褐色		A13-340
10	甕	◎ (14.2)	(外) 不明。(内) 体部ヘラ削り。	① 0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 淡灰褐色		A13-340
11	(底部)		(外) ハケ目。鋭利なヘラ状工具痕。(内) ヘラ削り後底部指頭圧痕。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外) 褐色(内) 暗褐色	煤付着	A13-301

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
12	高杯	◎ 18.0 ○ 10.0 ☆ 13.6	杯部(外)ヨコナデ。底部ナデ。(内)上半ヨコナデ、下半ナデ。 脚部(外)ヘラ磨き後下半ナデ。(内)上位不明、中位ナデ。上半に絞り目。下半指成形後ハケ目。脚端部ナデ。 外面及び脚内面に指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	ほぼ完形 赤彩	A13-290
13	高杯	◎ (16.2)	(外)口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。底部ナデ。(内)剥落不明。 赤彩後の放射状暗文。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	赤彩	A13-297
14	高杯	◎ (15.1)	(外)口縁部ヨコナデ。以下ナデ。(内)口縁部ヨコナデ。杯底部不明。 赤彩後の放射状暗文。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A13-115
15	高杯		(外)ナデ、下半指頭圧痕。(内)風化。 赤彩後の放射状暗文痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	赤彩	A13-296
16	高杯	◎ (16.3)	(外)ハケ目後上半ヨコナデ。 赤彩後の放射状暗文。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	赤彩	A13-296
17	高杯	◎ 13.9	(外)ハケ目後上半ヨコナデ、下半指頭圧痕。(内)剥落不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 煤付着 黒斑あり	A13-292
18	高杯	◎ 14.6 ○ 9.5 ☆ 11.7	(外)杯部ヨコナデ、ハケ目痕。脚柱部ヘラ磨き後ナデ、裾部ナデ。脚屈曲部に工具痕。(内)杯部上半ヨコナデ、下半ナデ。 脚部上半絞り目、下半ハケ目後ナデ、指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡灰褐色	完形 赤彩 黒斑あり	B13-175
19	高杯	○ (14.0)	(外)ヨコナデ。(内)ナデ、指頭圧痕後ハケ目。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A13-292
20	高杯	○ 9.7	(外)上半ヘラ磨き後一部縦、横ハケ目後ナデ、下半ナデ。(内)上半絞り目、下半ハケ目、指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩	A13-289
21	高杯	○ 8.7	風化。 (外)上半ヘラ磨き後下半ナデ。(内)上半絞り目、下半ハケ目。 完存する脚部に径約8mmの円孔1を外から穿つ。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	赤彩	A13-289
22	高杯	○ 9.0	(外)ヘラ磨き後一部ハケ目。 (内)上半ナデ、絞り目。下半ハケ目、指頭圧痕。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩	B13-174
23	椀	◎ (12.7) ☆ (6.3)	(内外)体部上半ヨコナデ、下半ナデ。底部外面指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡灰褐色	赤彩	A13-132
24	椀		(内外)ナデ。外面指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)淡灰褐色(内)暗褐色		A13-132
25			(外)上半ナデ、下半ヘラ削り。(内)ヨコナデ後円形の連続刺突文。円孔径約1.5mm。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③灰褐色		A13-296
26	鋤	L (39.2) W 13.4 T 1.3	刃部の一部を欠損。一ツ刃で着柄部と刃部の間に抉りを持つ。厚さは刃先に向かって徐々に薄くなる。腐朽が著しく、使用痕等は不明。ナスビ形着柄鋤。		コナラ属アカガシ亜属の一種	A13-382

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
27	又鋏	L (10.0) W (17.0) T 2.9	頭部は山形を呈し、両肩、刃部に向かって厚みを減じる。中央上寄りに60°の着柄角度を持つ横長の柄穴をあける。刃は欠損しているが現状で4本確認できる。		コナラ属アカガシ亜属の一種	B13-182
28	横槌	L 24.8 W 8.9 T 7.5	ほぼ完存。一木から柄を削りだし、柄尻はやや太くなる。		コナラ属アカガシ亜属の一種	A13-383
29	木錘	L 14.6 W 7.6 T 7.0	ほぼ完存。中央部は円錐形状に両端から削り込む。両端面は中心に向けて丸く削る。芯持材。			B13-188
30	木錘	L (13.5) W 5.8 T 5.5	中央部は円錐形状に両端から削り込む。両端面は平担である。芯持材。			B13-183
31	大足?	L (19.2) W 3.6 T 2.0	3カ所の方形孔。腐朽著しい。		焼け焦げ痕	A13-143
32	大足?	L (14.7) W 4.0 T 1.7	ほぼ等間隔に3カ所の方形孔。腐朽著しい。			A13-320
33	大足	L 29.1 W 6.7 T 1.0	ほぼ完存。鼻緒孔3と前後に杵取付孔が各1あり、いずれも方形。横断面はレンズ状を呈す。		スギ	A13-249
34	田下駄? ?	L (27.5) W 9.5 T 1.1	方形孔4カ所。		片方の端部に焼け焦げ痕	A13-391
35	田下駄	L 26.1 W 11.1 T 1.2	完存。方形の鼻緒孔3カ所の他に1孔有。先端両隅を落し丸く仕上げる。		ヒノキ属の一種	A13-390
36	田下駄	L 25.0 W 10.2 T 1.9	完存。鼻緒孔3カ所。前端部は斜めに切断。			A13-178
37	容器	L (82.2) W (23.8) T (14.0)	隅丸長方形の舟状を呈する大型の槽。両端に断面円形の把手を削りだす。		スギ	A13-177
38	容器	L (28.8)	刳り抜きの槽。断面は浅いU字形を呈すると考えられる。腐朽著しい。			A13-187
39	容器	L (37.5) W (7.3) T 5.0	約1/2残存。長方形の舟形で、外形に合わせて方形に刳り込む。短辺の一端に不整円柱状の把手が付く。		両端に焼け焦げ痕 ヒノキ属の一種	A13-181
40	桶	上端径(13.0) 底部径(11.8) 器高13.9	約1/2残存。内側の上下端に凸帯。外面縦、内面斜めで凸帯部のみ横の削り。いずれの削りも丁寧。		イヌガヤ	A13-166
41	桶	L (9.1) W 6.7 T 1.9	内側の端部に凸帯を持つ。腐朽著しい。			A13-326

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
42	桶 (底板)	L 12.3 W (5.8) T 1.1	約1/2残存。円形の底板で周縁部を丸く削る。			A13-247
43	匙形 木製品	L (18.9) W (2.7) T (1.9)	一端を両面から削る。柄は断面円形。			A13-186
44	把手	L 12.6 W 4.0 T 3.4	円柱の中央部に長方形の孔を穿つ。断面はやや楕円形である。両端は削られ、使用痕が認められる。断面長方形の柄の基部が残る。芯持材。			A13-140
45	把手	L 11.2 W 4.5	円柱の中央部に方形孔を穿つ。断面は円形。芯持材。		トネリコ属の一種	A13-327
46	斧柄	L (18.2) 斧台長 (11.0) 握り径 2.4	柄、着装部の一部を欠く。握りは断面円形。		サカキ	A13-201
47	斧柄?	L (62.0) W 3.6 T 2.6	着装部を欠く。斧台頭部に方形の突起を削りだす。握りは断面楕円形。柄の斧台部よりに2個の小孔。		シイ属の一種	A13-136
48	針状 木製品	L 12.6 W 1.8 T 1.4	一端に円頭を削りだし、他の一端を針状に削る。			A13-385
49	楔形 木製品	L 16.2 W 5.4 T 2.7	一端を両面から削りだし、縦断面は楔形を呈す。使用痕等は認められない。			A13-321
50	櫛?	L (15.6) W (5.8) T (1.2)	水かき部分の先端部か?			A13-305
51	篋	L (20.5) W 1.8 T 0.8	柄は丸く加工し、身は両面から削りわずかに幅を広げる。			A13-304
52	篋	L (29.3) W (3.2) T 0.8	約1/2残存。緩やかに柄から身に移り、先端は丸みを持つ。		身の先端に焼け焦げ痕	A13-224
53	火鑽板	L 44.8 W 4.9 T 2.3	長側辺の中央に4カ所のV字状の切欠きをほぼ等間隔に入れる。3カ所は使用されているが1カ所は未使用。			A13-138
54	火鑽板	L 34.0 W 2.8 T 1.3	長側辺に6カ所の使用され焼け焦げた火鑽孔。		火鑽孔の反対側長側辺も焼けている	A13-210
55	火鑽板	L 28.7 W 2.4 T 1.4	白部が一部欠失しているが、使用され焼け焦げた火鑽孔8カ所。うち2カ所は重複する。		白以外も焼けている	B13-185
56	火鑽板	L (13.0) W 1.6 T 1.3	長側辺に4カ所のV字状の切欠きを入れる。1カ所は未使用。			A13-200

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
57	火鑽板	L (17.8) W 3.1 T 1.8	火鑽孔2カ所。		白以外も焼けている	A13-306
58	火鑽板	L 24.1 W 3.7 T 1.0	長側辺に使用され焼け焦げた火鑽孔2カ所。1カ所は未使用?			A13-392
59	刀形木 製品	L (64.0) W 3.0 T 1.3	切っ先の一部を欠く。把頭は半円形に削り出し、把間は背側に湾曲する。			B13-162
60	刀形木 製品	L 54.6 W 3.3 T 1.2	完存。把頭の頂部は平坦で、把間は背側にやや湾曲する。刃部は闊、刃の表現がみられる。カマス切っ先。丁寧な作りである。			A13-163
61	刀形木 製品	L (15.0) W 2.9 T 1.1	刀身の大部分を欠く。把頭の頂部は平坦で、把間は背側に湾曲する。刃部は闊、刃の表現がみられる。		スギ	A13-384
62	刀形木 製品	L 24.8 W 2.2 T 1.2	完存。鞘に入った状態を表現。把頭及び鞘口金具、鞘尻金具を削りだしによって表現する。丁寧な作り。		スギ	A13-142
63	船形木 製品	L (19.4) W 3.0 T 2.6	波切り板を持つ準構造船を模す。船槽は平面尖頭形に削り抜く。底部は丸味をもち、断面はU字状を呈す。		スギ	A13-325
64	船形木 製品	L 10.9 W 1.4 T 1.5	ほぼ完形。波切り板を持つ準構造船を模す。船底外面は中央に稜を持つ。船底の一部に穴があいている。			B13-181
65	鳥形木 製品	L 31.2 W 6.0 T 2.2	上下の切り込みによって頭部と体部を分ける。頭部は先細に削り口先とし、体部は少し湾曲する。尾に向って幅を狭める。			A13-221
66	丸太材	L (58.2) W 8.7 T 7.6	芯持材。一端を3面から削り込み断面方形の柄を作り出す。			A13-311
67	丸太材	L (44.5) W 9.5 T 8.6	芯持材。一端を2方向から削り込み断面方形の柄を作り出す。			A13-312
68	丸太材	L (56.4) W 8.3 T 7.2	芯持材。一端を削り加工。			A13-314
69	杭	L 80.5 W 5.8 T 3.2	建築部材の転用。一端を両側面から削り、先端は3面から削り尖らす。一面に断面方形の溝。角部に2カ所のL字状の方形孔を穿つ。			A13-282
70	杭	L (31.4) W 5.0 T 2.8	板材の先端を両側面より削り尖らす。			A13-149
71	杭	L (34.9) W 3.9 T 1.7	先端を両側面より削り尖らす。もう一端に柄穴がみられる。			A13-252

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
72	杭	L 43.7 W 4.3 T 3.6	先端は全面より削り尖らす。一方は切断面。 丁寧な削り。			A13-263
73		L 69.6 W 2.1 T 1.7	角材。両端を丸く削り、隣り合う2面に挟りを入れる。両端の挟り位置は、1面は同じだが他の1面は反対方向。			A13-136
74		L 38.1 W 2.8 T 2.0	断面楕円形に加工。両端に長楕円形の穿孔。			A13-176
75		L (32.9) W 2.4 T 1.6	一端中央部にコの字状の切込み。断面長方形の角材。			B13-211
76	杵	L (32.6) W 2.1 T 1.3	断面円形の縦木。残存する一端は長方形の柄が削り出され、柄には2個の目釘穴。			A13-328
77		L (23.5) W 3.3 T 1.6	一端両隅をL字状に切込み柄を作る。			A13-396
78		L 33.5 W 6.4 T 1.4	板材の長側辺中央に弧形の刳形を入れ、両面の端部に方形孔、不整形孔各1ヶ。中央に不整形孔各1ヶ。			A13-187
79		L 31.7 W 9.6 T 2.3	山形を呈する板。頂部中央に方形の柄穴と不整形な穿孔。裾の両端は尖りぎみになる。			A13-145
80		L 28.2 W 5.2 T 1.3	方形の柄穴2ヶ。			A13-137
81		L 16.7 W 5.3 T 2.2	方形の柄穴1ヶ。			A13-154
82		L (39.0) W 11.0 T 1.9	一端の隅にL字状の切込み。中央部に方形孔。			A13-191
83		L (31.4) W 7.2 T 2.9	板材を大きくL字状に切取り、一端を三角形形状に加工。			B13-117
84		L 36.6 W (3.2) T 1.2	笹葉状の板材の両端に方形の柄穴。交差した紐状の圧痕が残る。			A13-393
85		L (29.7) W 3.0 T 1.0	一端の両側面に挟り。			A13-173
86		L (26.6) W 4.4 T 2.1	一端の両側面に挟り。			A13-248

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
87		L 61.4 W 4.1 T 2.6	一端を有頭状に削り出す。		焼け焦げ痕	A13-189
88		L (53.6) W 2.5 T 2.2	一端を削り出し有頭状とする。			A13-261
89		L (16.3) W 3.1 T 2.6	芯持材。丸材の一端に有頭を削り出す。			A13-141
90		L (29.5) W 4.2 T 4.1	丸材の一端に有頭を削り出す。芯持材。			A13-310
91		L (62.9) W 4.3	断面円形を呈する棒の一端を有頭状に削り出す。転用杭。			A13-125
92		L 62.8 W 4.0 T 2.3	一端を相対する両面から削り、他の一端は両側面から削り山形に加工する。			A13-155
93		L (36.6) W 2.1 T 0.8	板材、ほぼ等間隔に小円孔5ヶ。			A13-258
94		L (17.7) W 2.4 T 0.8	板材、両側面から削り尖らす。			B13-214
95		L (51.8) W 2.8 T 1.3	断面は楕円状を呈し、両端部は両側面から削り先細となる。			A13-192
96		L (31.8) W 1.4 T 1.4	一端を尖頭状に削る。			B13-190
97		L (16.7) W 1.8 T 1.4	芯持材。先端を削り先細となる。			A13-151
98		L 26.8 W 2.1 T 0.9	一端を削り尖らす。もう一端は丸く削る。			A13-302
99		L 17.9 W 1.7 T 0.7	両端部に向けて幅を狭め、先端を丸く加工。			A13-204
100		L 54.6 W 1.7 T 1.5	棒状に丸く加工。			A13-139
101		L 17.4 W 1.0 T 0.8	一端を削り出し、先細となる。			A13-112
102		L (16.3) W 0.8 T 0.7	一端を削り出し、先細となる。			A13-159

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
103		L (17.8) W 1.0 T 1.0	一端を削り出す。			A13-156
104		L (13.2) W 1.1 T 0.9	一端を有頭状に加工。			B13-205
105		L 21.3 W 2.2 T 1.8	断面円形の棒状製品。両端を有頭状に削り、幅の広い一端に線刻による綾杉文をいれる。			A13-381
106		L 16.7 W 4.0 T 1.6	台形を呈する板材。長側辺中央部に浅い抉り。			A13-152
107		L 8.8 W 2.8 T 0.9	長側辺に抉り。			A13-254
108		L 8.8 W 2.8 T 2.2	中央部に方形孔。			B13-202
109		L 7.5 W 1.9 T 1.8	芯持材。両先端を丸く削る。断面は円形。			B13-203
110		L 5.7 W 1.4 T 0.8	長側辺の一端より緩やかな弧状の抉りを入れ、先端に向けて一方向より削り込む。			B13-215
111		L 10.3 W 8.9 T 5.5	山形を呈する板材。			B13-189
112		L 22.0 W 4.4 T 3.8	芯持材。先端を一方向より削り尖らす。			A13-228

SD-04

1	壺	◎〈7.8〉		①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A10-8
2	高杯	◎〈19.5〉	(外)ハケ目後ナデ。(内)不明。 赤彩後の放射状暗文。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	赤彩	A10-8
3	高杯		(外)ハケ目。(内)剥落不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	赤彩	A10-8

SD-09

1	甕	◎〈16.0〉	(内)肩部ヘラ削り。	①1.5mm以下の砂粒を含む 2.5mm大の砂粒有 ②良好 ③灰褐色		B8-18
---	---	---------	------------	--	--	-------

SD-10

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	壺	◎ (36.6)	(外) 口頸部縦ハケ目、肩部斜位のハケ目、後口縁～肩部弱いヨコナデ。(内) 口縁部断続的な横ハケ目後端部斜位のハケ目、頸部～肩部斜位のハケ目。後頸部弱いハケ目、屈曲部ナデ。	①1～2mmの砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良 ③ 淡褐色～淡橙褐色	炭化物付着 黒斑 あり	A7-78
2	(底部)		(外) 幅広のハケ目。中心部磨滅する。(内) ハケ目。中心部指頭圧痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③(外) 淡橙褐色(内) 褐色		A7-144
3	壺	◎ (10.7)	(内) 頸部に指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を多く含 む ②良 ③淡褐色	煤付着	A6-116
4	壺	◎ (16.4)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含 む ②やや不良 ③(外) 淡 褐色(内) 乳橙褐色		A7-94
5	壺	◎ (17.8)		①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A7-203
6	壺	◎ (28.6)		①1～2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	炭化物付着 黒斑 あり	A7-144
7	壺	◎ (19.5)	(外) 頸部ハケ目後弱いヨコナデ。肩部に2条以上の平行沈線。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡褐色(内) 淡灰褐色	黒斑あり	A7-101
8	壺	◎ (14.0)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②良 ③橙褐色	煤付着	A7-197
9	壺	◎ (17.0)	(外) 体部叩き目後横ハケ目。肩部にハケ状工具による刺突綾杉文。(内) 体部ヘラ削り後頸肩部ナデ、指ナデ、指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外) 褐色 (内) 淡褐色	煤多く付着	A6-33
10	壺	◎ (16.4)	(外) 体部縦ハケ目後疎な横ヘラ磨き。(内) 口頸部ヘラ磨き。肩部ヘラ削り。	①2.5mm以下の砂粒を多く 含む ②良 ③(外) 淡橙褐 色(内) 淡褐色	煤付着	A7-271
11	壺	◎ (16.5)	(外) 肩部ハケ目後ヨコナデ後7条以上の波状文。(内) 肩上部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③ 淡褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A6-175
12	壺	◎ (17.0)	(外) 口縁部ハケ目痕。	①1～2mmの砂粒を多く含 む 3～4mm大の砂粒有 ②やや不良 ③乳橙色、淡 橙褐色		A6-119
13	壺	◎ (10.5)	(外) 口縁部ハケ目痕。肩部ナデ後5条の櫛揃平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含 む 2mm前後の砂粒有 ② やや不良 ③(外) 淡橙褐色 (内) 乳黄褐色		A7-134
14	壺	◎ (10.2)	(外) 口縁部ハケ目痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A7-221
15	壺		(外) 体部剥落不明。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A7-12
16	壺	◎ 10.5 △ 14.3 ☆ 15.4	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。下半は煤が厚い。(内) 肩部ナデ。胴部ヘラ削り後ナデ。底部に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③ 淡褐色	ほぼ完形 赤彩 煤多く付着 炭化 物付着	A6-165

挿図 番号	器 種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
17	壺	◎ (11.8)	(外) 体部ナデ、ハケ目痕。(内) 体部ヘラ削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色～褐色	赤彩 煤多く付着 炭化物付着 黒斑あり	B 6-82
18	壺	◎ (10.4)	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。(内) 口縁部上半ハケ目痕。体部ヘラ削り後ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 煤付着	A 6-76
19	壺	△ 17.7	(外) 体部重複するハケ目後頸部ヨコナデ。(内) 頸部ハケ目痕。体部ヘラ削り後底部ナデ。指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む 5～7mmの砂粒有 ②良 ③褐色、橙褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A 7-99
20	壺	◎ 7.6 △ 9.2 ☆ 9.8	(外) 体部ハケ目後一部ナデ。底部にヘラ記号。(内) 口縁部ハケ目痕。肩部ナデ。以下ヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	ほぼ完形 赤彩 煤多く付着 炭化物付着	A 7-208
21	壺	◎ 7.8 △ 9.2 ☆ 9.3	(外) 体部ハケ目後丁寧なナデ。(内) 口縁部ハケ目痕。肩部ナデ。以下ヘラ削り後ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	完形 赤彩	B 6-126
22	壺	◎ 5.7 △ 8.0 ☆ 8.0	(外) 体部ハケ目後一部ナデ。(内) 口縁部ハケ目後弱いヨコナデ。肩部ナデ。以下ヘラ削り。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡灰褐色	完形 黒斑あり	A 7-194
23	壺	◎ (10.7)	(外) 体部ハケ目後下半ナデ。(内) 口縁部ハケ目後弱いヨコナデ。体部上半ナデ、下半ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	黒斑あり	A 7-196
24	甕	◎ (10.4)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	黒斑あり	B 6-15
25	甕	◎ (14.3)	(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色		A 6-111
26	甕	◎ (16.6)		① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	黒斑あり	A 6-172
27	甕	◎ (11.8)		① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A 6-119
28	甕	◎ (15.2)	(内) 肩部ヘラ削り。	① 0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)乳褐色(内)淡褐色	煤付着	A 6-150
29	甕	◎ (15.7)	(外) 肩部ナデ後9条の平行沈線を2段。(内) 体部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)乳褐色	煤付着	B 7-17
30	甕	◎ (14.0)	(外) 肩部に2条以上の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内)褐色	煤、炭化物付着	A 6-157
31	甕	◎ (14.3)	(外) 口縁部下半に平行沈線? 肩部横ハケ目。(内) 頸部ヘラ磨き。肩部丁寧なヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤多く付着	A 7-180
32	甕	◎ (14.8)	(外) 肩部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色、赤褐色	黒斑あり	A 7-196
33	甕	◎ 16.4	(外) 体部ハケ目後肩上部弱いヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着	B 7-21

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
34	甕	◎ (14.6)	(外) 体部ハケ目後肩部に11~12条の平行沈線。(内) 体部丁寧なヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	煤、炭化物付着	A 7-157
35	甕	◎ (16.0)	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B 7-9
36	甕	◎ (14.6)	(外) 体部縦ハケ目後2種の横ハケ目。肩部にハケ目工具による連続刺突文。(内) 口縁部ハケ目後一部ヨコナデ。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A 7-144
37	甕	◎ (22.7)		①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着	A 6-150
38	甕	◎ (30.4)	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色~褐色	小片 煤付着 黒斑あり	B 6-118
39	甕	◎ (31.6)	(外) 体部ハケ目後ナデ。肩部に7条以上?の波状文後12条の平行沈線後所々ナデ。(内) 体部ヘラ削り後丁寧なナデ。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)橙褐色		B 6-115
40	甕	◎ (10.8)		①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	小片	B 7-9
41	甕	◎ (16.0)	(外) 体部斜位ハケ目後横ハケ目。(内) 頸部ハケ目痕。体部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③灰褐色	煤付着	B 5-18
42	甕	◎ (12.7) △ (16.1)	(外) 口縁部ハケ目工具による刺突あり。肩部縦ハケ目後横ハケ目。以下重複するハケ目。(内) 体部ナデ。肩部に接合痕。	①1~3mmの砂粒を含む ②良 ③(外)淡灰褐色(内)褐色	煤付着	A 7-94
43	甕	◎ (14.7)	(外) 口縁部6条の浅い平行沈線。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗灰褐色		A 7-239
44	甕	◎ (13.0)	(外) 体部ハケ目後ナデ。(内) 体部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	B 6-118
45	甕	◎ (13.2)	(外) 肩部左下りの叩き目。(内) 剥落不明。	①1~3mmの砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	煤付着	A 4-2
46	甕	◎ (15.8)	(外) 肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	煤付着	(他)-12
47	甕	◎ (11.8)	(外) 体部ナデ。(内) 体部ハケ目後ナデ。	①1mmの砂粒を含む ②良 ③暗灰褐色	炭化物付着	A 6-163
48	甕	◎ (13.0)	(外) 体部上半縦ハケ目後半横、斜位のハケ目。(内) 肩部ハケ目。体部ヘラ削り。底部ナデ、指頭圧痕。口縁部ハケ目痕。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③灰褐色	煤、炭化物多く付着	A 7-40
49	甕	◎ 15.8 △ (24.8)	(外) 体部縦ハケ目後横、斜位ハケ目。(内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ、2~3条の沈線。肩部ナデ、以下ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む 1cmの礫有 ②良好 ③ (外)淡褐色(内)褐色	煤付着	A 7-101
50	甕	◎ 15.6 △ 24.2	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む 4~5mmの砂粒有 ②良 ③淡褐色~暗灰褐色	煤付着	A 7-253
51	甕	◎ (15.1)	(外) 体部縦ハケ目後肩部横ハケ目。(内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。肩部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	B 6-142

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
52	甕	◎ (14.0)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む 4~6mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色	煤多く付着	A7-69
53	甕	◎ (13.0)	(外) 体部2種の工具使用。斜位ハケ目後幅広の斜位ハケ目。(内) 体部ヘラ削り後肩上部ナデ、指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色~褐色	煤、炭化物付着	B6-41
54	甕	◎ 15.3 △ 24.3 ☆ 26.4	(外) 体部ハケ目後所々ナデ。(内) 体部ヘラ削り後下半ナデ。底部に指頭圧痕。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰色	ほぼ完形 煤多く付着 炭化物付着	A7-170
55	甕	◎ 16.3 △ 24.8 ☆ 27.0	(外) 体部ハケ目後肩上部ナデ。 (内) 肩上部弱いヨコナデ。体部ヘラ削り。底部ナデ、指頭圧痕。部分的にハケ目を施す。	①5mm大の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	ほぼ完形 煤、炭化物付着 黒斑あり	B6-64
56	甕	◎ (13.5)		①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A7-236
57	甕	◎ (17.7)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着	A7-81
58	甕	◎ (15.0)	(外) 口縁部1条の沈線。体部ハケ目後肩上部弱いヨコナデ。(内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A7-114
59	甕	◎ (16.6)		①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	黒斑あり	A7-248
60	甕	◎ (13.8)	(外) 体部ハケ目後肩部にハケ目工具による刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色~灰褐色	煤、炭化物付着 黒斑あり	A7-80
61	甕	◎ (14.6)	(外) 口縁部にヘラ工具痕。体部ハケ目後肩上部ヨコナデ。(内) 肩上部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A6-141
62	甕	◎ (16.5)	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	①1~3mmの砂粒を含む 1cmの礫有 ②良好 ③淡橙褐色~淡褐色		A7-76
63	甕	◎ (16.4)	(外) 体部ナデ。(内) 頸部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗褐色	煤、炭化物付着	A7-93
64	甕	◎ 14.0 △ 20.6 ☆ 22.1	(外) 体部ハケ目後底部ナデ。(内) 口頸部ハケ目後弱いナデ。体部ヘラ削り。体部下半に多くの指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色~淡灰褐色	煤、炭化物多く付着	A7-146
65	甕	◎ 13.6	(外) 斜位のハケ目後口頸部ヨコナデ。 (内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	煤、炭化物付着	A6-153
66	甕	◎ (15.5)	(外) 口頸部ハケ目痕。(内) 口縁部重複するハケ目後弱いヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③暗灰色		B6-39
67	甕	◎ (16.8)	(外) 頸部~体部ハケ目後頸部は弱いヨコナデ。(内) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B6-119
68	高杯	◎ (26.4)	(外) 体部ヘラ磨き、稜上部に1条の沈線。 (内) ナデ。	①2mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙色	赤彩?	A7-87

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
69	高杯	◎ 〈20.3〉	(外) 口縁部ヘラ磨き。体部ハケ目後ナデ一部ヘラ磨き。(内) 口縁部ヘラ磨き後ヨコナデ。体部ハケ目後ヘラ磨き。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色		A 7-250
70	高杯	◎ 24.0	(外) ハケ目後ヘラ磨き。(内) 杯底部縦ハケ目後口縁部横ヘラ磨き後放射状のヘラ磨き。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③乳褐色	黒斑あり	B 6-145
71	高杯	◎ (19.8)	(外) 横ヘラ磨き後縦ヘラ磨き。 (内) 縦ヘラ磨き後横ヘラ磨き。杯底部剥落不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		B 6-134
72	高杯	◎ (19.8)	(外) 口縁端面ヘラ削り。杯部ハケ目後縦ヘラ磨き。(内) ハケ目。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色		A 7-212
73	高杯	◎ 〈16.0〉	(外) 杯部ハケ目後上半ヨコナデ。接合部にヘラ削り痕。(内) ナデ、ハケ目痕。	①2mm以下の砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	赤彩	A 6-129
74	高杯	◎ 14.4	(内外) ハケ目後口縁部ヨコナデ。	①1~2mmの砂粒を含む ②不良 ③淡橙褐色	赤彩?	B 6-72
75	高杯	◎ (17.6)	(内外) ハケ目後上半ヨコナデ。外面に成形時の指頭圧痕。赤彩後の放射状暗文痕。	①2~3mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A 7-122
76	高杯	◎ 16.3	杯部(内外) ハケ目後上半ヨコナデ、下半ナデ後内面に放射状暗文1段。脚部(外) 接合部、脚柱部ヘラ磨き。(内) ヘラ削り。	①0.5mm大の砂粒を多く含む 3mm以下の砂粒有 ②良 ③(外)乳橙褐色 (内)淡橙褐色		A 6-69
77	高杯	◎ 20.2	(外) 杯部上半ヨコナデ、下半ナデ。接合部ハケ目後脚柱部ヘラ磨き。(内) 杯部ナデ。脚柱部ナデ、絞り目。赤彩後の放射状暗文2段。	①3mm以下の砂粒を含む 6mm大の砂粒有 ②やや不良 ③褐色	赤彩 煤、炭化物 付着 黒斑あり	A 7-150
78	高杯	◎ 19.8	(内外) ナデ。杯部(外) ハケ目痕。成形時の指頭圧痕。赤彩後の放射状暗文2段。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩	B 6-94
79	高杯	◎ (24.0)	杯部(外) 上半ハケ目後ナデ、下半~接合部ハケ目。(内) 上半剥落不明。底部ハケ目、ヘラ磨き。脚柱部(外) ナデ。(内) ヘラ削り、絞り目。	①2~3mmの砂粒を多く含む 5~8mm大の砂粒有 ②良好 ③橙褐色	赤彩 口縁部楕円	B 6-131
80	高杯	◎ (25.4)	(外) ナデ。成形時の指頭圧痕。(内) 不明。赤彩後の放射状暗文。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 煤多く付着	B 6-121
81	高杯	◎ 16.2 ○ 8.3 ☆ 13.4	杯部(外) 下半ハケ目後上半ヨコナデ、ナデ。成形時の指頭圧痕。(内) ナデ。脚部(外) 上半ヘラ磨き後接合部ハケ目、下半ナデ。脚端面ヘラ削り。(内) 上半ナデ、下半指成形後ハケ目。赤彩後の放射状暗文2段。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	ほぼ完形 赤彩	A 7-97
82	高杯	◎ 15.6 ○ 9.5 ☆ 12.6	杯部(外) 下半ハケ目後ナデ、上半ヨコナデ。成形時の指頭圧痕。(内) ナデ。脚部(外) ヘラ磨き後裾部ナデ。脚端面ナデ。(内) 上半ナデ、下半ハケ目、指頭圧痕。赤彩後の放射状暗文2段。	①2~3mmの砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A 7-57

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
83	高杯	◎ 15.4	(外) 下半ハケ目後上半ヨコナデ。(内) 上半ヨコナデ、下半ナデ。赤彩後の放射状暗文2段。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A7-263
84	高杯	◎ (15.8)	(外) ハケ目後上半ヨコナデ。成形時の指頭圧痕。(内) ナデ、上半にハケ目痕。赤彩後の放射状暗文2段。	①2mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	赤彩 黒斑あり	B7-16
85	高杯	◎ 14.8	(外) 下半ハケ目後ナデ、上半ヨコナデ。(内) 杯底部ナデ。内外面に成形時の指頭圧痕。赤彩後の放射状暗文2段。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③乳褐色	赤彩	A7-263
86	高杯	◎ (10.4)	(外) 口縁部ハケ目後ヘラ磨き。下半ハケ目後後部ヨコナデ。稜部2条の沈線。(内) 剥落、ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③橙色	赤彩?	A7-201
87	高杯	◎ (10.3)	(外) 横ヘラ磨き後縦ヘラ磨き。(内) 口縁部ヘラ磨き。杯底部剥落、ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色		A7-105
88	高杯	◎ 9.3	(外) 上半ヨコナデ、下半ヘラ磨き。(内) 上半ヨコナデ、下半不明。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	赤彩?	B6-121
89	高杯	◎ 10.2 ○ (5.6) ☆ (8.0)	(外) 杯部下半~接合部ハケ目後杯部ナデ。脚部ナデ、成形時の指頭圧痕。(内) 杯部ハケ目後ナデ。杯底部剥落不明。脚裾部ナデ。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色、淡橙色		A7-141
90	高杯	○ (11.5)	(外) 脚裾部ハケ目後脚部ヘラ磨き。(内) 杯底部剥落不明。脚部上位指頭圧痕、中位ナデ、裾部ハケ目後ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色		B6-70
91	高杯	○ (12.0)	(外) 上位ハケ目。脚部剥落、ハケ目痕。(内) ヘラ削り。脚端部(内外)ナデ。	①2~3mmの砂粒を多く含む ②良 ③灰色~暗灰褐色		A6-171
92	高杯	○ (13.4)	(外) 接合部ハケ目。脚部ハケ目後ヘラ磨き。(内) 杯底部不明。脚柱部ヘラ削り、裾部ナデ。絞り目。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)乳褐色 (内)灰褐色	黒斑あり	A6-173
93	高杯	○ 15.4	(外) 上半ヘラ磨き、下半ナデ。脚端面ヨコナデ。(内) 上半ヘラ削り、下半ハケ目。脚裾部残存部に外径1cmの円孔2を観察。外から穿つ。3方向の穿孔か。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A7-50
94	高杯	○ (14.4)	(外) 接合部ハケ目。脚部ハケ目後上半ヘラ磨き、下半ナデ。(内) 脚柱部ヘラ削り。脚裾部ハケ目後ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A6-74
95	高杯	○ (12.9)	(外) 上半ヘラ磨き、下半ナデ。脚端面ヨコナデ。(内) 上半ヘラ削り、下半ハケ目後ナデ。残存部に外径1.1cmの円孔2を観察。外から穿つ。3方向の穿孔か。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色	赤彩?	A7-158
96	高杯	○ (14.0)	(外) 上半ヨコナデ。成形時の面取り痕。下半ヨコナデ。接合部工具による1条の沈線。(内) 上半ナデ。絞り目。下半ハケ目、指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	赤彩	A7-8

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
97	高杯	○ (12.8)	(外) 上半ヘラ磨き後接合部ハケ目、下半ナデ。脚裾部ヨコナデ。接合部に工具による1条の沈線。脚端面ヘラ削り後ナデ。 (内) 上位不明、中位ナデ、工具痕。脚裾部ハケ目後ナデ。指頭圧痕、絞り目。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡橙色	赤彩	A7-38
98	高杯	○ 9.3	(外) 脚柱部ヘラ磨き後接合部ハケ目。脚裾部ナデ。脚端面ヘラ削り後ナデ。 (内) 上半ナデ、下半ハケ目、指頭圧痕。絞り目。脚裾部に外径8mmの円孔2を外から穿つ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	赤彩 黒斑あり	B6-8
99	高杯	○ 10.0	(外) ヘラ磨き後接合部ハケ目、下半ナデ。脚端面ヘラ削り後ナデ。(内) 上半ナデ。工具痕、指頭圧痕。裾部ハケ目。絞り目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	赤彩	A7-84
100	高杯	○ 9.5	(外) 上半面取り成形後ハケ目。下半ナデ。脚端面ヘラ削り後ナデ。(内) 上位不明、中位ナデ、工具痕。脚裾部ハケ目後ナデ、指頭圧痕、絞り目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A7-255
101	高杯	○ 9.1	(外) 接合部指ハケ目痕。脚柱部ヘラ磨き後裾部ナデ。脚端面ヘラ削り後指ナデ。 (内) 脚柱部上半不明、下半ヘラ磨き、ナデ、指頭圧痕。脚裾部ハケ目。脚裾部に赤彩後ヘラ工具による1条の沈線。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩	A6-63
102	底脚杯	◎ (10.4)	(外) ヨコナデ後杯部縦ヘラ磨き後横ヘラ磨き。(内) ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		A7-69
103	底脚杯	○ (4.3)	杯部(外)ヘラ磨き。(内)剥落、ヘラ磨き痕。脚部(外)縦ヘラ磨き、裾部横ヘラ磨き。 (内) ヨコナデ、2条のヘラ記号。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩?	A6-157
104	底脚杯	○ 5.2	杯部(内外)ヘラ磨き。 脚部(内外)ヨコナデ。 接合部に工具による1条の沈線。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A6-157
105	底脚杯	○ (7.4)	杯部(外)不明。(内)同一方向のヘラ磨き。 脚部(内外)ヨコナデ。 ㄥ残存部に内径約4mmの円孔1。内から穿つ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	黒斑あり	A6-109
106	(脚台部)	○ 10.1	(外) 接合部に1条の沈線。以下ナデ。脚裾部ヨコナデ。脚部に体部調整時の工具痕。 (内) 体部不明。脚部ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	底部楕円	A7-245
107	椀	◎ (8.3)	(外) 上半ナデ、下半ハケ目。(内) ナデ後ハケ目。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③橙色	赤彩	B7-9
108	椀	◎ (12.4) ☆ (4.0)	(内外) ハケ目後横ヘラ磨き。外面指頭圧痕。 赤彩後の放射状暗文。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 黒斑あり	A7-215
109	椀	◎ (12.6) ☆ (4.6)	(外) 口縁部ヨコナデ、下半ヘラ削り後一部ナデ。(内) 上半弱いヨコナデ、下半ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色~淡橙褐色	赤彩? 黒斑あり	A7-46
110	椀	◎ (8.6) ○ 6.0 ☆ (4.7)	(内外) 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。外面に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③暗灰色		A7-92

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
111	器台	◎ (16.8)	(外) 受部不明瞭、ヘラ磨き痕。接合部ヨコナデ。(内) 受部、接合部不明瞭。台部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③淡橙色		A 7-4
112	器台		(外) ヨコナデ後台部6条の波状文。(内) 受部、接合部剥落すすむがヘラ磨き。台部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	A 6-175
113	椀?	◎ (9.3)	(内外) ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 2mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	赤彩 煤付着	A 7-185
114		◎ 5.8 ○ 2.4 △ 5.4 ☆ 6.5	(内外) 手づくね成形後ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり 口縁部、 底部不整円	A 7-287
115		◎ 6.3 ○ 3.4 ☆ 4.7	(内外) 手づくね成形後ナデ。口縁部は指頭圧痕が連続する。口縁端部にV字状の切り込み2。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡灰褐色	ほぼ完形 黒斑あり	A 7-183
116		◎ 7.2 ☆ 3.1	(内外) 手づくね成形後ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	ほぼ完形 黒斑あり	B 6-24
117			(外) 体部風化。下端部に沿った指ナデ。(内) ナデ後一部ハケ目後疎なヘラ磨き。指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色		A 7-81
118		○ 8.3	(外) 手づくね成形後ナデ。底部に指頭圧痕。底面ハケ目。(内) 工具によるナデ。底部に指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色、褐色	黒斑あり 底部不 整円	A 7-166
119	土玉	△ 1.2	手づくね成形後ナデ。	①精練された胎土 ②良 ③淡褐色	完存 1.5g	A 7-149
120	甌	◎ (39.5)	(外) 体部ハケ目後口縁部ヨコナデ。(内) 口縁部ヘラ削り後の体部丁寧なヘラ削り。上位に縦位の把手剥離痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③乳褐色		A 7-14
121	甌	○ (11.0)	(外) 体部剥落不明。底部近くに断面方形状の突帯を貼付後ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。底部ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色		B 7-17
122	甌	○ (11.6)	体部(外) ヨコナデ。(内) ナデ、指頭圧痕。底部(内外) ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③褐色	煤、炭化物付着	B 7-6
123	甌	○ 10.6	体部(外) ハケ目。(内) ヘラ削り。底部(内外) ヨコナデ。体部に横位の把手剥離痕。	①3mm以下の砂粒を多く含む ②不良 ③乳灰褐色～ 乳橙褐色	黒斑あり 底部精 円	B 5-29
124	甌	△ (13.2)	(外) 体部ハケ目後一部ナデ。底部近くに断面三角形の突帯を貼付後ナデ。(内) 体部上半ナデ、下半強い指ナデ。底部(内外) ハケ目後弱いヨコナデ、ハケ目痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色～暗褐色	炭化物付着	A 7-68
125	須恵器 (蓋)	◎ (13.2)	(外) 体部 $\frac{1}{2}$ 上半ヘラ削り。天井部つまみ剥離痕、接合部をヨコナデ。他(内外) ヨコナデ。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)淡青灰 色(内)青灰色		B 6-53
126	須恵器 杯蓋(蓋)	◎ (13.0) ☆ (4.1)	(外) 天井部ヘラ切り後ナデ。他(内外) ヨコナデ。(内) 天井部仕上げナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡青灰色		A 7-12

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
127	須恵器 杯身	◎〈11.4〉	(内外) ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡青灰色		B7-1
128	須恵器 甃	△ 11.6	(外) 体部上半ヨコナデ、下半不定方向のヘラ削り。底面ナデ。胴中央部にハケ状工具による連続刺突文。(内) ヨコナデ後底部ナデ。胴部に外径1.3cmの円孔を外から穿つ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡青灰色～淡灰色		A7-17
129	須恵器 甃	◎ (22.2)	(外) 肩部細かい平行叩き。(内) 頸部ナデ、指ナデ。肩部当て工具痕を丁寧にナデ消し。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡灰色	緑色自然釉	B6-44
130	須恵器 甃	◎〈21.7〉	(外) 体部平行叩き目。(内) 頸部ナデ、指ナデ。体部丁寧なナデ消し、かすかに同心円当て工具痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡青灰色		A6-48
131	須恵器 甃	◎ (29.0)	(外) 肩部ナデ。(内) 肩部同心円当て工具痕を丁寧に擦り消す。口頸部に指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡灰色～灰色	暗緑色自然釉	A6-94
132	須恵器 甃	◎ 25.8	(外) 口縁部平行叩き後ヨコナデ。肩部平行叩き。(内) 頸部ナデ、指ナデ。肩部丁寧な擦り消し、かすかに当て工具痕。	①2～3mmの砂粒を含む ②良 ③淡青灰色、灰色	緑色自然釉	A7-10
133	壺		(外) 頸肩部縦ハケ目後頸部に指頭圧痕突帯。(内) 体部不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡灰褐色		A6-59
134	壺	◎ (16.5)	(外) 口縁端面に独立した3条の沈線。頸部ハケ目後上半ナデ。(内) 横ハケ目後上半ナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	B6-26
135	壺	◎ (17.0)	(外) 口縁端面に独立した3条の沈線後下端部ヨコナデ。頸部4～5条の凹線後下段にハケ状工具による連続刺突文。肩部ハケ目。(内) 口頸部ハケ目後ナデ、指頭圧痕。肩部ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A7-50
136	壺		(外) 口縁端面5条以上の平行沈線後7条の波状文。(内) 口頸部横ヘラ磨き、肩部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③淡橙褐色		A6-37
137	壺	◎〈15.8〉	(外) 口縁部7条の平行沈線。頸部ヘラ磨き、ハケ目工具痕。(内) 肩部ヘラ削り後口頸部ヘラ磨き。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色～橙褐色	黒斑あり	A7-177
138	壺	◎ (13.4)	(外) 口縁端面5条の櫛描平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り。口縁部残存 $\frac{1}{4}$ に径4.5mmの円孔1。内から穿つ。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	A7-264
139	甃	◎〈18.0〉	(外) 体部縦ハケ目。(内) 体部ナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色		A6-50
140	甃	◎〈16.0〉	剝落不明。 (外) 口縁端面に原体不明の刻み目。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A7-249
141	甃	◎ (13.3)	(外) 下垂する口縁端面に2～3条の独立した沈線。体部ハケ目後工具不明のナデ。(内) 口縁上部部に1条の沈線。肩部ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色		A7-55

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
142	甕	◎ (11.6)	(外) 口縁端面2条の沈線。頸部ハケ目。 以下剥落不明。(内) 体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③橙褐色	煤、炭化物付着	A 7-264
143	壺	◎ 14.2	(外) 口縁端面3条の凹線。体部斜位ハケ 目を左回りに施す。(内) 体部上半ナデ、 指ナデ。下半ヘラ削り。	①4mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外) 橙色(内) 淡褐色	煤付着	A 6-66
144	甕	◎ (18.6)	(外) 口縁部5条の沈線。肩部不明瞭。 (内) 肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③橙褐色	煤付着	A 6-177
145	甕	◎ (22.8)	(外) 口縁部5条の平行沈線後下端部ヨコ ナデ。体部ハケ目後ヘラ磨き後原体不明の 工具による連続刺突文。(内) 体部ヘラ削 り後頸部、肩部ヘラ磨き。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着	A 7-37
146	甕	◎ (15.8)	(外) 口縁部4~5条の平行沈線。体部ハ ケ目痕。(内) 肩部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色	煤多く付着 炭化 物付着	A 6-170
147	甕	◎ (16.4)	(外) 口縁部8条の平行沈線後弱いヨコナ デ。肩部8条以上の押し状波状文。 (内) 肩部ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を多く含 む ②良 ③淡橙褐色~淡 灰褐色	煤付着	A 6-70
148	甕	◎ (19.3)	(外) 口縁端面2条の平行沈線後ヨコナデ。 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外) 褐色(内) 淡褐色	煤付着	B 7-16
149	甕	◎ (12.8)	(外) 口縁部16条の平行沈線後上下端部を ヨコナデ。肩部に3条の平行沈線。 (内) 口頸部ヘラ磨き後頸部ナデ。肩部ヘ ラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含 む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A 6-157
150	甕	◎ (16.8)	(外) 口縁部に平行沈線後中央部強いヨコ ナデ、11条が残る。(内) 口頸部ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含 む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B 6-43
151	甕	◎ (17.0)	(外) 口縁部23~24条の平行沈線後上半を ヨコナデ。肩部ハケ目。(内) 口頸部ヘラ 磨き後弱いヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色		B 6-8
152	甕	◎ (15.8)	(外) 口縁部17~18条の平行沈線後上下端 部をヨコナデ。(内) 口頸部ヘラ磨き後上 半を弱いヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	A 7-69
153	甕	◎ (17.2)	(外) 口縁部平行沈線後中央部ヨコナデ、 上下部に17~19条が残る。(内) 肩部ヘラ 削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	炭化物多く付着	A 7-104
154	甕	◎ (14.6)	(外) 口縁端面ハケ状工具による5~6条 の浅い平行沈線。	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A 6-174
155	(底部)	○ 9.3	(外) ハケ目。底面ナデ、指頭圧痕。 (内) ハケ目後下半ナデ、指頭圧痕。	①2~3mmの砂粒を多く含 む ②良 ③(外) 淡橙褐色 (内) 淡黄褐色	黒斑あり	A 7-109
156	(底部)	○ 6.0	(外) ヘラ磨き。(内) ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を多く含 む ②良好 ③褐色	炭化物付着	A 7-207
157	(底部)	○ 7.6	(外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ヘラ削り。 底部丁寧なナデ。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③(外) 褐色(内) 淡褐色	赤彩 黒斑あり	A 6-73
158	(底部)	○ 7.9	(外) ヘラ磨き。底面ナデ後ヘラ磨き。 (内) ヘラ削り後ヘラ磨き。	①2~3mmの砂粒を多く含 む ②良好 ③淡褐色	炭化物付着 黒斑 あり	A 7-102

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法的特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
159	高杯		(外) 脚部はナデ後5本単位の櫛状工具を横方向へ周回させて6段の沈線。 脚裾部にも同一工具による鋸歯文後、逆三角形の位置になる円孔3を1組として4方向に外面から穿つ。円孔外径は約3.5mm。 (内) ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色、暗灰褐色		A7-189
160	高杯	○ (13.0)	(外) 脚部ヘラ磨き後脚裾部ナデ。端面ヨコナデ。 (内) 杯底部ナデ、指頭圧痕。脚部上半ヘラ削り、絞り目。下半ハケ目後ナデ。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③褐色	赤彩	A6-177
161	器台		(外) 受部上段に4~5条、下段に3条の平行沈線を施した後中央に外径約6mmの2重圏スタンプ文。以下ヨコナデ。 (内) 受部ヘラ磨き痕。接合部不明。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰褐色		A7-260
162	器台	◎ (21.8)	(外) 上半ヨコナデ、下半4~5条の平行沈線を2段に施した後中央に外径約6mmの2重圏スタンプ文。(内) ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色		A7-16
163	器台	◎ (21.8)	(外) 受部上半ヨコナデ。下半は上段に7条、下段に4~5条の平行沈線を施した後中央に径約6mmの3重圏のスタンプ文。 (内) 口縁端面に沿って横ヘラ磨き、以下疎な斜位ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色		A6-159
164	器台		(外) 受部に3~4条の平行沈線を2段に施した後中央に外径約5mmの2重圏スタンプ文。以下ナデ、弱いヨコナデ。 (内) ナデ後ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色		B6-88
165	器台		(外) 接合部ナデ、弱いヨコナデ。脚台部3~4条の平行沈線を2段に施した後中央に2重圏のスタンプ文。 (内) 接合部、脚台部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③(外)乳褐色(内)淡褐色		A6-122
166	器台		(外) 受部4条の平行沈線を2段に施した後中央に外径約5mmの3重圏スタンプ文。以下ヨコナデ。 (内) ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	小片	A6-139
167	器台		(外) 3条の沈線を2段に施した後中央に径約8mmの3重圏のスタンプ文。 (内) 不明。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③褐色	小片	B6-44
168	(胴部)		(外) 上半3条の平行沈線を2段に施した後中央に外径約7.5mmの2重圏のスタンプ文。下半斜位ハケ目後ナデ。 (内) ヘラ削り後上部ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	小片	A7-197
169	(胴部)		(外) 上半3条の平行沈線を2段に施した後、中央に外径約7.5mmの2重圏のスタンプ文。上部に縦方向の施文。下半ナデ。 (内) ヘラ削り後ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	小片 煤附着	B6-106
170	(胴部)		(外) 3条の平行沈線を2段に施し、その間に渦スタンプ文。1文様は長さ約7mm渦径約5mmで中心に凹小円をもち2条単位の沈線が直線的に外に出る。上部にハケ目状? 工具による施文を観察。 (内) ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③暗灰色	小片 煤附着	A7-204

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
171	(胴部)		(外) 3条以上の平行沈線を2段に施した後中央に外径約8mmの2重圏のスタンプ文。 (内) ヘラ削り後ヘラ磨き。	①0.5mm程度の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	小片	B 7-12
172	器台	◎ (9.8) ○ (12.6) ☆ (9.6)	受部 (外) ハケ目後ヘラ磨き。口縁部中央に1条のヘラ磨き状沈線。(内) ヘラ磨き。 脚部 (外) ハケ目後縦ヘラ磨き後横ヘラ磨き。下位に1条の浅い沈線。(内) 筒部ヘラ削り。裾部ハケ目後ヘラ磨き。 脚端部 (内外) ヨコナデ。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色		A 7-206
173	器台	◎ 10.3	受部 (内外) ヘラ磨き、外面にハケ目痕。 脚部 (外) 縦ヘラ磨き、ハケ目痕。 (内) ヘラ削り。裾部ハケ目。筒上部剥落不明。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色	炭化物付着	B 6-56
174	器台?	◎ (18.6)	(外) 口縁部に10条の平行沈線、下垂部内側に1条の沈線。 (内) 口縁端部ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色、暗褐色	赤彩?	A 7-100
175	(脚台部)	○ (16.2)	(外) 脚台部上半剥落不明。稜部ヨコナデ後端面に描指平行沈線を2段に施す。 (内) 上半ヘラ削り、下半ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3mm大の砂粒有 ②良 ③淡褐色	黒斑あり	A 7-15
176	蓋	◎ (17.3) ☆ (8.1)	つまみ部ナデ。 体部 (外) ハケ目。(内) ヘラ削り。 口縁部 (内外) ヨコナデ。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	B 6-42
177	蓋		つまみ部指ナデ、指頭圧痕。 (内外) ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③乳灰色		A 7-112
178	(脚部?)	○ 15.4	(外) 上半ハケ目後ナデ。下半ヨコナデ。 (内) ヘラ削り後疎なハケ目。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡灰褐色		A 7-241
179	壺	○ 2.7 △ 12.6	(外) 体部縦ヘラ磨き後上半斜位ヘラ磨き後頸部ヨコナデ。成形時の指頭圧痕。 底面ナデ。 (内) ヘラ削り。肩部に接合痕。底部ナデ。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	A 7-159
180	(注口)		(外) ハケ目後ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色		A 6-86
181	(注口)		(外) ハケ目後接合部ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	黒斑あり	A 7-219
182	(把手)		手ずくね成形後ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A 7-54
183	有孔円盤	L 3.8 T 1.5	扁平で不整円。 全面に成形時の磨き?筋がつき、側面にも磨き?面取りによって表、裏面に対して垂直な筋がつく。径約1.5mmの対になる円孔を片側から穿つ。一面に線刻か。		ほぼ完存 11.4g 滑石	A 7-218
184	銅鏃	L 3.8 W 1.35 T 0.43	柳葉状を呈し有茎。 両面に鏃をもち鏃身断面は菱形。鑄造時の表裏のずれが認められ、鏃身逆刺が上下に茎部では左右のずれが顕著。刃は斜め方向の研ぎ筋が残る。		完存 5.3g	A 6-169

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
185	砥石	L (7.5) W 4.1 T 3.3	中央部で欠失するが使用頻度が高く長軸方向で深さ6～8mmの凹面になると想定。端部は稜部も使用して多面になる。全面が長軸方向の研ぎ痕。		(110) g 流紋岩	B 6-112
186	砥石	L (5.8) W 3.4 T 2.7	両端を欠く。4面に使用痕。いずれも長軸方向の研ぎ痕。使用頻度が高い。		(100) g 微花崗岩	A 6-163
187	砥石	L (6.8) W 2.8 T 1.2	両端を欠く。稜部を使用した5面に使用痕。横断面の表裏で凹面となる。使用頻度が高い。		(36) g 安山岩	A 7-212
188	磨石	L (7.3) W 8.4 T 5.9	1端は磨り面。両側縁部にわずかな敲き痕。両面に敲き痕。		(710) g 蛇紋岩	A 6-164
189	台石	L (20.7) W (9.6) T 11.2	磨り面3。一部に敲打による凹み？		(3.4) kg はり質安山岩	A 7-142
190	砥石	L 15.4 W 7.0 T 3.6	使用痕2面。側面は使用度が高く他面はわずかである。		完存 395 g 砂岩	B 6-12
191	敲石	L 9.3 W 5.4 T 5.6	長軸両端は磨り面と敲打痕。4側面に軽い敲き痕。焼痕あり。		完存 475 g 流紋岩	A 6-135
192	敲石	L 7.0 W 3.7 T 3.1	長軸両端に敲打痕。		完存 130 g 黒雲母花崗岩	A 7-182
193	敲石	L 8.4 W 6.6 T 5.0	長軸両端から片側縁部に敲打痕。3方向に敲きによる深い凹みをもつ。使用頻度が高い。焼きを受けた後の使用？		完存 420 g 安山岩	A 6-145
194	敲石	L (10.8) W 5.0 T 5.2	長軸1端に敲打痕。使用頻度が高い。		(556) g 花崗岩	A 6-87
195	堅杵	L (32.7) W 7.8	約1/2残存。一端は球面状を呈し、一端は先細に削り握りをつくる。芯持材。			A 6-147
196	木錘	L 13.3 W 7.9 T 7.1	完存。芯持材。中央部に向って両方から円錐形状に削り込み。両先端は中心に向けて削り。		ヤマツバキ	A 7-242
197	木錘	L 14.8 W 5.2 T 4.8	芯持材。中央部に向って両方から円錐状に浅く削り込む。両先端は中心に向けて削り。			B 6-125
198	火鑽板	L 18.2 W 3.5 T 1.5	長側辺に4ヶのV字状の切欠き。3ヶは使用されて焼け焦げ、1ヶは未使用。		ヒノキ	A 6-139
199		L 52.2 W 3.7 T 1.0	両端に突起を削り出し、先端を丸く加工。断面はレンズ状。			A 7-268

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
200	杓子形 木製品	L (16.2) W 8.8 T 1.5	板状に加工し、先端に向かって厚みを減じ 断面形はV字状を呈す。上端には断面長方 形の柄部を削り出す。			A 7-267
201		L 18.6 W (7.6) T 1.3	板材、両端は徐々に幅を狭め丸くなる。腐 朽著しい。			B 6-32
202		L 21.3 W 3.0 T 1.2	先端を丸く加工し、柄部の先端は尖る。断 面は楔形。			B 6-32
203	高杯	◎ 11.3 ☆杯部(4.5)	脚部を欠損。削りは細かく丁寧に内側は口 縁部に沿って削り、中央部は任意に削る。 口縁端部は平坦に調整。		ヤマグワ	B 6-129
204	紐		幅 7mm 前後の植物性の細紐状のものを束ね て巻いたもの。			A 6-179
205	建築材	L 357.7 W 17.0	一端を尖頭状に削り、他の一端に方形の柄 穴をあける。自然木で枝を丁寧に切り落 す。			B 6-87
206	杭	L (46.6) W 11.2 T 1.9	板材。腐朽著しい。転用杭。			A 7-279
207	杭	L (49.6) W 5.2 T 1.7	板材の一端を両側面から削り尖らす。			A 7-280
208	杭	L (34.3) W 8.5 T 1.8	板材の一端を両側面より長短をつけて削り 出す。中央に方形の柄穴 2ヶ。転用杭。			A 6-194
209	杭	L (51.8) W 3.6	1ヶ所切込みあり。断面は円形を呈す。転 用杭。		部分的に焼け焦げ 痕	A 6-195
210	杭	L (106.8) W 6.1 T 3.2	一端を両側面から削り、先端のみ 4 面から 削り尖らす。			A 6-198
211	杭	L (131.6) W 6.5 T 3.4	一端を一方から削り尖らす。			A 6-199
212	杭	L (123.7) W 13.0 T 6.2	一端を一方より削り出し、先端のみ 4 面 から削り尖らす。			A 6-200
213	杭	L (141.2) W 11.4 T 5.6	一端を両側面より削り出し、先端のみ 4 面 から削り尖らす。			A 6-201
214	杭	L (125.9) W 5.7 T 5.2	一端を両側面より削り尖らす。			A 6-202
215	杭	L (114.8) W 12.9 T 5.5	板材の一端を両側面より削り出し、先端の み 3 面から削り尖らす。			A 6-203

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
216	杭	L (114.3) W 7.4 T 3.6	先端を両側面より削り尖らす。			A 6-204
217	杭	L (47.8) W 10.0 T 5.3	先端を両側面より削り尖らす。			B 5-58
218	杭	L (54.0) W 4.7 T 1.7	先端を一方向から削り尖らす。2面に削痕が顕著に見られる。転用杭。			B 5-41
219	杭	L (57.1) W 14.7 T 1.7	3面に削痕が顕著に見られる。転用杭。			B 5-44
220	杭	L (55.5) W 13.7 T 5.8	先端を一方向から削り尖らす。2面に削痕が顕著に見られる。転用杭。			B 5-27
221	杭	L (36.4) W 3.3 T 3.0	全面を丸く削り加工する。先端に向かって削り尖らす。転用杭。			B 5-33
222	杭	L (45.3) W 4.2 T 2.1	一端を両側面より削り出し、先端のみ4面から削り尖らす。			A 7-228
223	杭	L (109.2) W 7.6 T 6.2	先端を4面より削り尖らす。転用杭。			A 7-229
224	杭	L (99.2) W 7.4 T 6.8	先端を4面より削り尖らす。3面に削痕が顕著に見られる。転用杭。			A 7-227
225	杭	L (38.8) W 4.1 T 2.3	一端を両側面より削り出し、先端のみ3面から削り尖らす。			A 7-231
226	杭	L (112.5) W 7.0 T 5.7	先端を4面より削り尖らす。3面に削痕が顕著に見られる。			A 7-235
227	杭	L (82.4) W 7.6 T 4.4	一端を両側面より削り出し、先端のみ4面から削り尖らす。2面に削痕が見られる。			A 6-183
228	杭	L (104.4) W 7.1 T 4.7	先端を2面から削り尖らす。2面に削痕が顕著に見られる。			A 6-185
229	杭	L (82.5) W 5.8 T 4.2	一端を一方向から削り出し、先端のみ4面から削り尖らす。2面に削痕が顕著。先端には柄が削り出されている。転用杭。			A 6-196
230	杭	L (43.3) W 7.8 T 3.5	一端を両側面より削り出し、先端のみ4面から削り尖らす。4面に削痕が顕著に見られる。転用杭。			A 7-234

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
231	杭	L (57.2) W 11.3 T 3.6	一端を両側面より削り出し、先端のみ4面から削り尖らす。3面に削痕が顕著に見られる。			A 6-189

SD-11

1	壺	◎ (19.2)	(外)口縁部櫛描平行沈線後上下ヨコナデ、8~9条が残る。(内)頸部ハケ目後上半ヨコナデ。肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A 5-15
2	甕	◎ 14.8	(外) 体部ナデ後肩部に8条の平行沈線を2段に施した後中央にハケ状工具による連続刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③乳黄褐色	煤付着 黒斑あり	A 5-18
3	甕	◎ (18.8)	(外) 体部不明。(内) 体部ヘラ削り後ナデ。	①2~3mmの砂粒を多く含む 6mm大の砂粒有 ②不良 ③橙褐色	小片 煤付着	A 5-4
4	甕	◎ (13.6)	(外) 口縁部ハケ目工具による斜位の刺突をした後工具をそのまま動かしてハケ目。後頸部ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③橙黄褐色	小片	A 5-25
5	器台	◎ 26.0	(外) 全体をヘラ磨き後、口縁部、稜部ヨコナデ。(内) 受部ヘラ磨き。以下ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③橙色、乳橙色	黒斑あり	A 5-17

SD-12

1	甕	◎ (15.8)	(外) 肩部剥落不明。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色		A 8-31
2	甕	◎ (15.8)	(外) 肩部9条以上の平行沈線。(内) 体部ヘラ削り。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)淡橙褐色		A 8-27
3	甕	◎ (13.6)	(外) 体部不明瞭、ハケ目痕。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色		A 8-30
4	甕		(外) 体部不明。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③淡橙褐色		B 9-31
5	甕	◎ (15.6)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)暗灰褐色(内)淡褐色	煤付着	A 8-31
6	甕	◎ (21.2)		①1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③淡褐色~暗灰色		B 9-31
7	甕	◎ 16.7 △ (21.0)	(外) 体部剥落、ハケ目後肩部に10~11条の波状文。(内) 体部ヘラ削り後ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	B 9-27
8	高杯		(外) 剥落。接合部ハケ目後脚柱部ヘラ磨き。(内) 杯底部不明。脚柱部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		B 9-29
9	低脚杯		(内外) 剥落不明。脚部に接合痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳黄褐色		B 9-27
10	低脚杯		杯部(外) ハケ目。(内) ナデ。脚部(内外) ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③暗褐色		B 9-31

SD-17

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	甕	◎ (17.0)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色		B9-22
2	甕	◎ (17.0)	(内) 肩部ヘラ削り。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	煤、炭化物付着	B9-22

SD-18

1	高杯	◎ (25.0)	(外) 杯部下半ハケ目後上半ヨコナデ。(内) 剥落、ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A10-20
2	低脚杯	◎ (12.6)	(外) 口縁部ヘラ磨き。杯部ハケ目後ナデ。接合部ナデ。(内) 杯部ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A10-18

SD-21

1	甕	◎ (20.0)	(外) 頸部に原体不明の工具痕。(内) 肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A10-21
---	---	----------	-----------------------------	-----------------------	--	--------

SD-23

1	甕	◎ (16.9)	(外) 口縁部7~8条の平行沈線。肩部貝工具による連続刺突文。(内) 頸部ハケ目。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B7-28
---	---	----------	--	-------------------------	-----	-------

SD-24

1	壺	◎ (13.0)	(外) 口縁端面に2条の沈線。体部ハケ目。(内) 体部ナデ、指ナデ。ヘラ削り痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)褐色(内)淡褐色		A8-332
2	壺	◎ (15.8)	(外) 口縁端面に3条の独立した沈線、頸部に2条の凹線。肩部にハケ状工具による連続刺突文。(内) 口縁部ハケ目。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		A8-351
3	壺		(外) 口縁部に2条以上の沈線。頸部ハケ目。(内) 頸部ハケ目後ナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③濃褐色	黒斑あり	A8-330
4	壺	◎ 30.2	(外) 口縁部重複する16~17条の平行沈線。頸部ハケ目後下位に断面方形の突帯を貼付。突帯部をナデ後上面に貝工具による連続刺突文。一部は端面に及ぶ。(内) 口縁部ヘラ磨き。頸部ごく浅いハケ目。肩部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	B8-338
5	壺	△ (23.0)	胴部最大径に2段の凸帯をもつ。(外) 凸帯端部に原体不明の刻み目。外径約7mmの3重圏スタンプ文2段。突帯以下2条の沈線で上下を区画し間にS字状渦スタンプ文の一部重複して施文。長さは3.3cmで渦径約1.1cm2ヶを1組とする。S字状渦文は2条単位の沈線から成り中心は連結せず、外周は逆方向に出る。(内) ヘラ磨き。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)乳褐色(内)乳灰褐色	小片	A8-334

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
6	壺	△ (12.8)	(外) 胴部ヘラ磨き。後、貝工具により上段を鋸歯文、下段はハの字状に刺突する。鋸歯文は1文様毎に施文方向を逆とする。後、ヘラ描沈線で文様を区画するが上段は欠失のため3条が残り、下2段は4条。(内)ヘラ削り後上半ヘラ磨き。	①3mm以下の砂粒を含む ②不良 ③(外) 橙褐色(内) 灰褐色	小片	A 8-336
7	甕	◎ (18.4)	(外) 口縁部9～10条の平行沈線後一部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り後口頸部、肩部ヘラ磨き。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色～褐色	煤付着	A 8-346
8	壺?	◎ (12.2)	(外) 口縁部9条の平行沈線。(内) 口縁部ヘラ磨き。肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩?	A 8-346
9	甕	◎ (17.9)	(外) 口縁部重複するごく浅い沈線。体部ハケ目後同一工具による連続刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A 8-336
10	甕	◎ (18.2)	(外) 口縁部貝による6条の平行沈線。体部ハケ目。肩部に貝工具による連続刺突文。(内) 口頸部ヘラ磨き。体部ヘラ削り。	①3mm前後の砂粒を多く含む 6mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色		B 8-351
11	甕	◎ (16.8)	(外) 肩部不明。(内) 肩部ヘラ削り。	①2.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外) 暗褐色(内) 褐色	煤付着	A 8-331
12	高杯	◎ (28.4)	(内外) ヘラ磨き。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	黒斑あり	A 8-349

SD-25

1	甕	◎ 16.7 ○ (3.1) △ (18.0) ☆ (23.0)	(外) 口縁部10条の平行沈線。体部ごく浅いハケ目。工具によるナデか。肩部に貝工具による連続刺突文。底面ナデ。(内) 体部ヘラ削り後上半ナデ。底部ナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色、淡灰褐色	煤、炭化物付着	A 9-76
2	甕	◎ (21.0)	(外) 口縁部7条の平行沈線後一部ヨコナデ。(内) 肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰褐色		A 9-76
3	甕	◎ (18.3)	(外) 口縁部4条のヘラ描沈線。(内) 肩部ヘラ削り後頸部ヘラ磨き。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色		A 9-76
4	甕?	△ (11.5)	(外) 体部ハケ目後肩部ナデ。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	煤付着 黒斑あり	A 9-76
5	高杯	◎ (26.4)	(内外) ヘラ磨き。	①3mm程度の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A 9-77
6	器台	○ 12.8	(外) 脚台部上半ヘラ磨き。端面に4条、幅の狭い6条の平行沈線後ヘラ磨き。(内)ヘラ削り後裾部ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		A 9-76
7	蓋	○ 10.4 ☆ 4.4	つまみ部ナデ、指頭圧痕。(外) 体部不明。口縁部ヘラ磨き。(内) ナデ、口縁部にヘラ磨き、指頭圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡灰褐色	ほぼ完形	A 9-79

SD-26

1	壺	◎ 16.8	(外) 口縁部ハケ目痕。体部浅いハケ目後ナデ。(内) 剥落。頸部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰褐色		A 10-140
---	---	--------	--	-------------------------	--	----------

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
2	壺	◎ (15.6)	(外) 口縁端面に2条の凹線。	① 4mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色		A10-166
3	壺	◎ (10.5)	(外) 口縁部3~4条のへら描き沈線。体部ハケ目後へら磨き。(内) 体部へら削り。口頸部に指頭圧痕。	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	赤彩 煤多く付着	A10-153
4	甕	◎ 19.0	(外) 口縁端面3条の凹線?体部縦ハケ目後斜位ハケ目後肩上部ヨコナデ。(内) 頸部ハケ目。体部へら削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A10-179
5	甕	◎ 14.0	(外) 口縁端面磨耗、3条の沈線。体部ハケ目後へら磨き。肩部に連続刺突文。(内) 体部へら削り、肩部にハケ目痕。	①2.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色~淡褐色		A10-109
6	甕	◎ 10.8	(外) 口縁端面3条の沈線。肩部ハケ目後ヨコナデ。体部へら磨き。(内) 体部へら削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤多く付着	A10-118
7	甕	◎ (11.1)	(外) 口縁端面3条の沈線。体部斜位ハケ目後横ハケ目。(内) 体部へら削り。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着	A10-183
8	甕	◎ (13.5) △ (17.0)	(外) 口縁端面3条の沈線。体部ハケ目後ナデ。下半剥落不明。(内) 体部へら削り後肩部ナデ。	① 2mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③橙灰褐色		A10-92
9	甕	◎ (14.0)	(外) 口縁端面2条の凹線。体部煤付着の為調整不明。(内) 肩部ナデ。以下へら削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)暗褐色(内)褐色	煤多く付着	A10-100
10	甕	◎ (16.1)	(外) 口縁端面3条の沈線。体部ハケ目後ナデ、肩部ヨコナデ。(内) 肩部ナデ、以下へら削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着	A10-109
11	甕	◎ 13.5 ○ 5.7 △ 17.0 ☆ 21.1	(外) 口縁端面4条の沈線。体部浅いハケ目。底面ナデ。(内) 体部へら削り後胴部以下ナデ。底部中央に指頭圧痕。	① 5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙色~淡橙褐色	ほぼ完形 煤多く付着	A10-89
12	甕	◎ 12.2 ○ 6.2 △ 19.4 ☆ 19.0	(外) 口縁端面3条の沈線。体部ハケ目。底面ナデ。(内) 体部へら削り。	① 2mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	A10-224
13	甕	◎ (14.6) △ (20.4)	(外) 口縁端面3条の沈線。体部叩き目後ハケ目後下半へら磨き。胴部に連続刺突文。(内) 体部へら削り後肩部ナデ後疎なハケ目。指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着 炭化物付着	A10-141
14	甕	△ 18.4	(外) 口縁端面2条以上の沈線。体部叩き目後ハケ目。下半煤付着の為不明瞭、一部にへら磨き。(内) 体部上半ナデ、指ナデ。下半へら削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③橙色	煤多く付着 炭化物付着	A10-87
15	甕	◎ 18.8	(外) 口縁端面3条の独立した沈線後下端部ヨコナデ。体部ハケ目。(内) 口縁上端部2~3条の沈線後ヨコナデ。頸部ハケ目後ナデ。体部へら削り。	① 2mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	黒斑あり	A10-120
16	甕	◎ (16.8)	(外) 口縁端面3条の沈線後下半ヨコナデ。体部ハケ目。(内) 体部へら削り。	① 2mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内)淡橙褐色		A10-121

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
17	甕	◎ 14.8	(外) 口縁端面3条の凹線? 体部ハケ目。 (内) 口縁部ハケ目後上端部ヨコナデ、ナデ。体部ヘラ削り。	①4mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡褐色		A10-120
18	甕	◎ (18.8)	(外) 口縁端面3条の凹線。体部ハケ目後肩部ナデ。残存小片部に連続刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A10-155
19	甕	◎ (13.9)	(外) 口縁端面4条の独立した沈線。体部ハケ目後所々ナデ。(内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)灰褐色(内)褐色	煤付着	A10-121
20	甕	◎ 17.0	(外) 口縁端面4条の凹線? (内) 肩部ヘラ削り。	①4mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗橙褐色	煤付着	A10-93
21	甕	◎ (24.7)	(外) 口縁部3条の凹線。(内) 肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色		A10-179
22	甕	◎ 19.5	(外) 剥落著しい。体部縦ハケ目後肩部に同一工具による連続刺突文。(内) 肩部ヘラ削り。	①4mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色		A10-129
23	甕	◎ 15.7 △ 19.8	(外) 口縁端面2条の沈線。体部上半ナデ、下半細かいハケ目後ナデ。胴中央部にヘラ状工具による連続刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	①1.5mm前後の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	煤多く付着 炭化物付着	A10-116
24	甕	◎ 13.9	(外) 全体に煤付着の為調整不明。口縁部に3条の沈線。肩部に原体不明の工具による刺突綾杉文。(内) 体部丁寧なヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	煤多く付着	A10-192
25	壺	◎ 9.0 ○ (4.0) ☆ 13.4	(外) 体部に原体不明の工具による擦痕。底部に工具痕。(内) 体部2方向のヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を含む ②良好 ③橙褐色	黒斑あり	A10-85
26	(底部)	○ 5.8	(外) ハケ目後底部ナデ。(内) ヘラ削り。	①1.5mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)灰褐色(内)暗褐色	煤付着	A10-154
27	(底部)	○ 6.8	(外) 体部ハケ目後ナデ。脚端部ハケ目。接合部指頭圧痕。(内) 体部ハケ目後ナデ。底部ヘラ削り。脚部ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③橙褐色~褐色	煤付着	A10-87
28	(底部)	○ 5.2	(外) ハケ目。(内) ナデ、底部ハケ目。脚部ハケ目後ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	黒斑あり	A10-95
29	高杯	○ (7.0)	杯部(外) ヘラ磨き。(内) 不明。脚部(外) ヘラ磨き。端面2条の沈線。(内) ヘラ削り。下端部ヘラ磨き。紋り目。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③暗橙褐色	赤彩 煤付着	A10-166
30	高杯	◎ (8.6) ○ 7.0	杯部(内外) 上半ヨコナデ。下半ヘラ磨き。脚部(外) ヘラ磨き。工具による1条の沈線。(内) 上半剥落、ヘラ削り。下半ハケ目。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	赤彩	A10-177
31	(脚部)	○ (13.6)	(外) 上半ハケ目後下半ヨコナデ。脚端面に2条の沈線。(内) ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)淡橙褐色(内)淡褐色		B10-180
32	蓋		(外) 体部ハケ目後上下部ヨコナデ。(内) ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)淡橙褐色(内)淡褐色	煤付着	B10-180

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
33	器台	◎ 14.7 ○ 12.1 ☆ 13.2	(外) 口縁端面には重複する4条以上の沈線を施した後、径約3mmの竹管文3列を1組として3方向に配す。1組毎の単位は12, 13, 14と異なる。筒部縦ヘラ磨き後上下を横ヘラ磨き。 (内) ヘラ削り後口縁部ヘラ磨き後一部ナデ。裾部ヨコナデ。 筒部に透し窓3を竹管文の間になる位置に外から穿つ。	① 1～2mmの砂粒を含む ② 良好 ③ 褐色	赤彩	A10-172
34	土玉		手づくね成形後ナデ。	① 0.3mm以下の砂粒を含む ② 良好 ③ 灰褐色	完存 8.2g 煤付着	A10-174
35	磨石	L 15.8 W 10.3 T 4.3	長軸側面に磨り痕、他側面に加工痕。		完存 1.15kg 玄武岩	A10-96
36	砥石	L 17.5 W 11.6 T 5.0	使用痕1面、長軸両端にわずかな敲打痕。		完存 1.25kg 微花崗岩	A10-157
37	敲石	L 11.6 W 6.8 T 4.9	長軸両端に敲打痕。1端部は平担になり使用頻度が高い。		完存 570g 安山岩	A10-98
38	砥石	L 8.2 W 3.2 T 1.4	使用痕1面、長軸方向の研ぎ痕。		(51)g 粘土岩	A10-149
39	木庖丁	L 18.9 W 5.8 T 1.1	片刃で背は丸い。一端に寄った2個の紐孔を穿つ。刃を付けた面に紐孔をつなぐ溝。ほぼ完存。		ヤマグワ	B11-140
40	木庖丁	L 16.9 W 5.6 T 1.2	一端に寄った2個の紐孔を穿ち、溝をつなぐ。よく使用されている。完存。		ヤマグワ	B11-77
41	木庖丁	L (6.7) W 5.7 T 1.1	片刃で背は丸い。2個の紐孔を穿ち、溝をつなぐ。一部残存。		ヤマグワ	B11-134
42	竪杵	L (60.3) W 9.5 T 8.6	搦部から屈曲して握部となり、搦部先端は凸面状となる。約1/2残存。芯持材。		ヤブツバキ	B11-140
43	横槌	L 38.0 W 8.6	芯持材の約1/2を丁寧に削り込み柄を作る。柄は端部に向けて細くなる。体部に使用痕が残る。完存。		ヤブツバキ	B11-77
44		L (14.6) W (3.1) T (3.2)	断面蒲鉾状を呈し、球面を帯状に細かく削る。やや先細りの端部を削りだし、一部は更に削り込む。			B11-134
45		L 1.5 W 4.5 T 2.5	多角台錘形に削る。			B11-134

SD-29

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	壺	◎ 13.8 ○ 6.8 △ 19.7 ☆ 27.2	把手付。肩部内面に把手端部がわずかに突出する。 (外) 口縁部は6~8条凹線が周回し、端面には3条の沈線を施す。体部は全体に縦ハケ目後胴部最大径に斜位ハケ目後横ヘラ磨き後以下縦ヘラ磨き。底面ヘラ磨き。体部1/2上半に連続刺突文を2段に施す。 (内) 肩部ナデ、指頭圧痕。以下ヘラ削り。底部ナデ。肩部に接合痕2。	①1mm前後の砂粒を多く含む 6mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色~暗褐色	ほぼ完形 煤多く付着 炭化物付着	B20-4
2	甕	◎ 21.7 ○ 8.3 ☆ 39.3	(外) 口縁端面3条の凹線。体部細かいハケ目後幅広のハケ目。底面ナデ。 (内) 口頸部幅広のハケ目後口縁部ヨコナデ。体部ヘラ削り。	①5mm前後の砂粒を含む 1cm大の礫有 ②良好 ③淡褐色	完形 煤、炭化物多く付着	B20-2
3	甕	◎ (14.2) △ (20.0)	(外) 口縁端面3条の凹線。体部縦ハケ目後横ハケ目。 (内) 体部ヘラ削り、下半は丁寧に重複する。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤多く付着 炭化物付着	B20-5
4	甕	◎ (15.2)	(外) 口縁端面2条の凹線後下端部ヨコナデ。体部重複する弱いハケ目。 (内) 体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③(外)橙褐色 (内)褐色	煤付着	A20-1
5	甕	◎ 14.5 △ 22.4	(外)口縁端面4条の凹線後弱いヨコナデ。体部ヘラ磨き後肩部弱いヨコナデ。 (内) 肩部ナデ、指ナデ。以下ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③(外)淡褐色 (内)淡灰褐色	煤付着 黒斑あり	A20-6
6	(底部)	○ (6.6)	(外) ナデ。底面ヘラ磨き。(内) ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③暗褐色	煤付着 黒斑あり	A20-8
7	磨製石斧	L 14.4 W 7.2 T 3.0	全体が扁平で両側縁の長さを異にした弧状の刃部。また断面でわずかな膨みをもち両刃。側縁部に面をもつ造りであるが加撃により周縁部が剝離欠失する。刃部は刃こぼれする。		完存 536g 粘板岩	A20-7

SD-30

1	高杯	◎ (29.0)	(外) 口縁部沈線状のヨコナデ後貝工具による連続刺突文。以下剝落不明。ハケ目痕。 (内) 不明。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	B20-19
2	(底部)	○ (6.8)	(外) 上半ハケ目、下半不明瞭。底面ナデ。 (内) 風化不明。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡褐色	小片 黒斑あり	B20-18

SD-32

1	壺	◎ (12.8)	(外) 口縁端部に削み目。口縁部上段に1条の沈線。その下段には2条単位の工具を横に押しきした沈線が明瞭でその下にも同沈線痕。 (内) ヘラ削り後ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)乳褐色 (内)淡橙褐色		B21-24
---	---	----------	--	------------------------------------	--	--------

SD-37

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
1	壺	◎ 9.8 ○ 4.8 △ 13.8 ☆ 15.8	(外) 口縁端面ハケ状工具による刻み目。 口頸部～体部上半ハケ目後頸部3条の凹 線。下半縦ヘラ磨き後横ヘラ磨き。底面ナ デ。胴中央部に口縁部と同一工具による連 続刺突文2段。(内)体部ハケ目後肩部ナデ。 底部に成形時の指頭圧痕。 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存部に径2.5mmの円孔5が残る。 円孔2ヶ1組を4方向に配置するものと想 定。内から穿つ。	①0.5mm程度の砂粒を含む ②良 ③暗褐色	煤付着 黒斑あり	A22-51
2	甕	◎ (15.6)	(内外) 体部ハケ目後肩上部ヨコナデ。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤付着	A22-47
3	甕	◎ (15.8)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部幅広のハケ 目後ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③褐色	煤多く付着	A22-47
4	甕	◎ (16.2) △ (19.6)	器厚が均等化した甕。 (外) 体部 $\frac{3}{4}$ 上半斜位ハケ目後縦ハケ目後 肩部横ハケ目後下半ヘラ磨き。胴部最大径 にハケ状工具による連続刺突文。(内) 体 部ハケ目。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色～淡灰褐色	煤付着 黒斑あり	A22-50
5	甕	◎ (15.8) △ (20.2)	(外) 体部幅広の斜位ハケ目後縦ハケ目後 ヘラ磨き。(内) 体部ハケ目後肩部ナデ。 成形時の指頭圧痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②不良 ③淡褐色	煤多く付着 炭化 物付着	A22-48
6	甕	◎ (18.0)	全体に風化が著しく不明瞭。 (外) 口縁端面に刻み痕。	①1～2mmの砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A22-46
7	甕	◎ (22.4) ○ (3.6) △ (18.0)	(外) 斜位の重複する粗いハケ目後体部上 半に同一工具による7条単位で横位の沈 線。底面不明。(内)口頸部重複する粗い横 ハケ目。体部ナデ。底部炭化物付着の為不明。	①1mm前後の砂粒を多く含 む ②やや不良 ③褐色	煤付着 炭化物多 く付着	B21-16
8	(底部)	○ (6.0)	(外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ハケ目 後底部ナデ、指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤、炭化物付着	A22-47
9	(底部)	○ (6.0)	(内外) 剥落すすむ。 (外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③褐色	煤、炭化物付着	A22-48
10	(底部)	○ 6.2	(外) ヘラ磨き、ハケ目痕。底面ナデ。(内) ナデ、指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)褐色(内)淡褐 色	煤付着 黒斑あり	A22-47
11	(底部)	○ (5.4)	(外) ヘラ磨き、ハケ目痕。底面ナデ。(内) ナデ。底部に指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	炭化物付着	A22-47
12	(底部)	○ (6.0)	(外) 剥落不明。(内) 上半ヘラ削り、下 半ナデ、指頭圧痕。	①1～2mmの砂粒を多く含 む ②やや不良 ③橙色、 褐色	黒斑あり	A22-50
13	磨製石斧	L (7.5) W 5.8 T 3.3	石斧の刃部を欠失する。横断面は1面が山 形をなす楕円形。基部、両側縁部は加撃に より剥離欠失部が多い。		$\frac{1}{2}$ 欠失(145)g 粘板岩	A22-49

土器群1

1	甕	◎ (16.6)	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目後 上半ヨコナデ。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内) 淡橙色	黒斑あり	A8-44
---	---	----------	---	---------------------------------------	------	-------

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆ 器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
2	高杯		風化著しい。外面にハケ目。 赤彩後の放射状暗文。	① 1mm前後の砂粒を含む ②不良 ③(外)褐色(内)乳 褐色	赤彩 煤付着	A 8-24
3	高杯	○ 9.2	全面風化。 杯部(外)ハケ目。(内)剥落。 脚部(外)上半ヘラ磨き、下半剥落。接合 部ハケ目後ナデ。(内)脚柱部上半不明。 下半ヘラ削り後ナデ。	① 1~2mmの砂粒を含む ②不良 ③乳褐色、淡橙褐 色	赤彩	A 8-29
4	高杯	○ (9.0)	(外)上半一部ハケ目、ヘラ磨き後脚裾部 ナデ、端部ヨコナデ。(内)脚柱部上半不明、 下半ヘラ削り後ナデ。脚裾部ハケ目、指頭 圧痕。絞り目。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩	B 8-25
5	(脚部)	○ (15.6)	(内外)ヘラ磨き後脚端部ヨコナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③乳褐色		A 8-44
6	敲石	L 21.0 W 10.0 T 5.8	端部寄りの両面に敲きによる凹み。		完存 1.8kg 砂岩	B 8-23

土器群 2

1	甕	◎ 15.8 △ 25.0 ☆ 26.5	(外)体部ハケ目後下半ナデ、肩部ヨコナ デ。(内)体部ヘラ削り後底部ナデ、指頭 圧痕。	① 1~2mmの砂粒を多く含 む 5mm大の砂粒有 ②良 好 ③淡褐色	ほぼ完形 煤、炭 化物付着 黒斑あ り	B12-30
2	甕	◎ 17.0 △ 27.0 ☆ 27.2	(外)体部ハケ目。(内)体部ヘラ削り。 底部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	ほぼ完形 煤、炭 化物付着	B12-33
3	高杯	◎ 15.9 ○ 9.4 ☆ 12.1	杯部(外)ハケ目後ナデ。(内)ナデ。 脚部(外)面取成形後ナデ。ハケ目後ナデ、 指頭圧痕。絞り目。 赤彩後の放射状暗文2段。	① 1mm前後の砂粒を含む 3~4mm大の砂粒有 ②良 好 ③淡褐色	完形 赤彩	B12-27
4	高杯	◎ 15.5 ○ 8.8 ☆ 12.6	杯部(外)下半ハケ目後ヨコナデ。(内) ナデ。 脚部(外)上半ヘラ磨き後下半ナデ。杯部 と接合の後ハケ目。(内)上半ナデ、下半 ハケ目、指頭圧痕。絞り目。 赤彩後の放射状暗文2段。	① 1mm前後の砂粒を含む 7mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	ほぼ完形 赤彩	B12-3
5	高杯	◎ 15.6 ○ 9.8 ☆ 11.4	杯部(外)ハケ目後ナデ。(内)風化。 脚部(外)面取り成形後ナデ接合部工具 による1条の沈線。(内)ハケ目後ナデ。 絞り目。赤彩後の放射状暗文痕。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	ほぼ完形 赤彩 黒斑あり	A12-21

土器群 3

1	甕	◎ (14.0) ○ 6.4 △ 20.0 ☆ (22.5)	(外)口縁端面に2条の凹線。体部上半ハ ケ目後下半ヘラ磨き。底面ハケ目後ナデ。 (内)体部ヘラ削り、下半は丁寧な調整。	① 2mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤多く付着 黒斑 あり	A 7-283
2	甕	◎ 11.2 ○ 6.0 △ 15.4 ☆ 18.7	(外)口縁端面に2条の凹線。体部はナデ 状の薄い縦位のハケ目。成形時の指頭圧痕。 底面ナデ。(内)体部ヘラ削り後底部ナデ。	① 2mm前後の砂粒を多く含 む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A 7-283

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
3	甕	◎ (14.2)	(外) 口縁部3条の沈線。体部煤により不明、ハケ目痕。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③褐色、暗褐色	煤多く付着 炭化物付着	A8-353
4	甕	◎ 16.0	(外) 口縁部ヘラ工具による3条の沈線を1段ずつ周回させる。体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	A8-353
5	甕	◎ (18.0)	(外) 口縁部4条の櫛描平行沈線。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	煤付着 黒斑あり	A8-356
6	甕	◎ 13.9	(外) 口縁部4条の沈線。体部弱いハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤多く付着 炭化物付着	A7-284
7	甕	◎ 16.6	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色	炭化物付着 黒斑あり	A7-284
8	甕	◎ (14.7)	(内) 肩部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③橙褐色	煤、炭化物付着	A8-353
9	(底部)	○ 3.6	(外) ハケ目、底面不明。(内) ヘラ削り後底部ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③橙褐色	黒斑あり	A8-356
10	(底部)	○ 3.4	(外) ハケ目後ナデ。底面ハケ目。(内) ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色、赤褐色	煤付着	A8-356
11	(底部)	○ 3.0	(外) ハケ目後底面ナデ。(内) ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③褐色、赤褐色	煤多く付着	A8-353

土器群 4

1	壺	◎ 27.0 ○ 11.2 △ 37.0 ☆ 47.6	(外) 口縁部平行沈線を2段に分けて施した後上端部をヨコナデ、12~13条が観察される。頸部ハケ目。体部は縦、斜位のハケ目後ヘラ磨き、 $\frac{1}{2}$ 上半は疎に施す。底面ハケ目後ヘラ磨き。 (内) 頸部ナデ、指ナデ。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡褐色~灰褐色	ほぼ完形 黒斑あり	A10-42
2	壺	◎ (14.3)	(外) 口縁部3条の平行沈線。肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。頸部に指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色~橙色		A10-53
3	壺	◎ 5.4 ○ 5.0 △ 7.9 ☆ 8.9	(外) 頸部ハケ目痕。体部は下半を面取り成形後全体をナデ後ヘラ磨き、底部ヨコナデ。底面ナデ。 (内) 口縁部ハケ目後ナデ。頸部以下ヘラ削り後底部指ナデ、工具痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③灰色、暗灰色	完形 赤彩 黒斑あり	A10-35
4	壺	◎ 17.2 ○ 13.5 △ 20.0 ☆ 20.8	(外) 口縁部3条の凹線。体部ハケ目後ヘラ磨き。接合部面取り後ナデ。脚台部ハケ目後下半ヨコナデ。 (内) 体部丁寧なヘラ削り後頸部ヘラ磨き。脚台部上半ナデ、下半ヨコナデ。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③(外)乳褐色(内)暗褐色	炭化物付着 黒斑あり	A10-36
5	壺	◎ (13.8)	(外) 口縁端面に2条の平行沈線。頸部ヘラ磨き以下剝落不明。 (内) 口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り後ヘラ磨き。	①1.5mm以下の砂粒を多く含む 4mm以下の砂粒有 ②良 ③淡褐色		A10-57

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
6	壺	◎ 11.3 ○ 7.4 ☆ 15.2	(外) 口縁部貝? 工具による6条の平行沈線。体部 $\frac{2}{3}$ 上半は櫛描による円弧状の施文を八の字に組合せて5組をそれぞれ4段交互方向に施すが、中央以下は重複して斜方向に施す。後、上段から3条・3条・2条・2条のヘラ工具による沈線で各段を区画する。体部中央の面には長軸約5mmの楕円形の竹管状刺突文が周回する。体部下位・脚部ヘラ磨き、後接合部1条の沈線。脚部ヨコナデ。脚端面6条の平行沈線。 (内) 口縁部ヘラ磨き。径3mm強の円孔2ヶ1対を内から穿孔、対になる部分は欠失。頸部以下ヘラ削り後ナデ及びヘラ磨き。	① 1mm前後の砂粒を含む ② 良好 ③ 乳褐色	黒斑あり	A10-37
7	壺	◎ 10.8 △ (15.3)	(外) 口縁部6条の櫛描平行沈線。体部ヘラ磨き後 $\frac{2}{3}$ 上半は櫛描による円弧状の施文を八の字に組合せ4段交互方向に施す。後、ヘラ工具による3条の沈線で各段を区画する。体部中央は綾杉文で装飾された突起状の稜を上下にもち、その中間に径約4mmの竹管文を周回させる。 (内) 口縁部ヘラ磨き後一部ヨコナデ。体部丁寧なヘラ磨き後中央部指ナデ。口縁部に径3mmの円孔2ヶ1組を内から穿孔、対になる部分は欠失。	① 5mm前後の砂粒を含む ② 良好 ③ 灰褐色、暗灰色		A10-38
8	甕	◎ 19.6 △ 20.0	(外) 口縁部4条の浅い平行沈線。体部ハケ目後胴部ナデ。後肩部にハケ目工具による連続刺突文。(内) 体部ヘラ削り。	① 2mm以下の砂粒を含む ② 良好 ③ 淡褐色	煤多く付着	A10-58
9	甕	◎ 18.7	(外) 口縁端面5条の平行沈線後上端部ヨコナデ。体部細かいハケ目。(内) 頸部ハケ目後ナデ。以下ヘラ削り。	① 2.5mm以下の砂粒を多く含む ② 良 ③ 淡褐色、灰褐色		A10-52
10	甕	◎ (20.8)	(外) 口縁部5条の平行沈線。体部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。	① 2.5mm以下の砂粒を含む ② 良好 ③ 暗橙褐色		A10-61
11	甕	◎ 16.8 ○ 4.5 ☆ 20.2	(外) 口縁部3条の凹線。体部ハケ目後肩部ハケ目工具による連続刺突文。底面ナデ。 (内) 体部ヘラ削り後肩部にハケ目。	① 2mm前後の砂粒を含む ② 良好 ③ 褐色	煤多く付着 炭化物付着	A10-45
12	甕	◎ 16.9 ○ 3.8 △ 18.7 ☆ 22.5	(外) 口縁部4~5条の平行沈線。体部工具によるナデ? 後肩部に連続刺突文。底面ナデ。底部に指頭圧痕。(内) 体部ヘラ削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ 淡褐色~淡黄褐色	ほぼ完形	A10-45
13	甕	◎ (16.2)	(外) 口縁部4条の平行沈線。	① 3mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ (外) 淡灰褐色 (内) 淡褐色		A10-49
14	甕	◎ (16.0)	(外) 口縁部9条の平行沈線。(内) 口縁部ヘラ磨き。肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ② 良好 ③ 淡褐色	煤付着	A10-59
15	高杯	◎ (30.0)	(内外) ヘラ磨き。	① 1mm以下の砂粒を含む ② やや不良 ③ 淡褐色		A10-52
16	高杯	◎ (20.2)	杯部 (内外) ヘラ磨き。 脚部 (外) 縦ヘラ磨き後疎な横ヘラ磨き。接合部はヘラ磨き状の沈線2条。(内) 脚柱部丁寧なナデ。屈曲部以下ヘラ削り後ナデ。	① 2mm以下の砂粒を含む ② 良 ③ 淡橙褐色		A10-68

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
17	高杯	◎ 22.7	杯部(内外)ヘラ磨き。外面下半にハケ目痕。 脚部(外)接合部ハケ目、以下ヘラ磨き。 (内)ナデ。裾部は丁寧なナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	脚部水銀朱付着	A10-51
18	(脚部)	○ (10.6)	(外)ヘラ磨き。(内)ヘラ削り。 脚端部(内外)ヨコナデ。端面にハケ目痕。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)淡褐色 (内)明褐色		A10-42
19	(脚部)	○ 14.0	(外)ハケ目後縦ヘラ磨き後脚裾部横ヘラ磨き。 (内)ヘラ削り、脚裾部ヨコナデ。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)淡褐色(内)明褐色		A10-43
20	蓋	○ 13.6 ☆ 6.7	(外)つまみ部ナデ。体部ヘラ磨き。口縁 端面5条の平行沈線後上端部ヨコナデ。 (内)上半ナデ、下半ヘラ削り、口縁端部 ヨコナデ。 つまみ中央に外径1cm強の通し穴をもつ。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	完形 煤付着 黒 斑あり	A10-40
21	蓋	○ 10.0 ☆ 5.3	(外)つまみ部ナデ。以下ハケ目後ナデ。 (内)ナデ、指頭圧痕。 つまみ部中央に外径6mmの通し穴を外から 穿つ。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)暗 褐色	ほぼ完形 黒斑あ り	A10-34
22	蓋	○ 4.6 ☆ 3.6	(外)ハケ目後ナデ。(内)口縁部ヘラ削り。 つまみ部中央に外径約4mmの通し穴を双方 から穿つ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)橙褐色(内) 淡褐色	ほぼ完形 口縁部 楕円形	B9-19

遺構外遺物

1	壺	◎ 22.7 △ 27.2 ☆ 34.4	(外)頸部ハケ目後ヨコナデ。屈曲部突帯 貼付後ヨコナデ。体部縦ハケ目後上半横ハ ケ目。後肩部ハケ目と同種の平行沈線・連 続刺突文。(内)頸部ナデ、指ナデ。体部 ヘラ削り後一部ナデ、指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒を含む ②良好 ③淡褐色、淡褐色	煤、炭化物付着	A12-16
2	壺	◎ 19.0 △ 25.9	(外)体部ハケ目後肩部にハケ目工具によ る刺突綾杉文3ヶ、周回しない。(内)体 部ヘラ削り。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③乳褐色	黒斑あり	A15-4
3	壺	◎ (23.2) △ 33.0 ☆ (42.2)	(外)体部縦ハケ目後肩部横ハケ目後底部 ナデ。(内)体部ヘラ削り後底部ナデ。指 頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤、炭化物付着	A12-17
4	壺	◎ 10.4 △ 13.9 ☆ 15.7	(外)口縁部ヨコナデ後縦ヘラ磨き。体部 ハケ目。(内)体部丁寧なヘラ削り、下半 ナデ、指頭圧痕。	①0.5mm前後の砂粒を含む ②良 ③乳褐色		A15-11
5	壺	◎ (10.8) △ 9.5 ☆ (10.5)	(外)体部ハケ目。口縁部に指頭圧痕。(内) 体部ヘラ削り後肩部ナデ、指ナデ。底部ナ デ、指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		A14-4
6	壺	◎ 7.8 △ 10.6 ☆ 9.6	(外)体部ハケ目、中央部に指頭圧痕。 (内)体部ヘラ削り後底部中央ナデ。頸部 に指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A14-9
7	壺	◎ 17.0 △ 27.6	(外)体部斜位及び縦ハケ目後上半横ハケ 目後肩部ナデ。底部は煤の為不明。(内) 体部ヘラ削り、底部に指頭圧痕。	①1.5mm以下の砂粒を多く 含む ②やや不良 ③淡褐 色	煤多く付着	A15-13

挿図 番号	器 種	法 量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
8	壺	◎ 19.2 ○ 8.0 △ 32.8 ☆ 41.3	(外) 体部叩き目後縦ハケ目後肩部横ハケ目後一部ナデ。(内) 体部ヘラ削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	完形 煤付着	A15-18
9	甕	◎ 12.3 △ 23.5 ☆ 23.6	(外) 肩部縦ハケ目後以下斜位ハケ目。後体部下半に幅広の薄いハケ目。(内) 体部ヘラ削り後下半一部ナデ、指頭圧痕。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	ほぼ完形 黒斑あり	A12-10
10	甕	◎ 14.7 △ 21.1 ☆ 24.1	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ後7条の櫛描平行沈線。(内) 体部ヘラ削り後底部中央ナデ。指頭圧痕。	① 1mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色～淡灰褐色	ほぼ完形 煤、炭化物付着 黒斑あり	B15-2
11	甕	◎ 14.0 △ 21.2 ☆ 24.0	(外) 体部縦ハケ目上半横ハケ目。(内) 体部ヘラ削り、底部指頭圧痕。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	ほぼ完形 煤付着	A15-24
12	甕	◎ (14.1) △ 21.4 ☆ (23.7)	(外) 体部叩き目後ハケ目後下半ナデ。肩部に8条の平行沈線。(内) 体部は丁寧なヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色～淡灰褐色	煤多く付着 炭化物付着	A15-15
13	甕	◎ (14.2)	(外) 体部縦ハケ目後横ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む 3mm以下の砂粒有 ②良 ③橙色～淡橙褐色	煤付着	A12-14
14	甕	◎ 13.6 △ 19.7 ☆ 23.0	(外) 体部縦ハケ目後横ハケ目。(内) 体部ヘラ削り、下半指ナデ、指頭圧痕。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③淡橙褐色	ほぼ完形 煤多く付着	A15-14
15	甕	◎ 14.3 △ 22.4 ☆ 27.7	(外) 胴部に叩き目後体部ハケ目。肩部は横ハケ目後工具による刺突文上段3、下段4を施した綾杉文、周回しない。(内) 体部丁寧なヘラ削り後底部ナデ、指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤、炭化物付着	A12-9
16	甕	◎ 15.4 △ 23.0 ☆ 27.0	(外) 体部ハケ目後下半一部ナデ。肩部は横ハケ目後ハケ目工具による連続刺突文が周回する。(内) 体部ヘラ削り後底部中央ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	ほぼ完形 煤多く付着	A15-23
17	甕	◎ 16.7 △ 23.8 ☆ 28.8	(外) 口縁部ハケ目後ヨコナデ。体部縦ハケ目後上半、底部横ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。下半に指頭圧痕。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	完形 煤、炭化物多く付着	A15-27
18	甕	◎ 15.6 △ 22.2 ☆ 26.8	(外) 体部縦、斜位のハケ目後上半横ハケ目後肩部ナデ。(内) 体部ヘラ削り後一部ナデ。底部ナデ。体部下半に指頭圧痕。	① 2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤多く付着	A12-17
19	甕	◎ 16.2 △ 24.6 ☆ 28.2	(外) 口縁部指ナデ後ヨコナデ。底部に叩き目後体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目後弱いヨコナデ。体部ヘラ削り後下半一部ナデ、指頭圧痕。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	ほぼ完形 煤付着 黒斑あり	A12-8
20	甕	◎ 15.1 △ 22.4 ☆ 26.7	(外) 体部縦ハケ目後肩、底部横ハケ目。(内) 体部ヘラ削り後底部ナデ。指頭圧痕。	① 2～3mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色	ほぼ完形 煤多く付着 炭化物付着	A12-1
21	甕	◎ 13.9 △ 20.7 ☆ 24.5	(外) 体部に叩き目後ハケ目後下半一部ナデ。(内) 体部ヘラ削り後一部ナデ。底部はナデ。指頭圧痕。	① 1mm前後の砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色	完形 煤、炭化物付着 黒斑あり	A12-4
22	甕	◎ 15.7 △ (23.2)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り後一部ナデ。	① 5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤多く付着	A12-17

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △ 最大胴径 ☆ 器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	① 胎土 ② 焼成 ③ 色調	備 考	取上番号
23	甕	◎ 16.2 △ 25.2	(外) 体部斜位ハケ目後肩部に横ハケ目。 (内) 口頸部ハケ目後ヨコナデ。体部ヘラ 削り。	① 1mm前後の砂粒を多く含 む 4~5mm大の砂粒有 ②良 ③淡橙褐色	煤多く付着	B14-3
24	甕	◎ (24.8) △ (27.0)	(外) 体部縦位のハケ目後横ハケ目後肩部 ナデ。 (内) 体部ヘラ削り後一部ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡黄褐色	煤付着	A11-58
25	甕	◎ 25.5 ○ 16.6 △ 29.8 ☆ 28.9	(外) 体部ハケ目後下半一部ナデ。底面ハ ケ目後ナデ。肩部に多条の櫛描平行沈線後 一部ヨコナデ、19~20条が残る。後ハケ目 工具による刺突文5、周回しない。 (内) 体部以上半剥落不明。以下ヘラ削り 後全体をナデ。底部に指頭圧痕。	① 0.5mm以下の砂粒を多く 含む 2mm以下の砂粒有 ②やや不良 ③淡褐色	ほぼ完形 煤付着	A15-17
26	高杯	◎ 17.6 △ 11.4 ☆ 13.0	杯部 (外) 接合部ハケ目後全体をヘラ磨き。 (内) 口縁部横ハケ目後横ヘラ磨き。 脚部 (外) 上半ヘラ磨き、下半風化の為不 明。(内) 上半ヘラ削り、下半ハケ目後ナデ。 3方向に外径1cm強の円孔を外から穿つ。 放射状暗文2段。	① 1mm以下の砂粒を多く含 む ②やや不良 ③明橙 色、淡褐色	完形 赤彩?	A15-20
27	高杯	◎ 16.6	風化著しい。(外) 口縁部ヘラ磨き。 (内) 不明。 赤彩後の暗文痕。	① 1mm以下の砂粒を多く含 む ②良 ③淡褐色	赤彩	A15-22
28	高杯	◎ 17.0	(外) ナデ。接合部に指頭圧痕。 (内) 上半ハケ目後全体をナデ。 赤彩後の放射状暗文痕2段。	① 1mm以下の砂粒を多く含 む ②良 ③淡褐色	赤彩	A14-6
29	壺	◎ (14.5)	(外) 口縁部後残存部に径約1cmの竹管文 1。肩部ナデ後5条単位の櫛描目。 (内) 肩部ヘラ削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		B10-73
30	壺	◎ 8.7 △ 17.4	逆U字状の把手付。 (外) 口縁部6条の凹線。体部ハケ目後横 後斜位のヘラ磨き。肩部に把手。 (内) 体部ヘラ削り後指頭圧痕。把手接合 部ナデ。肩部に絞り目。	① 2mm前後の砂粒を多く含 む ②良 ③(外) 橙褐色 (内) 淡褐色	煤付着	B10-220
31	壺?	◎ (16.8)	(外) 口縁端面に5条の平行沈線。肩部に 櫛描文。 (内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A10-215
32	甕	◎ 14.2	(外) 口縁端面に3条の独立した沈線。肩 部ハケ目後弱いヨコナデ。 (内) 口縁端部に1条の沈線? 頸部ヘラ 磨き後上半ナデ、肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A10-83
33	甕	◎ (14.6)	(外) 口縁端面に2条の沈線。肩部ハケ目。 (内) 肩部ヘラ削り。	① 2mm以下の砂粒を多く含 む ②良 ③褐色	煤多く付着	A10-71
34	甕	◎ (15.4) △ (21.6)	(外) 体部横後縦ハケ目、斜位ハケ目。 (内) 体部ヘラ削り。	① 2mm前後の砂粒を多く含 む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A10-67
35	甕	◎ 12.8 △ 19.0	(外) 口縁端面に3条の凹線。体部ハケ目 後下半上方向のヘラ削り。 (内) 口縁部ハケ目痕。体部ヘラ削り後一 部工具によるナデ、頸部にも及ぶ。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	煤付着	A10-214
36	(底部)	○ 4.5	(外) ヘラ磨き。(内) ハケ目。中央部ナデ。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A10-69

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
37	(底部)	○ 6.5	(外) ヘラ磨き。底面ナデ。(内) ヘラ削り。	①3.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色		A10-65
38	高杯	○ 13.6	(外) ハケ目後ヘラ磨き。脚端部ヨコナデ。 (内) 脚柱部ヘラ削り、脚裾部ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A10-186
39	壺	◎ (8.0)	(外) 肩部ハケ目後体部ナデ。(内) ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	煤多く付着	A10-215
40	高杯?	◎ 20.8	(外) ハケ目後縦ヘラ磨き後横ヘラ磨き後 口縁部ヨコナデ。 (内) ヘラ磨き後口縁部ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A10-62
41	壺	◎ (17.2)	(外) 下垂する口縁端面にヘラ工具による 刺突綾杉文。下端部内側に成形時の指頭圧 痕。 (内) 口縁部に5条単位のハケ状工具によ る連続刺突文を2段に押しきする。	①1mm以下の砂粒を含む ②不良 ③淡褐色	黒斑あり	B21-1
42	壺	◎ (14.4)	(外) 頸部上半ヘラ磨き。下半に断面三角 形状の突帯貼付後ヨコナデ後刻み目。突帯 上段に2条、下段に1条以上のヘラ描沈線。 (内) 口縁部一部ヘラ磨き。	①1~3mmの砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③褐色		B22-5
43	壺	◎ (10.4)	(外) 体部ハケ目後3条の沈線。 (内) 体部ハケ目。1/6残存部に外径6.5mm の円孔1が残り外から穿つ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)淡 灰褐色		B25-1
44	壺	◎ (13.8)	(外) 断面三角形の突帯貼付後ヨコナデ。 後口縁部と突帯に刻み目。(内) ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③褐色	小片 煤多く付着	A26-1
45	(口縁部)	◎ (25.0)	(外) 口縁部に断面三角形の突帯貼付後 ヨコナデ後刻み目。体部ハケ目。 (内) ナデ。	①1~2mmの砂粒を含む 7mm大の砂粒有 ②やや不 良 ③淡褐色		A22-2
46	甕	◎ (20.0)	(外) 体部ハケ目。 (内) 頸部ハケ目後ナデ。体部ハケ目。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色、淡橙色	煤付着	A21-15
47	甕	◎ (29.6)	(外) 体部ハケ目後頸部ヨコナデ。 (内) 体部幅広のハケ目。	①1~2mmの砂粒を含む 4mm大の砂粒有 ②良好 ③淡褐色	煤付着	A21-15
48	甕	◎ (17.0) ○ (5.7) ☆ (33.2)	(外) 口縁端面に3条の凹線。体部叩き目 後上半ハケ目、下半ヘラ磨き。底部ナデ。 (内) 体部上半ハケ目後下半ヘラ削り後一 部ナデ、指頭圧痕。	①2~3mmの砂粒を多く含 む 5mm大の砂粒あり ②良 ③淡褐色	炭化物付着	A25-3
49	(底部)	○ (6.2)	(外) 体部ハケ目後ヘラ磨き。 (内) ヘラ削り後底部ナデ。 脚台部(内外)ナデ。外面に指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒を多く含 む 4mm大の砂粒有 ②や や不良 ③褐色	黒斑あり	B21-5
50	(底部)	○ (19.6)	(外) 雑な調整でナデ一部ヘラ磨き、工具 痕。底面ハケ目。	①1~2mmの砂粒を多く含 む ②やや不良 ③灰褐色		A25-8
51	(脚部)	○ (8.0)	(外) ヨコナデ。上位に3条以上の平行沈 線。外径約2mmの月欠状の竹管文2を1組 として深く押捺する。1/6残存部に2組が 残る。 (内) ナデ後弱いハケ目。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A23-2

挿図 番号	器種	法量(cm) ○口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
52	(脚部)	○ <16.2>	体部(内外)不明。 裾部(内外)ヨコナデ後脚両端部に弧状の 刻み目。外面には同一工具による連続刺突 文を3段に施す。	①2mm前後の砂粒を多く含 む ②良好 ③乳褐色～淡 褐色		A23-3
53	壺	◎ <16.0>	(外)体部ハケ目。(内)肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③褐色～灰褐色		A4-2
54	壺	◎ <19.0>	(内)肩部ヘラ削り。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A13-294
55	壺	◎ 15.9 △ 22.4 ☆ 27.1	(外)体部下半縦ハケ目後横ハケ目後上半 ナデ。肩部に10条の平行沈線、下段に6条 の波状文。(内)体部ヘラ削り後底部ナデ、 指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む 3mm大の砂粒有 ②良好 ③淡乳褐色、淡褐色	煤付着	B5-23
56	壺	◎ (19.2)	(外)頸部ハケ目後ヨコナデ。(内)肩部 ヘラ削り。	①1～2mmの砂粒を多く含 む ②良 ③淡橙褐色		A8-241
57	壺	◎ <14.8>	極端に内傾する口縁部をもつ。 (外)肩部ハケ目痕。(内)肩部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A5-27
58	壺	◎ <12.9>	(外)頸部ハケ目痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		B4-6
59	壺	◎ 15.4 △ (30.3)	(外)体部ハケ目。(内)体部ヘラ削り。 頸部に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を多く含 む 4mm大の砂粒有 ②や や不良 ③(外)淡褐色(内) 灰褐色		A11-4
60	壺	◎ (18.8)	(外)口縁部ハケ目痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		B7-23
61	壺	◎ (8.8) △ (9.0) ☆ 14.2	(外)体部ハケ目。肩部一部剝落。(内) 体部ヘラ削り後ナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		B11-185
62	壺	◎ 4.4 △ 13.0	短頸。 (外)口縁部風化するがヘラ磨き。体部ヘ ラ磨き後肩部にヘラ工具による刺突綾杉 文。下2段に3～4条の平行沈線。底部ハ ケ目後ナデ。台接合部ヨコナデ。 (内)体部ナデ、指頭圧痕。口縁部に径3mm の円孔2ヶ1組が1対外から穿つ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③乳褐色	黒斑あり	B4-21
63	甕	◎ (19.8)	(内)肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含 む ②良 ③淡褐色		A8-304
64	甕	◎ <16.6>	(内)肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色		A10-8
65	甕	◎ (15.4)	(外)体部ハケ目後肩部弱いナデ、後ハケ 工具による連続刺突文、下段に同一工具に よる7条の平行沈線。 (内)肩部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③淡橙褐色		B8-84
66	甕	◎ 16.1 △ 18.1	(外)体部ハケ目後底部ナデ。肩部に7条 単位の櫛描平行沈線後、下段に波状文。 (内)体部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)淡褐色(内)褐 色	煤付着	A4-41
67	甕	◎ (15.6)	(外)体部細かいハケ目後肩部に7～8条 の櫛描平行沈線。(内)体部ヘラ削り。	①2mm以下の砂粒を含む ②不良 ③淡褐色	煤付着	B4-17

挿図 番号	器 種	法 量 (cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備 考	取上番号
68	甕	◎ 17.8	(外) 体部ハケ目後ナデ後肩部に13条の櫛 描平行沈線。(内) 体部丁寧なヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A1-2
69	甕	◎ (16.6)	(外) 体部ハケ目。(内) 体部ヘラ削り。 頸部に指頭圧痕。	①2mm前後の砂粒を多く含 む ②良好 ③淡褐色	煤付着	A11-8
70	甕	◎ (23.3)	(外) 体部ハケ目。(内) 口縁部ハケ目痕。 体部2種のハケ目。	①3mm大の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色		A10-12
71	甕	◎ (14.0)		①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤付着 黒斑あり	B10-66
72	甕	◎ (12.7)		①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰褐色	煤付着	B10-69
73	甕	◎ (13.2) △ (18.4) ☆ (18.6)	(外) 体部上半縦ハケ目後肩部横ハケ目、 下半別種の細かな縦ハケ目後一部横ハケ 目。(内) 体部ヘラ削り後下半ナデ、指頭 圧痕。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	炭化物?付着 黒 斑あり	A11-36
74	甕	◎ 15.2 △ (24.5)	(外) 体部ハケ目後胴部ナデ。(内) 口縁 部ハケ目後ヨコナデ。体部ヘラ削り。肩部 に指頭圧痕。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	黒斑あり	B12-4
75	甕	△ 24.2	(外) 体部叩き目後ハケ目後肩部横ハケ目。 (内) 体部ヘラ削り。下半に指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	煤多く付着 炭化 物付着 黒斑あり	B12-7
76	鉢?	◎ (19.2)	(内外) 体部剥落不明、内面にハケ目痕。	①1mm前後の砂粒を多く含 む ②不良 ③淡橙褐色	赤彩?	B8-41
77	低脚杯	◎ (12.0) ○ 8.8 ☆ (7.9)	(外) 杯部風化するが脚部までヘラ磨き。 脚端面ヨコナデ。 (内) 杯部ヘラ削り後縦ヘラ磨き後口縁部 ヘラ磨き。脚部ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	赤彩 黒斑あり	A8-33
78	低脚杯	○ 6.9	杯部(外) 上半ヘラ磨き。下半ハケ目。(内) ヘラ磨き。 脚部(内外) ヨコナデ後接合部外面にヘラ 磨き。	①1mm以下の砂粒を多く含 む ②不良 ③淡黄褐色~ 褐色		B3-1
79	壺	◎ 10.7	やや扁平な底部に肩部の張った体部と直立 する口縁部を接合。底部中央に脚部剥離痕。 (外) 体部ハケ目後肩部、稜上部ヨコナデ、 稜以下ハケ目後ナデ、指頭圧痕。 (内) 体部ナデ、上半指ナデ、指頭圧痕。	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色	黒斑あり	B12-6
80	壺	◎ (5.2) △ (7.8)	(外) 体部ヘラ磨き。(内) 頸部ヘラ削り。 以下ナデ後ヘラ磨き。 口縁部1/2残存部に外径2.5mmの円孔1が 残る。円孔は外から穿つ。2孔1組の可能性。	①2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A4-12
81	壺	◎ (7.0)	(内外) 体部細かいヘラ磨き後口縁部外面 に弧状の連続刺突文を2段に施す。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色		A3-3
82	壺	△ 5.3	(外) 体部ハケ目後肩部ヨコナデ。 (内) 体部ナデ。	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)灰褐色(内)暗 灰褐色		B10-1
83	蓋	◎ 5.6 ☆ 3.1	(外) ナデ後口縁部ヨコナデ後連続刺突文。 (内) 天井部ナデ、以下ヨコナデ。 蓋は1/2強の残存で天井部には円孔の2ヶ1 組として2組が対の位置に穿孔か。	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	赤彩	A5-26

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
84	須恵器 椀	○ < 6.6 △ < 11.3	鋭い稜2条をつまみ出す。 (外) 体部ヨコナデ後11~12条の波状文。 底部ヘラ削り底面不明。(内) ヨコナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色		(他)-13
85	土錘	L 4.6	手ずくね成形後ナデ。通穴径約9mm、両小口で広がる。	① 1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰褐色	(65) g	A 8-81
86	土錘	L 2.3 W 1.5	手ずくね成形後ナデ。通穴径約2.5mm、両小口で広がる。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡灰褐色	完存4.2g 黒斑あり	A 8-39
87	壺	◎ 9.5 ○ 5.0 ☆ 16.4	逆U字状の把手付。 (外) 口縁端面に一条の沈線。頸部にヘラ工具による7条の沈線。体部ハケ目後胴部ヘラ磨き。底面ハケ目後ナデ。肩部にハケ状工具による連続刺突文を周回させる。刺突は下段後上段。把手は手ずくね成形後ナデ。接合部ナデ。 (内) 体部ヘラ削り後底部中央ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 暗灰褐色 (内) 褐色	ほぼ完形	(他)-19
88	壺	◎ (10.7) △ (14.1)	注口付。肩部に注口剝離痕。 (外) 口縁部ヘラ磨き。体部縦後横ヘラ磨き。(内) 体部ヘラ削り。	① 2mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③褐色	煤付着	A 8-35
89	壺	◎ (16.0)	(外) 頸部に指頭圧痕。	① 3mm前後の砂粒を含む ②良好 ③(外) 褐色(内) 淡灰褐色		A 9-20
90	壺	◎ 11.8 △ 16.3	(外) 風化。体部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡黄褐色	赤彩	B 8-58
91	壺	◎ 14.8	(外) 口縁端面に5条の独立した沈線。肩部ハケ目後頸部ヨコナデ後、ヘラ工具?による連続刺突文。体部ヘラ磨き。 (内) 体部ヘラ削り。	① 2mm前後の砂粒を含む ②不良 ③淡橙褐色		A16-3
92	甕	◎ (18.6)	(外) 肩部ハケ目後ナデ。(内) 肩部ナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	黒斑あり	A8-106
93	甕	◎ (12.9)	(外) 肩部縦ハケ目。(内) 肩部ナデ。	① 0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡灰褐色		A8-346
94	甕	◎ (16.0)	(外) 口縁端面5条以上の沈線。頸部ハケ目。(内) 頸部ヘラ磨き。 口縁部は $\frac{1}{2}$ 残存し外径約8mmの円形浮文1が残る。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③(外) 淡橙褐色 (内) 淡褐色		A11-32
95	甕	◎ (19.3)	(外) 口縁端面3条の平行沈線。 (内) 口縁部指頭圧痕。肩部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡橙褐色		A10-8
96	甕	◎ (16.3)	(外) 口縁部9~10条の平行沈線。肩部ハケ目。(内) 肩部ヘラ削り。頸部に工具痕。	① 2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外) 明褐色 (内) 淡褐色		B11-65
97	甕	◎ (17.0)	(外) 口縁端面に4条の凹線。(内) 頸部指ナデ後ヨコナデ。肩部ヘラ削り。	① 3mm以下の砂粒を含む ②良好 ③橙褐色		A 9-15
98	甕	◎ (14.6)	(外) 口縁部4条の沈線。体部ハケ目後肩部ヨコナデ。(内) 体部ヘラ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色	煤付着	A 5-21
99	甕	◎ 20.6 ○ 7.2 △ 26.9	(外) 口縁端面2条の凹線。体部ハケ目後肩部ヨコナデ。底面ハケ目後ナデ。肩部に貝?工具による連続刺突文。 (内) 肩部ハケ目、指頭圧痕。体部ヘラ削り後底部指頭圧痕。	① 1~2mmの砂粒を多く含む 5mm大の砂粒有 ②良好 ③淡灰褐色	煤、炭化物付着	A11-60

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
100	甕	◎ (23.0)	(外) 口縁部5条の平行沈線。(内) 肩部ヘラ削り後頸部ヘラ磨き後口縁部ヨコナデ。	①1~2mmの砂粒を含む ②やや不良 ③褐色	煤付着	A8-294
101	甕	◎ (15.8)	(外) 口縁部7条の浅い平行沈線。肩部ヘラ磨き。(内) 肩部ヘラ削り後全体にヘラ磨きを施した後口縁上部ヨコナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③乳褐色	煤付着	A4-8
102	甕	◎ (16.6)	(内外) 口頸部ヘラ磨き。 (内) 肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		B11-65
103	甕	◎ (15.2)	(内) 肩部ヘラ削り後口頸部ヘラ磨き後口縁部ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③乳褐色~褐色	小片	B4-22
104	(脚台部)	○ 14.7	(外) 体部ナデ。接合部面取り成形後ハケ目。(内) 体部ハケ目後疎なヘラ磨き。脚台部ヘラ削り。 脚端部(内外) ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色	赤彩 黒斑あり	A11-41
105	(底部)	○ 2.9	(外) ハケ目。底面ナデ。(内) ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色		A8-183
106	(体部)	○ (4.6)	(外) ハケ目。底面ナデ。(内) ヘラ削り。 底部ナデ、指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	煤、炭化物付着	A8-171
107	鉢	◎ (15.6)	(外) 口縁部2~3条の独立した沈線。以下剥落不明。(内) 体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡橙褐色		B8-51
108	低脚杯	◎ 10.6 ○ 5.2 ☆ 4.5	杯部(外) ハケ目後ナデ、指頭圧痕。 (内) ヘラ磨き。 脚部(内外) ヨコナデ後内面中央部ナデ、ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	黒斑あり	A8-224
109	低脚杯	◎ 12.7 ○ < 4.1 ☆ < 4.6	杯部(内外) ヘラ磨き。外面にハケ目痕。 脚部(内外) ヨコナデ後接合部外面ヘラ磨き。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色		A4-43
110	器台	◎ (17.7)	(外) 口縁部5条の平行沈線。受部下半ハケ目後ヘラ磨き。筒部は幅広のヘラ磨きで上位に工具痕がつく。(内) 受部ヘラ削り後ヘラ磨き。筒部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		A9-16
111	器台		(外) 口縁上端部を欠失するが3条単位の平行沈線を2段に施した後径約6.5mmの2重圏スタンプ文。稜部ヨコナデ。以下ヘラ磨き。(内) ハケ目後ヘラ磨き。接合部ヘラ削り。台部不明。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	黒斑あり	A8-177
112	器台	◎ (20.4)	(外) 受部ナデ、稜部ヨコナデ後稜上部に5条単位の平行沈線を2段に施し、間に径約5mmの2重圏スタンプ文。(内) 受部ヘラ磨き。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色		B8-82
113	器台		(外) ナデ、稜部ヨコナデ後稜上部に3条、下段に5条の平行沈線を施した後径約6mmの2重圏スタンプ文。(内) ヘラ磨き。	①1.5mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)淡褐色(内)褐色		A5-25
114	器台		(外) 稜上位に5条単位の平行沈線を2段に施した後、径約6mmの2重圏スタンプ文。以下ヨコナデ。(内) 受部ヘラ磨き、接合部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③淡褐色		A9-54

挿図 番号	器種	法量(cm) ◎口径 ○底径 △最大胴径 ☆器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考	取上番号
115		◎ 5.0 ☆ 4.0	(内外) 手ずくね成形後ナデ。内面に指頭 圧痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)暗褐色 (内)淡褐色	完形	A 9-54
116	壺	◎ 7.0 △ 7.0 ☆ 8.1	(外) 体部ナデ、底面雑なナデ。(内) ヘ ラ削り。	①1mm前後の砂粒を含む ②良好 ③淡褐色	煤付着	B 9-17
117	蓋	◎ 14.8 ☆ 6.4	つまみ部ナデ。 体部(外)ハケ目後ナデ。(内)ヘラ削り。 天井部絞り目。 口縁部(内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③橙褐色		B 8-82
118		L (3.7) W 1.8	磨製。中太りの円柱状を呈し、一端は水平 な端面をもつ。楕円形の端面には成形時の 一方向の磨き筋が残る。		(20)g 安山岩	B24-2
119	砥石	L 12.2 W 9.9 T 3.7	使用痕4面。表裏面は凹面となる。側縁部 に長軸方向のU字状溝と端部にV字状の溝 をもつ。使用頻度が高い。		完存600g 微花崗岩	B22-1

第4章 ま と め

第1節 遺構について

今回の調査は広大な岩吉遺跡の中で北限とされている部分から南へ27m、幅16m程の細長い範囲であったが、弥生時代中期後葉から古墳時代後期初頭にかけての多くの遺構を検出した。水田遺構2面、井戸3基、土坑91基、溝状遺構36基、掘立柱建物5棟、土器群遺構4基である。他に歴史時代の溝1基が検出された。

水田

弥生時代後期後半、古墳時代初頭にそれぞれ位置付けられる水田面2面を検出した。弥生時代後期の第2水田面では、水田を直接区画する小畦、南西―北東方向に伸びる畦畔と一部そこから分岐する畦畔、水田に伴う溝と水口や杭列などの灌漑施設が検出されている。古墳時代初頭の第1水田面では、農道的な役割を果たしたと考えられる第2水田の畦畔同様に軸を南西―北東方向にとり幅最大1.36mの畦畔が検出された。第1・2水田面をとおしてA・B-4区を中心として層位が乱れており、また技術的にも困難で小畦など全容が把握できなかった。しかし、第2水田面の検出状況から、南側の用水路的な役割を果たしていたと考えられる溝SD-10に沿って畦畔が数本確認され、北側の小畦で区画された水田は一部軸が東西方向に振り不整形であることも合わせて、ある程度この溝に沿ったような形状で水田は区画されておりSD-10の北側に広がる緩斜面地形を利用することにより水口南側の溝から取水していたものと考えられる。

また、これより北側に位置するA-1区では、非常に安定した堆積状況を示す土層であることが試掘時に判明しており、プラント・オパール定量分析の結果から、近現代を含めて弥生時代後期、古墳時代前期の3期の水田の存在が指摘された⁽¹⁾。残念ながら調査には到らなかったが、A-1区以北には水田が安定した状態で包蔵されているものと思われる。加えて、弥生時代後期に相当する層には常緑広葉樹林の下床植物であるササ（タケ類）が土壌中に含まれるが、古墳時代前期になるとヨシが多く検出されることから、広葉樹林を拓いて水田が営まれたことにより、周辺部が低湿地化したであろうことが指摘されている⁽²⁾。また、地下水位の変動による環境の変化も考えられるところであり、比較的乾燥した地帯であったことがうかがえる。水田も腰まで水につかるような泥湿田ではなく地下水位が比較的低い水田であったものと考えられる。

井戸

B-2区でSE-01、A・B-8区でSE-03、B-10区でSE-02の計3基を検出した。いずれも井筒内出土土器から、SE-01は古墳時代前期初頭、SE-03は古墳時代前期前半、SE-02は古墳時代中期後半に位置付けられる。

時期的には時代が新しくなるほど南へ移動する傾向があるが、これらの井戸は規模や内部施設な

ど異なる点が多く、一定の系譜をもつ井戸とは考え難い。規模の小さなS E-01は底部に土器と小石からなる水のろ過装置と考えられる施設が確認されている。S E-03は3基の中では一番規模が大きく、掘り方も平面隅丸長方形に掘り込んだ面からさらに中央を円形に掘り込んだ二段掘りで、その上部には井戸枠に使用されたと考えられる削り抜きの丸太材を分割したものをはじめ板材を利用し、その板上に石を組んだ上部施設が検出されている。S E-02は板材を組合わせた井戸枠構造で、机の天板を惜しげもなく井戸枠に転用し、机の脚部は井戸の上部構造的な施設に用いられたものと考えられる。机をあえて意図的に利用したことも考えられるが、祭祀的な色彩をもつ遺物は出土していない。

また、S E-01・02が単独で立地するのに比べ、S E-03は周囲に土坑が分布する。S E-01は、周囲に遺構が存在せず、また小規模な井戸であることから、何らかの意図をもった井戸であることが考えられる。ただ、比較的乾燥していた土壌であったと考えられることからこの地域に井戸が存在することも納得できる。S E-03は上部に組まれていた材が井戸枠に使用されていたと考えられることから、本来S E-03の井戸枠に使用されていた材を抜きとって組み直した可能性もあり、とすれば比較的存続期間が長かったことが言えよう。底面から井戸祭祀に用いられたと思われるほぼ完形の形態の異なる甕2点が出土している。また、上層に2基の土坑S K-32・33がS E-03のほぼ中心に重複し、井戸との何らかの関連も考えられるところである。

土坑

計91基が検出され、出土土器および検出した層位から、弥生時代中期26基、弥生時代後期18基、古墳時代前期19基、古墳時代中期28基の内訳となる。

遺存状況から形状の明瞭なものを形態別にみると、平面形は、長楕円形・隅丸長方形23基、楕円形43基、円形14基である。断面形は、逆台形55基、椀状19基、皿状12基である。規模的には全長45cm程度の小規模なものから3mを越える大規模なものがある。ただ、A・B-20~27区で検出されている弥生時代中期の土坑は長楕円形・隅丸長方形の細長い平面形のものが多くみられ、同様の形態で完結する小規模な溝との区別が明瞭でなく、便宜上長軸に対し短軸の値が小さなものを溝として区別したが、溝としての機能やそのあり方をみると土坑と重複するかたちで存在するものが多く、今後課題を残す。

遺物の出土状況から土坑の多くは、規模が比較的小さく何も出土しなかったり小さな土器片が流入したような状態で出土したもの(A類)が多く、全体の6割程度を占める。それ以外は土器が炭片と一緒に出土しており、土器は底面から浮き気味で散在し数少なく出土したもの(B類)、それぞれの土器がある程度まとまった状態で数多く出土したもの(C類)、本来は完形であったと考えられる土器1点を出土したもの(D類)がある。A類としてはS K-15などのA-9区に集中する小規模な土坑群が挙げられ、円形に近い規模の小さなものが多いが、中にはS K-29のような長楕円形の土坑などもある。B類としてはS K-10・35のような楕円形の土坑が多い。C類は長さ1m・

深さ10cm以上の規模の大きな土坑が多く、楕円形・長楕円形・隅丸長方形が主となる。C類に代表されるSK-01・05ではいずれも数個体の土器がつぶれたように出土しており、埋土および土器の下には多量の炭化物が含まれ、使用痕のある石が出土している。土坑内で火を焚き、土器を一括投棄したものと考えられる。

なお、SK-27は、他の小規模な土坑と比べて、土坑の規模、出土遺物の量など大きな差異が認められる。残存で深さ76cmのすりばち状を呈し、土器とともに多量の腐葉土状の有機物、炭化物、串状木製品25+ α 、底板、桃と思われる種子11個が出土している。串状木製品は若干の形態差はあるものの長さや形状がほぼ同様であり、底板に柄穴状の方形の穴がみられることから同一の製品になる可能性も考えられるものの、岩吉遺跡とはやや形状を異とするが両端を尖らせた箸状木製品を中世の遺跡出土資料などをもとに斎申とする見解も近年示されており⁽³⁾今後課題を残す。また桃は古くから悪い霊や鬼を追い払うと考えられており祭祀色の濃い遺物でもある。これらのことから、SK-27では底板・串状木製品・土器・種子、また多くの土器、有機物、木片を用い、燃え盛る火中に土器を投げ入れた様子が想像され、祭祀色の極めて濃い土坑であると考えられる。

また、これらとは若干性格の異なる土坑として、D類のSK-14・22・28が挙げられる。長さが1m程度の楕円形の土坑内に本来は完形であったと考えられる甕1点が出土している。また、土坑底面からわずかに浮いているもののSK-26では土坑内で高杯の完形杯部が上向きに検出されており、甕の代わりに高杯を用いた可能性が考えられる。土器は廃棄ではなく安置されたと考えられ、祭祀行為に伴うものとすれば別の系譜を引く祭祀の形態があったものといえよう。

なお、A類については土器片は埋土堆積時の流入による可能性をもち、B類は小さな土器片で構成される場合が多く、祭祀土坑としての積極的な根拠に乏しい。しかしながらSK-56のようにスタンプ文の施された鼓形器台が破碎され小破片のためか土坑の底面から浮いた状態で出土している例や、同一個体の土器が異なる土坑・地点で出土しており土器を破片として用いた事例も考えられ、またB類の中にはC類に近いものもあることから、一概にその性格づけは困難である。

さらに時期別に概観すると、弥生時代中期の土坑はA・B-20~27区に分布し、前にも記したように長楕円形・隅丸長方形の縦長の平面形をとるものが多く、円形・楕円形の平面形をとる小規模な土坑との差が大きい。主軸の方向は、ほぼ南北方向、N-20~30°-E、N-50~60°-Wの3方向にほぼ分けられる。A・B-23・24区に空白地がみられ、出土土器から北側B-21区のSK-69が比較的古く、南側のSK-88を中心としてSK-89・91は新しい時期と思われる。弥生時代後期になるとA・B-9・10区のSD-26を中心として分布し、前代の系譜をひくと考えられるSK-61を除いてほぼ楕円形で似通った規模の土坑となり、時期が新しくなるにつれて数多く作られる傾向がみられる。

古墳時代前期になるとA・B-8区のSE-03を中心として展開し、規模の大きなものが作られ始めるとともに規模の小さなA類が増加して分散する傾向がみられる。中期になるとその傾向はさ

らにすすんで土坑の分布する範囲は広がり、S D-10の北側へ進出する。S K-27のような独立する土坑と群在する土坑とがあり、小規模な土坑はほとんどがA類である。D類は古墳時代中期に限られ、他類の土坑とは重複・隣接するもののそれぞれが分散して所在している。

以上土坑について触れてきたが、さらに詳細な分析が必要であり、また、同じく低湿地に立地する同時期の遺跡、例えば秋里遺跡などで検出された土坑のあり方などと考え合わせるとまた興味深いものと思われる。

土坑一覽表

遺構名	法量(cm)			平面形	断面形	主軸方向	出土遺物		時期
	長さ	幅	深さ				土器	その他	
S K-01	342	136	14	不整長楕円形	逆台形	N-67°-E	壺・甕	敲石・炭化材	古墳時代中期前半
S K-02	(55)	(87)	11	———	逆台形	———	甕	———	古墳時代中期
S K-03	62	29	11	不整楕円形	———	N-66°-E	———	———	(古墳時代中期)
S K-04	70	59	11	楕円形	逆台形	N-83°-W	———	———	(古墳時代中期)
S K-05	(250)	155	25	(長楕円形)	逆台形	N-50°-E	甕・高杯	敲石・砥石・台石	古墳時代中期前半
S K-06	(87)	64	6	隅丸長方形	逆台形	N-43°-E	———	———	(古墳時代中期)
S K-07	——	——	(6)	———	逆台形	———	———	———	(古墳時代中期)
S K-08	141	83	(6)	不整楕円形	逆台形	N-10°-W	———	———	(古墳時代中期)
S K-09	226	31	10	不整長楕円形	逆台形	N-85°-E	甕・高杯	———	古墳時代中期
S K-10	108	86	(9)	不整楕円形	逆台形	N-72°-W	甕・高杯	———	古墳時代中期
S K-11	112	104	11	不整円形	逆台形	———	高杯・小片	———	古墳時代中期
S K-12	254	202	23	不整楕円形	逆台形	N-68°-W	甕・高杯	———	古墳時代中期
S K-13	231	(166)	19	不整楕円形	逆台形	N-11°-E	壺・甕・高杯	軽石・自然石	古墳時代中期
S K-14	(112)	70	22	不整楕円形	碗状	N-40°-W	甕・高杯・碗	———	古墳時代中期中葉
S K-15	92	88	(4)	不整円形	逆台形	———	甕	———	古墳時代中期
S K-16	50	36	(6)	不整楕円形	碗状	N-15°-W	小片	———	古墳時代中期
S K-17	73	60	(3)	不整円形	逆台形	———	小片	———	古墳時代中期
S K-18	98	(63)	(8)	———	不整碗状	———	小片	———	古墳時代中期
S K-19	49	46	3	不整円形	皿状	———	小片	———	古墳時代中期
S K-20	44	41	3	円形	逆台形	———	小片	———	古墳時代中期
S K-21	81	(38)	5	———	逆台形	———	小片	———	古墳時代中期
S K-22	99	73	(5)	不整楕円形	逆台形	N-89°-W	甕	———	古墳時代中期前半
S K-23	85	(38)	7	———	逆台形	———	小片	———	古墳時代中期
S K-24	66	48	5	楕円形	逆台形	N-27°-W	小片	———	古墳時代中期
S K-25	(143)	(50)	10	———	(逆台形)	———	甕・高杯	軽石・自然石	古墳時代中期前半
S K-26	78	(36)	(3)	(楕円形)	———	N-51°-E	高杯	———	古墳時代中期後半
S K-27	200	175	76	楕円形	碗状	N-61°-E	壺・甕・高杯・碗	木製品・木ノ実	古墳時代中期中葉
S K-28	111	72	16	不整楕円形	逆台形	N-19°-W	甕	———	古墳時代中期
S K-29	215	86	6	不整長楕円形	皿状	N-22°-E	甕・高杯	———	古墳時代前期
S K-30	(62)	57	(7)	(円形)	碗状	———	甕・高杯・鼓形器台	軽石・自然石	古墳時代前期前半
S K-31	(138)	123	(14)	不整円形	逆台形	———	甕・低脚杯・鼓形器台	自然石	古墳時代前期前半
S K-32	239	(131)	13	(不整楕円形)	逆台形	N-13°-E	甕・高杯・低脚杯 ・鼓形器台・蓋	自然石	古墳時代前期前半
S K-33	222	(169)	(34)	楕円形	碗状	N-30°-E	壺・甕・高杯・低脚杯 ・鼓形器台・蓋	砥石・自然石・木片	古墳時代前期前半
S K-34	(219)	(138)	(26)	長楕円形	碗状	N- 3°-E	壺・甕・高杯・低脚杯 ・鼓形器台	自然石	古墳時代前期前半
S K-35	157	126	11	不整楕円形	逆台形	N-45°-E	甕・高杯	鈇滓状遺物	古墳時代前期前半
S K-36	92	54	4	不整楕円形	皿状	N-10°-E	壺・高杯	———	古墳時代前期前半
S K-37	236	95	13	不整長楕円形	逆台形	N-53°-W	高杯	———	古墳時代前期前半
S K-38	(225)	(34)	(13)	———	皿状	———	甕・高杯	自然石	古墳時代前期前半
S K-39	87	50	6	楕円形	皿状	N-82°-W	———	———	(古墳時代前期)
S K-40	133	63	10	長楕円形	皿状	N-34°-E	小片	———	古墳時代前期

遺構名	法 量(cm)			平面形	断面形	主軸方向	出 土 遺 物		時 期
	長さ	幅	深さ				土 器	その他	
S K -41	65	55	9	不整楕円形	逆台形	N-33°-E	底部	—————	古墳時代前期
S K -42	73	56	19	不整楕円形	椀状	N-65°-E	—————	—————	(古墳時代前期)
S K -43	87	75	17	不整円形	椀状	—————	高杯?	—————	古墳時代前期前半
S K -44	63	(55)	9	不整円形	椀状	—————	甕・低脚杯?	—————	古墳時代前期前半
S K -45	116	71	28	不整楕円形	逆台形	N-88°-E	甕・低脚杯	—————	古墳時代前期前半
S K -46	83	(57)	(5)	不整楕円形	皿状	N-2°-W	—————	—————	(古墳時代前期)
S K -47	(186)	120	20	楕円形	椀状	N-87°-W	甕・低脚杯	—————	古墳時代前期前半
S K -48	165	145	15	不整楕円形	逆台形	N-87°-W	壺・甕・低脚杯 ・鼓形器台	—————	弥生時代後期後半
S K -49	85	53	9	不整楕円形	逆台形	N-79°-E	甕	—————	弥生時代後期後半
S K -50	97	76	15	楕円形	逆台形	N-50°-E	—————	—————	(弥生時代後期)
S K -51	56	41	17	楕円形	椀状	N-70°-E	小片	—————	弥生時代後期
S K -52	138	89	43	不整楕円形	逆台形	N-60°-E	甕・高杯	—————	弥生時代後期
S K -53	102	(49)	17	楕円形	椀状	N-65°-E	甕	炭化板	弥生時代後期
S K -54	127	62	24	不整楕円形	椀状	N-75°-W	—————	—————	(弥生時代後期)
S K -55	137	73	9	不整長楕円形	逆台形	—————	—————	—————	(弥生時代後期)
S K -56	145	(122)	17	不整円形	逆台形	—————	甕・高杯・鼓形器台	自然石	弥生時代後期終末
S K -57	76	68	14	不整円形	椀状	N-72°-W	甕	—————	弥生時代後期
S K -58	134	79	22	不整楕円形	逆台形	N-6°-E	甕・脚部	—————	弥生時代後期終末
S K -59	95	60	22	不整楕円形	逆台形	N-76°-E	甕	—————	弥生時代後期
S K -60	105	(107)	48	不整円形	逆台形	—————	壺・甕・高杯	自然石	弥生時代後期前半
S K -61	201	(65)	27	長楕円形	逆台形	N-71°-E	甕・高杯・脚柱部	敲石	弥生時代後期中葉
S K -62	(127)	(50)	14	—————	—————	—————	—————	—————	(弥生時代後期)
S K -63	(96)	103	13	(楕円形)	皿状	—————	小片	—————	弥生時代後期
S K -64	135	104	13	不整楕円形	皿状	N-62°-W	小片	—————	弥生時代後期
S K -65	153	(120)	11	不整楕円形	皿状	N-25°-E	甕	—————	弥生時代後期中葉
S K -66	67	58	49	不整円形	逆台形	—————	壺・甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -67	308	257	7	不整楕円形	逆台形	N-38°-E	甕・脚部	—————	弥生時代中期後葉
S K -68	291	95	52	長楕円形	椀状	N-50°-W	甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -69	168	111	16	不整楕円形	逆台形	N-82°-W	甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -70	414	280	18	隅丸長方形	逆台形	N-20°-E	壺・甕・脚部	自然石	弥生時代中期後葉
S K -71	(55)	(88)	11	—————	椀状	—————	小片	—————	弥生時代中期後葉
S K -72	(325)	(123)	40	(長楕円形)	逆台形	N-23°-E	甕・蓋	—————	弥生時代中期後葉
S K -73	(293)	(104)	24	長楕円形	逆台形	N-63°-W	壺・甕・高杯	—————	弥生時代中期後葉
S K -74	203	68	12	長楕円形	逆台形	N-46°-E	壺・甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -75	(87)	39	5	不整長楕円形	皿状	N-17°-E	—————	—————	(弥生時代中期)
S K -76	104	57	19	楕円形	逆台形	N-11°-E	小片	—————	弥生時代中期後葉
S K -77	148	87	10	不整楕円形	逆台形	N-65°-W	甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -78	82	36	13	楕円形	逆台形	N-42°-W	—————	—————	(弥生時代中期)
S K -79	102	59	12	不整楕円形	逆台形	N-2°-W	甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -80	352	80	18	長楕円形	逆台形	N-9°-E	甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -81	(240)	(116)	39	(長楕円形)	逆台形	N-28°-W	甕・高杯?	—————	弥生時代中期後葉
S K -82	(460)	(109)	19	—————	—————	—————	甕	焼木	弥生時代中期後葉
S K -83	270	114	21	長楕円形	逆台形	N-15°-E	壺	—————	弥生時代中期後葉
S K -84	(62)	63	10	不整円形	椀状	—————	壺・甕	石鏃	弥生時代中期後葉
S K -85	68	51	7	楕円形	皿状	N-32°-W	—————	—————	(弥生時代中期)
S K -86	336	(117)	(20)	長楕円形	椀状	N-4°-E	甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -87	97	63	4	不整楕円形	逆台形	N-71°-E	—————	—————	(弥生時代中期)
S K -88	(200)	180	41	隅丸長方形	椀状	N-79°-W	壺・甕・器台	砥石・自然石	弥生時代中期後葉
S K -89	440	111	39	長楕円形	逆台形	N-7°-E	壺・甕	—————	弥生時代中期後葉
S K -90	(489)	205	48	(長楕円形)	逆台形	N-16°-E	壺・甕・高杯	自然石	弥生時代中期後葉
S K -91	685	158	54	長楕円形	逆台形	N-2°-W	壺・甕・脚部	—————	弥生時代中期後葉

() 値は残存もしくは検出値・() は推定を示す

溝状遺構

溝状遺構は計37基が検出されている。溝には規模の大小がみられ、調査区を東西方向に横切る比較的大規模なもの、直線的であり全長数mで完結もしくは完結すると想定されるもの、幅が長さに対して狭く調査区外へ伸びたり端部が浅くなるなどで途中で消えてしまい全容が不明瞭なものなどに大別できる。

規模の大きな溝は10基が認められ、これらの中でもSD-02・03・10・26からは多量の遺物が出土している。その中でもSD-03では祭祀に用いられたと考えられる船・刀などの模造木製品が出土しており、水辺で祓いの祭祀が行われていたであろうことが予測させられる。なお、SD-02・03を中心としたA・B-11～20区一帯は砂層が交互に堆積した落ち込みがみられ、古墳時代になってさらに堆積がすすむがその中心部は溝状に凹み、そこへSD-03を掘って活用し、上層のSD-02は掘り返しによって溝を再生したものと考えられる。また、ほぼ同時期には流れが停滞し溝としての機能を果たさなくなっていたと考えられるSD-10では、赤彩された小型壺・高杯を中心とした遺物が投棄された様相を呈す。また、弥生時代後期初頭のSD-26は、多くの土器・農具を主体とした木製品などの遺物を出土しているが、ほぼ同時期のSD-29は対照的に土器が数点出土しただけで、多くの遺物はみられなかった。これ以外の幅が若干狭い溝は、ほぼ直線的で出土遺物も少ない。弥生時代後期面のA・B-5～9区では何本も同様な溝が平行しており、時期的にも若干の差がみられることから、用水路もしくは排水路的な役割をもった溝が次々に掘り直された地帯であったことがうかがえる。

直線的で全長数mで完結する溝は、A・B-20区から南側一帯と、A・B-8～11区にかけて検出されている。A・B-20区から南側一帯の溝については、土坑とした中に溝状のプランをもつものがあり、便宜的に全長に対する幅の比が小さなものを溝として分けたが、SD-37のように土坑と同様に多くの土器を出土した溝もみられ必ずしもこの分け方が適切であるかどうかは疑問の残るところである。いずれにしても、弥生時代中期の土坑の中に溝状のプランをもつものが多いことは事実である。古墳時代前期面のA・B-10～11区に位置するSD-18～21は、上部を削平されていることから深さは数cm程度であるものの軸を南北方向に向けることから何らかの関連性をもつものと思われるが、弥生時代中期の溝に比べ小規模であるものの周囲に直接関連するような遺構が認められず出土遺物もSD-18でわずかな土器が出土した程度でありその性格は不明である。

幅が長さに対して狭いものを含め調査区外へ伸びたり端部が浅くなるなどで途中で消えてしまい全容が不明瞭なものとしては、SD-06～09・12～15・28・35などがあげられる。その多くが東西方向に軸をとる。規模が比較的小さいことから排水・区画などの機能が一応考えられる。

溝状遺構一覽表

遺構名	法量(cm)			断面形	主軸方向	出土遺物		時期
	長さ	幅	深さ			土器	その他	
S D-01	(1180)	244	22	椀状	N-71°-W	土師器・須恵器・陶磁器	自然石・松ノ実	近世
S D-02	(972)	332	44	椀状	N-79°-E	壺・甕・高杯・須恵器壺・杯蓋 ・杯身	田下駄・木錘・火鑽板 ・手網杵・他木製品・砥石	古墳時代後期初頭
S D-03	(1294)	706	90	逆台形	N-79°-E	壺・甕・高杯・椀	鋤・鍬・横槌・田下駄・桶 ・火鑽板・刀形・船形 ・烏形・杭・他木製品	古墳時代中期後半
S D-04	(1536)	124	17	椀状	N-58°-E	壺・高杯	_____	古墳時代中期
S D-05	(532)	118	10	逆台形	N-5°-W	小片	敲石・砥石・台石	古墳時代中期
S D-06	(286)	(78)	6	逆台形	N-2°-E	甕・鼓形器台	_____	古墳時代中期
S D-07	(153)	30	5	椀状	N-65°-E	小片	_____	古墳時代中期
S D-08	(121)	45	6	椀状	N-67°-E	小片	_____	古墳時代中期
S D-09	(94)	25	5	逆台形	N-54°-E	甕	_____	古墳時代中期
S D-10	(1596)	800	110	逆台形	N-44°-E	壺・甕・高杯・低脚杯・鼓形器台 ・器台・椀・蓋・甑・手捏ね土器 ・注口・把手 ・須恵器杯蓋・杯身・碗・甕	土玉・ふいご羽口・鋳滓 状遺物・銅鏃・有孔円盤 ・敲石・砥石・磨石・台石 ・木製高杯・竪杵・木錘 ・火鑽板・杭・他木製品	古墳時代中期 (古墳時代中期)
S D-11	(1392)	(260)	—	逆台形	N-46°-E	壺・甕・鼓形器台	自然石・自然木	古墳時代前期前半
S D-12	(382)	98	5	逆台形	N-62°-E	壺・甕・高杯・鼓形器台・低脚杯	_____	古墳時代前期前半
S D-13	(276)	40	13	椀状	N-33°-E	甕・脚部	_____	古墳時代前期前半
S D-14	(194)	37	9	逆台形	N-41°-W	小片	_____	古墳時代前期前半
S D-15	(272)	21	(2)	椀状	N-67°-E	小片	_____	古墳時代前期前半
S D-16	593	93	10	皿状	N-44°-E	小片	_____	古墳時代前期前半
S D-17	455	64	29	逆台形	N-43°-E	甕	角材	古墳時代前期前半
S D-18	468	40	10	椀状	N-4°-W	壺・高杯・低脚杯	_____	古墳時代前期前半
S D-19	359	34	10	椀状	N-6°-W	_____	_____	(古墳時代前期)
S D-20	304	46	10	逆台形	N-5°-W	_____	_____	(古墳時代前期)
S D-21	236	62	7	皿状	N-5°-W	甕	_____	古墳時代前期前半
S D-23	(925)	(170)	36	椀状	N-80°-E	壺・甕・高杯	_____	弥生時代後期中葉
S D-24	(1300)	202	49	椀状	N-50°-W	壺・甕・高杯	木片・自然石	弥生時代後期中葉
S D-25	(976)	67	34	逆台形	N-60°-E	甕・蓋・脚部	_____	弥生時代後期中葉
S D-26	(790)	(694)	66	—	N-70°-E	壺・甕・高杯・器台・蓋	敲石・砥石・磨石・自然石 ・土玉・木庖丁・竪杵 ・横槌・他木製品	弥生時代後期初頭
S D-27	(1046)	66	15	椀状	N-71°-E	_____	_____	(弥生時代後期)
S D-28	(352)	46	8	椀状	N-70°-E	_____	_____	(弥生時代後期)
S D-29	(1054)	540	62	椀状	N-85°-E	壺・甕	石斧・自然石	弥生時代後期初頭
S D-30	261	56	15	逆台形	N-12°-W	高杯?・底部	自然石	弥生時代中期後葉
S D-31	378	58	9	逆台形	N-30°-E	_____	_____	(弥生時代中期)
S D-32	(368)	(52)	13	逆台形	N-30°-E	壺	_____	弥生時代中期後葉
S D-33	330	57	12	椀状	N-45°-W	小片	_____	弥生時代中期後葉
S D-34	(266)	41	5	逆台形	N-67°-E	壺	_____	(弥生時代中期)
S D-35	(206)	18	10	逆台形	N-82°-E	_____	_____	(弥生時代中期)
S D-36	628	84	23	逆台形	N-17°-E	小片	_____	弥生時代中期後葉
S D-37	494	70	28	逆台形	N-34°-E	壺・甕	石斧	弥生時代中期後葉

() 値は残存もしくは検出値・() は推定を示す

掘立柱建物

今回の調査で、A・B-9区でS B-01、A・B-22区でS B-02、03、A・B-24~26区でS B-04、05の計5棟の掘立柱建物を検出した。掘立柱建物に付随するような遺物はみられず、他の遺構との重複関係や検出した層位から、S B-01が弥生時代後期、S B-02~05が弥生時代中期後葉の年代がそれぞれ与えられる。

A・B-9区の境界に位置するS B-01は、1×1間で、それぞれの柱穴の径は検出面で40~50cmの大きさを測る。P1の土層断面には柱痕跡が認められ、またいずれの柱穴もテラス面をもち一部が一段深くなる。柱穴の外側四隅にそれぞれ柱を立てた様子がうかがえる。底部に礎板・礎石の痕跡は認められず、柱穴の底径から、柱は径10cm程度のものであったと想定される。これに対し市道南側に位置するS B-02~05は全体的に検出面での柱穴の径が15~25cm程度と小規模である。S B-03・04は重複する柱穴があることから建替えの可能性も考えられるが、梁間2間の長棟建物と思われ、S B-05は東側が調査区外のため全容が不明瞭であるが、梁間2間以上の4桁の長棟建物である。また、掘立柱建物の周囲には土坑や溝が近接し、同時期のものも存在していたであろうと思われる。特に軸を同じくするS B-03と西側のS D-36や、S B-05の西側のS K-89と北側のS K-88では接合する甕の口縁部が出土しており、それぞれ掘立柱建物との関連が考えられる。そしてS B-02とS B-03とは切り合い関係にありA・B-23・24区に空間がみられるものの主軸方向からすると、S B-02とS B-04、S B-03とS B-05が同一時期の建物であろうと思われる。S K-88・89はA・B-20~27区の土坑の中では新しい時期であり、比較的古い土坑が北側のA・B-21区に集中することから、S B-03・05はS B-02・04より新しい可能性をもつ。さらに、A・B-21西側に位置するP-01は底部に礎板が検出され、調査区西側にも掘立柱建物が存在するものと思われる。

以上、今回の調査では、灰色粘質土を基盤として弥生中期および後期の掘立柱建物が検出されたが、限られた範囲のため平面的な広がりには確認できないものの掘立柱建物だけで構成され、特に弥生時代中期の長棟建物は梁間2間を基本としているようである。岩吉遺跡は、今回の調査地からさらに南側の微高地上に集落の存在することが考えられており、⁽⁴⁾低地には掘立柱建物のみの構成であるが、微高地上は竪穴住居の存在も想定されるところであり、立地条件によって集落の形態が異なっていた可能性もあり得る。

鳥取県東部では、秋里遺跡西皆竹地区⁽⁵⁾、布勢第2遺跡⁽⁶⁾、久末・古郡家遺跡久末地区、久末・六部山遺跡⁽⁸⁾、河原町前田遺跡⁽⁹⁾、鹿野町柄杓目遺跡⁽¹⁰⁾で弥生時代の掘立柱建物が確認されている。このうち、秋里遺跡西皆竹地区と久末・古郡家遺跡久末地区は岩吉遺跡と同様沖積低地に立地し、竪穴住居を伴わない点でも岩吉遺跡と共通する。久末・古郡家遺跡では、岩吉遺跡の掘立柱建物の時期よりやや後出するものと思われ、1×4間、1×2間の計6棟のうち、いずれも岩吉遺跡の掘立柱建物を構成する柱穴と比べて規模が大きく、1×4間の第1号建築遺構で上辺が56~96cm、1×4

間の第2号建築遺構で、上辺で42～68cmを測る。第2・3号建築遺構の柱穴の底部には径5～8cmの礫を敷き地盤を固めて柱の沈下を防ぐ構造をもっており、高床式の可能性が示唆されている。久末地区から南へ約70m離れた丘陵斜面に立地する久末・六部山遺跡では、1×2間4棟、1×3間の計5棟が六部山5・42・44号墳築造前の遺構として検出されている。建物の主軸方向から少なくとも2時期以上の重複があり、掘立柱建物のみで構成から成る。また、鳥取県西部では1グループとして竪穴住居1棟、長棟掘立柱建物、高床建物で構成されることが指摘されているが、岩吉遺跡ではS B-02とS B-04が共存する可能性があることから最低1×2間の掘立柱建物と2×4間以上の長棟建物とから構成されていた可能性もあるものと思われる。ただ鳥取県東部では集落遺跡の調査例が少なく、今回の岩吉遺跡の調査区も幅が16m程であったことから遺構の広がりや確認できず、今後の調査に期するところが大きい。

〔註〕

- (1) 藤原宏志「鳥取：岩吉遺跡におけるプラント・オパール分析結果について」（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡発掘調査概報』1989年）
- (2) 註1の前掲書に同じ
- (3) 静岡県埋蔵文化財研究所『大谷川Ⅳ』1989年
- (4) 微高地にあたる現岩吉集落の南地域では、旧国鉄湖山操車場建設に伴い多くの弥生時代中・後期～古墳時代の土器・石器類が出土したとされる。
- (5) 鳥取県埋蔵文化財センター『秋里遺跡（西皆竹地区）発掘調査報告書』1988年
- (6) 鳥取県教育文化財団『湖山第2遺跡発掘調査報告書』1982年
- (7) 鳥取市教育委員会『久末・古郡家遺跡発掘調査報告書』1974年
- (8) 1990年 鳥取市遺跡調査団調査
- (9) 河原町教育委員会『前田遺跡発掘調査報告書』1983年
- (10) 鹿野町教育委員会『柄杓目遺跡Ⅰ』1989年
- (11) 小原貴樹「山陰の掘立柱建物」（第29回埋蔵文化財研究会『弥生時代の掘立柱建物』1991年）

第2節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は土器だけでもコンテナ約200箱に及び、その他に多量の木製品、石鏃・有孔円盤などの石製品、土玉・土錘、銅鏃、鉾滓状遺物、種子などの自然遺物がある。

木製品

岩吉遺跡は沖積平野の低湿地に立地していることから、今回の調査では、調査区を東西方向に横切る大規模な溝、井戸などを中心として多くの木製品が出土した。一緒に出土した土器から、弥生時代後期初頭から古墳時代後期初頭にかけての年代がそれぞれに与えられる。時期別に主なものを列挙すると、弥生時代後期初頭の木製品としては、S D-26出土の木庖丁3、竪杵、横槌、用途不明木製品がある。古墳時代前期の木製品は、S E-03出土の井戸杵がある。古墳時代中期の木製品として、S D-03出土の鋤、鍬、田下駄、横槌などの農具、桶、木製容器などの生活用具、斧柄、把手、籠、などの工具、発火具である火鑽板6点、刀形木製品4点、船形木製品2点、鳥形木製品などの祭祀用と考えられる木製品、建築材や部材、用途不明木製品があり、S D-10から、竪杵、木錘、火鑽板、木製高杯、ほぼ完存の柱材などが出土している。また、S E-02からは、井戸杵、井戸杵に転用されていた机、S K-27出土の底板、多量の串状木製品などがある。古墳時代後期初頭の木製品として、S D-02出土の田下駄、木錘、手網杵、火鑽板4点、部材、用途不明木製品がある。

岩吉遺跡から出土した農具は、弥生時代後期初頭のS D-26から出土した木庖丁3点、竪杵、古墳時代中期のS D-03出土の鋤、又鍬、田下駄、S D-10出土の竪杵、田下駄、古墳時代後期のS D-02出土の田下駄、代掻もしくは大足の杵板と思われる木製品がある。県内での木製農具の出土例は、米子市目久美遺跡⁽¹⁾、池ノ内遺跡⁽²⁾等が知られる。岩吉遺跡で出土した木製農具は種類、数量ともに両遺跡に比べると貧弱であるが、鳥取平野においては石庖丁、石鍬などの石製品や、主に古墳から出土する鉄製鋤・鍬先、鎌などの鉄製品の出土例により、その一端が知られるだけである⁽³⁾。弥生時代においてはかなりの部分を木製農具に依存していたものと考えられ、その意味では古代の人々の生業を知る上で貴重な資料となるものである。

S D-26出土の弥生時代後期初頭の木庖丁3点(39~41)はいずれもヤマグワ製で、平行四辺形を呈し、全長18.9cm、16.9cm、幅5.6~5.8cm、厚さ1.2cmである。2孔一対の紐孔や片面のみに紐孔を囲む溝が観察される。県内の出土例として、目久美遺跡で弥生時代中期2点、池ノ内遺跡で弥生時代後期6点、古墳時代前期2点が挙げられる。池ノ内遺跡の弥生時代後期6点のうち4点はヤマグワ製である。形状や大きさ、長辺に対し平行な木取りの方法や用いられた樹種などこれらの遺跡の木庖丁は共通する特徴をもつ。全国的にみれば、近畿地方および周辺を中心として分布が知られるが、その一般的な形態・大きさ・木取り方法や用いられた樹種も同様な特徴を有する。また、目久美遺跡の木庖丁は近畿地方以外では最も古い時期に属するが、全国的にも出土例の多い弥生時

代中期末から古墳時代前期にかけて、鳥取県内においても木庖丁の形態および質的变化はさほど認められない。

耕作具として古墳時代中期のS D-03出土の所謂ナスビ形着柄鋤(26)、又鋤(27)がある。2点ともに腐朽著しく全容は不明瞭ながら、着柄部がナスビの萼状を呈するナスビ形着柄鋤(26)は、一ツ刃で、類例は弥生中期の目久美遺跡の1点が挙げられる。これは岩吉遺跡のものと同様時期が異なり、また、中央部に三角形の透かし孔がみられる。又鋤(27)は頭部が山形で、残存部から少なくとも5本の刃があったものと推定される。県内では目久美遺跡で弥生時代中期の類例1点が知られるが、比較すると頭部は半円形であり、岩吉遺跡の又鋤の方が全体的に整美な印象を受け、目久美のものが着柄角度がほぼ垂直なのに比べ岩吉遺跡は60°の角度をとる。

田下駄・大足⁽⁵⁾は、古墳時代後期のS D-02から1点(14)、古墳時代中期のS D-03から1点(36)、田下駄と思われる木製品1点(34)、大足の足板1点(33)が出土している。S D-02出土の田下駄(14)は、足先部のみを丸くまた、S D-03出土の紐孔が3孔みられる田下駄も足先部を斜めに加工している。これら岩吉遺跡から出土した単純田下駄は長さ25~27cm、幅10~11cm、厚さ1~2cm程度の長方形を基本とし、片足が乗るだけの大きさである。湿田での作業に使用されたと考えられるが、全体的に小型であり、湿地性に富んだ水田での利用には疑問が残る。田下駄は歩行の確保以外に保温の機能も果たすと考えられるが、水田の構造によっては田下駄もそう大きなものである必要性がなかったと思われる。また、大足の足板(33)は湾曲した面に足を乗せたものと考えられ、長軸の両端に棹取り付け孔を穿ける。大足の棹板の可能性のある方形孔が等間隔に穿いた木製品がS D-02およびS D-03で出土している。方形孔の大きなS D-02出土木製品(16)は、残存で85.4cmであり、復元で93cm以上となり、大型である。S D-03では2点(31・32)が挙げられるが、(31)はS D-02の(16)と形状が類似し、(32)はそれらに比べて方形孔が小さい⁽⁶⁾。大足以外に代掻の一部となる可能性もある。

S D-03から出土した刀形木製品4点のうち、3点は鞘から抜いた抜き身を、もう1点は鞘に納めた状態を表現したものである。(60・61)は形状・大きさともに酷似し、把間が背側に湾曲し、刀身は断面三角形で刃の表現がなされ、(60)は切先で、切先に向けて幅・厚さを減じる。それに対し、(59)は刀身に刃と背の表現はなく、把間は背と思われる方へ湾曲するが、(60・61)と比較すると表現が簡素で把間や把頭が強調されている。(62)は鞘尻と鞘口および把頭を削り出すことで表現しており、(59~61)より小型である。(61・62)はスギと同定されており、(60)も肉眼では針葉樹と思われる。

鳥取県内では、塞ノ谷遺跡⁽⁷⁾で2点、東郷町津浪遺跡⁽⁸⁾で刀形木製品が出土している。塞ノ谷遺跡のものはいずれも抜き身で、把間・把頭の表現があるもの(A)と、欠損のため刀身部分のみのもの(B)がある。(A)は全長24.4cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmを測り、把間は湾曲せず把頭は刃側に肥厚しその頂部は方形に削り出されている。(B)は残存長21.8cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。(A・

B) とも背と刃の明確な表現があり、鯨切先である。津浪遺跡の刀形木製品は、全長が推定150cm、幅9cm、厚さ4cmを測る大型のもので、堅いカシ材を用いており、5世紀初めとされている。岩吉遺跡の4点の木製品は、津浪遺跡のものと比較すると抜身のものが、全長55～65cm、(62)にいたっては全長25.3cmである。(62)のようなミニチュアの木製品が同時に出土していることから、木刀としてというより、鉄製の大刀を木製で模造したもので、形代として祭祀に用いられたものと考えられる。

刀形木製品と並んで注目されるのが、刀形木製品と同様にSD-03から出土している船形木製品(63・64)である。(63)はスギと同定されており、ともに同様な質感を受けることから、(64)も針葉樹と思われる。(63)は片側を欠損し全容が不明瞭ながらも波切り板をもち、(64)が同様に一方にのみ波切り板をもつことから、(63)もおそらく同様な形態をとるものと推察される。(63・64)は船底の形態など細部に差異が認められ、波切り板の先端の底部が(63)は先端部近くで屈曲して立ち上がるのに比べ、(64)は船底から湾曲しながら船首へ続く。また、(64)は意識的に穿孔したのか否かは不明ながら、船体の中央部の船底で厚さを減じ穴が空く。

県内での船もしくは舟形木製品の出土例は、塞ノ谷遺跡⁽⁹⁾、河原町前田遺跡⁽¹⁰⁾、米子市池ノ内遺跡⁽¹¹⁾があり、また、土製品としては秋里遺跡⁽¹²⁾、福市遺跡吉塚93土壙墓⁽¹³⁾の例が知られる。池ノ内遺跡の舟形木製品は、弥生時代後期のものと古墳時代後期のものがあり、弥生時代後期のものは、同遺跡で弥生時代中期の田舟とその形状が類似しており、裏面に2条の溝がみられる。一方の古墳時代後期の舟形木製品は、舟首と舟尾の区別があり、舟槽は平面長方形の断面逆台形に削り抜かれている。古墳時代中期を中心とする塞ノ谷遺跡の舟形木製品は、全長22.2cm、幅3.4cm、厚さ1.9cm、船槽の深さ1.2cmを測る。船首は尖り船尾は隅丸方形を呈しておわり、船体断面は椀状であるが底部断面は船首は両側面から削り出されて撥形U字状となり、船尾はゆるやかなV字状に整形される。前田遺跡の舟形木製品は15世紀代の井戸から呪符とともに出土しており、削り抜きの独木舟で、全長8.9cm舟首と舟尾の表現があり、舟首近くの両舷には貫木を渡す。呪符に記された内容から、「疫神の祓い流しが行われ、その神の乗り物として各種の舟形代がつくられている」とされ、また、「井戸自体が祓い流しといった重要な性格を荷なっている」と報告されている⁽¹⁴⁾。これは時期的には15世紀代に下るものの、岩吉遺跡の船形木製品が溝から出土している点を考慮すれば、おそらく同様な意味合いの祭祀が行われたものと考えられる。

このように、SD-03では刀形・船形木製品以外に鳥形と思われる木製品(65)が出土している⁽¹⁵⁾。律令時代に入って頻繁に行われる祓い流しの素形の祭祀が、古墳時代中期後半には岩吉遺跡でも行われていたと言えよう。また、湖山池南岸の塞ノ谷遺跡では泉を中心として古墳時代まで続く祭祀遺跡であり出土遺物や時期が類似することから岩吉遺跡と同様な性質の祭祀が行われていたものと思われる。

鉍滓状遺物

井戸、土坑、溝、遺物包含層中から、鉍滓状およびふいごの羽口と考えられる遺物が計19点出土している。詳細は付章の分析・鑑定報告に譲るものの、これらの遺物は肉眼観察により3種に分類できる。

< A類 > 一部還元されて灰色に変質した部分がみられるが、断面は淡燈褐色～褐色で2mm以下の砂粒を多く含む土製品である。横断面は弧を描く。ふいご羽口と考えられる。

(1) は残存部分の両端の内径がそれぞれ復元で3.1、5.4cmであり、基本的には器壁1.2～1.5cmの円錐状の筒形になるものと思われ、径が広がる方の片端は指頭圧痕が認められるとともに器壁が急に薄く引き伸ばされラップ状に広がる様相を示す。内径が狭くなる方の端部は、縦断に対し14°～20°の角度をとって還元部分が認められる。(10) は小口先端にガラス状の溶融物が付着し、本体の器壁は1cm弱、内径1.8cmを測る。なお、S D-10から内径2.5～8cm前後の裾広がりの筒形土製品(第95図118)が出土しているが、A類に比べて胎土が精良で、高さ11cm部分がほぼ完存するものの高温のため変質したような部分が認められない。A類に含めるか否かは今後の検討を要する。

< B類 > 硬質で灰～黒緑色を呈し一部表面がガラス状となる。全体的に気泡が多くみられ重量は軽い。指標とする(6・16)の分析結果から炉壁と思われる。

< C類 > 全体的に気泡がみられ橙褐色系の錆が内部まで進行する。触ると錆粉が手に付着し、もろい。内部は黒灰色で粒子は非常に細かい。指標とする(19)の分析結果から鍛冶滓と考えられる。

(18) は周縁部が一部剥落するものの、平面的には径が8～9cm程度の円形もしくは隅丸方形を呈し、上面は中央がやや膨らむものの平坦で底面は椀状となる。一角にB類と同様の灰色の還元部分があり、気泡多く本体と異なって砂粒が含まれる。(17) は一方が剥離するが剥離部分は(18)と同質であり底面が椀状を呈することから、おそらく(18)の還元部分と同様な性質のものと思われる。なお、(11) は肉眼観察ではこれらのC類と異なって錆に覆われず重量も重い。

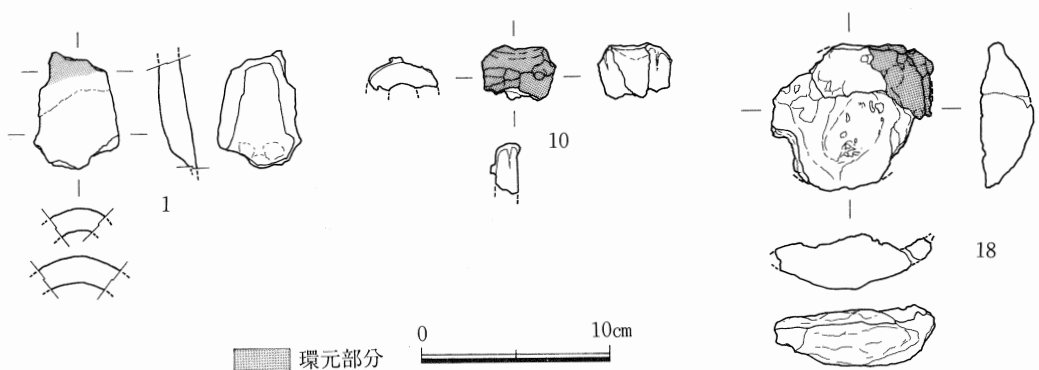
以上これらの鉍滓状遺物の中には、一部S K-35やS E-02、土器群1などの遺構から出土したものがあるが、S D-10出土の遺物同様埋土中の出土であり、必ずしも出土状況は明確ではない。その中でも、(3) はS D-10の古墳時代中期の遺物が集中する面で出土しており、A-11区包含層出土の(17～19)と同様に古墳時代中期の赤彩され内面に暗文を施した杯部椀状および有段の高杯と一緒に出土している。時期が不明瞭なものも若干含まれるが、これらの鉍滓状遺物はおおよそ古墳時代中期前半を主体とする時期に属するものと思われる。なお、古墳時代中期に相当する層のA・B-9区の南部からA・B-11区北部にかけての部分だけに鉄分が多く含まれ、鉍滓に直接関係するような遺構は確認されなかったがA-10～11区からC類が集中して出土しているだけに関連が注目される。このように、A類のふいごの羽口や、C類の原料が鉍石と推定される製錬鍛冶滓、

(18) のように底部に炉の形状を型取りした炉滓が出土しているだけに、岩吉遺跡で鉄器生産が行われていたことはほぼ確実であろうと思われる。さらにこの時代に鉍石を用いた例はその出土が比

較的限定されており、岩吉遺跡⁰⁶が拠点的な集落として鉄生産に携わっていたことが推察される。

ふいご羽口および鉾滓状遺物一覧表

番号	遺物番号 (取上番号)	出土地	備 考	分類	分析・鑑定
1	B 4 - 1	包含層		A	
2	A 6 - 52	SD-10		B	
3	A 6 - 129	SD-10	9 g	B	
4	B 6 - 36	SD-10	27 g	A	
5	B 6 - 36	SD-10	6 g	B	
6	B 6 - 140	SD-10	12 g 土器片附着	B	○
7	A 7 - 59	SD-10	50 g	C ?	○
8	A 7 - 69	SD-10		B	
9	A 7 - 209	SD-10	46 g	—	○
10	A 7 - 239・241	SD-10		A	
11	A 7 - 259	SD-10	49 g	C	○
12	B 7 - 8	包含層		A	
13	A 8 - 44	土器群 1	108 g	C	
14	B 8 - 63	SK - 35	5 g 高杯脚部・甕出土	B	
15	A 10 - 8	包含層		C	
16	B 10 - 90	SE - 02	19 g 井戸枠外側埋土出土	B	○
17	A 11 - 11	包含層	94 g	C	
18	A 11 - 18	包含層	175 g	C	
19	A 11 - 28	包含層	81 g	C	○



第189図 ふいご羽口・鉾滓状遺物実測図

土器

今回の調査で、弥生時代中期後葉から古墳時代後期初頭にかけての時期にあたる数多くの土器が出土した。特に弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての土器については、県東部においてはまとまった出土例が数少なく資料が待たれていたところであり、また、包含層の出土ながら古墳時代前期後半の完形の甕が数多く出土している。従来、鳥取県の弥生時代中期から定型化した須恵器出現以前の土器については県西部の青木遺跡の土器編年を県東部出土土器¹⁰⁷に引用し、時期を設定する風潮があった。県中部では遺跡単位の土器の変遷から編年案¹⁰⁸が既に作成されており、河川単位の土器編年の確立が待望される中で、県東部の土器研究¹⁰⁹の立ち遅れは否めない現状であった。こうした中で、今回岩吉遺跡の多量の土器資料が増え、数度の調査が行われている秋里遺跡、大楠遺跡などの土器資料などをもとにすれば千代川左岸の土器編年作成に必要な資料はある程度そろうものと思われる。こうした考えから、多分に整理不足の感がありながらも今回岩吉遺跡で遺跡単位の土器編年試案を公にし、今後の研究の一役を担えれば幸いである。

I期 A・B-20～27区の土坑および溝状遺構出土土器を指標とし、同じくA・B-20～27調査区出土遺物を援用した。これらの遺物は甕のくの字状口縁端部につまみ上げがみられることや体部内面が3分の2上半ハケ目調整後、下半は一部ナデでヘラ削りがみられないものもあるが大半がヘラ削り調整であることから、おおむね弥生時代中期後葉に属するものと考えられる。また、これらの中で若干の新旧関係がみられ、SK-69が比較的古い様相を、SK-88は新しい様相を示す。なお、I期の土器については出土地が限定されまとまった資料であることから土器の分類を試みた。

<壺> 口縁部を中心とした形態および凹線の有無などからA～E類に分類した。

(壺A類) 体部中央部に最大胴径をとり、長くくびれた頸部から外反しながら立ち上がり口縁部で更に強く外反する。大きさから①・②に細分した。

壺A①類 頸部から逆ハの字状に立ち上がり口縁端部で強く外反して下垂する。口縁上面および側面に、櫛およびハケ状工具による斜格子文・綾杉文・連続刺突文を施す。体部は残存するものがみられなかったが、他遺跡の類例から、体部中央部が大きく張り肩部に連続刺突文をめぐらす体部(3)がつづくものと考えられる。

壺A②類 壺A①の小型であり、大きく外反する口縁端面に刻み目を施すが中にはヨコナデのもの(4)もみられる。また(5)は口縁屈曲部に小円孔2個一対を穿孔する。頸部に数条の凹線、肩部に連続刺突文を施す。外面頸～体部上半縦ハケ目後下半ヘラ磨き調整。内面頸部ナデ、体部ハケ目後一部ナデ調整する。

(壺B類) 口縁端部は上下に肥厚して面をなし数条の凹線をめぐらす。口縁部の形状からa～d類に細分した。

壺B a類 頸部で強く屈曲して外傾しながら立ち上がり、肥厚した端面はわずかに外側を向く。

頸部に指頭圧痕突帯がめぐる。体部は大きく張る様相を示し、肩部内外面ハケ目調整する。

壺B b類 口頸部は弓なり状に外反し、口縁端面は外傾する。頸部に指頭圧痕突帯がめぐる。

壺B c類 頸部から逆ハの字状に立ち上がり口縁端部で強く外反し、外傾する端面へつづく。

壺B d類 頸部は弓なり状に短く外反し、外傾する端面へつづく。(9)は口縁端面の下端に刻み目を施す。体部3分の1上半部に最大胴径をとり連続刺突文を施す。外面体部上半斜め後の縦ハケ目後半へラ磨き調整。内面体部3分の2上半ハケ目調整後下半へラ削り、底部指頭圧痕。

(壺C類) 外反する口頸部をもち、口縁端部でわずかに屈曲して丸くおさめる。形態によりa～c類に細分した。

壺C a類 外反度がゆるく端部でわずかに屈曲しておえる。頸部に刻み目のみられる突帯や沈線・凹線を施す。

壺C b類 弓なり状に外反する口頸部で、口縁端部はわずかにつまみ上げて終え刻み目を施す。頸部に凹線を施しその下方に連続刺突文をめぐらす。

壺C c類 外反度がゆるく端部でさらに外反してまるくおえる。内外面ともへラ磨き調整する。

(壺D類) 直立もしくはわずかに外傾する口縁部をもち、端部は角張っておえる。頸部に凹線や連続刺突文を施す。(15)は貼り付けによる把手の一部が残る。

(壺E類) いわゆる無頸壺である。口縁部はわずかに肥厚して角張り、刻み目や上位に凹線・連続刺突文を施す。上位に小円孔が2個一対穿孔される。

<甕> 主として口縁部の形状からA～E類に分類し、さらに最大径・器高の大小からそれぞれ①～③類に分類した。③類には脚台部がみられるものもある。

(甕A類) く字状に強く屈曲口縁部をもち。

甕A②類 肩部はなだらかである。肩部内外面ハケ目調整する。

(甕B類) く字状に屈曲する口縁部をもち、甕A類に比べ口縁部は立ち上がる。

甕B②類 口縁部はく字状に屈曲し、甕A類に比べ口縁部は立ち上がる。

甕B③類 口縁部はく字状に屈曲し、甕A類に比べ口縁部は立ち上がる。甕B類の小型である。なだらかな卵形に膨らむ胴部からすばまって底部へつづく。

(甕C類) く字状に屈曲する口縁部で口縁端部はつまみ上げによってわずかな肥厚がみられる。

甕C①類 なだらかな肩部に連続刺突文を施す。肩部内外面ハケ目調整する。

甕C②類 体部3分の1上半部に最大胴径をとり、体部外面ハケ目後中央部へラ磨き、内面ハケ目後半へラ削り調整する。また、口縁端部に刻み目を施すものがみられる。

甕C③類 なだらかな肩部で外面ハケ目後半へラ磨きが認められ、内面ハケ目調整する。口縁端部に刻み目を施すものがみられる。

(甕D類) く字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は角張るが拡張した面をもつに至らない。

甕D②類 体部3分の1やや上部に最大胴径をもち、外面縦ハケ目後半へラ磨き調整する。(25)は縦ハケ目以前の叩き目が観察される。内面縦ハケ目後4分の1下半へラ削り調整する。

甕D③類 (26) は脚端部が舌状に張り出した短い脚台部が付く。体部外面縦ハケ目、内面肩部ヘラ削り後体部縦ハケ目調整する。口縁端部に刻み目を施す(27)は、(26)に比べなだらかな肩部で外面ハケ目後上位付近までヘラ磨きが及ぶ。内面はハケ目調整である。

(甕E類) 屈曲して外傾する口縁部は端部が上下に肥厚して端面をなし、外面に数条の凹線を施す。さらに口縁部径に対し体部が大きく張る形態の甕をE a類として細分した。

甕E①類 口縁部端面に綾杉文後凹線を施す。肩部内外面ハケ目調整する。

甕E②類 体部3分の1上半に最大胴径をとり、体部外面上半ハケ目後、下半ヘラ磨き調整する。

(29)は外面に縦ハケ目以前の叩き目が認められる。内面体部上半ハケ目後下半ヘラ削り調整する。

甕E a①類 体部3分の1やや下方に最大胴径をとり肩部に連続刺突文を2段に施す。外面体部上半縦ハケ目後下半ヘラ磨き調整する。内面ハケ目後体部下軽ヘラ削り調整する。

甕E a②類 甕E a類に比べて体部の張りが弱く底部へ膨らみをもってつづく。体部外面斜め後縦ハケ目の後下半ヘラ磨き調整する。内面体部3分の2上半ハケ目後以下ヘラ削り調整する。

(甕H類) く字状に屈曲する口縁部であるが甕B類に比べて口縁部は立ち上がり先細りしておえる。頸部のくびれが弱く体部はわずかに膨らむ様相を示す。内外面ともハケ目調整するが頸部にヨコナデがみられない。

(甕G類) く字というより逆L字状を呈する広口の口縁部で、体部3分の1やや上方に最大胴径をとるものの肩部はほとんど張らずすぼまって底部へつづく。外面上位はハケ目調整、底部周辺部は指頭圧痕が顕著である。内面は体部ハケ目調整である。

(甕H類) 頸部の屈曲はゆるやかで外反して口縁部へつづき端部は短く立ち上がる。外面および口縁部内面は粗いハケ目で体部上位に同一工具による沈線がめぐる。体部内面はナデ調整する。全体的に胎土粗く器壁に凹凸がありヨコナデがみられない。

<高杯> 全体の明らかなものがなく、杯部の形状から4種の高杯を挙げたが、口縁部のみの残存のため鉢になる可能性のものもみられる。

(35) 鉢状の杯部で口縁部は平坦面をもち端部は下垂する。口縁部上端面および下垂外面に斜格子文・円形浮文・刻み目を施す。口縁部屈曲部に2孔一対の小円孔を穿孔する。脚部上位にヘラ描の沈線・鋸歯文を施す。杯部内外面および脚部外面ヘラ磨き調整する。

(36) 杯部は鉢状に立ち上がり脚屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付ける。杯部内外面ヘラ磨きが顕著である。

(37) 内湾する口縁部に数条の凹線を施す。外面ハケ目、内面ハケ目後ナデ調整する。

(38) 浅く広口の杯部で口縁部外面はつまみ出され刻み目を施す。

<器台> 口縁部・脚部とも筒部からなだらかに外反し、口縁部は屈曲下垂・肥厚して面をなす。脚部も内傾して面をもつ。筒中央部・口縁部内外面・脚裾部に凹線を施す。外面ハケ目、内面ナデ

調整する。

<蓋> 頂部は平坦でボタン状を呈し口縁部へ向かって大きく外反し端部は内傾して面をもつ。円孔が穿孔される。外面ハケ目内面上部へラ削り後口縁部ヨコナデ調整する。

<脚台部> いずれもハの字状に開き脚端部は内傾して面をなす。

(41) 高杯もしくは台付き壺と思われ、外面および体部内面ハケ目調整し、脚裾部はヨコナデ調整が顕著である。

(42) 内外ハケ目調整で一部内面にへラ削りが認められる。

(43) 脚裾部に竹管文を施す。外面ハケ目、内面ナデ調整する。

(44) 脚部に数条の沈線、裾部に2個1組の半載の刺突文を施す。

Ⅱ期古 S D-26およびS D-29出土資料を指標とする。

<壺> 外反して口縁端部が肥厚し端面をなす壺は、端面に凹線を施すもの(45)とヨコナデするもの(46)とがある。肩部外面ハケ目、内面肩部から頸屈曲部までへラ削りを認める。ほぼ直行する口頸部をもつ(47・48)は把手付き壺と思われ、口頸部にいびつな数条の凹線をめぐらす。肩部外面ハケ目後へラ磨き、内面へラ削り調整。(48)は口縁端部が平坦面をもち、体部3分の1やや上方に最大胴径をとる。肩部に連続刺突文を2段施す。把手は器壁に差し込んで接合する。

<甕> 大別して、口径20cm・最大径34cm前後の大型の甕(49・50)と口径13~15cm・最大径20cm程度の甕(51~58)があり、器高低く体部が張る甕(54)、頸部くびれ体部の張る甕(55)、肩部がなだらかな甕(56)、肩部が急激に張る甕(57)などの各種がみられる。口縁部はいずれも外反し端部が肥厚して面をなし、端面に数条の凹線もしくは沈線を施すが、小数ながら端面ヨコナデのみもの(58)がある。体部内面はほぼ頸部下までへラ削りがおよび一部上部にハケ目を認めるものがある。外面の調整は資料の多くが底部を欠くため全体は不明瞭であるが体部ハケ目調整するもの(50・53・54)、上半ハケ目後下半へラ磨き調整するもの(52)、へラ磨き調整するもの(51)がある。また、(52・55・58)は肩部に連続刺突文を施す。(52)は体部外面に縦ハケ目前の叩き目が認められる。

<高杯> 小型で赤彩された高杯(59)は平坦な杯底部から短く外反する口縁部がつづく。脚部はハの字状に開き端部は内傾して面をなし沈線を施す。

<器台> 形態的にはⅠ期の器台(39)の系統をひく(60)は赤彩され、さらに上下に外反し、口縁端部は肥厚して面をなし凹線後11・12・13個単位の竹管文を3方に施す。筒部は長方形透かし孔を3方向に穿孔する。脚端部は肥厚して面をもつ。外面および口縁部内面へラ磨き、内面筒部以下へラ削りする。

<その他> ハの字状に開く脚部(61・62)は脚端部が内傾して面をなし数条の沈線を施す。底部(63)は底端部が舌状に張り出し短い脚台となる。くの字状口縁部をもつ小型の甕(64)は体部内外面ともへラ削りする。

Ⅱ期新 S D-26上層、土器群3上層、S K-60出土資料を指標とする。

<壺> (65) は口縁端部は肥厚してわずかに内傾する面をもち数条の沈線を施す。頸部に連続刺突文を施す。肩部外面ハケ目、内面ヘラ削り調整。逆U字形の把手付き壺(66)はほぼ直立する口縁部に凹線を施し、比較的上部で肩部が大きく張り、外面はヘラ磨き、内面ヘラ削りする。把手は器壁に差し込んで接合する。

<甕> 口縁端部はわずかに内傾もしくは外反とほぼ直立して立ち上がり、外面に数条の沈線を施す。Ⅱ期古にくらべて器壁が薄くなり最大胴径が下方に下がって底面を急速に狭める。体部外面ハケ目、内面ヘラ削り調整する。(67・68)は肩部に連続刺突文を施し、(72・73)は口縁部外面ヨコナデの甕である。

<その他> 資料乏しいが、高杯脚部(74)、口縁部(75)、底部(76)、小型壺(77)がある。(74)は直線的な脚柱部をもち裾部でハの字状に開き端部は屈曲して面をなす。脚部外面ヘラ磨き調整する。(75)はハの字状に大きく開き内外面ともヘラ磨きが顕著である。

Ⅲ期古 S K-61・65、土器群4出土資料を指標とする。

<壺> 資料乏しいが、(78)はわずかに内傾するものの口縁部は短く立ち上がり、外面に平行沈線を施す。台付き壺(79)は球形の体部に短く直立する広口の口縁部とどっしりしたハの字形の脚台が付く。体部外面ハケ目後ヘラ磨き、体部内面ヘラ削り、口頸部内面ヘラ磨き後上部ヨコナデ調整する。脚台部面取り成形後ハケ目、脚裾部および内面ヨコナデ調整する。

<甕> 口縁部はⅡ期新に比べて立ち上がりより明瞭となり下端部がわずかに下垂するものが多い。口縁部外面に平行沈線を施し肩部に連続刺突文がみられる。口径22cm・最大径31cm弱の大型の壺(80)は肩が張り、体部ヘラ磨き調整。一般的な大きさの甕(81~84)は口径12~15cmで最大胴径の方がわずかに大きい。体部外面ハケ目調整。(84)は口縁部外面がヨコナデ調整である。

<高杯> 杯部は底部から大きく開き屈曲してさらに外反する口縁部へとつづき、直線的な脚柱部から裾部でハの字形に開く脚部が付く広口の高杯(85・86)と杯底部から大きく開き中央部で屈曲して内傾しながら立ち上がり口縁部で短く直立する鉢状の高杯(87)がある。(88)は高杯の脚柱部と思われ上下が外反する。(85~88)はいずれもヘラ磨き調整が顕著である。

<その他> ハの字状に開く脚部(89・90)と天井部が貫通し口縁部が肥厚して面をなし数条の平行沈線を施す蓋(91)がある。

Ⅲ期新 土器群4、S D-23・24・25出土資料を指標とする。

<壺> 資料が少ないものの大型の壺(92・93)、台付き壺(94~97)がある。(92・93)は口縁部は外反して多条の平行沈線を施し、後に(92)は上部を軽くヨコナデする。(93)は頸部に突帯を貼り付け連続刺突文を施す。台付き壺はかすかに外傾する口縁部に平行沈線を施し、体部は中央部が尖る算盤玉形で、脚部は(94)から、裾部で屈曲して平行沈線の施された面をもつものと思われる。体部は綾杉文・連続刺突文・沈線などで装飾され、特に大型の(97)は3重圏・渦スタンプ文

が施される。

<甕> 全体の明らかなものが(103)しかみられないが、口縁部は外反して多条の平行沈線を施し口頸部内面をヘラ磨きするものが多くみられる。肩部には引き続き連続刺突文がめぐり、底部は底面との境の屈曲が甘くなる。

<高杯> Ⅲ期古の(85・86)に比べて口縁部が長くなり外反度も大きくなる。比較的古式の様相をもつ(106)も屈曲の甘い(108)へ、また角張った口縁端部も引き伸ばされて先細りへと変化するものと思われる。杯部内外面ヘラ磨き調整する。

<蓋> 天井部が貫通しつまみ部が長い蓋(109・110)とつまみ部が開き薄手の蓋(111)がみられる。

<その他> ハの字状に開き裾部で屈曲外反して平行沈線を施しヘラ磨きによって沈線の一部が消える脚部(112)、小型の壺胴部(114)、赤彩された長頸の台付き壺(113)がある。

Ⅳ期 SK-48・53・56・59、SK-52・58上層出土資料を指標とする。

<壺> ハの字状に開く口縁部(115)がある。口縁部外面は多条の平行沈線を施す。

<甕> 外反する口縁部外面にさらに多条化した平行沈線を施し、口頸部内面ヘラ磨き、後に口縁部内外面の一部をヨコナデするもの(116~121)と口縁部内外面ヨコナデ調整するもの(122~128)がある。前者は口縁部が弓なり状に外反し、後のヨコナデによって端部でさらに屈曲するものがみられる。これまで肩部内面は左方向のヘラ削りが大勢を占めたが、右方向のものがみられるようになる。(124)は肩部に連続刺突文・平行沈線を施す。(125)は短く外反する口縁部をもち、(123)は直立的な複合口縁で外面に平行沈線後上部をヨコナデするやや粗雑な甕である。(128)は薄手で口縁部が大きく外反し肩部に平行沈線が顕著であり、他の甕に比べて新しい要素をもつ。

<高杯> 杯底部からなだらかに立ち上がり上部で2段に屈曲して口縁部は短く外反する広口の高杯(130)は杯部外面ハケ目後粗なヘラ磨き、杯部内面および脚部外面ヘラ磨き調整する。杯部上位に刺突文がみられる。

<低脚杯> 椀状の杯部に端部で強く外反する口縁部をもつ。脚部はハの字状に広がり、杯部外面ハケ目調整である。

<鼓形器台> 受部・脚台部ともに外方に大きく開き端部はさらに外反しておえる。しっかりした接合部で、受部と脚台部の稜近くに3重圏スタンプ文・沈線を施す。受部内外面ヘラ磨き、脚台部外面ナデ、内面はヘラ削り後ハケ目調整する。

<その他> (133)は内外面ヘラ磨きが顕著で、甕(129)と質感が類似する。

Ⅴ期古 SE-01出土資料を指標とする。

<壺> 良好な資料はみられなかったが、遺構外遺物の(55)が同時期の資料と思われる。

<甕> 口縁部は外反し、端部はさらにつままれてわずかに外反するものが多く、口縁下端部の稜もつまみ出す。体部は肩部が張る倒卵形で体部3分の1上半に最大胴径をとり、底部はわずかに平

坦面がみられる。口縁部内外面ヨコナデ調整し、体部縦ハケ目後、上部横位のハケ目、肩部に平行沈線・波状文を施す。内面ヘラ削りの方向はほぼ右方向へ落ち着く。底部内面に指頭圧痕がみられる。口縁部が内傾するもの(134)や体部が大きく張るもの(139・140)がある。

<その他> 高杯と思われる脚部(141)がある。透かし孔が3方向に穿孔されたものと思われる。

V期新 SE-02、SK-33出土の資料を指標とする。

<壺> 良好な資料がみられなかったが、長頸壺(142)がある。口縁上部でさらに屈曲し、下部の稜は鈍い。肩部は大きく張る様相を示す。

<甕> V期古に比べて全体的に器壁が若干厚くなり、口縁部は端部が外面側につままれて角張るとともに硬質でしっかりした印象を受ける。また、全体的に白っぽい土器がこの時期から多くなる。体部は最大胴径をとる位置がやや下方に下がり、体部下半はふくらみを増し、かすかな平底である。体部外面縦ハケ目後上部横位のハケ目、肩部に波状文・平行沈線を施す。底部内面指頭圧痕がみられる。口縁がわずかに内傾・直立する甕(143~145)や、平底をもつ甕(152)がある。

<高杯> 杯部が椀状の高杯(153)と皿状の高杯(154)がある。いずれも外面ハケ目調整で、(153)は内面ヘラ磨き、(154)はハケ目調整である。高杯の脚部(157・158)は裾部からさらに大きく外反し、(157)は裾部上位に円孔を穿つ。

<低脚杯> 杯部が椀状のもの(155)と皿状のもの(156)がある。脚部はいずれも舌状に開く。(155)は杯部ハケ目後ヘラ磨き調整する。

<鼓形器台> 受部・脚台部ともに大きく外反し、口縁端部でさらに外反する。稜はつまみ出され接合部は短く(161)はわずかに屈曲するだけとなる。受部外面ヨコナデ、内面ヘラ磨き、脚台部ヘラ削り調整する。

<その他> 短頸壺の蓋と思われる(162)があり、半円形で天井部に小孔が穿孔される。

VI期古 A・B-10~15調査区出土資料を指標とする。

<壺> 装飾壺(163)は口縁部が大きく外反し、頸基部に突帯が貼り付けされる。体部は肩部が大きく張り、底部は尖り底となる。肩部上位に平行沈線・連続刺突文を施す。体部縦ハケ目後半部回転を利用した横ハケ目調整する。小型の壺(164)は球形の体部に外反して伸びる口縁部が付く。口縁部外面は縦ヘラ磨き、体部外面は横ハケ目調整で上位は回転を利用している。

<甕> 外反する口縁部は端部が外側に拡張して角張り、中には内面につまみだすもの(166)がみられる。体部は球形化して丸底となり、最大胴径が体部中央近くまで下がる。体部縦ハケ目後半部回転を利用した横ハケ目、底部横位のハケ目調整する。肩部に平行沈線を施すもの(165・168)が残る。平底の甕(169)はV期新の(152)より大型となる。

<高杯> 段をとらずに杯底部から外反しながら立ち上がる杯部で、(170)は徐々に開く脚柱部から裾部で大きく外反する器高の高い脚部が付く。(170・171)は内外面に暗文が認められる。杯部と脚部は円盤充填による接合である。

Ⅵ期中 A・B-10～15調査区出土資料を指標とする。

<壺> 口縁部の形態の異なる大型の壺(174・175)がある。器壁が更に厚くなり乳白色で、体部は肩部の張りが明瞭でなく縦長であるが(175)は底部が尖り気味な丸底となる。(174・175)の口縁部はヨコナデが顕著で上端部が平坦面をもち、特に(174)は内面につまみ出しがみられる。肩部は甕と同様に回転を利用した横ハケ目がみられる。小型の壺(172・173)は体部中央部が大きくふくらみ口縁部はくの字形に外反するが、(172)は口縁部が大きく外反して体部より口径が広がる。

<甕> 体部はいずれも縦長となったことで最大胴径は体部3分の1やや下方に上がる。口縁部はくの字口縁部甕(178)がみられ、(176・178)は上端部が内側につまみだされる。(177)はⅥ期古の形態をとるが厚手となる。体部縦ハケ目のち上半回転を利用した横ハケ目、底部横位のハケ目、(178)はハケ目を頸部から順に3段階に分けて施す。(176・178)はハケ目以前の叩き目が認められる。平底の甕(179)は底面が大きく、体部は横位のハケ目調整である。肩部に平行沈線・刺突文を施し、刺突文は全体をめぐらない。

<高杯> 杯底部から屈曲して段をとり大きく外反する口縁部へつづき、端部でさらに外反する。杯部とは脚部差し込みによる接合である。内面に暗文が認められる。

Ⅵ期新 A・B-10調査区出土資料を指標とする。

<壺> 良好な資料はみられなかった。

<甕> 体部が球形で頸部のくびれた短く立ち上がる複合口縁部の甕(181)は、肩上部縦ハケ目後斜位のハケ目調整で、体部内面上半のヘラ削りは新しい様相を示す。くの字口縁部の甕は端部が内側につまみ出されるもの(182)と、端部は外側に傾斜して若干角張るもの(183)とがある。体部は縦長で器壁が厚くなり、これまでに比べて若干軟質で色調が黒っぽくなる。体部外面はハケ目の方向に乱れがみられ、内面はこれまで底部が上方向に削り上げて肩部で横位に削っていたのが、底部から斜め上方向に削り上げるものがみられるようになる。肩部の回転を利用した横ハケ目はこの時期を最後にみられなくなる。(183)は外面にハケ目以前の叩き目が認められる。

Ⅵ期古 SK-01・13出土資料を指標とする。

<壺> 口径14cm・最大胴径22cm程度の若干大きめの(184)、口径13cm程度の壺(185・186)と口径6cm前後の小型の壺(187～189)がある。(187)を除いていずれもくの字状口縁部であるが(188・189)はわずかに複合口縁の名残りがみられる。(184)は口縁端部を内側につまむ。体部は球形化し外面はハケ目調整、(184・187・188)は口縁部内面ハケ目後ヨコナデもしくはナデ調整する。

<甕> 体部はいずれも球形となり、口縁部は様々な形態をとるものがみられるようになる。厚手の複合口縁で端部が内側に肥厚する甕A1類、短くほぼ直立する複合口縁で外面に1条の凹線を施すことで下端部の屈曲を強調し上端部は内側に肥厚する甕B1類、上端部はそのままおえる甕B2類、くの字状口縁で端部が内側に肥厚する甕C1類がみられる。甕A1類として(190～192)、甕B1類として(193)、甕B2類として(194)、甕C1類として(195・196)が挙げられる。体部

外面はいずれもハケ目調整で、上半・下半・底部と3回程度に分けてハケ目を施す。内面底部にヘラ削りが達しないものがみられるようになる。(195)にはハケ目以前の叩き目が肩部に観察される。

<高杯> 杯底部から口縁部にかけてなだらかに立ち上がるもの(197)と杯底部が広く平坦で口縁部は大きく外方へ開くもの(198)がある。ハの字状の脚部(199)は脚端部をヘラ削りする。

Ⅶ期新 SK-05出土資料を指標とする。

<壺> 良好な資料はみられなかった。

<甕> 甕B1類(200)と甕C1類(201・202)と新たにくの字状口縁で端部に内側に肥厚のみられない甕C2類(203・204)がみられる。体部内面のヘラ削りは底部から横～斜位方向に削り上げる。

<高杯> SK-05では杯底部と口縁部の境が屈曲して段をとる有段高杯(205～207)がみられる。(205・206)は杯部内面に暗文がみられ(207)は円盤充填によって杯部と脚部とを接合する。脚部(208)は全体的に小形になり、裾部内面に指頭圧痕が顕著である。

Ⅶ期古 SK-27出土資料を指標とする。

<壺> 大型の壺(209)と中規模な大きさの壺(210・211)がある。(209)は球形の体部に口縁下端部に突帯を貼り付けわずかに外傾して立ち上がる複合口縁を強調する。粘土積み上げ時の小休止の単位で体部内面のハケ目の方向が変わり、肩部外面・口縁部内面の断続的な横ハケ目などから埴輪制作にその系譜を求めるべきであろう。(210)は複合口縁で全体的に丁寧な作りで、Ⅶ期古の(185・189)の系列を引くくの字状口縁の(211)は体部内面は粗いヘラ削りと指頭圧痕のため器面に凹凸がみられる。最大胴径も体部中央からやや下方に下がる。

<甕> 口縁は全てくの字状の甕C類となり、端部が内側に肥厚する甕C1類と肥厚のみられない甕C2類とがあるが、甕C2類が量的には多くなる。甕C1類の(212・213)は内面のヘラ削りが粗雑になり器壁の厚さが均一でない。これに対し甕C2類の(217)は整った球形の体部で器壁も厚く均等である。口縁部内面はヨコナデ以前の横ハケ目が明瞭に観察される。また(212)は肩部外面にハケ目以前の叩き目が認められる。その他に縦長な体部になりそうな平坦部をもつ底部(218)がある。

<高杯> 有段高杯(219)がみられるが多くは段をもたない杯部碗状の高杯(220～223)である。杯部内面に暗文がみられるが、碗状の高杯の中には内外面ヨコナデ調整のもの(223)がある。脚部差し込みによって杯部と接合するものが主流を占めるようになる。

<碗> 碗状の高杯に比べて径が小さく深さのある碗(225)は口縁部まで曲線を描いて立ち上がり口縁端部でさらに外反する。

Ⅶ期新 土器群2、SD-03出土資料を指標とする。SD-03資料は若干新しい様相を示す。

<壺> 良好な資料は少ないが、Ⅶ期古の壺(211)の系統を引く壺の体部(231)は器壁が全体的に厚くなり、内面ヘラ削りの開始位置が中央部近くまで下がるとともにヘラ削りもさらに粗雑になる。

＜甕＞ 体部がほぼ完全な球形となり、体部外面ハケ目、内面底部はヘラ削りが達せず頸部まで横位のヘラ削りが中心となる。器壁が全体的に厚くなる傾向がみられる。甕A 2類の(232)は口縁部内面にヨコナデ以前のハケ目が認められる。甕C 2類の(234～236)は、口縁部の外傾度が大きくなり特に(235)は口縁端部がさらに外方に引き伸ばされて口径が広がる。同じく甕C 2類で若干小型の甕(236)は器壁が厚く、(236)は(235)と同様に口縁端部が引き伸ばされ、体部内面ヘラ削り後に粗なハケ目が施される。

＜高杯＞ 脚部が全体的に短くなり、特にS D-03出土の(237・240～243)は一層その傾向がすすんで脚柱部は太く短く脚裾部の広がりも縮小して内面の指頭圧痕がさらに顕著となり脚径が10cm程度と均衡化する。杯部は有段高杯(237)と椀状の高杯(228～230・238～240)がある。有段高杯は口縁端部がさらに外反するが口縁部の立ち上がり急傾斜になり全体的に小さくなる。椀状の高杯は口縁部が上向きに立ち上がることで口径が縮小し杯部が深くなる傾向がみられる。杯部内面暗文を施すものと内外面ヨコナデ調整のものがある。

＜椀＞ Ⅷ期古の椀(225)に比べて口径はわずかに小さいが深さを増し全体的に器壁が厚くなる。(225)は口縁端部が外反したのに対し(244)は内傾し全体的に器壁が厚くなる。

Ⅸ期 S D-02出土資料を指標とするが良好な資料に乏しい。

＜壺＞ 良好な資料が得られなかったが、小型の壺(245)がある。

＜甕＞ 良好な資料に乏しいが、甕A 2類(246)はわずかに内傾する複合口縁で厚手である。甕C 2類の(248・249)は、(248)はⅧ期新の(235)と同様に口縁端部に引き伸ばしがみられ、(249)は小型で底部が平坦となり口縁部は先細りで器壁が厚い。

＜高杯＞ 口縁部がさらに湾曲しながら立ち上がり椀状となる。杯部内外面ヨコナデ調整となる。

今回調査した中で最古の土器は、市道南側のA・B-20～27区で出土している。土坑および溝状遺構で出土した資料が大部分であるが遺構外からも比較的良好的な資料を得、土器のもつ特徴から弥生時代中期後葉をⅠ期とし、古墳時代後期初頭をⅨ期として9期16区分とした。しかしながらⅠ期の段階においても若干の時期幅があるものと考えられ、遺構単位の土器の変遷をとらえることが困難なため、器種の分類を試みた。結果、さらに時期の細分が可能であるが、今後の課題としたい。Ⅱ期以降では、遺構単位の土器の形態・調整・セット関係などの変遷に留意し、Ⅵ期をはじめとして形態に明らかな差異がみとめられる場合は、層位関係を考慮した上で古・新などの区分を行った。しかしながらⅦ・Ⅷ期については指標とする甕、特に口縁部の形態差が大きく、遺構単位での変遷を示したが、同一遺構内で若干の新旧の様相を示す土器も含まれているものと考えられる。全般を通して言えることだが、資料不足のため甕以外の土器の様相が不明瞭であることは否めない。また、今回行った時期設定については、特にⅣ期について問題の残るところであるが、これまで青木Ⅲ新段階の次にくる土器として青木Ⅳ期が設定されていたが、これに該当するような土器が県東部では

認められず、これまでの調査ではすぐに青木V・VI期併行期の土器が出現し、²⁰ 県中部では平行沈線のち一部ヨコナデ調整をもって青木IV期に²¹ 充当している。岩吉遺跡でも県中部と同様に、口縁部平行沈線後一部ヨコナデ調整する甕が多く出土している。またこの甕は青木V・VI期段階の土器と一緒に出土しており遺構の床面での明らかな共伴関係を示すにはいたらなかったが、この二者の土器は形態的にも類似するものがあり、胎土的にも弥生土器の系統を引くものと考えあえて共存する時期を設定した。平行沈線の有無は大きな変革であり差異であり、この二者は区別するべきものであるが、現時点では模索中の段階であり、今後流動的な部分であるものとする。

また、従来観察されることの少なかった叩き目をもつ土器が、弥生時代中期後葉前半期で観察され、弥生後期初頭で姿を消し、畿内布留式併行期のVI期中段階で再び観察されるようになりVIII期古段階まで続く。いずれもハケ目以前の成形の段階で施され、布留併行期以降の土器は叩き目によって体部多面体の形状をとる。弥生土器でみられる叩き目は甕D②類の(25)と甕E②類の(29)にみられるような断面U字状で単位が比較的明瞭なものと、後に施されるハケ目より幅広であるが叩き目かハケ目か判断に苦しむものもある。全般的に弥生時代の叩き目の方がハケ目に近い施し方をしたものと思われる。また、弥生時代の叩き目はいずれも右下がりであるが布留併行期以降の土器は右下がり、左下がりがみられる。また、実測図で示した畿内系の甕口縁部(第91図45)以外にもSD-10から、断面U字状の粗い叩き目で後にハケ目調整のみられない胴部片が6点ばかり出土しており、内面ナデ調整で赤っぽく2mm程度の砂粒を多く含む胎土から、存地の土器とは考えがたく搬入土器と思われる。叩き目のみられる土器は、県内では羽合町長瀬高浜遺跡²²、倉吉市平ル林遺跡²³、イザ原9号墳壺棺²⁴、米子市尾高城址SD-02で出土が知られるが、イザ原の例を除いて畿内系甕もしくは搬入と思われる土器である。もちろん叩き目は後にハケ目によって消されてしまう性格のものだけに観察されないからといって施されなかったとは言いきれず、体部が全体的に多面体ではあるが叩き目が確認できない例も岩吉遺跡でみられる。叩き目の確認は斜光線で壁面を観察する必要があり特に注意すべきである。しかしながらII期新からVI期古の段階では叩き目の空白期であった可能性があり、²⁶ 布留式土器の影響が強くなる時期に叩き目が存地の土器に導入されたことになる。

岩吉遺跡では、搬入土器が若干ながら出土しており、古くは弥生時代中期後葉前半期の近江系羽状口縁甕(第172図7)があり、古墳時代では吉備系の甕(第128図10)、畿内系甕(第91図45)、東海系S字口縁甕(第91図41)が確認された。また、在地の土器とは若干異なる様相をもつものも数点みられる。当時の岩吉遺跡では様々な地方との交流があり、岩吉遺跡が拠点的な集落であったことが土器からも伺い知ることができる。

今後さらに土器を詳細に分析、比較検討し、他の遺跡との比較も行っていく必要がある。今回は時間的に詳細な検討ができなかったが、岩吉遺跡ではおおむね示したような土器の変遷を経るものと思われる。時期や区分の仕方など今後の課題も多いが、²⁸ いずれ何らかの機会に他の遺跡も交えて論じたいと思う。

[註]

- (1) 米子市教育委員会『目久美遺跡』1986年
- (2) 米子市教育委員会『池ノ内遺跡』1986年
- (3) 鳥取市服部で圃場整備工事に伴い弥生時代後期の田下駄・大足が出土している。
亀井照人「埋れていた木製品」(鳥取県立博物館『郷土と科学15-1』1969年)
- (4) 工業普通「木製穂摘具」(雄山閣『弥生文化の研究5』1985年)
- (5) ここでは、足板のみから成るもの狭義の意味での田下駄、足板のまわりに四角く組んだ枠板が付くものを大足とした。
- (6) 方形孔の小さなSD-03出土の(32)に類似するものとして大阪府友井東遺跡出土の古墳時代の枠付き縦長田下駄の枠板が挙げられる。
大阪府文化財センター『友井東 その2』1983年
- (7) 亀井照人「塞の谷遺跡」(日本考古学協会『日本考古学年報24』1973年)
1991年、鳥取県立博物館にて筆者実測。
- (8) 東郷町教育委員会『津浪遺跡発掘調査概報』1974年
- (9) 註7に同じ
- (10) 河原町教育委員会『前田遺跡発掘調査報告書』1983年
- (11) 註2の前掲書に同じ
- (12) 鳥取市教育委員会『秋里遺跡Ⅰ』1976年
- (13) 米子市教育委員会・米子市福市遺跡調査団『福市遺跡』1968年
- (14) 水野正好「前田遺跡発見のまじなひ札—その働きと用いられる場—」(河原町教育委員会『前田遺跡発掘調査報告書』1983年)
- (15) この他に、SK-27出土串状木製品と酷似した木製品(104)、綾杉文の線刻された棒状木製品(105)があり、祭祀に用いられた可能性がある。
- (16) 鋳滓状遺物については、穴沢義功氏より多大な御教示を得た。
- (17) 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1978年
- (18) 土井珠美「鳥取県下の状況」(第18回埋蔵文化財研究会事務局『弥生後時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について—発表記録—』1986年)
- (19) 県東部出土の定型化した須恵器出現以前の土器変遷について記述・論考された主なものについては以下がある。
杉谷愛象・平川誠ほか『秋里遺跡Ⅰ』鳥取市教育委員会 1976年
平川誠「日本海文化を考える会」4月例会資料 1981年
山榊雅美『奈免羅・西の前遺跡』船岡町教育委員会 1986年
中原斉「遺物—弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の土器群について」(鳥取県埋蔵文化財センター『秋里遺跡(西皆竹地区)発掘調査報告書』1988年)
- (20) 註17の前掲書に同じ
- (21) 註18の前掲書に同じ
- (22) 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1981年
- (23) 倉吉博物館『発掘された古代の伯耆と因幡』1981年
- (24) 倉吉教育委員会『イザ原古墳群・小林古墳群』1983年
- (25) 米子市教育委員会『尾高城址Ⅱ』1979年
- (26) 鳥取市西大路土居遺跡で弥生時代後期後半と考えられる右下がりの叩き目のある底部が出土している。
鳥取市教育委員会「西大路土居遺跡」(『鳥取市内遺跡発掘調査報告書』1990年)
- (27) 赤塚次郎氏分類のBタイプに該当するものと思われる。
赤塚次郎「『S字甕』覚書'85」(愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和60年度』1986年)
- (28) 今回報告書の弥生時代と古墳時代の時期区分については、庄内古段階の時期までを弥生時代として記述している。近年、布留古段階をもって古墳時代の始まりとする見解が大勢のようであるが、山陰地方、特に鳥取県東部においてはこの時期の土器の様相が現時点で必ずしも明瞭でないため、従来示されてきた報告書の時期区分に従った。なお、おおまかな併行関係は次のとおりである。

青木Ⅲ報告 (註17)	秋里Ⅰ報告 (註19-1)	秋里試案 (註19-2)	岩吉Ⅲ報告
0			
Ⅰ	古	8・9・10区土器群	Ⅰ
	中		
	新		
Ⅱ			Ⅱ
Ⅲ	古		Ⅲ
	新		Ⅳ
Ⅳ			
V・VI		Ⅰ	V
Ⅵ	古	B 10-1土器群	Ⅱ
	新		
Ⅶ	古	A 5-4 土器群	Ⅲ
	新	B 9-2 土器群 A 8-2 土器群	
Ⅸ	古		Ⅳ
	新		
Ⅹ	古		Ⅸ
	新		

岩吉遺跡土器編年(案)表土器出土遺構名一覽表

番号	出土地(遺構名)	番号	出土地(遺構名)	番号	出土地(遺構名)	番号	出土地(遺構名)
1	S K -66	36	S K -73	71	土器群 3	106	S D -25
2	B-21調査区	37	S K -81	72	土器群 3	107	S K -24
3	S K -90	38	S D -30	73	土器群 3	108	土器群 4
4	S K -74	39	S K -88	74	S D -26上層	109	土器群 4
5	S D -37	40	S K -72	75	S D -26上層	110	土器群 4
6	S K -90	41	S K -91	76	S D -26上層	111	S D -25
7	S K -70	42	S K -67	77	S D -26上層	112	S D -25
8	S K -88	43	S K -70	78	土器群 4	113	土器群 4
9	S K -88	44	A-23調査区	79	土器群 4	114	S D -25
10	B-22調査区	45	S D -26	80	S K -61	115	S K -52
11	S K -91	46	S D -26	81	土器群 4	116	S K -59
12	S K -73	47	S D -26	82	土器群 4	117	S K -56
13	S K -70	48	S D -29	83	土器群 4	118	S K -53
14	S D -32	49	S D -26	84	S K -65	119	S K -58
15	S K -89	50	S D -29	85	土器群 4	120	S K -58
16	S K -84	51	S D -29	86	土器群 4	121	S K -58
17	S K -72	52	S D -26	87	S K -61	122	S K -59
18	S K -68	53	S D -26	88	土器群 4	123	S K -56
19	S K -69	54	S D -26	89	土器群 4	124	S K -53
20	S K -69	55	S D -26	90	土器群 4	125	S K -58
21	S K -70	56	S D -26	91	土器群 4	126	S K -58
22	S K -90	57	S D -26	92	土器群 4	127	S K -58
23	S K -81	58	S D -26	93	S D -24	128	S K -58
24	S K -90	59	S D -26	94	土器群 4	129	S K -58
25	S K -83	60	S D -26	95	土器群 4	130	S K -48
26	S K -72	61	S D -26	96	S D -24	131	S K -48
27	S K -88	62	S D -26	97	S D -24	132	S K -56
28	S K -91	63	S D -26	98	土器群 4	133	S K -58
29	A-25調査区	64	S D -26	99	S D -23	134	S E -01
30	S K -83	65	S K -60	100	S D -24	135	S E -01
31	S K -89	66	S D -26上層	101	S D -24	136	S E -01
32	S K -70	67	S D -26	102	S D -24	137	S E -01
33	S K -69	68	S D -26	103	S D -25	138	S E -01
34	S D -37	69	土器群 3	104	S D -25	139	S E -01
35	S K -90	70	土器群 3	105	S D -25	140	S E -01

番号	出土地(遺構名)	番号	出土地(遺構名)	番号	出土地(遺構名)	番号	出土地(遺構名)
141	S E-01	171	A-15調査区	201	S K-05	231	S D-03
142	S K-33	172	A-14調査区	202	S K-05	232	S D-03
143	S K-33	173	A-14調査区	203	S K-05	234	S D-03
144	S K-33	174	A-12調査区	204	S K-05	235	S D-03
145	S K-33	175	A-15調査区	205	S K-05	236	S D-03
146	S K-33	176	A-12調査区	206	S K-05	237	S D-03
147	S K-33	177	A-15調査区	207	S K-05	238	S D-03
148	S K-33	178	A-12調査区	208	S K-05	239	S D-03
149	S K-33	179	A-15調査区	209	S K-27	240	S D-03
150	S E-02	180	A-14調査区	210	S K-27	241	S D-03
151	S E-02	181	A-12調査区	211	S K-27	242	S D-03
152	S E-02	182	A-12調査区	212	S K-27	243	S D-03
153	S K-33	183	A-12調査区	213	S K-27	244	S D-03
154	S K-33	184	S K-13	214	S K-27	245	S D-02
155	S K-33	185	S K-01	215	S K-27	246	S D-02
156	S K-33	186	S K-01	216	S K-27	247	S D-02
157	S K-33	187	S K-13	217	S K-27	248	S D-02
158	S K-33	188	S K-13	218	S K-27	249	S D-02
159	S K-33	189	S K-01	219	S K-27	250	S D-02
160	S K-33	190	S K-01	220	S K-27	251	S D-02
161	S K-33	191	S K-01	221	S K-27		
162	S K-33	192	S K-13	222	S K-27		
163	A-12調査区	193	S K-01	223	S K-27		
164	A-15調査区	194	S K-01	224	S K-27		
165	A-15調査区	195	S K-01	225	S K-27		
166	A-15調査区	196	S K-01	226	土器群 2		
167	A-15調査区	197	S K-13	227	土器群 2		
168	B-15調査区	198	S K-13	228	土器群 2		
169	A-11調査区	199	S K-13	229	土器群 2		
170	A-15調査区	200	S K-05	230	土器群 2		

壺A①	壺Ba	甕A②	甕C①		甕D②	甕E①
	壺Bb	甕B②	甕C②	甕C②	甕D③	甕E②
壺A②	壺Bc	甕B③	甕C③		甕D③	甕Ea①
	壺Bd	高杯	甕F	甕G	甕H	
壺Ca						
	壺D		器台		蓋	脚台部
壺Cb						
壺Cc	壺E					

岩古遺跡土器編年表(案) I期段階土器器種分類図 (S=1:8)

		壺	甕	その他	
II	古				SD-29 SD-26
	新				SD-26 上層 土器群 3 上層 SK-60
III	古				SK-61 SK-65 土器群 4
	新				SD-23 SD-24 SD-25

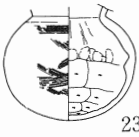
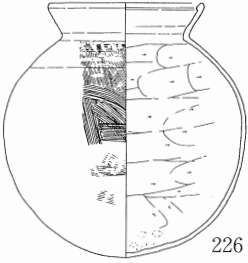
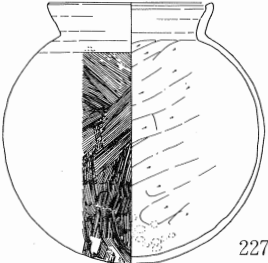
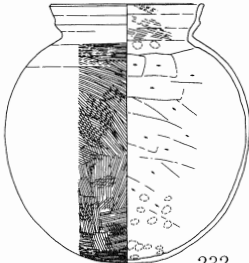

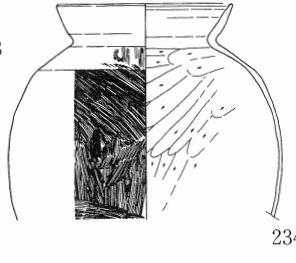
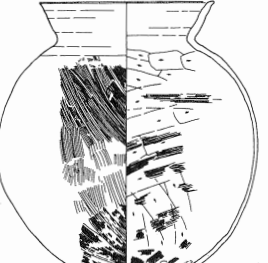
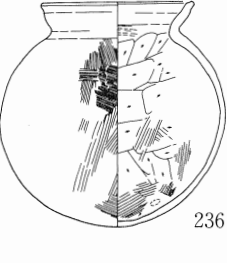
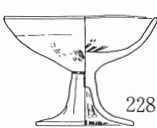
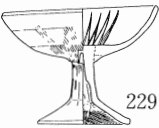
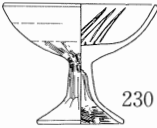
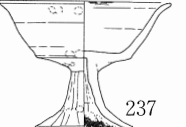

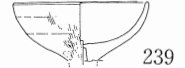



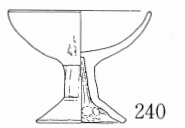


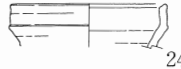


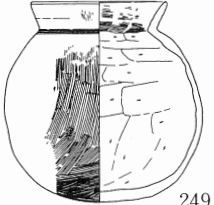
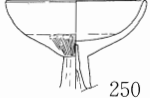

岩古遺跡土器編年表(案) II期古~III期新段階 (S=1:8)

	壺	甕	その他	
IV				SK-48 SK-52 上層 SK-53 SK-56 SK-58 上層 SK-59
V	古			SE-01
	新	 		SE-02 SK-33
VI	古	 		A・B-10 調査区
	中	  		A・B-15 調査区

岩吉遺跡土器編年表(案) IV期～VI期中段階 (S=1:8)

		壺	甕	その他	
VI	新				A-10 調査区
VII	古				SK-01 SK-13
	新				SK-05
VIII	古				SK-27

岩吉遺跡土器編年表(案) VI期新~VIII期古段階 (S=1:8)

		壺	甕	その他	
VIII	新	 231	 226  227  232  233  234  235  236	 228  229  230  237  238  239  241  242  243  240  244	土器群 2
		 245	 246  247  248  249	 250  251	SD-03
IX					SD-02

岩古遺跡土器編年表(案) VIII期古~IX期段階 (S=1:8)

おわりに

岩吉遺跡は、弥生時代から古墳時代にわたる大集落遺跡として、また、鳥取県でも数少ない弥生時代前期の遺跡として知られている。しかし、その実態は必ずしも明らかになっていた訳ではなかった。これまでに二度の発掘調査が行なわれているものの、いずれも小面積の発掘調査で試掘の範囲を越えるものではなく、分布踏査の成果などを含めて、おおよその遺跡範囲と存続時期が想定されていたにすぎなかった。今回の発掘調査では、岩吉遺跡のより具体的な評価を可能にするいくつかの成果を得ることができた。

今回の調査は発掘面積も比較的広く、検出した遺構・遺物も多数にわたっているが、いずれも弥生時代から古墳時代にかけての集落および集落にかかわるものである。今回の発掘調査で注目したい点はいくつかあるが、まず生産にかかわる遺構・遺物をあげたい。遺存状態は必ずしも良くないが、鳥取県東部で初めて弥生時代に遡る水田遺構及び水路が検出された。プラント・オパール分析によれば、広葉樹林を切り開いて開拓した水田であるという。林を伐採し水路を引き、豊かな大地として育んできた先人の姿がよみがえってくるようである。遺構は検出出来なかったが、古墳時代のふいごの羽口、鉄滓など鉄器生産にかかわる遺物が出土している。鉄滓（鍛冶滓）は分析によれば鉄鉱石を原料とするものであるという。とすれば全国的に見ても最古の部類に入るものであろう。次に遠隔地から持ち込まれた土器あるいはその影響を受けた土器が出土していることも見逃せない。弥生中期の近江地方の甕、東海地方のS字口縁甕のほか近畿、瀬戸内地方の土器が見られる。広汎な地域間の交流を知ることが出来る。これらの成果は岩吉遺跡の性格を語る具体的な成果といえよう。

今回の発掘調査では、遺跡の立地が幸いして比較的豊富な木製品が出土している。いずれも鳥取県では類例のない遺物で、弥生時代のものとして木庖丁、堅杵、横槌などの農具、古墳時代では鋤、鍬、田下駄などの農具、生活用具のほか机、火鑽板、ミニチュアの船、刀などが出土している。当時の生活や祭祀を彷彿とさせる遺物である。出土した土器も豊富で、弥生中期から古墳時代中期にかけての土器編年に良好な資料を提供するとともに、弥生土器に見られるタタキ技法などの土器製作上の新しい知見も得られている。このほか、弥生時代の掘立柱建物群が調査地の南半から検出された。今回は限定された調査範囲で問題はあがあるが、堅穴住居を伴わず掘立柱建物のみで構成される類例の少ない建物群で今後詳細に検討する必要がある。

これらの成果は、これまで漠然と鳥取県東部、千代川下流域における大集落と考えられていた、岩吉遺跡のより具体的な評価を可能にする手がかりとなるものである。短絡的ではあるが、生産に関わる諸施設を備え、技術と情報、広汎な交流の拠点として機能していた集落を想定することも可能であろう。調査成果に比例して残された問題は多い。先にあげた個々の調査成果をより深化することは無論のことであるが、その中で鳥取平野における岩吉遺跡の位置を探っていくことも鳥取平

野の歴史を解明する上でぜひとも必要であろう。期待したい。

今回の調査にあたっては、幸いにも自然科学関係の先生方、機関のご援助を得ることができた。藤原宏志、安田博幸、森眞由美、酒井禮男、山口誠治、山名巖の諸先生、島根県立工業技術センター、パリノ・サーヴェイ株式会社、(株)日立金属安来工場和鋼記念館、(財)元興寺文化財研究所、(財)鳥取県埋蔵文化財センターの諸機関である。得られた成果は、岩吉遺跡の評価と理解をより深く幅の広いものにするものであるとともに、今後の研究資料として利用されていくものと確信する。また、鳥取土木事務所の森下博、細川庸一郎、山浦守の三氏には岩吉遺跡の重要性を認識され、ひとかたならぬご協力をいただいた。

発掘調査から報告書の刊行まで多くの方々の援助・協力を得たが、調査の技術や観点が未熟であったため、十分にその厚意を生かすことが出来なかった。整理作業も全出土遺物の整理を目標としたが、我々の力量、時間的な制約の中で果たし得ず、最終的には遺構出土遺物の中でも凶化を割愛せざるをえなかった遺物も存在する。そういう意味では今回の調査報告も完全なものとは言い難いが、なんとか大枠での「事実」報告は出来たものと考えたい。援助いただいた皆様にあらためて感謝するとともに、今後とも変らないご叱責、ご鞭撻をいただければ幸いです。

ところで、ここまでこぎつけられたのは、実際に調査にあたり報告書を編集作成してきた前田、北浦、谷口、山田諸氏の情熱と努力によってである。非常勤職員という不安定な身分の中で調査を成し遂げた調査員諸氏の不屈の闘志に畏敬の念を禁じえない。行政担当者としてただ感謝する次第である。

まだ暑さの残る1988年(昭和63)9月に発掘調査の鍬を入れ、以来今日まで2年7カ月。1,000,000m²と想定される岩吉遺跡のごく一部3,920m²の発掘調査が終了した。(H)

付章 自然科学分析

岩吉遺跡出土遺物に付着の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部 安田博幸・森真由美

鳥取市岩吉遺跡出土鉄滓状物の調査

(株)日立金属安来工場 和綱記念館

鳥取市岩吉遺跡出土鉄滓状遺物鑑定

島根県立工業技術センター資源科 酒井禮男

岩吉遺跡出土木製品の樹種鑑定報告

(財)大阪文化財センター 山口誠治

岩吉遺跡出土木製品材同定 (株)パリノ・サーヴェイ



岩吉遺跡出土遺物に付着の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田 博幸 森 眞由美

鳥取市岩吉寺田とその周辺にわたって所在する岩吉遺跡から出土の土器に残存付着した赤色顔料物質について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法¹⁾とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料1 弥生時代後期後半の土器群 (IWA,A-10G) で出土した高杯の、脚柱部 (No.51) に付着している赤色顔料を調査担当者が鋼針で削り取って提供されたもの (8 mg) を分析用試料とする。

試料2 古墳時代中期の井戸 (IWA,B-10G SK-26) から出土した甕あるいは壺 (No.64) の底部内面に付着していた赤色顔料を調査担当者が鋼針で削り取って提供されたもの (8 mg) を分析用試料とする。

試料検液の作製

上記の採取試料のそれぞれをガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は、試料番号にそれぞれ対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B (2 cm×40cm) を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と対照の鉄イオン (Fe^{3+}) と水銀イオン (Hg^{2+}) の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わるろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置 (Rf値で表現する) と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：(Hg²⁺は紫色、Fe³⁺は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値 (色調)	
試料検液51	0.12 (紫褐色)	0.84 (紫色)
試料検液64	0.12 (紫褐色)	0.84 (紫色)
Fe ³⁺ 標準液	0.11 (紫褐色)	
Hg ²⁺ 標準液		0.85 (紫色)

- (2) ジチゾンによる検出：(Hg²⁺は橙色のスポットとして検出され、Fe³⁺は反応陰性のため呈色せず。)

表2 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値 (色調)
試料検液51	0.82 (橙色)
試料検液64	0.82 (橙色)
Fe ³⁺ 標準液	呈色スポット発現せず
Hg ²⁺ 標準液	0.86 (橙色)

判定

以上の結果の通り、岩吉遺跡出土の弥生後期後半の土器群中の高杯の脚柱部、ならびに、古墳時代中期の井戸出土の、甕あるいは壺の内面に残存した赤色顔料の両試料からは、Fe³⁺とHg²⁺が検出された。しかし、Hg²⁺の呈色が顕著であったのに対して、Fe³⁺の呈色が、淡かったことから考えて、これらの赤色顔料は水銀朱 (HgS) が主体であると判定する。このように、日本海側の地域で、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の出土遺物 (土器) から、水銀朱が検出されることは、その時代におけるこの地域での水銀朱への呪的信仰の広がりやを推測させる事象として興味深く、今後も、類似例の化学分析的確認の必要が痛感される。

(1990年10月分析)

〔註〕

- 1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤 忠編集 日本考古学論集1 考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp.389-407 (1986)

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならび技法の伝流に関する二、三の考察」『檀原考古学研究所論集』第七 吉川弘文館 pp.449-471 (1984)

〔編集者註〕 試料1：土器群4出土、取上番号A10-51 (第176図17)

試料2：SE-02出土、取上番号B10-64 (第17図6) なお、試料2は埋土中の出土であり、弥生時代後期に属する遺物と考えられる。

鳥取市岩吉遺跡出土鉄滓状物の調査

日立金属株式会社安来工場

和鋼記念館

岩吉遺跡は鳥取市岩吉字寺田に所在し、千代川左岸に広がる沖積平野のほぼ中央にあつて縄文時代の終りごろから古墳時代にかけての集落遺跡である。

大井手川の改修工事に伴う事前発掘調査が鳥取市遺跡調査団によって行なわれ、同遺跡を横切る幅8m、最深1.2mの水路より鉄滓と思われる塊りが10数点、その他土坑や井戸、それに遺物包含層からも数点出土した。

この鉄滓状出土物について鳥取市遺跡調査団より分析の依頼があつたので、化学組成、反射顕微組織およびEPMA、粉末X線回折により構成相の解析を行なった。その結果について以下報告する。

1. 資料

資料の明細および外観をそれぞれ表1、写真1に示す。

表1 資料の明細

番号	名 称	明 細	重量(g)
No.1	水路上層IWA, A-7 G 890314 No.209	溶融状のものが固まった感じ、断面には微細な気泡があつて、持った感じでは軽い。	35
No.2	水路上層IWA, A-7 G 890127 No.59	底面側は椀形状である。表面はやや黒色で凹凸状、持った感じでは軽い。	50
No.3	水路(西側セクション付近) IWA, A-7 G 890714 No.259	全面黒色で緻密である。表面は凹凸状で重たい感じ。	45
No.4	S K-26(井戸)IWA, B-10G 891122 No.90	表面黒色でガラス状を呈する。気泡があつて軽い。	15
No.5	包含層(5層)A-11G No.28	表面はやや黒色で平面状を呈する。底面は椀形である。断面一部に黒色でガラス状あり、やや重たい感じ。	80

〔編集者註〕 No.1～No.3：S D-10出土，No.4：S E-02出土

2. 化学組成

各資料から無作為に試料を採取し、化学分析を行なった。各試料の化学組成を表2に示す。このうち炭素及び硫黄は堀場製作所EMIA-1200型CS 同時定量装置による赤外線吸収法による。また、T・Fe、FeO、Fe₂O₃、M・Feは湿式化学分析によった。その他の元素は島津製作所製高周波誘導プラズマ発光分光分析装置(ICPV-1012型)により定量した。

表2 各資料の化学組成(重量%)

番号	C	SiO ₂	MnO	P	S	Ni	Cr ₂ O ₃	V ₂ O ₅	Cu	Al ₂ O ₃	Na	K	TiO ₂	CaO	MgO	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	M.Fe
No.1	0.92	54.67	2.47	1.20	0.47	0.01	0.02	0.026	0.01	6.60	4.72	1.00	0.35	7.60	8.10	3.62	2.06	2.89	0.05
No.2	0.66	59.60	0.16	0.26	0.007	0.01	0.02	0.027	0.01	20.79	3.89	1.70	0.52	2.15	1.00	4.97	3.16	3.55	0.10
No.3	0.14	17.18	0.12	0.16	0.021	0.01	0.02	0.015	0.03	6.07	0.97	0.91	0.12	1.23	0.75	52.96	37.86	33.10	0.16
No.4	0.17	59.79	0.21	0.50	0.011	0.01	0.02	0.022	0.01	12.88	3.55	2.85	0.41	2.87	1.67	5.96	5.75	2.04	0.01
No.5	0.12	25.26	0.06	0.16	0.020	0.01	0.02	0.020	0.01	11.79	1.40	1.00	0.28	1.13	0.68	43.07	38.11	18.67	0.16

資料No. 1の鉄分は土壌なみの含有量である。またCaOとMgOはやや多く、MnOも多目である。

資料No. 4は鉄分は低く、SiO₂、Al₂O₃は高い。

資料No. 2は鉄分低く、SiO₂高い。特にAl₂O₃が高い。

資料No. 3, 5は鉄分が高い。

3. 顕微鏡組織

資料断面の顕微鏡組織を写真2～6に示す。

資料No. 1とNo. 4はガラス状的組織を示している。

資料No. 3およびNo. 5はヴスタイトおよびファイヤライト組織が認められる。

資料No. 2は全鉄分は低いが極部的組織はヴスタイト、+ファイヤライトの標準的な鍛冶滓の組織を示している。

4. 構成相の解析

前項で観察した資料を用い、走査型電子顕微鏡(SEM)による微細組織の観察並びにEDX分析(エネルギー分散型X分析)による局所的な定性分析を行なった。また粉碎試料を用いてX線回折を実施し、構成結晶の同定を行なった。結果を写真7～16に示す。

以上資料1, 2, 3, 4, 5について結晶組織の検討を行なった結果をまとめると表3の通りである。

表3 資料の構成組織

番号	名 称	ファイヤライト Fe ₂ SiO ₄	ヴスタイト FeO	マグネタイト Fe ₃ O ₄	ガラス質地 基
No.1	水路上層 IWA A-7G No.209				Si-K-Al-Ca-Fe-Mg-Na
No.2	水路上層 IWA A-7G No.59	◎	◎	○	Si-Fe-Ca-K-Al
No.3	水路(西側セクション付近) IWA A-7G No.259	◎	◎	◎	Si-Fe-K-Al-Ca-Na
No.4	SK-26 (井戸) IWA B 10G No.90				Si-Ca-Al-Fe-K-Mg
No.5	包含量 (5層) A-11G No.28	◎	◎		Si-Fe-Ca-K-Al

注：◎多い，○あり

5. 考察

大沢正己⁽¹⁾は古墳出土鉄滓の広汎な調査結果に基づき、製錬滓と鍛冶滓の化学組成および鉱物組成をまとめられている。これに本鉄滓の結果をまとめると表4の如くなる。

表4 各資料の化学組成および構成相の比較

名 称		化 学 組 成 (重量%)				構 成 相
		造滓剤量	TiO ₂	V	T.Fe	
製錬滓(砂鉄)	福岡地方	16.8 ~39.8	1.1 ~8.2	0.006 ~0.576	37.5 ~57.6	W+F, W+M+F, M+F
〃	岡山地方	17.1 ~25.9	5.03 ~19.8	0.02 ~0.18	32.1 ~41.8	M+F, U+I+F
鉱石系製錬滓	〃	44.5 ~54.9	0.35 ~0.57	0.007 ~0.010	27.5 ~38.0	F+(^W / _M)微量
精錬鍛冶滓	福岡地方	21.0 ~33.5	0.22 ~0.9	0.009 ~0.167	49.1 ~55.6	W+F
〃	岡山地方	21.4	5.6	0.12	51.7	W+M+F
鍛錬鍛冶滓	福岡地方	10.1 ~12.6	0.1 ~0.7	0.013 ~0.288	62.2 ~64.0	W+F
〃	岡山地方	7.52	0.06 ~0.19	0.06	50.1 ~64.0	W+F
No.1 資料	岩吉遺跡	76.97	0.35	0.015	3.62	
No.2 〃	〃	83.54	0.52	0.015	4.97	W+M+F
No.3 〃	〃	25.23	0.12	0.008	52.96	W+M+F
No.4 〃	〃	77.21	0.41	0.012	5.96	
No.5 〃	〃	38.86	0.28	0.012	40.07	W+F

注：造滓成分：SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO

W：Wustite, F：Fayalite, M：Magnetite, U：Ulvöspinel, I：Ilmenite

資料No. 1は鉄分低く、造滓剤量が多い。また、CaOとMgOは多目、これは土質のためであろうか、従って鉄滓とは考えられない。また、資料No. 4も、鉄分低く、SiO₂、Al₂O₃が多い僅かながらの黒色部はガラス状となっていることから炉内高温部に接触した炉壁材と思われるが、これと従来調査した釜土の組成の比較を表5に示す。

表5 各種釜土の化学組成の比較 (重量 %)

種 類	SiO ₂	Al ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	T.Fe
岩吉遺跡、No. 4 資料	59.79	12.88	0.41	2.87	1.67	5.96
横田町下大仙子製鉄遺跡元釜土NC14	69.40	23.71	0.60	1.20	1.13	3.66
伯太町座王古墳出土鉄滓付着土	68.00	25.00	0.49	0.31	0.38	2.61
島根県屋床たたら炉壁	69.20	22.37	0.90	0.38	1.33	3.13
砥波炉元釜土(古来の砂鉄製錬法)	65.59	18.63	—	0.23	Tr	3.37
石見国たたら釜土()	67.16	14.91	—	0.03	Tr	1.91
靖たたら釜土	68.54	13.12	—	0.25	0.26	3.10
日本鉄鋼協会復元たたら釜土	64.44	13.60	—	0.20	0.38	2.83

組成的にみると、たたら釜土はSiO₂、Al₂O₃とも高いが、岩吉遺跡はいずれもやや低目である。

(1) No. 3、No. 5 資料について

表4により資料が製錬滓か鍛冶滓か、あるいは使用原料が砂鉄か鉱石(岩鉄)かについて考察する。

イ. 製錬滓か鍛冶滓か

鍛冶滓に対する製錬滓の特徴を列挙すると次の通りである。

- ① 全鉄分が低目である。(通常50%以下)
- ② 造滓成分が多い。(通常20%以上)
- ③ 同一原料を使用する場合、TiO₂が高目となる。
- ④ ヴスタイト(FeO)の生成が少ない。
- ⑤ 形状については、製錬滓が流動性のよい滑らかな面をもつのに対し、鍛冶滓は凹凸状である。

本資料No. 3、No. 5についてみると、No. 3は全鉄分高く、TiO₂、V量は低い。それにヴスタイトの生成状態からみて鍛冶滓と推定される。

No. 5は全鉄分やや低く、造滓成分多いが、TiO₂、V量とも低く、またヴスタイトの生成状態からみて製錬滓とは考えられず鍛冶滓と推定される。

ロ. 精錬鍛冶滓か鍛錬鍛冶滓か

鍛錬鍛冶滓に対する精錬鍛冶滓の特徴は次の通りである。

- ① 全鉄分が低目である。
- ② 造滓成分が多い。
- ③ 同一原料を使用する場合 TiO_2 がやや高目となる。
- ④ 金属鉄の混入が少ない。

資料No. 3、No. 5とも鉄分低目で造滓成分が多いことから鍛錬鍛冶滓ではなく、精錬鍛冶滓と推定される。

ハ. 使用原料は砂鉄か鉍石か

使用原料を区別する指標となるのはTiとV量である。

製錬滓の場合は表4の如く、 TiO_2 量に大差があるので区別は簡単であるが精錬鍛冶滓では残存が壁土の溶融によって薄まるために区別が困難となる。表4により、砂鉄を原料として精錬鍛冶滓の $[TiO_2] / [Fe]$ の比を求めると0.01~0.11であるのに対し、本資料では約0.0023~0.007となり極めて低い。

鉍石原料を用いて精錬鍛冶滓中の TiO_2 量は不明であるが、鉍石系製錬滓の $[TiO_2] / [Fe]$ (≈ 0.012) よりかなり低くなる筈であるから、0.0023~0.007の値は鉍石系精錬鍛冶滓と考えれば妥当な値である。

Vも砂鉄中に多く含まれる元素である。表4から砂鉄系精錬鍛冶滓における V/Fe の値を求めると、福岡で0.0012、岡山で0.0023となる。一方本資料では約0.00015~0.0003となり、砂鉄系より、極めて低いことがわかる。

以上により本資料No. 3、No. 5の原料は鉍石系（岩鉄）と推定される。

(2) No. 2 資料について

全鉄分4.97%と低く、 SiO_2 、 Al_2O_3 が多いことから炉材と思われるが、その中に鉄滓状のやや黒色部があり、それを見ると顕微鏡組織、写真3および写真9のSEM像に見られるように鍛冶滓の特徴であるヴスタイト、ファイヤライト組織を示している。これは炉材に入り込んだ鍛冶滓と推定される。

6. 結言

縄文時代の終り頃から古墳時代と巾の広い年代の岩吉遺跡から出土した鉄滓について調査を行った。結果を要約すると次の通りである。

- (1) 資料No. 1は土壌と推定される。
- (2) 資料No. 2、No. 4は炉壁と推定され、特にNo. 4の表面はガラス状に焼結しているのが認められ、かなり高温に晒されたと推定される。

(3) 資料No. 3、No. 5は全鉄量、構成物質並びにヴスタイト晶出状態によって精錬鍛冶滓と判定される。

以上の調査は、鳥取市遺跡調査団の依頼により、調査は日立金属株式会社安来工場冶金研究所で実施し、和鋼記念館がとりまとめた。

[参考文献]

(1) 大沢正巳：古代出土鉄滓からみた古代製鉄、日本製鉄史論集（たたら研究会 1984）



写真1-1 岩吉遺跡No. 1資料の外観



写真1-2 岩吉遺跡No. 2資料の外観

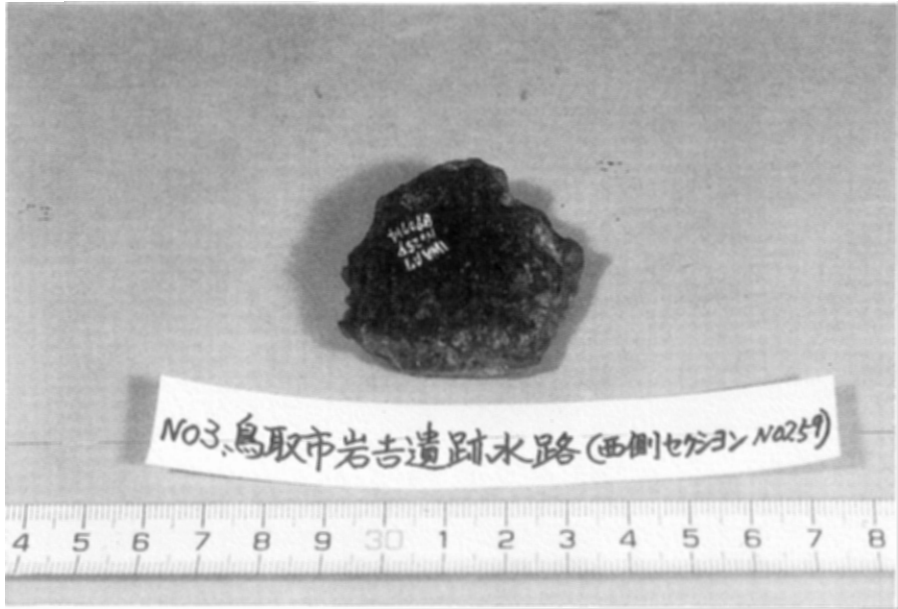


写真1-3 岩吉遺跡No. 3資料の外観

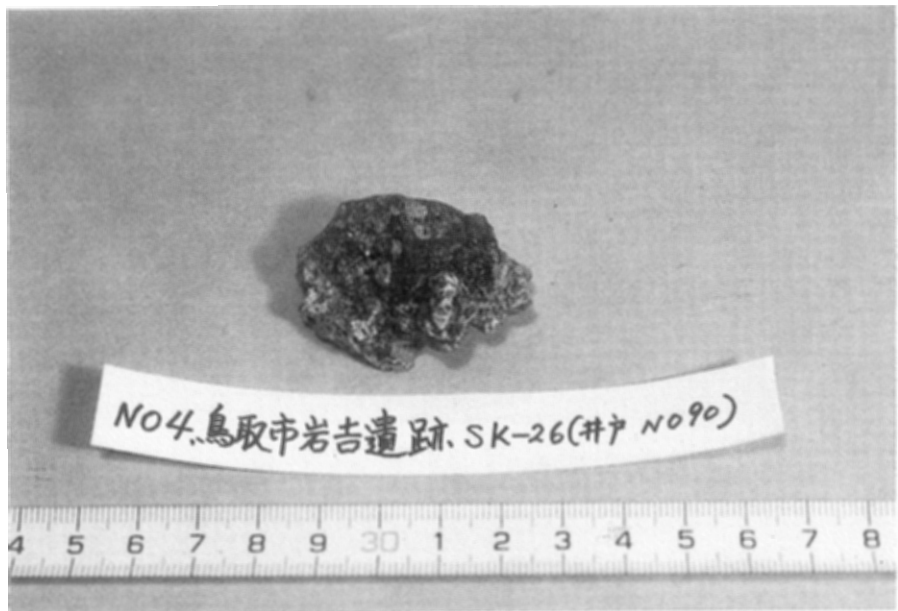


写真1-4 岩吉遺跡No. 4資料の外観



写真1-5 岩吉遺跡No. 5 資料の外観

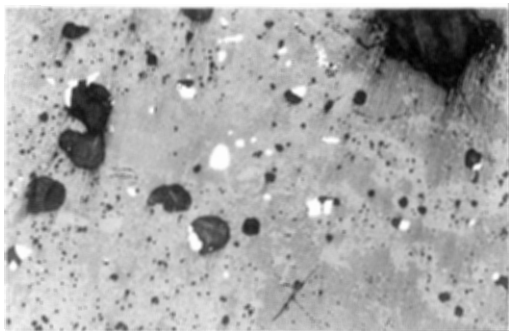


写真2 No. 1資料 (×100)

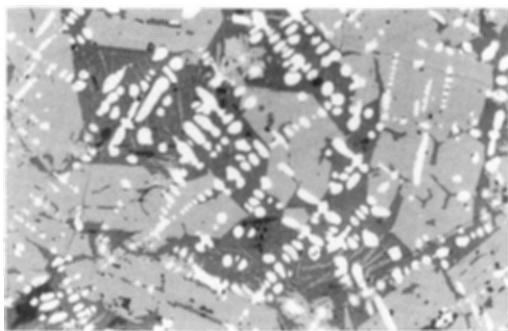


写真3 No. 2資料 (×100)

白色の樹枝状結晶はヴスタイト
淡灰色の樹枝結晶はファイヤライト

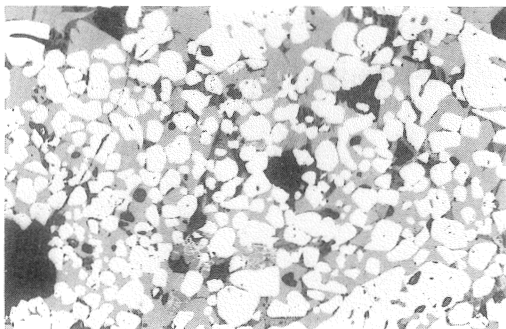


写真4 No. 3資料 (×100)

白色の小豆状結晶はヴスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト

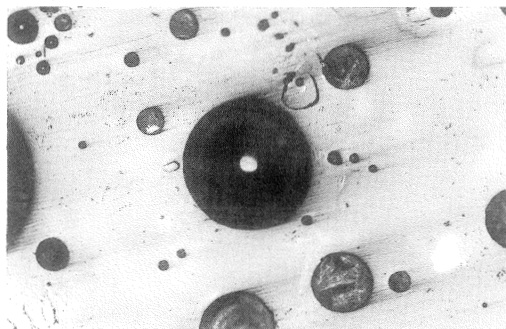


写真5 No. 4資料 (×100)

ガラス状を呈する

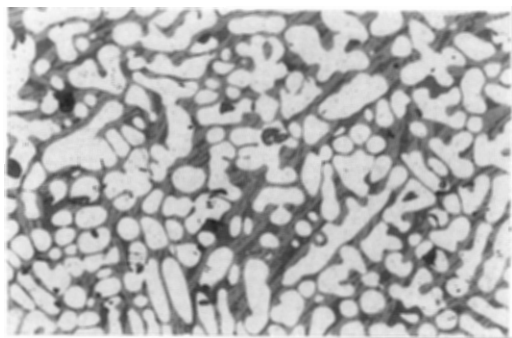
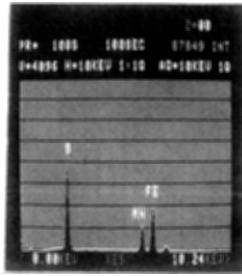


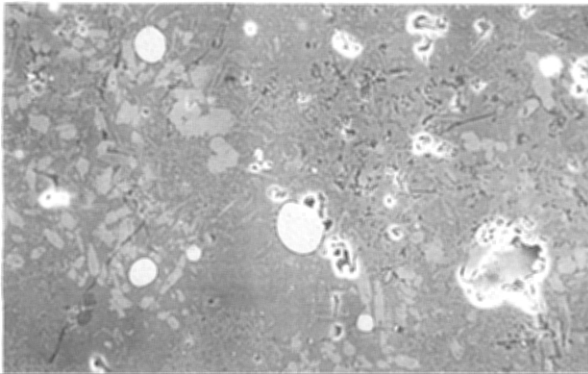
写真6 No. 5資料 (×100)



A部



B部



(×400)



C部

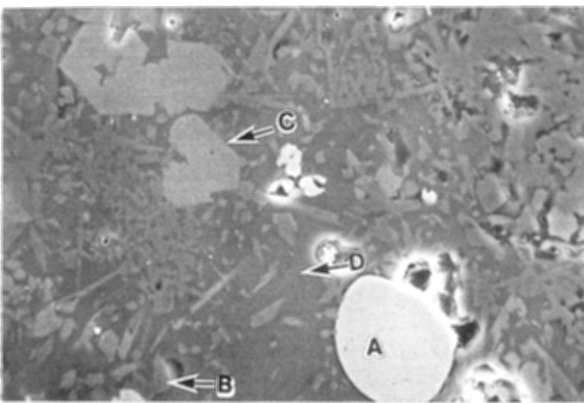


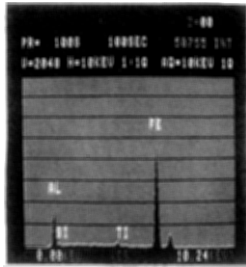
写真7 No. 1資料のSEM像とEDX分析 (×1000)



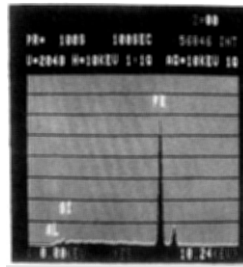
D部



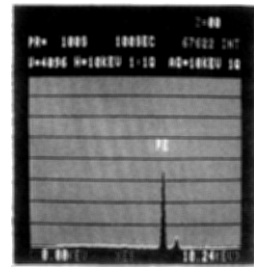
写真8 No. 1資料のX線回折像



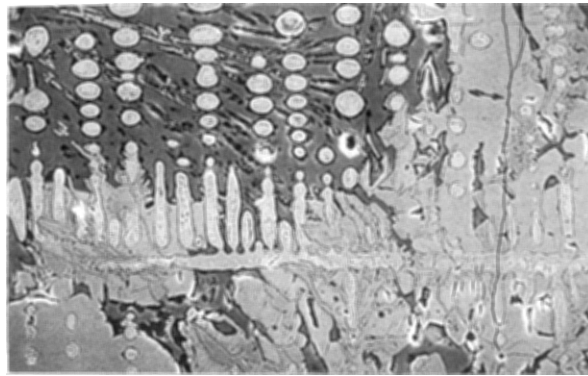
A部



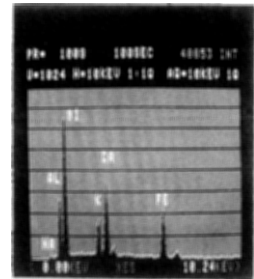
B部



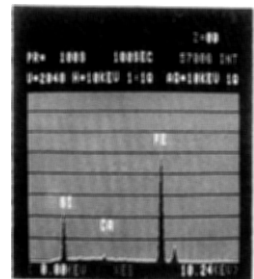
C部



(×400)



D部



E部 ファイヤライト

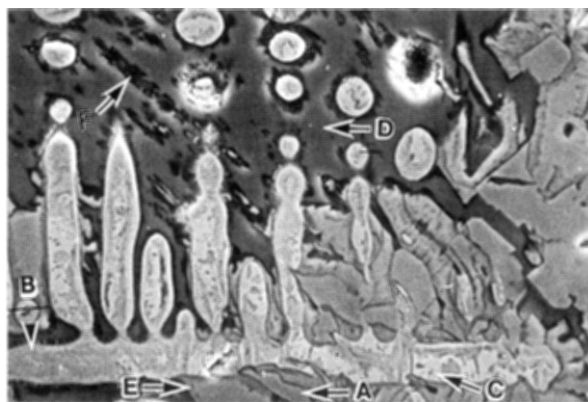
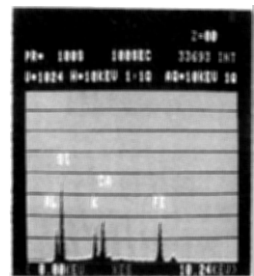


写真9 No. 2資料のSEM像とEDX分析 (×1000)



F部 基地

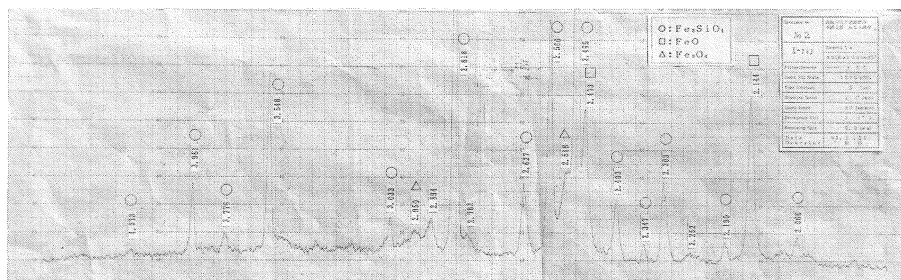
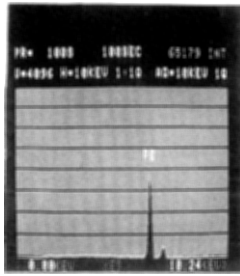
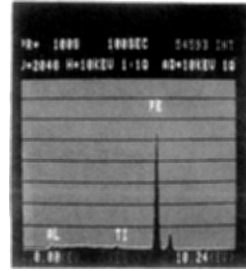


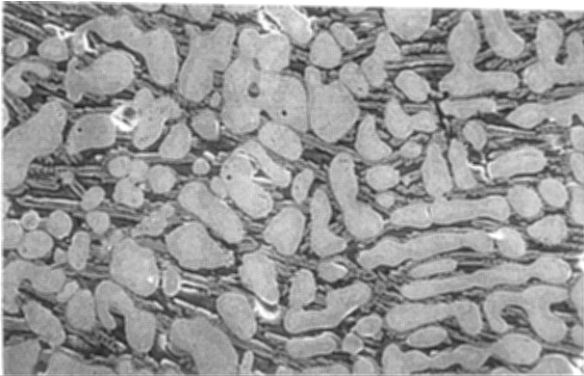
写真10 No. 2資料のX線回折像



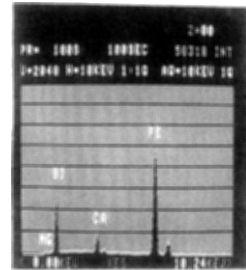
A部 ヴスタイト



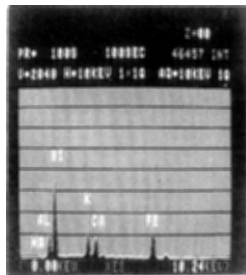
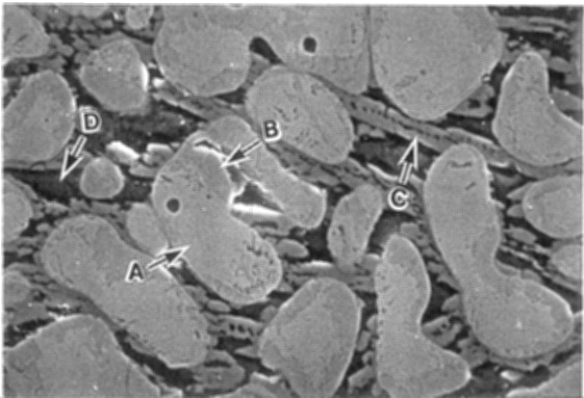
B部 ヴスタイト



(×400)



C部 ファイヤライト

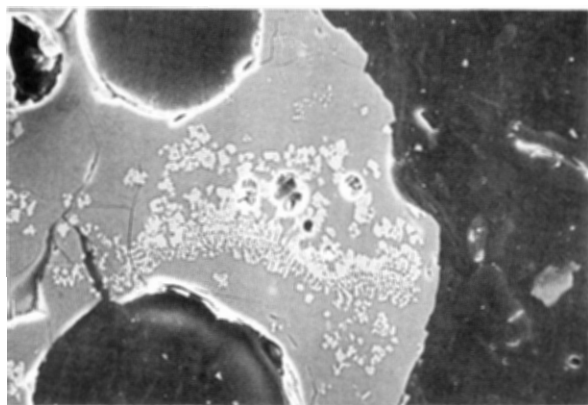


D部 基地

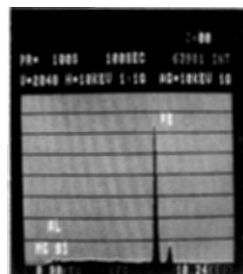
写真11 No. 3 資料のSEM像とEDX分析 (×1000)



写真12 No. 3 資料のX線回折像



(×400)



A部 ヴスタイト

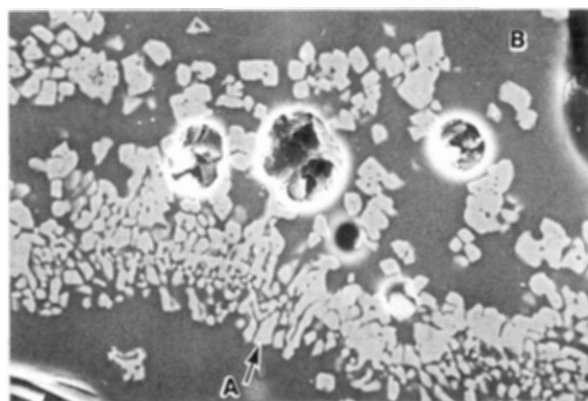
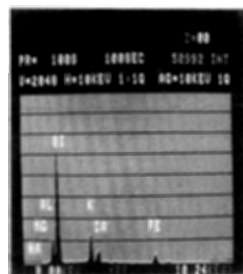


写真13 No. 4 資料のSEM像とEDX分析 (×1000)



B部 基地

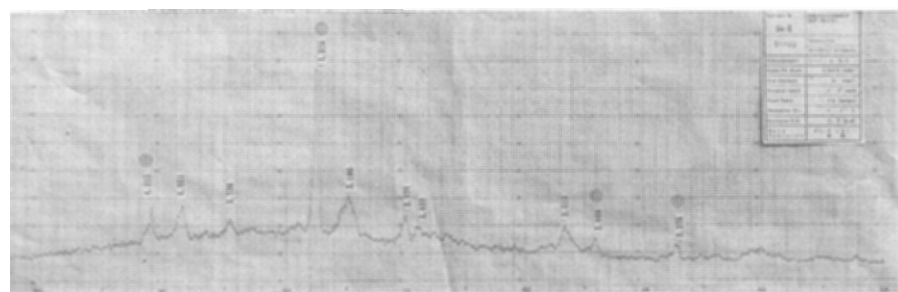
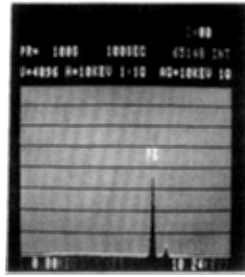
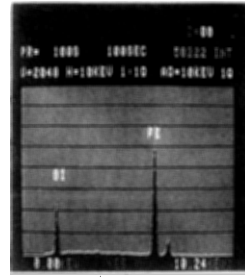


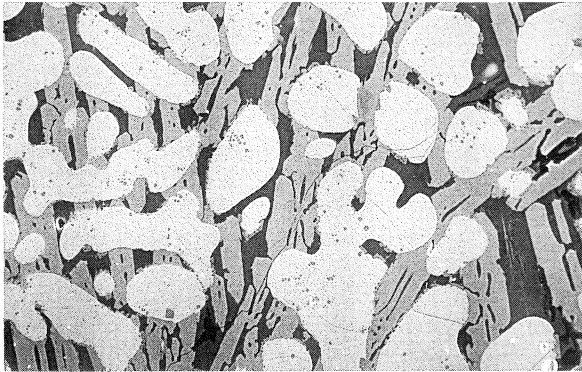
写真14 No. 4 資料のX線回折像



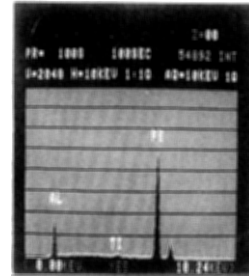
A部 ヴスタイト



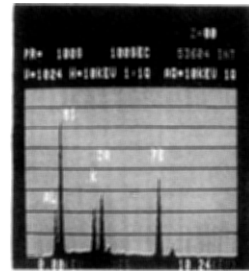
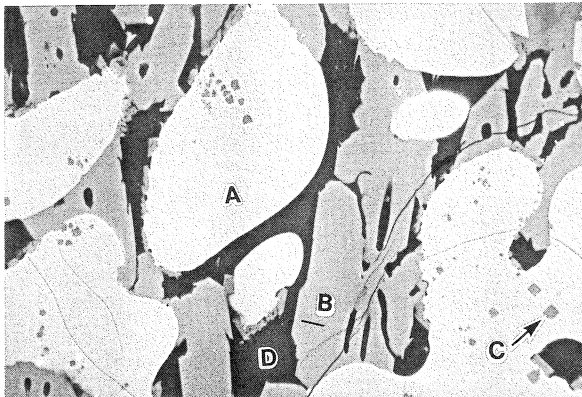
B部 ファヤライト



(×400)



C部



D部

写真15 No. 5 資料のSEM像とEDX分析 (×1000)

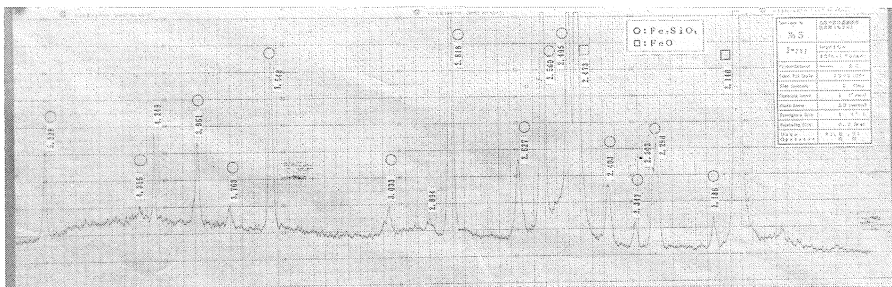


写真16 No. 5 資料のX線回折像

鳥取市岩吉遺跡出土鉍滓状遺物鑑定

鳥根県立工業技術センター

資源科 酒井 禮男

1. 鑑定試料

No. 1 IWA A-7 水路 No.209

No. 2 IWA B-6 水路 No.140 (土器片付着)

2. 試験方法

鑑定のため次のような試験を行った。

試料No. 1については、その表面を実体顕微鏡で観察した後、岩石切断機および研磨機を用いて薄片を作成し偏光顕微鏡により構成鉍物の種類、粒径などを観察した。次に試料を粉碎し、その一部をX線回折、蛍光X線分析および化学分析に供し鉍物組成、元素ならびに化学組成を求めた。

試料No. 2については、実体顕微鏡で観察した後、粉碎しX線回折および化学分析を行った。

3. 試験結果

試料No. 1の化学組成は、表に示す様に、珪酸、アルミナ、カルシウムおよびマグネシウム分に富み、その他に鉄、マンガン、ナトリウム・カリウム分が含まれている。また蛍光X線分析ではチタン、亜鉛、砒素、ストロンチウムおよび燐が検出され、鉛は検出されなかった。

鉍物組成はX線回折線図に示す様に主体は透輝石 (CaO 、 MgO 、 2SiO_2) である。その他に偏光顕微鏡観察と化学分析の結果から尖晶石・スピネル類 ($\text{Mg}(\text{Fe}, \text{Mn}, \text{Zn})\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) が共存していると考えられる。その他に偏光顕微鏡で数個の極めて小さな長石片と非晶質部が局部的に観察された。

試料No. 2は、表面に薄いガラス層が生成し、そのガラス層には貫入 (ひび割れ) が入っており、内部には大小の円い孔が認められた。

鉍物組成はほとんど石英と長石で、いずれも粒状で存在し、長石は半熔融状のものが多く観察された。

4. 鑑定結果

試料No. 1 (IWA A-7 水路 No.209) は、多孔質で外観は鉍滓の様な形状を呈しているが、構成鉍物として透輝石 (CaO 、 MgO 、 2SiO_2) が主体で、融点 ($1500\sim 1750^\circ\text{C}$) の高い尖晶石・スピネル類 ($\text{Mg}(\text{Fe}, \text{Mn}, \text{Zn})\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) が共存し、非晶質 (ガラス) 部分が少ない。ガラス鉍滓とすれば珪酸、ナトリウム・カリウム分が少なく、冶金鉍滓とすればアルミナ、マグネシウムが多過

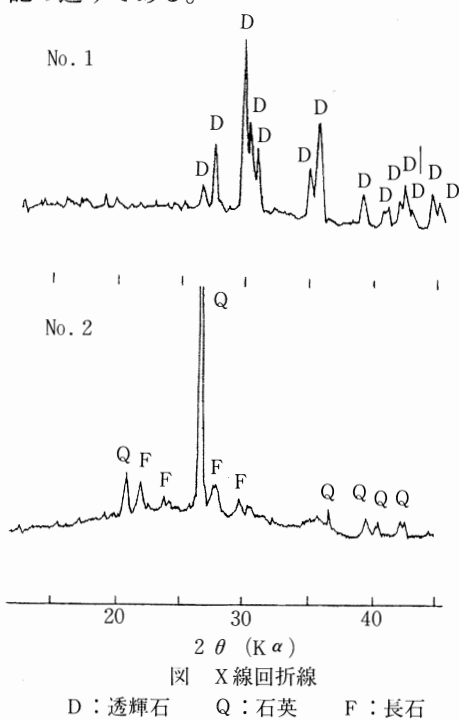
ぎると考えられる。また、透輝石と尖晶石・スピネル類はどちらも塩基性～超塩基性火成岩に産する鉱物であり、共存しても不思議でないことから、試料No. 1 は天然に産する塩基性～超塩基性火成岩の岩片と思われる。

試料No. 2 (IWA B-6 水路 No.140 土器片付着) は、表面に灰を被って生成したと推察されるガラス層が付着し、内部は粒状の石英と長石からなり、その長石の多くは半熔融状態であることから、相当高い温度 (1200℃位) のところにかなり長時間置かれたものと推察される。化学組成的に特徴がないことから何かの原料であるとは考えにくく、よって試料No. 2 は土器を焼成した時の窯炉の破片と考えられる。

なお、試料No. 1・2の化学組成とX線回折線は下記の通りである。

表 化学組成

	No. 1	No. 2
SiO ₂	38.80	61.82
Al ₂ O ₃	19.19	15.96
Fe ₂ O ₃	4.48	7.64
CaO	16.87	4.51
MgO	11.26	1.81
Na ₂ O	2.77	3.11
K ₂ O	0.97	4.55
MnO	4.74	



[参考文献]

1. 葉賀七三男「冶金考古学のすすめ」金属5月号 1990年
2. 湊秀雄、佐々木稔「タタラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」たたら研究第14号 1968年
3. 窯業協会『窯業ハンドブック』朝倉書店 1980年
4. 荒井康夫『セメントの材料化学』大日本図書 1984年
5. 黒田吉益、諏訪兼位『偏光顕微鏡と岩石鉱物』共立出版 1983年
6. 『地学事典』平凡社 1979年
7. 『世界科学大事典』講談社 1977年

[編集者註] 試料No. 1 : S D-10出土、取上番号A 7-209

試料No. 2 : S D-10出土、取上番号B 6-140

岩吉遺跡出土木製品の樹種鑑定報告

(財)大阪文化財センター

山口 誠治

1. はじめに

岩吉遺跡から出土した2点（火鑽臼^{a)}と高杯の杯部^{b)}）の木製品について樹種鑑定したので報告する。

2. 樹種鑑定結果

鑑定方法としては、木製品の木口・柾目・板目方向の徒手切片を作製して生物顕微鏡により観察し、樹種の識別を行なった。このとき注意した点は、加工痕の部分を痛めずに切片を作製することであった。なお、その観察結果は写真にとって図版に載せている。また、その写真図版には大阪府若江北遺跡出土ヤマグワ製容器の樹種の写真を比較試料として載せた。

さて、出土した2点の木製品のうち火鑽臼はヒノキで、高杯の杯部はヤマグワと鑑定した。次に、この鑑定結果についての識別理由について述べる。

(1) ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* S. et Z.)と鑑定した理由

木口面での年輪界の観察では、早材から晩材への移行はゆるやかであった。さらに、柾目面では、その構成要素である仮道管と放射柔細胞を観察し、放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型であることを確認した。その分野壁孔は1分野に2個認められたが、消失しているものも多く確認は非常に困難であった。また、板目面で放射組織の単列であることを認めた。以上の点からヒノキと鑑定した。

(2) ヤマグワ(*Morus bombycis* Koidz.)と鑑定した理由

木口面での観察では、道管が大きく楕円形で1～2列に配列する環孔材であった。柾目面においては、大道管が存在し単穿孔であり、板目面においては放射組織が典型的な紡錘形で平伏細胞からなっていることを確認した。なお、腐朽が進行していて識別に不可欠な部分が消失していたりして苦労したが、ヤマグワの特徴を観察できたのでヤマグワと鑑定した。

3. まとめ

以上の鑑定結果から言えることは少ないが、過去のデータを参考にすると次のことがわかる。各地の遺跡から出土した火鑽臼の使用樹種は、スギ、シャシャンボ、ヒノキなどを多く使用していると報告されている。また昔から火鑽臼の樹種としてスギ、ヒノキ、タブノキなどの軟らかい材質の樹種を使うといわれてきた。さらに、現在は火鑽臼はまったく使われないが、出雲大社や各地の神

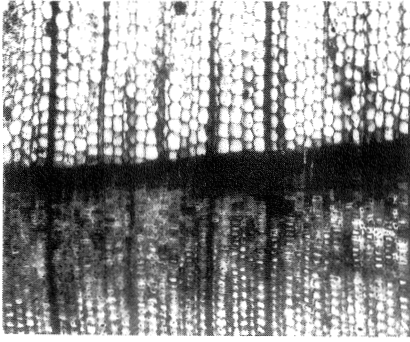
社の火を得るための神事に使用する火鑽臼の使用樹種としては、大部分がヒノキを使用している。このことから考えると、今回出土した火鑽臼の樹種がヒノキであったことは選別されたものであるとわかる。また、各地の遺跡から出土する高杯の使用樹種としては広葉樹が8割を占め、特にヤマグワとケヤキを使用していることが報告されている。したがって、今回出土した高杯の杯部の樹種がヤマグワであったことと一致している。以上を報告する。

[参考文献]

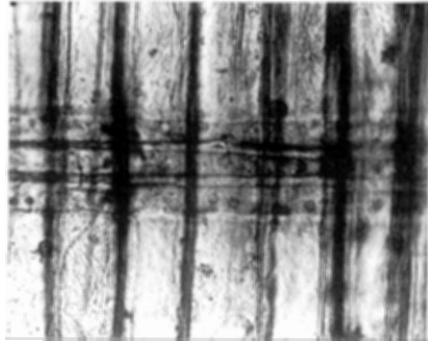
(1) 島地 謙・伊東隆夫著, 「日本の遺跡出土木製品総覧」, 雄山閣出版 (1988)

[編集者註] a : S D - 10出土、取上番号 A 6 - 129 (第102図203)

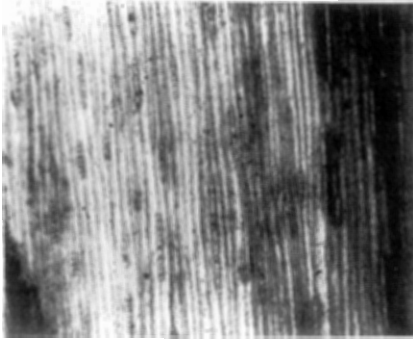
b : S D - 10出土、取上番号 A 6 - 139 (第101図198)



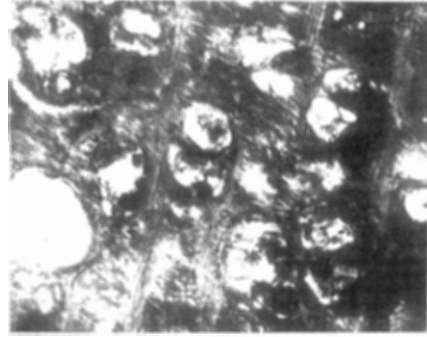
ヒノキ 木口 ×20 (火鑽臼)



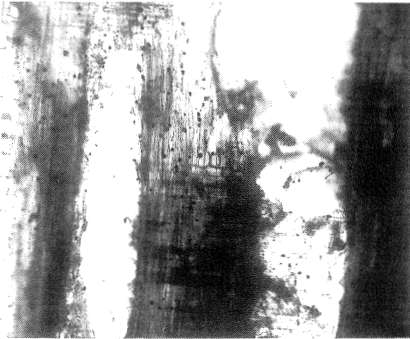
ヒノキ 柀目 ×20



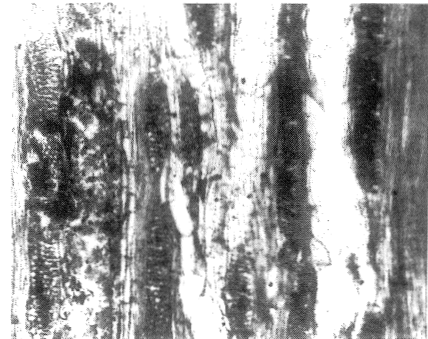
ヒノキ 板目 ×20



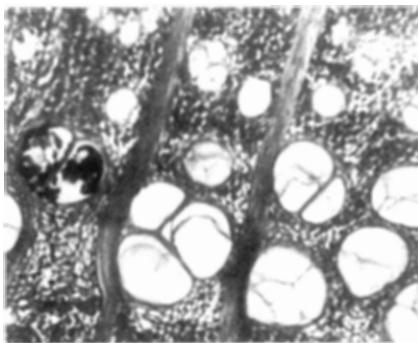
ヤマグワ 木口 ×20 (高杯の杯部)



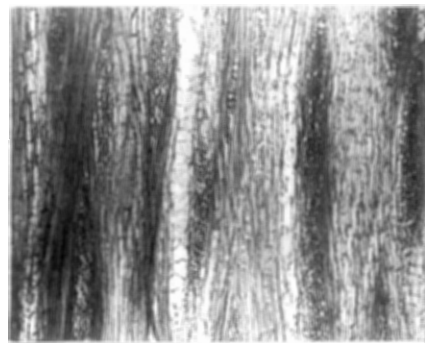
ヤマグワ 柀目 ×20



ヤマグワ 板目 ×20



ヤマグワ 木口 ×20
(若江北遺跡出土容器)



ヤマグワ 板目 ×20
(若江北遺跡出土容器)



岩吉遺跡出土木製品材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鳥取平野を流れる千代川左岸の自然堤防上に立地する岩吉遺跡は、弥生時代前期から古墳時代後期にかけて栄えた集落遺跡である。多くの遺物・遺構が検出され、当時の様相を知る資料が豊富である（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団、1989・1990）。

ここでは出土遺物の内、木製品についてその樹種を知るために27点の木製品を対象に材同定を行った。

1. 試料

同定木製品は35点（木製品番号1～35）であった。しかし、同定試料の細片を得ることによって木製品の形状をそこなう恐れのあるもの8点については、協議のうえ除外した。したがって、同定試料はNo. 1、3～10、12、14、15、17、19～22、25～28、30～35の27点である。農具や日用品などの木製品と推定されており、(表1)、No. 5～No. 7、31の4点は弥生時代後期前半、その他の23点は古墳時代中期のものとなっている。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラル（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1～4）も作製した。

3. 結果

試料は以下の10種類（Taxa）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」（1989）にしたがった。また、一般的性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。

・スギ(*Cryptomeria japonica*) スギ科 No. 1, 3, 4, 9, 10, 14, 15, 17, 32, 33

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属の一種(*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No.22,30,34

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州 (福島県以南) ・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で国内では現在スギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州 (岩手県以南) ・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia*) イヌガヤ科 No.20

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は年輪全体に散在し、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はトウヒ型 (Piceoid) で1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは、本州 (岩手県以南) ・四国・九州に分布する常緑小高木～低木で、時に植栽される。なお、北海道西部・本州 (主として日本海側) ・四国の一部には、匍匐性の変種ハイヌガヤ (*C. harringtonia* var. *nana*) が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具・旋作材などに用いられる。

・イチイ類似種 (cf. *Taxus cuspidata*) イチイ科 No.35

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノギ型で1～2個。放射組織は単列、1～5細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。試料は生長が悪い上に劣化が進んでいる。らせん肥厚は対をなしていないと判断したが、同科のカヤである可能性も否定しきれないため類似種とした。

イチイは北海道・本州・四国・九州に分布する常緑高木である。本州の日本海側には低木性の変種キャラボク (*T. cuspidata* var. *nana*) があり、庭木として植栽されることも多い。材はやや重硬で、強度は大きく、加工は容易、保存性は高い。笏としての用途が最もよく知られるが、彫刻や細工物のほか建築・器具・家具材など各種の用途も知られている。

・コナラ属アカガシ亜属の一種(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科 No.25,27,28.

放射孔材で、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属(カシ類)には、イチイガシ(*Quercus gilva*)、アカガシ(*Q. acuta*)、アラカシ(*Q. glauca*)など8種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ(*Q. phillyraeoides*)も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹木(いわゆる照葉樹林)の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

・シイ属の一種(*Castanopsis* sp.) ブナ科 No.21.

半環孔材で孔圏部は3～5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2～3個が複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織は周囲状、散在状および短接線状。年輪界は明瞭。

シイ属には、ツブラジイ(コジイ)(*Castanopsis cuspidata*)とスタジイ(*C. sieboldii*)がある。カシ類とともに暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。ツブラジイは本州(関東以南)・四国・九州に、スタジイは本州(福島・新潟県以南)・四国・九州に分布し、また植栽される高木である。一般には、スタジイが沿海地、ツブラジイが内陸地に生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。材質的にはツブラジイはスタジイより劣るものとされている。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。

・ヤマグワ(*Morus australis*) クワ科 No.5,6,31.

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔となる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州・琉球の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。クワ属はヤマグワの他に4種が自生するが、西南日本に分布するケグワ(*M. cathayana*)を除くとその分布域はごく限られている。ヤマグワの材はやや重硬で強靱、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられる。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica*) ツバキ科 No. 7, 8, 12.

散孔材で、横断面では多角形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔をもち、段 (bar) 数は10～20、壁孔は対列～階段状に配列、放射組織との間では階段状となる。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高であるが時に上下に連結する。柔組織は随伴散在状。柔細胞は時に結晶を含む。年輪界は不明瞭。

ヤブツバキは、本州・四国・九州・琉球の主として沿海地に自生し、多くの変・品種があり植栽される。材は重硬・強靱で割れにくく、加工はやや困難、耐朽性は高い。器具・施作・機械・薪炭材などに用いられる。

・サカキ (*Cleyera japonica*) ツバキ科 No. 26.

散孔材で、横断面では多角形、ほとんど単独。道管は階段穿孔をもち、段数は20前後。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。柔組織は散在状。年輪界は不明瞭。

サカキは、本州 (石川・茨城県以西) ・四国・九州・琉球に自生するとされる常緑高木で、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり神社などに植栽される。このため本来の自生北限は明らかではない。材は重硬・強靱で、割裂しにくく加工は困難。建築・器具材としても用いられるが、薪炭材として一般的である。

・トネリコ属の一種 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科 No. 19.

環孔材で孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔をもち、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、1～2細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ (*Fraxinus platypoda*)、トネリコ (*F. japonica*)、ケアオダモ (*F. langinosa*) など9種が自生する。このうちヤマトアオダモ (*F. longicuspis*) は本州・四国・九州に、マルバアオダモ (*F. sieboldiana*) ・ケアオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ (*F. mandshurica* var. *japonica*) は北海道・本州に、トネリコは本州 (中部地方以北) に、シオジは本州 (関東地方以西) ・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

以上の同定結果を出土遺構や用途とともに一覧表で示す (表1)。

4. 考察

同定対象とされた27点は上記の10 Taxa に同定されたが、スギの用例が最も多く（10点）、ヒノキ属・アカガシ亜属・ヤマグワ・ヤブツバキ（各3点）がこれに次いでいる。用途別の使用樹種をみると、田舟・田下駄・火錐臼にスギ・ヒノキ属が、横槌・又鋏にヤマグワ・アカガシ亜属が用いられているなど、加工性や強度などを選択理由としたであろうと想像できる例が多い。またこれまで知られている各地・各時代の用材と一致するものも多い（島地・伊東 1988）。

以下にいくつかの用途について、主として県内で知られている類例との比較・検討を試みる。

・**木包丁** SD20から検出された弥生時代後期前半のものとしてされる3点はいずれもヤマグワに同定された。県内池ノ内遺跡からは弥生時代後期とされる木包丁1点がやはりヤマグワと同定されている（古野 1984）。

・**田下駄** 水路Ⅰ・Ⅱから検出された古墳時代中期のものとしてされる3点は、スギ（2点）とヒノキ属（1点）に同定された。田下駄は泥土中で使用されるものであることから強度や軽さが要求されるものと思うが、一定の薄さの比較的大きな板が割って得られるスギやヒノキ属が選ばれたものであろう。同様の理由は田舟や机（ともにスギに同定された）にも当てはまるものと思う。時期的には本試料より古いと推定されているが、池ノ内遺跡からは弥生時代中期・同後期（各1点）とされるスギ製田下駄の報告がある（古野 前出）。

・**火錐臼¹⁾** 水路Ⅰから検出された古墳時代中期のものとしてされる3点は、スギ（2点）とヒノキ属（1点）に同定された。県内では塞の谷遺跡出土の古墳時代前期とされる14点、栗谷遺跡出土の古墳時代中期とされる4点、同じく中期とされる船渡遺跡出土の1点と多くの出土例が報告されているが、栗谷遺跡資料のうちの2点がヒノキに同定されているにすぎない（高嶋・岩城 1981²⁾）。なお、同定資料と同じものかどうかはわからないが、添付された発掘調査概報（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1989）に示された写真とその計測値から求めたウスの径（約10mm）と板の厚さ（16mm）は、同程度の大きさのスギ材を用いた発火の復原実験（キリモミ式）によると成功率95%以上、発火時間50秒程度の結果がえられていることから（高嶋・岩城 前出）、きわめて効率のよいものであったようである。

・**桶・たも** 古墳時代中期のものとしてされ、水路Ⅱから検出された桶はイヌガヤに、水路Ⅰから検出された「たも」はイチイ類似種に同定された。これまで各地の遺跡で知られている用材としては、桶がスギやヒノキ（属）、たもはモミやカヤなどが多い（島地・伊東 前出）。ともに針葉樹を用いている例が多いものの、イヌガヤ製の桶やイチイ製のたもは稀な例のようである。

〔註〕

1) 添付された資料表の表記は火錐臼、発掘調査概報（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1989・1990）では火きりうすとなっており、また1985年までの出土木製遺物の同定結果を集成し

た表（島地・伊東 前出）には火鑽臼・火鑽板の表記もみられるが、これらはいずれも高嶋・岩城（前出）のいうヒキリ板のことであろう。彼らによれば、ヒキリウスとはヒキリギネを入れて火を起こした丸い凹みを指すようである。

2) この文献には1980年までの発掘調査報告などが引用されているが、個々の同定者は示されていない。またこれ以後の報告も集成している島地・伊東（前出）にも県内の同定結果は取り上げられていないため同定者は不明である。

〔引用文献〕

- 古野 毅 1986 目久美遺跡および池ノ内遺跡出土木製品の樹種鑑定, 「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 38-43. *
- 平井 信二 1979~1982 「木の事典 第1巻~17巻」, かなえ書房.
- 佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社, 321, 305pp.
- 島地 謙・伊東 隆夫(編) 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」, 雄山閣, 296pp.
- 高嶋 幸男・岩城 正夫 1981 「古代日本の発火技術—その自然科学的研究」, 群羊社, 91pp.
- 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1989 「鳥取市文化財報告書25 岩吉遺跡発掘調査概報」, 22pp.
- 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1990 「鳥取市文化財報告書26 岩吉遺跡発掘調査概報Ⅱ」, 23pp.

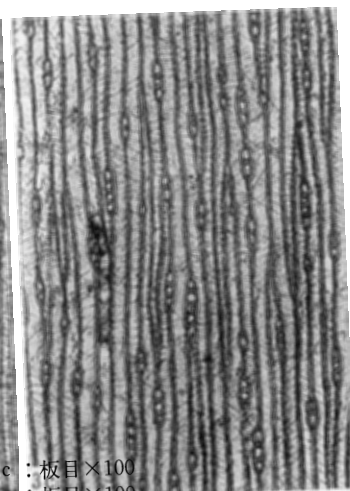
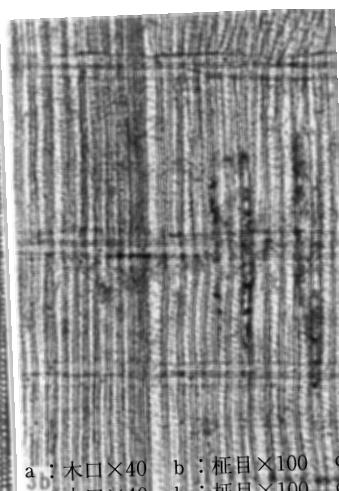
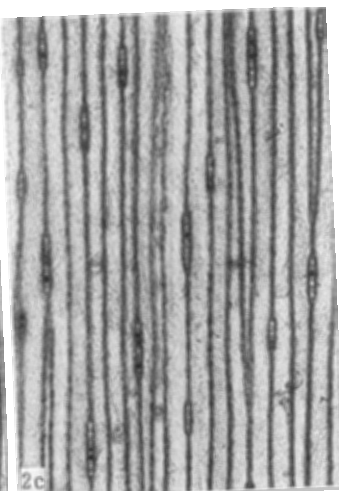
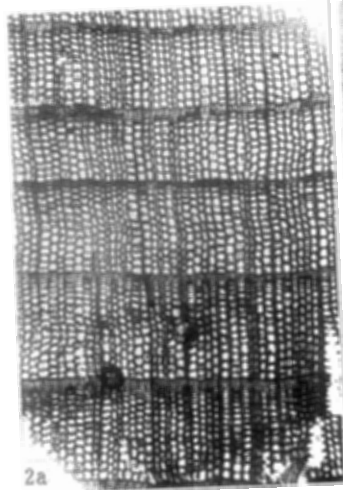
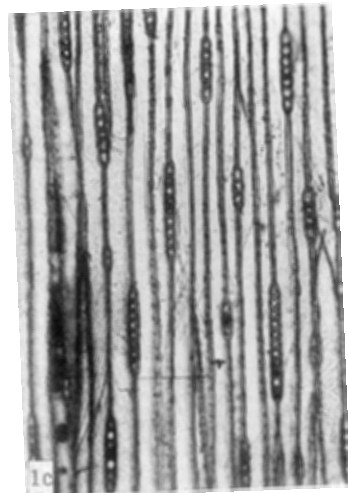
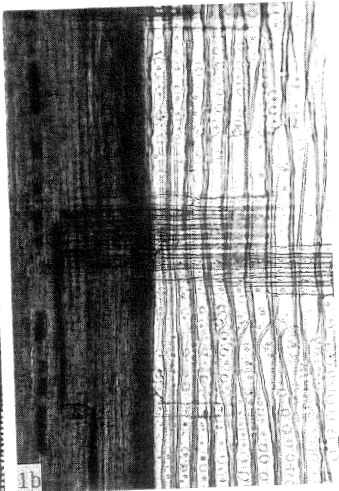
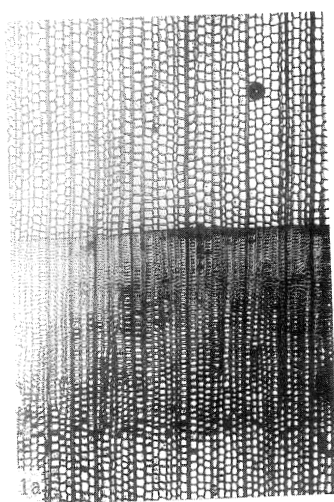
*：原著を直接参照できなかったため発行者は不明。結果は島地・伊東（1988）によった。

表1 岩吉遺跡出土材の樹種

試料番号	出土遺構	用途	種名	遺物番号 (取上番号)
1	水路Ⅱ	田舟	スギ	A13-177
3	水路Ⅱ	刀形木製品	スギ	A13-142
4	水路Ⅱ	船形木製品	スギ	A13-325
5	S D20	木包丁	ヤマグワ	A10-112
6	S D20	木包丁	ヤマグワ	A10-147
7	S D20	横槌	ヤブツバキ	A10-194
8	S D20	杵	ヤブツバキ	A10-164
9	S K26	机	スギ	B10-82・84
10	S K26	机の脚	スギ	B10-85
12	水路	木錘	ヤブツバキ	A7-242
14	水路Ⅰ	田下駄	スギ	A13-167
15	水路Ⅰ	火錐臼*	スギ	B13-52
17	水路Ⅱ	田下駄	スギ	B13-249
19	水路Ⅱ	把手	トネリコ属の一種	A13-327
20	水路Ⅱ	桶	イヌガヤ	A13-166
21	水路Ⅱ	柄	シイ属の一種	A13-136
22	水路Ⅱ	木槽	ヒノキ属の一種	A13-181
25	水路Ⅱ	又鋤	コナラ属アカガシ亜属の一種	B13-182
26	水路Ⅱ	柄	サカキ	A13-201
27	水路Ⅱ	ナスビ形木製品	コナラ属アカガシ亜属の一種	A13-382
28	水路Ⅱ	横槌	コナラ属アカガシ亜属の一種	A13-383
30	水路Ⅱ	田下駄	ヒノキ属の一種	A13-390
31	S D20	木包丁	ヤマグワ	A10-219
32	水路Ⅱ	刀形木製品柄	スギ	A13-384
33	水路Ⅰ	火錐臼	スギ	A13-93
34	水路Ⅰ	火錐臼	ヒノキ属の一種	A13-53
35	水路Ⅰ	たも	イチイ類似種	A13-64

*本文の注1)を参照のこと。

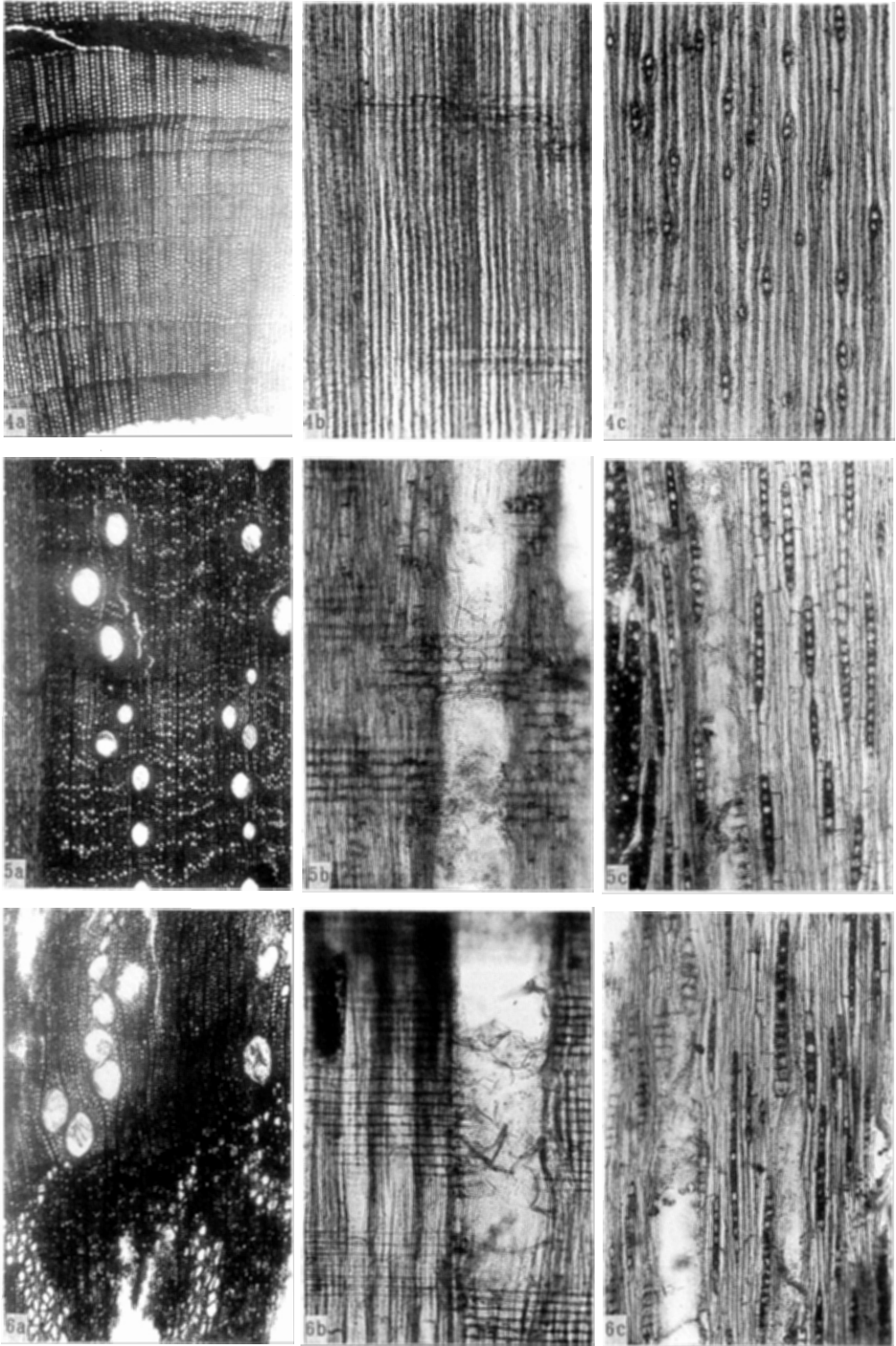
[編集者註] 試料番号No.1の田舟は容器としたなど本報告での遺物名を一部変更したものがある。また、表1で示す出土遺構名は旧遺構名である。新旧遺構名対照表を参照されたい。表1の遺物番号(取上番号)は編集者挿入。



- 1 No. 1 スギ
- 2 No. 30 ヒノキ属の一種
- 3 No. 20 イヌガヤ

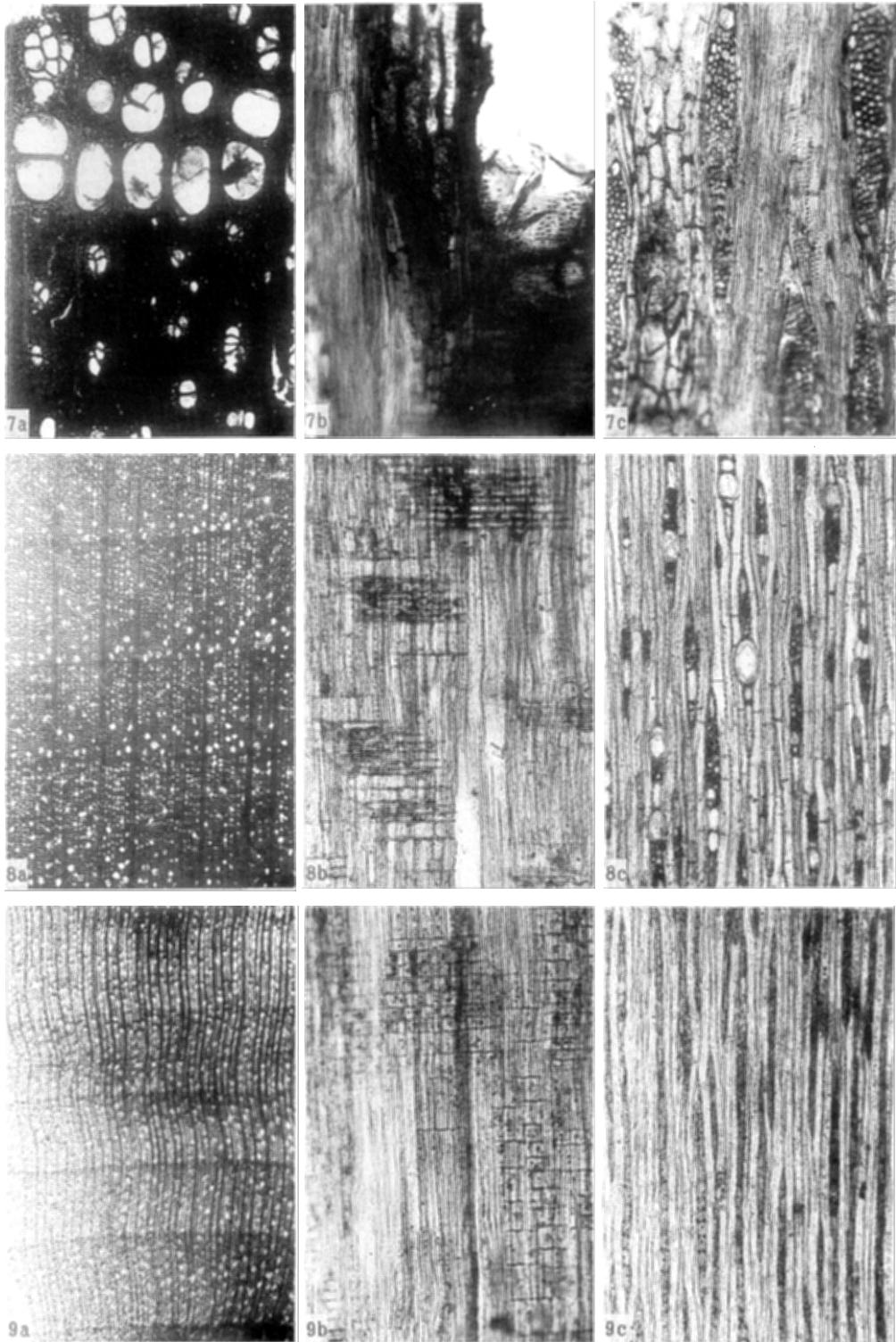
a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100
 a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100
 a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100

木製品断面顕微鏡写真 (1)



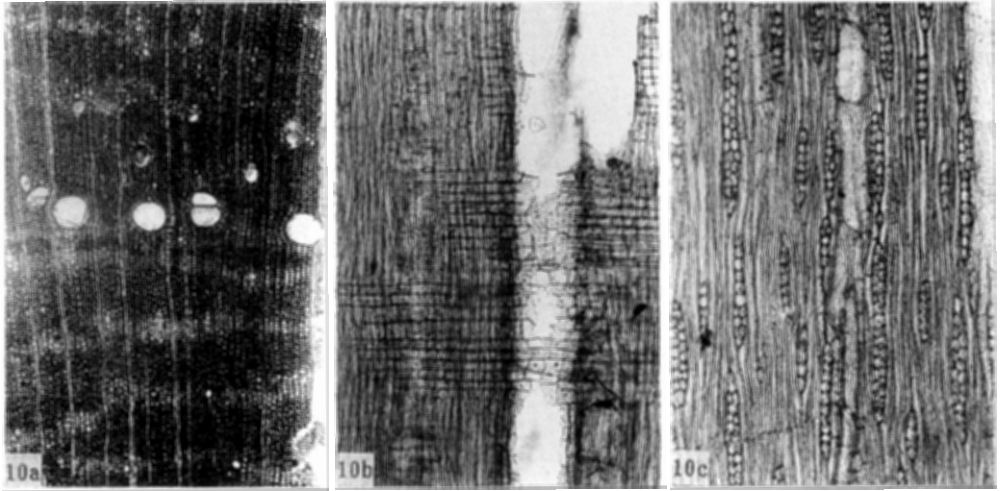
4 No. 35 イチイ類似種 a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100
 5 No. 27 コナラ属アカガシ亜属の一種 a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100
 6 No. 21 シイ属の一種 a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100

木製品断面顕微鏡写真 (2)



7 No. 5 ヤマガワ a : 木口×40 b : 柾目×100 c : 板目×100
 8 No. 8 ヤブツバキ a : 木口×40 b : 柾目×100 c : 板目×100
 9 No. 26 サカキ a : 木口×40 b : 柾目×100 c : 板目×100

木製品断面顕微鏡写真 (3)



10 No.19 トネリコ属の一種 a : 木口×40 b : 柁目×100 c : 板目×100

木製品断面顕微鏡写真 (4)

鳥取市文化財報告書30

岩吉遺跡Ⅲ

中小河川改修事業大井手川改良工事に
係る埋蔵文化財発掘調査

平成3年3月31日 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

印刷所 株式会社矢谷印刷所
